四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十三冊

川津川西遺跡・飯山一本松遺跡

1999.10

香川県教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う

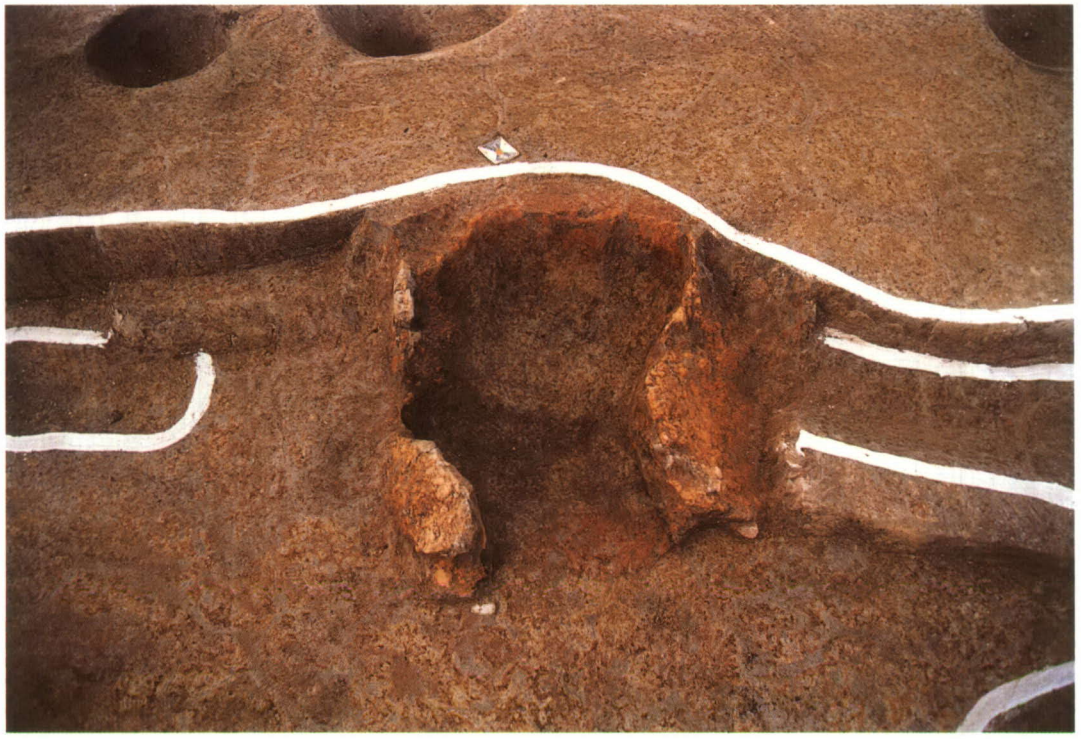
埋蔵文化財発掘調査報告

第三十三冊

川津川西遺跡・飯山一本松遺跡

1999.10

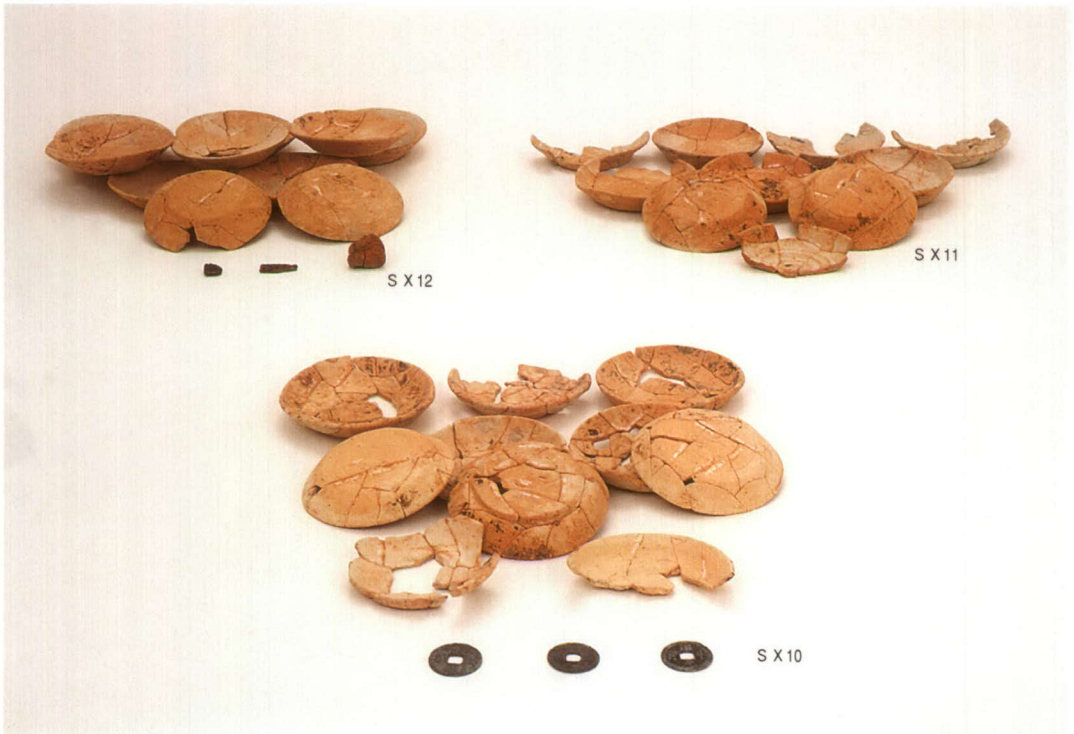
香川県教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団



ＳＨ02竈（南→）

Ｉ区中世集落（南→）

ＳＤ135下層出土漆皿（353）



Ⅰ区土器埋納遺構出土遺物

序　　文

四国横断自動車道は，高松～善通寺間が平成４年５月に開通しました。これにより，瀬戸大橋と香川県の高速道路が直結することになり，香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では，四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い，昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。３年６か月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し，平成３年９月に発掘調査を終了いたしました。また，平成３年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土文化財の整理業務を順次行っているところであり，平成４年度からは調査報告書の刊行をいたしております。

このたび，「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十三冊」として刊行いたしますのは，坂出市川津町川西に所在する川津川西遺跡と，綾歌郡飯山町割古他に所在する飯山一本松遺跡についてであります。川津川西遺跡の調査では，縄文時代後期から中世後半にかけての多くの遺構・遺物が出土しており，特に，古代の土馬や耳環，木製品や墨書土器等の遺物は，当時の祭祀や木製品の生産に関わる生業の様子を，鮮やかによみがえらせるものであり，貴重な資料になるものと考えられます。

本報告書が，本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間，日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようにお願い申し上げます。

平成11年10月

香川県教育委員会

教育長　　折　原　　守

例　　言

1．本報告書は，四国横断自動車道高松～善通寺間建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第33冊である。「川津川西遺跡・飯山一本松遺跡」として香川県坂出市に所在する川津川西遺跡　（かわつかわにしいせき）と，同県綾歌郡飯山町に所在する飯山一本松遺跡（はんざんいっぽんまついせき）における調査成果を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が日本道路公団から委託を受け，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。

3．飯山一本松遺跡の発掘調査は，平成元年４月から同年５月まで，川津川西遺跡の発掘調査は平成２年５月より平成３年１月まで実施した。本報告にかかる調査の担当は以下の通りである。

飯山一本松遺跡　　牧野啓造　蔵本晋司　萬木一郎

川津川西遺跡　　藤川善規　蔵本晋司

4．調査および報告書の作成にあたって下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

香川県土木部横断道対策室　坂出市教育委員会　飯山町教育委員会　地元対策協議会　地元自治会

5．報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本報告書の編集および第２部第２章第１～５節を除く各章の執筆は蔵本が担当した。

6．発掘調査および報告書の作成にあたって，下記の方々のご教示を得た。記して感謝を表したい。（順不同，敬称略）

穴澤義功，藤澤良祐

7．本報告書で用いる方位の北は，川津川西遺跡については国土座標系第Ⅳ系の北であり，飯山一本松遺跡については磁北の北を示し，標高は両遺跡ともT.P.を基準としている。また，遺構は下記の略号により表示している。

ＳＨ　竪穴住居　　ＳＢ　掘立柱建物遺構　　ＳＡ　柵列状遺構　　ＳＰ　柱穴

ＳＫ　土坑　　ＳＥ　井戸　　ＳＸ　不明遺構　　ＳＤ　溝状遺構

ＳＲ　自然流路

8．本遺跡の報告にあたっては，下記の機関等に鑑定・分析などを依頼・委託し，その成果を第２部第２章他に掲載した。（敬称略）

石器等石材鑑定	香川大学　谷山穣
花粉分析	(株)パリノ・サーヴェイ
樹種・種子同定	(株)パリノ・サーヴェイ
漆塗膜分析	(株)パリノ・サーヴェイ
C14　放射性炭素年代測定	地球科学研究所
鉄滓等金属学的分析	(株)九州テクノリサーチ・大澤正己穂

9．挿図の一部に建設省国土地理院地形図「丸亀」「白峰山」(1/25,000)を使用した。

10．本報告書で用いる遺構図のレベルの単位はすべてメートルである。

11．煩雑な重複を避けるため，引用及び参照文献は各章末にまとめ，本文註のみ各節毎に記載した。

本文目次

巻頭図版
序　文
例　言

第１部　調査の経緯・経過

第１章　調査の経緯…… 1
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　発掘作業の経過…… 6
　第３節　整理作業の経過…… 11

第２部　川津川西遺跡の調査

第１章　立地と環境…… 13
　第１節　地理的環境…… 13
　第２節　歴史的環境…… 19

第２章　調査成果…… 31
　第１節　基本層序…… 31
　第２節　縄文時代の遺構・遺物…… 49
　第３節　弥生時代の遺構・遺物…… 65
　第４節　古代の遺構・遺物…… 69
　第５節　中世の遺構・遺物…… 135

第３章　自然科学的調査の成果…… 247
第１節　川津川西遺跡の花粉分析報告…… 247
第２節　Ｃ14　放射性炭素年代測定…… 254
第３節　川津川西遺跡から出土した木製品および種実の同定…… 259
第４節　川津川西遺跡から出土した漆片の分析…… 268
第５節　川津川西遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査…… 273
第６節　分析結果の検討と今後の課題…… 283

第４章　まとめ…… 289
第１節　遺構の変遷と個別遺構の検討…… 289

第３部　飯山一本松遺跡の調査

第１章　調査成果…… 301
第１節　遺跡の位置…… 301
第２節　各地区の概要…… 303
第３節　出土遺物…… 311
第４節　まとめ…… 313

出土遺物観察表
写真図版
報告書抄録
付図　２枚

挿図目次

第 1図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地(善通寺～高松) …… 1
第 2図　遺跡位置図 …… 7
第 3図　川津川西遺跡調査区割図 …… 8
第 4図　川津川西遺跡調査区位置図 …… 9
第 5図　丸亀平野 1 m等高線図 …… 14
第 6図　遺跡周辺地形面区分略図 …… 16
第 7図　遺跡周辺地形分類概念図 …… 18
第 8図　周辺遺跡分布図 …… 26
第 9図　Ⅰ区土層断面図 1 …… 39～40
第 10図　Ⅰ区土層断面図 2 …… 41～42
第 11図　Ⅱ a 区土層断面図 …… 43～44
第 12図　Ⅱ b 区土層断面図 …… 45～46
第 13図　Ⅲ区土層断面図 …… 47～48
第 14図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 1 …… 50
第 15図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 2 …… 51
第 16図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 3 …… 52
第 17図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 4 …… 53
第 18図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 5 …… 54
第 19図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 6 …… 55
第 20図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 7 …… 56
第 21図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 8 …… 57
第 22図　包含層Ⅳ出土遺物実測図 9 …… 58
第 23図　包含層Ⅳ出土遺物実測図10 …… 59
第 24図　包含層Ⅳ出土遺物実測図11 …… 60
第 25図　包含層Ⅳ出土遺物実測図12 …… 61
第 26図　包含層Ⅳ出土遺物実測図13 …… 62
第 27図　包含層Ⅳ出土遺物実測図14 …… 63
第 28図　ＳＫ37平・断面図，出土遺物実測図 …… 65
第 29図　ＳＫ38平・断面図，出土遺物実測図 …… 66
第 30図　ＳＸ16断面図，出土遺物実測図 …… 67
第 31図　ＳＨ01平・断面図 …… 70
第 32図　ＳＨ01出土遺物実測図 …… 71
第 33図　ＳＨ02平・断面図 …… 73
第 34図　ＳＨ02竈平・断・立面図，出土遺物実測図 …… 75
第 35図　ＳＢ21平・断面図，出土遺物実測図 …… 76
第 36図　ＳＸ19出土遺物実測図 1 …… 80
第 37図　ＳＸ19出土遺物実測図 2 …… 81
第 38図　ＳＸ19出土遺物実測図 3 …… 83
第 39図　ＳＸ19出土遺物実測図 4 …… 84
第 40図　ＳＸ19出土遺物実測図 5 …… 85
第 41図　ＳＸ19出土遺物実測図 6 …… 86
第 42図　ＳＸ19出土遺物実測図 7 …… 87
第 43図　ＳＸ20下層出土遺物実測図 1 …… 88
第 44図　ＳＸ20下層出土遺物実測図 2 …… 89
第 45図　ＳＸ20上層出土遺物実測図 1 …… 91
第 46図　ＳＸ20上層出土遺物実測図 2 …… 92
第 47図　ＳＸ20上層出土遺物実測図 3 …… 93
第 48図　ＳＸ20上層出土遺物実測図 4 …… 95
第 49図　ＳＸ20上層出土遺物実測図 5 …… 96
第 50図　ＳＸ20上層出土遺物実測図 6 …… 97
第 51図　ＳＸ20上層出土遺物実測図 7 …… 98
第 52図　ＳＤ127断面図，出土遺物実測図 …… 99
第 53図　ＳＤ128断面図，出土遺物実測図 …… 100
第 54図　ＳＤ129断面図，出土遺物実測図 …… 101
第 55図　ＳＤ130断面図 …… 103
第 56図　ＳＤ131断面図 …… 103
第 57図　ＳＤ135断面図 …… 105
第 58図　ＳＤ135下層出土遺物実測図 1 …… 107
第 59図　ＳＤ135下層出土遺物実測図 2 …… 109
第 60図　ＳＤ135下層出土遺物実測図 3 …… 111
第 61図　ＳＤ135下層出土遺物実測図 4 …… 112
第 62図　ＳＤ135下層出土遺物実測図 5 …… 113
第 63図　ＳＤ135下層出土遺物実測図 6 …… 115
第 64図　ＳＤ135下層出土遺物実測図 7 …… 117
第 65図　ＳＤ135下層出土遺物実測図 8 …… 118
第 66図　ＳＤ135上層出土遺物実測図 1 …… 119
第 67図　ＳＤ135上層出土遺物実測図 2 …… 122
第 68図　ＳＤ135上層出土遺物実測図 3 …… 123
第 69図　ＳＤ135最上層出土遺物実測図 …… 124
第 70図　ＳＤ136断面図，出土遺物実測図 1 …… 125
第 71図　ＳＤ136出土遺物実測図 2 …… 127
第 72図　Ⅰ区包含層Ⅱ出土遺物実測図 1 …… 129
第 73図　Ⅰ区包含層Ⅱ出土遺物実測図 2 …… 130
第 74図　Ⅲ区包含層Ⅱ出土遺物実測図 1 …… 131
第 75図　Ⅲ区包含層Ⅱ出土遺物実測図 2 …… 132
第 76図　Ⅲ区包含層Ⅱ出土遺物実測図 3 …… 133
第 77図　ＳＢ01平・断面図，出土遺物実測図 … 136
第 78図　ＳＢ02平・断面図，出土遺物実測図 … 137
第 79図　ＳＢ03平・断面図 …… 138
第 80図　ＳＢ04平・断面図 …… 139

第 81図　ＳＢ05平・断面図，出土遺物実測図 … 140
第 82図　ＳＢ06平・断面図 …… 141
第 83図　ＳＢ07平・断面図，出土遺物実測図 … 142
第 84図　ＳＢ08平・断面図 …… 143
第 85図　ＳＢ09平・断面図 …… 143
第 86図　ＳＢ10平・断面図 …… 144
第 87図　ＳＢ11平・断面図，出土遺物実測図 … 146
第 88図　ＳＢ12平・断面図，出土遺物実測図 … 147
第 89図　ＳＢ13平・断面図 …… 148
第 90図　ＳＢ14平・断面図，出土遺物実測図 … 149
第 91図　ＳＢ15平・断面図 …… 150
第 92図　ＳＢ16平・断面図 …… 150
第 93図　ＳＢ17平・断面図，出土遺物実測図 … 151
第 94図　ＳＢ18平・断面図 …… 152
第 95図　ＳＢ19・ＳＡ01平・断面図 …… 154
第 96図　ＳＢ19出土遺物実測図 …… 155
第 97図　ＳＢ20平・断面図 …… 156
第 98図　ＳＢ22平・断面図，出土遺物実測図 … 157
第 99図　ＳＢ23平・断面図，出土遺物実測図 … 158
第100図　柱穴出土遺物実測図１ …… 160
第101図　柱穴出土遺物実測図２ …… 161
第102図　ＳＫ01平・断面図 …… 162
第103図　ＳＫ02・ＳＤ27平・断面図 …… 163
第104図　ＳＫ03平・断面図 …… 164
第105図　ＳＫ04平・断面図，出土遺物実測図 … 164
第106図　ＳＫ05平・断面図 …… 165
第107図　ＳＫ06平・断面図 …… 165
第108図　ＳＫ07平・断面図 …… 165
第109図　ＳＫ10平・断面図 …… 166
第110図　ＳＫ11平・断面図 …… 166
第111図　ＳＫ12平・断面図，出土遺物実測図 … 167
第112図　ＳＫ13平・断面図，出土遺物実測図 … 168
第113図　ＳＫ14平・断面図 …… 169
第114図　ＳＫ15平・断面図 …… 169
第115図　ＳＫ16平・断面図 …… 169
第116図　ＳＫ17平・断面図 …… 170
第117図　ＳＫ18平・断面図 …… 171
第118図　ＳＫ18出土遺物実測図 …… 171
第119図　ＳＫ19平・断面図，出土遺物実測図 … 172
第120図　ＳＫ20平・断面図 …… 172
第121図　ＳＫ21平・断面図 …… 173
第122図　ＳＫ22平・断面図 …… 173
第123図　ＳＫ23平・断面図 …… 174
第124図　ＳＫ24平・断面図 …… 174
第125図　ＳＫ25平・断面図 …… 175
第126図　ＳＫ31平・断面図，出土遺物実測図 … 176
第127図　ＳＫ32平・断面図 …… 176
第128図　ＳＫ41平・断面図 …… 177
第129図　ＳＸ03平・断面図 …… 178
第130図　ＳＸ03出土遺物実測図 …… 179
第131図　ＳＸ04平・断面図，出土遺物実測図 … 181
第132図　ＳＸ05平・断面図，出土遺物実測図 … 182
第133図　ＳＸ06・ＳＫ08平・断面図 …… 184
第134図　ＳＸ06出土遺物実測図 …… 185
第135図　ＳＸ07平・断面図 …… 185
第136図　ＳＸ08平・断面図，出土遺物実測図 … 186
第137図　ＳＸ09平・断面図 …… 187
第138図　ＳＸ09出土遺物実測図 …… 188
第139図　ＳＸ10平・断面図，出土遺物実測図 … 189
第140図　ＳＸ11平・断面図，出土遺物実測図 … 191
第141図　ＳＸ12平・断面図，出土遺物実測図 … 193
第142図　ＳＸ13平・断面図，出土遺物実測図 … 194
第143図　ＳＸ14平・断面図 …… 195
第144図　ＳＤ01・06断面図 …… 197
第145図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図１ …… 199
第146図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図２ …… 201
第147図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図３ …… 202
第148図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図４ …… 203
第149図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図５ …… 205
第150図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図６ …… 207
第151図　ＳＤ02・03断面図，出土遺物実測図 … 208
第152図　ＳＤ04断面図 …… 209
第153図　ＳＤ07断面図，出土遺物実測図 …… 210
第154図　ＳＤ08断面図，出土遺物実測図 …… 211
第155図　ＳＤ10・34断面図，出土遺物実測図 … 212
第156図　ＳＤ12～17断面図 …… 213
第157図　ＳＤ18・ＳＸ02断面図，
出土遺物実測図 …… 215
第158図　ＳＤ21・22断面図，出土遺物実測図 … 216
第159図　ＳＤ24断面図 …… 217
第160図　ＳＤ25断面図，出土遺物実測図 …… 217
第161図　ＳＤ26断面図 …… 218
第162図　ＳＤ28断面図 …… 218
第163図　ＳＤ29断面図，出土遺物実測図 …… 219
第164図　ＳＤ30断面図 …… 220
第165図　ＳＤ31断面図 …… 220
第166図　ＳＤ36・37・39断面図，
出土遺物実測図 …… 221
第167図　ＳＤ39・40出土遺物実測図 …… 222
第168図　ＳＤ38断面図 …… 224
第169図　ＳＤ42～46断面図，
ＳＤ41～44出土遺物実測図 … 225

第170図　ＳＤ41～46出土遺物実測図 …… 227
第171図　ＳＤ47・48断面図，
ＳＤ47出土遺物実測図 …… 228
第172図　ＳＤ53断面図 …… 229
第173図　ＳＤ57断面図，出土遺物実測図 …… 230
第174図　ＳＤ59・60断面図，
ＳＤ59出土遺物実測図 … 230
第175図　耕作痕変遷想定図 …… 232
第176図　耕作痕断面図１ …… 234
第177図　耕作痕断面図２，出土遺物実測図 …… 235
第178図　Ⅰ区包含層Ⅰ出土遺物実測図１ …… 238
第179図　Ⅰ区包含層Ⅰ出土遺物実測図２ …… 239
第180図　Ⅰ区包含層Ⅰ出土遺物実測図３ …… 240
第181図　Ⅱ・Ⅲ区包含層Ⅰ出土遺物実測図１ … 241
第182図　Ⅱ・Ⅲ区包含層Ⅰ出土遺物実測図２ … 242
第183図　Ⅱ・Ⅲ区包含層Ⅰ出土遺物実測図３ … 243
第184図　Ⅱ区東壁ＳＸ19の土層断面
および試料採取層位 … 248
第185図　Ⅱ区ＳＤ135の土層断面
および試料採取層位 … 248
第186図　Ⅲ区北壁の土層断面および
試料採取層位 …… 249
第187図　主要花粉化石群集の層位分布 …… 251
第188図　放射性炭素年代測定結果図１ …… 257
第189図　放射性炭素年代測定結果図２ …… 258
第190図　漆？のＩＲスペクトル …… 269
第191図　含鉄椀形鍛冶滓(KTK-1)鉱物相の
コンピュータープログラムによ
る高速定性分析結果 …… 281
第192図　遺構変遷図１ …… 298
第193図　遺構変遷図２ …… 299
第194図　調査区位置図 …… 302
第195図　Ａ地区遺構平面図 …… 303
第196図　Ａ地区土層断面図 …… 304
第197図　Ａ地区トレンチ配置図 …… 305～306
第198図　Ｂ地区トレンチ配置図 …… 308
第199図　Ｂ地区土層断面図 …… 309
第200図　出土遺物実測図 …… 312

図版目次

巻頭図版１　ＳＨ02竈
Ⅰ区中世集落
巻頭図版２　ＳＤ135下層出土漆皿
Ⅰ区土器埋納遺構出土遺物
写真１　花粉化石
写真２　木材(1)
写真３　木材(2)
写真４　木材(3)
写真５　木材(4)・種実
写真６　漆薄片の断面
写真７　含鉄椀形滓の顕微鏡組織
写真８　鉄滓と鉄塊の顕微鏡組織
写真９　含鉄椀形鍛冶滓（含鉄部分）
(KTK-1）のマクロ組織
写真10　含鉄椀形鍛冶滓(KTK-1)鉱物相の
特性Ｘ線像と定量分析値
図版１　遺跡周辺航空写真
(上が北，国土地理院1962年撮影)
図版２　調査前状況(西→)
調査前状況(東→)
遺跡遠望(青ノ山山頂より)
図版３　Ⅰ区第１面航空写真(上が北)
図版４　Ⅰ区北半西壁土層断面(南東→)
Ⅰ区北壁土層断面(南東→)
Ⅰ区ｅトレンチ北壁土層断面(南東→)
Ⅰ区ｃトレンチ南壁段丘崖土層断面(北→)
図版５　Ⅰａ区第１面全景(南→)
Ⅰ区第１面全景(南→)
Ⅰ区第１面全景(西→)
図版６　Ⅰ区第１面ＳＰ0394遺物出土状況(北→)
Ⅰ区第１面ＳＰ0410遺物出土状況(北→)
Ⅰ区第１面ＳＰ0495遺物出土状況(東→)
Ⅰ区第１面ＳＰ0529遺物出土状況(北→)
Ⅰ区第１面ＳＰ0961遺物出土状況(南→)
Ⅰ区第１面ＳＰ1427遺物出土状況(東→)
図版７　Ⅰ区第１面ＳＫ04土層断面(東→)
Ⅰ区第１面ＳＫ05土層断面(南東→)
Ⅰ区第１面ＳＫ07土層断面(北東→)
Ⅰ区第１面ＳＫ10土層断面(南→)
Ⅰ区第１面ＳＫ11土層断面(北→)

Ⅰ区第１面ＳＫ12土層断面(東→)
Ⅰ区第１面ＳＫ14土層断面(南→)
Ⅰ区第１面ＳＫ15土層断面(東→)
図版８　Ⅰ区第１面ＳＫ12遺物出土状況(東→)
Ⅰ区第１面ＳＫ13上層土層断面(東→)
Ⅰ区第１面ＳＸ03上層遺物出土状況(南→)
Ⅰ区第１面ＳＸ05全景(南西→)
Ⅰ区第１面ＳＸ05土層断面(東→)
Ⅰ区第１面ＳＸ04土層断面(南西→)
Ⅰ区第１面ＳＸ09遺物出土状況(東→)
図版９　Ⅰ区第１面ＳＸ13全景(北→)
Ⅰ区第１面ＳＸ11全景(東→)
Ⅰ区第１面ＳＸ10全景(西→)
Ⅰ区第１面ＳＸ10全景(北→)
Ⅰ区第１面ＳＸ13銅銭出土状況(北→)
Ⅰ区第１面ＳＸ11全景(南→)
Ⅰ区第１面ＳＸ10銅銭出土状況(西→)
Ⅰ区第１面ＳＸ12全景(東→)
図版10　Ⅰ区第１面ＳＸ08土層断面(南→)
Ⅰ区第１面ＳＤ01土層断面(南西→)
Ⅰ区第１面ＳＤ21・22土層断面(南→)
Ⅰ区第１面ＳＤ08土層断面(西→)
Ⅰ区第１面ＳＤ02・03土層断面(南→)
Ⅰ区第１面ＳＸ06全景(南→)
Ⅰ区第１面ＳＸ06全景(西→)
Ⅰ区第１面ＳＸ06土層断面(西→)
Ⅰ区第１面ＳＸ06遺物出土状況(南西→)
図版11　Ⅰ区第１面ＳＤ01遺物出土状況(西→)
Ⅰ区第１面ＳＤ01遺物出土状況(南→)
Ⅰ区第１面ＳＤ02遺物出土状況(南→)
Ⅰ区第１面ＳＤ25遺物出土状況(西→)
Ⅰ区第１面ＳＤ39遺物出土状況(西→)
Ⅰ区第１面ＳＤ39遺物出土状況(西→)
Ⅰ区第１面ＳＤ39遺物出土状況(北→)
Ⅰ区第１面ＳＤ39遺物出土状況(北→)
図版12　Ⅰ区第２面航空写真(上が北)
Ⅰ区第２面航空写真(東→)
図版13　Ⅰ区第２面北東部全景(南西→)
Ⅰ区第２面北西部全景(南→)
Ⅰ区第２面南西部全景(北→)
Ⅰａ区第２面全景(南→)
図版14　Ⅰ区第２面耕作域全景(南→)
Ⅰ区第２面耕作域足跡検出状況(東→)
Ⅰ区第２面耕作域土層断面(南東→)
Ⅰ区第２面耕作域土層断面(南→)
Ⅰ区第２面耕作域土層断面(南→)
図版15　Ⅰ区第２面ＳＨ01全景(東→)
Ⅰ区第２面ＳＨ01全景(南→)
Ⅰ区第２面ＳＨ01遺物出土状況(東→)
Ⅰ区第２面ＳＨ01遺物出土状況(北→)
図版16　Ⅰ区第２面ＳＨ02，ＳＤ131全景(南→)
Ⅰ区第２面ＳＨ02土層断面(北→)
Ⅰ区第２面ＳＨ02竈内遺物出土状況(南→)
Ⅰ区第２面ＳＨ02竈立面(南→)
Ⅰ区第２面ＳＨ02竈部土層断面(西→)
Ⅰ区第２面ＳＨ02竈全景(南→)
図版17　Ⅰ区第２面ＳＤ127土層断面(南→)
Ⅰ区第２面ＳＤ127土層断面(北→)
Ⅰ区第２面ＳＤ128土層断面(東→)
Ⅰ区第２面ＳＤ128土層断面(東→)
Ⅰ区第２面ＳＤ129土層断面(北→)
Ⅰ区第２面ＳＤ129土層断面(南→)
Ⅰ区第２面ＳＤ129北半土層断面(北→)
Ⅰ区第２面ＳＤ129北壁部土層断面(南→)
図版18　Ⅰ区第２面ＳＤ65・66全景(西→)
Ⅰ区第２面ＳＤ127遺物出土状況(南→)
Ⅰ区第２面ＳＤ129遺物出土状況(北→)
Ⅰ区第２面ＳＤ129遺物出土状況(西→)
Ⅰ区第２面ＳＤ129北半全景(北→)
Ⅰ区第２面ＳＤ129遺物出土状況(南→)
Ⅰ区東西深掘トレンチ土層断面(東→)
Ⅰ区南北深掘トレンチ土層断面(南→)
図版19　Ⅱ・Ⅲ区第２ａ面航空写真(左が北)
図版20　Ⅱ・Ⅲ区第２ａ面航空写真(左が北)
図版21　Ⅱａ区北半部全景(西→)
Ⅱａ区ＳＢ21全景(北→)
Ⅱａ区ＳＫ37土層断面(西→)
Ⅱａ区ＳＢ21，ＳＰ1833土層断面(北東→)
Ⅱａ区ＳＫ38土層断面(北→)
図版22　Ⅱａ区ＳＸ19最上層遺物出土状況
(南→)
Ⅱａ区ＳＸ19最上層遺物出土状況(南→)
Ⅱａ区ＳＸ19中層耳環出土状況(西→)
Ⅱａ区ＳＤ135土層断面(北→)
Ⅱａ区ＳＤ135全景(北西→)
Ⅱａ区ＳＤ135・136全景(南東→)
図版23　Ⅱ区ＳＤ135・136合流部下層
杭等出土状況(東→)
Ⅱ区ＳＤ135下層杭列出土状況(西→)
Ⅱ区ＳＤ135上層遺物出土状況(南→)
Ⅱ区ＳＤ135上層土馬出土状況(南→)
Ⅱ区ＳＤ135上層土馬出土状況(北→)

Ⅱ区ＳＤ135下層遺物出土状況(南→)
図版24　Ⅱｂ区２ａ面全景(南→)
Ⅱｂ区２ｂ面ＳＸ20全景(南→)
Ⅱｂ区２ｂ面全景(東→)
Ⅱｂ区南壁深掘トレンチ土層断面(北東→)
図版25　Ⅲ区１面全景(東→)
Ⅲ区２面全景(東→)
Ⅲ区１面ＳＢ23全景(南→)
Ⅲ区南壁土層断面(北→)
図版26　出土土器(１)
図版27　出土土器(２)
図版28　出土土器(３)
図版29　出土土器(４)
図版30　出土土器(５)
図版31　出土土器(６)
図版32　出土土器(７)
図版33　出土土器(８)
図版34　出土土器(９)
図版35　出土土器(10)
図版36　出土土器(11)
図版37　出土土器(12)
図版38　出土土器(13)
図版39　出土石器(１)
図版40　出土石器(２)
図版41　出土石器(３)
図版42　出土石器(４)
図版43　出土石器(５)
図版44　出土木器(１)
図版45　出土木器(２)
図版46　出土木器(３)
図版47　出土木器(４)
図版48　出土金属器(１)
図版49　出土金属器(２)
図版50　出土金属器(３)
図版51　Ａ地区調査前状況（東→)
Ａ地区備後薬師堂調査状況（西→)
Ａ地区１トレンチ全景（南東→)
Ａ地区２トレンチ全景（北西→)
Ａ地区２トレンチ東壁土層断面（西→)
Ａ地区２トレンチ全景（北→)
図版52　Ａ地区７トレンチ全景（北→)
Ａ地区２トレンチ南端土層断面（西→)
Ａ地区４トレンチ全景（南→)
Ａ地区３トレンチ全景（東→)
Ａ地区８トレンチ全景（北→)
図版53　Ｂ地区遠望（南→)
Ｂ地区１トレンチ全景（西→)
Ｂ地区２トレンチ全景（西→)
Ｂ地区３トレンチ全景（北→)
Ｂ地区４トレンチ全景（東→)
Ｂ地区５トレンチ全景（東→)
Ｂ地区５トレンチ遺物出土状況（北→)
Ｂ地区６トレンチ全景（東→)
図版54　出土土器

表目次

第１表　四国横断自動車道（善通寺～高松）
建設に伴う発掘調査の概要(１) … 3
第２表　四国横断自動車道（善通寺～高松）
建設に伴う発掘調査の概要(２) … 4
第３表　川津川西遺跡整理作業工程表 …… 11
第４表　周辺遺跡一覧表 …… 27
第５表　分析試料の一覧 …… 247
第６表　花粉分析結果 …… 250
第７表　放射性炭素年代測定結果表 …… 256
第８表　樹種同定結果 …… 260
第９表　供試材の履歴と調査項目 …… 278
第10表　供試材の化学組成 …… 278
第11表　出土遺物の調査結果のまとめ …… 278

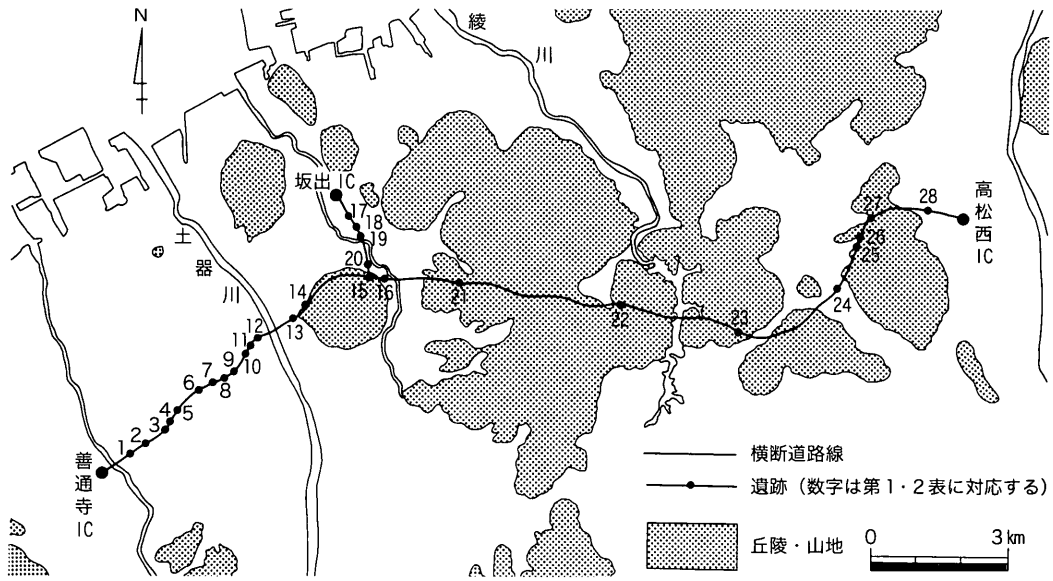
第１部　調査の経緯・経過

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

四国横断自動車道は，「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき，四国４県を連結する幹線道路として計画された。そのうち本遺跡調査の契機となった四国横断自動車道高松～善通寺間（延長21.7km）については，昭和57（1982）年１月８日に整備計画が決定され，昭和59（1984）年11月30日に建設大臣より日本道路公団総裁に対して施工命令が下され，昭和60（1985）年３月の路線発表を経て，ようやく建設に至る運びとなった。

香川県教育委員会（以下「県教委」という。）では，昭和58（1983）年度に国庫補助を得て，中讃地区４市９町を対象に詳細分布調査を実施し，こうした大規模開発に対応する基礎データの把握に努めた。さらに昭和60年の路線発表を受けて，路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的として，昭和61（1986）年度に国庫補助事業により詳細遺跡分布調査を実施し，約39万m²の調査対象地が確定した。分布調査の結果を踏まえて，路線内に所在す



第１図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～高松）

る埋蔵文化財の取り扱いについて，日本道路公団と文化庁との間で協議が行われ，工事施工に先立って発掘調査を実施すること，調査については基本的には記録保存で対応することなどが決定された。

一方，県教委では同事業に対応する調査体制を早期に整備する必要から，昭和62（1987）年度より香川県土木部横断道対策課及び日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）と調査体制などについて協議を開始した。協議の結果，昭和63（1988）年度より２ヶ年の予定で本調査を実施すること，整理報告は発掘調査終了後に実施することなどが決定された。また，調査体制の充実を図ることを目的に，昭和62（1987）年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）を設立し，専門職員の増員などの措置を講じて調査に対応することとした。

これと並行して，調査対象地の選定があくまで分布調査の結果に基づくものであり，本調査に先行して遺構の遺存状態や層厚などを把握する必要から，日本道路公団と協議の上，予備調査を実施することとなった。予備調査は，昭和63年３月より用地買収が進んでいた丸亀市郡家地区を嚆矢として，以後各遺跡において条件の整った地区より順次実施し，本調査時の調査方法や調査期間など計画策定に役立てた。

調査の実施にあたっては，県教委とセンターとの間で委託契約が昭和63年４月１日付けで締結され，以後本調査は，県教委が公団より委託を受け，センターが調査担当者として実施した。

本調査は，昭和63年４月より丸亀市郡家原遺跡・郡家一里屋遺跡・三条番ノ原遺跡の３遺跡において始まり，平成３（1991）年９月の坂出市川津一ノ又遺跡の調査をもって終了した。この間の調査面積は，32万m^2余りに及ぶ。調査結果の整理・報告は，平成３年度より実施し，平成10年度末までに20冊の報告書を刊行し，現在も継続中である。

No	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	文献
1	龍川五条遺跡	善通寺市原田町	12,300 10,200	元. 6.26～ 2. 3.31 2. 4. 9～ 2.12. 5	竪穴住居・掘立柱建物跡・周溝墓・土壙墓・自然河川	弥生土器・土師器・須恵器・石器・木器	1 2
2	龍川四条遺跡	善通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元. 7. 1～ 2. 3.31 2. 5.28～ 2.10.24 3. 4. 4～ 3. 6.18	古代掘立柱建物跡・墓・溝状遺構・自然河川	縄文土器・土師器・須恵器・和鏡・磁器・瓦器	3
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 1,300	63. 4.18～元. 2.10 元. 4.10～ 2. 3.31	竪穴住居跡・自然河川・溝状遺構	弥生土器ほか	4
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7,677	63. 5.15～63.11.26	旧石器ユニット・溝状遺構・建物跡	旧石器・弥生土器・陶磁器	5
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町・郡家町	17,099 2,600	63. 4.18～元. 3.31 元. 4.10～ 2. 3.31	竪穴住居跡・溝状柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・緑釉土器・斎串ほか	6
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	14,067 6,450	63. 4.18～元. 3.31 元. 4.10～ 2. 3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	有舌尖頭器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉土器・灰釉土器	7
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63. 6.15～元. 3.22	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	須恵器・斎串ほか	8
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741	63. 6.15～元. 2.17	掘立柱建物跡・溝状遺構・火葬墓	ナイフ形石器・弥生土器・須恵器・近世陶磁器	9
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町	3,033	63.12.12～元. 3.25	掘立柱建物跡・溝状遺構	土師質土器	10
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町	4,034	63.12.13～元. 3.27	溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	5
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町	4,760	元. 2. 2～元. 3.31	掘立建物跡・溝状遺構	土師器	11
12	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町	12,208	元. 4.10～元. 8.11	中世掘立柱建物跡・溝・自然河川	土師器・須恵器・近世陶磁器	11
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町	3,366	63.12.13～元. 3.27	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	12
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2. 3. 1～ 2. 3.31		埴輪・陶磁器・近代梵鐘鋳型	2

第１表　四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	文献
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 綾歌郡飯山町	28,100 500	2. 8. 2～ 3. 3.20 3. 9. 2～ 3. 9. 4	弥生～中世掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝状遺構	弥生土器・土師器・須恵器・墨書土器	13
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2. 5.10～ 3. 1.17	古墳時代竪穴住居跡・溝，古代～中世建物跡・溝	縄文土器・土師器・須恵器・耳環・土馬・墨書土器	本書
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2. 5.10～ 3. 2.28 3. 4. 4～ 3. 9.13	弥生時代竪穴住居跡・溝・土坑 古代～中世建物跡・土壙墓	弥生土器・耳環・土師器・須恵器・鉄小刀	14
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2. 5.10～ 3. 1.31 3. 7. 1～ 3. 7.16	弥生時代水田・井堰,溝・自然河川	縄文土器・石器・弥生土器・木製品	15
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2. 5.10～ 3. 3. 8	弥生時代溝・自然河川,中世建物跡・溝	弥生土器・石器・土師器・須恵器	16
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2. 4.12～ 3. 3.28 3. 7.18～ 3. 9.27	弥生時代竪穴住居跡・建物跡 古墳時代竪穴住居跡・溝・水田	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品	17 18
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元. 4.17～元. 5.16		弥生土器・須恵器・土師器	本書
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30～ 2.12.26	時代不詳　柱穴・土坑	弥生土器・石器	13
23	綾南奥下池南遺跡	綾歌郡綾南町	2,900	元. 5.22～元. 7.24	須恵器窯跡	須恵器	19
24	国分寺下日名代遺跡	綾歌郡国分寺町	11,350	元. 8.19～ 2. 2.28	弥生時代溝・水田跡・動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器	20
25	国分寺楠井遺跡	綾歌郡国分寺町	4,400	2. 4.11～ 2.10. 2	円墳・中世土師器窯・掘立柱建物跡	須恵器・耳環・土師器・瓦質土器	21
26	国分寺六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町	900	元. 9. 1～元.12.28	前方後円墳（主体部３基）	古式土師器・鉄器	22
27	国分寺六ツ目遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元.10. 1～ 2. 2.28	中近世建物跡	石器・弥生土器・近世陶磁器	23
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元. 8.19～ 2. 3.25 2. 5.10～ 3. 3.25 3. 4. 5～ 3. 7.18	旧石器ブロック・埴輪焼成土坑・古墳（３基）竪穴住居跡・掘立建物跡・溝・土坑	旧石器・弥生土器・埴輪・須恵器・土師器・陶棺	24 25 26

第２表　四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(2)

文献

1．宮崎哲治 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第23冊 龍川五条遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会他 1996.12
2．森下英治 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊 龍川五条遺跡Ⅱ 飯野東分山崎南遺跡』 香川県教育委員会他 1998.12
3．西岡達哉他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊 龍川四条遺跡』 香川県教育委員会他 1995.3
4．片桐孝浩他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第11冊 三条番ノ原遺跡』 香川県教育委員会他 1992.8
5．森下英治他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第27冊 三条黒島遺跡 川西北七条Ⅰ遺跡』 香川県教育委員会他 1997.9
6．山下平重他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第13冊 郡家原遺跡』 香川県教育委員会他 1993.11
7．和田素子 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12冊 郡家一里屋遺跡』 香川県教育委員会他 1993.11
8．廣瀬常雄他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第17冊 郡家大林上遺跡』 香川県教育委員会他 1995.3
9．佐藤竜馬他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊 郡家田代遺跡』 香川県教育委員会他 1996.10
10.『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 昭和63年度』 香川県教育委員会他 1989.9
11. 片桐孝浩他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第22冊 川西北･七条Ⅱ遺跡 川西北・鍛冶屋遺跡』 香川県教育委員会他 1996.3
12. 山下平重他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第20冊 飯野・東二瓦礫遺跡』 香川県教育委員会他 1996.3
13.『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成２年度』 香川県教育委員会他 1991.8
14. 西岡達哉他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第14冊 川津中塚遺跡』 香川県教育委員会他 1994.3
15. 片桐孝浩 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第21冊 川津下樋遺跡』 香川県教育委員会他 1996.3
16. 木下晴一他 『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊 川津二代取遺跡』 香川県教育委員会他 1995.3
17. 山下平重 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会他 1997.3
18. 古野徳久他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡Ⅱ』 香川県教育委員会他 1998.
19. 佐藤竜馬他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第19冊 綾南奥下池南遺跡』 香川県教育委員会他 1996.3
20. 古野徳久 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第31冊 国分寺下日名代遺跡』 香川県教育委員会他 1999.3
21. 佐藤竜馬 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡』 香川県教育委員会他 1995.10
22. 森下英治 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第28冊 国分寺六ツ目古墳』 香川県教育委員会他 1997.8
23. 山下平重 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第34冊 国分寺六ツ目遺跡』 香川県教育委員会他 1999.10
24. 大久保徹也他 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会他 1996.11
25. 蔵本晋司 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡Ⅱ』 香川県教育委員会他 1999.3
26.『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成３年度』 香川県教育委員会他 1992.2

第２節　発掘作業の経過

１．飯山一本松遺跡の調査

飯山一本松遺跡の発掘調査は，平成元（1989）年４月17日より５月16日の実労15日間において実施した。調査地は，城山南麓の低丘陵上に所在する。昭和61年度の分布調査によって，遺物の散布や地形環境などから，飯山町域で数箇所の試掘調査候補地が選定されていた。本調査はそのうち，分布調査時に須恵器や土師器片が採集されたＢ地区を中心に，丘陵尾根頂部２箇所を選んで実施した。西側の調査区をＡ地区，東側をＢ地区と呼称する。調査面積は，両地区合わせて2,200㎡である。

現地での調査は，調査前に果樹園として開墾され，伐採が比較的容易であったＢ地区より着手した。作業員22名を雇用し，丘陵尾根稜線上を中心に調査を実施し，５月９日には調査を終了した。調査の成果については，後述する。

Ａ地区は，備後薬師堂の小さな祠が建てられていたが，長らく人の訪れた形跡はなく荒廃しており，また樹木の伐採も困難であったため，満濃町森林組合に伐採作業を委託し，伐採の終了した４月26日より調査に着手し，５月16日にはトレンチの埋め戻しを行い調査を終了した。

調査にあたっては，現地形を1/100の縮尺で平板測量を行った後，各調査区共幅２ｍのトレンチを十字に設定して，表土以下地山層上面まで人力によって掘り下げを行い，遺物の出土状況や遺物量の確認を中心に調査を進めた。各調査区でのトレンチの配置は第197･198図に示した。当初の計画では，十字に設定したトレンチ内において明確な遺構が確認されなかった場合，調査を終了する予定であったが，若干の遺物の出土をみたため，両調査区共トレンチを拡張し調査を継続した。また，確認された地山面での地形状況や，主要トレンチ壁面の土層堆積状況については，調査担当者の手書きにより平・断面図を作成し，また写真撮影を行うなどして記録を作成した。調査の詳細については後述するが，若干量の遺物の出土をみたのみで，いずれの調査区でも明確な遺構は検出されなかったため，本予備調査をもって飯山一本松遺跡の調査を終了した。なお，出土遺物，図面，写真は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターにおいて保管している。平成元年度飯山一本松遺跡の調査体制は，下記のとおりである。

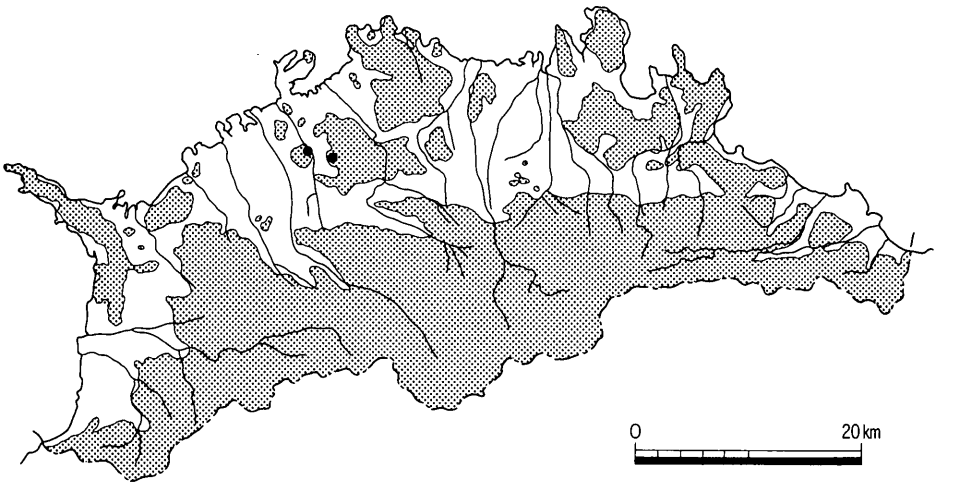
飯山一本松遺跡調査体制

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課長	太田　彰一
課長補佐	高木　　尚
副主幹	野網朝二郎
総務係長	宮内　憲生
埋蔵文化財係長	大山　真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	十川　　泉
次長	安藤　道雄
総務係長	加藤　正司
主査	山地　　修
主事	三宅　浩司
主事	斉藤　政好
調査参事	見勢　　護
係長	渡部　明夫
係長	藤好　史郎
文化財専門員	真鍋　昌宏
主任技師	牧野　啓造
技師	蔵本　晋司
調査技術員	萬木　一郎

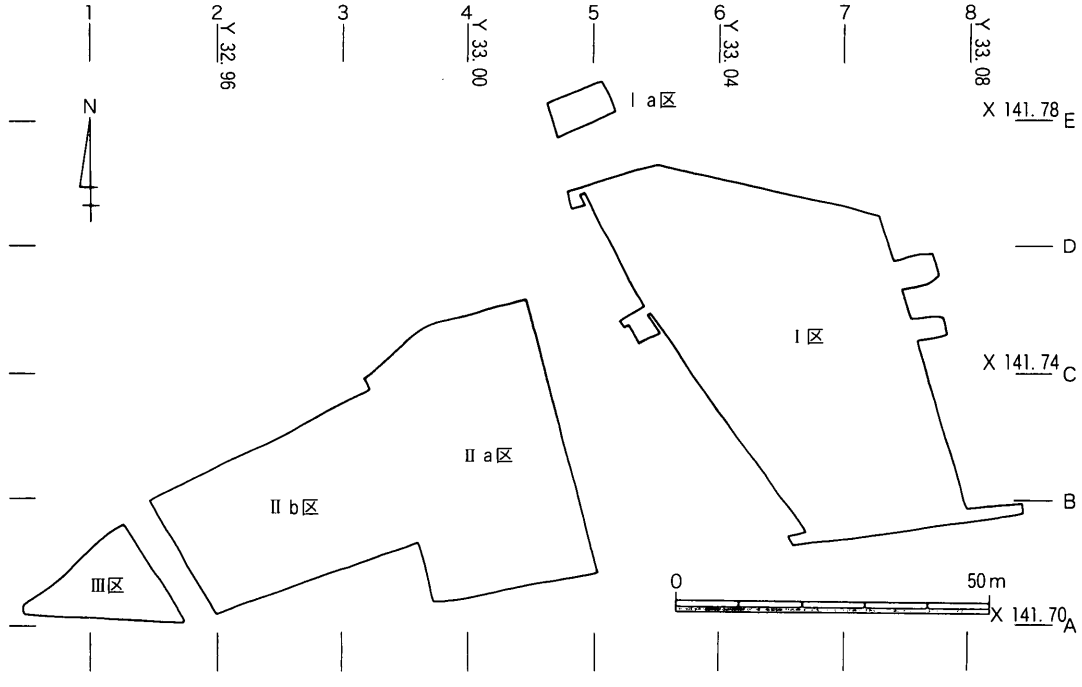


第２図　遺跡位置図

2．川津川西遺跡の調査

川津川西遺跡での発掘調査は，平成元年度に井手ノ上，鋳物師屋，飯山西部地区を対象とした予備調査を嚆矢として開始した。幅２ｍのトレンチ７本を設定して遺構・遺物の確認を行った。調査にあたっては，耕作土以下地山面まで重機によって掘削し，遺構が確認されれば地山面まで人力により掘り下げを行い，遺構内容や遺物量の確認，包含層の厚さの計測などを行った。調査期間は，平成２年３月16～17日の実労２日間である。予備調査の結果，国道438号線の西方約100ｍ，東方約60ｍの範囲において濃密に遺構・遺物が分布することが明らかとなり，本調査を実施する運びとなった。しかしながら，国道西側の対象地の北半部は，未退去の宅地が点在し，工事工程が切迫していることもあって予備調査が実施できず，結果的には本調査で確認した遺構の北側への拡がりを，充分把握できないまま調査を終了することとなった。全体の調査工程と工事工程との調整・対応や，初期段階での遺跡内容の把握にやや問題があったことは確実であり，今後の調査に課題を残した。なお，予備調査の結果から本調査の対象面積は5,400㎡を確定した。

本調査は，予備調査の成果を受けて，平成２年４月１日より面積5,400㎡を対象として実施した。調査にあたっては，現状の地割りや水路の制約から，大きく３調査区（Ⅰ～Ⅲ区）に分割して調査を行った。各調査区の配置は第３図のとおりである。また，各調査区



第３図　川津川西遺跡調査区割図（1/1,200）

第4図　川津川西遺跡調査区位置図（1/5,000）

を通して，国土座標（第Ⅳ系）を基準として20m方眼の小区画（グリット）を設定し，南北軸はＹ＝32,940を１ラインとして東に順にアラビア数字を，東西軸はＸ＝141,700をＡラインとして北へ順にアルファベットを付し，北西隅の交点の記号（例えばＡ－２，Ｄ－１など）を各小区画のグリット名として標記した。土層堆積状況の確認は，各調査区単位に行い，縮尺1/20の土層図と写真において記録の作成を行った。

なお，調査に伴う諸工事等については，工事請負方式を採用し，佐伯建設工業株式会社が請負者となった。また，遺構平面の測量は、ヘリコプターによる航空測量で行い，個別の遺構等の平面図や断面図等については，調査担当者の手書きにより作成した。調査は，橋脚工事の工程から西側調査区（Ⅱ区）より調査を開始し，Ⅲ区の調査を経て順次東側調査区（Ⅰ区）の調査を実施した。Ⅱ区においては予備調査の成果からは読みとれなかった別の流路が検出され，またⅠ区においては予備調査で確認できなかった複数の遺構面が検出されるなど，当初の想定との相違から調査工程に若干の支障が生じた。調査は，平成３年１月17日になってようやく終了した。出土遺物，図面，写真は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターにおいて保管している。川津川西遺跡の調査体制は，以下のとおりである。

川津川西遺跡調査体制

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課長	太田　彰一
課長補佐	菅原　良弘
副主幹	野網朝二郎
総務係長	宮内　憲生
埋蔵文化財係長	大山　真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	十川　　泉
次長	安藤　道雄
総務係長	加藤　正司
主査	山地　　修
主事	三宅　浩司
主事	斉藤　政好
調査参事	見勢　　護
係長	渡部　明夫
係長	藤好　史郎
係長	真鍋　昌宏
技師	藤川　善規
技師	蔵本　晋司

第３節　整理作業の経過

本報告書に掲載する飯山一本松遺跡の整理作業は，平成10年10月１日より同年10月30日にかけて，川津川西遺跡の整理作業は，引続いて平成10年11月１日より平成11年３月31日にかけて，香川県埋蔵文化財センターにおいて行った。遺物洗浄作業など基礎整理の一部については，調査途上において実施しており，当該年度においては，18リットル入コンテナ約70箱の出土遺物の接合・図化・写真撮影作業と，検出遺構の図面・写真などの整理・浄書作業・収納を行い調査成果を報告書に纏めた。当該作業に関わる人員配置は，調査員１名と整理作業員８名である。調査後既に８～９年が経過しているため，調査時に得られたデータを必ずしも報告書に生かし切ることができたとは言い難い。調査担当者としてその点を反省し，今後よりよい方向を検討していきたい。

なお，出土遺物の写真撮影と木製品の樹種鑑定，炭化材の放射性炭素年代測定，花粉分析，漆片の分析は外部に委託し，出土鉄滓等の金属学的分析は大澤正己・鈴木瑞穂氏に依頼し，頂いた玉稿は第２部第２章に掲載した。また，出土石器・石製品等の石材同定は香川大学　谷山穣氏に依頼した。

	11月	12月	１月	２月	３月
遺物接合・復元	━━				
遺物実測・拓本		━━	━━	━━	
図面レイアウト				━━	
遺物観察表作成					━━
遺物写真撮影					
図面トレース				━	━━
写真図版作成				━	━
原稿執筆			━━	━━	━━
台帳等作成				━━	━━
編集					━━
整理収納					━

第３表　川津川西遺跡整理作業工程表

平成10年度整理体制

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課長	小原　克己
課長補佐	北原　和利
副主幹	渡部　明夫
副主幹	西村　隆史
総務係長	中村　禎伸
主査	三宅　陽子
主査	松村　崇史
埋蔵文化財係長	西村　尋文
主任技師	塩崎　誠司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	菅原　良弘
次長	小野　善範
副主幹	田中　秀文
主査	新　　一郎
主任文化財専門員	廣瀬　常雄
文化財専門員	北山健一郎
文化財専門員	蔵本　晋司

第1章　立地と環境

第1節　地理的環境

1．周辺地形

丸亀平野は，東西約13km，南北約10kmの扇状地性の海岸平野で，香川県中央部に位置し，東より大束川・土器川・弘田川などの中小河川が瀬戸内海に流入する。川津川西遺跡は，その丸亀平野北東隅，大束川下流西岸部に位置する。平野部東西は，それぞれ瀬戸内海に突出した標高約400mの五色台山地と，標高381mの弥谷山丘陵等の山塊によって画され，また南縁は岡田・高屋原・仲南といった上位及び下位台地が取り巻き，北の瀬戸内海に開けた地形環境を呈する。また，平野部内には標高200～400m程度の中小独立丘陵が散在し，これらの基底部は領家花崗岩類よりなり，頂部付近には讃岐岩質の安山岩が載っている。遺跡は，大束川河口より約5km程遡った，左岸の北東方向に緩やかに下る平地上に立地する。遺跡の西には，標高421.9mの典型的なビュート状の山塊である飯野山が聳立し，東からは標高462.3mの城山より派生する丘陵が長く延び，平野部は幅を狭めて，その東西長は僅かに0.6km程となる。その中央部を大束川が，東西に大きく蛇行しながら貫流している。なお，遺跡周辺の現地表面の標高は11m前後である。

大束川は，綾歌町の高鉢山北麓台地に源を発する。流域面積55.1km²，支流を含めた流路延長約51.4km（大束川のみでは17.2km），縦断勾配1/1,300～1/520の河川である（香川県1980）。上流部は，東大束川，中大束川，沖川，大束川の4川に分流して，段丘部を深く開析して北及び北西方向に流下し，段丘部前面に小規模な扇状地を形成する。また，飯山町上法軍寺沖から下法軍寺島田周辺で相次いで合流して，緩やかに蛇行しながら北西流し，城山南麓の丘陵部より流下する台目川や落合川といった支流を集めて，飯野山以北に沖積平野を形成しながら瀬戸内海に注ぐ。本河川の形成する平野部は極めて狭小で，また河口部東西には聖通寺山，角山，青ノ山といった小丘陵が点在し，平野部への間口は極めて狭い。瀬戸内海へ大きく開けた地形ではないが，平野部北西に位置する青ノ山によって，季節風が遮られて河口部には天然の良港が形成されたと考えられる。本地域の歴史的展開を

第５図　丸亀平野１ｍ等高線図

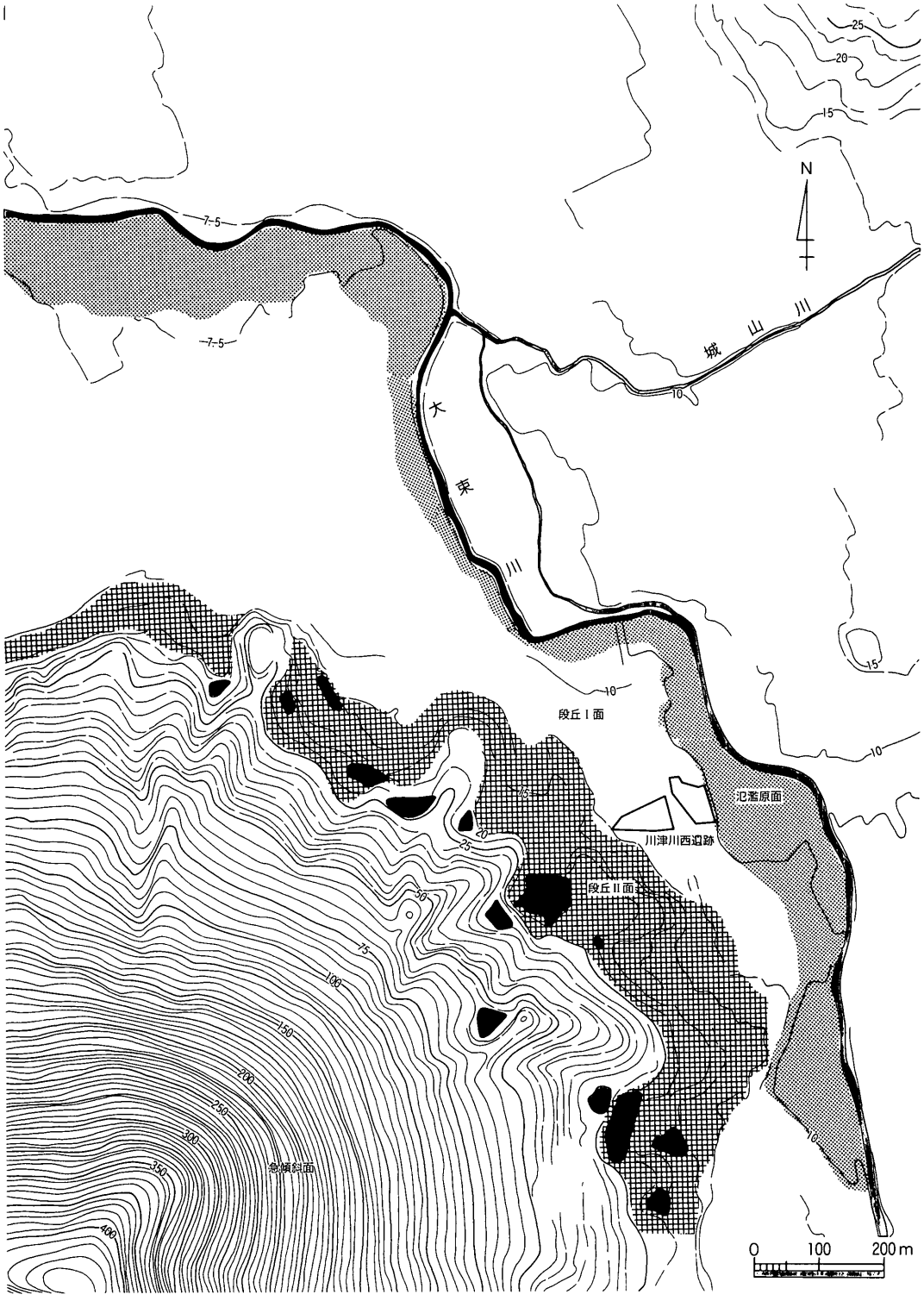
考察する上で，こうした地形環境は重要な意味を有する。なお，上流部では，流路方向が周辺の条里型地割に概ね合致していることから，人工的に流路が固定された可能性が想定されている。

川津川西遺跡の所在する飯野山東麓の平野部は，西は飯野山が聳立し，東及び南北は大きく蛇行した大束川によって分断され，僅かな平坦面の連続によって周辺域に連絡するのみの，自然地形によって区切られた極めて閉鎖的な地形環境にある。現状では，遺跡は狭小な平野部の北半部を中心に展開すると考えられる。

遺跡周辺の地形は，木下によれば大束川より西に「氾濫原面」，「段丘Ⅰ面」，「段丘Ⅱ面」，「急傾斜面（山稜）」の4地形面に分類されている（木下1995）。

遺跡東側を北流する大束川の両岸には，本遺跡周辺でその流路方向に平行して，比高1m前後の崖面が連続し，明確な河岸段丘地形を呈する。この段丘地形は，川津一ノ又遺跡の調査によって，氾濫原に相当する位置より古代末～中世の遺物が出土し，また下川津遺跡の各低地帯出土遺物の内容から，古代末頃の形成を想定する。したがって，本段丘面は瀬戸内海東部の臨海平野で指摘された「完新世段丘」に相当することが想定され，大束川流域の低い地形面を「氾濫原面」，段丘崖上位の地形面を「段丘Ⅰ面」と呼称する。川津川西遺跡は，ほぼこの段丘Ⅰ面上に展開する（第6図）。

さて，こうした段丘崖の形成は，本地域の灌漑システムに大きな制約や変更を生じさせたと想像される。現状では，周囲の水田面から約7～8m下方を流下する大束川より直接取水し，域内の用水として利用することは，その流量の乏しさからも到底困難であり，段丘崖形成時に遡ってもその状況は大きくは違わないであろう。飯野山裾部や城山南麓の丘陵部には，小規模な谷地形を利用したため池が数多く築かれているが，それらの貯水量は所詮谷前面の小規模な灌漑域しか有しない補助的なものでしかない。また，土器川の右岸氾濫原や飯野山南側の土器川旧流路周辺では，多数の出水が掘られているが，これらも同様に周辺の水田を灌漑するのみの水量しか有しない。本地域を含めた大束川西岸下流域の灌漑は，その多くの部分を大束川中流飯山町秋常付近で取水し，遺跡南縁まで段丘崖に沿って北流し，漸く遺跡周辺より段丘面上に揚水され灌漑に供される西又用水に頼っているのが現状である。つまり，本地域を含めた大束川西岸下流域の相当部分は，段丘崖形成後は広域的な灌漑システムの整備なしには成立し得ない状況に陥ったと想像されるのである。そうした点から，今回の調査によって確認された大型灌漑水路ＳＤ135の廃絶は，段丘崖の形成時期との関わりにおいてある一定の示唆を与えるものだと考える。



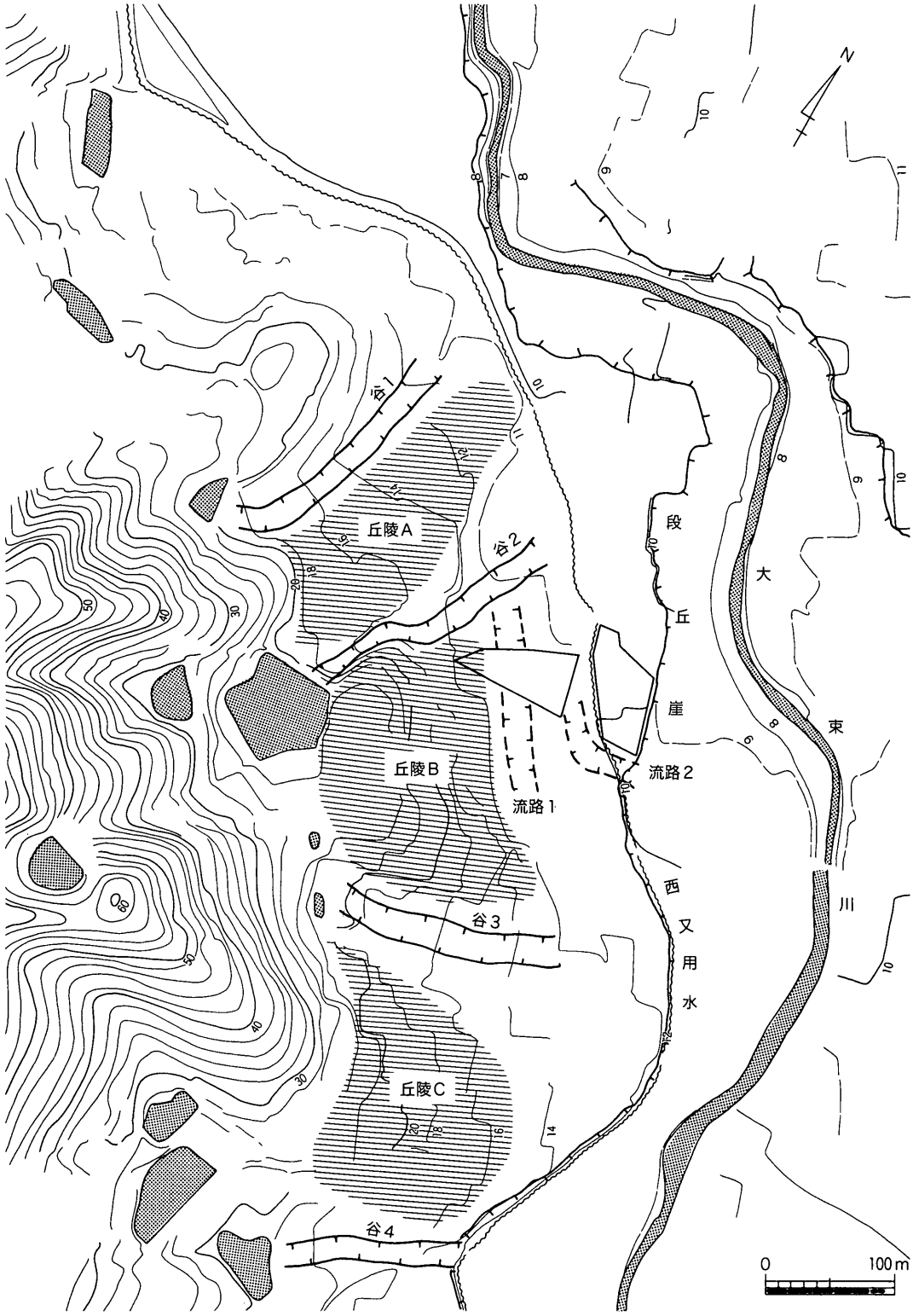
第6図　遺跡周辺地形面区分略図（1/10,000）

さて，遺跡は段丘Ⅰ面上に位置するが，段丘面の地形もそう単調なものではない。遺跡の西側には，前記した飯野山が屹立し，標高100m以上の平均勾配は58～63%と非常に急傾斜である。そのため斜面を下る雨水は通常の流量は乏しくとも，増水時には流速を速めて山裾斜面を大きく穿ち，裾部に舌状の丘陵を発達させながら，遺跡周辺の平地部をも複雑に分断して大束川へと流下する。つまり，遺跡周辺の段丘面は，大束川の下刻によって南北に長い短冊形の地形面に隔離され，さらに飯野山からの落ち水によって南北に並列するいくつかの小地形面に分断されているのである。こうした小規模な地形単位を，現地表面の微起伏や溜め池の分布を基に，模式図的に示したのが第７図である。同図より調査地は，飯野山東麓を北東から東流する小規模な谷４条以上によって分断された小地形面のほぼ中央付近に位置することが分かる。

丘陵Ａ～Ｃは，後述する段丘２面が谷１～４によって開析され形成された残丘部及びそれに連続する縁辺の微高地部である。丘陵Ａ・Ｃは，飯野山より派生する舌状丘陵に単調に連続する。標高15～30m，上面の平均勾配10～15%程度の北東及び南東に下る緩やかな傾斜面である。

丘陵Ｂは，両側を谷２・３によって画された扇状を呈する。丘陵頂の稜線はやや南に偏り，平均勾配13%程度で，丘陵Ａ・Ｃと比べるとやや幅広の平坦面を呈する。周辺域では多量の中世後半期の遺物が採集され，中世段階には丘陵Ｂ上面の広い範囲が何らかの用途に開発された可能性が高い。丘陵Ｂの東縁には，南北に窪地状の水田面の連続が確認でき，また後述する調査によっても，西側調査区において自然流路状の低地帯が検出されており，丘陵Ｂ縁辺に段丘Ⅰ面形成前の旧大束川の網状流路（流路１・２）を想定する。

なお，段丘Ⅱ面は，大束川西岸では飯野山周縁に痕跡的に残存する地形面である。標高15～30mに分布し，地表面の平均勾配は10%程度で，緩やかに山裾部に向けて下降する。段丘上は，上位の堆積物は開墾等により大きく剥奪され，基盤の花崗岩の風化土が広範囲に露出しているが，局所的に径15～20cm程度の安山岩等の亜円礫層の堆積がみられる。高桑は，本地形面を「下位段丘面」と称し，洪積台地の武蔵野面に相当する地形と考えているようである（高桑1974）が，その形成については明確ではない。現状では，果樹園や畑，住宅域として大きく開発されている。少なくとも縄文時代以降には，河川の氾濫を蒙らない高燥した環境にあり，集落等の遺跡が立地した可能性は高い。



第7図　遺跡周辺地形分類概念図（1/5,000）

第2節　歴史的環境

1．旧石器時代

調査地周辺での旧石器時代の遺跡は，城山や飯野山裾部の低丘陵部を中心に分布している。近年までは採集資料が主体であったが，大規模開発の進展により発掘調査による遺物の出土も確認されてきている。しかし，二次的な堆積状況を示すものが大半で，当該期の遺跡の展開は全く不明といってよい。

川津一ノ又遺跡では，弥生時代の流路等より翼状剥片や縦長剥片石核が出土しており，弥生時代中期以降の遺構面のベースとなる基盤層中での石器ブロックの存在が想定されている（山下1997)。その他，川津東山田遺跡からも若干量の石器が出土しているようである。前節に記したように，段丘Ⅱ面の形成が洪積世に遡る可能性が指摘されており，当該期の旧地形の復元に主眼をおいた遺跡立地環境の考察が今後の課題となろう。

2．縄文時代

縄文時代には，後・晩期の遺物が下川津（藤好他1990)・川津下樋（片桐1996)・川津一ノ又（古野1999)・川津川西遺跡等において出土している。いずれも旧流路内や明らかに後出する時期の遺構埋土に混入しての出土等であり，当該時期の明確な居住遺構には恵まれていない。居住域の推定は今後の課題であるが，遺物の出土傾向からすれば，段丘Ⅰ面上において既に削奪され消滅したか，あるいはこれら遺跡の立地する地形面とは異なり，より上位の段丘面上に位置していた可能性も想定される。

なお，前節で述べたように，川津川西遺跡をはじめいくつかの遺跡で，縄文時代晩期段階の旺盛な堆積作用により中小の自然流路の埋没が進展し，その上面での弥生時代前期以降の遺構の確認例が報告されている。縄文時代晩期以前には流路であった地点が，弥生時代前期には遺跡が立地する微高地へと変化したわけだが，これは善通寺市永井遺跡や丸亀市中の池遺跡などでも確認されており，一部地域を除いた丸亀平野の全般的な傾向であるようだ（森下1998)。縄文時代晩期におけるこのような環境変化の要因については必ずしも明らかではないが，農耕技術の進展と集落の定住化による自然環境への積極的な働き掛けが無媒介であったとは思えない。今後，こうした環境の変化と人為的な開発行為につい

て，様々な側面から検討する必要があろう。

3．弥生時代

低地部への集落の進出は，続く弥生時代になると顕在化する。当時の海浜部に立地する下川津遺跡では，前期初頭に位置付けられる竪穴住居1棟が確認されており，県下で最も古い時期の住居遺構となる。また，背後の川津下樋遺跡では，やや後出する時期の埋没の進行した旧流路内に面積10㎡前後を中心とする小区画水田が経営され，またそれに導水した可能性のある井堰も確認されるなど，定型化した灌漑技術が極めて早い段階に当地域にもたらされていたことを実証した。しかし，当該時期の遺構・遺物の分布から遺跡数はかなり限定されるとみてよく，他に川津元結木（片桐1992）・川津二代取（木下1995）・西又遺跡（國木1990）の溝状遺構等より若干の遺物の出土が報告されているのみで，平野部のかなりの部分は未開拓地として残された可能性は高い。大束川東岸域遺跡群の東側に並列するより安定した微高地群に，当該時期の集落遺跡が埋もれている可能性は高いが，現状では中期前半頃まで継続するとみられる上記した遺跡分布の停滞は，新たな耕地開発を支える程成熟した農業生産体制確立の遅延を想起させる。

一方，西又遺跡では幅2～3m，深さ1.2m程の大型水路が検出されている。今後に多くの課題を残すものの，環濠の可能性も指摘されている。しかし，それら集落にしてもせいぜい中期前半頃までには廃絶・衰退しており，弥生時代を通じて安定した拠点集落が経営されていた証左は乏しい。同様の環濠集落は，高松市鬼無藤井遺跡（小川1999）や同汲仏遺跡（山元1999）など県下のみならず瀬戸内各地域でも確認されてきており，広域的な集団間の緊張関係が既に生起していた可能性を指摘する意見もある。この点では，本地域の様相も周辺諸地域と同歩調をとっていたとみなすことができそうだが，なお遺跡数が限定されることから，その評価については断定するまでには至らないのが現状である。

弥生中期になると，前記したように西又・川津一ノ又遺跡等に遺構・遺物の出土が報告されており，集落分布の中心はやや内陸部に移動する可能性がある。しかし，前期から継続するこれら遺跡も中期前葉には大きく衰退する。その要因を高橋は，河床面の低下による段丘崖の形成といった自然環境に求める（高橋1996）。

中期後半段階には，平地部の遺跡分布は極めて不明瞭である。川津一ノ又遺跡などで微量の遺物が流路や包含層等から報告されているにすぎない。一方，青ノ山や飯野山の山頂部，城山南麓などから中期後葉から後期初頭頃の土器の出土が報告されており，正式な調

査等が行われていないため具体的内容は不詳ながら，眺望に優れた立地から高地性集落の可能性が指摘されている。高地性集落の評価については様々な意見がみられるが，やはり背景に広域的なある種集落間の緊張関係を想定するのが妥当であろう。こうした高地性集落を支える平地部の集落の不在は気になるところだが，周辺域で銅鐸などの青銅製祭器の出土遺跡が現状では皆無である状況も，こうした集落遺跡の動向を反映した可能性がある。いずれにしろ今後の調査例の増加に期待したい。また，城山北麓部周辺に所在する長者原遺跡や郷師山遺跡は，前記した高地性集落同様に平地部との比高30m以上の丘陵斜面に立地する。しかし，著名なサヌカイト産地の金山に近接し，多量のサヌカイト製石器が出土していることから，通有の高地性集落とは性格が異なり，石器生産を目的とした集落の可能性を想定する意見もある。

一転して弥生後期には，集落の増加・拡大傾向には一層の拍車がかかり，耕地開発も進展するとみられる。後期後半から終末期には，下川津・川津一ノ又遺跡に代表される拠点的な大集落が出現し，鉄素材や朱といった非自給物資の域内への流入や，それに付随した複数系統の他地域系土器の搬入が認められる。本地域の集団は，当該時期活性化した瀬戸内海を媒介とした物資流通の一拠点としての地位を確立する。特に，域内への下川津Ｂ類土器の搬入傾向や川津一ノ又遺跡での朱精製専用土器の出土は，高松平野中枢部の集団との緊密な関係を想定させる。

４．古墳時代

古墳時代になると，その当初は概ね弥生終末期から継続して集落が営まれ，集落規模には変動が予想されるが，大きな断絶はみられない。しかし，前期中葉頃までにはほぼ一斉に各集落は途絶し，以後後期後半頃までの本地域では集落の様相を窺うことはできない。集落遺跡の動向から，前期中葉頃における変革に大きな画期を認めたい。こうした変革は，高松平野中枢部を除く讃岐東半部での積石塚前方後円墳の築造の停止，在地系統の土器供献の衰退と円筒埴輪の導入，弥生終末期より継続する在地系土器群の払拭及び畿内系土器（布留系土器）へのシフトといった，讃岐地域の自立性の衰退として顕在化するようだ（蔵本1999）。

一方，庄内式併行期に高松平野中枢に出現した前方後円墳の分布は，１期ないしは２期の段階で讃岐各地域内へ急速に拡散を終了するが，その当初においては墳丘規模に明確な格差は認められない。例えば，高松市鶴尾神社４号墳（全長約40m），津田町鵜ノ部山古

墳（同33m），長尾町丸井古墳（同30m），坂出市ハカリゴーロ古墳（同45m），善通寺市大麻山椀貸塚古墳（同39m）等である。しかし，２期ないし３期には，既に墳長約96mの猫塚古墳が高松平野中枢に築造され，一方で墳長約27mの高松市瘤山１号墳や（同約38m）の三木町池戸八幡神社１号墳といった小規模墳も散在し，墳丘規模の格差が拡大しつつ，同時に広汎な階層にまで前方後円墳の築造が容認される。こうした点から，本地域では前方後円墳の築造がなお地域個有の自立的な枠組みの中で機能していたことを推測させる。

以後，３期ないし４期には大幅な前方後円墳築造数の衰退を迎えるが，それはこうした小規模墳の築造の停止に大きな要因を求めることができそうである。この時期には，前方後円墳の築造系譜は，旧寒川・香川・鵜多・那珂多度の各郡の４系列程度に淘汰され，集約化が進展する。また，それと共に各系列で墳丘規模は概ね増大し，首長権力の絶対化が図られる。小規模墳を築造していた中小の首長層は，前方後円墳の築造集団から疎外され，もはや中小の円墳しか築き得ない階層へと没落した可能性が高い。こうした現象は，前方後円墳の築造に代表される墳墓祭祀が，より整備された政治的システムへと昇華したことと，前期初頭には不明瞭であった地域内部での各首長層間の階層制が，しだいに顕在化しつつあった可能性を示唆する。

こうした古墳時代前期後半段階での地域色の衰退や前方後円墳築造系譜の淘汰は，高松平野中枢を中心とした阿波・讃岐各地域間の首長層の紐帯の再編といった内在的要因と共に，個別地域単位への畿内中枢の関与といった外的諸関係の変化にも具体的要因を求めることができよう。

本地域においても，大束川下流域を中心に数系列の首長墓系譜がみられ，最も後出する本地域最大規模の田尾茶臼山古墳（全長76.5m）は，中期初頭に下る可能性が想定される。また，全長約35mといった小規模な前方後円墳である飯山町三の池古墳（國木1996ａ）は，前記した動向を踏まえるなら前期前半に遡る可能性が高い。

しかし，淘汰・再編されつつもなお築造を許容された前方後円墳系譜も，古墳時代中期中葉頃には畿内色の強い大川町富田茶臼山古墳の築造以降大きく衰退し，讃岐各地域で断絶期を迎える。おそらくは畿内政権による直接的でかつ決定的な政治的介入が，この頃になされたとみてよいだろう。前期に明確な首長墓系譜が認められなかった地域で，やや規模や副葬品の傑出した古墳群の展開が認められるのも，これと表裏の関係にある。こうした地域では，径30m前後の円墳で甲冑等の武具類を副葬した首長墓墳の下位に，規模や外表施設，副葬品に明らかな格差を伴った多数の古墳がしばしば集中して築造され，あるい

は無墳丘の箱式石棺墓などが墓域を違えて構築されるなど，墳墓に視覚的な階層差が持ち込まれ（蔵本1994），より下位層を包括した萌芽的な身分秩序の成立を想定することも可能かもしれない。本地域においても，前記田尾茶臼山古墳以降の前方後円墳系譜は明確ではなく，径30mクラスの大型円墳さえも築造されない。首長墓系譜は，より内陸部の複数の甲冑や銅鏡を副葬した津頭西古墳群を盟主とする綾川中流域の羽床盆地周辺等へと移動するとみられる。本地域内には，径10m前後で少量の鉄鏃等の武器類を副葬したのみの飯山町城山古墳群（笹川1992）などが調査・確認されているに過ぎない。なお，飯野山東麓に所在する秋常王墓古墳からは，甲冑や不明銅製品が出土したようであり，遺物内容から中期に遡る首長墓墳の可能性があるが，開墾により消滅してしまったため内部主体など詳細は不明である。いずれにしろ，本地域の中期首長墓墳の不在は大きく変更する必要性はないだろう。

こうした古墳築造の停滞した状況は，本地域では横穴式石室の導入時期まで継続する。本地域の横穴式石室は，調査例が乏しいため不詳な部分が多いが，少なくともＴＫ43型式期には導入されていたと推定される。以後，７世紀前半代にかけて平地部に接した丘陵縁辺に多数の横穴式石室墳が築造される。各古墳間では，墳丘や石室の規模，副葬品の内容に相対的な格差が拡大し，上記した古墳群内部での視覚的な階層差は，より細分化して古墳時代後期へと継承される。なお，本地域においても前代までの多種多用な埋葬施設による格差は取捨され，当該期のそれは横穴式石室という単一埋葬施設の規模の差として顕在化する。さて，玄室床面積６㎡以上の大型石室もしくは武具や馬具等を副葬した首長墓墳は，青ノ山縁辺と飯野山南麓を中心に分布する。青ノ山古墳群では，宝塚支群４号墳と竜塚古墳が知られており，山頂部に立地する青ノ山１号墳も，やや小規模ながら終末期方墳として特異な位置を占める。また，飯野山周辺では，久保王塚古墳が知られている。久保王塚古墳は，出土した須恵器にＴＫ10型式期の様相を備えたものがあり，またやや後出する内容を有する須恵器も出土していることから，内部主体の詳細は不明ながら導入期の横穴式石室となる可能性が高い。しかし，これら首長墓墳も，周辺に所在する古墳と比較して必ずしも傑出した存在ではない。おそらくは，讃岐西部三豊平野に築造された３基の巨石墳にみられる格差とは比肩すべくもない。こうした古墳分布の偏差は，諸集団の地域的編成が細分化され，より広域的な統率力を有する首長が欠落した状況を反映しているのであろう。

当該時期の集落遺跡も，こうした古墳の動向と概ね合致して展開する。大束川下流域の

下川津・川津中塚・川津井手の上（森下1996）・川津一ノ又・川津東山田・川津川西等の多くの遺跡で，ＴＫ43からＴＫ217型式期の竪穴住居や掘立柱建物で構成される集落跡が検出されている。川津東山田・川津川西遺跡では，数棟の竪穴住居を１単位とする数世帯で構成される単位集団が，微高地上に数群展開した一般的な集落形態を呈するが，下川津・川津一ノ又遺跡では，こうした単位がより一層の集住形態を呈して集落を形成しており，当該地域の拠点集落となる可能性が高い。特に，下川津遺跡では，当該時期床面積40㎡程度の竪穴住居と掘立柱建物で構成される大型建物群が検出されており，おそらくは上記した首長墓墳の被葬者等を含む有力階層の居住した居館的な性格を有していた可能性も考えられる。

下川津遺跡でのこうした状況は，７世紀中葉を境に急速に整備・拡充され，企画性を有する大型建物配置や出土遺物の内容から，そこに「官衙的」性格を読み取る意欲的な研究もみられる（佐藤1998）。また，７世紀中葉を前後する時期に下川津・川津一ノ又の両遺跡からは，他の遺跡にはおよそみられない多量の畿内系土師器供膳具が出土する。下川津遺跡での同時期の土器焼成遺構周辺での出土状況から，遺跡内での生産の可能性が想定され（佐藤1998），また土器そのものの特徴から畿内地域への貢納の可能性を想定する意見（片桐1997）もある。なお，やや時期の下る畿内系土師器が，高松市南山浦古墳群や香川町清谷１号墳（國木1996ｂ）などに初葬あるいは追葬に伴うものではあるが副葬され，これら古墳がいわゆる畿内系の横穴式石室を採用していることから，畿内中枢との結びつきを想定した（蔵本1994）。下川津遺跡の７世紀段階での変質は，畿内地域との関係性を含めて検討する必要があろう。

５．古代

大束川流域は，古代律令制下においては旧鵜足郡が設置されている。鵜足郡の郡衙を含めた中枢部の位置については不詳ながら，対外的な物資流通の利便性から，大束川もしくは土器川下流域に求めるのが妥当であろう。地名遺称の点から，飯野山南西麓の丸亀市土器町郡屋周辺が想定されている。

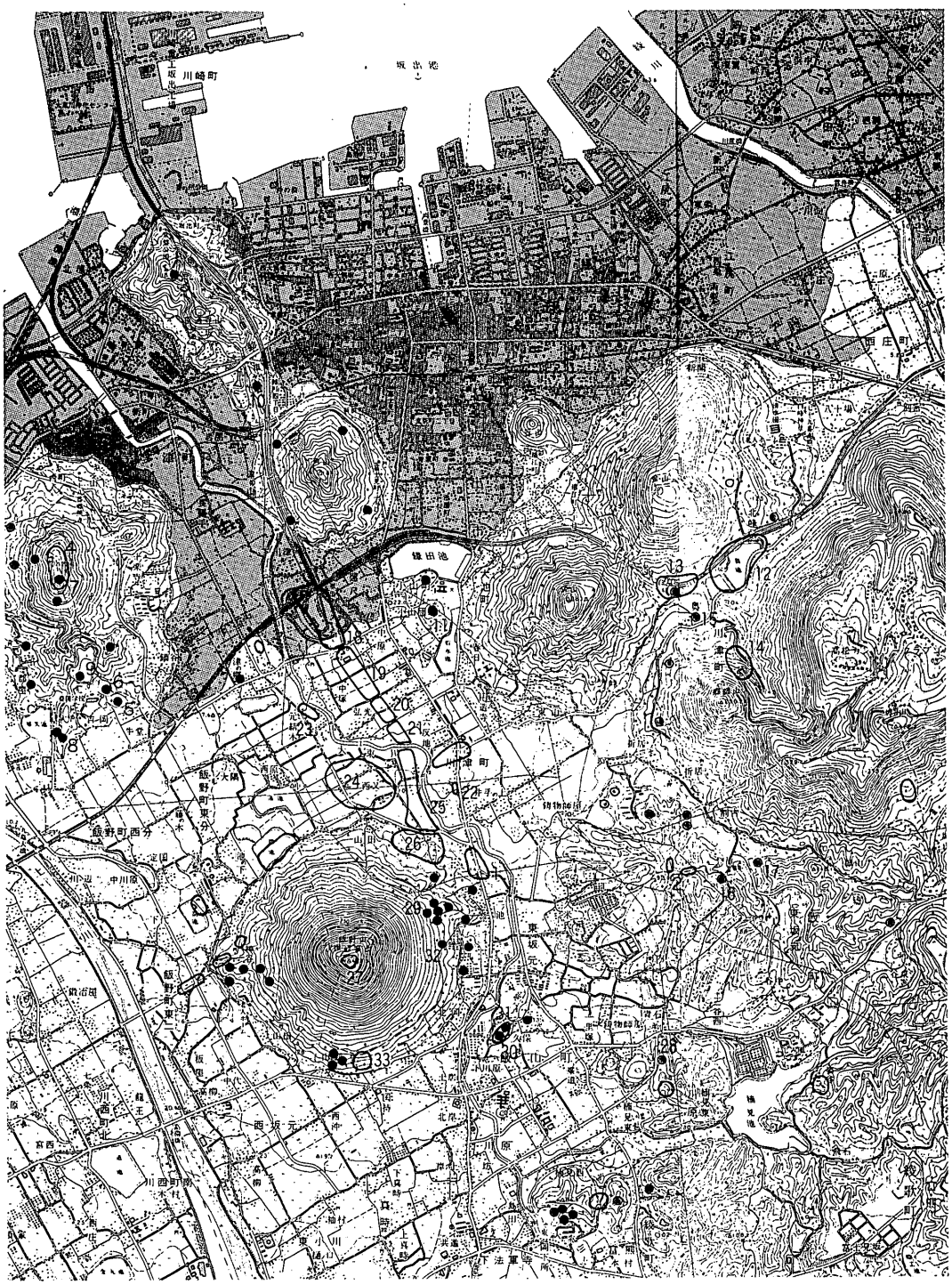
さて，古代における集落遺跡の様相は，下川津遺跡以外においてはあまり明確ではない。下川津遺跡では，７世紀代の様相からは緩やかな衰退基調にありながらも，なお12世紀代にかけて大型建物群が継続する。この点は，やはり前面に瀬戸内海を擁した大束川河口に位置し，物資流通の拠点としての弥生時代以降の本遺跡の有する立地上の優位性に起因す

るものと考えられる。

古墳時代から古代にかけての生産遺跡は，青ノ山周辺と城山南麓で須恵器窯跡が知られている。青ノ山１号窯（真鍋他1980）は，ＴＫ209～ＴＫ217型式期の須恵器を焼成した窯跡で，その経営期間は背後の青ノ山古墳群の築造時期の一部と重複し，経営主体の関連性は容易に推測される。また，城山川上流の峠奥窯では，概ねＴＫ217～ＴＫ48型式期の操業が想定されている。これら窯跡は，現状では比較的短期間の経営で終止する単発的で目的性の高い窯である。一方，城山南麓の足利池南窯ではＴＫ217型式期前後の，前池北窯では８世紀後半から９世紀前半代の須恵器が採集されている（蔵本1989)。比較的近接した位置に立地し，周辺域で他にも須恵器片の散布地も認められることから，城山南麓の低丘陵縁辺を基盤に，零細ながらも比較的長期において須恵器生産が継続されていた可能性が想定される。前記した単発的な経営主体とは異なり，組織的な生産体制が整備されていた可能性も推量されるが，いずれも採集資料であり，実体は今後の研究に委ねられる部分が多い。また，大束川上流域においては現状で須恵器窯の存在は確認されておらず，本地域における須恵器生産が，いずれも大束川下流域周縁に集中する点は重要である。後述する本地域の流通拠点としての性格から，これら須恵器生産もその一環として計画的に配置された可能性が考えられる。

また，水田遺構等の耕作痕は，川津一ノ又遺跡等で確認されており，それに付随する灌漑水路網は，規模を問わなければ各遺跡で普遍的に検出され，広汎な地域で耕作域が展開していたことが知られる。川津一ノ又遺跡では，弥生時代中期から終末期に埋没の完了した自然河川上に，幅２～６ｍ程のベース層を削り出して造出された畦畔状遺構が延長約170m以上にわたって検出されている。少なくとも７世紀段階に遡ることは確実で，既にこの時期に地域単位の組織的な労働力の投下が準備される程整備された政治的権力の存在が推測できる。また，この畦畔状遺構を穿って数カ所に木樋が設置されており，木樋より延びる小水路は幹線水路に連結され，高度な灌漑系統が整備されている。こうした幹線水路の延長は不詳ながら，各微高地内部で収束する個別灌漑単位を超えた広域的な水路網の整備が，既に当該時期になされていた可能性は高い。しかし，なお幹線水路は自然地形に規制され，規格的な流路方向を呈しておらず，広域的な土地区画の整備には限界性があったと思われる。

丸亀平野には，北より約30°西に偏した方向をもつ一町方格のいわゆる条里型地割が，比較的広汎に認められる。これら地割の丸亀平野中央部での形成時期については，考古学



第8図　周辺遺跡分布図（1/50,000）
（スクリーントーンは標高5m以下の範囲を示す）

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	内　　容
1	川津川西遺跡	坂出市川津町川西	縄文晩～中世，集落・自然河川
2	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町割古他	弥生後～古代，集落？
3	聖通寺山古墳	綾歌郡宇多津町他	古墳前？，積石塚古墳？
4	青ノ山山頂遺跡	綾歌郡宇多津町他	弥生中，散布地（高地性集落？）
5	竜塚支群４号墳	丸亀市飯野町山下	古墳後，横穴石室墳
6	竜塚古墳	丸亀市飯野町山下	古墳後，横穴石室墳
7	青ノ山１号墳	丸亀市土器町青野山	古墳後，横穴石室墳
8	吉岡神社古墳	丸亀市飯野町吉岡	古墳前，前方後円墳
9	青ノ山１号窯	丸亀市飯野町山下	古墳後，須恵器窯
10	田尾茶臼山古墳	坂出市八幡町他	古墳中，前方後円墳
11	川津茶臼山古墳	坂出市川津町蓮尺他	古墳前，前方後円墳
12		坂出市西庄町奥池	旧石器，散布地
13	長者原遺跡	坂出市川津町長者原	弥生中，集落
14	郷師山遺跡	坂出市川津町郷師山	弥生中，集落
15	峠奥窯	坂出市川津町峠奥	古代，須恵器窯
16	足利池南窯	綾歌郡飯山町割古	古墳後，須恵器窯
17	前池北窯	綾歌郡飯山町割古	古代，須恵器窯
18	下川津遺跡	坂出市川津町下川津	弥生前～中世，集落・水田・土壙墓
19	川津中塚遺跡	坂出市川津町中塚	弥生前～近世，集落・自然河川
20	川津下樋遺跡	坂出市川津町弘光	縄文晩～近世，集落・井堰・水田
21	川津二代取遺跡	坂出市川津町弘光	弥生前～中世，集落・自然河川
22	川津井手の上遺跡	坂出市川津町井手の上	弥生後～古代，集落
23	川津元結木遺跡	坂出市川津町元結木	弥生前～中世，集落
24	西又遺跡	坂出市川津町西又	弥生中，集落？
25	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町一ノ又	旧石器？～中世，集落・水田
26	川津東山田遺跡	坂出市川津町東山田	旧石器～中世，集落
27	飯野山山頂遺跡	綾歌郡飯山町飯ノ山他	弥生中，散布地（高地性集落？）
28	城山古墳群	綾歌郡飯山町河内	古墳前～中，円墳５基
29	三の池古墳	綾歌郡飯山町三ノ池	古墳前，前方後円墳
30	久保王塚古墳	綾歌郡飯山町久保	古墳後，横穴式石室墳？
31	久保遺跡	綾歌郡飯山町久保	弥生中，散布地
32	秋常王墓古墳	綾歌郡飯山町秋常	古墳中？，甲冑副葬
33	坂元神社遺跡	綾歌郡飯山町山ノ越	旧石器，散布地

第４表　周辺遺跡一覧表

的資料の分析から７世紀末～８世紀初頭が想定（森下1997）されており，高松平野においてもほぼ同時期かやや先行する時期に一部の地域で地割の形成が確認され（西村1998），７世紀代における地割形成が讃岐各地域において普遍化しつつある。さて，本地域においても，飯野山北方の平野部を中心に地割の存在が指摘されている。しかし，考古学的な調査においてその初現が確実に遡るのは，現状では８世紀初頭とやや遅れるようだ（大久保1990)。こうした土地区画の整備とは別に，大規模な用水路の開削といった耕地開発の進展は，８世紀後半ないしは９世紀前半代に下る。この時期は律令体制の変質期と位置付けられ，律令制度の弛緩により在地有力層の私的大土地所有が進展し，構造的な土地所有関係の変化が指摘されている。例えば，川津川西遺跡における灌漑水路ＳＤ135の開削も，こうした背景を有しているのであろうが，その具体的様相については今後の課題である。

６．中世

中世集落は，近年の大規模開発に伴う調査の結果，多量の資料が蓄積されつつある。しかしながら，資料数は増加したもののなお，古代社会から中世への生産関係や支配関係のダイナミックな変化を具体的に想定するまでには，まだ資料の蓄積と現有資料の詳細な分析を必要としよう。文献資料からは，13～14世紀代に本地域には公領川津郷と春日社領河津庄が置かれていたとみえるが，それと考古資料を具体的に連絡させることは現状では不可能である。

さて，下川津遺跡では断続的ながら12～16世紀代，川津中塚遺跡では12～13世紀代，川津二代取遺跡では13～14世紀代，川津元結木遺跡では12世紀代，川津一ノ又遺跡では12～16世紀代，川津川西遺跡では14～15世紀代のそれぞれ掘建柱建物等で構成される集落跡を検出している。この点は木下も指摘するように，大束川の下刻によりそれまで河道域であった場所が，氾濫原といった開発可能な土地へと変化（木下1995）し，一時灌漑機能の著しい後退により荒廃地が急速に増加したと考えられるが，なおそれを克服して耕地の再開発が実施された結果，居住域や可耕地の増加といった恩恵を本地域にもたらしたことが，こうした遺跡数の増加に大きく寄与しているものと考えられる。しかし，検出された集落は，その大半が長くとも２世紀を経過することなく廃絶もしくは同一遺跡内で建物位置を大きく移動させており，比較的短期間に居住域を放棄しているとみられる。この点は，当該時期の他集落に概ね共通する点であり，居住域の頻繁な移動・途絶は，なお当時の農業生産が，灌漑や施肥，病害虫など，同一地点において継続して安定した生産量を得るまでの技

術的課題を克服していなかった，社会的生産力の問題を背景としているのかもしれない。

さて，検出された最大規模の掘立柱建物の床面積は，下川津遺跡ＳＢⅢ199で39.4㎡，川津中塚遺跡ＳＢ05で56.2㎡，川津二代取遺跡ＳＢ02で54.0㎡，川津一ノ又遺跡Ⅳ区ＳＢ022で37.3㎡，川津川西遺跡ＳＢ19で50.0㎡と，60㎡を超えるものはなく，同時に50㎡を超える大型建物の検出例も乏しい。また，輸入陶磁器の出土頻度も，若干の多寡はみられるものの傑出した遺跡はなく，各遺跡で通有の搬入量であった可能性が高い。この点で，本地域の集落は，弥生時代以来連綿と受け継がれてきた物資流通の拠点といった地理的特性は解体され，通有の一般的な農村村落へとその性格を大きく変貌させた可能性が高い。佐藤は，その要因を完新世段丘崖の形成により大束川の河床が低下し，それに伴って当時の海岸線が北方へと大きく後退した点に求め，本地域における港湾的物資集積機能の衰退を想定する（佐藤1998)。そして，14世紀代には大束川河口に新たに形成された港湾都市「宇多津」に守護所が置かれ，守護大名細川氏による領国支配の拠点として，本地域の政治・経済的中心としての地位は宇多津へと移譲され，以後近世を通して一般的な農村景観が展開していくこととなる。

引用・参考文献

伊沢蹉一他　1980『青ノ山南麓における埋蔵文化財調査概報』　丸亀市教育委員会
香川県土木部河川課　1980『香川の河川』
大久保徹也　1990「下川津遺跡といわゆる条里地割について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』　香川県教育委員会他
小川賢　1999「鬼無藤井遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成９年度』　香川県教育委員会
片桐孝浩　1992『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』　香川県教育委員会他
片桐孝浩　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第21冊　川津下樋遺跡』　香川県教育委員会他
片桐孝浩　1997ａ「讃岐の土師器」『研究紀要　Ⅴ』　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
片桐孝浩　1997ｂ『中小河川大束川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津一ノ又遺跡』　香川県教育委員会他
木下晴一　1990「丸亀低地の微地形　－発掘調査成果を中心として－（予報)」『香川地理学会会報　No10』
木下晴一　1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊　川津二代取遺跡』　香川県教育委員会他
國木健司　1990「西又遺跡」『香川県埋蔵文化財発掘調査概報集』　香川県教育委員会
國木健司　1996ａ「飯山町三の池古墳測量調査報告」『香川考古　第５号』　香川考古刊行会
國木健司　1996ｂ「清谷１号墳出土の遺物」『香川考古　第５号』　香川考古刊行会
蔵本晋司　1989「飯山町割古谷の須恵器窯跡二例」『香川史学　第18号』　香川歴史学会
蔵本晋司　1994「香川県における古墳時代中期群小墳小考」『研究紀要　Ⅱ』　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

蔵本晋司　1999「まとめ」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』　香川県教育委員会他
栗原権四郎　1972「瀬戸内南岸沖積平野の地質学的研究」『東北大地質古生物研邦報　No73』
笹川龍一　1992『城山古墳群発掘調査報告書』　飯山町教育委員会
佐藤竜馬　1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『古代学協会四国支部第12回大会発表資料　律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題』
須槍和己他編　1991『日本の地質８　四国地方』　共立出版株式会社
高桑糺　1974「丸亀図幅の地形区分」『研究報告　第１部第37号』　香川大学教育学部
高橋学　1996「古代の地形環境と土地開発・土地利用」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告　第７集』
西村尋文　「尾端遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報平成９年度』　香川県教育委員会他
東原輝明　1984『青ノ山８号・９号墳発掘調査概報』　丸亀市教育委員会
藤好史郎他　1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』　香川県教育委員会他
古野徳久　1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊　川津一ノ又遺跡Ⅱ』　香川県教育委員会他
松本敏三他　1977『青ノ山６号墳調査報告』　香川県教育委員会他
真鍋昌宏他　1980『青ノ山南麓における埋蔵文化財調査概報』　丸亀市教育委員会
森下英治　1996『県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　川津井手の上遺跡』　香川県教育委員会
森下英治　1997「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『研究紀要　Ⅴ』　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治　1998「第６節分析結果の総括と今後の課題」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊　龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡』　香川県教育委員会他
森本義臣　1983『青ノ山宇多津５号墳調査報告』　宇多津町教育委員会
山下平重他　1994『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第14冊　川津中塚遺跡』　香川県教育委員会他
山下平重　1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊　川津一ノ又遺跡Ⅰ』　香川県教育委員会他
山元素子　『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財調査概報　汲仏遺跡』　香川県教育委員会他

第２章　調査成果

第１節　基本層序

１．Ｉ区

Ｉ区は，調査地の東端，前記した河岸段丘縁辺に位置する調査区である。調査前は，大きく南北に３段，中央部の水田が東西に２段の都合４面の水田に造成されており，西側には用水路に沿ってこられよりは一段低い細長い短冊形の水田があり，計５面の水田に造成されていた。現状の地割りは，1962年撮影の航空写真のものと変化はなく，おそらく国道438号線建設時かもしくはそれ以前に遡る可能性がある。

調査は主に，東側４面の水田部分を主として調査区を設定（Ｉ区）し，調査区外であった段丘部分と，顕著な削平が見込まれた西側水田部分は数本のトレンチを設定して調査を行った。また，調査地北端部は調査区への進入路の確保の点から，小規模なトレンチ状の調査区を設定（Ｉａ区）せざるを得なかった。各調査区及びトレンチの配置は，第３図のとおりである。Ｉ区は，現状の地割りに概ね合致して旧耕土層以下各層の堆積状況に若干の差異が認められるため，ここでは北側水田部をＩｂ区，中央東側水田部をＩｃ区，中央西側水田部をＩｄ区，南側水田部をＩｅ区，西端短冊形水田部をＩｆ区と仮に小区画を設定する。各水田の現地表面の標高は，Ｉｅ区が10.60m前後，Ｉｃ区が10.80m，Ｉｄ区が10.90m，Ｉｂ区が10.80m，Ｉｆ区が10.40mである。Ｉｅ区が，Ｉｂ～ｄ区に比して10～20cm程度低いが，これは後述するように，後世の削平によるものであり，旧地形を反映したものではない。旧地形は，おおよそ北に下る緩やかな斜面地であったと考えられる。ちなみに，段丘崖下氾濫原部分の水田面の標高は9.80m前後で，段丘上面とは約１m程の比高差を有する。

Ｉ区の土層の堆積状況は，Ｉ区の北・西・南壁と，東壁南半部，Ｉａ区東壁，Ｉ区Ｅトレンチ北壁によって観察を行った。ここでは前者４面の土層図を提示して，土層堆積状況を説明する。

Ｉ区では，耕土層は0.2～0.4mの層厚を有し，調査区北半部を中心に耕土層下には最大

4層に細分される層厚数cm程度の薄い旧耕土層（第9・10図5～10層）の水平堆積が認められた。上述したように，Ｉｅ区では，旧耕土層の堆積は後世の削平により失われており，耕土層直下において後述する縄文時代晩期包含層（第9・10図58～61層）が露出する。旧耕土層は，西壁及び北壁の観察により，北に下る緩やかな階段状を呈して堆積しており，本来は僅かな比高差を有した数面の棚田状を呈していたが，漸次土地区画の更新により現状の地割りへと改変されたものと考えられる。こうした水田区画の変更の具体的時期については，各耕土層からの出土遺物が僅少なため明確なことは不詳ながら，近代以降の遺物は極めて乏しく，主体は近世にあったことが想定される。

旧耕土層下において，調査区北半部を中心に希薄な中世の包含層（第9・10図11～13層）を検出した。包含層の検出範囲は，前述したようにＩｅ区は後世の削平を蒙っており，主にＩｃ・ｄ区以北に限られる。包含層は3層に細分されたが，基本的には大差がなく，2層程度に大別されるようである。包含層下で，後述する中世後半代の集落を構成する多数の遺構が検出され，この遺構面を第1遺構面ａ（以下，１ａ面と略す）と呼称する。大別された包含層は，おそらく時期差を反映したものと考えられるが，土層断面の観察によって確認された遺構は，全て包含層下より掘り込まれており，明確な時期差を把握するまでには至らなかった。遺構面の標高は，Ｉｅ区では10.2～10.3m前後を，Ｉｃ・ｄ区では10.5m前後，Ｉｂ区では10.4m前後をそれぞれ測る。Ｉｂ区で0.1m程の比高差があり，Ｉｃ・ｄ区との間に現状の地割りと合致する僅かな段差を認めるが，包含層は遺構面上面を覆って均等に堆積しており，この段差が中世段階に遡るものと判断された。つまり，現状の地割りの少なくとも一部については，中世後半代に遡る可能性が指摘でき，後述する当該時期の遺構の軸方向が現状の地割りの方向と概ね合致する点を含めて，地割り形成を考える上で貴重な成果となろう。なお，Ｉｅ区においては，遺構面は少なくとも0.2～0.3m程度の削平を蒙っており，柱穴数基と溝1条を除いて，明確な遺構は検出されなかった。検出された溝状遺構が，集落域の南限を区画する可能性を想定しているが，詳細については後節で詳述する。

１ａ面のベースなる灰黄色粘質土（第9・10図18・19層）は，調査区北半部において緩やかに北に傾斜して堆積する。本層には，中世以前の遺物を少量包含し，包含層下において耕作痕と考えられる方格状の小溝群と水田遺構を検出した。本層下面で検出した遺構面を，第1遺構面ｂ（以下，１ｂ面と略す）と呼称する。１ｂ面の所属時期については，遺構出土の遺物が僅少であり，一定量の9世紀代前後に遡る遺物の中に，本来１ａ面の遺構

に帰属したであろう遺物も混在し，明確な時期を特定することができなかった。限られた遺構出土の遺物から，13世紀代に位置付けられるものと想定しているが，それよりは遡る可能性も高い。１ｂ面包含層も，１ａ面包含層同様にＩｅ区及びＩｄ区南半部では，大きく削平され検出されなかった。包含層は，均質なシルト質土層で，層厚0.1～0.2m程度で緩やかに北に傾斜して堆積しており，旧大束川の洪水堆積の可能性がある。包含層の検出範囲で遺構面の標高は，Ｉｄ区で10.3m前後，Ｉｂ区北西隅で10.25m前後，Ｉｂ区北東隅で10.20m前後を測り，遺構面は若干の起伏を有しているが，概ね緩やかに北東方向に傾斜する。

第２遺構面（以下，２面と略す）は，１ｂ面のベース層となる暗橙褐色粘質土（第９図20ｂ層）下面において検出した。しかし，調査区北東隅Ｅ６・７グリット周辺では，遺構面上面に，８層に細分され北西方向に傾斜して堆積する，層厚最大0.3m程の包含層（第９・10図21～23・25～29層）が存在する。これら包含層は，調査区北端部に偏在して顕著な斜面堆積状を呈し，また包含層下面は起伏に富み，上記した20ｂ層の堆積とは大きく異なる環境下で堆積した可能性が想定された。検出部分が限られるためその性格を明確に捉えることはできなかったが，上記した堆積状況から，調査区北側を東西流するであろう旧河道南縁の堆積層の可能性を想定しておく。遺構面の標高は，Ｉｄ区南端で10.50m前後，Ｉｃ区南端で10.45m前後，Ｉｂ区北西隅で10.20m前後，最深部の同区中央部で9.80m前後をそれぞれ測り，緩やかに北へ下降する。Ｉｅ区においては，遺構面が大きく削平されており，辛うじて溝状遺構の底面の残存を確認したのみである。２面においては，古代初頭７世紀前半代を中心とした遺構を検出した。

２面のベース層となる灰黄褐色系粘質シルト～粘質土（第９・10図58～61層）は，調査区南部を中心に広く堆積する。本層からは，若干量の縄文時代後期から晩期を中心とした遺物の出土がみられた。遺物は散在し，明確なまとまりをもたず，遺物量も限られており，また遺構も確認されなかったことから，土層形成時に再堆積した可能性を考え，遺物の回収を目的とした調査を行った。しかし，出土した遺物は，顕著なローリングは受けておらず，近接した位置から流入埋没した可能性が高い。本層を以下，包含層Ⅳと呼称する。本層下位には，灰色系のシルト～細砂～粗砂層が，上位にいくにつれ粒径を小さくしながら漸移的に概ね北に傾斜して堆積する。堆積状況から，旧大束川の洪水堆積に起因する堆積層と考えられ，包含層Ⅳを含め比較的短期間内に堆積した可能性が高い。本層群は，後述するⅡ・Ⅲ区にも共通して堆積しており，Ⅱｂ区での観察で層厚3.5m以上を有してお

り，段丘Ⅰ面の基盤層を形成するものと考える。また，本層群Ⅱ区より出土した流木１点と炭化材１点について放射性炭素年代測定を行った。分析成果は後記するが，基本的には前記想定と大きな矛盾は生じない。

なお，調査区北西部で，旧流路状の遺構（第10図49～57層）を検出した。旧流路状の遺構は，幅11～15mで北東方向に概ね直線状に検出された。流路内からは遺物は出土しておらず，断面観察のみで調査を終了したが，包含層Ⅳ下位の灰色系シルト層上面より切り込んでおり，あるいは縄文晩期以降に下る可能性もある。調査期間等の関係から，詳細な調査・観察を行えなかったため，報告は省略する。

２．Ⅱ区

調査地中央部に位置する調査区で，国道438号線に西接する。本調査区も調査前は，３段の水田に造成されており，旧地割りに沿って調査区を２分割して調査を行った。東側水田２段分の調査区をⅡａ区，西側水田部分の調査区をⅡｂ区と呼称する。Ⅱａ区の現地表面の標高は11.3～11.4m，Ⅱｂ区のそれは11.2m前後であり，北西方向に緩やかに傾斜する。

Ⅱａ区では，現地表面下0.4～0.6m，標高10.7m前後を下限に，層厚0.1～0.3m程度の現・旧耕土層（１～４層）の堆積が認められる。本層群は，地点によって最大５層程度に細分され，各層は概ね水平に堆積し，北に傾斜する落差0.1m程の数段の階段状を呈して検出され，数度に及ぶ耕地区画の更新を反映する。各層からの出土遺物が僅少なため，時期決定は根拠に乏しいが，最下位の耕土層についても近世を大きく遡ることはないだろう。なお，現地表面にみられる土地区画の位置は，これら旧耕土層にも概ね踏襲されており，現状の地割りが比較的古くまで遡る可能性が示唆された点は重要である。さらに，北壁の土層の観察によって，最下位の耕土層下面で，後述する包含層を切り込む連続した浅い溝状の落ち込みを確認した。幅0.2m，深さ0.1m程の断面皿状の小溝が，概ね１m間隔で配されており，形状よりスキ溝の可能性が考えられる。調査中にこれら溝群の存在に気付かなかったため，残念ながら溝群の平面的な調査については，充分なデータが得られていない。

現・旧耕土層の下位には，３層に細分される包含層が検出された。

上位層（２面包含層・第11図８層）は，層厚0.1～0.3m程度を測り，Ⅱａ区南西隅で標高10.8m前後を，同北東隅で標高10.6m前後を下限に，緩やかに北東方向に傾斜して堆積

する。本層下面より古代の基幹水路ＳＤ135が掘り込まれると判断したが，調査区東壁面の観察では，本層と同溝埋土は漸移的に変化して層界は極めて不明瞭であり，同溝埋土より連続する土層として本層を捉えることも可能であった。図面では，同溝上面に堆積した独立した包含層として図示したが，本来的にはあるいは同溝上層に連続する土層と捉えることも可能である。いずれにしろ，同溝の最終埋没段階で堆積した，Ⅱａ区東半部の低地部分を埋める自然堆積層と考えられる。なお，本層は前記したⅠ区１ｂ面包含層（Ⅰ区19層）とやや色調は違えるが近似しており，同一層の可能性が考えられる。

中位層（２面包含層・第11図32層）は，旧流路状遺構ＳＸ19に起因する堆積層である。ＳＸ19は，Ⅱａ区中央を東西に横断して検出され，包含層はその南北両岸部を，0.1～0.2ｍの層厚で，ＳＸ19中層より連続してほぼ水平に広く堆積する。本層を包含層と捉えるか，ＳＸ19埋土の一部とするかは判断にやや躊躇したが，本層下面でＳＸ19の明確な立ち上がりを確認したため，一応包含層と判断し遺物の取り上げを行った。

下位層は，縄文時代晩期包含層Ⅳ層（第11図37層）である。包含層Ⅳ層は，Ⅱａ区北東隅で層厚１ｍ程を，南部で0.3ｍ程を測り，北東方向に緩やかに傾斜して堆積する。同層に連続する下位の灰黄褐色～灰色粘土～砂質土～中砂層も，北東方向に傾斜して堆積し，同一環境下で短期間内に堆積した可能性が想定される点はⅠ区での状況を追認する。

Ⅱｂ区での基本的な土層堆積状況は，Ⅱａ区と若干様相を異にする。Ⅱｂ区では，現地表面の標高はⅡａ区と比して0.2ｍ前後低く，浅い低地状を呈する。こうした状況は，基本的には後述する旧地形を反映している可能性がある。さて，耕作土下には，標高10.6～10.7ｍを下限として，層厚0.1～0.2ｍの11層程度に細分される連続した旧耕作土の水平堆積が認められる。旧耕土層には0.1ｍ程の段状を呈する部分もあり，現状の地割りもさらに細分されていたことが窺えた。旧耕土層下位は，旧流路状遺構ＳＸ20埋土となり，包含層の堆積は認められない。おそらく後世の耕地開発により削平されたのであろう。ＳＸ20の西肩にあたる調査区西端部では，旧耕土層直下で包含層Ⅳ下位層に相当するベース層が露出する。包含層Ⅳは，本調査区では北東隅部を除いてほぼ認められず，ＳＸ20によるベース面の下刻や後世の削平により消失したものと判断された。

３．Ⅲ区

調査地西端に位置する調査区である。段丘Ⅱ面に東接し，調査区西端が段丘崖となる。現地表面の標高は，11.6ｍ前後であり，Ⅱｂ区とは0.4ｍ程の比高差を有する。土層の堆

積状況は，前記Ⅰ・Ⅱ区とは異なり，段丘崖縁辺に位置することから段丘２面の影響を色濃く認める。

現耕作土下には，最大３層に細分される旧耕作土が水平堆積する。旧耕作土は，調査区南壁面では標高11.3mを下限とし，北壁面では同様に11.0mを下限としており，調査区内で0.3m程の比高を有する。また，最下位の旧耕土層（第13図７層）は，調査区の北東隅部でのみ確認された。これら旧耕土層は調査区内で一様ではなく，各壁面の観察で北東方向に傾斜する３～４単位の水平堆積として確認され，おそらくは近世以降のそう遠くない過去において，頻繁に水田区画が更新され，現在に至ったことを示している。

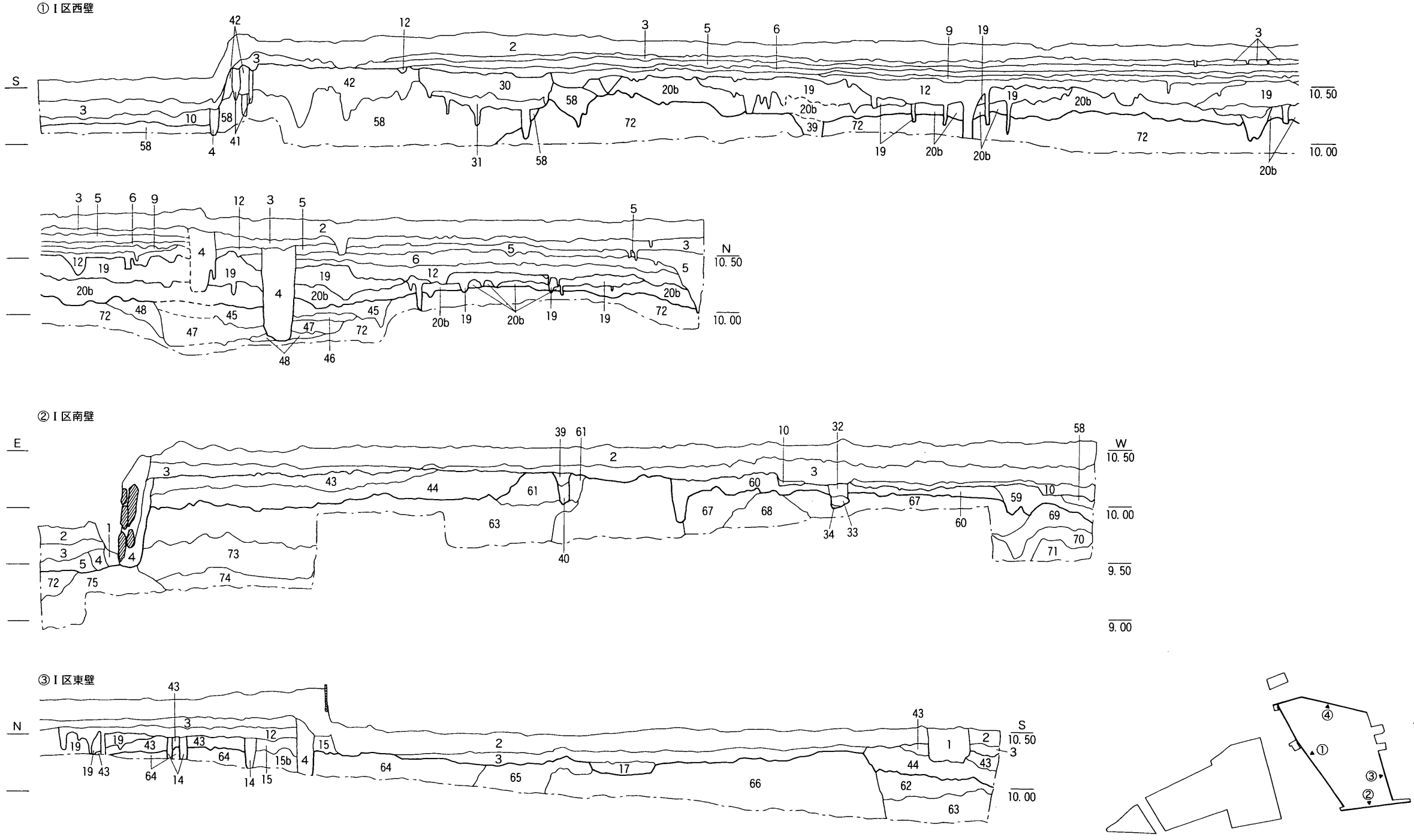
この旧耕土層下位には，中世以前の遺物を包含する灰色砂質土（第13図８層）が，僅かに東に傾斜して堆積する。この包含層下面で，掘立柱建物２棟他で構成される中世集落を検出した。したがって本遺構面を第１遺構面ａ（以下，１ａ面と略す）とし，上記包含層を包含層Ⅰと呼称する。１ａ面は，調査区西端で標高11.1m前後を，調査区東端で同10.9m前後を測り，緩やかに東に傾斜する。包含層は，遺構面上面を広く覆って堆積しており，基本的には遺構面上の土壌化層と考えられる。

１ａ面のベースとなる灰～黄褐色系砂質～粘質土（第13図10～26層）は，複雑な土層堆積を呈しており，安定した環境下での堆積状況を示していない。しかし，概ね東に傾斜する斜面堆積層として本層群を捉えることができ，おそらく調査区西側の段丘２面から土壌の供給を受けつつ，削平・流出・堆積を繰り返しながら形成されたものと考えられる。この点で，前記Ⅰ・Ⅱ区でみられた主に旧大東川の洪水堆積による土層形成とは大きく異なる。これら斜面堆積層のうちいくつかの土層では，断面観察によって遺構埋土の可能性のある土層の落ち込みが認められた（例えば，第13図21・23層）。しかし，落ち込み上面が安定した遺構面として捉えることができず，平面的な調査は行えていない。なお，本層群の下面は，同様に斜面堆積をみせる土層（第13図27・29・30層）が，明らかに人為的に削平・整地され平坦面を作出しており，本層群下面を遺構面として捉える。本遺構面を第１遺構面ｂ（以下，１ｂ面と略す）とし，上記包含層を１ｂ面包含層と呼称する。１ｂ面包含層からは，中世以前の遺物が少量出土しており，遺構面上で明確な遺構は確認されなかったが，本遺構面が少なくとも中世以前に位置付けられるものと判断された。おそらく遺構は，調査区北側の対象地外に展開するものと考えられる。１ｂ面は，調査区西端で標高10.9m前後を，北東隅で10.6m前後をそれぞれ測り，緩やかに北東方向に傾斜する。

さらに，１ｂ面のベースとなる27～30層を除去すると，同様に安定した平坦面が検出さ

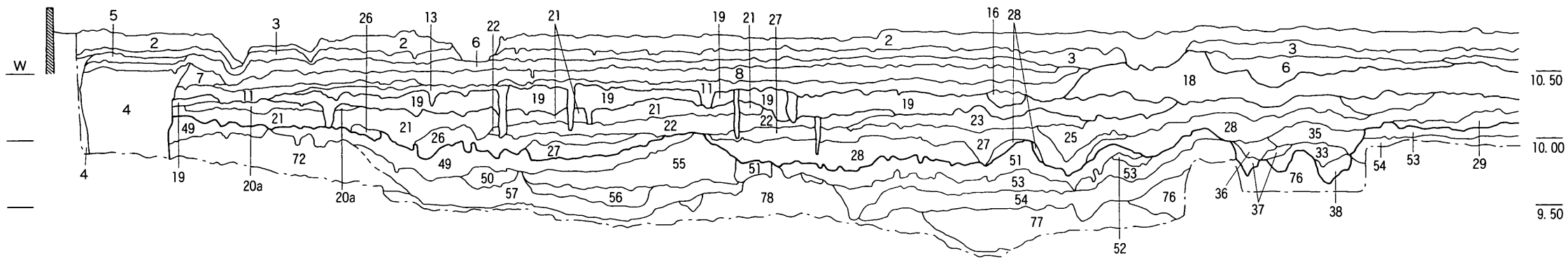
れ，柱穴・溝等の遺構が検出された。本遺構面を第２遺構面（以下，２面と略す）とし，上記包含層を包含層Ⅱとする。包含層Ⅱからは，少量の古代を下限とする遺物が出土している。２面は，調査区西端で10.7m前後を，北東隅で10.3m前後をそれぞれ測り，他の遺構面と比してやや強く北東方向へ傾斜する。

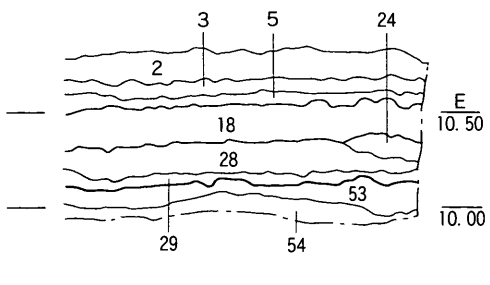
２面のベースとなる32層以下の堆積層は，緩やかに北東方向に傾斜して堆積する。いずれも灰色系の粘土～シルト～粗砂が，下位に下るに従い漸移的に砂層に変化しながら堆積しており，Ⅰ・Ⅱ区でみられた包含層Ⅳ下位の段丘Ⅰ面基盤層に相当すると考える。しかしながら，本調査区においても包含層Ⅳの堆積は認められず，上位の包含層や遺構より当該期の遺物が少量ながら出土していることなどから，後世の削平等により消失したものと判断した。



第９図　Ⅰ区土層断面図１（天地１/40・左右１/160）

④ I区北壁

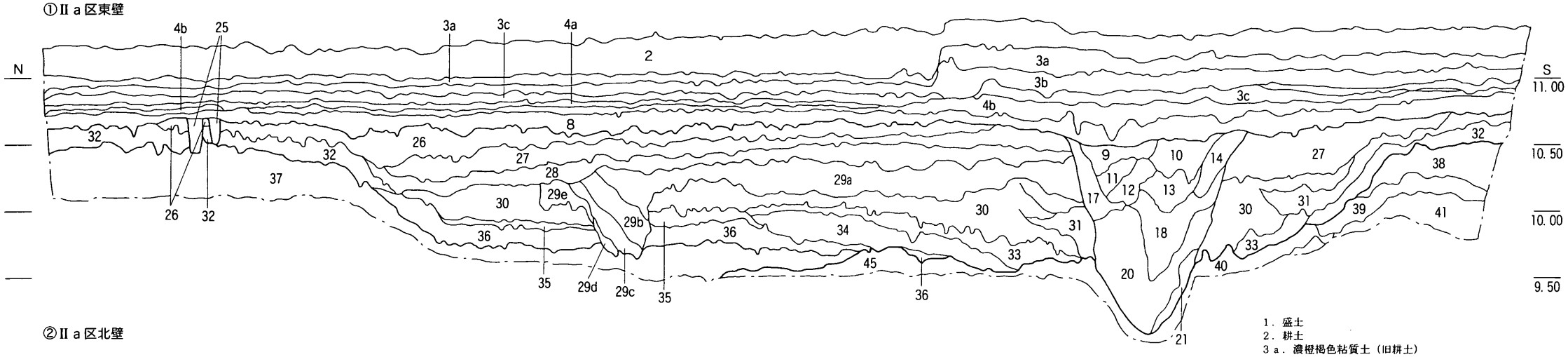




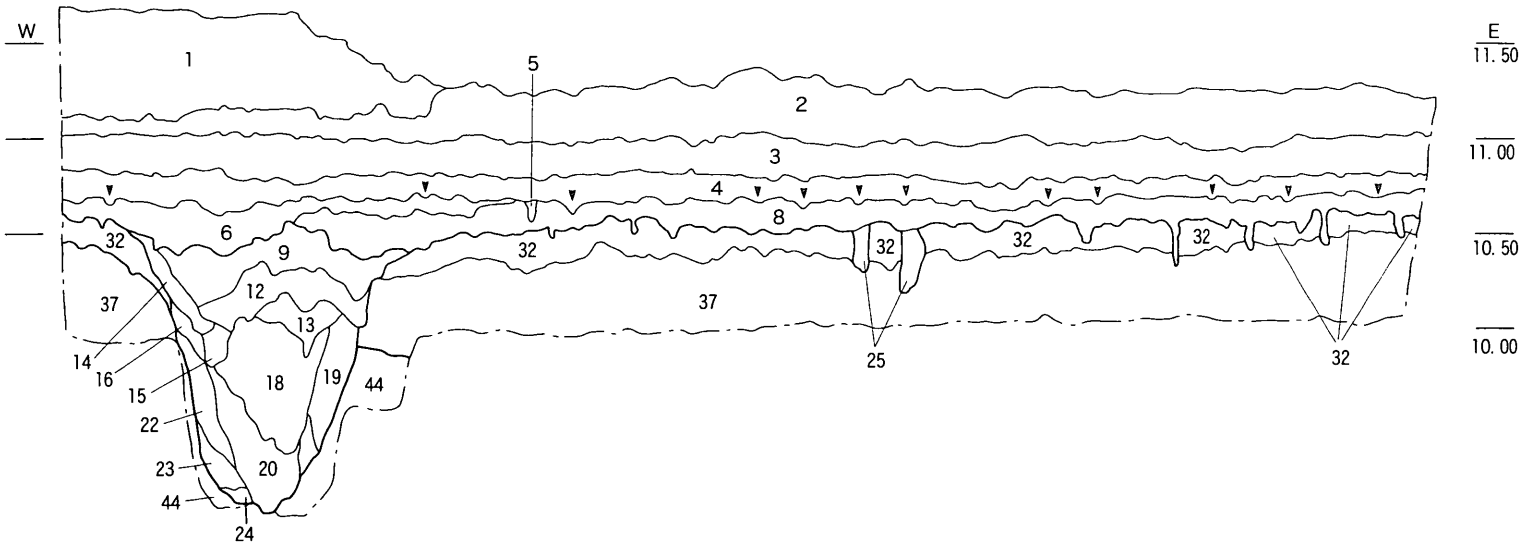
1．攪乱
2．耕作土
3．床土
4．攪乱
5．旧耕土
6．旧耕土
7．旧耕土
8．旧耕土
9．淡灰色シルト質粘質土（Mn含，旧耕土？）
10．灰褐色粘質土（Mn含，旧耕土？）
11．灰褐色粘質土（Mn含，１ａ面包含層）
12．灰橙色粘質土（Mn・42層小ブロック含，１ａ面包含層）
13．濃灰褐色粘質土（Mn・炭片・焦土・19層小ブロック含，１ａ面包含層）
14．暗茶褐色粘質土（Mn・炭片含）
15ａ．暗灰橙褐色粘質土（Mn含，ＳＸ04埋土）
15ｂ．暗灰茶褐色粘質土（Mn・炭片含，ＳＸ04埋土）
16．灰色粘質土混灰黄褐色粘質土（Mn含，中世遺構埋土）
17．濃灰橙褐色粘質土（Mn含，ＳＤ26埋土）
18．明灰黄色粘質土（Mn・炭片含，１ｂ面包含層）
19．淡灰黄色粘質土（Mn含，１ｂ面包含層）
20ａ．暗褐色粘質土（Mn含，２面包含層）
20ｂ．暗橙褐色粘質土（Mn含，２面包含層）
21．明灰黄色粘質土（Mn含，２面包含層）
22．暗灰褐色粘土（Mn含，２面包含層）
23．灰茶褐色粘質土（Mn・Fe含，２面包含層）
24．暗灰黄色粘質土（Mn含）
25．暗灰橙褐色粘質土（Mn含，２面包含層）
26．暗灰褐色粘土（Mn・Fe含，２面包含層）
27．暗灰褐色粘土（Mn含，２面包含層）
28．灰茶褐色粘質土（Mn・黒色粘土小ブロック含，２面包含層）
29．灰黄褐色粘質土（Mn含，２面包含層）
30．濁灰黄褐色粘質土（Mn・炭片・42層小ブロック含，ＳＨ01埋土）
31．濁灰褐色粘質土（Mn・炭片・58層小ブロック含，ＳＨ01埋土）
32．灰橙褐色粘質土（Mn含，ＳＤ129埋土）
33．灰色中砂（ＳＤ129埋土）
34．暗灰褐色粘土（ＳＤ129埋土）
35．濁茶褐色粘質土（Mn・炭片含，ＳＤ129埋土）
36．灰褐色粘質土（灰橙色シルト・黒色粘土小ブロック含，ＳＤ129埋土）
37．灰色粘土（灰橙色シルト・黒色粘土小ブロック含，ＳＤ129埋土）
38．灰色粘土（Mn含，ＳＤ129埋土）
39．灰オリーブ色粘質土（ＳＤ128埋土）
40．灰黄褐色粘質土（Mn含，ＳＤ128埋土）
41．暗茶褐色粘質土（Mn・58層ブロック含，古代？柱穴埋土）
42．暗褐色粘質土（Mn含，包含層Ⅲ？）
43．黒褐色粘土（Mn含，ＳＸ16埋土）
44．濁灰褐色粘質土（Mn・炭片含，ＳＸ16埋土）
45．濁暗灰黄褐色砂混粘土（Mn含，自然流路埋土）
46．黒褐色粘土（Mn・47層小ブロック含，自然流路埋土）
47．濁灰黄褐色粘土（Mn含，自然流路埋土）
48．黒褐色粘土（Mn含，自然流路埋土）
49．暗褐色粘土（Mn含，自然流路埋土）
50．黒褐色粘土（Mn含，自然流路埋土）
51．暗褐色砂混粘土（Mn含，自然流路埋土）
52．灰黄褐色粘土（Fe含，自然流路埋土）
53．黒褐色粘土（自然流路埋土）
54．灰色粘質土～粘土（Mn・Fe多含，自然流路埋土）
55．淡灰橙色シルト（Mn含，自然流路埋土）
56．淡灰橙色シルト・灰色粗砂ラミナ（自然流路埋土）
57．暗灰色粘土（Mn・Fe含，自然流路埋土）
58．明灰黄褐色粘質シルト（Mn含，包含層Ⅳ）
59．濁灰黄褐色粘質シルト（Mn含，包含層Ⅳ）
60．明灰黄色粘質シルト（Mn含，包含層Ⅳ）
61．濁灰黄褐色粘質土（Mn含，包含層Ⅳ）
62．灰黄褐色粘土（Mn含，ベース）
63．明灰黄色粘土（Mn含，ベース）
64．明黄褐色粘土（Mn含，ベース）
65．浪黄褐色細砂質シルト・濁橙褐色中砂混砂質土ラミナ（ベース）
66．灰黄色細砂・黄褐色～灰褐色中砂ラミナ，ベース
67．灰黄褐色粘質シルト（Mn含，ベース）
68．灰茶褐色粘質土（Mn含，ベース）
69．明灰橙色粘質シルト（Fe含，ベース）
70．灰色粘質シルト（暗灰色粘土小ブロック含，ベース）
71．淡青灰色砂質シルト（ベース）
72．灰色粘質シルト（Mn含，ベース）
73．灰～灰褐色中～粗砂（ベース）
74．黄褐色中～細砂（上面Fe沈着，ベース）
75．明青灰色中～細砂（ベース）
76．明灰橙色シルト（ベース）
77．灰色粘土・粗砂ラミナ（ベース）
78．灰色細砂～粗砂（ベース）

第10図　Ｉ区土層断面図２（天地１/40・左右１/160）

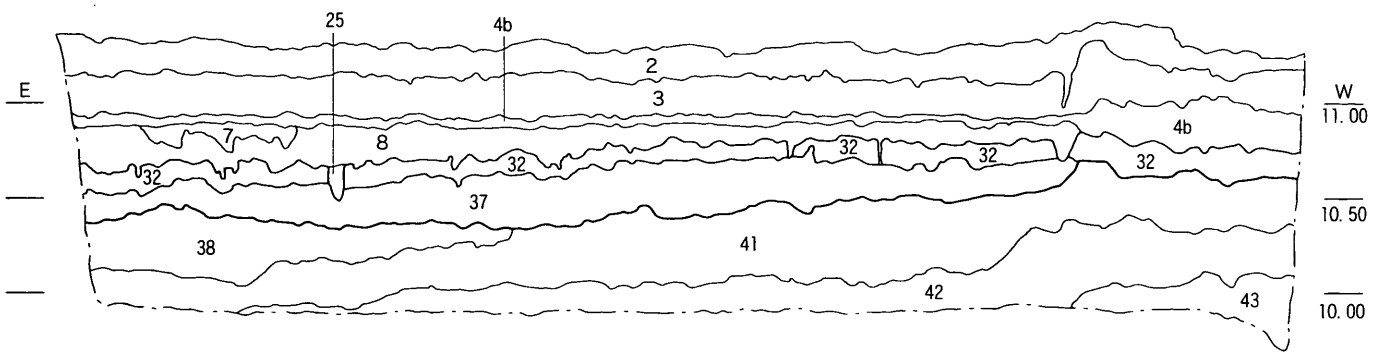
①II a 区東壁



②II a 区北壁



③II a 区南壁

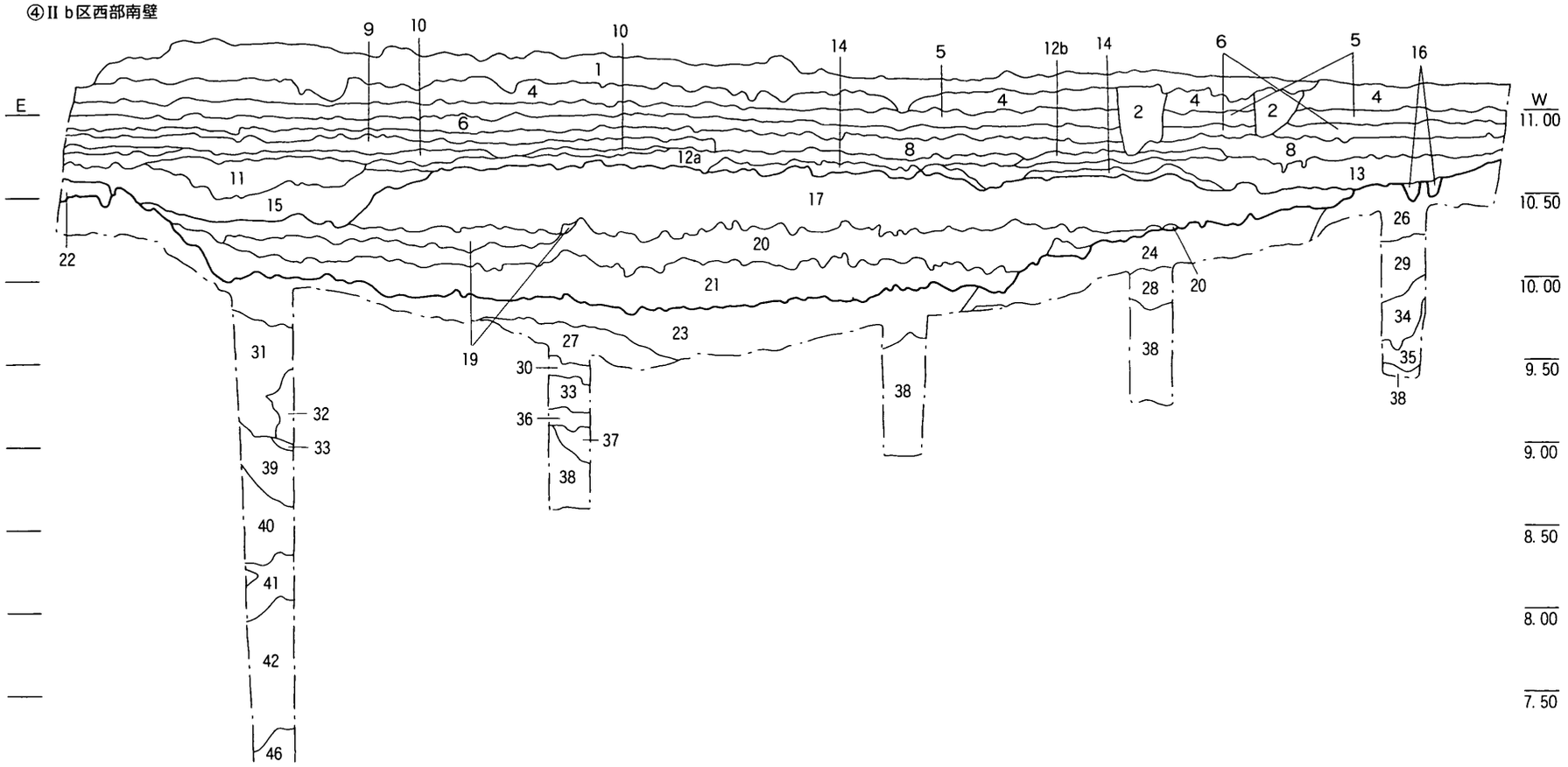


▼ 鋤溝

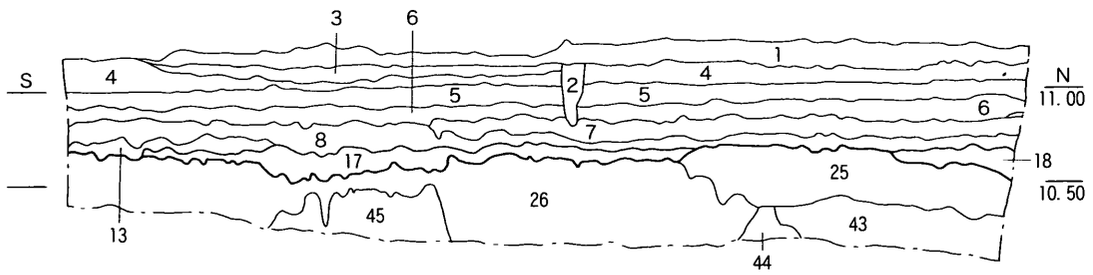
1．盛土
2．耕土
3a．濃橙褐色粘質土（旧耕土）
3b．灰黄褐色粘質土（旧耕土）
3c．淡灰黄褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
4a．灰橙褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
4b．濃灰橙褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
5．濃灰黄褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
6．明灰黄色砂混粘質土（Mn・Fe含，旧耕土）
7．濁褐黄色粘質土（Mn含）
8．濃灰橙褐色粘質土（Mn含，２面包含層）
9．灰橙褐色粘質土（Mn含，ＳＤ135最上層）
10．灰褐色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤ135最上層）
11．灰黄褐色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤ135最上層）
12．明灰黄色粘土（Fe沈着，ＳＤ135最上層）
13．灰色粘土・淡灰色シルト～細砂ラミナ（ＳＤ135上層）
14．濁灰橙褐色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤ135上層）
15．灰色砂混粘土（Fe少含，ＳＤ135上層）
16．灰黒色粘土（Fe含，ＳＤ135上層）
17．濃灰黄褐色砂混粘質土（Fe多含，ＳＤ135上層）
18．濃灰色砂混粘土（植物遺体多含，ＳＤ135上層）
19．灰色砂混粘土（ＳＤ135下層）
20．濃灰色砂混粘土（植物遺体含，ＳＤ135下層）
21．暗灰色粘土（植物遺体含，ＳＤ135下層）
22．濃灰色砂混粘土・灰色細砂ラミナ（ＳＤ135下層）
23．黒灰色砂混粘土（37層小ブロック含，ＳＤ135下層）
24．黒灰色粘土（植物遺体含，ＳＤ135下層）
25．濁灰黄褐色粘質土（Mn・37層ブロック含，柱穴埋土）
26．やや暗灰黄褐色粘質土（Mn含，ＳＸ19最上層）
27．灰黄褐色粘質土（Mn含，ＳＸ19上層）
28．濁灰黄褐色粘質土（Mn含，ＳＸ19中層）
29a．濁灰茶褐色粘質土（Mn・炭片含，ＳＸ19中層）
29b．灰色中砂・灰茶褐色粘質土ラミナ（ＳＸ19中層）
29c．灰色シルト・濃茶色粘土ラミナ（ＳＸ19中層）
29d．灰茶色粗砂（ＳＸ19中層）
29e．灰色粗砂（ＳＸ19中層）
30．灰茶褐色粗砂混粘質土（Mn含，ＳＸ19中層）
31．灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＸ19中層）
32．暗褐色粘質土（Mn・37層ブロック多含，ＳＸ19中層）
33．暗灰色粘土（ＳＸ19下層）
34．灰～灰茶色粗砂・灰色シルトラミナ（ＳＸ19下層）
35．濃茶褐色シルト質粘土（Fe沈着層，ＳＸ19下層）
36．黒褐色粘土（Fe含，ＳＸ19下層）
37．濁灰黄茶褐色粘質土（Mn含，包含層Ⅳ）
38．やや濃灰茶色粘質シルト（Mn・Fe含，ベース）
39．灰茶色粘質シルト（Mn含，ベース）
40．灰色粘土（Fe含，ベース）
41．灰黄茶褐色砂混粘質土（Mn・Fe含，ベース）
42．濃灰茶褐色砂質土（Mn・Fe含，ベース）
43．灰～青灰色砂質土（Fe含，ベース）
44．灰色中砂（ベース）
45．灰～黄灰色細～中砂（ベース）

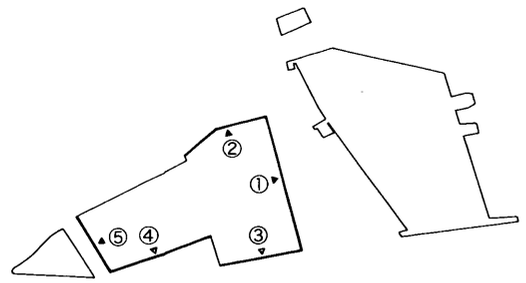
第11図　II a 区土層断面図（天地１/40・左右１/160）

④II b区西部南壁



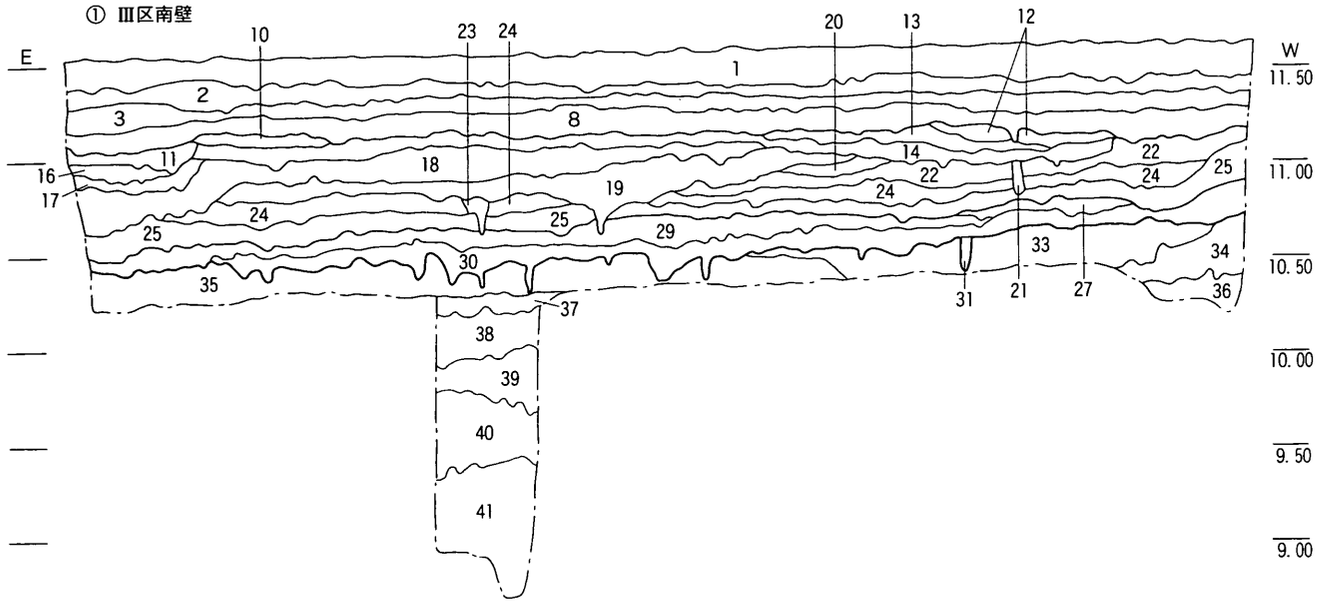
⑤II b西部西壁

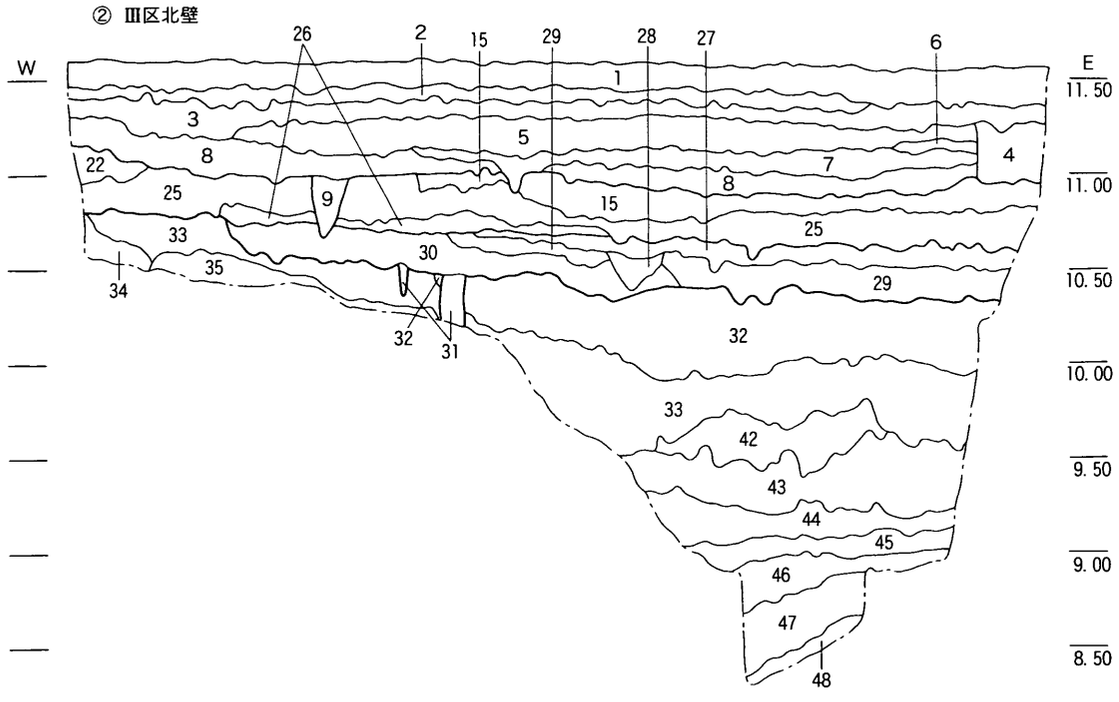




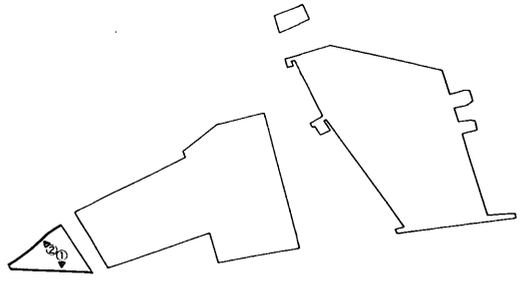
1. 耕土
2. 撹乱
3. 床土
4. 濃茶褐色粘質土（旧耕土）
5. 灰黄褐色砂質土（旧耕土）
6. 灰褐色粘質土（旧耕土）
7. 濃灰茶褐色砂質土（Fe含，旧耕土）
8. 濃灰橙褐色砂混粘土（Fe沈着，旧耕土）
9. 灰黄褐色粘質土（Fe含，旧耕土）
10. 灰橙褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
11. 明灰橙色粘土（Mn・Fe含）
12a. 灰黄褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
12b. 明灰黄色粘質土（旧耕土）
13. 濃灰橙色粘質土（Fe含，旧耕土）
14. 濃橙褐色粘質土（Fe沈着，旧耕土）
15. 濃灰黄褐色粘土（Mn・Fe含，２面包含層）
16. 濃茶褐色粘質土（炭片・焦土多含）
17. 灰色粘土（ＳＸ20上層）
18. 黒褐色砂混粘土（Fe含，ＳＸ20下層？）
19. 緑味灰色シルト（ＳＸ20上層）
20. 暗灰色砂混粘土（Fe含，ＳＸ20上層）
21. （ＳＸ20下層）
22. 黒茶褐色粘質土（ＳＸ19中層）
23. 灰色砂質シルト（ベース）
24. 灰黄色粘質シルト（Fe含，ベース）
25. 濁淡灰黄色砂質土（Fe含，ベース）
26. 淡灰黄色シルト質粘土（Mn・Fe含，ベース）
27. 濁灰色粘土（Fe含，ベース）
28. 濁黄灰色粘質シルト（Fe少含，ベース）
29. 濃灰黄褐色粘土（Fe含，ベース）
30. 淡青灰色シルト（ベース）
31. 青灰色粘質シルト（上面Fe沈着，ベース）
32. 青灰色シルト・細砂ラミナ（ベース）
33. 黒色粘土（植物遺体含，ベース）
34. 青灰色粘土混細砂（ベース）
35. 濁灰色細砂（ベース）
36. 淡灰黄色細砂（ベース）
37. 灰色中砂・黒色粘土ラミナ（ベース）
38. 淡灰黄色中～細砂（ベース）
39. 灰色細砂・粗砂ラミナ（植物遺体含，ベース）
40. 灰色粗砂・青灰色粘土ラミナ（植物遺体含，ベース）
41. 灰色細砂（黒色粘土・青灰シルトブロック含，ベース）
42. 淡灰黄色細砂（ベース）
43. 灰～青灰色中砂（ベース）
44. 濁灰黄色粘質土（砂多含，ベース）
45. 濁淡灰黄色中砂（Fe沈着，ベース）
46. 緑灰色砂質土（花崗岩風化バイラン土，ベース）

第12図　II b区土層断面図（天地１/40・左右１/160）





1．耕土
2．灰黄褐色粘質土（Fe含，床土）
3．明灰黄色砂質土（Fe含，旧耕土）
4．撹乱
5．灰茶褐色砂質土（Mn含，盛土）
6．濃黄褐色砂質土（Mn含・Fe沈着，旧耕土）
7．明灰橙色砂混粘質土（Fe含，旧耕土？）
8．灰色砂質土（Mn・Fe含，１ａ面包含層）
9．濃灰橙色粘質土（１ｂ面柱穴埋土）
10．濃黄褐色砂質土（Fe沈着，１ｂ面包含層）
11．灰橙色砂質土（Mn・Fe含，１ｂ面包含層）
12．灰黄褐色砂質土（Fe沈着，１ｂ面包含層）
13．灰黄色砂質土（Fe含，１ｂ面包含層）
14．灰橙色粘質土（Mn含，１ｂ面包含層）
15．濁暗灰黄褐色粘質土（Mn・炭片含，１ｂ面包含層）
16．濃黄橙色粘質土（Fe沈着，１ｂ面包含層）
17．灰色砂質土（濃黄色砂質土ブロック含，１ｂ面包含層）
18．灰色粘質土（Fe含，１ｂ面包含層）
19．暗灰色砂混粘土（Mn・炭片・20層小ブロック含，１ｂ面包含層）
20．濁灰黄褐色粘質土（Fe・炭片含，１ｂ面包含層）
21．灰橙色粘質土
22．淡灰黄橙色粘質土（Fe含，１ｂ面包含層）
23．濁灰黄褐色粘質土（Mn・25層ブロック含）
24．灰黄橙色砂質土（Fe含，１ｂ面包含層）
25．淡灰黄褐色砂質土（１ｂ面包含層）
26．濃橙褐色粘質土（Fe沈着，１ｂ面包含層）
27．灰褐色砂質土（Mn含，２面包含層）
28．暗灰茶褐色粘質土（Mn含）
29．暗灰褐色砂質土（Mn含，２面包含層）
30．濃灰茶褐色粘質土（２面包含層）
31．暗灰褐色粘質土（Mn含，柱穴埋土）
32．濁灰色砂質土（Mn含，ベース）
33．濁灰黄色砂質土（Fe含，ベース）
34．灰色中～粗砂（ベース）
35．淡灰黄色砂混粘土（ベース）
36．淡青灰色粘土（ベース）
37．淡灰黄色粘土（Mn含，ベース）
38．灰黄褐色粘土（Mn含，ベース）
39．灰橙色粘土（ベース）
40．青灰色シルト質細砂（ベース）
41．黄色細砂・シルトラミナ（ベース）
42．濁暗灰色粗砂（ベース）
43．濃青灰色細～中砂（ベース）
44．青灰色粘土（植物遺体含，ベース）
45．青灰色粘土（ベース）
46．青灰色粘土（ベース）
47．暗灰色粘土（植物遺体多含，ベース）
48．灰色粗砂（ベース）



第13図　Ⅲ区土層断面図（天地１/40・左右１/160）

第2節　縄文時代の遺構・遺物

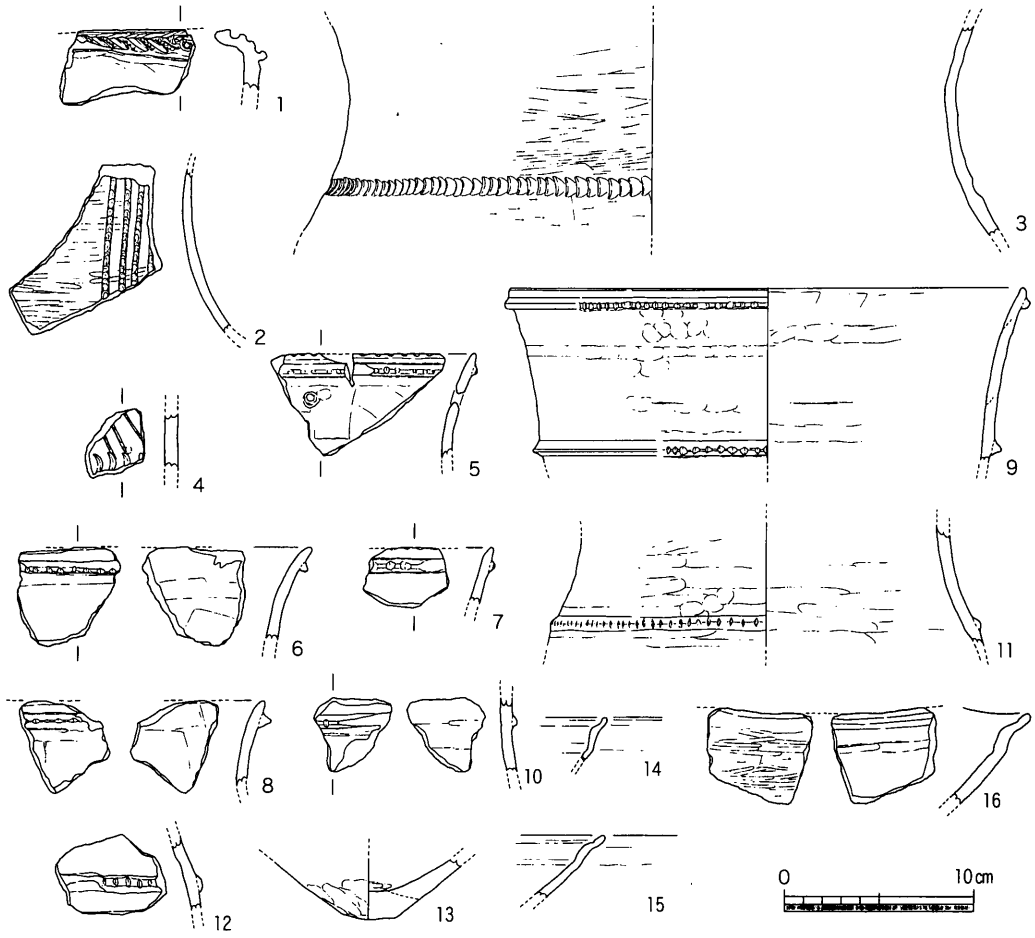
概要

当該時期の明確な遺構は確認されておらず，前節で記述したように，旧大束川の氾濫堆積層と考えられる包含層Ⅳより当該時期の若干量の遺物が出土したに限られる。土層の堆積状況については，前節に詳述したことから，以下では出土した遺物についてのみ記載する。

出土遺物（第14～27図）

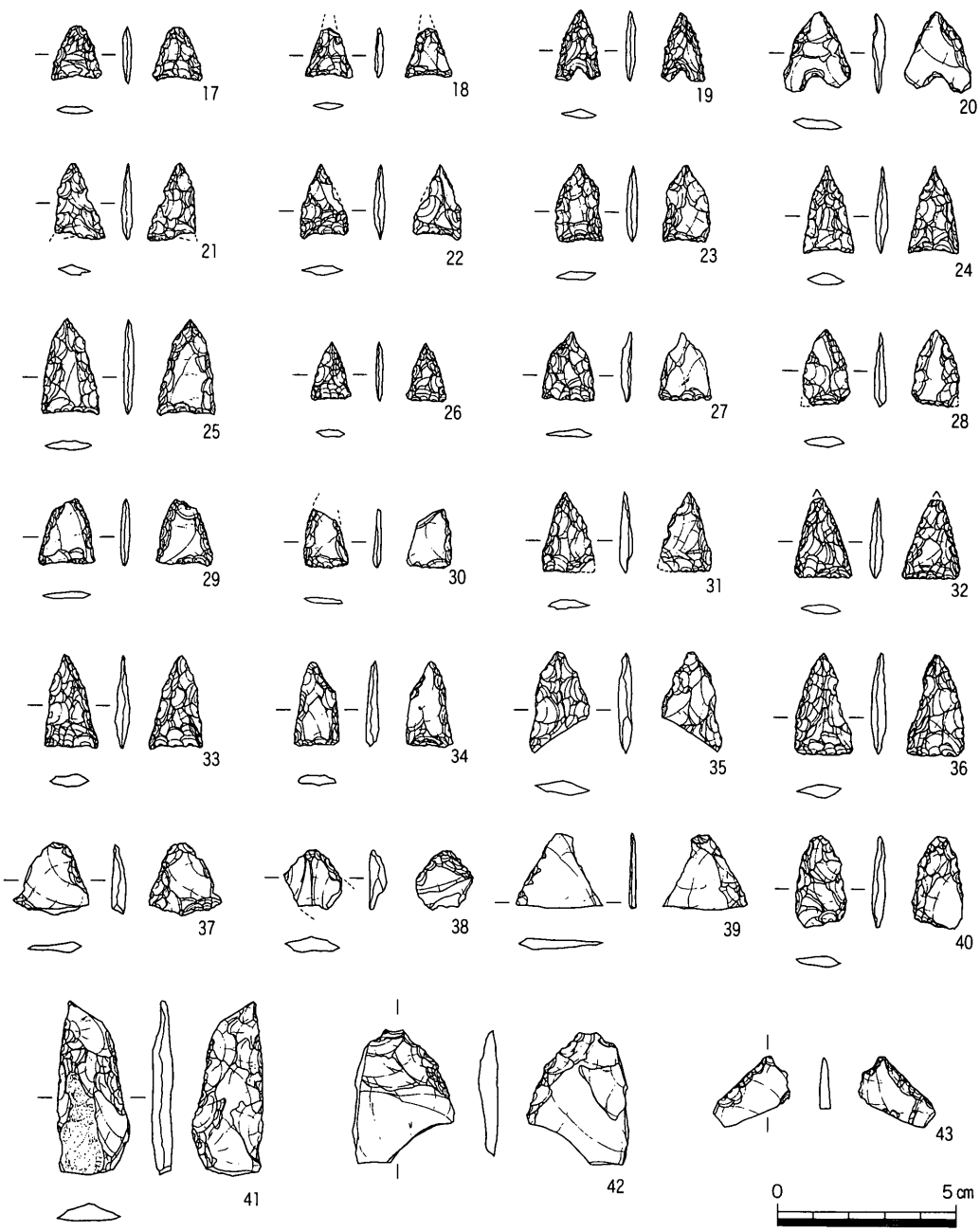
1は，波状口縁を有する縄文後期に遡る深鉢である。口縁端部は，内上方に大きく拡張され，端面は沈線の下に渦巻及び重弧状の文様で装飾し，間隙を縄文で埋める。2は，外反する口縁部の小片で，外面には半裁竹管の押引による2列4条の垂下沈線を施す。3は，深鉢の口頸部片。おそらく2と同一個体となるものと考えられる。口頸部下端には爪形文を巡らし，体部は横方向のヘラ削り調整が施される。4は，深鉢口縁部小片。外面には爪形文と，斜交沈線を認める。以上2～4は，縄文晩期中葉頃に位置付けられる。5～9は，口縁端部外面に刻目突帯を有する深鉢である。いずれも口縁部は緩やかに外反しつつ開く。端部は基本的に丸く納めつつ，5では端部に刻目を施す。突帯はいずれも突出度の高いもので，刻目は細く浅い。5は，口縁部に補修孔とみられる径0.5cmの円孔が穿たれる。9は，口頸部下端に刻目突帯を有する。10～12は，胴部突帯の小片である。口頸部は緩やかに外反して開く。13は，唯一の底部の小片で，やや突出気味の小さな平底を呈する。14～16は，浅鉢口縁部の小片である。15・16は波状口縁となる。いずれも器表面は剥離が顕著だが，16の外面には辛うじて横方向のミガキ調整を認める。以上，5以下の突帯文系土器は，晩期突帯文最末期に位置付けられる。

17～145・148～150は，サヌカイト製の石器である。そのうち，25・48・49・52・63・67・70・73・77・88・100・113・123・124・128・137・139・146の18点については，Ⅱa区本層上面を精査途中で出土したものであり，やや出土状況に問題があるため，ここでは積極的に評価せず参考資料として掲載するにとどめておきたい。17～25は，凹基式の石鏃である。基部の抉りの浅い形態（17・18・21～25）と，強く基部が抉られる形態（19・20）



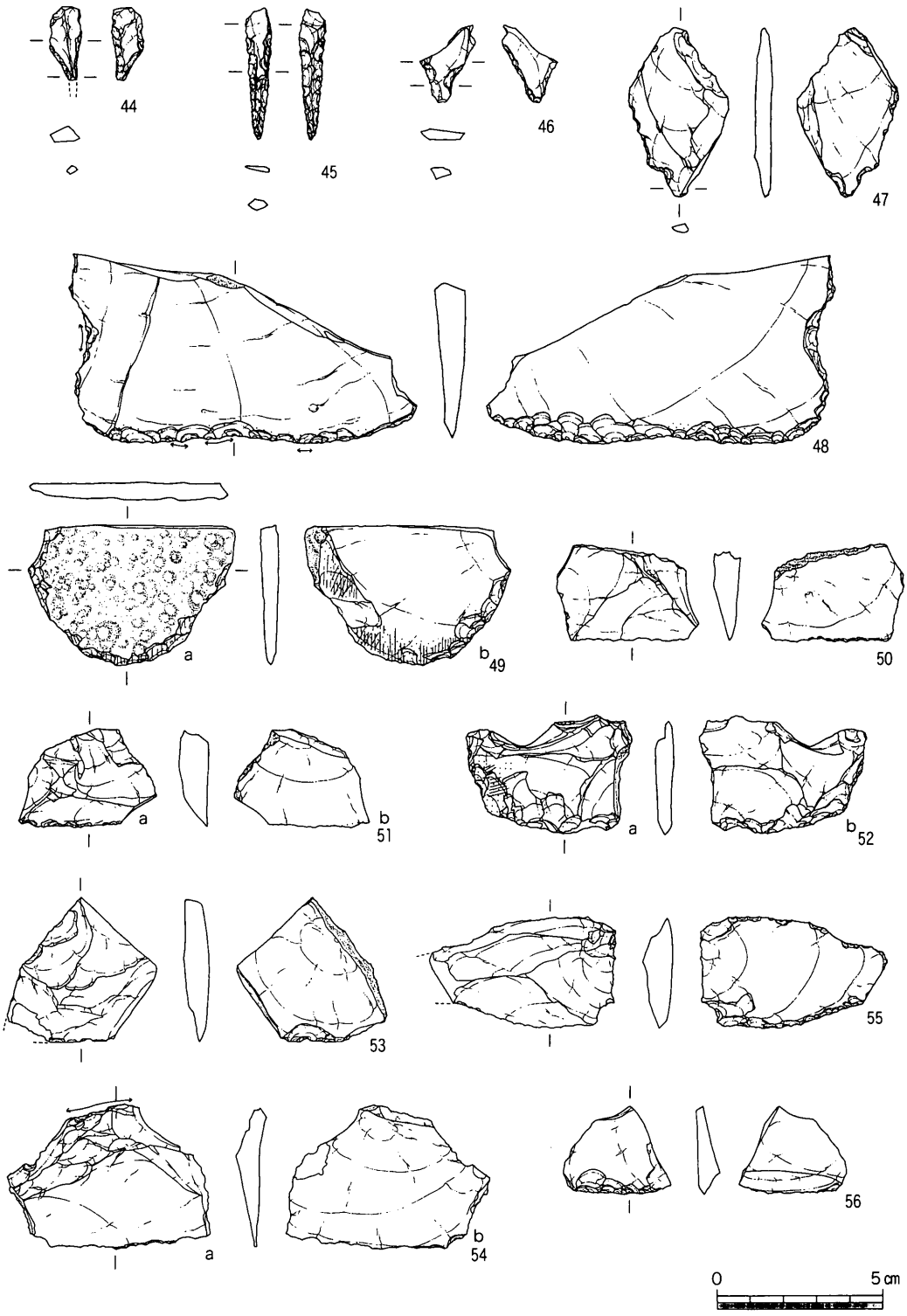
第14図　包含層Ⅳ出土遺物実測図１（１/４）

の２種がある。また，前者は鏃身長1.5cm程度の小形の形態（17・18）と，2.0cmを超える中形の形態（21～25）に細分される。23は，ややいびつながら五角形状を呈する。26～34・36は，平基式の石鏃である。鏃身長1.5cm程度の小形の形態（26）と，2.0～3.0cmの中形の形態（27～34・36）に分類される。34は，やや形がいびつで，調整加工が粗いことから未製品の可能性もある。37～43は，周縁に細かな調整加工を加えて，先端部の尖った三角形状の製品を製作する意図が窺えることから，石鏃未製品とした。44～47は，石錐である。44は，基部断面が三角形状を呈する石錐で，細長い柱状の素材の周縁に，調整加工を施して機能部とする。45は，基部と機能部が未分化な形態。僅かに先端部が摩滅する。46は，扁平な素材の周縁を抉り込んで機能部とする。44とは，素材の選択方法が異なる。47は，下端両側に調整加工が施され，僅かな突起部が作出されることから石錐としたが，石鏃の未製品の可能性もある。48は，側縁に抉りがみられる打製石庖丁である。刃縁部は僅かに

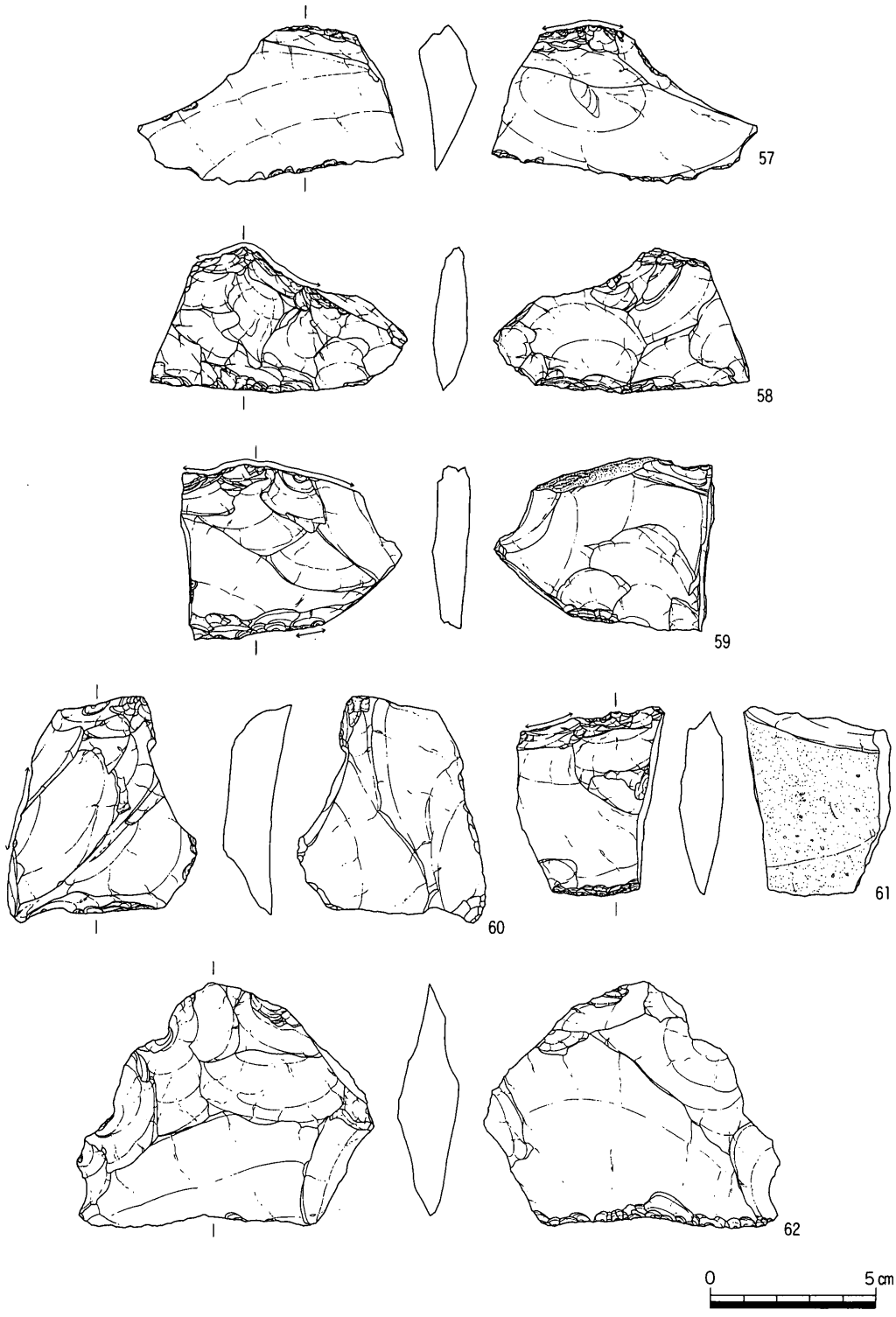


第15図　包含層Ⅳ出土遺物実測図２（１/２）

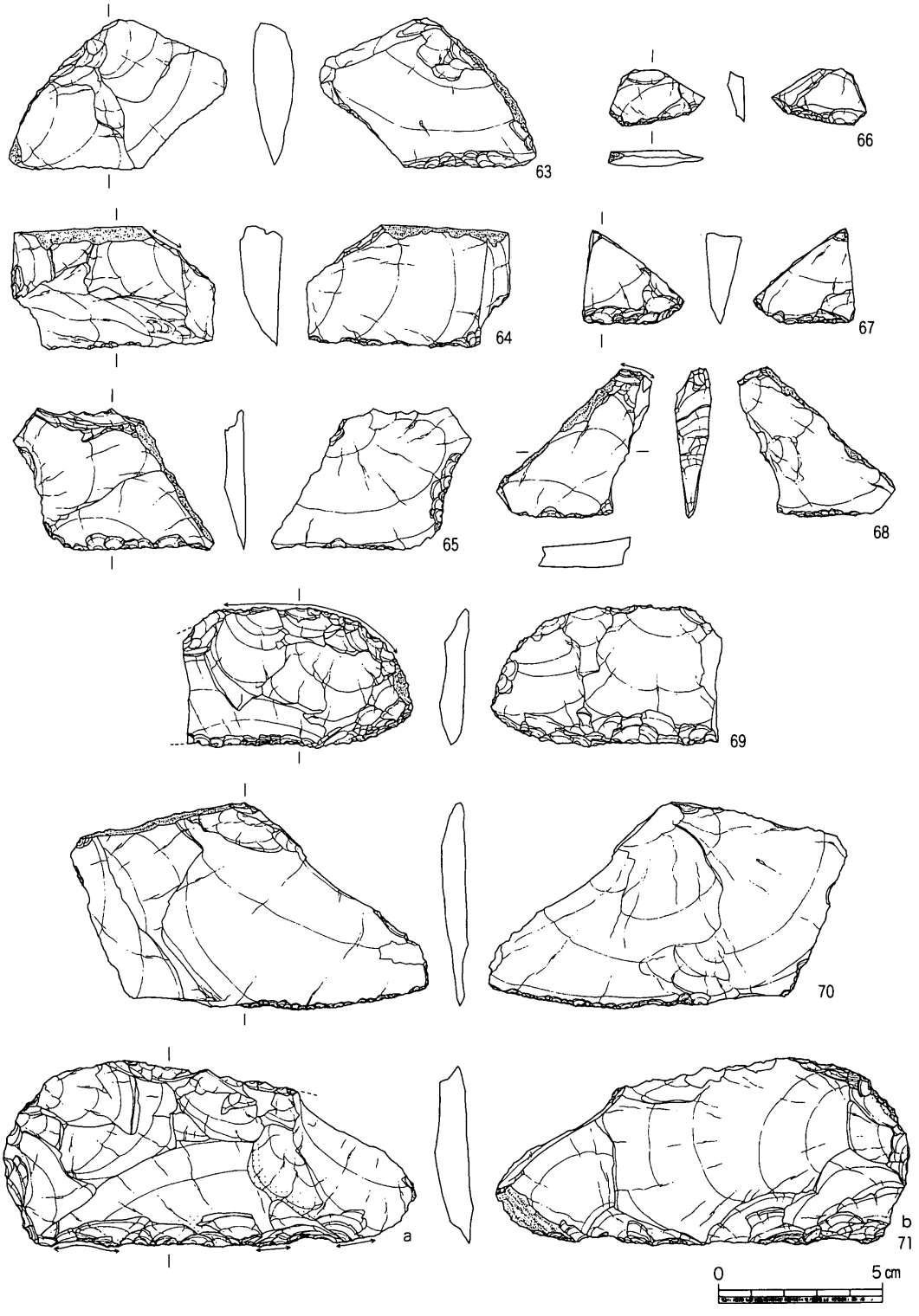
摩滅痕が認められ，刃部調製はそれら摩滅痕を切って施される。49は，打製石斧の刃部片である。ａ面には自然面が多く残され，周縁の加工のみで製作する。表裏面には，強い摩滅痕と方向の異なる線条痕を認める。50～73は，直線状の刃部を有するスクレイパーである。50～63は，片面若しくは片面交互の刃部加工が，64～73は両面からの刃部加工が施さ



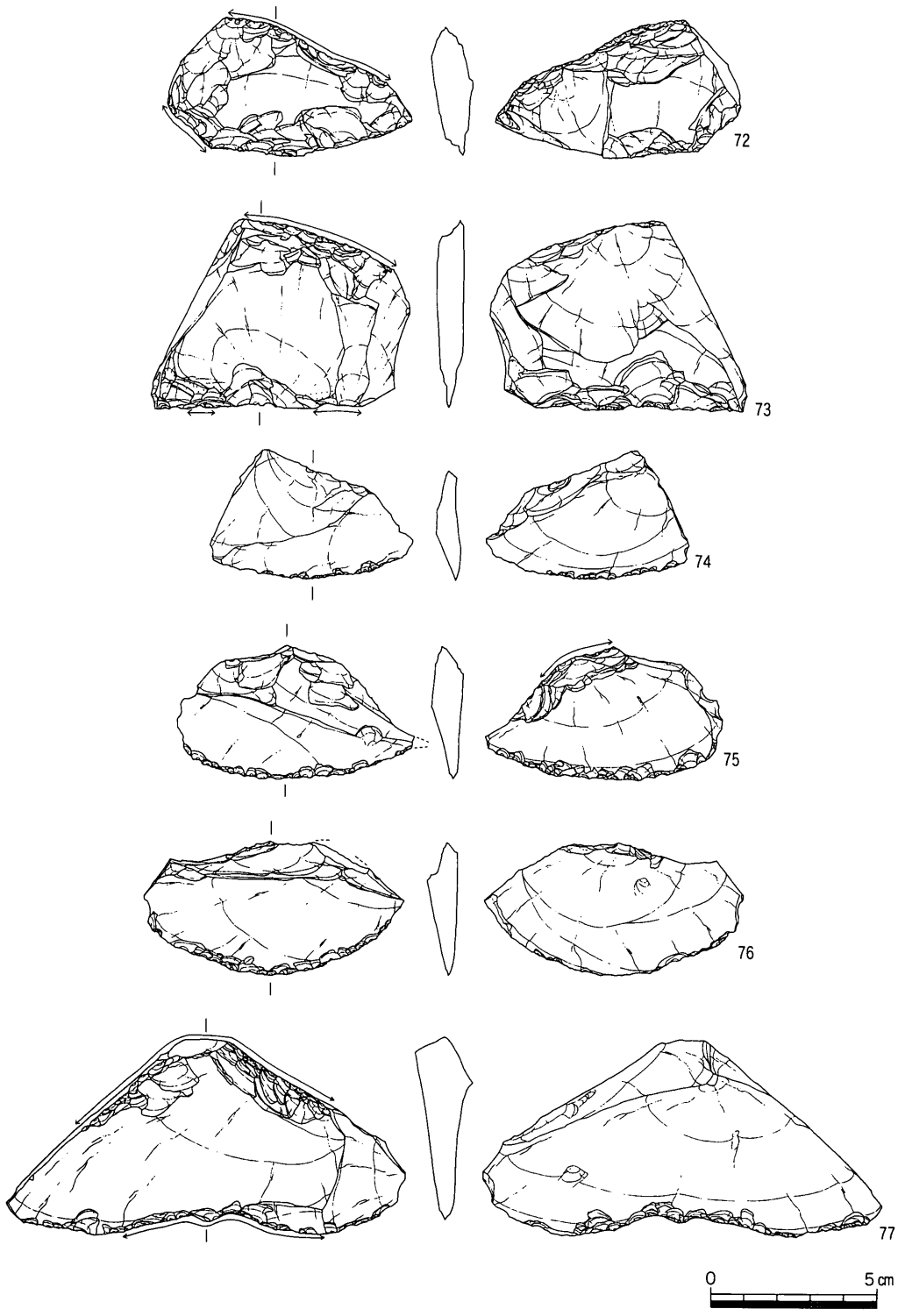
第16図　包含層Ⅳ出土遺物実測図３（１/２）



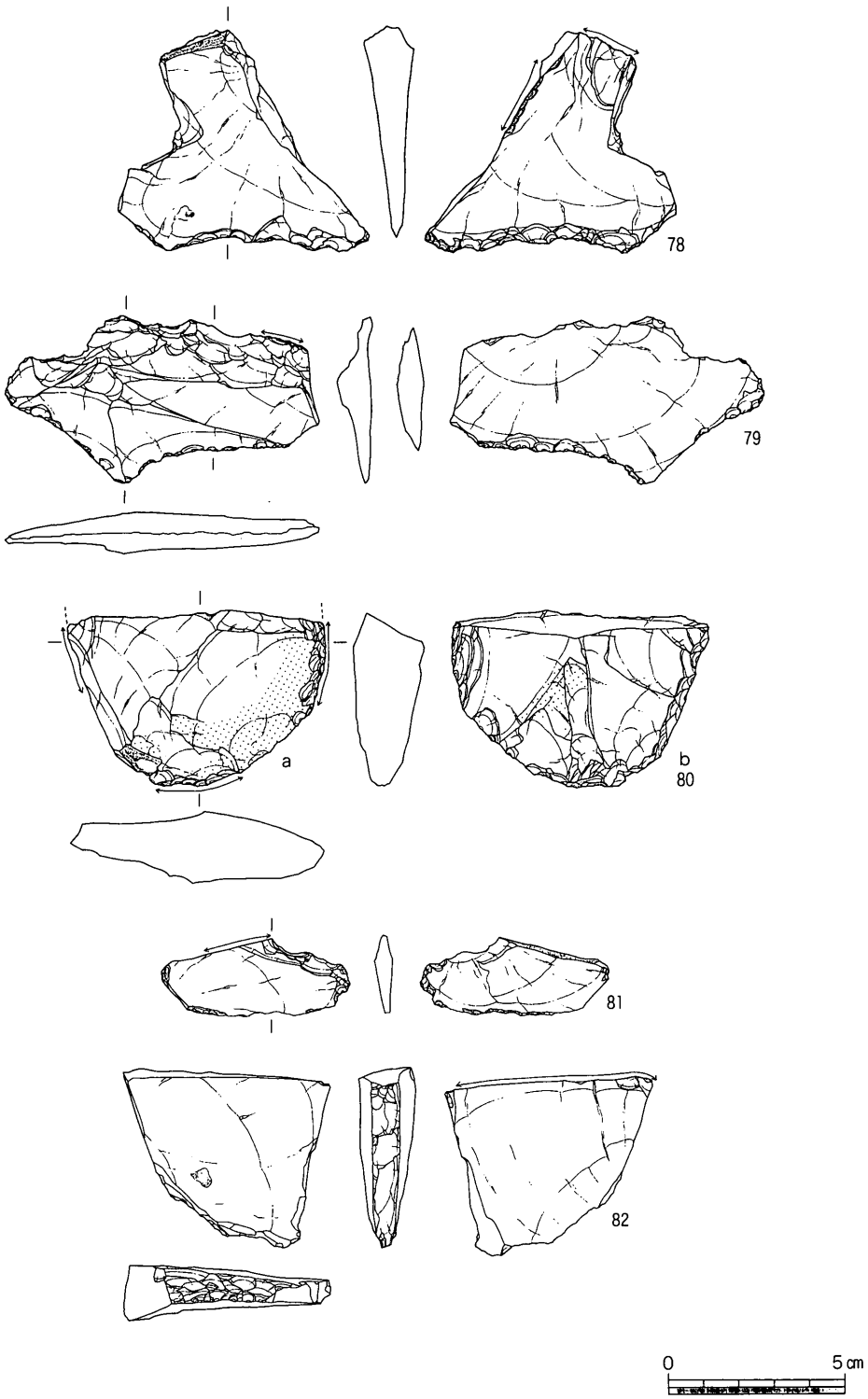
第17図　包含層Ⅳ出土遺物実測図４（１/２）



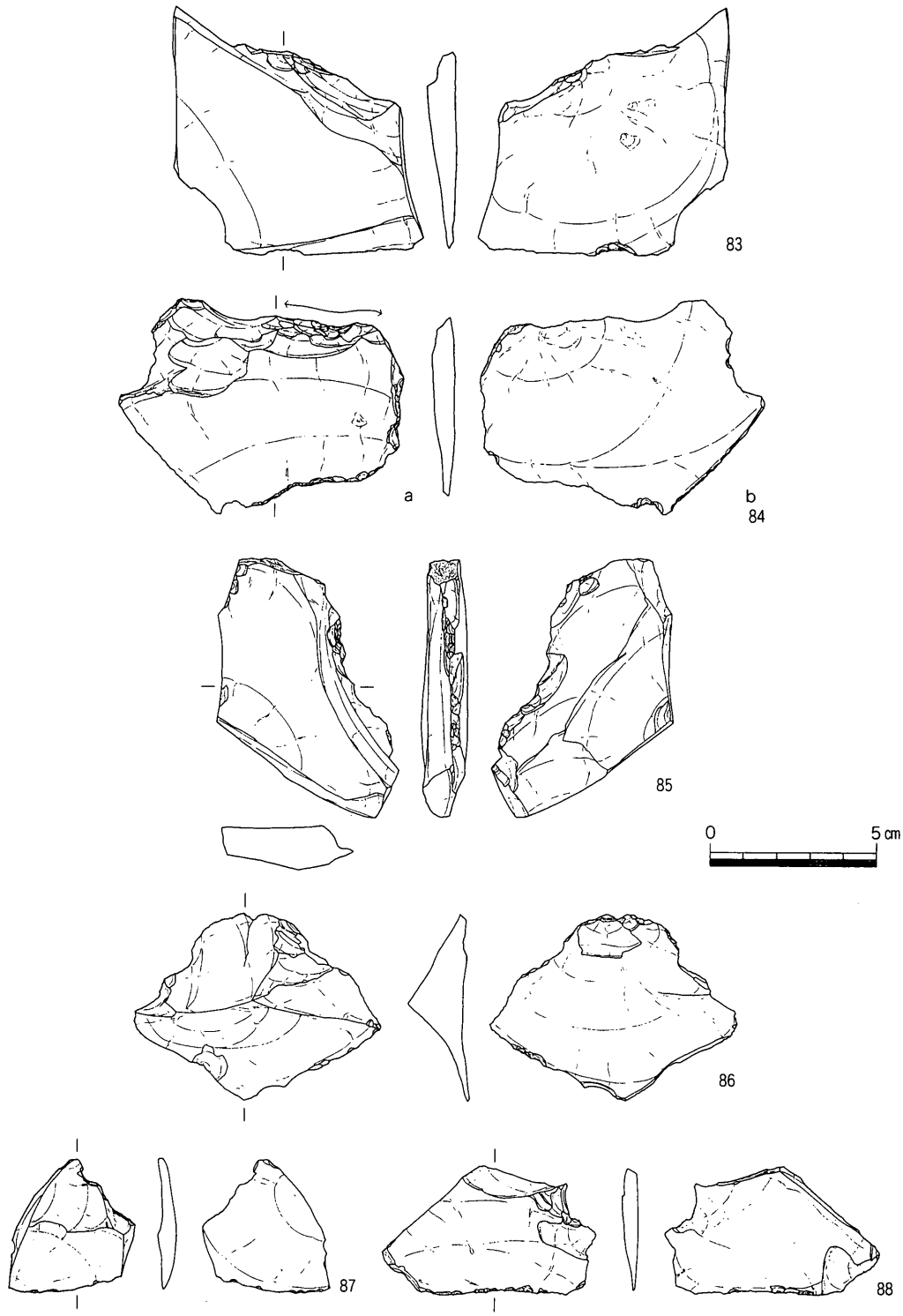
第18図　包含層Ⅳ出土遺物実測図５（１/２）



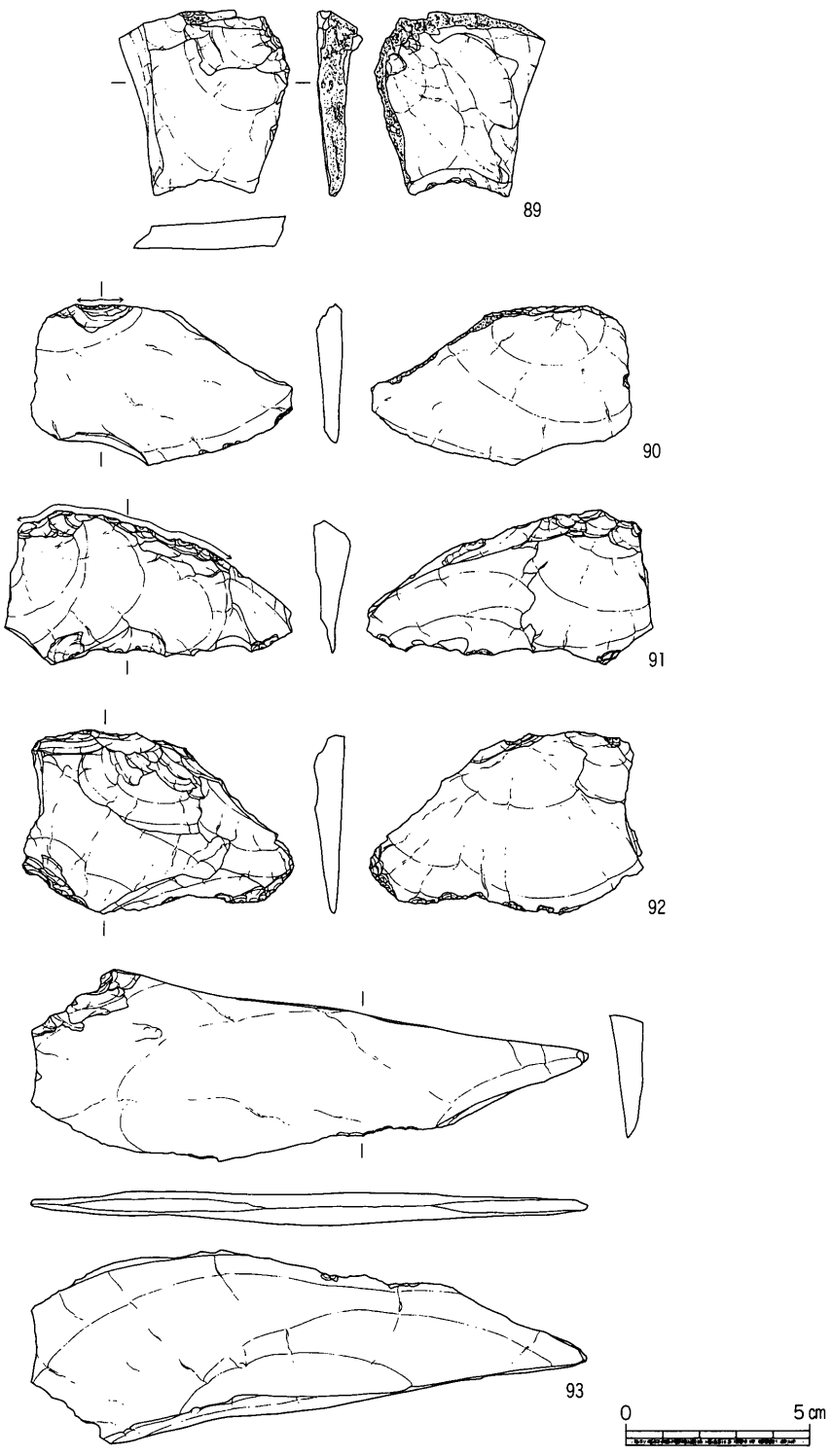
第19図　包含層Ⅳ出土遺物実測図６（１/２）



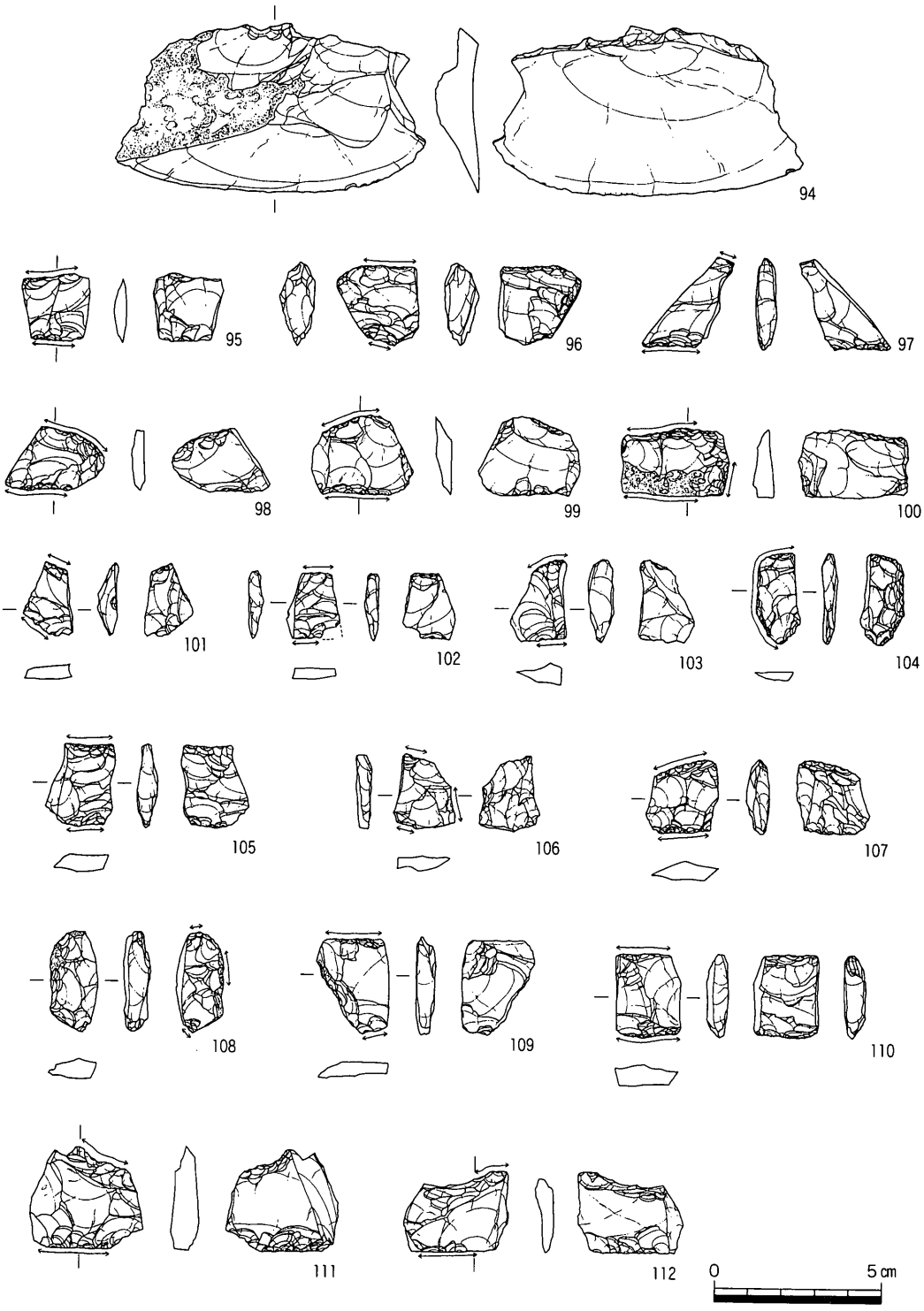
第20図　包含層Ⅳ出土遺物実測図７（１/２）



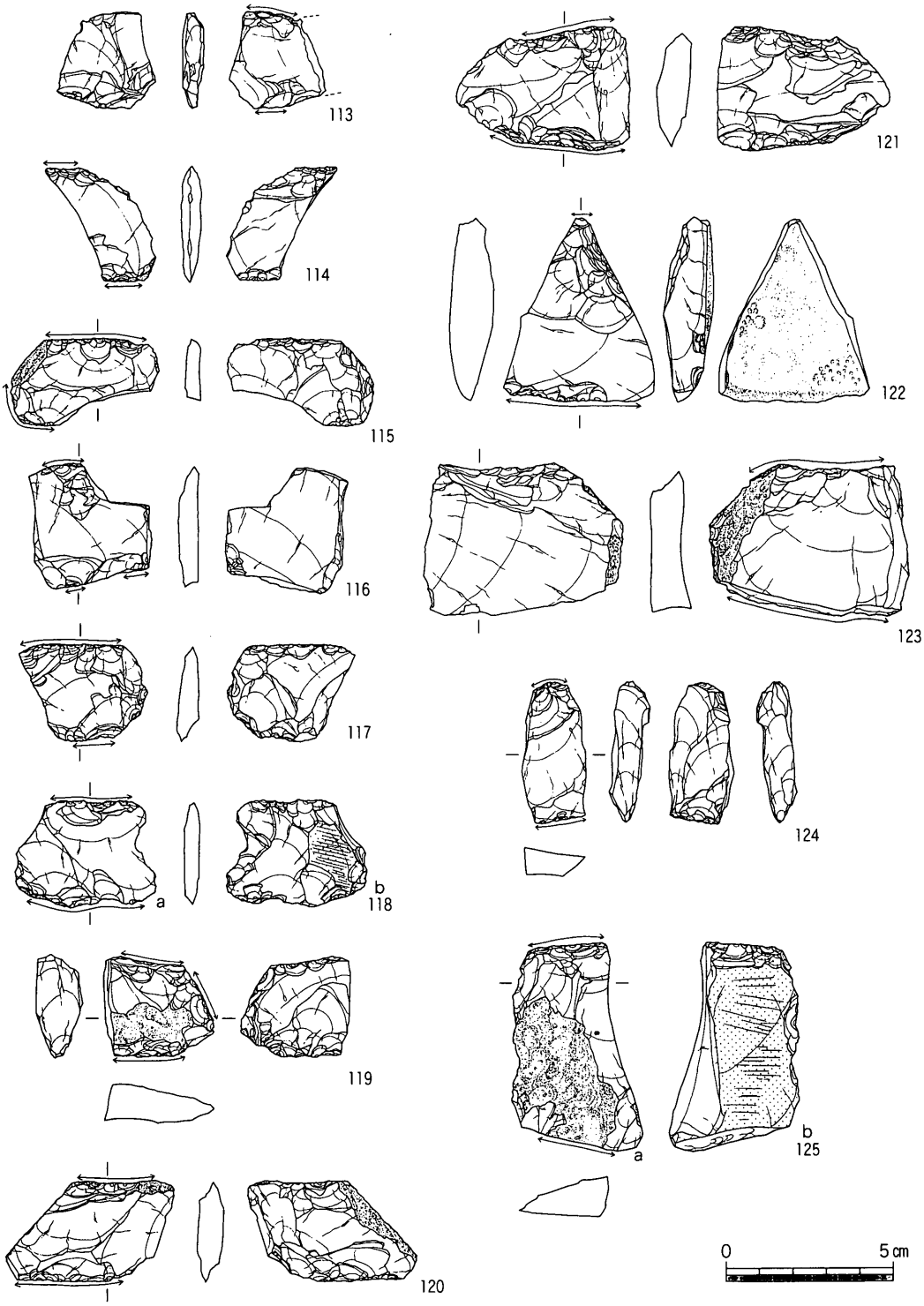
第21図　包含層Ⅳ出土遺物実測図８（１/２）



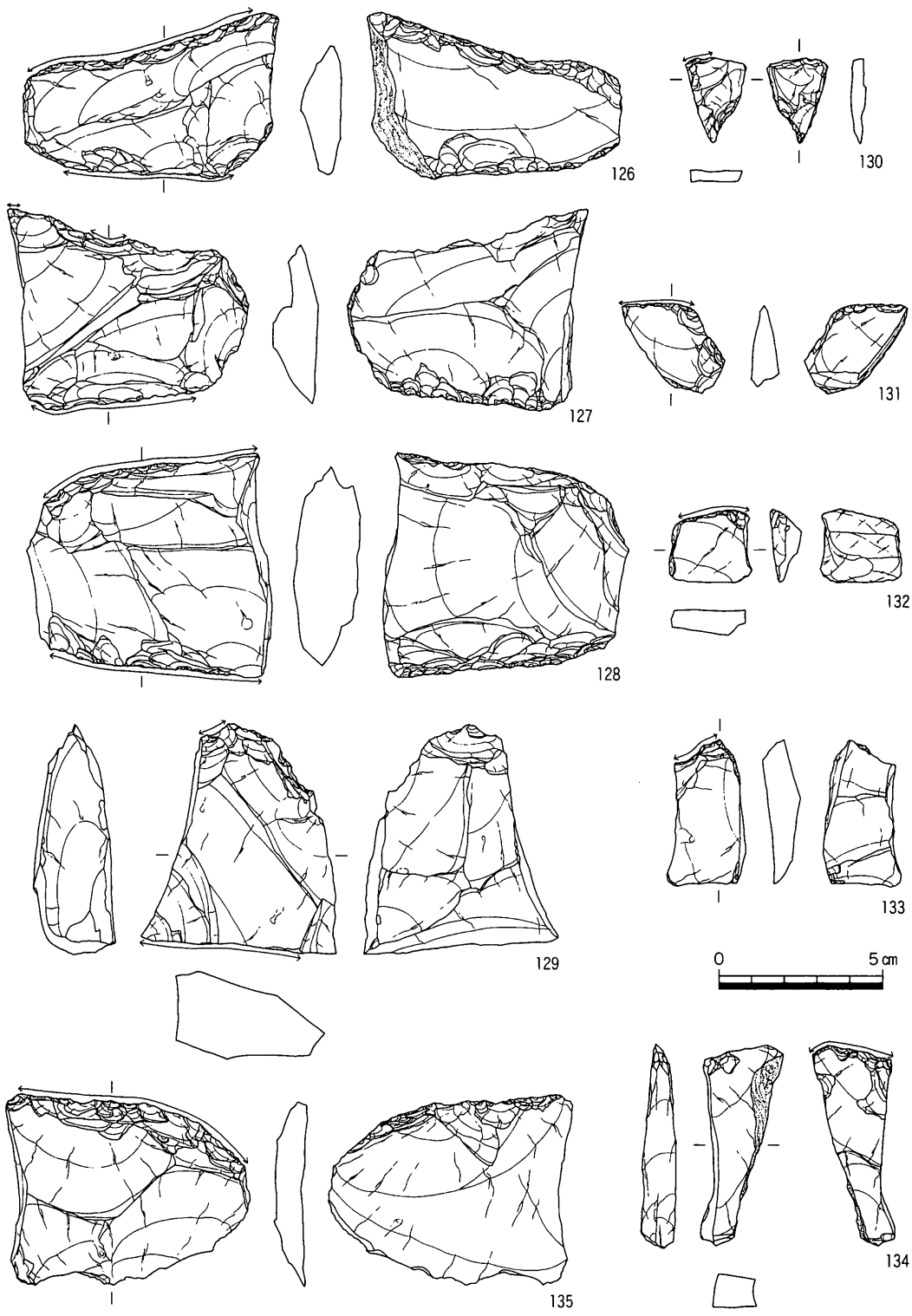
第22図　包含層Ⅳ出土遺物実測図９（１/２）



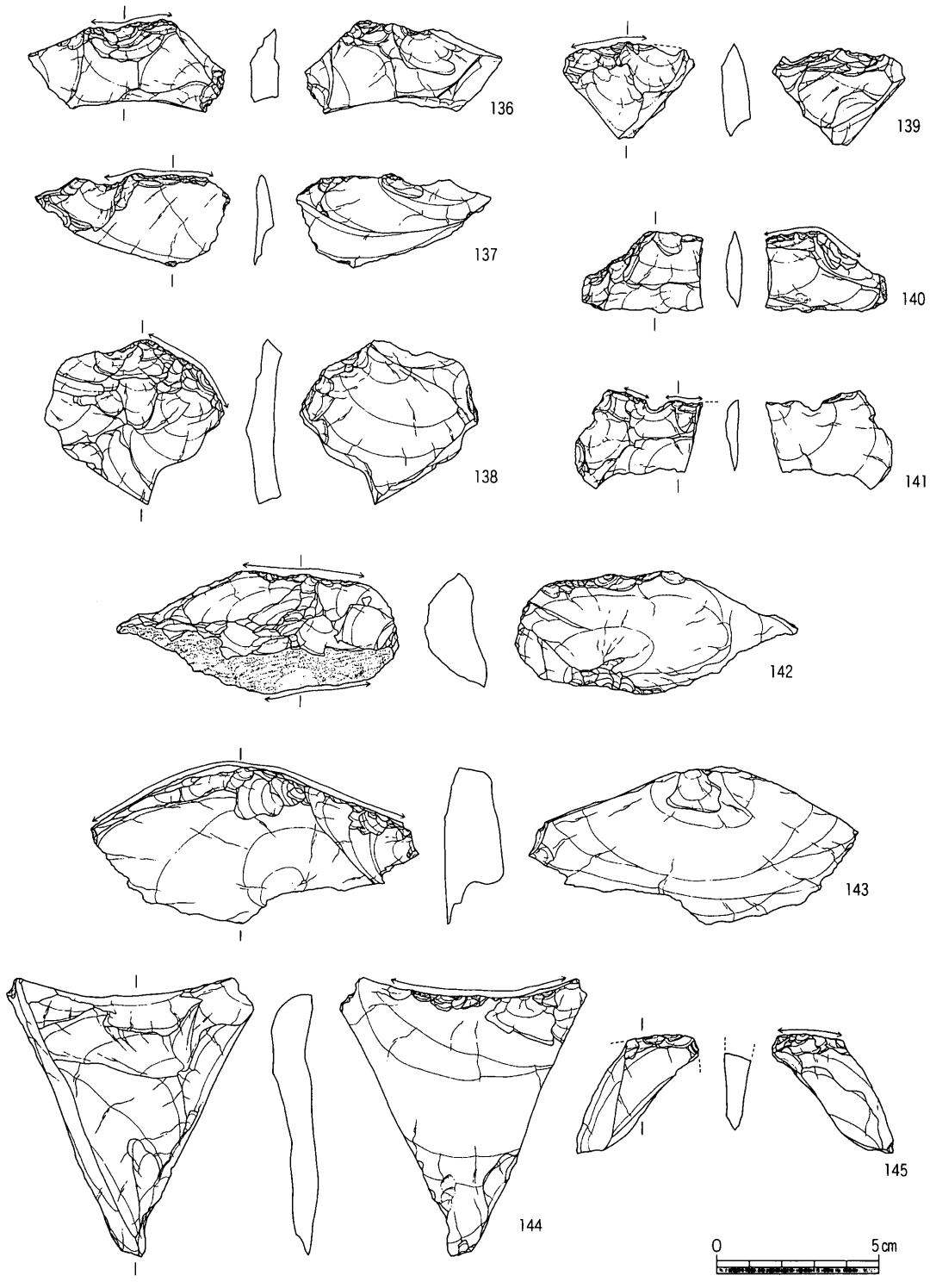
第23図　包含層Ⅳ出土遺物実測図10（1/2）



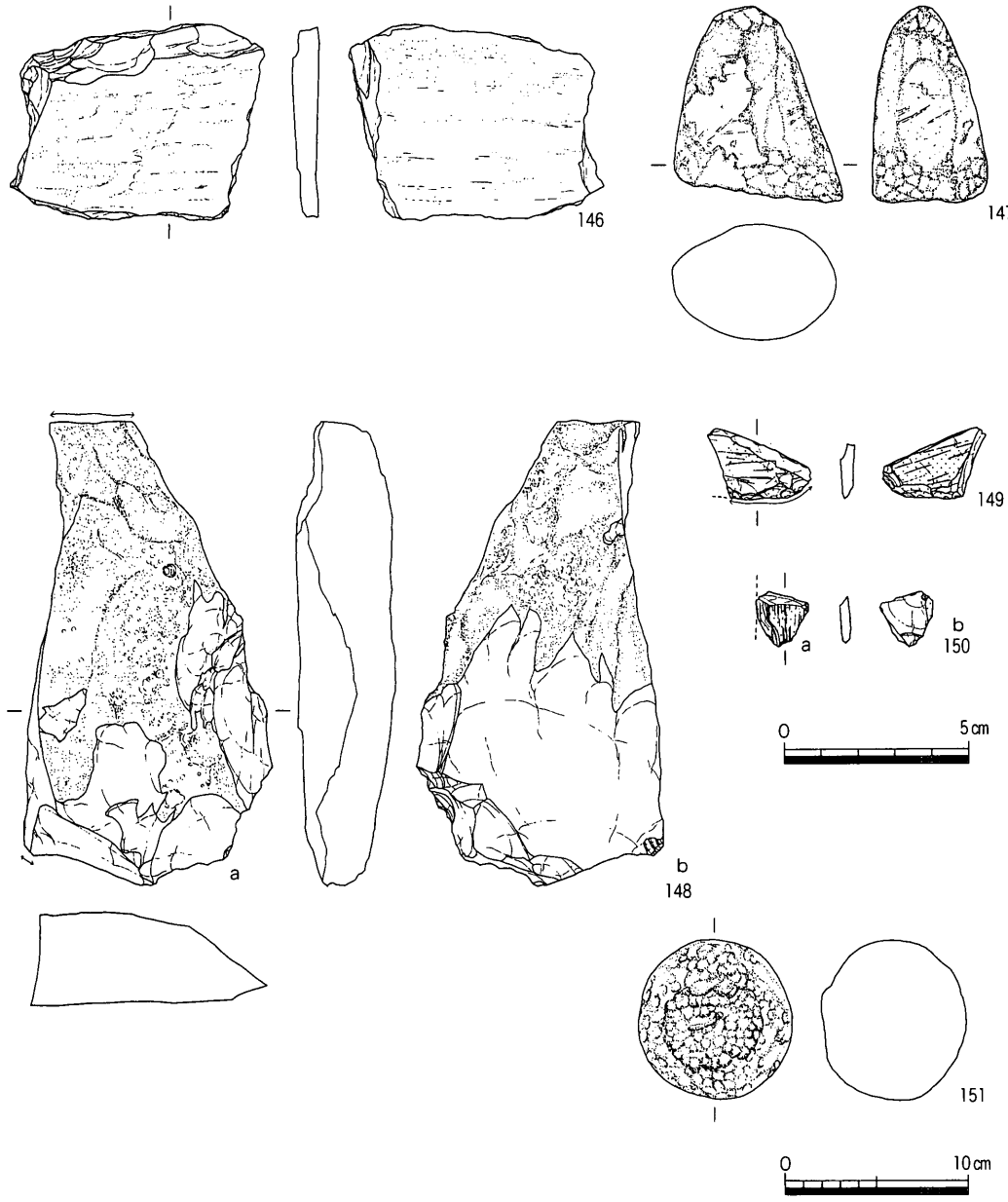
第24図　包含層Ⅳ出土遺物実測図11（1/2）



第25図　包含層Ⅳ出土遺物実測図12（1/2）



第26図　包含層Ⅳ出土遺物実測図13（1/2）



第27図　包含層Ⅳ出土遺物実測図14（1/2，1/4）

れる。51・54・73は，刃縁部に僅かな摩滅痕を認め，摩滅痕を切って刃部再調整が行われる。52のａ面には，打点を有しない剥離面のみに顕著な摩滅痕と線条痕が認められ，打製石斧の転用品の可能性がある。55は，縦長剥片の上下縁に刃部を付す。56は，下縁に曲線状の刃部を有するスクレイパーである。57は，背部に敲打による潰れがみられ，楔形石器を使用する。60は，スクレイパーとしたが，刃部加工は粗い。62は，やや内湾気味の刃部

を有する。71は，表裏面に僅かに摩滅痕を認め，ｂ面上端に線条痕がみられることから，打製石斧の転用品とみられる。両極打撃により素材を薄く加工して転用されており，摩滅痕が残されるのは刃縁部付近に限られる。74～76は，曲線状の刃部を有するスクレイパーである。いずれも両面より刃部加工が加えられる。片面若しくは片面交互の刃部加工は皆無であり，この点で直線状の刃部を有するスクレイパーとは異なる。77～79は，内湾状の刃部を有するスクレイパーである。いずれも両面加工の刃部調整が施されている。80は，表裏面に弱い摩滅痕がみられることから，ａ面を磨石のようにして使用した可能性が考えられる。81～86は，下縁に調整加工がみられる剥片である。いずれもスクレイパーとするには，やや調整が粗い。87～94は，使用痕のある剥片とした。下縁に微細剥離痕を認める。これらもスクレイパーとするには，調整加工が安定していない。95～129・142は，上下縁に敲打による顕著な潰れが認められる楔形石器である。形状は大形のものと小形のものなど様々であり，定型化したものではない。また，側縁に裁断面をとどめるものも多い。118は，ｂ面に摩滅痕と線条痕が認められ，打製石斧の転用品であろう。125も同様に，表裏面に強い摩滅痕を認め，ｂ面には方向の異なる線条痕がみられることから，破損した打製石斧の刃部の転用品とみられる。130～141・143～145は，上端にのみ敲打による潰れを認める楔形石器削片である。146は，結晶片岩の剥片である。上縁に僅かな調整加工がみられる以外，明確な加工痕を認めない粗割り段階の剥片であろう。形状から打製石庖丁の未製品の可能性もあるが，加工痕が乏しいため断定できない。147は，伐採斧基部の破片である。石材は，砂岩とみられるが不詳。148は，石核とした。両極打撃によって得られた分割材の側縁を中心に，敲打によって剥片が剥がされるが，十分な大きさを備えた剥片は得られていない。149・150は，表裏面に強い摩滅痕とｂ面に線条痕がみられることから，打製石斧の刃部調整剥片とする。149は，下縁に敲打による潰れがみられ，楔形石器に転用されている。151は，長石をやや多量に含有するアプライトを使用した叩石である。径８㎝程の球状を呈し，部分的に強い敲打によって小平坦面をなすまでに使用されており，あばた状の敲打痕が顕著にみられる。

第３節　弥生時代の遺構・遺物

概要

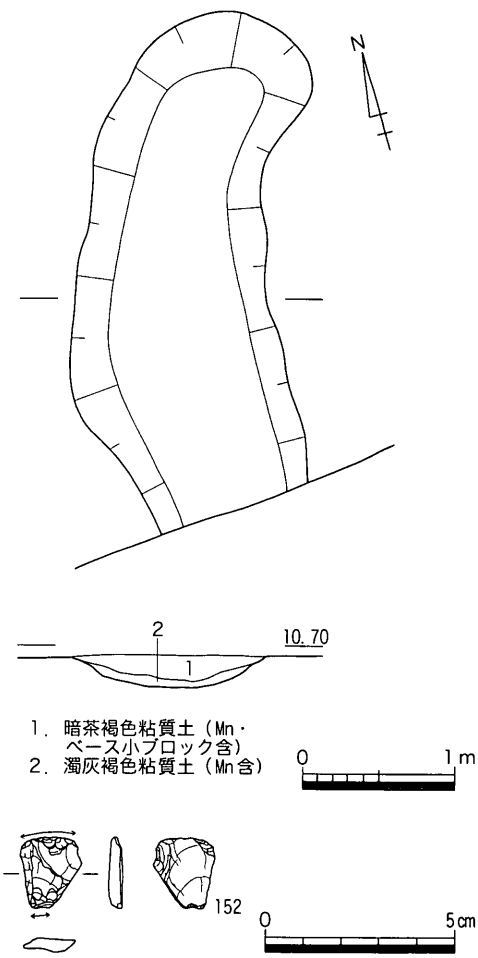
弥生時代後期から終末期に位置付けられる遺構が，Ⅰ・Ⅱａ区において検出されている。検出位置はいずれも，前記包含層Ⅳ上面であり，当該時期の包含層は確認されず，遺構上面は顕著な削平を蒙っているものとみられる。しかし，遺構上面の削平を考慮しても，確認しえた遺構は後述するように少数に限られ，本調査区が集落縁辺に位置することは否めない。いずれの遺構も調査区南縁に偏在しており，当該時期の集落は調査区南側に展開した可能性が想定される。なお，当該時期に至ってようやく，本地域周辺の小微高地上を中心に何らかの開発行為が進展するものと思われる。

土坑

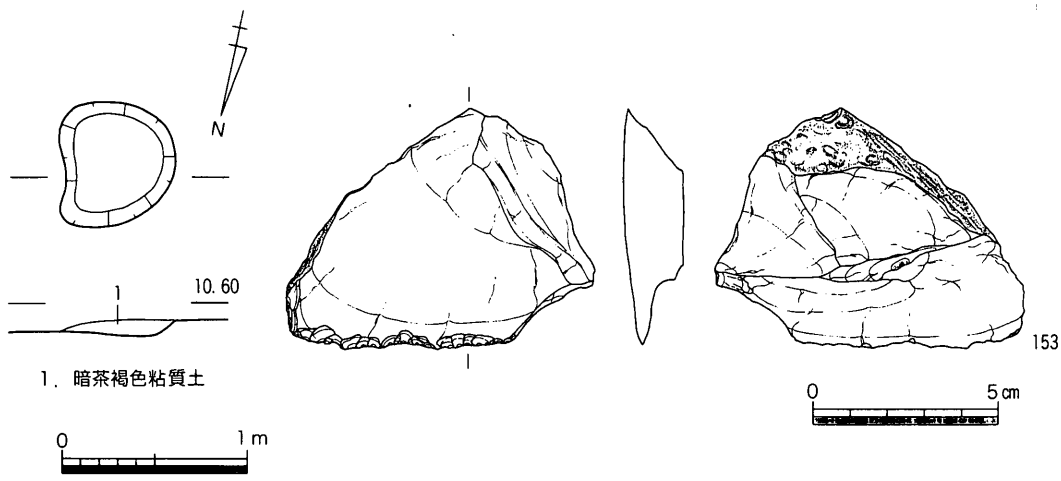
ＳＫ37（第28図）

Ⅱ区東部南端Ｂ３グリットで検出した土坑である。南端は調査区外へ延長し，全形を窺うことはできない。現状で，長軸2.6m以上，短軸0.8～1.1mの南北に長い不整な長楕円形を呈する。中位でやや東に屈曲するが，主軸方向は概ねＮ８°Ｅ前後に配される。残存深は，0.22mと一定の深さを有し，断面形は皿状を呈する。底面の標高は，10.40mであった。埋土は，灰褐色系粘質土がレンズ状に堆積し，２層に細分された。上位層には，ベース層の小ブロック土が含まれるが，人為的な埋め戻しを想定するような顕著なものではない。

遺物は，図示した石器以外に，弥生土器の



第28図　ＳＫ37平・断面図（1/50），
出土遺物実測図（1/2）



第29図　ＳＫ38平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/２）

小片が少量出土したのみである。152は，サヌカイト製の楔形石器である。現存長1.9cmの小形品で，上下縁に敲打による潰れがみられ，側縁には裁断面を認める。出土遺物より細かな時期を特定することは困難だが，出土した土器に，いわゆる「下川津Ｂ類」土器に類する角閃石や黒雲母を多量に含有した土器片が含まれることから，弥生時代後期後半から終末期頃に位置付けられると考える。

ＳＫ38（第29図）

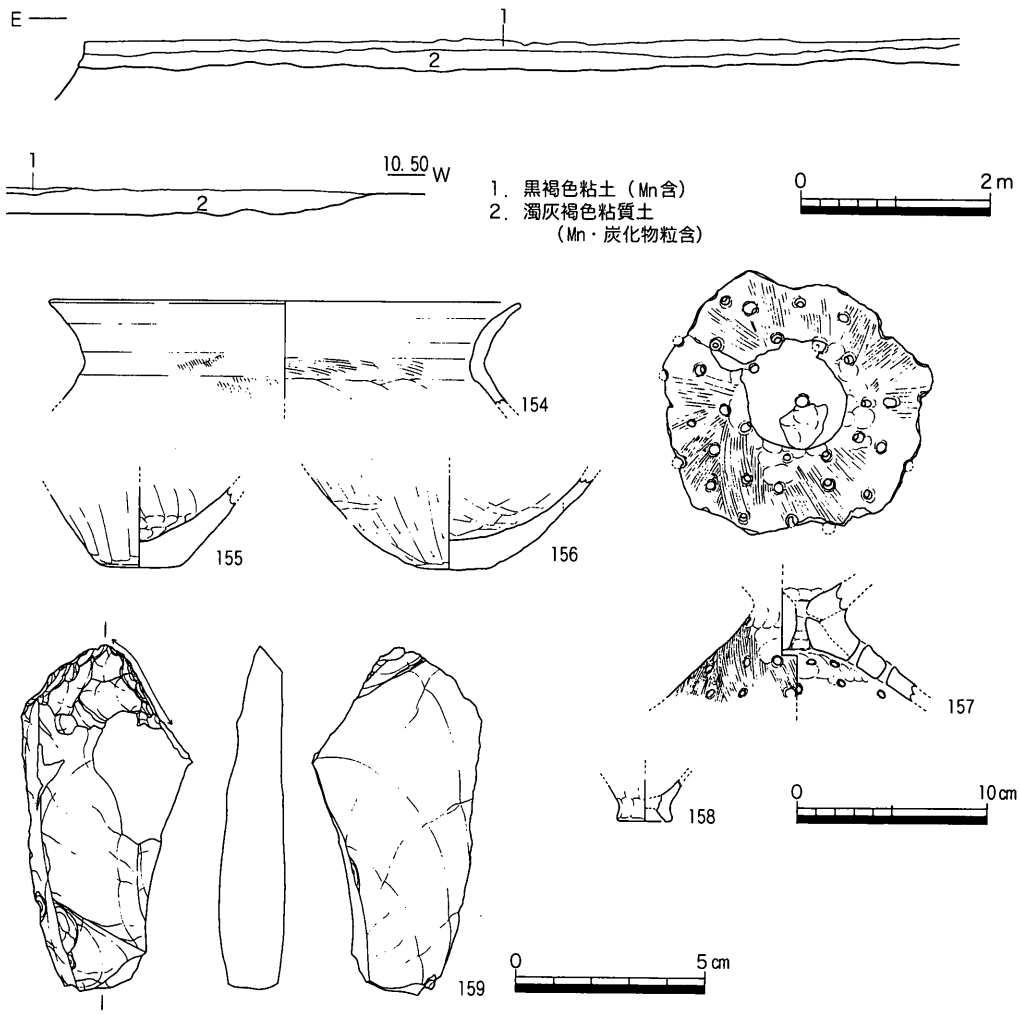
Ⅱ区南東隅Ｂ４グリットで検出した土坑である。平面形は，長軸0.65m，短軸0.60mのやや南北に長いいびつな楕円形を呈する。残存深は僅かに0.07mを残すのみで，上面の削平が著しい。底面の標高は，10.40mと前記ＳＫ37に近似する。断面形は，皿状ないしは逆台形状を呈する。埋土は，暗茶褐色粘質土の単層である。

遺物は，僅かに図示した石器１点が出土したのみである。153は，サヌカイト製のスクレイパーである。刃部は，片面より直線的な調整加工を施す。背部には自然面を残す。出土遺物より細かな時期を特定することは困難だが，前記ＳＫ37に近接し，埋土の特徴もＳＫ37上層と近似し，後出する時期の遺物を全く含まないことなどから，当該時期に位置付けられるものと判断した。

不明遺構

ＳＸ16（第30図）

Ｉ区南東隅Ｂ・Ｃ７グリットで検出した浅い落ち込みである。南端は調査区外へ延長し，



第30図　ＳＸ16断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4，1/2）

東端は段丘崖に削られており，調査区内で辛うじて北～西肩のラインが検出されたに過ぎない。また，上面を予備調査時のトレンチによって攪乱を蒙る。東西約13.0m，南北約4.9mを確認した。残存深は0.3m程で，肩部は緩やかに落ち込み，底面は僅かな起伏が顕著に認められる。底面の標高は，10.0m前後である。埋土は，２層に細分された。黒褐～濁灰褐色粘質土が水平に堆積する。図示した土層は，調査区南壁での堆積状況を示す。平・断面形状から人為的な遺構の可能性は乏しく，旧地表面の窪地に堆積した自然堆積層と考える。旧流路の肩部の可能性もあるが，検出部位が限られるため詳細は不明である。

なお，上記したように，本遺構の東端は段丘崖によって削り込まれるが，崖法面に堆積した土層は，近世の遺物を含む比較的時期の新しい堆積層であり，段丘崖形成後にさらに

人為的に法面の掘削を経て堆積した土層と考えられる。したがって，本遺構の検出状況から直ちに，段丘崖の形成時期の上限を推定することは困難であろう。しかし，遺構の性格，埋土の堆積状況，遺構底面と段丘崖の比高差を考慮すれば，旧大束川の河床レベルの低下以前に本遺構埋土の堆積が生じた可能性が想定される。

遺物は，弥生土器片等が若干量出土したに限られる。6点を図示した。154は，甕口頸部片と考える。口縁部内面には剥離痕に似た器表面の変色部分を認めるが，二重口縁壺あるいは複合口縁壺とするには明確な頸部を有さず違和感があり，甕口頸部として図示した。155・156は甕もしくは壺底部片である。小さな平底を呈し，また体部は球形化を指向する等，新しい傾向を指摘できる。157は，器台脚部片である。脚部はやや内湾して開き，端部を欠損する。外面には縦方向のハケ調整が施され，3～4段の小円孔を穿って装飾する。また，受け部中央にも貫通する小円孔が穿たれる。158は，製塩土器脚部片であろう。体部外面は縦方向のケズリ調整が施されるが，摩滅が顕著で不明瞭である。159は，石核素材である。側縁の一部に自然面を残し，自然面を打点とする剥離を試みるが，周縁は同時割れによる裁断面を多く残し，良好な剥片を得るには至っていない。上記出土遺物より，弥生時代後期後半から終末期前後に位置付けられる。

第4節　古代の遺構・遺物

概要

Ⅰ区では，竪穴住居2棟及び数条の溝状遺構によって構成される7世紀前半代の集落域を検出している。居住遺構は僅かに竪穴住居2棟（ＳＨ01・02）に限られ，周辺地形からも大規模な集落域の存在は想定しがたい。平成8年度に調査された北に約130m程離れた調査区においても，ほぼ同時期と考えられる1棟の竪穴住居が検出されており，数家族を単位とした世帯集団が，小微高地上に分かれて居住していた可能性が考えられる。また，当該時期の遺構は，Ⅱ区において旧流路状の低地帯（ＳＸ19）を検出しており，埋土中より土馬1点と耳環1点が近接して出土している。出土遺物を最大限評価すれば，集落近辺での水辺の祭祀行為を想定することもできよう。

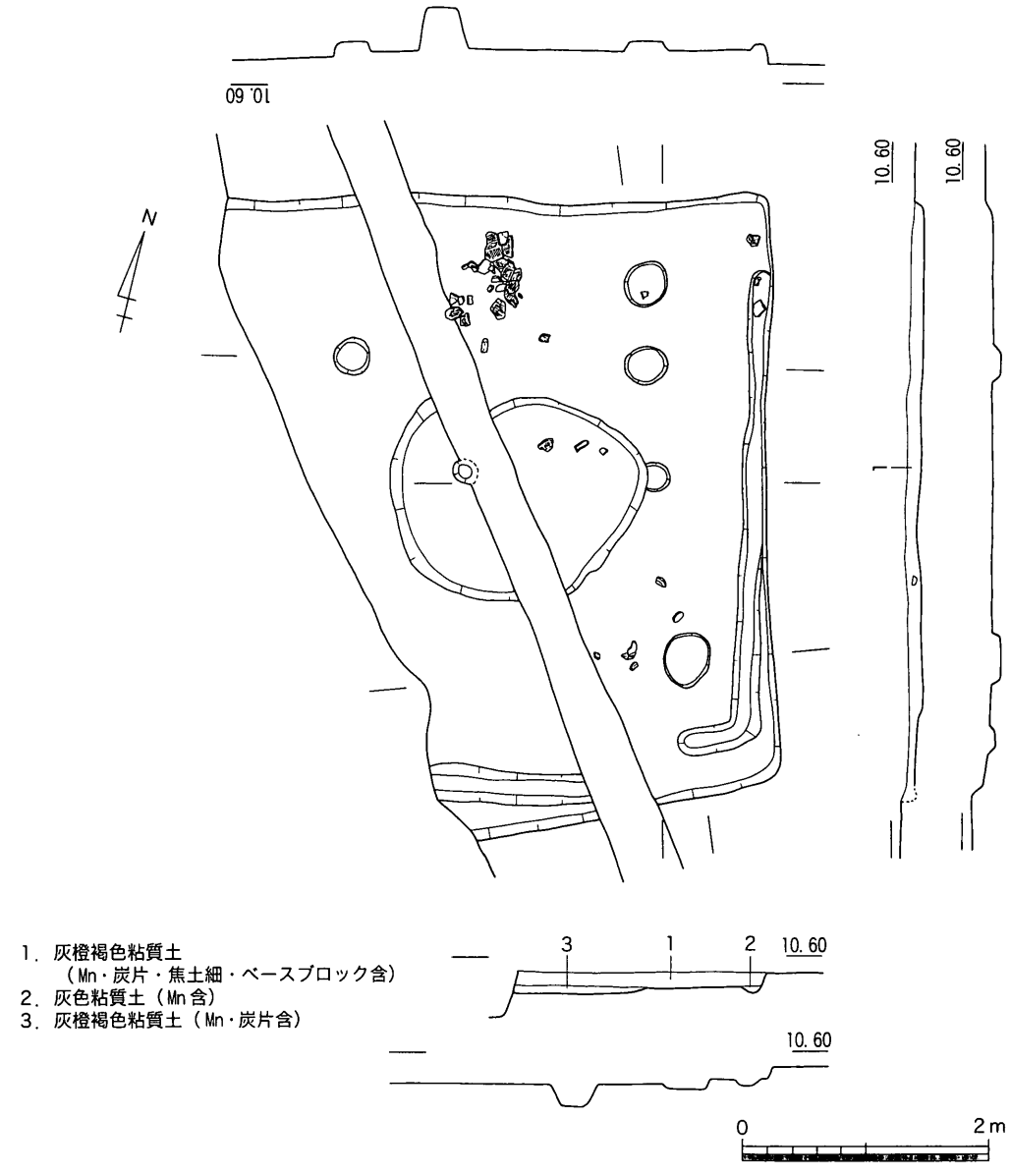
Ⅱ区では，8世紀後半代に開削され，中世初頭に埋没した幹線水路（ＳＤ135）を検出している。また水路西側には，水路より派生する支流とそれに連続する耕作域と推定される低地帯（ＳＸ20）が検出された。幹線水路からは，木製品やその未製品及び製作時の削り屑，漆皿等が出土しており，近辺に木製品加工や漆工に伴う，工房が存在した可能性が想定される。

Ⅲ区では，9世紀代を中心とした柱穴や小溝等の遺構が検出され，集落の一部を確認したが，調査区が限られるためその性格などを検討するまでには至らなかった。

竪穴住居

ＳＨ01（第31・32図）

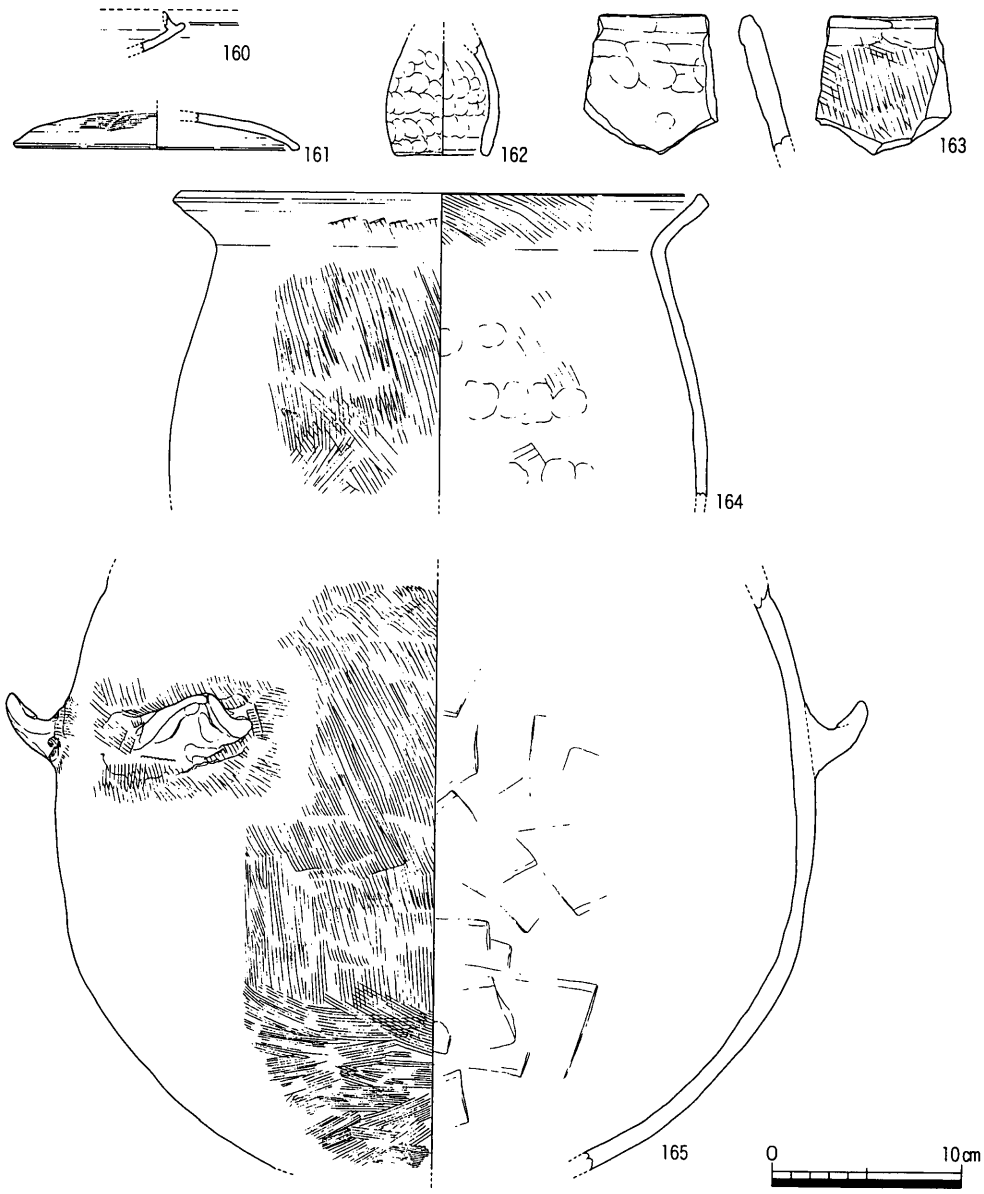
Ⅰ区南西部Ｃ6グリットで検出された竪穴住居である。西半部は，後世の地下げにより大きく削平を蒙り，全形を窺うことはできない。現存部で，南北4.8m，東西4.4m以上，床面積21.1㎡以上，主軸方向Ｎ15.0°Ｗの方形ないしは長方形の竪穴住居と考えられる。確認された主柱穴の配置からすれば，一辺4.8m程度の方形の住居に復元され，当該時期の住居としては一般的な規模を有する。住居掘り形の残存深は，0.15m程度と上面の削平が著しい。現存部で竈及びそれに付属する煙道，さらに床面の二次的な被熱痕は確認されず，それら施設は住居西辺に設けられていたものと推測される。埋土は，灰橙褐色粘質土



第31図　ＳＨ01平・断面図（1/60）

の単層で，ベース層のブロック土が比較的多量にみられることから，人為的に埋め戻された可能性もある。後述するように，主柱穴の残存深が浅いことから，本層が貼り床層に相当する可能性も考えられたが，断定するまでには至らなかった。

主柱穴は４穴を想定しているが，住居平面形とは必ずしも整った位置関係を有しておらず，また南西隅の柱穴を削平により欠く。柱穴は，径0.3m前後の楕円形ないしは略円形を呈し，残存深は0.1mと極めて浅い。柱痕は確認されず，住居廃絶後に抜き取られた可



第32図　ＳＨ01出土遺物実測図（１/４）

能性もある。住居中央部には，長軸2.06m，短軸1.7mの平面楕円形の浅い落ち込みが検出された。落ち込みの深さは数cm程で，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は，単層で炭片をやや多く含む。底面に被熱痕は認められず，いわゆる炉床とは異なるだろう。落ち込み内より出土した遺物と，住居床面より出土した遺物に接合関係が認められたので，本住居に伴う施設とみられるが，その性格は不詳である。壁溝は，住居東・南辺で鍵の手状に検出された。一部コーナー付近で途切れる。溝は，幅0.1～0.2m，深さ数cmで，断面形は皿

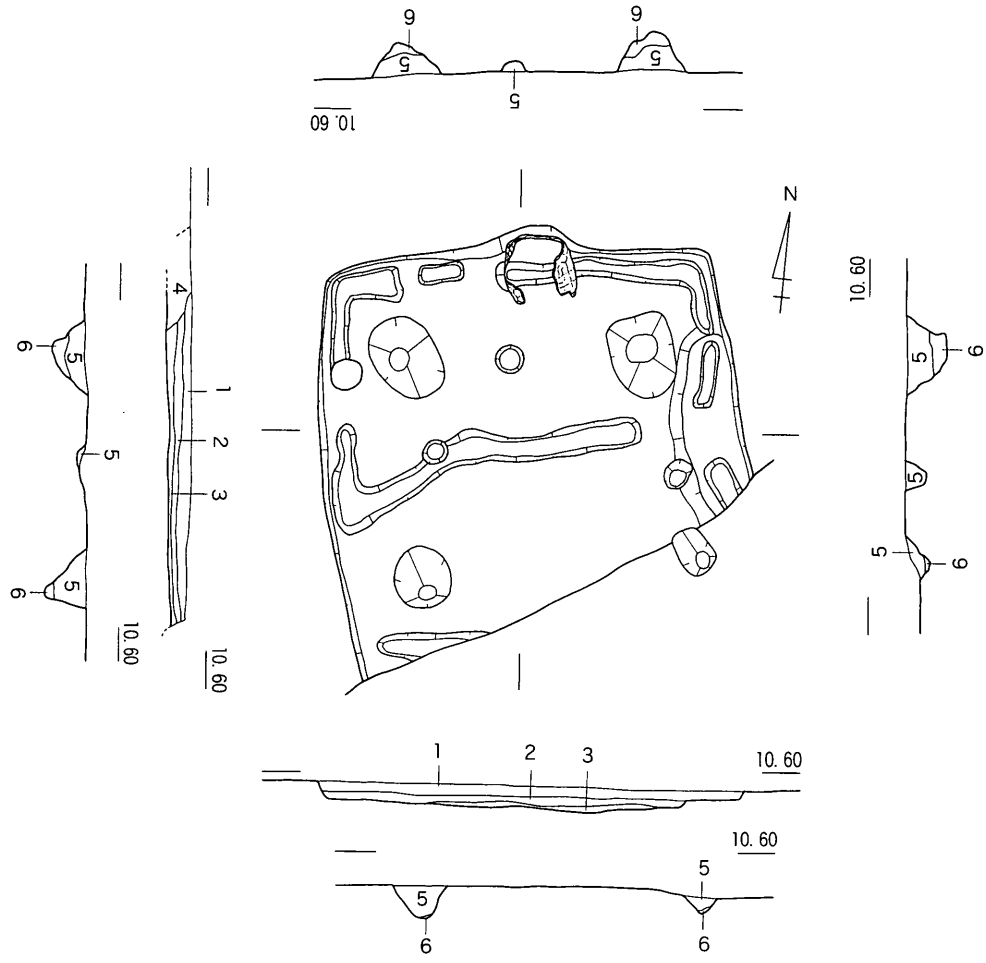
状を呈する。埋土は，灰色粘質土の単層で住居埋土とは明瞭に異なる。

遺物は，比較的多く出土している。特に，住居東半部床面からは，164・165等の土師器甕が破砕されて出土した。一部欠落する部位があることや床面に散在して出土していることから，住居廃絶後間もない時期に投棄された可能性が高い。遺物は，図示したものの他，土師器甕や須恵器壺等の体部片がコンテナ１箱程度出土している。須恵器片は，遺物総量の１割程度と少なく，遺物の大半は土師器甕類が占める。６点を図示した。160は，須恵器坏身として図示した。口縁部は内傾して短く，受け部は内湾気味に開く。小片のため，坏蓋となる可能性も残る。いずれにせよＴＫ217型式期に下るとみてよい。161は，畿内系の土師器坏蓋である。外面天井部は，４分割のミガキ調整を加える。内面の調整は摩滅のため不明。162は，土師器蛸壺である。頂端部を欠損するが，おそらく釣鐘型の飯蛸壺となろう。163は，土師器竈口縁部片である。端部は断面台形状を呈し，頂端面はヨコナデにより僅かに窪む。外面は，粗い斜めハケ調整の後口縁部付近にナデ調整が加えられ，内面は，横方向の板ナデもしくはナデ調整される。内面に弱く煤の付着をみる。164は，土師器大形甕である。体部の張りはやや弱く，長胴形態となろう。口縁部は外反して開き，端部は主に上方へ摘み上げられて，内傾する端面は弱く窪む。住居内からは，同一個体と考えられる底部片も出土しているが，接合しないため図示していない。同一個体であるならば，底部は丸底である。体部外面は被熱による劣化がみられ，内面には一部炭化物の付着をみる。165は，把手付大形甕である。体部はやや扁平な球状を呈し，最大径部に一対の正面三角形状の把手を付す。外面はハケ調整，内面は板ナデ調整される。同一個体のものと推測される口縁部小片が出土しているが，接合しなかったため図示していない。上記出土遺物は，いずれも160に示された時期と大差はなく，７世紀前半から中葉を前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＨ02（第33・34図）

Ｉ区南西部Ｂ・Ｃ６グリットで検出した竪穴住居である。南端部は，後世の地下げにより削平を蒙り，南壁の立ち上がりは完全に消滅するが，辛うじて南縁の壁溝の一部を検出したことから，平面形状や規模等を一定程度復元することが可能である。平面形態は，南北推定3.4m，東西約3.4m，床面積11.5㎡程度，主軸方向Ｎ11.0°Ｗのほぼ方形の住居跡である。当該時期の住居としては，やや小型の部類に属する。残存深は，最深部で0.2m程と上面の削平が顕著で，竈に伴う煙道は削平により確認できなかった。

主柱穴は４穴で住居四隅に配され，隅柱の間にそれぞれ主柱穴よりは小規模な間柱が確



1．灰橙褐色粘質土（Mn・炭片・黄色粘質シルトブロック含）
2．灰褐色粘質土（Mn・炭片・黄色粘質シルトブロック含）
3．灰色粘質土（炭片多含）
4．赤灰橙褐色粘質土（Mn・炭片多・焦土含）
5．灰茶褐色粘質土（Mn・ベースブロック含）
6．灰色粘質土（Mn含，3層と同質）

第33図　ＳＨ02平・断面図（1/60）

認される。主柱穴の掘り方は，平面径0.5～0.6m程の楕円形状を呈し，深さは0.3m前後を測る。間柱が配されることと合わせ，建物規模からすれば異例の大きさであろう。しかし，詰石等は確認されず，柱穴埋土は水平堆積し，明確な柱痕が確認されなかったことから，住居廃絶時に抜き取られた可能性が高い。間柱は，南列を除く３穴が確認され，いずれも掘り方平面形は0.2m程の略円形を呈する。深さは0.15m以下と，主柱穴に比べてやや浅い。

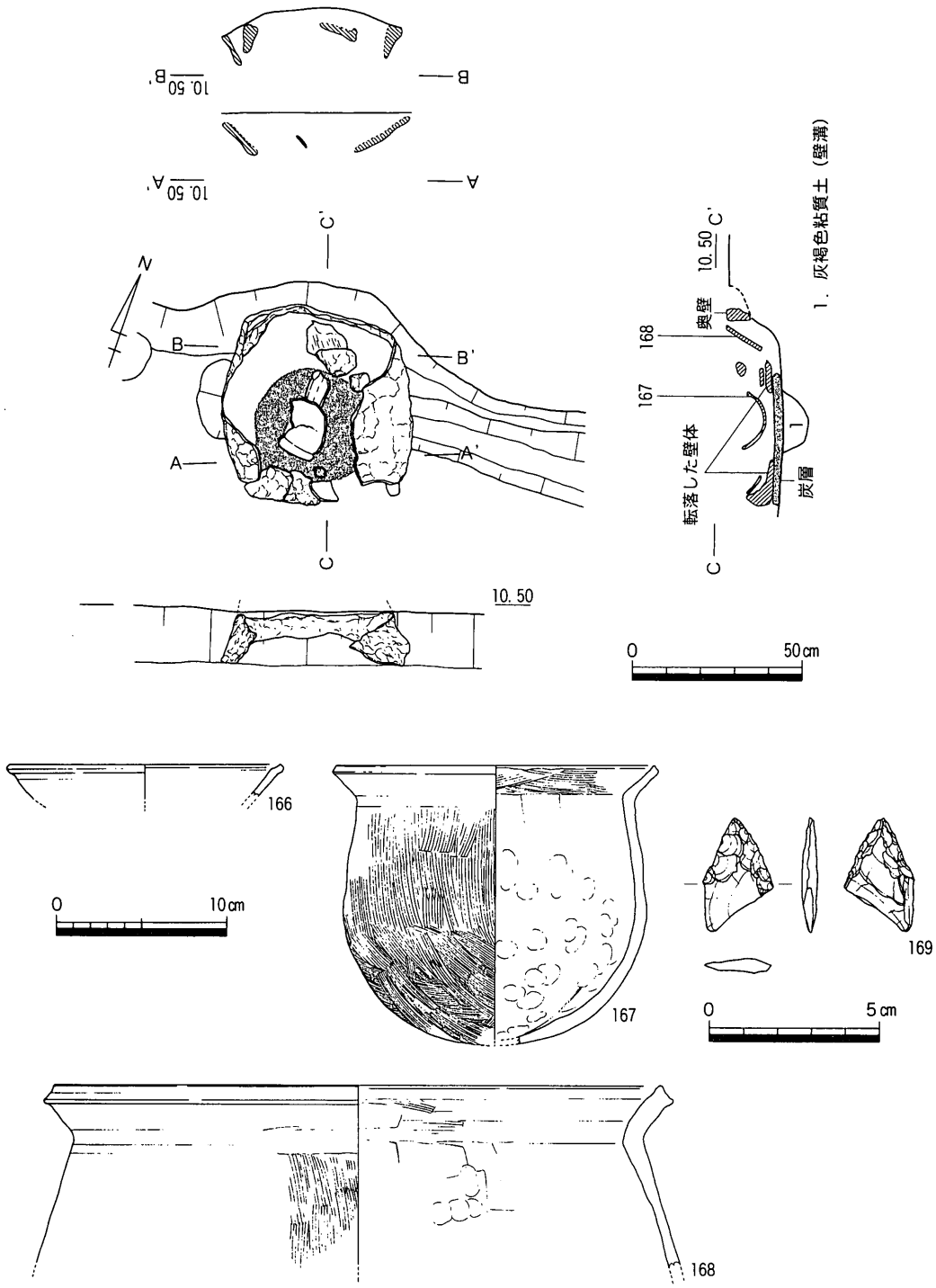
壁溝は，住居四周及び中央部を東西に，断続的ながらおよそ「日」字形に配される。西列の間柱が，壁溝上面より掘り込まれており，壁溝は柱位置の決定以前に掘り込まれた可

能性が高い。溝幅は0.2m程で，深さは0.07m，断面形は皿状ないしはU字状を呈する。埋土は，住居埋土下層と近似した灰色粘質土が堆積していた。なお，床面の東壁際に幅0.45m，高さ0.1m程の平面弧状を呈するテラス部が確認され，このテラス上面にも，壁溝は掘り込まれている。

竈は，住居北辺ほぼ中央の壁際に，基底部より橙色系粘土でもって築き上げる。竈本体は下半部を中心に比較的良好に遺存しており，焚き口部と周壁基底部がほぼ全周する。竈は，奥行き0.55m，幅0.55mの平面隅丸方形状を呈し，周壁は側面部で60°前後，焚き口部付近で33°前後，背後の壁面部分でほぼ垂直に立ち上がる。残存高は0.15m程度である。竈内面は強く被熱しており赤変する。竈下の床面には壁溝が東壁部分より連続して掘り込まれているが，竈周辺は灰褐色粘質土によって一旦埋め戻され，その上面より竈は構築されている。また，竈背面の住居北壁部分は，床面より0.1m程の高さの位置に，幅0.1m程の浅いテラス部が設けられており，この部分住居掘り方は北に緩く突出する。竈背面では，竈はこのテラス面上より構築されている。また，竈北西隅部では，壁体の粘土が2重になっている部分があり，補修痕と考えられる。竈内部床面の焚き口付近は概ね平坦だが，奥側は深さ数cm程に皿状に窪む。竈内には前面を中心に，底面に厚さ数cm程の炭層が溜まり，その上面に竈天井部や側壁部の粘土塊が崩落し，また中央部に小形甕の1/4程度の破片（167）が内面を上に横転していた他，大形甕の体部片（168）が奥壁にもたせかけるように，外面を焚き口部に向けて斜めに傾いて出土した。遺物はいずれも，竈使用時の二次的被熱を蒙っていないことから，住居廃絶時に竈内に投棄されたものと考えられる。

住居内の埋土は，3層に細分され水平に堆積する。貼り床層は認められない。上位2層は，近似した灰褐色系粘質土で住居廃絶後の自然堆積層と考えられる。下層の灰色粘質土も，基本的には自然堆積層と考えられるが，住居中央部より壁溝内及び主柱穴底面に薄く堆積し，上位2層とは異なり滞水下の堆積の可能性が想定される。おそらく住居廃絶後は，柱材を含めて上屋構造物が取り除かれた後埋め戻されずに放置され，徐々に埋没が進行したものと考えられる。

遺物は，上記した竈内と住居埋土中より出土している。遺物量は極めて乏しく，住居廃絶時に持ち出されたものと推測される。図示した以外に，土師器甕等の小片やサヌカイト小剥片が少量出土しているにすぎない。4点を図示した。166・169は埋土上位層より，167・168は竈内よりそれぞれ出土した遺物である。166は，土師器坏。口縁部は内湾しつつ開き，端部は小さく外反して矩形に納め，内面は凹線状に鈍く窪む。8世紀代に下る可能性があ



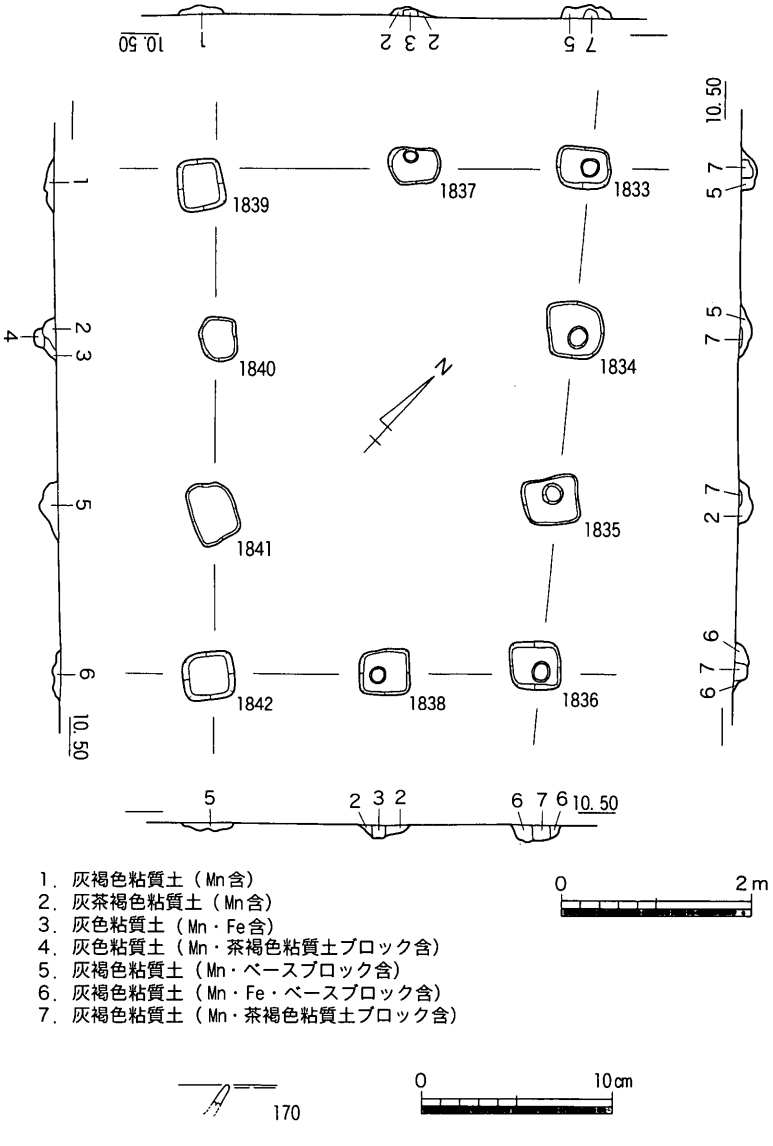
第34図　ＳＨ02竈平・断・立面図（１/20），出土遺物実測図（１/２・１/４）

り，別遺構の重複もしくは遺構上面の後出する土層からの遺物を，誤って取り上げた可能性がある。167は，土師器小形甕。体部は球形に近く，口縁部は外反して開き，端部は矩形に納める。底部は丸底。体部外面下半には弱い被熱痕を認め，内面には炭化物が付着する。168は，竈奥部に立て掛けるように出土した土師器大形甕である。おそらく長胴甕の口縁部片となろう。口縁部は外反して開き，端部は上下に鈍く肥厚し，端面は強いヨコナデにより窪む。169は，石鏃未製品であろう。小形の楔形石器削片を利用する。先端部は両面より調整剥離を加え三角形状に作出するが，基部にまでは調整は及ばず，加工途上の未製品と考えた。

掘立柱建物

ＳＢ21（第35図）

Ⅱ区北東部Ｄ３・４グリットで検出した南北棟建物である。桁行３間（5.4m），梁間２間（3.6～4.2m）の側柱建物で，北側梁間が0.6m程広く，柱配置は逆台形状を呈する。したがって主軸方位は，東列でN37.0° W，西列でN44.0° Wとなり，7° 程の誤差を生じる。床面積は概ね21.1㎡である。柱穴掘り方は，長軸0.5～0.6m，短軸0.4～0.6mの隅丸長方形を呈し，残存深は



第35図　ＳＢ21平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

0.1～0.2mしかなく，上面の削平が著しい。東半部の柱穴で，径0.2m程の柱痕跡を確認した。桁方向西列の柱穴では，柱痕跡は確認できなかったが，これは建物廃棄時に抜き取られたか，あるいは残存深が浅いことから，柱底面が残存する掘り方埋土まで達していなかった可能性もある。桁方向の柱間間隔は1.6～1.9mで，柱通りはよく整っている。柱穴埋土には，包含層Ⅲ（第11図32層）に近似した黒褐色系粘土をブロック状に混入しており，同層がＳＸ19中層と一連の堆積層であることからすれば，本建物はＳＸ19より後出し，したがって後述する幹線水路ＳＤ135に近接した時期に建てられた可能性を想定する。

遺物は，各柱穴より土器細片が極微量出土したのみである。１点のみ図示した。170は，ＳＰ1835より出土した土師器坏とみられる口縁部の小片である。胎土の面では，細かな素地粘土が選択されており，いわゆる畿内系土師器といわれるものに近似するが，時期等を特定できる資料ではない。建物の主軸方向は概ね幹線水路ＳＤ135と平行し，有機的な関係性が想定できること，同溝より多量の遺物が出土しており周辺域に何らかの居住遺構が営まれていた可能性が高いこと，また上記した柱穴埋土の内容から，本建物がＳＤ135の経営期間内に構築された可能性が高いと判断した。

不明遺構

ＳＸ19・20（第36～51図）

Ⅱ区を縦横に横切る，自然流路状の落ち込みである。旺盛な水流の痕跡は乏しく，後述するように低湿地状を呈して埋没しており，むしろ低地帯として理解されることから不明遺構に含めて記載する。

東側のＳＸ19は，Ⅱａ区を東西に横切って検出され，西端はＳＸ20に合流し，東端は調査区外へ抜ける。東への延長部がⅠ区で確認されなかったことから，国道下で大きく南へ屈曲する可能性を想定する。流路幅は，東端部で30.7m，Ⅱａ区中央部で11.0m，ＳＸ20合流部で20.7mと，検出位置によって大きく異なる。後述する古代の灌漑水路ＳＤ135と重複し，切り合い関係より同溝より先行する。底面の標高は，東端部で9.6m前後を，ＳＸ20との合流部で9.9m前後をそれぞれ測り，底面の高低差からすれば東へ流下するが，検出範囲が狭く流下方向を特定するまでには至らない。残存深は0.9～1.0m程で，断面形は概ね逆台形状を呈する。底面は，幅6.2～22.3mと広く，概ね平坦である。

埋土は，調査区東壁の堆積状況（第11図①）を基準に，15層に細分された土層を，最下層（第11図35・36層），下層（同図33・34層），中層（同図29～32層），上層（同図27・28

層），最上層（同図26層）に大別して遺物の取り上げを行った。各層は，最上層を除いて土質・色調・堆積状況を基に分層を行っており，出土遺物からする各層の堆積時期の差異は考慮していない。なお，最上層については，上層と同様に緩やかに北に傾斜して堆積し，近似した土質・色調を呈することから，本来は上層と一連の堆積層として取り扱うべきであった。しかし，上位の包含層やＳＤ135埋土との識別が困難であったため，一部遺物の取り上げに混乱を来し，出土した遺物から上層とは異なる時期の堆積層として理解し細分してしまった。本書でもあえて調査時の所見に従い，最上層として遺物の提示を行うが，提示した資料の一部は本来的には本遺構に所属する遺物ではなく，したがって本遺構の埋没時期の下限を示すものではない。

各層は，概ね水平堆積を基調とし，旺盛な水流の存在を暗示する砂層の堆積は限定され，低湿地状を呈した比較的穏やかな環境下で埋没が進行したものと判断された。水流の痕跡を示す中層上位層（29層）は，流路北半部に偏在して幅４ｍ程の小流路状を呈して検出され，最下層を穿ち流路底面に達するなど，突発的な洪水堆積の様相を呈する。しかし，同様の流路は上層へ継続せず，恒常的な水流の存在は想定しがたい。遺物は，中・下層を主体として出土しているが，検出範囲からすれば意外なほど少量である。埋土の堆積状況や遺物の出土傾向から，耕作域の可能性を想定し花粉分析を実施したが，後記する分析結果にあるように，花粉の遺存状況が悪く明確なことは不詳である。

ＳＸ20は，Ⅱｂ区を概ね南北に縦断して検出された。南北両端は，調査区外へ延長する。流路幅21ｍ前後，残存深0.9ｍ前後の低地帯である。調査区中央東岸部で，上記ＳＸ19が後述する下層へ合流し，また灌漑水路ＳＤ135より派生する支流ＳＤ136が上層へ連続する。ＳＸ19合流部の南北で若干流路方向を違える可能性があるが，大半が調査区外となるため詳細は不明である。流路方向は，検出部分で概ねＮ41.2°Ｗを示す。底面の標高は，調査区南北両端でほぼ等しく9.80ｍ前後を測り，検出した流路延長が短く，流下方向を特定できなかったが，現地表面の傾斜方向などから北流していた可能性を想定する。

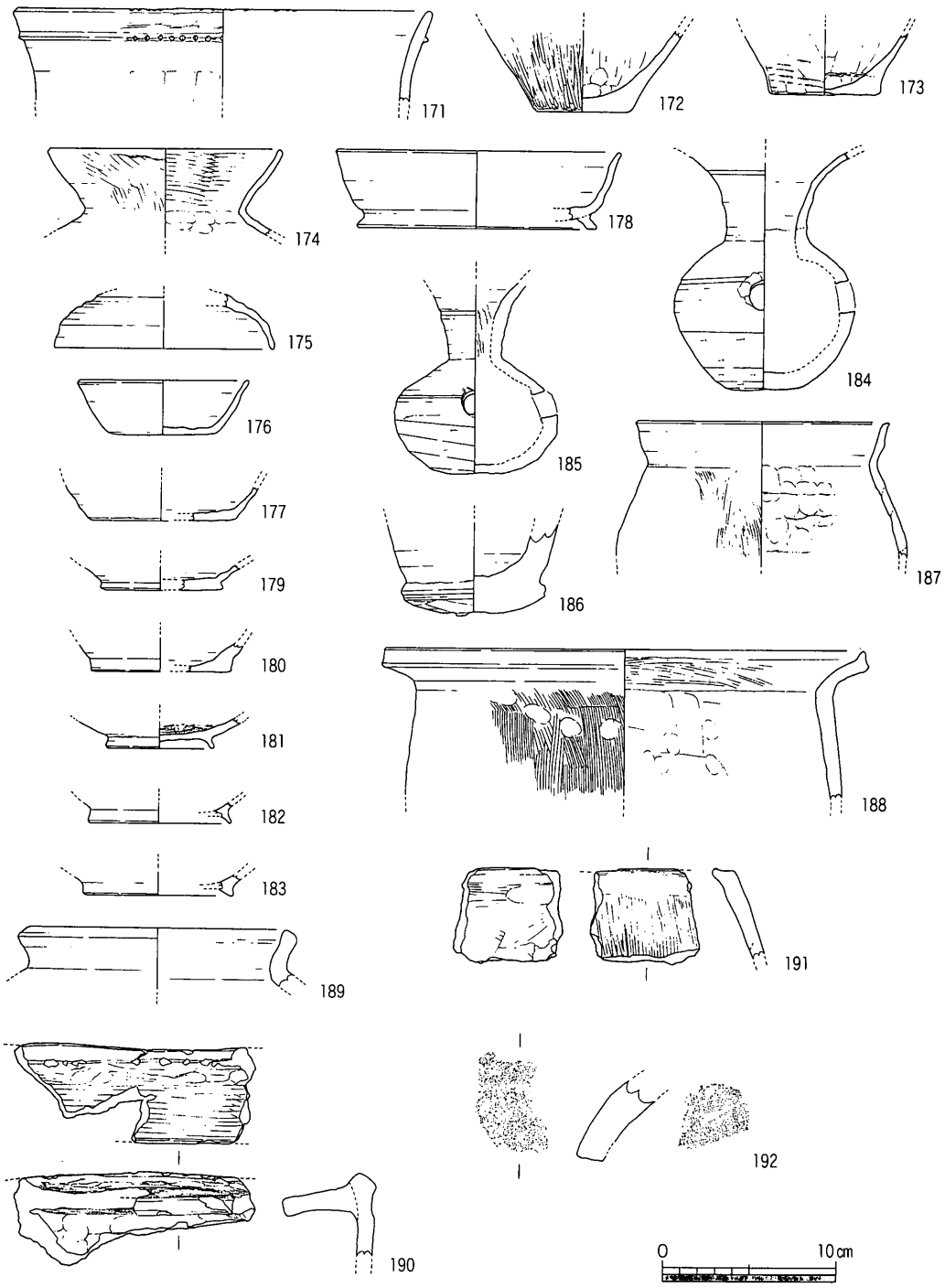
埋土は，調査区南壁（第12図④）での観察で，４層に細分された土層を，上層（第12図17・19・20層）と下層（同図18・21層）に大別して遺物の取り上げを行った。埋土は，流路内全域にほぼ均質に堆積しており，一部遺物の取り上げにやや困難な状況も生じたが，概ね層位的な取り上げには成功している。上層は灰色系シルト～粘土層を，下層は褐色系粘質土層を分層する。本遺構でも，明確な水流の証左は乏しく，基本的には低湿地状を呈して徐々に埋没したようである。しかし，上層は下層埋土を一部削り込んで堆積しており，

下層堆積後微弱な水流により下層埋土が一部削除された可能性が想定されるが，堆積状況からその痕跡を見出すことは困難である。後述するように，上層が耕作域として利用されていたのであれば，人為的に下層埋土を開削・平準化した可能性もある。

上層からは8世紀後半代から9世紀代を中心とした遺物が，下層からは7世紀前半代を中心とした遺物が出土しており，それぞれ堆積時期が明確に異なる。また，特記すべき点として，下層上面は上層と著しい不整合面をなし，部分的に下層上面が撹拌され，小ブロック土が上層へ混入する状況が，断面観察により認められた。上記したように，本低地帯が耕作地として利用された可能性を想定するならば，こうした土層の堆積状況は，いわゆる「田おこし」の際の耕土の動きとして捉えることもできようが，明確な畦畔等の遺構は確認されておらず，詳細は不明である。

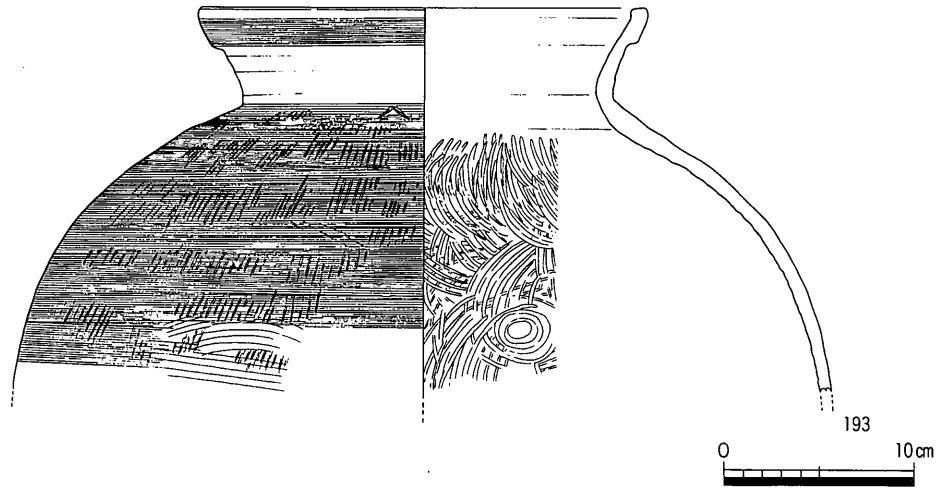
遺物は，ＳＸ19よりコンテナ3箱，ＳＸ20より同5箱程度出土している。ＳＸ20上層より出土した9世紀代前後の遺物が大半を占め，ＳＸ19及びＳＸ20下層の7世紀代に遡る遺物は極めて少ない。174・200はＳＸ19最下層より，171～173・195・198・199・201・205～208・210・212・214・216は同下層より，175・186・189・194・196・197・202・220は同中層より，176～185・187・188・190～193・203・204・209・211・213・215・217～219は同最上層よりそれぞれ出土した遺物である。

171は，縄文晩期突帯文系の深鉢である。口縁部直下外面に刻み目突帯を貼付し，口縁端部にも刻み目を施した可能性がある。172は，弥生土器底部である。おそらく中形甕の底部となろう。外面は縦方向のミガキ調整が密に施され，内面はケズリ調整される。胎土中に多量の黒雲母粒を含むことに特徴があり，善通寺地域に多見するものである（蔵本1999）。173も，外面の調整はやや異なるが，胎土は共通して多量の黒雲母粒を含む，弥生土器甕底部片である。いずれも後期中葉から後半代に位置付けられる。174は，土師器広口壺である。口縁部は中位でやや屈曲して内湾気味に開き，内外面ハケ調整が卓越する。布留式古相に併行する可能性がある。175は，須恵器坏蓋である。天井部は回転ケズリが施され，ＴＫ209型式期前後に位置付けられよう。176・177は，須恵器坏である。平底形態の坏で，やや体下半部が丸みを帯びて立ち上がることから，庄屋原4号窯跡期に下る(1)。178も須恵器坏である。外底面には，外方へ踏ん張るやや高めの高台が貼付される。上記平底形態の坏と，ほぼ同時期に位置付けられよう。179は，須恵器平高台碗である。すべっと1号窯期前後に位置付けられ，9世紀後半代に下る。180は，土師器平高台碗である。底部小片のため時期的な位置付けは困難だが，概ね上記須恵器とほぼ同時期と考えておく。181は土師器



第36図　ＳＸ19出土遺物実測図１（１/４）

碗である。外底面には外方へ踏ん張る高台が貼付され，12世紀代に下る。182・183は，黒色土器Ａ類碗である。断面三角形状の低い高台が貼付される183が，若干後出する可能性が

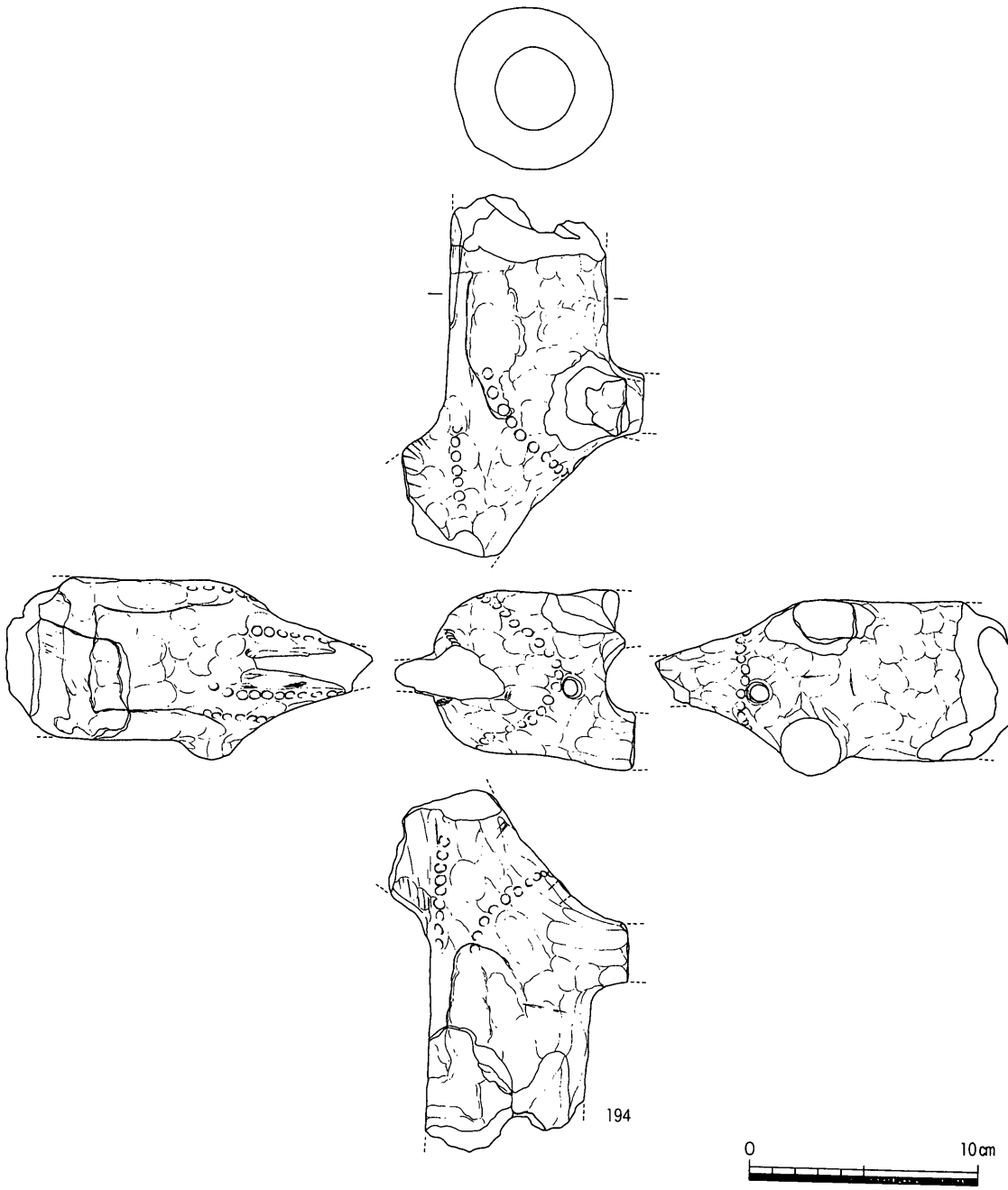


第37図　ＳＸ19出土遺物実測図２（１/４）

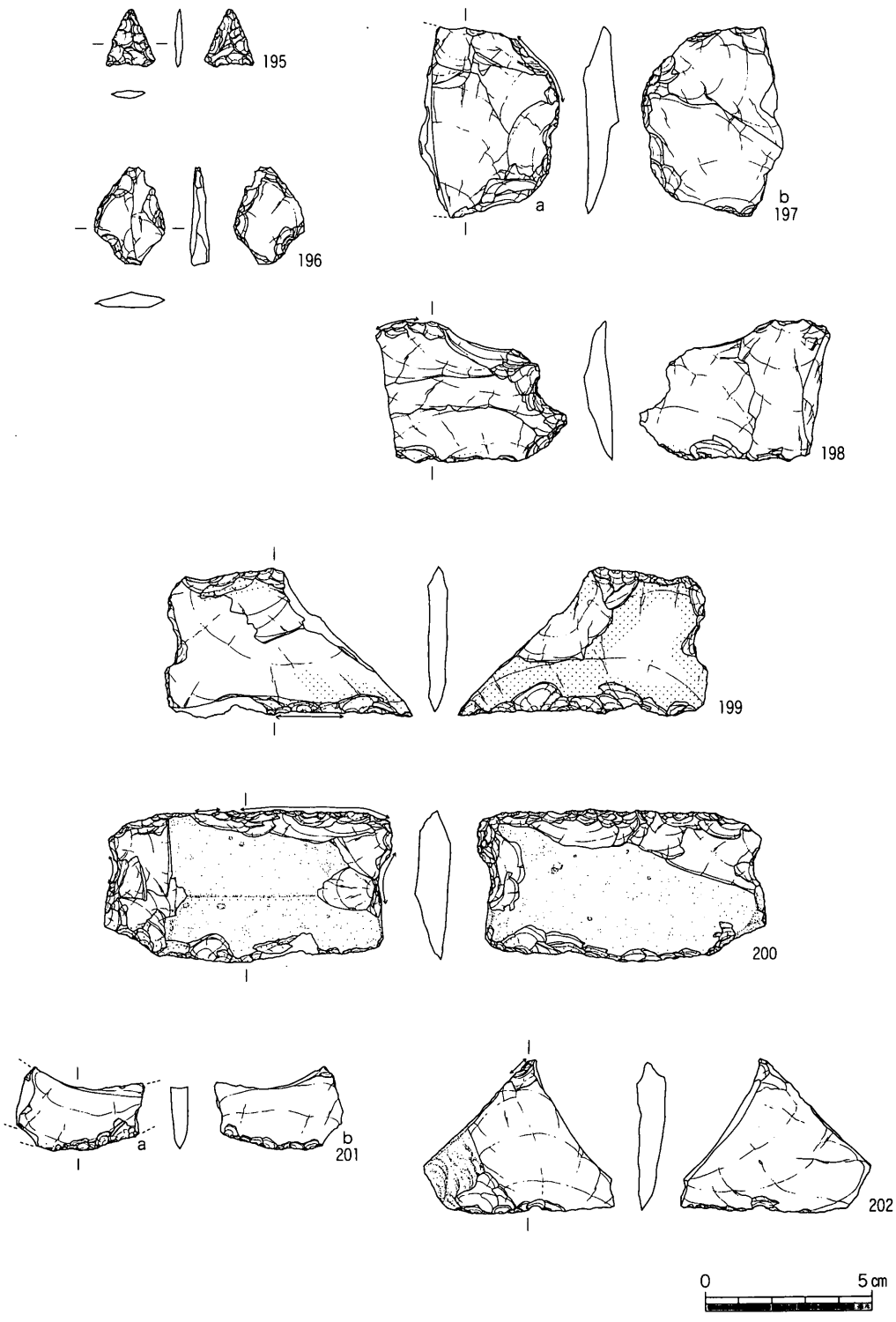
ある。しかし，両者共概ね12世紀中葉を前後する時期に位置付けられ，土師器碗と大きな時期差は認めない。184・185は，須恵器甕である。外底面は回転ケズリが，体部中央には一条の沈線が施される。体部形状に若干の相違を認めるが，調整手法等は共通し，概ねＴＫ209型式期前後に位置付けられよう。186は，底部円盤状を呈する須恵器鉢である。本形態の鉢では，外底面に多数の刺突文が施されるものが通例だが，本例にはそれを欠落する。上記184とほぼ同時期とみて大過ない。187・188は，土師器甕である。187は口径から判断して，小形の甕となろう。口縁部はやや内湾気味に開き，端部付近を小さく外反させて外上方へ摘み出す。布留系甕の影響をやや残した形態で，184等とほぼ同時期に位置付けられよう。188は，口縁部を強く折り返して外反して開き，端部を上方へ摘み上げる形態で，９世紀代前後に下る。189は，須恵器短頸壺として報告するが，小片のため他器形となる可能性も残る。焼成は甘く，灰白色を呈する。190・191は，土師器竈である。190は，図示した庇下面にも煤が付着することから，焚口部上方の掛口部の破片としたが，焚口側縁の破片となる可能性も残る。庇内外面のみハケ調整が施される。191は，掛口部の小片であろう。外面には縦ハケ調整が施され，内面には煤が付着する。192は，須恵質の丸瓦片である。凸面は横方向のナデ調整が施され，凹面は布目圧痕が残される。193は，須恵器大甕である。口縁部は，外面に粘土紐を貼付して矩形に肥厚させ，端部を内側へ鈍く挽き出す。体部外面は平行タタキの後カキメを施し，内面は同心円の当て具痕が残される。また頸基部外面に，「Ｖ」字状のヘラ記号が施される。194は，土師質焼成の土馬である。２片に割れてＳＤ135及び本遺構中層より出土したが，両破片は接合した。頭部及び体下半部，四肢を欠

損する。成・整形手法は破損部からの観察により，外径7.0cm程の中空円筒状の体部に孔を穿ち，脚部は円柱状の粘土塊をそれに挿入して成形される。また頸部と体部との接合は不詳だが，おそらく脚部とは異なり，体部の一端に粘土塊を貼付して捻り出して成形するものと考える。外面はナデにより整形され，タテガミはヘラ状工具で斜線を描き，手綱及び胸繋は竹管文を連珠状に連続させて表現する。また背部には，鞍とみられる粘土の剥離痕が認められるなど，表現は極めて写実的である。なお，胸部正面には径0.9cm程の円孔が穿たれているが，これは胴部が中空となることから，焼成時の胴部内の空気の膨張による破裂を防ぐために開けられたものと考える。

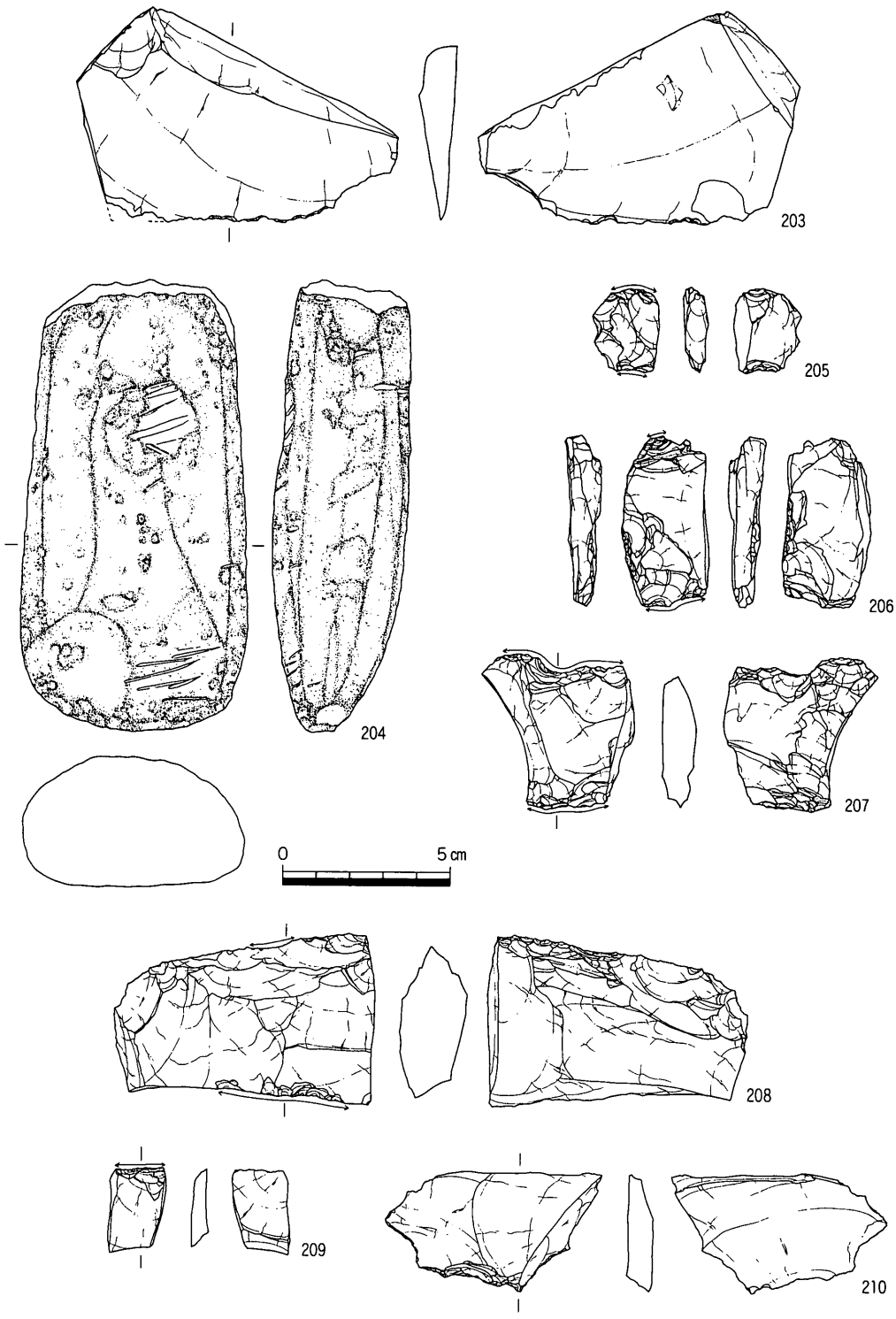
195～217は，いずれも弥生時代以前に遡る可能性の高い石器で，本来的に本遺構に伴うものではない。195は，平基式の石鏃である。196は，縁辺に細かな調整加工を加えて三角形状に整えることから，凸基式の石鏃未製品と考えた。197は，側縁に抉りがみられることから打製石庖丁であろう。b面背部に辛うじて，摩滅痕と線条痕を認めることから，打製石斧の転用品である可能性が高い。198～200も，側縁に抉りを有する打製石庖丁である。198の刃縁部は，表裏面の僅かな摩滅痕を切って，刃部再調整加工が施されている。199・200は，表裏面に強い摩滅痕がみられ，また刃部は再調整加工が施される。また200には，表裏面に自然面を認め，あらかじめ加工に適した薄い板状の石材が選択される。201は，下縁に曲線状の刃部を有するスクレイパーである。a面に弱い摩滅痕を認める。202・203は，直線状の刃部を有するスクレイパーである。202は背部に敲打による潰れがみられ，楔形石器削片を利用する。204は，玄武岩製の太型蛤刃石斧である。刃部に若干の刃こぼれを認める。また刃部は図示した正面側に若干湾曲し，身厚もやや薄いことから，使用により剥離した刃部を再度研ぎ直し，再加工を行っているものと考える。205～208は，上下端に敲打による顕著な潰れを認める楔形石器である。209は，楔形石器削片である。210は，下縁部に若干の調整加工が施される剥片。また側縁には，若干の微細剥離痕を認める。211・212は，上端に主要剥離面側からの粗い調整加工が施される剥片である。213も，楔形石器を使用した下縁に粗い剥離を認める剥片である。214は，周縁に剥離痕を認めることから石核としたが，明確な剥片は得られていない。215も，周縁に剥離痕を認めることから石核と考えた。全体に風化が進行しており，白色を呈する。216は，縦長剥片である。217は，砂岩製の叩石である。横断面形は概ね三角形状を呈し，2面に線状及びあばた状の敲打痕を認める。218は，断面三角形状を呈する鉄器片で，刀子峰部の破片と思われる。219は，一端が環状を呈する鉄器片で，下端を欠損しており，用途は不明。220は，銅芯銀張りの耳環である。



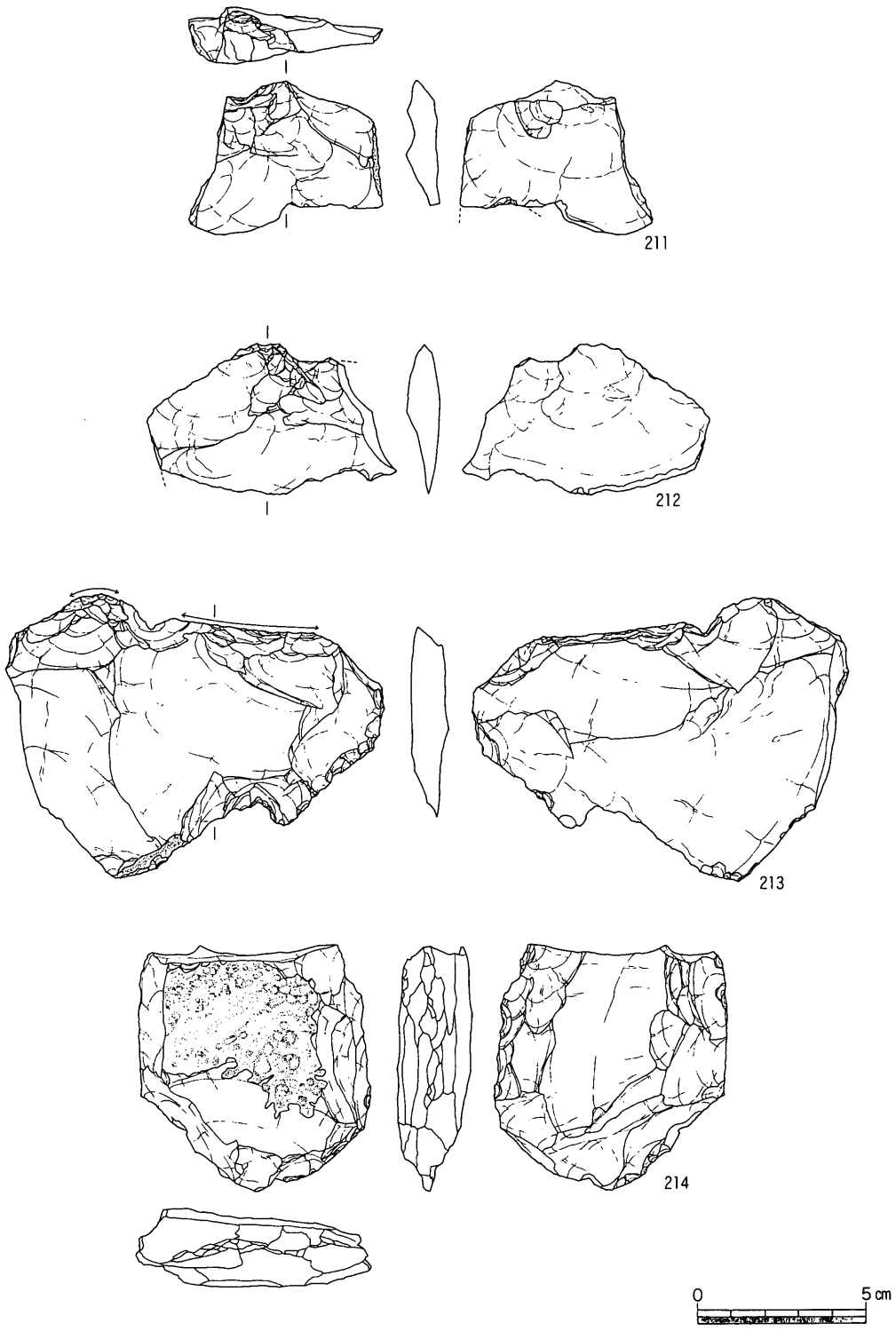
第38図　ＳＸ19出土遺物実測図３（１/３）



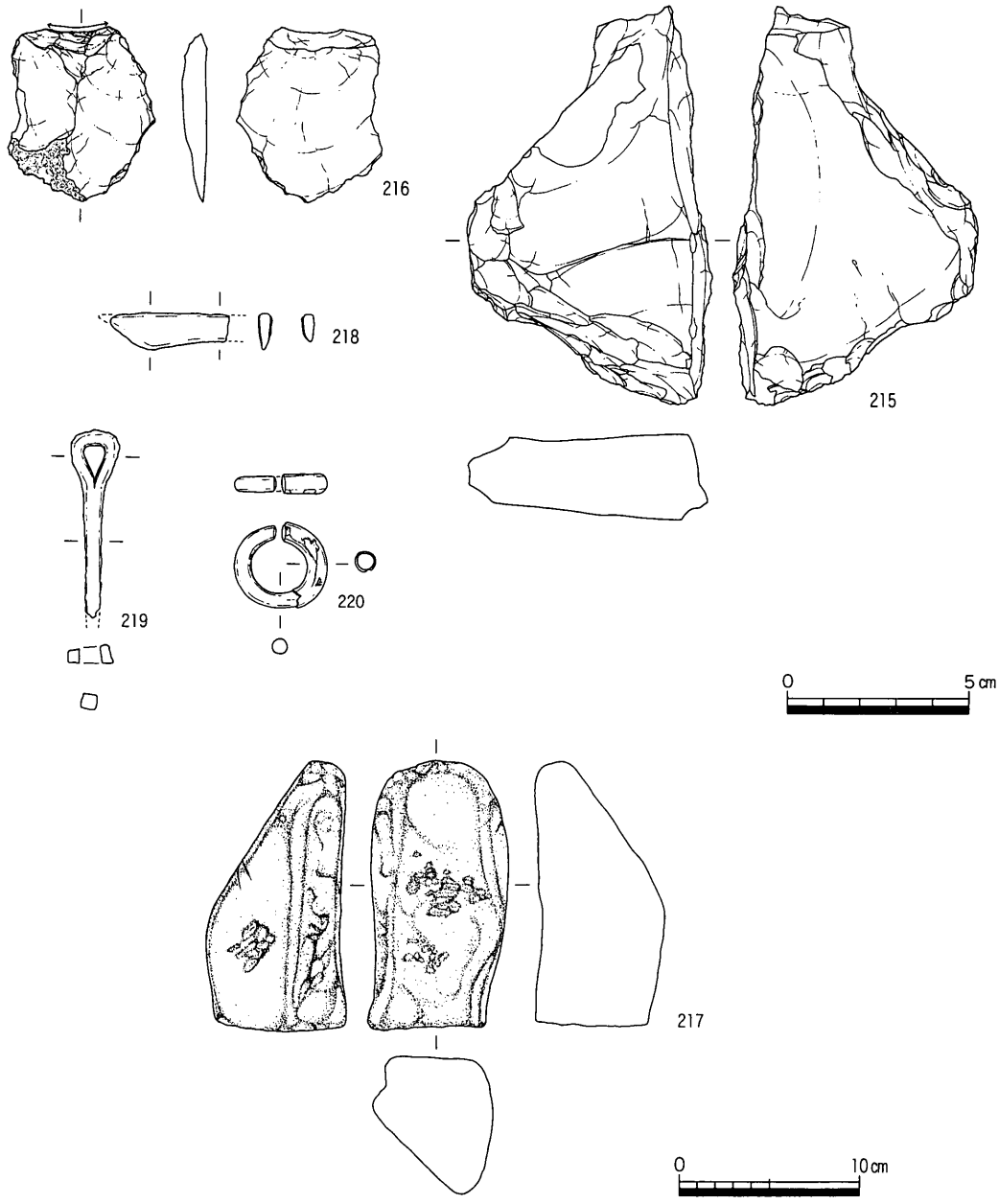
第39図　ＳＸ19出土遺物実測図４（１/２）



第40図　ＳＸ19出土遺物実測図５（１/２）



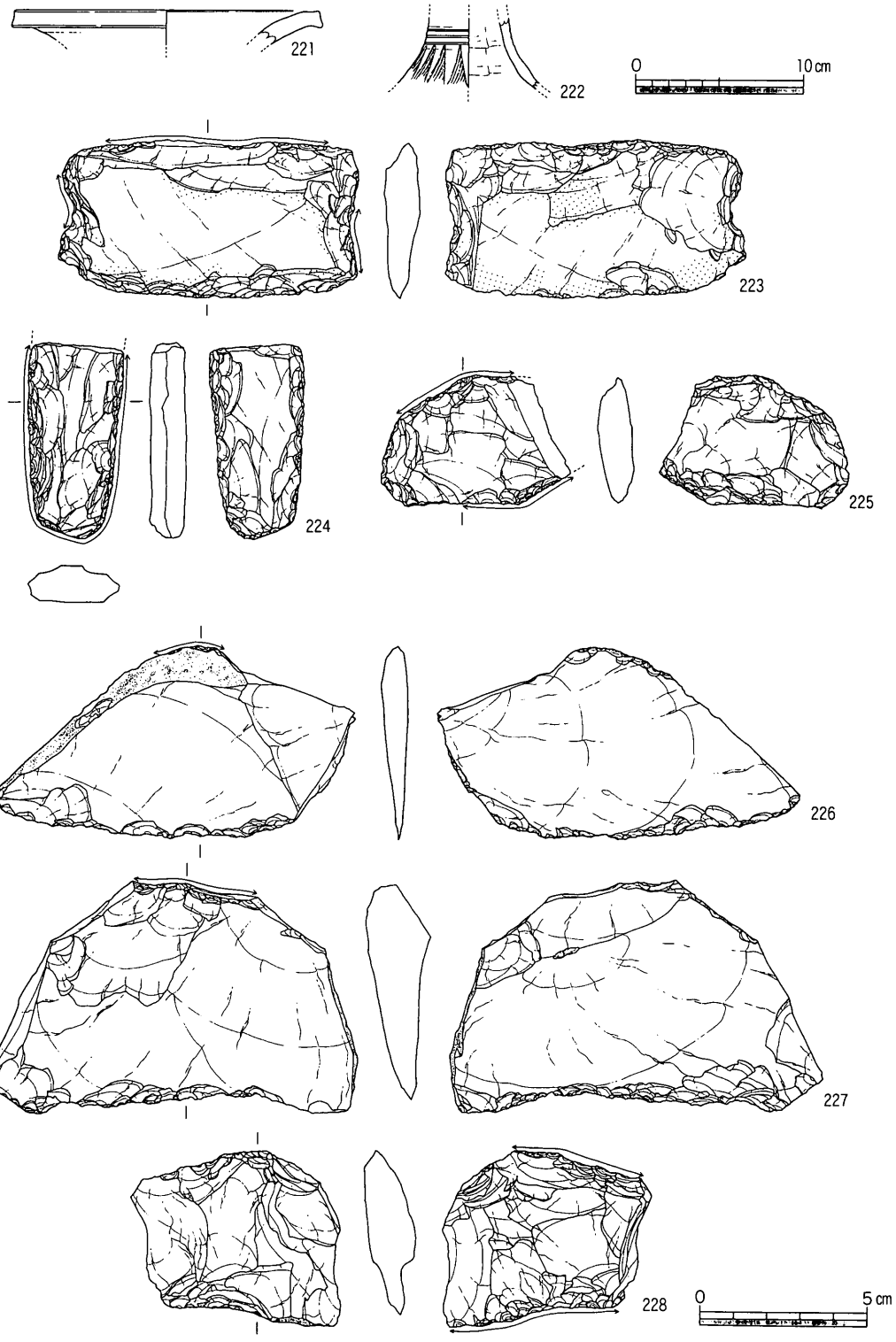
第41図　ＳＸ19出土遺物実測図６（１/２）



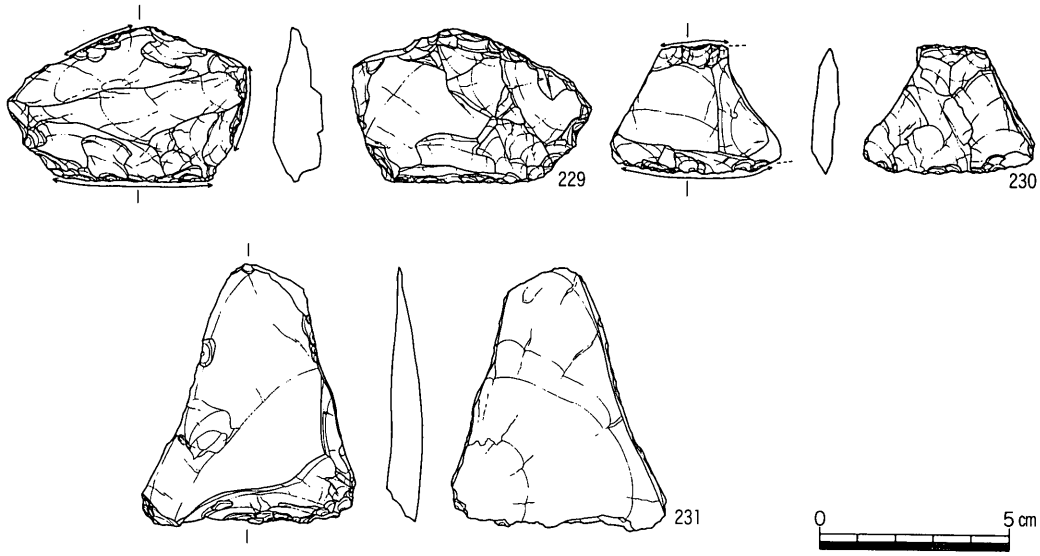
第42図　ＳＸ19出土遺物実測図７（1/2・1/4）

内径1.3～1.4cmで，やや横長の楕円形を呈し，開き部の幅は２㎜前後と狭く，断面形はやや丸みつな円形を呈する。銀メッキは，ほぼ図右半部が遺存しているのみ。

221～231は，ＳＸ20下層より出土した遺物である。図示した以外に，微量の土師器甕等の土器類と，サヌカイト剥片がやや多量に出土している。221は，弥生土器広口壺である。緩やかに外反して開く口縁部を有し，端部は下方へ鈍く摘み出す。後期を中心とした時期



第43図　ＳＸ20下層出土遺物実測図１（１/２・１/４）

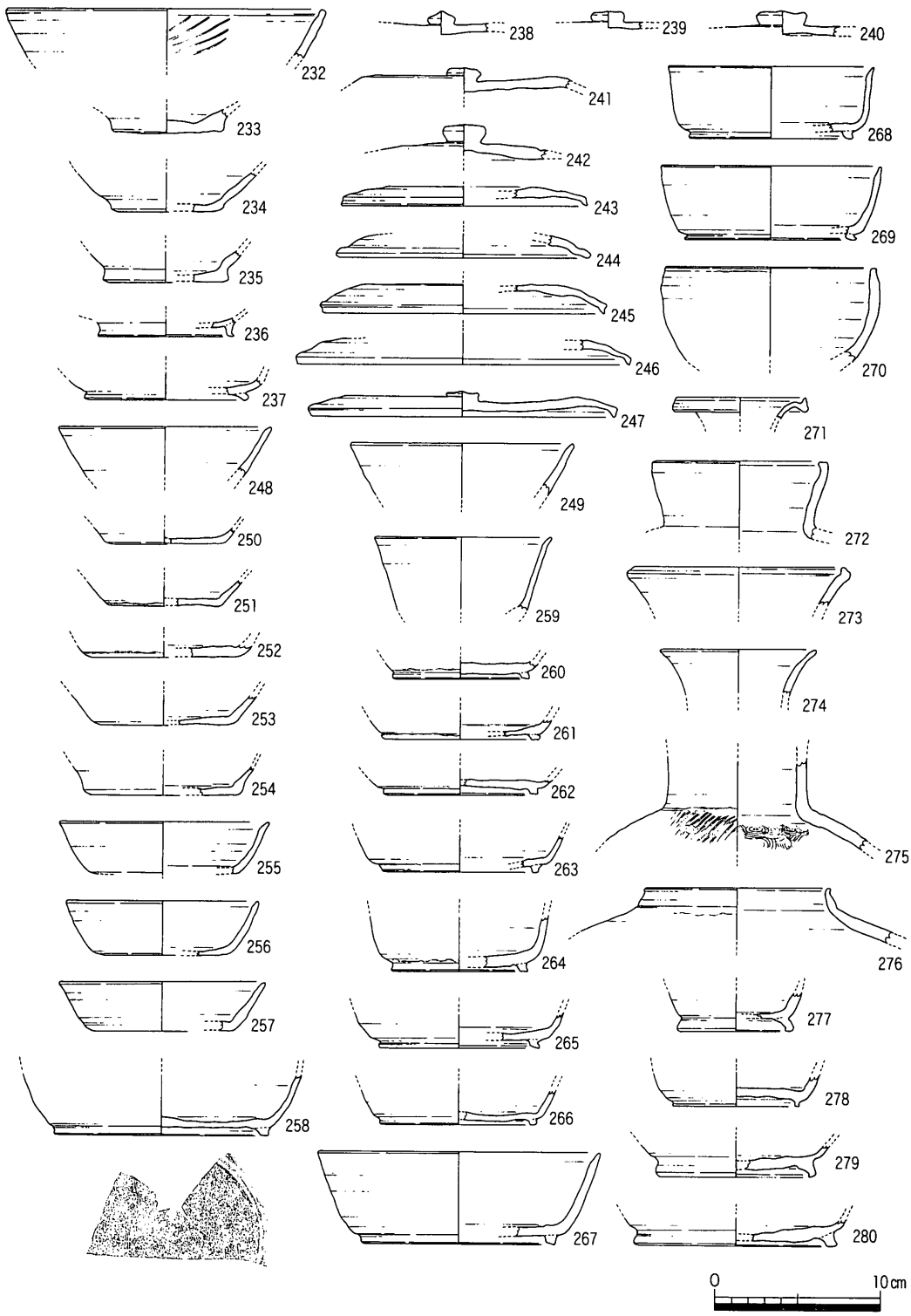


第44図　ＳＸ20下層出土遺物実測図２（１/２）

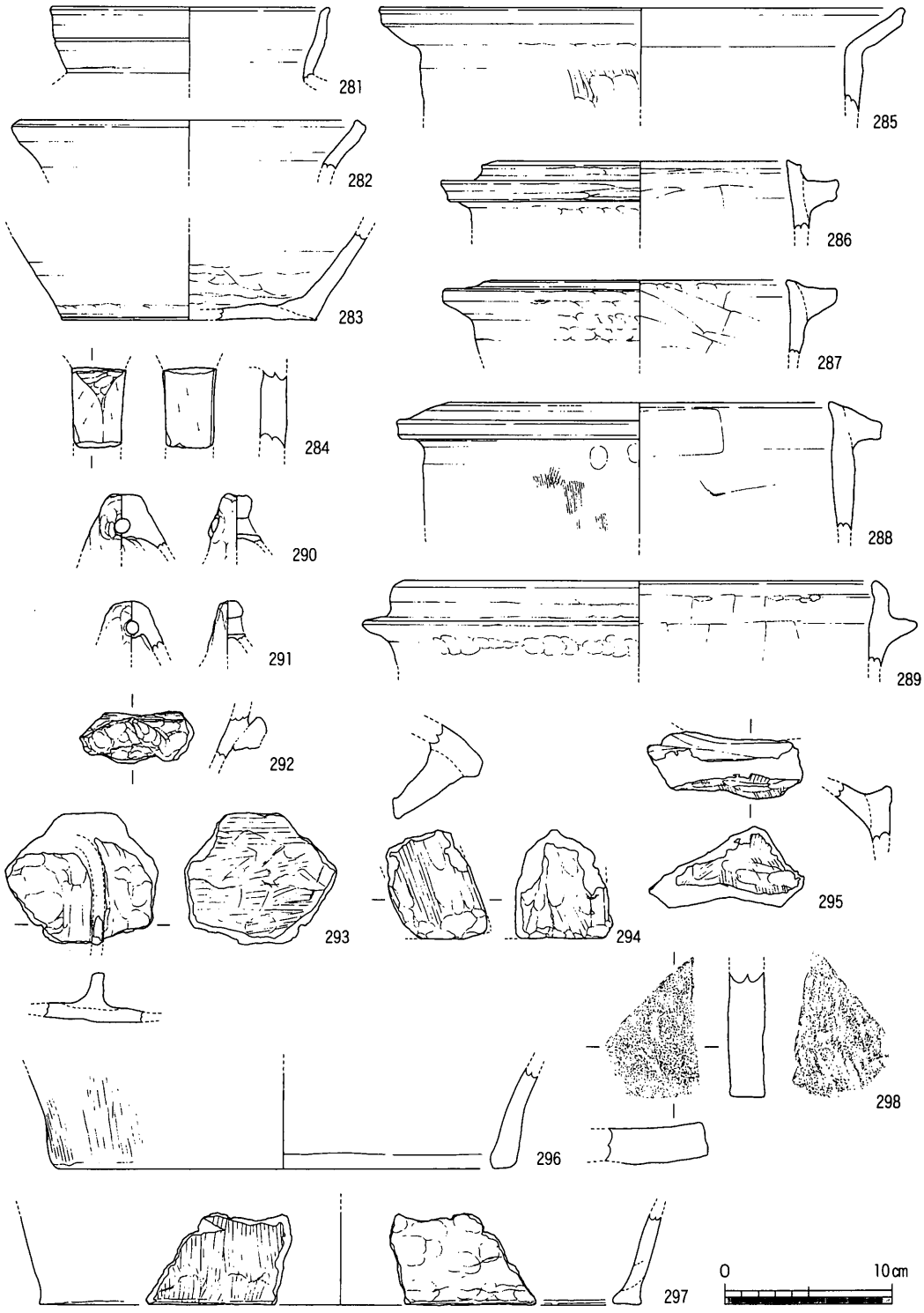
に位置付けられよう。222は，弥生土器高坏脚部の小片である。中位外面に３条の凹線文を配し，裾部に鋸歯文が描かれる。内面は横方向のケズリ調整が施される。中期中葉に遡り，特徴的な灰白色の胎土を有する。223は，両側に抉りを有する打製石庖丁である。表裏面に摩滅痕が認められ，刃縁部では摩滅痕を切って剥離が加えられており，刃部は再調整されている。224は，石槍の基部である。横断面は概ね紡錘形を呈し，周縁は丁寧に潰し加工される。225～227は，直線状の刃部を有するスクレイパーである。228～230は，上下端に敲打による潰れがみられる楔形石器である。231は，楔形石器削片を利用した下縁部に粗い調整剥離を加えた剥片である。

232～328は，ＳＸ20上層より出土した遺物である。232は，土師器坏である。口縁部は直線状に開き，端部を内側に鈍く肥厚する。内面には，斜め方向のミガキ調整（放射状暗文）を施す。小片のため，復元した口径にやや難点があるが，概ね８世紀中葉から後半代に位置付けられると考える。233～235は，土師器平高台碗である。高台部の形状には，若干のヴァリエーションがあり，細かな時期差を反映する可能性がある。233の内面には，二次的な被熱により煤が付着する。236・237は，土師器皿底部であろう。外底面には，外方へ強く踏ん張る高台が貼付される。232とほぼ同時期に位置付けられよう。238～247は，須恵器坏蓋である。ツマミや口縁端部の形状に若干のヴァリエーションを有する。宝珠形のツマミを有する238が最も古く，７世紀後半代を中心とした時期に，口縁部内面のカエリが退

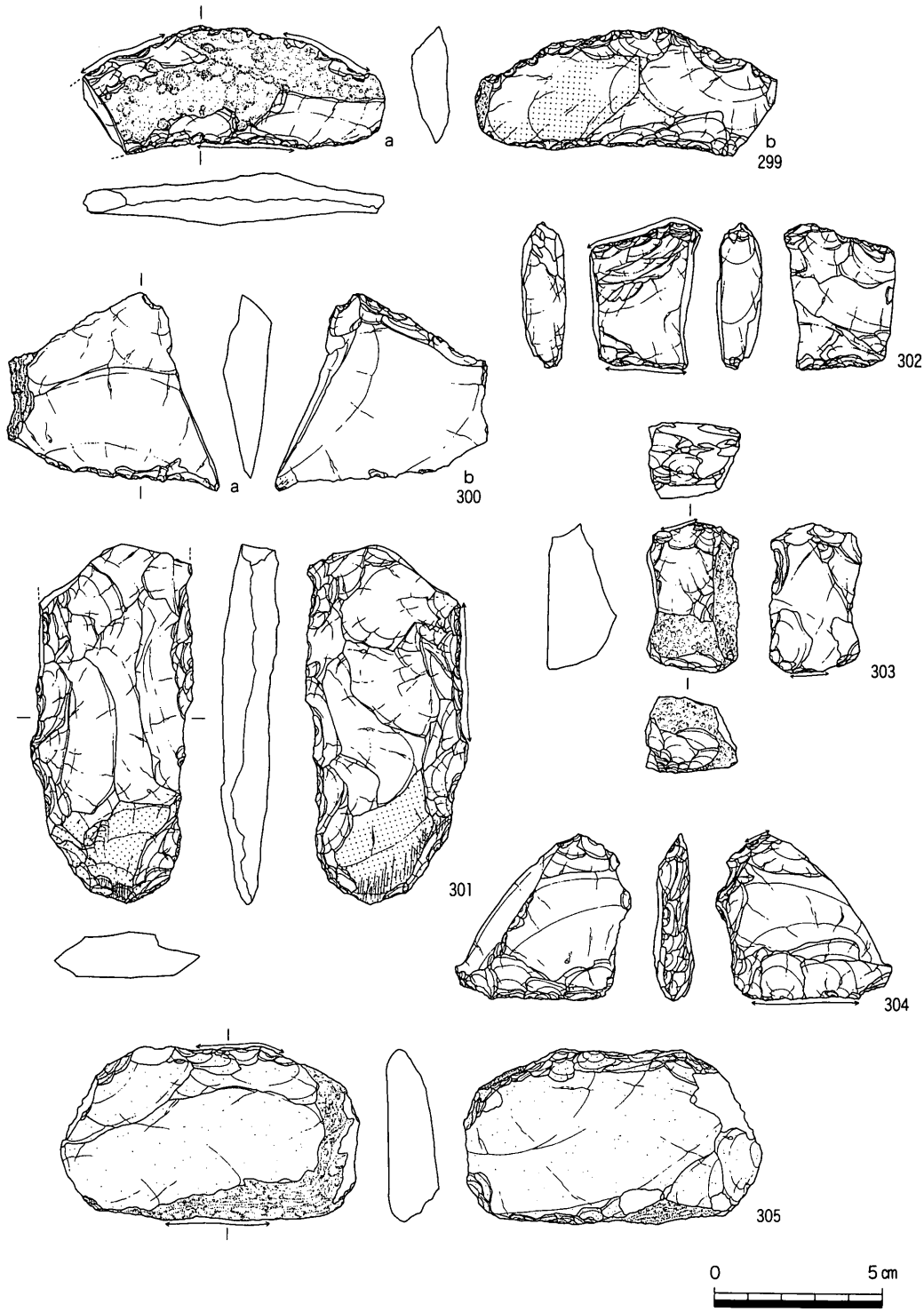
化した244が次いで7世紀末から8世紀初頭頃に，口縁端部を下方へ強く挽き出し，やや天井部が高く丸みを有する240・242・243・245・246が庄屋原3号窯から大師堂池1号窯期に，口縁端部の挽き出しが弱く，器高が低い239・241・247が最も後出し，すべっと1号窯期を中心をした時期に位置付けられると考える。なお，図示していないが243の天井部内面には，一文字とみられるヘラ記号が認められ，ほぼ同時期の綾南町北条池1号窯資料（植田1992）に類例があり，端部形状などからも同窯跡の製品である蓋然性が高い。なお，241の天井部内面は，非常に平滑に磨かれており，墨痕は明瞭ではないが硯に転用された可能性が高い。248～257は，平底形態の須恵器坏である。小片が多く，全形が知れる資料に乏しいが，体部下半が丸みを有し，相対的に器壁の厚い252・255～257が先行し大師堂池1号窯から庄屋池4号窯期に，器壁がやや薄く，体部から口縁部が直線的に立ち上がり，内外面に火襷痕を認める250・251・253がやや後出し，すべっと1号窯期前後にそれぞれ位置付けられると考える。なお，254は底部外周が直立気味に立ち上がり平高台状を呈することから，より後出する可能性があるが，小片のため断定できない。258～269は，高台付の須恵器坏である。高台部の形状を中心に，やはり時期差に置き換えられる若干のヴァリエーションを認める。貼付位置がより内側へ偏り，やや外方へ踏ん張る高台を有する264・265・267～269が先行し大師堂池1号窯期前後に，高台が低く矮小化し，底部外周縁辺に貼付される260・261・263・266等がやや後出し，十瓶山西2号窯期前後にそれぞれ位置付けられると考える。なお，258の高台内外底面には，「×」の他，「二」・「一」といった文字の可能性のある線刻を認めるが，小片のため断定はできない。270は，体部より口縁部が内湾して開く，いわゆる鉄鉢形を呈する須恵器鉢。十瓶山西2号窯期前後に位置付けられよう。271は，小形の須恵器壺口縁部として図示した。272は，直口形態の須恵器壺口縁部。端部は内方へ鈍く摘み出され，やや外傾する端面は凹線状に窪む。273は，中形の甕もしくは壺口縁部小片。端部は内上方へ強く摘み上げられ，内傾する端面は沈線状に鈍く窪む。274は，小形の長頸壺もしくは広口壺口縁部小片であろう。275は，須恵器壺頸部から肩部の破片で，体部外面には平行タタキが施される。276は，須恵器短頸壺の口頸部小片である。口縁部は短く内傾し，9世紀代に下る。277・279・280は，須恵器壺底部である。277は小形の広口壺等の，279・280は中形の長頸壺もしくは短頸壺等の底部となろう。281は，須恵器甕である。口縁部は内湾気味に開き，端部を外上方へ挽き出す。外面中位には，1条の沈線が施される。おそらく7世紀代に遡る。282も，ほぼ同時期に位置付けられる中形の須恵器甕口縁部小片である。283は，須恵器底部片。中形の甕もしくは壺の底部となろう。284は，



第45図　ＳＸ20上層出土遺物実測図１（１/４）



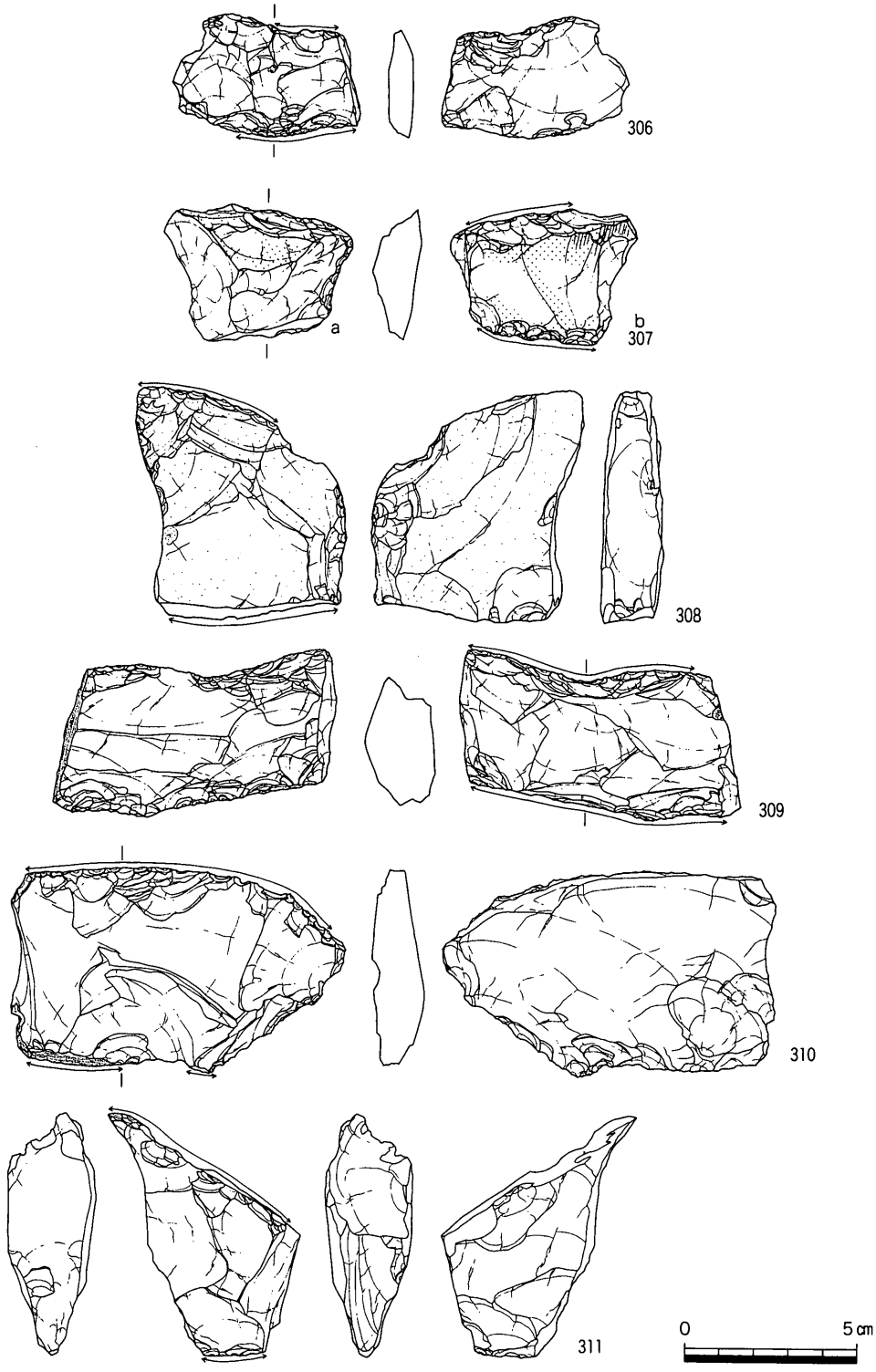
第46図　ＳＸ20上層出土遺物実測図２（１/４）



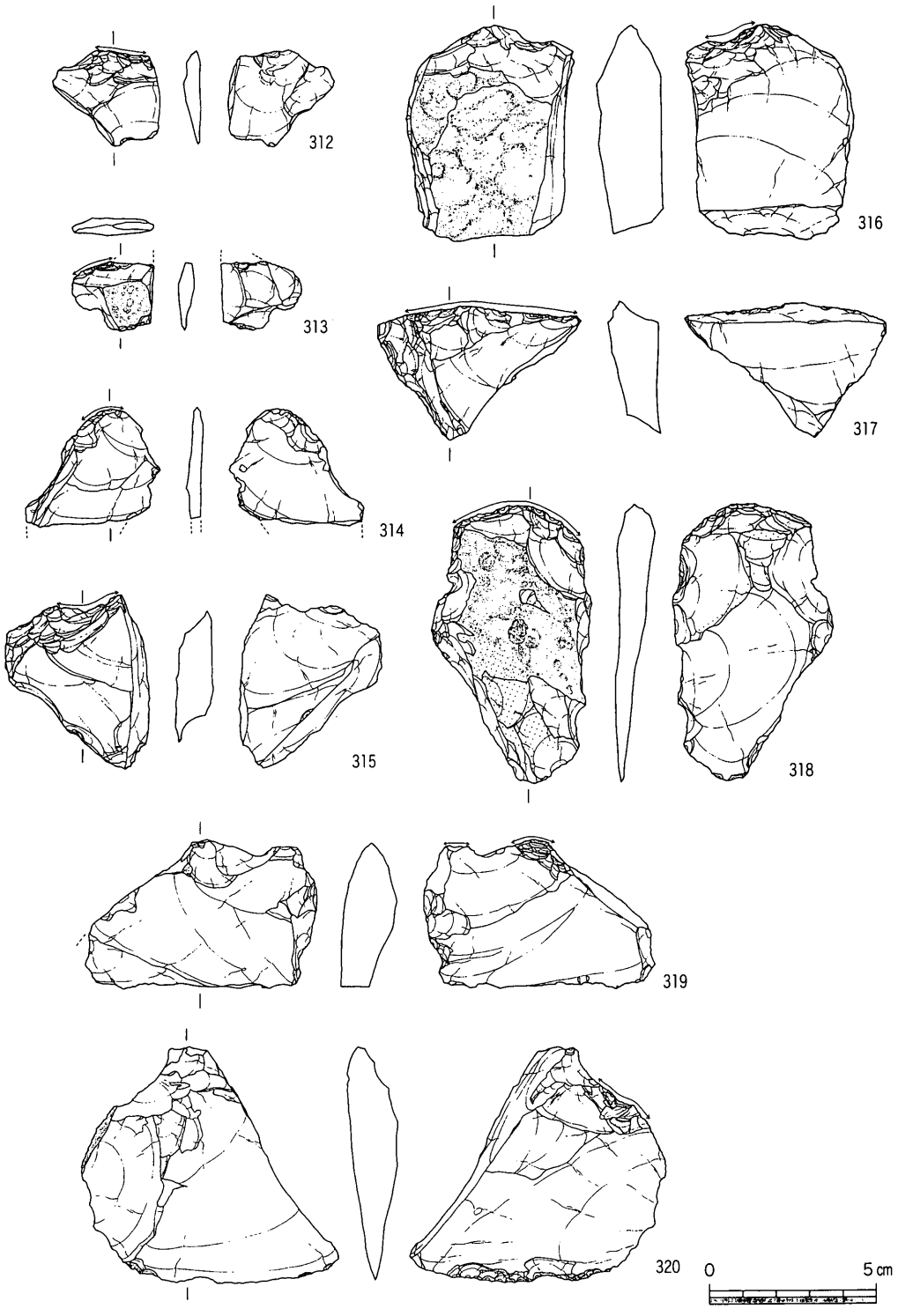
第47図　ＳＸ20上層出土遺物実測図３（１/２）

須恵器脚部と考えるが，小片のため器種を特定できない。横断面はいびつな五角形状を呈し，各面はシャープなケズリ調整の後ナデ調整が施される。おそらく図両側は透し孔となろう。また，内面上端は鈍く屈曲し，体部が接合されていた可能性がある。285は，土師器甕である。口縁部は強く折り返してやや内湾気味に開き，端部は鈍く上方へ摘み上げられるが，ＳＤ135・136出土資料程明確ではない。口縁部形状より，10世紀代に下る可能性が高い。286～289は，口縁部直下に水平に開く鍔部を付した，土師器羽釜である。口縁部及び鍔部形状に若干のヴァリエーションがみられる。口縁部と鍔部が一体化し，明確な口縁部の立ち上がりを認めない287・288と，鍔上位に短いながらも直立する口縁部を有する286，口縁部がやや長く伸び，端部を内側へ摘み出し，鍔部断面形が三角形状を呈する289の三者がある。前二者が先行し，10世紀前半代を中心とした時期に位置付けられ，後者はやや後出し，12世紀代に下る。290・291は，釣鐘形の土師器飯蛸壺。頂端面が鈍く溝状に窪む290と，丸く収める291があるが，明確な時期差を反映するものではないだろう。292は，土師器甕把手である。正面三角形状を呈し，体部器壁に対して痕跡的に突起状に貼付された退化形態で，８世紀後半から９世紀代に位置付けられる。293～297は土師器竈。293～295は，いずれも焚口部周辺の破片で，293は右上コーナー部分の，294は左基底部の，295は中央天井部のそれぞれ小片であろう。いずれも外面には断面矩形の庇が付される。庇の形状は各々異なり，別個体であると判断される。296・297は，基底部の破片である。小片のため復元された底径にはやや難があるが，法量に若干のヴァリエーションが想定される。また，底部形状もやや異なり，296では丸みを帯びた断面矩形に収めるが，297は縁辺を内外に摘み出すようにして下端に明確な平坦面を作る。298は，土師質焼成の平瓦片である。凸面は粗い縄目タタキが施され，凹面は布目圧痕を認める。

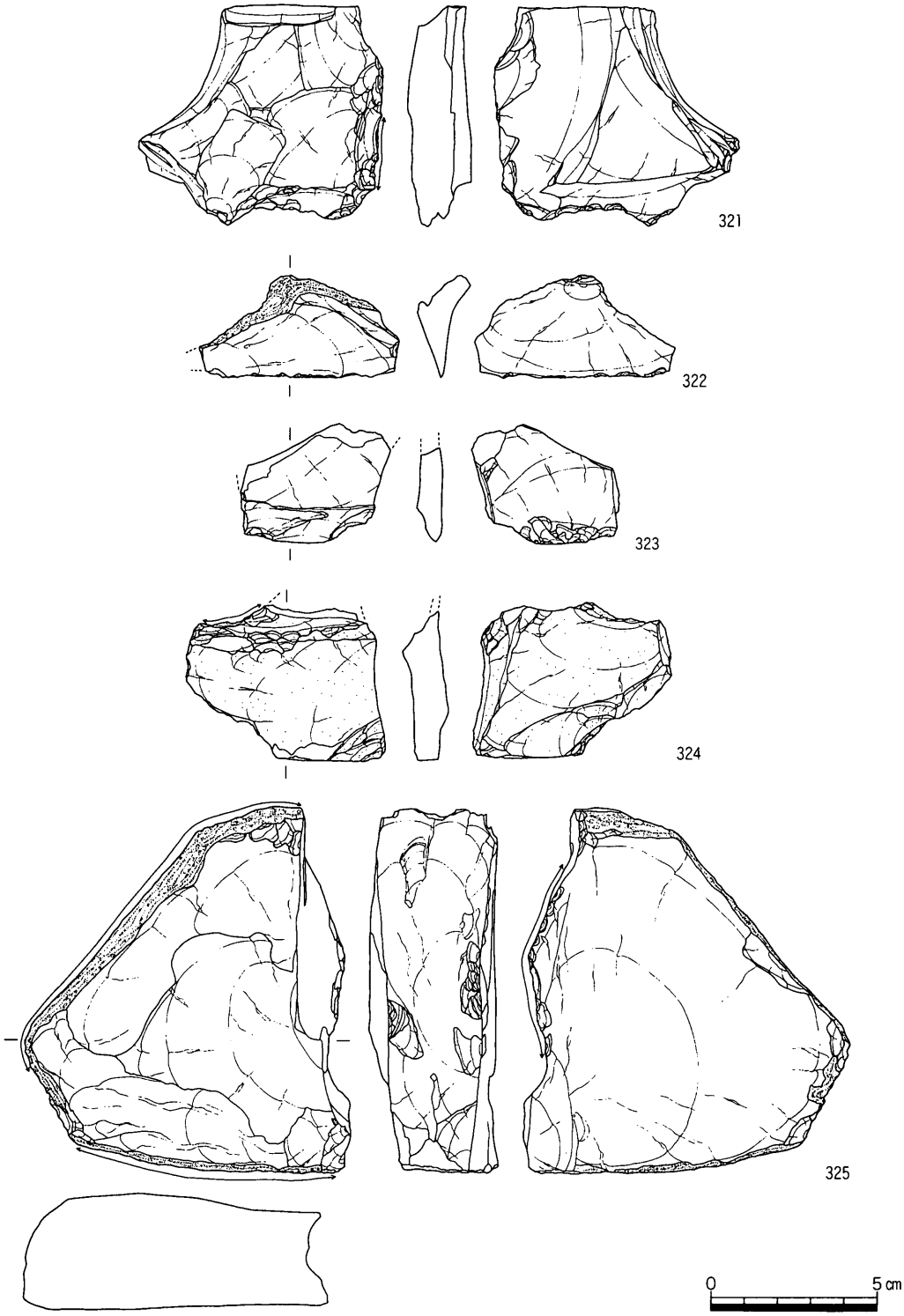
299は，曲線状の刃部を有するスクレイパーである。背部と刃部の一部に潰れがみられる。また，ｂ面には顕著な鈍い摩滅痕を認める。300は，直線状の刃部を有するスクレイパーである。ａ面右下端の突起部表裏に強い摩滅痕を認める。301は，打製石斧である。刃縁部表裏面に強い摩滅痕と，角度の異なる２方向の線条痕を認める。302～311は，上下端に敲打による潰れがみられる楔形石器である。大形のものと小形のものがある。302・308・312等裁断面をとどめるものが多い。303は，むしろ石核の残核とすべきか。305は，表裏面に顕著な風化が進んでいる。307は，表裏面に強い摩滅痕を認め，ｂ面上端部に線条痕がみられることから，打製石斧の転用品とみられる。312～321は，辛うじて一端に敲打による潰れがみられることから，楔形石器削片とした。318も，表裏面に摩滅痕を認めることから打



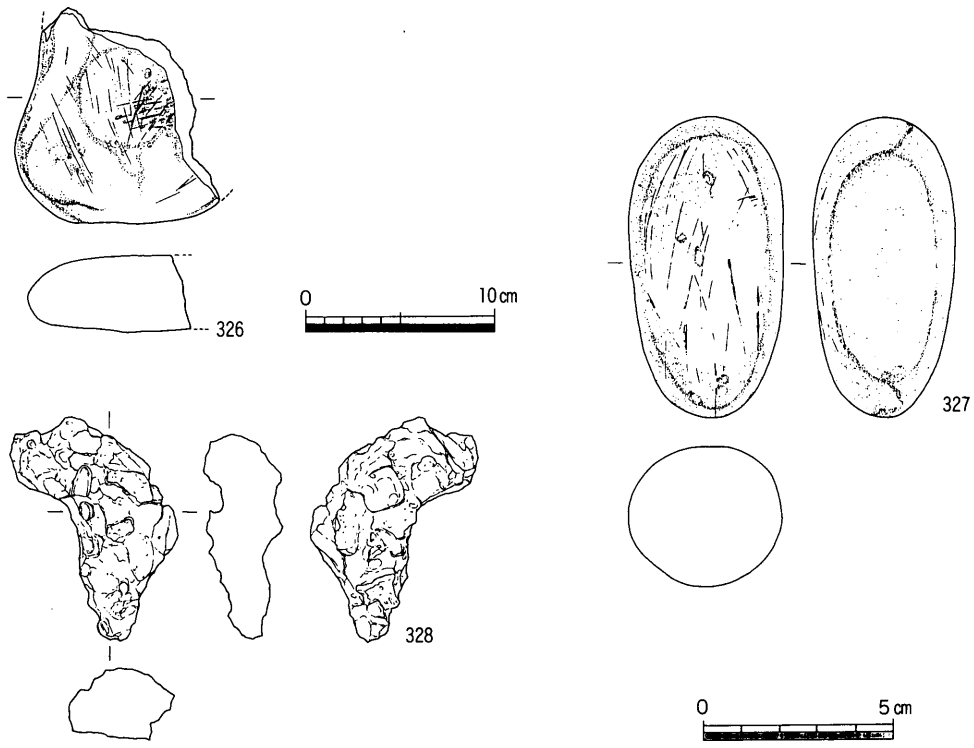
第48図　ＳＸ20上層出土遺物実測図４（１/２）



第49図　ＳＸ20上層出土遺物実測図５（１/２）



第50図　ＳＸ20上層出土遺物実測図６（１/２）



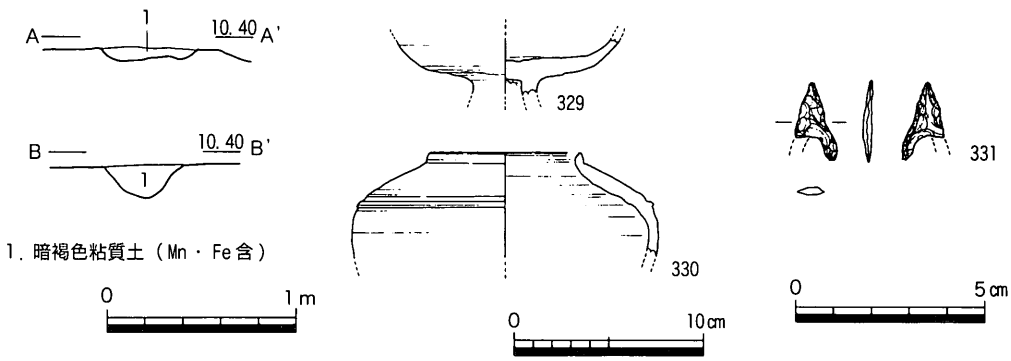
第51図　ＳＸ20上層出土遺物実測図７（1/2・1/4）

製石斧の転用品であろう。320は，下縁に微細剥離痕を認める。322は，下縁に微細剥離痕を認める使用痕のある剥片である。323は，下縁に若干の調整加工を認める剥片である。324も，楔形石器削片に若干の調整加工を施した剥片である。325は，周縁に顕著な潰れを認めることから石核素材としたが，敲打によって明確な剥片は得られていない。むしろ剥離面の風化が進行していないことからすれば，古代以降に下る火打ち石等となる可能性もある。326は，砂岩製の石皿である。上面に擦痕とあばた状の敲打痕を認める。327は，アプライト製の磨石である。長軸7.8cmの円礫の図示した左側正面を中心に擦痕等が認められ，一側面のみ使用される。328は，椀形鍛冶滓である。本資料の金属学的分析結果については後掲する。

溝状遺構

ＳＤ127（第52図）

Ｉ区南東部を緩やかに弓状に孤を描いて南北流する溝状遺構である。ＳＸ16より後出する。南北両端は調査区外へ延長し，検出長は約33.5mである。溝は，幅0.4～0.5m，残存



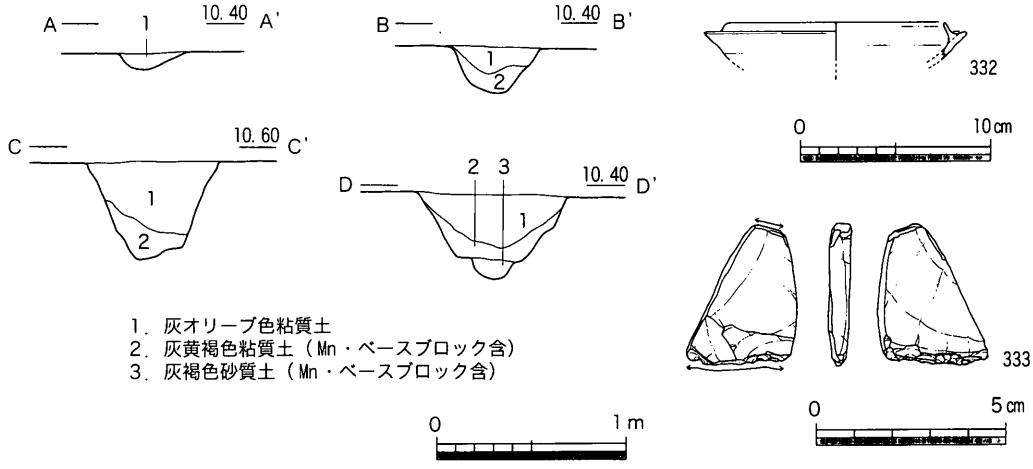
第52図　ＳＤ127断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/2）

深0.05～0.2mと浅く，断面形は皿状ないしはＵ字状を呈する。流路方向は弧状を呈するため明確ではないが，南半部でＮ40.5°Ｗ，中央部でＮ15.8°Ｗ，北半部でＮ11.9°Ｅと，約50°前後の振れをもって北流する。底面の標高は，南端部で10.28m，北端部で10.20mと概ね北に流下すると考えられ，また一方で水流による底面の部分的な浸食が顕著で起伏に富む。埋土は，色調にやや相違をみせるものの灰褐色系粘質土の単層とみられる。

遺物は，図示した以外には，器種不詳にまで小片化した土師器及び須恵器片が数点出土したのみである。遺物量は乏しい。３点を図示した。329は，須恵器高坏である。おそらく短脚の無蓋高坏の坏部片となろう。残存する脚部に透し孔の形跡は認めない。330は，須恵器短頸壺である。肩部外面に沈線状の強い段を認め，段下方は瘤状を呈し突帯状に鈍く突出する。上記出土遺物は，いずれもＴＫ208からＴＫ217型式期に位置付けられる。331は，縄文時代に遡る凹基式石鏃である。基部は深く抉り込む。器表面は風化が著しく，全体に白色化している。

ＳＤ128（第53図）

Ｉ区南半部Ｃ６・７グリット周辺を，平面逆Ｌ字状に配された溝状遺構である。重複関係より，ＳＤ129より後出する。西・南両端は調査区外へ延長する。調査区南端より僅かに蛇行しながらＮ27.5°ＷからＮ11.5°Ｗと16°程度の振れをもって約16m程北流し，大きく屈曲してＮ70°ＷからＮ94.5°Ｗと約25°前後の小刻みな蛇行を繰り返して約25m西進して調査区外へ抜ける。溝南側には，ほぼ同時期と推定される竪穴住居２棟を検出しており，居住域を区画する性格も想定される。南北溝部分をＳＤ128ａ溝，東西溝部分をＳＤ128ｂ溝と呼称して，以下報告する。なお，底面の標高は，ａ溝南端で10.20m，ｂ溝西端で9.96mを測り，高低差よりａ溝よりｂ溝へ流下していたものと考えられる。



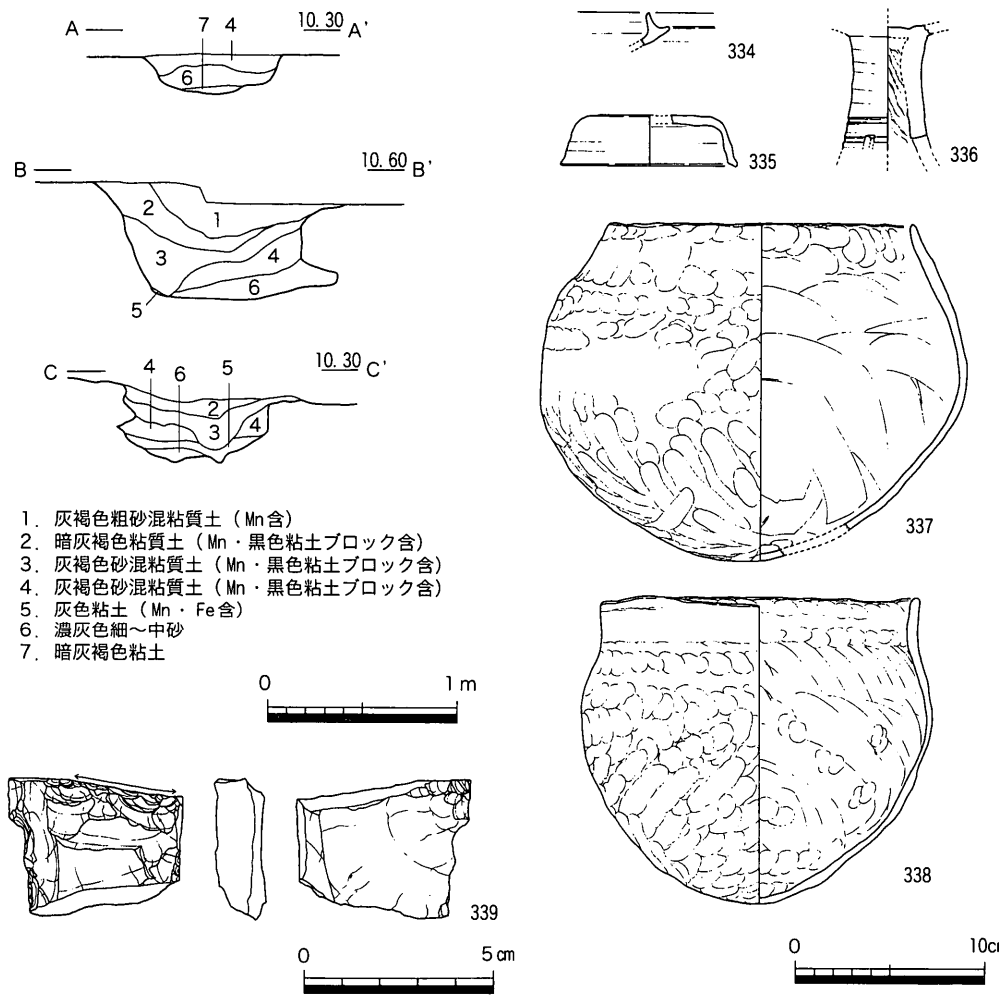
第53図　ＳＤ128断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/2）

ａ溝は，幅0.3～0.5m，残存深は僅かに0.1～0.25mと浅く，断面形は皿状を呈し，上面の削平が著しい。ｂ溝は，幅0.7～0.8m，残存深0.4～0.5mで，断面形は概ね逆台形状を呈し，ａ溝と比較すると比較的削平の影響は弱い。埋土は，ｂ溝西端で３層に細分された。上・中層と下層とでは，溝幅や埋土の様相は大きく異なり，下層上面の溝側壁部には浅い段状のテラスがみられ，下層堆積後に改修が行われたこと，改修により溝幅が拡大したことが推測される。この改修痕は，ｂ溝東半部からａ溝には認められず，この部分では下層は徹底して除去されている。改修後は比較的穏やかな環境下で堆積したことが想像され，粘質土の堆積へと変化する。中層にはベース層のブロック土の混入が，比較的広い範囲に認められる。上位層へのブロック土の混入は乏しいことから，人為的な埋め戻しとは考えられず，側壁の崩落により堆積したものと想像される。

遺物は，縄文土器底部，土師器甕，須恵器坏・壺？等の小片が，上・中層を中心に若干量出土したのみである。２点を選んで図示した。332は，須恵器坏である。口縁部の立ち上がりは内傾して短く，受部は内湾気味に斜め上方へ延びる。器高がやや深くなることから，坏身として図示した。333は，弥生時代以前に遡る楔形石器である。両側縁には，裁断面を認める。出土遺物より，ＴＫ217型式期を前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＤ129（第54図）

Ｉ区中央部を南北に縦断して配された溝状遺構である。重複関係より，ＳＤ128・131より先行する。南北両端は調査区外へ延長し，約55.5mを検出した。調査区南端よりＮ28.5°Ｗの方向へほぼ直線状に配され，鈍く屈曲して北方向に流路を変更し，Ｎ7.1°ＷからＮ



第54図　ＳＤ129断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/2）

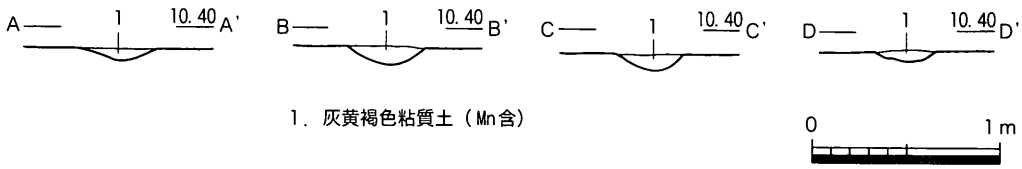
4.8°Ｅと約12°程の振幅で小刻みに蛇行しながら北流する。屈曲部北方でＳＤ130が西に派生する。溝は，幅0.7～1.3m，残存深は0.2～0.6m，上面の削平を考慮すれば，当該期の溝の中では比較的規模の大きな灌漑水路となろう。底面の標高は，南端部で10.00m，北端部で9.70mと傾斜角5.6‰で北に流下する。断面形は，位置によって若干相違し，概ね箱形ないしは逆台形状を呈し，また北半部下位層を中心に一部壁面を抉って袋状を呈する部分もみられる。埋土は，最大７層に細分され，上下２層に大別される。上層は，灰褐色系粘質土を埋土とする堆積層で，２層に細分されたが差異は乏しい。最上位の１層は，溝中央部に垂れ込んだ本章第１節で述べた第２面の包含層に相当し，溝本来の埋土ではない。上層は，後述する下層上面を大きく抉り込み，また下層よりやや溝幅を広げて掘削さ

れることから，下層堆積後の人為的な改修の可能性が想定される。調査区南端部では上面の削平により，確認できなかった。3層中に僅かに粗砂粒の混入をみることから，微弱な水流があったことが推測されるが，旺盛な水流の証左は乏しく，基本的には穏やかな環境下で徐々に埋没が進行したものと考えられる。なお，埋土中には黒色粘土ブロックの混入が顕著だが，人為的なものではなく，側壁が緩やかに開くことから，壁面の崩落に起因するものと考えられる。下層は，4層に細分された。最下位の7層は，調査区南端部分にしか堆積を認めず，上位の濃灰色砂層（6層）の堆積を伴う旺盛な水流によって，北半部の7層は削除されたものと考えられる。6層は，溝ほぼ全域に堆積しており，本層の堆積によって北半部では一部壁面が抉れて袋状となる。層厚は最大10cm前後と薄く，長期に亘る水流の存在は想定しがたい。6層上位の堆積は，粘土から粘質土へと変化し，溝本来の機能は衰退して徐々に埋没したものと考えられる。

遺物は，上層下位より出土したものが大半を占める。図示した遺物の他，縄文土器細片等が少量出土したに限られる。溝の規模からする遺物量は極めて乏しく，居住区からは離れていたことも想像される。6点を図示した。334は，須恵器坏身である。口縁部はやや内傾して短く，受け部は内湾気味に挽き出す。335は，須恵器蓋で，おそらく短頸壺の蓋となろう。天井部は平坦で，口縁端部は内傾する小さな端面を有し，外方へ僅かに摘み出す。336は，須恵器高坏脚部片。中位に2条の沈線を巡らし，脚下半部に3方向の細い台形状？の透し孔を穿つ。上記資料はいずれも，ＴＫ208からＴＫ217型式期に相当する。337・338は，粗製の土師器甕。類似資料に乏しいが，上記須恵器資料とほぼ同時期に位置付けられるものと考える。いずれもほぼ完形に復元される。外面には，指頭痕や指ナデ痕が顕著に残され，内面は板ナデにより平滑に仕上げられる。337は，算盤玉状の体部を有し，体部内容量4.0ℓを測る。調査区北半，Ｃ断面北側より出土した。338は，ボウル状の体部を有し，同様に内容量2.3ℓである。調査区南半，Ｂ断面北側より出土している。339は，上縁に顕著な潰れをみることから，楔形石器として図化した。

ＳＤ130（第55図）

上記ＳＤ129より西へ分岐して，平面クランク状に配された小溝である。ＳＤ129より流路方向Ｎ80.8°Ｅの方向へ概ね直線状に約8.0m程延長し，平面Ｌ字状に大きく屈曲して流路方向を変更し，Ｎ18.6°ＷからＮ46.9°Ｗと約30°程の振幅で大きく弧を描いて約15m程北西流し，さらに大きく屈曲して西に折れ，約2.3m程西進して途切れる。ＳＤ129より分岐して西流する南側東西溝をＳＤ130ａ溝，南北溝をＳＤ130ｂ溝，北側東西溝をＳＤ



第55図　ＳＤ130断面図（１/40）

130ｃ溝として以下報告する。

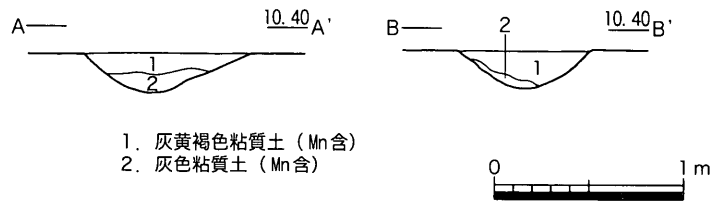
ａ溝は，幅0.3～0.4m，残存深0.06m程と浅く，断面形は皿状を呈する。底面の標高は，10.25m前後で，僅かに西に傾斜する。ＳＤ129底面とは合流部で約0.45m程の比高があり，むしろＳＤ129上層改修時の底面の標高値に近く，埋土の点でも上層に近似しており，上層改修時にＳＤ130が開削された可能性が想定される。なお，ＳＤ129にＳＤ130への揚水施設の痕跡は認められず，比高差からもＳＤ130よりＳＤ129への排水を想定する方が妥当であろう。

ｂ溝は，幅0.3～0.4m，残存深は0.1m程と，ややａ溝より上面の削平が乏しい。断面形は皿状を呈する。底面の標高は，10.20m前後で概ね一定し，ややａ溝より深く掘り込まれるが，流下方向を規制するほどのものではない。埋土は，ａ溝と共通する。

遺物は，出土していない。前記ＳＤ129との関係より，ＴＫ208からＴＫ217型式期に位置付けられると考える。

ＳＤ131（第56図）

Ⅰ区北半西壁際よりⅠａ区にかけて検出した南北溝である。重複関係より，ＳＤ100より先行する。Ⅰ区西壁よりN2.2° Eとほぼ真北方向へ約4.5m程延長し，鈍く屈曲して北西方向へ流路方向を変更し，N15.9° WからN40.5° Wと約25° 前後の振幅で小刻みに蛇行しながら約44m程延長して調査区外へ抜ける。溝は，幅0.7～0.9m，残存深0.2m前後で，断面形は皿状を呈する。底面の標高は，北端部で9.90m前後，南西端部で10.10m前後と緩やかに北に傾斜しており，底面の標高差から北に流下していたものと考えられる。埋土は粘質土が堆積し，２層に細分された。下位層はやや北に厚く堆積する。



第56図　ＳＤ131断面図（１/40）

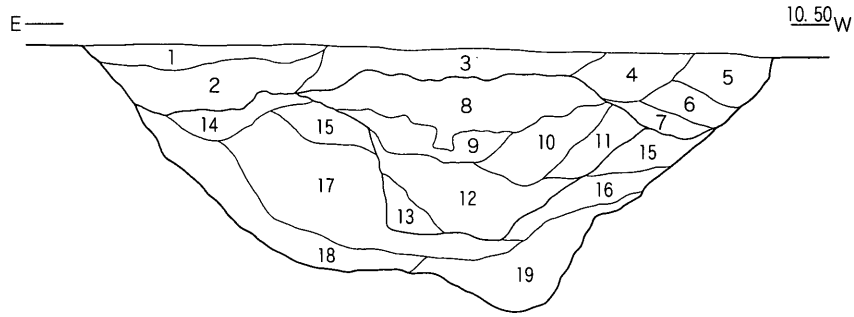
遺物は，器種不詳にまで小片化した土師器や須恵器片が少量出土したのみである。細かな時期を特定することは困難だが，層位的な位置関係や安定しない流路方向などの点で，7世紀前半代に位置付けられる溝状遺構群と共通する部分が多く，本遺構の帰属時期を推定した。

SD135（第57～69図）

Ⅱa区をほぼ南北に縦断して検出された幹線水路である。SX19上面より穿たれ，また中位でSD136が西に分岐する。南北両端は調査区外へ延び，延長約38mを検出した。流路方向は，SD126分岐点付近でN35.0°Wとやや東に振って約11.0m程延長するが，その南北両側ではN60.0°W前後の直線状に配され，規格性の高い大型幹線水路と考える。溝は，幅3.5～4.3m，残存深1.3～1.4m，断面形は概ね逆台形状を呈する。ベース層の包含層Ⅳ以下の砂～粘土層を開削しているため，周壁の崩落が著しかったとみえ，上面幅は一定せず，壁面は緩やかに内湾して擂鉢状を呈し，また埋土の堆積状況から数度の改修痕跡が窺えた。底面の標高は，南端部で9.1m前後，SD136分岐部南部で最深部となり8.9m前後を測り，北端部で9.3m前後であった。底面の高低差からすれば南へ流下する可能性が高いが，底面は起伏に富んでおり，一概に底面の高低差から流下方向を特定することは困難であろう。周辺地形の傾斜方向，水路の性格から判断して，北に流下していたものと考える。また，SD136分岐部南側が周囲より0.1m程深くなる点については，SD136へ分水するため，北側に堰状のものが設けられ，水流が一時堰き止められて反射流が生じ，底面が抉られたものと考える。

埋土の堆積状況は地点によって異なり，一様ではない。最も良好に堆積状況が確認された，溝南部の土層図にしたがって溝の埋没過程を復元しよう。土層はこの地点で19層に細分された。概ねレンズ状に堆積するが，下位層を大きく切り込んで堆積する土層群などを手がかりに，大きく3層に大別する。最上層は，遺構上面を西から東方向へ移動しながら堆積する，灰色系粘土～粘質土の一群である（1～7層）。最下位層の7層に微弱な水流による堆積の可能性を認めるが，基本的には溝機能が廃絶した後，窪地部分に堆積した自然堆積層と考えられる。溝全面に広く堆積し，層厚0.3～0.4m前後を測る。

上層は，後述する下層を大きく切り込んで堆積する土層で，全体として断面形が逆台形状を呈し，下層堆積後の改修溝であることは疑いない。6層に細分される。下位5層は，植物遺体を含んだ灰色系粘土層が概ねレンズ状に堆積し，穏やかな環境下で徐々に埋没が進行したものと考えられる。この点は後述する下層にも共通し，溝機能時には頻繁な「底



1．灰黄褐色粘質土（Mn・Fe含）
2．濃灰橙色粘質土（Mn・Fe・ベースブロック含）
3．灰橙色粘質土（Mn・Fe・炭化物含）
4．灰黄色粘質土（Fe含）
5．淡灰黄色粘質土（Fe含）
6．淡灰黄色粘土（Fe含）
7．灰色砂混粘土・濃灰色粘土ラミナ
8．淡灰色細砂・灰色粘土ラミナ
（砂層中にFe・粘土層中に植物遺体含）
9．濃灰色粘土（植物遺体含）
10．青味灰色粘土（19層ブロック含）
11．灰色砂混粘土
12．青味灰色砂混粘土（植物遺体含）
13．灰色粘土（植物遺体含）
14．灰色粘土（Fe含）
15．濃灰色粘土（植物遺体含）
16．青味灰色シルト質粘土（植物遺体含）
17．濃灰色粘土（灰色細～中砂ラミナ・植物遺体・木製品含）
18．灰色砂混粘土
19．暗灰色粘土（植物遺体含）

第57図　ＳＤ135断面図（1/40）

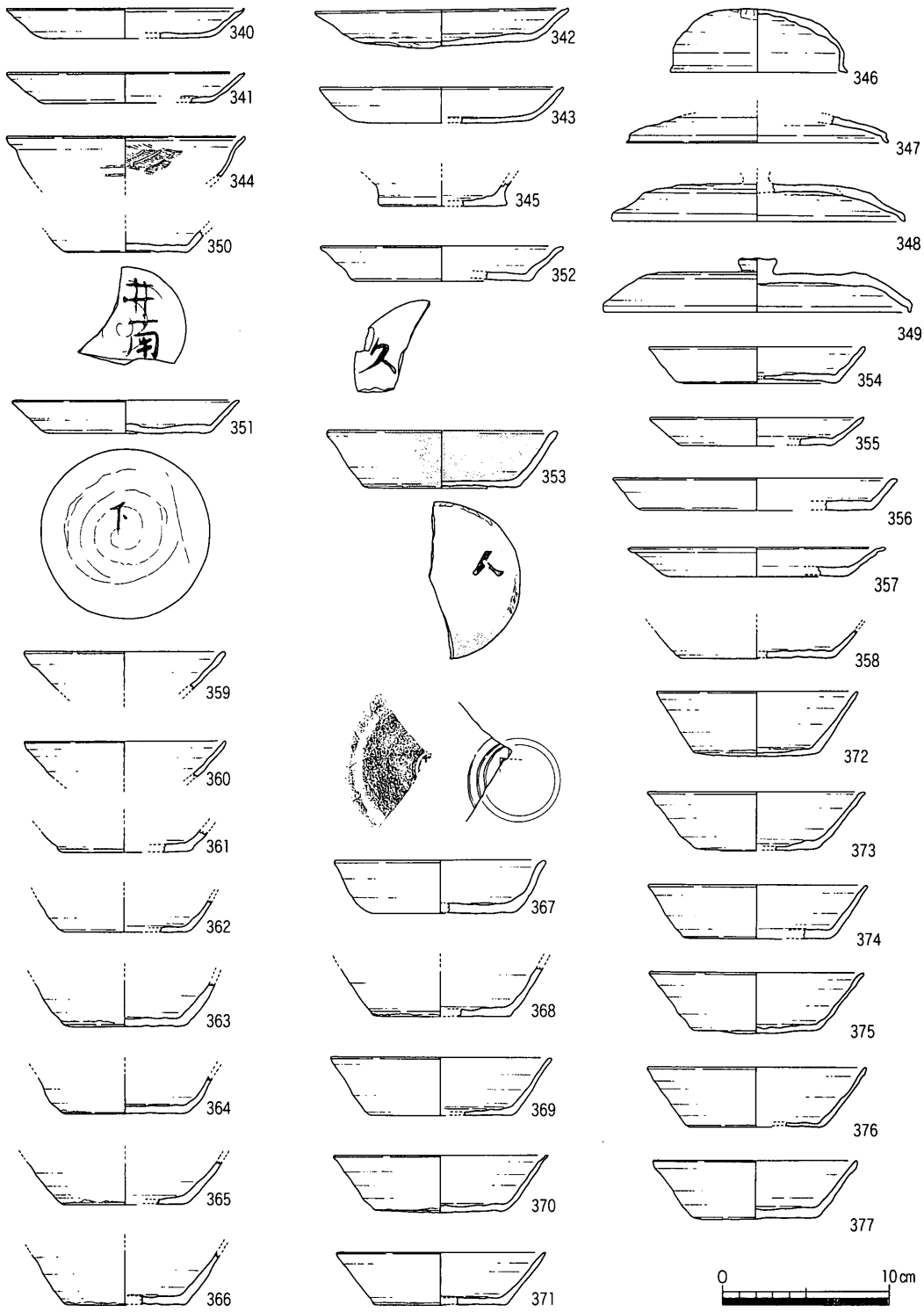
さらい」が行われ，砂層等の堆積土が極力除去された可能性が高い。最上位の８層に，水流による砂層の堆積が確認される。溝の埋没が著しく進展し，大きな流量を期待できない小水路状を呈するに至ってもなお，水路としての機能は維持され利用されたことが窺え興味深い。なお，溝北半部では上層下位の粘土層は，後述する下層上位の粘土層と分離できず，誤って下層として一部の遺物の取り上げを行ってしまった。したがって，一部下層として報告する遺物中に，やや時期の新しい遺物が含まれるのはこのためである。

下層は，溝底面より最上層下面にかけて厚く堆積する。本来的には，溝底面を中心に堆積する下位層（18・19層）と，下位層を大きく切り込んで堆積し改修の可能性が想定される上位層（14～17層）に二分すべきだが，調査時において分層して遺物の取り上げが行えなかったため，下層と一括して報告する。上記したように，埋土は粘土層を中心としており，溝さらいが頻繁に行われたためか砂層の堆積は顕著ではない。溝は断続的に改修を経ながら利用されたと推測され，溝利用の低調な時期には，低湿地状を呈しつつ微弱な水流により粘土層の堆積が大きく進展したものと考えられる。

下層を中心に，コンテナ７箱に及ぶ多量の遺物が出土している。出土したすべての遺物について図示することは不可能であったため，器種・器形のヴァリエーションが示されるように掲載遺物を選択し，また出土量の乏しい器種や特殊な遺物については，細片を含め

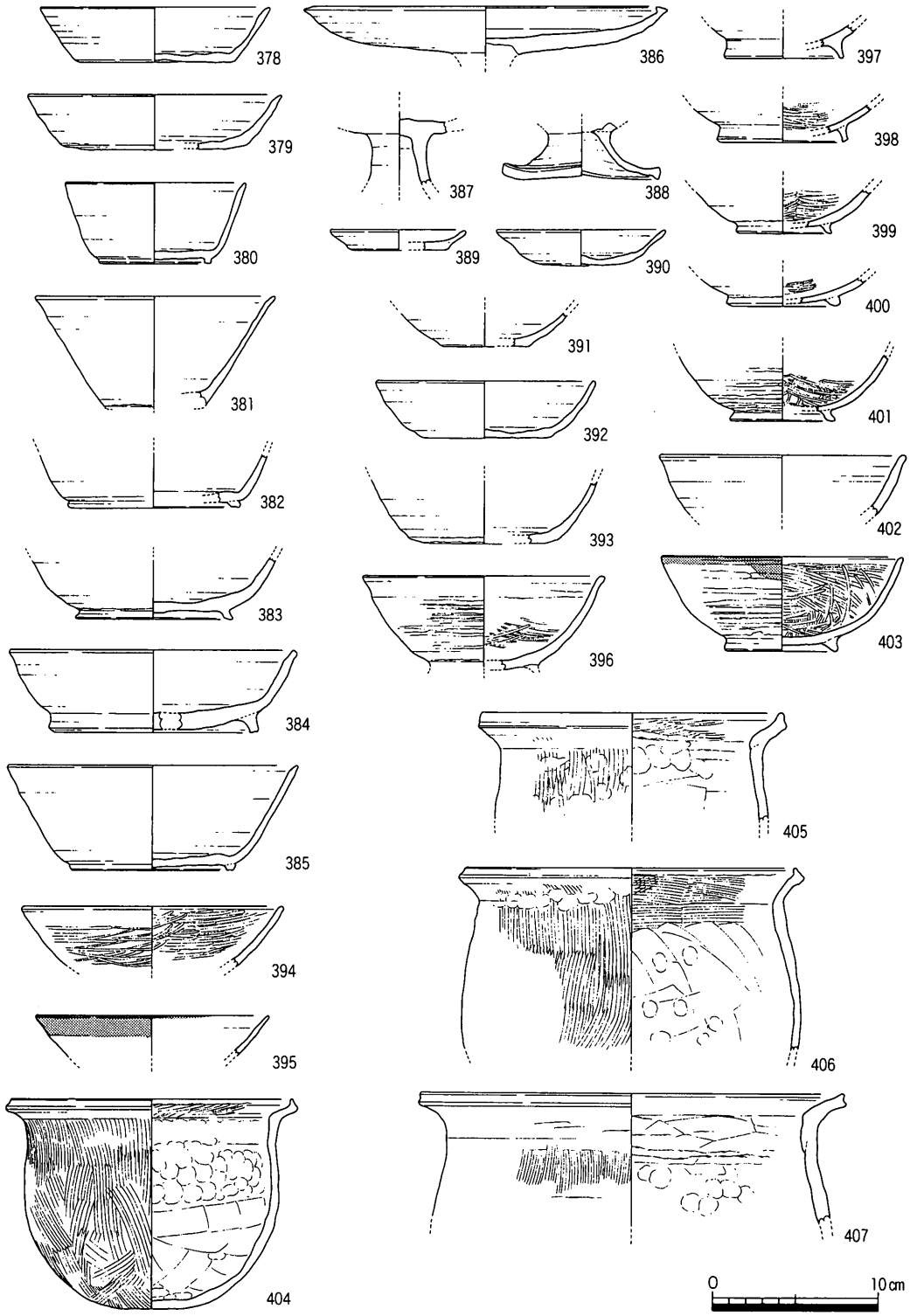
可能な限り図化した。したがって掲載された遺物の器種単位の比率は，おおよその傾向を示してはいるが，必ずしも実体を完全に反映したものではない。176点の遺物を掲載した。

340～343は，土師器皿である。口縁部が中位で鈍く屈曲して外反して開く形態（340～342）と，やや内湾気味に開く形態（343）の２者がみられる。後者は，前者に比してやや器壁が厚い。また，いずれも胎土は水簸された細かな素地粘土が使用され，口縁端部内面には沈線状の段を認める点で共通する。外底面はヘラ削り調整の後，丁寧なナデ調整を加える。341の口縁端部内面の段は，浅く幅の狭い稜線状のものに退化しており，時期的に他のものよりやや後出する可能性がある。なお，本遺跡から出土した確実な同形態の皿は，上記４点に限られ出土量は乏しい。細かな時期差はあるが，概ね８世紀後葉を中心とした時期に位置付けられると考えられ，本溝開削時の遺物と推定する。344は，土師器坏である。口縁部は内湾して開き，端部付近で小さく外反する。端部内面には沈線状の段を認める。また内外面は暗文状のミガキ調整が施されており，８世紀前半代に遡る。345は，土師器平高台碗である。346は，須恵器の蓋で，おそらく短頸壺の蓋となろう。天井部より鈍い稜をなして口縁部は垂下し，端部を外方へ強く摘み出す。下端面は僅かに窪む。７世紀中葉を前後する時期に位置付けられ，ＳＸ19からの混入の可能性を想定する。347～349は須恵器坏蓋である。天井部より鈍く屈曲して緩やかに下り，口縁端部は小さく下方へ摘み出す。347の端部は，回転ナデにより外反気味に強く挽き出され，やや古い様相を呈する。348・349は断面三角形状に下方へ摘み出しており，庄屋原４号窯跡期を中心とした時期に位置付けられよう。350～353は，須恵器皿･坏類の内，墨書のあるものをまとめた。350は，坏底部とみられる小片で，外底面に「井南」の墨書を認める。351・352は皿で，口縁部は外反して開き端部を丸く納める。351の外底面には「下」を，352には「久」の文字がそれぞれ墨書される。352は小片であり，「久」以外にも文字が書かれていた可能性が残る。353は坏で，外底面に「人」の墨書を認める。また，内面全面と外面の一部に多量の黒色タール状の付着物が認められ，内面の付着状況から内容物は液体状を呈していた可能性が考えられ，外面には指先で撫で付けたような痕跡もみられた。この付着物は，第２章に後掲する分析の結果，漆の可能性が高く，また黒色顔料が添加された可能性が示唆された。したがって，本坏は漆と黒色顔料の混和のための容器として使用されたと考えられ，また内底面には蓋に使用した和紙とみられる付着物が漆に包含されて残される。以上墨書土器は，溝南端部付近より各々近接して出土しており，一括投棄された可能性が高い。時期的にも，概ねすべっと１号窯跡期前後にまとまるようである。354～358は須恵器皿である。個体により，



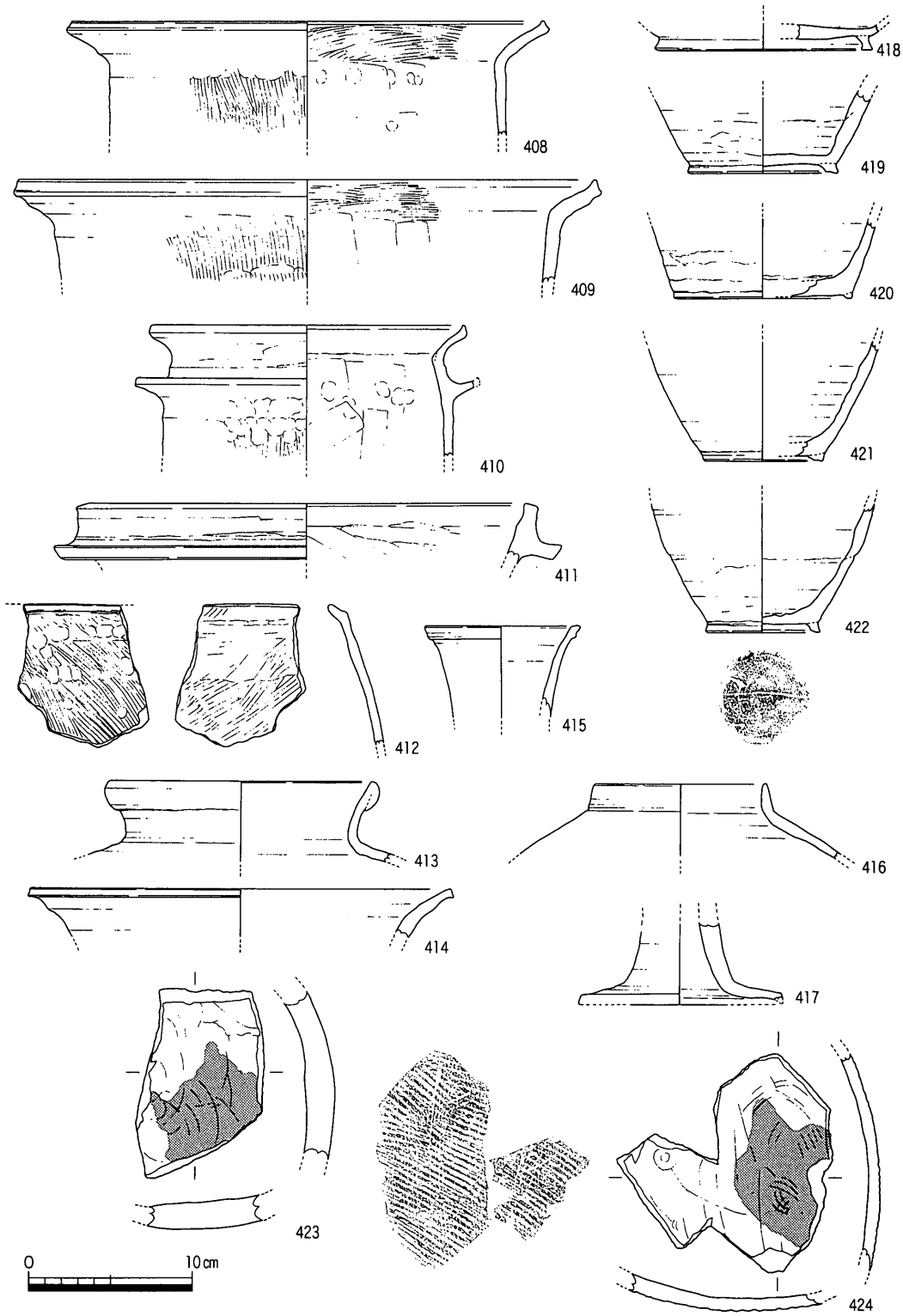
第58図　ＳＤ135下層出土遺物実測図１（１/４・１/２）

形態や法量が異なる。354は，口径13cm程度で口縁部は直線状に斜め上方へ開く。355は口径はほぼ同じだが，口縁部が外反して開き，器高はやや浅い。356は口径17cm程度の大形品で，口縁部は直線状に開き，端部はシャープに外方へ摘み出され，内傾する小端面をなす。357は，口縁端部を折り返して外方へ強く摘み出す。358は皿底部としたが，坏の可能性も残る。357が大師堂池1号窯跡期，356が庄屋原4号窯跡期，354が十瓶山西2号窯跡期，355がすべっと1号窯跡期にそれぞれ位置付けられると考える。359～379は平底形態の須恵器坏である。坏も形態や法量によりいくつかに分類される。367は，口縁部が内湾気味に立ち上がり，端部付近で小さく外反して開く形態。やや法量の大きな378・379とともに掲載した坏類の中では最も先行し，庄屋原3号窯跡期を前後する時期に位置付けられる。362～364・366・368・369・377は口縁下半部がやや内湾気味に立ち上がる形態で，庄屋原4号窯跡期を中心とした時期に位置付けられる。365・371・374・376は，口縁部が直線的に斜上方へ開く形態で，やや後出し十瓶山西2号窯跡期前後に位置付けられよう。また，370・372・373・375は，器壁が著しく薄く，胎土も水簸された細かな素地粘土が使用されており，口縁部が端部付近で小さく屈曲して外反気味に開く一群である。すべっと1号窯跡期に位置付けられると考える。361は底部がやや突出した平高台を指向する坏底部で，すべっと2号窯跡期前後に下る資料である。なお，367の内底面には，刻印が認められる。刻印は，径2.5cmに復元される円形の枠内に，文字の一部とみられる矩形の彫り込みを認める。類似した資料が，近年大内町坪井遺跡より出土している（小野他1999）[2]。380～385は高台付坏である。380は，口縁部が直線的に斜め上方に開き，外底面には直立する断面矩形の小高台を貼付する。381は，器高が高く，口縁部が大きく外反して開く。384はやや腰高の高台が，底部外周より内側に貼付され，また口縁部が内湾して丸みを有し，端部付近で外反して開く。やや高台が小さくなるが，383も同形態と考える。385は，口縁部は直線的に開くが，380と比してやや外傾度が強く，高台も底部外周近くに貼付される。高台の形状から推して，382も同形態となろう。時期的には，383・384が先行し7世紀代に遡り，380が大師堂池1号窯跡期に，382・385が十瓶山西2号窯跡期を前後する時期に，381がすべっと1号窯跡期にそれぞれ位置付けられると考える。386は須恵器高坏。坏蓋を反転して，脚部を付して高坏坏部とした形態。口縁端部は，鋭く内上方へ摘み出される。十瓶山西2号窯跡期を前後する時期に位置付けられる。387は高坏脚部で，7世紀代の短脚化した無蓋高坏脚部となるか。388は，高坏もしくは台付碗の脚部。脚端部は下方へ摘み出され，7世紀代に位置付けられる。

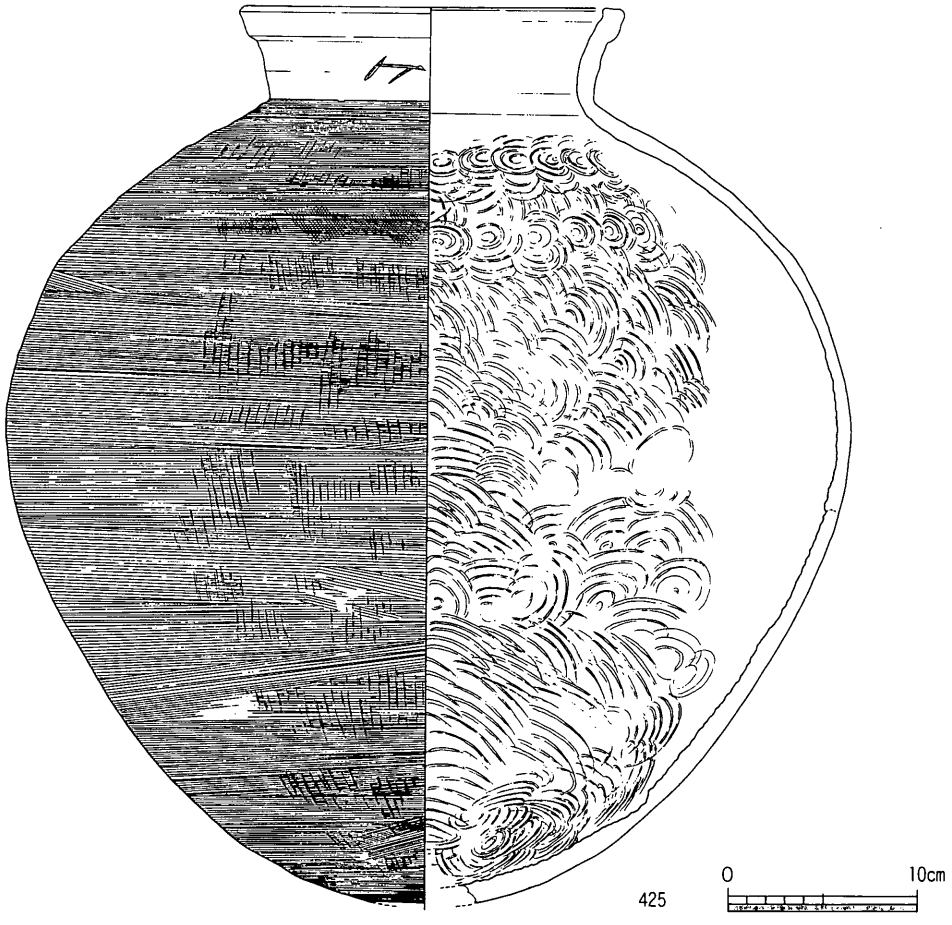


第59図　ＳＤ135下層出土遺物実測図２（１/４）

389は，土師質土器小皿。おそらく13世紀代に下る資料とみられ，後述する390～403の資料と共に，本来的には上層に帰属する遺物であろう。390も，10世紀末から11世紀初頭に下る土師質土器皿である。391～393は土師質土器坏。391がやや先行するが，概ね12～13世紀代に位置付けられる。394は土師質土器碗である。内外面丁寧な横方向のミガキ調整が施される。395は十瓶山窯系須恵質土器碗。小片のため坏となる可能性もある。体部外面のミガキ調整は省略されており，13世紀代に下る。396～401・403は黒色土器碗である。399のみ内外面に炭素を吸着させたB類碗で，その他はA類碗である。高台形状や内外面のミガキ調整等に，時期差を反映する若干のヴァリエーションが認められる。器壁が相対的に薄く，高台がシャープに整えられる397・398がやや先行し，12世紀初頭前後に，また高台が断面三角形ないしは逆台形状に退化し，器壁がやや厚く，幅広のミガキ調整が施される396・399・400・403等は後出し，12世紀中葉を前後する時期に位置付けられる。なお，401はややミガキの幅が狭く高台付近まで調整が及び，後出する一群の中でも若干遡る可能性がある。また，胎土の点でも，火山ガラスをやや多量に含む394・400・401・403の一群と，少量しか認めないその他の一群に分かれる。おそらく粘土採取地の相違を反映しているものと考えられるが，点数が限られることもあり詳細は不明。402は，瓦質土器碗もしくは小形鉢の口縁部小片。胎土や内外面の調整等の点から綾南町西村遺跡周辺での製作の可能性が高いが，小片のため不詳。404～409は，土師器甕である。404・405は小形の球形甕，406は中形の球形甕，407以下は大形甕となろう。外面は，体部を中心にハケ調整が卓越し，内面は口縁部に一部ハケ調整がみられるが，体部は板ナデ調整が基本である。口縁部形状に若干のヴァリエーションがみられるが，端部を上方へ摘み上げ，端面が鈍く窪む点で共通する。口縁部の屈曲が弱い406が，やや古く位置付けられる可能性はあるが，口縁部長が短くまた端部形状が近似することから，これら甕相互に大きな時期差をみることは困難であり，概ね9世紀代に位置付けられるものと考える。410・411は，体部上端に水平に開く鍔部を有する土師器羽釜である。各々口縁部形状が相違し，410の口縁部は頸部より強く折り返して外反して開き，端部を上方へ摘み上げる。411の口縁部は，鍔部より直立気味に立ち上がり，端部を矩形に収めつつ内側へ肥厚させる。鍔端部は，矩形に収めつつ上方へ小さく摘み上げる。いずれも9世紀後半代前後に位置付けられると考える。412は土師器竈の掛口部の小片であろう。口縁部は鈍く折れて内傾し，端部は丸く収める。内面には煤が付着する。413・414は須恵器甕である。413は，口頸部が緩やかに外反して開き，端部は外面へ折り返して玉縁状に肥厚する。類例に乏しいが，7～8世紀代に位置付けられる

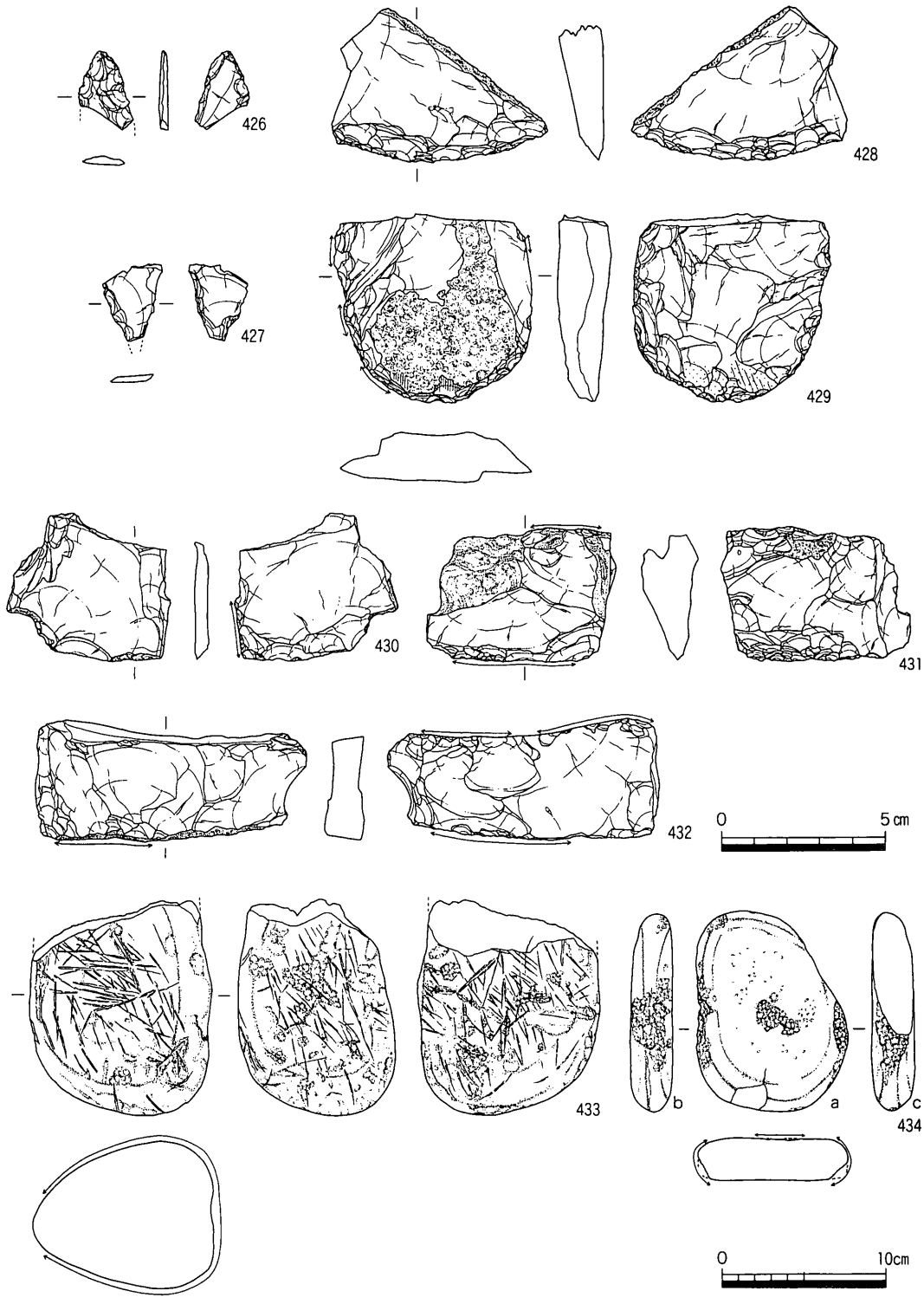


第60図　ＳＤ135下層出土遺物実測図３（１/４）



第61図　ＳＤ135下層出土遺物実測図４（１/４）

と考える。414は，緩やかに外反して開く口縁部の小片で，端部は矩形に収めつつ鈍く下方へ挽き出す。10世紀後半代に下る。415は須恵器壺である。緩やかに外反して開く口頸部を有し，端部は外面に粘土紐を貼付して矩形に肥厚させる。丸亀市郡家一里屋遺跡ＳＤ13（和田1993）等に類例があり，９世紀代に位置付けられる。416は須恵器短頸壺。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり，端部は丸く収める。417は須恵器脚部。裾部は軸部より強く屈曲して水平に近く開き，端部は矩形に収めつつ下方へ挽き出す。おそらく短脚無蓋の高坏脚部となり，７世紀代に遡る。418～419は須恵器底部。いずれも壺底部となろう。やや底径の大きな418は短頸壺等の底部の可能性があり，その他は直線的な体下半部の形状から長頸壺等の底部となろう。423・424は，須恵器の甕もしくは壺の体部片を利用した転用硯である。いずれも硯に転用された後破損しており，本来的な形状を窺うことはできないが，径もしくは一辺15cm程度の破片を利用したものと考えられる。内面はよく使い込まれ

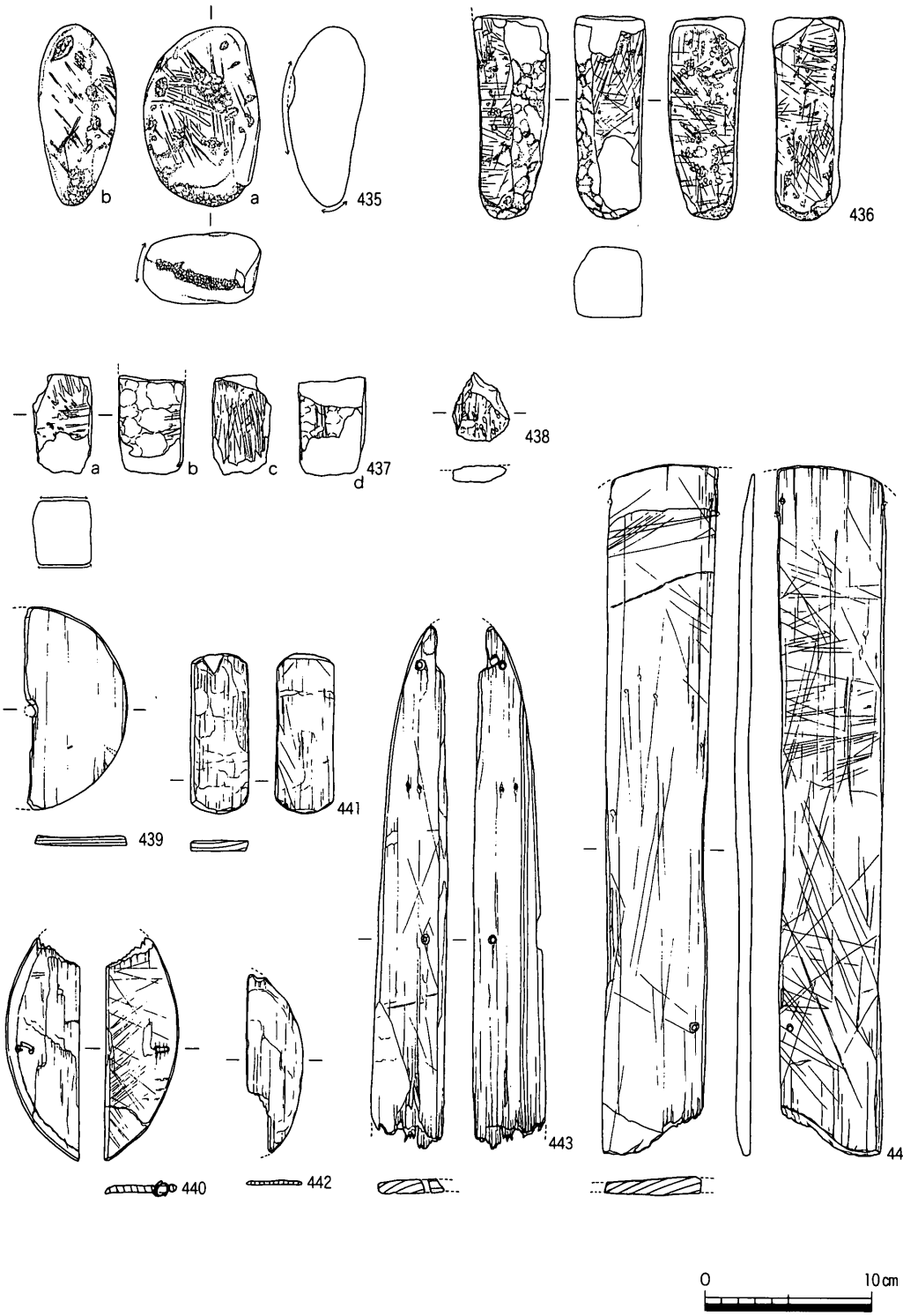


第62図　ＳＤ135下層出土遺物実測図５（１/２・１/４）

て滑らかであり，部分的に墨痕を認める。425は，須恵器大形甕である。ほぼ完形に復元可能で，溝南半部付近よりまとまって出土した。破損後本溝へ一括投棄されたものと考えられる。口頸部は緩やかに外反して開き，端部は外面に粘土紐を貼付して矩形に肥厚し，内上方へ鈍く挽き出す。体部は倒卵形を，底部は丸底を呈する。頸部外面には，「ケ」字状のヘラ記号を有する。体部外面は，格子状タタキの後全面にカキメを施し，内面には同心円当て具痕が残される。

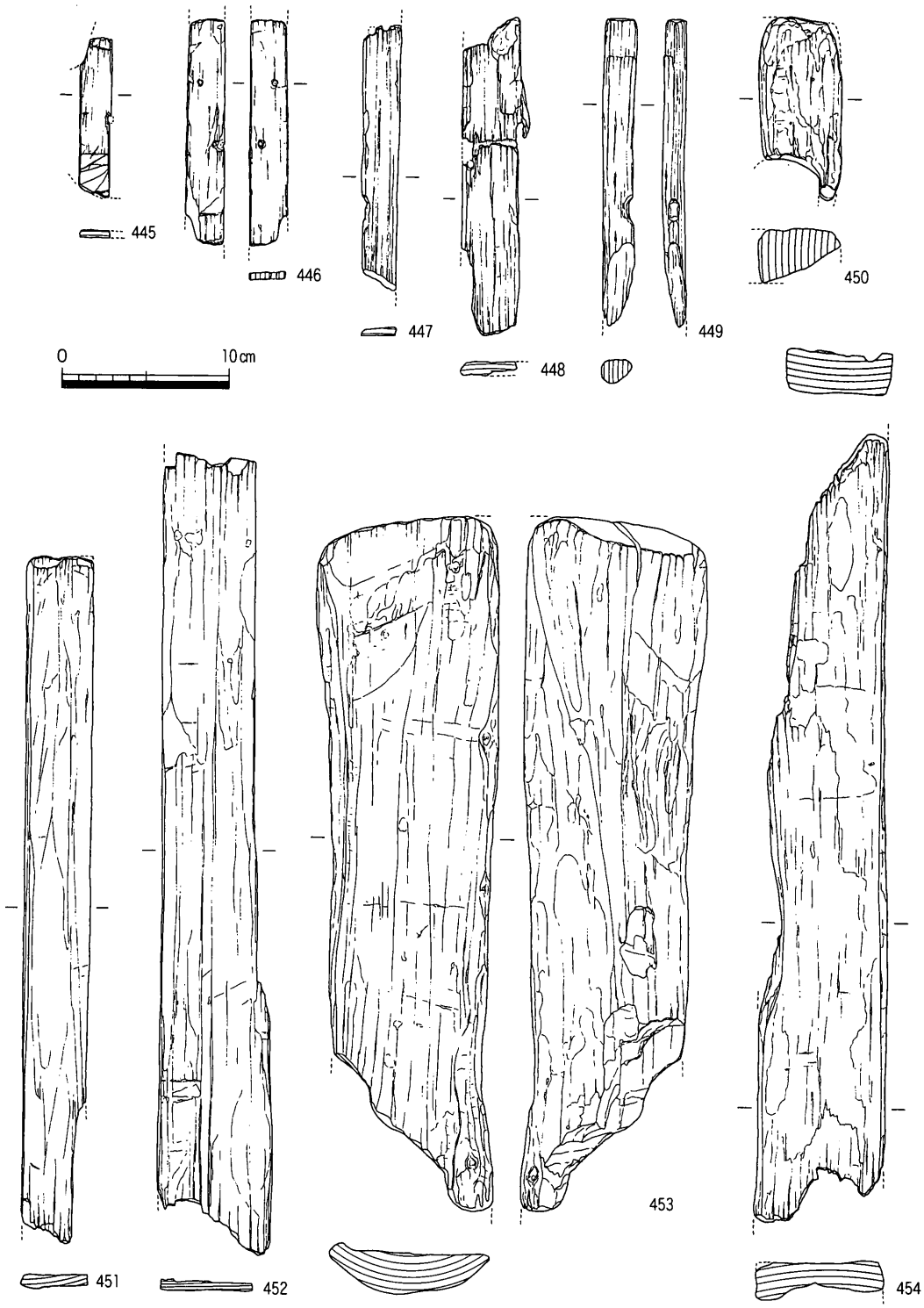
426は，石鏃である。基部を欠損する。両側縁に調整剥離を加え三角形状に加工するが，裏面の調整は粗く，未製品の可能性がある。427は石錐と考えられる。428は，曲線状の刃部を有するスクレイパーである。背部は自然面を残す。429は，打製石斧の刃部片である。側縁の一部に潰れがみられ，上端は裁断面を呈しており，楔形石器に転用されている。刃縁部を中心に表裏に摩滅痕と弱い線条痕がみられ，図左面には摩滅痕を切る剥離がみられることから，刃部再調整されたものと考える。430は，下縁に微細剥離痕を認める剥片である。431・432は，楔形石器である。上下縁に顕著な潰し加工を認める。433～435は叩き石である。433は，横断面三角形状の砂岩円礫の各面に，線状の敲打痕が顕著に認められる。434は，厚さ2.5cm程の盤状の砂岩円礫の両側面と表面に，顕著なあばた状の敲打痕を認める。435は，概ね掌大ほどの砂岩円礫で，a・b面に線状及びあばた状の敲打痕が認められ，またb面は磨石としても使用したらしく，一部に摩滅痕を認める。436は，一辺4.2cmの方柱状を呈する砂岩製の砥石である。4面が使用されており，特に主研面はよく使い込まれて鈍く湾曲する。437は，長辺4.0cmの方柱状を呈する安山岩製の砥石である。図上端を欠損するため，本来の大きさは不明。短側面2面のみが使用されている。また，2次的な被熱を蒙り，薄く煤が付着する。438は，流紋岩製の砥石片である。大きく破損しており，研面1面を残すに過ぎない。また，裏面の破断面の一部にも使用痕がみられ，破損後砥石を手に持って使用した可能性も考えられる。

439～463は，下層上位層（17層）より出土した木製品である。木製品は本層以外からは出土しておらず，また多量の自然木や小枝が払われた程度の棒状材，木屑削片，炭化材等も出土しており，上記漆皿の出土と共に，限られた期間ではあったが本溝周辺で木製品の製作や漆工が行われていた可能性が高い。439は，表裏面に黒漆が塗布されて（分析結果については第2章参照）おり，また中央に径7㎜程の円孔が穿たれることから円形曲物蓋板としたが，側面に木釘が打ち込まれており，底板となる可能性も残る。材は，厚さ5㎜程のヒノキの板目材が使用されている。440も円形曲物蓋板であろう。内面周縁に幅5㎜程



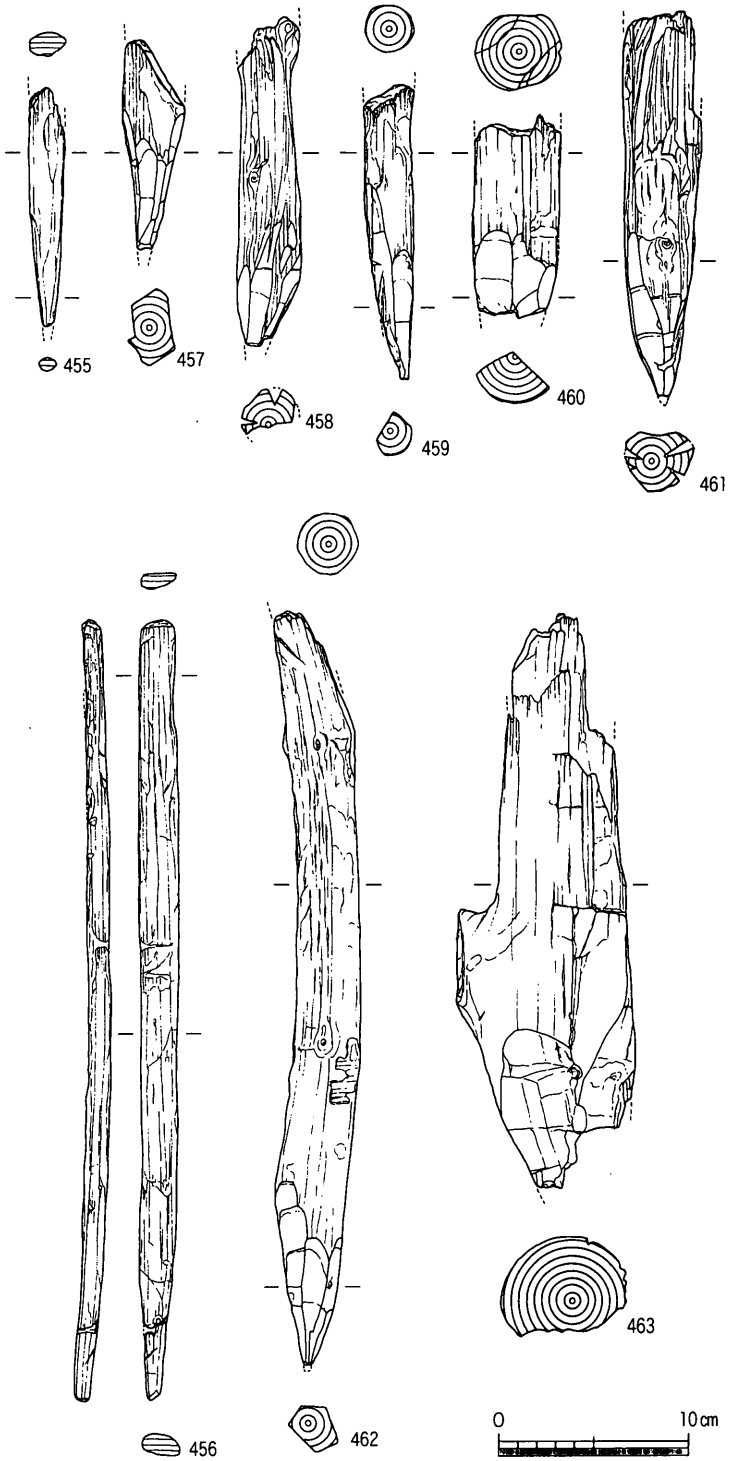
第63図　ＳＤ135下層出土遺物実測図６（１/４）

の浅い段が彫られており，段内側に２箇所の小孔が穿たれ樺皮が通されており，側板と結合していたと考える。外面には刃痕が無数にみられ，作業台に転用された可能性がある。材は，厚さ５㎜程のヒノキ属の柾目材が使用されている。441は，長さ9.5cm程の短冊形をした板状木製品。上下端が円弧状に削られていることから，曲物底板の可能性がある。図左面には横方向の鈍い溝状の窪みが３～４条みられ，右面には刃痕が若干入る。材は，サワラの板目材が使用されている。442も，厚さ３㎜と極めて薄いことから曲物蓋板の可能性があるが，欠損部分が多く，また全体に磨耗が進んでいることもあり不明。材は，ヒノキの柾目材である。443は，楕円形曲物の底板であろう。上端と中央に径４㎜程の円孔が穿たれており，補修孔と考えられる。図右面には縁辺に沿って幅３㎜程の溝が彫られているが，全周せず用途は不明。また，左面には若干の刃痕を認める。上半部に樺皮紐によって側板を結合した，綴じ孔２穴を認める。材はヒノキの板目材である。444も，大形の円形曲物の底板であろう。周縁内面は斜めに削り込まれ，端部は鈍く尖る。下半部に径４㎜程の補修孔を認める。また上端部には，樺皮紐による側板結合の綴じ孔を，左右に計３穴認める。内外面は，特に外面を中心に無数の刃痕がみられ，作業台に転用されたとみられる。材は，厚さ1.0cm程のやや厚めのスギの板目材が使用されている。445は，現存長9.4cm，厚さ５㎜程の板材。図下端が円弧状を呈することから，曲物底板の可能性が高いが，小片のため不明。右端中央には，補修孔とみられる径４㎜程の円孔が穿たれる。上端左側縁は斜めにカットされているが，用途は不明。下端内面は，幅2.5cm程が薄く削られている。材は，スギの板目材が使用される。446は，現存長13.3cm以上，厚さ５㎜程の板材。中央部に上下２孔の円孔が穿たれる。形状より曲物底板の可能性が高いが，小片のため不明。材は，ヒノキの柾目材である。447は，現存長15.7cm，厚さ５㎜の板材である。図上端に径５㎜程の円孔が穿たれる。本例も，曲物底板の可能性が高いが，小片のため不明である。材は，ヒノキの板目材である。448は，現存長18.8cm，厚さ８㎜の板材である。図左端に径５㎜程の円孔が穿たれる。また，図示した面（表面）に，黒漆状の塗彩がみられる（分析結果は第３章に掲載）。裏面は，腐食が進行しており塗彩の有無は不明。形状より，曲物蓋板の可能性があるが，小片のため不明。材は，ヒノキの板目材が使用される。449は，現存長18.0cm，厚さ1.3cm程の用途不明の棒状材。上端はほぼ水平にカットされ，下端は欠損する。断面形は，図示した左面は平坦に削られ，裏面は丸みを有しており，いびつな蒲鉾状を呈する。平坦面上端付近に浅い切り込みがみられ，図右側面には幅1.5cm程の浅い刳り込みが施される。材は，ヒノキの柾目材が使用される。450は，建築部材と考えられ

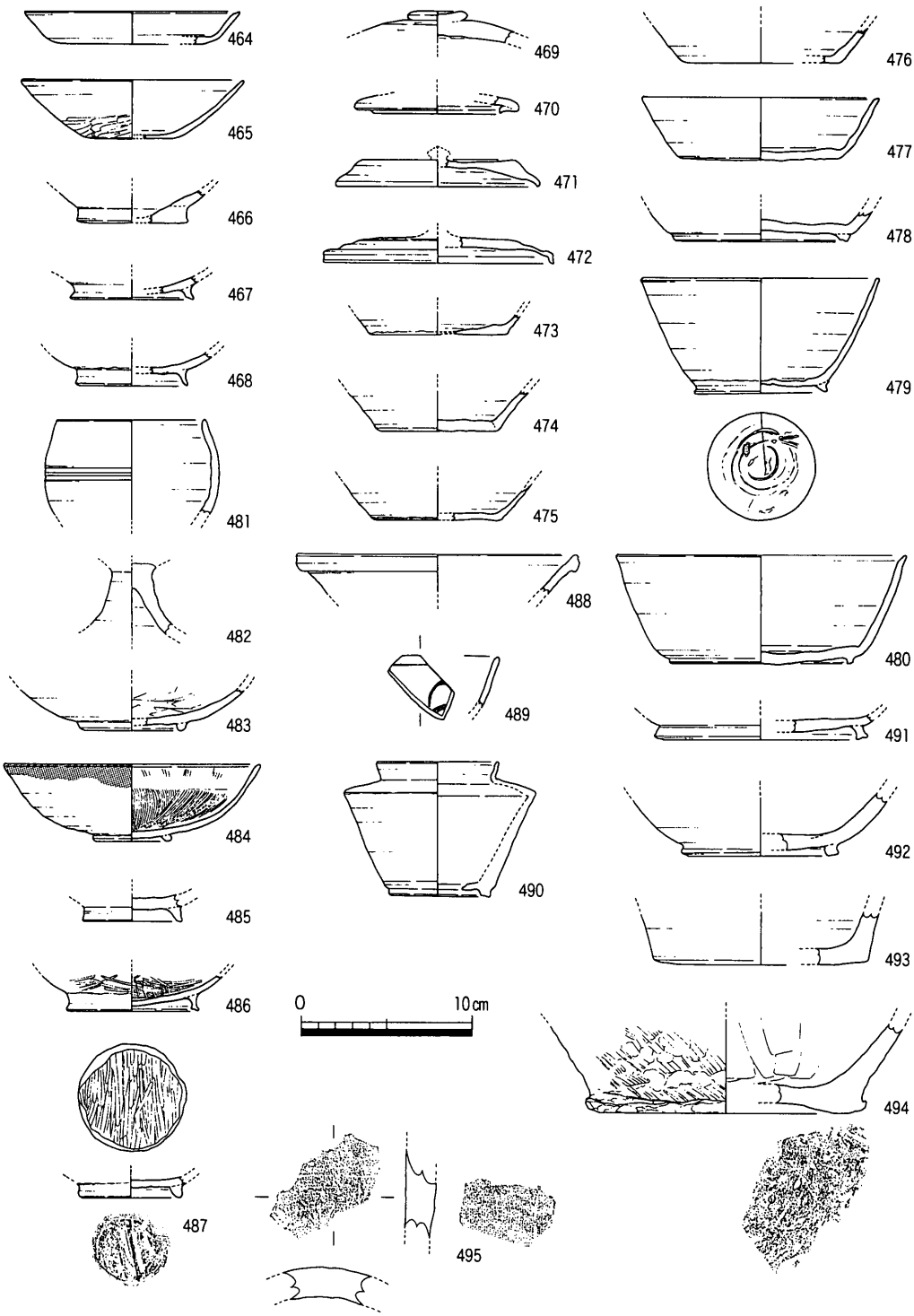


第64図　ＳＤ135下層出土遺物実測図７（１/４）

る幅4.9cm，厚さ3.3cmの角材小片である。下端に矩形の枘孔を穿孔する。図左側縁を中心に一部炭化しており，また全体に磨耗が顕著で加工痕は不明瞭である。材は，アカガシの柾目材が使用されている。**451**は，現存長40.7cm，厚さ９㎜程の板材。上端はやや潰れているが，水平にカットされているとみてよい。下端は欠損する。用途不明。材は，スギの板目材である。**452**は，現存長47.6cm，厚さ６㎜程の板材。上下両端を欠損する。表裏面は平滑に仕上げられており，特に加工痕は認められない。材は，サワラの板目材である。**453**は，現存長41.2cm，最大厚2.5cmの板材である。図右面は表皮部に近いとみえ，断面形はいびつな蒲鉾状を呈する。図左面は概ね平滑に削ら



第65図　ＳＤ135下層出土遺物実測図８（１/４）

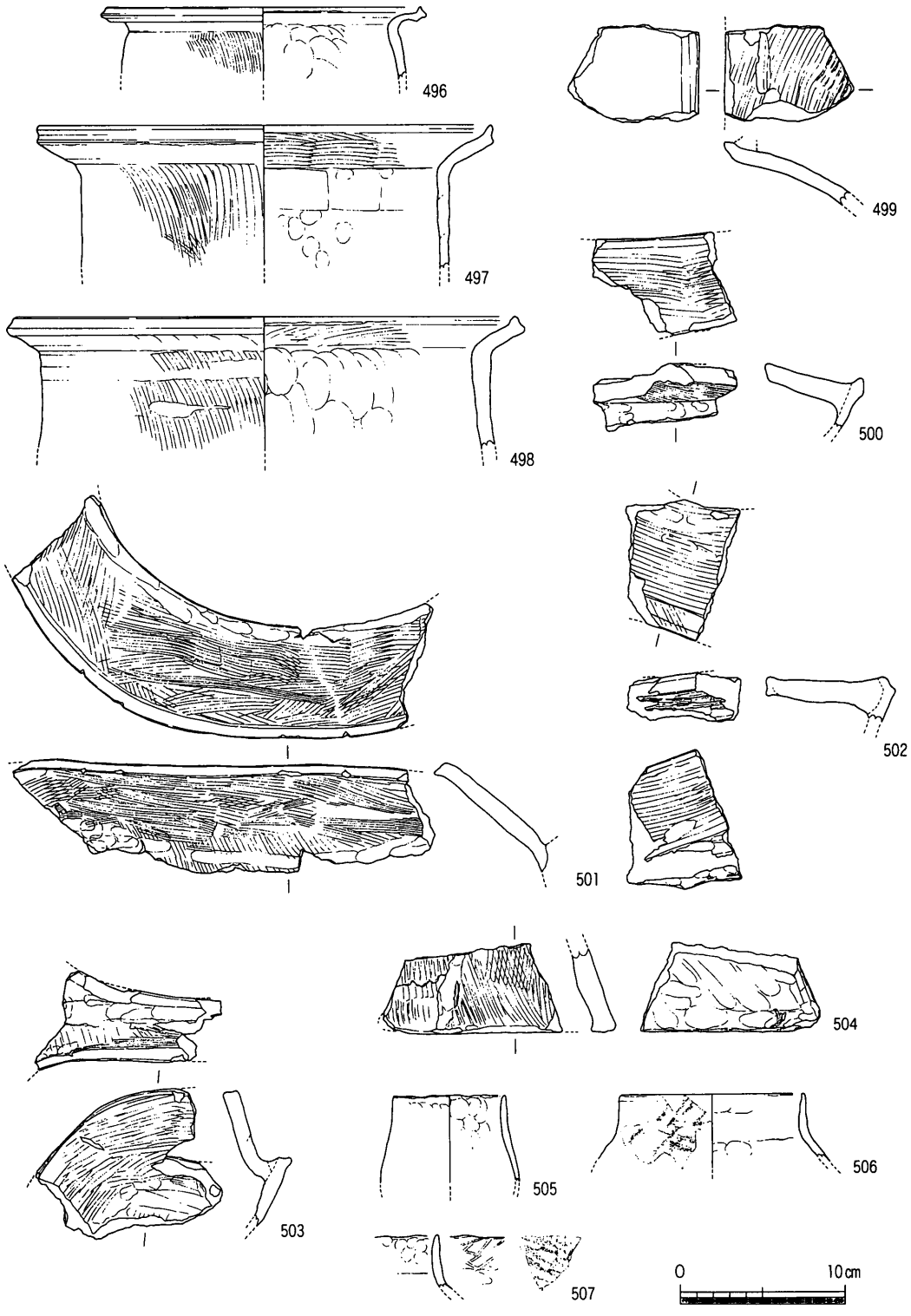


第66図　ＳＤ135上層出土遺物実測図１（１/４）

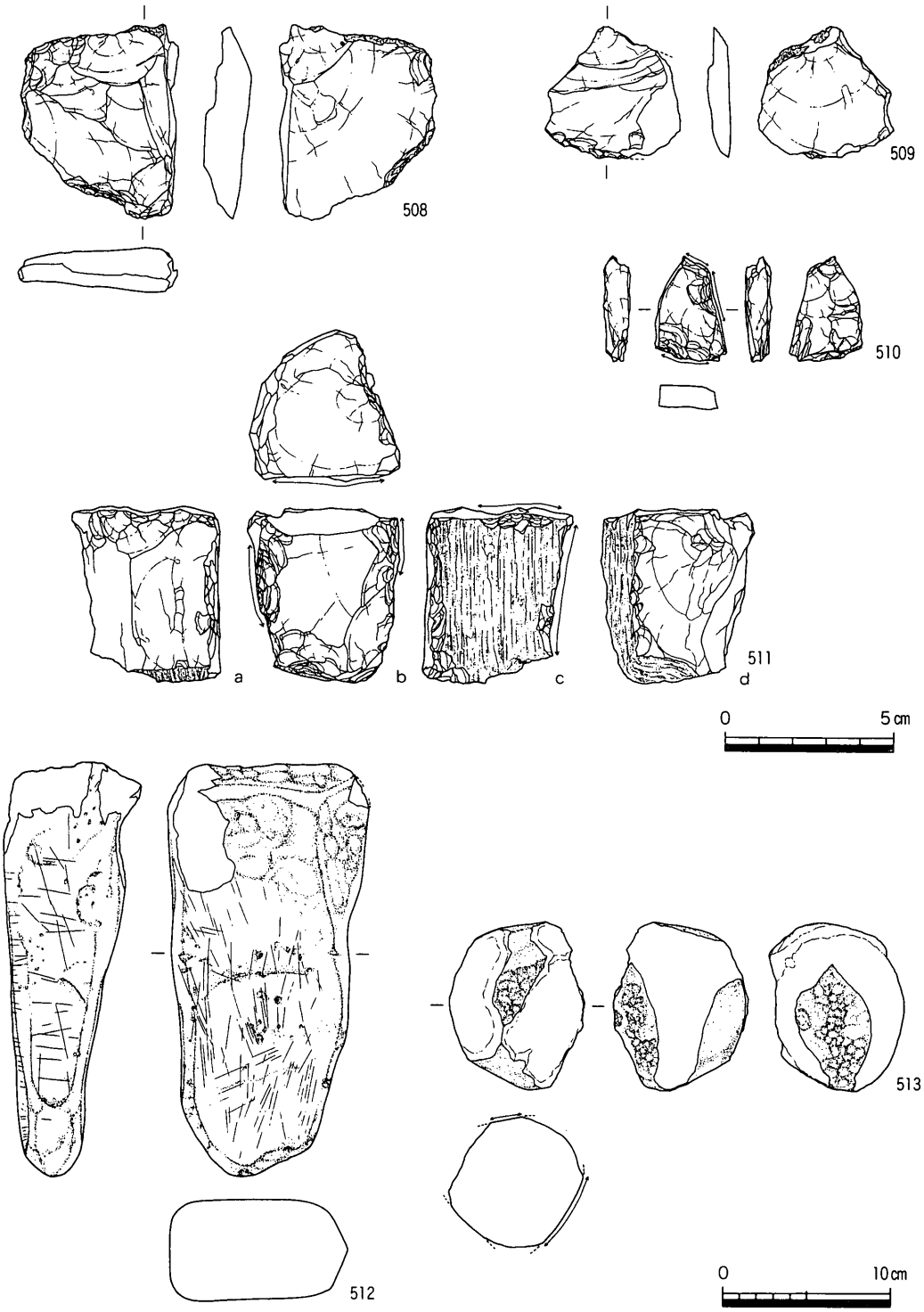
れており，上端は表皮側より斜めにカットされる。下端を欠損する。全体に磨耗が顕著なため，加工痕は明瞭ではない。材は，サクラ属の板目材である。454は，現存長46.7cm，幅7.7cm，厚さ2.2cmの板状の角材である。上下両端を欠損する。裏面は腐食が進行しており，本来の形状をとどめていない。また，全体に磨耗が著しく，加工痕は明瞭ではない。材は，カヤの板目材である。455は，下半周縁を削り鋭く尖らせた棒状材。上端を欠損し，下端は鈍く潰れる。横断面は，幅1.9cm，厚さ1.2cmの紡錘形を呈する。用途不明。材は，ニガキの板目材である。456も，下半を削り込んで鋭く尖らせた棒状材である。一面が平坦面をなし，横断面形は蒲鉾形を呈する。長さ40.6cmで，ほぼ完存する。先端部付近に２孔の小円孔が穿たれ，上部平坦面側は一部に浅い刳り込みが設けられる。曲物柄杓の柄の可能性があるが，単独での出土のため断定するまでには至らない。材は，サワラの板目材が使用される。457～463は杭である。下端を多角形状に削り尖らせる。全体に小枝が払われる程度で，樹皮は多く残されており加工度は低い。樹種は，クリ・コナラ・マツ・ヤナギ・クヌギがあり，特に意図的な選択は行われていない。

464～513は，上層出土の遺物である。一部下層より遊離した遺物や，取り上げ時のミスにより本来的に下層もしくは最上層に包含されていた遺物を少量混在する。464は土師器皿である。下層出土のものと差異は乏しいが，口縁端部内面の沈線状の段は退化傾向にある。465は，底径が小さいことから土師器碗とする。胎土は，細かな精選された素地粘土が使用されている。体部下半外面は，口縁部より連続する回転ナデ調整の後，横方向のケズリ調整が施される。以上２点は，概ね９世紀代に位置付けられ，下層より遊離した遺物であろう。466は土師器平高台碗である。467・468は，土師器碗の高台部の小片である。468は，灰白色を呈する緻密な素地粘土が使用されており，川津元結木遺跡（片桐1992）など大東川下流域の諸遺跡に類例を認める。469～472は，須恵器蓋である。469は天井部が丸く，頂部に扁平な円盤状のツマミを有することから，ＴＫ43型式期前後の有蓋高坏の蓋となる可能性がある。470は，それより後出する内面にカエリを有する坏蓋で，ＴＫ217型式期前後に位置付けられる。471は，口縁端部を下方へ垂下させ，天井部周縁に強い稜を認める。口縁端部は僅かに下方へ摘み出すのみで，後述する472ほど明確な端面を成形しない。472よりは後出し，十瓶山西２号窯跡期を前後する時期に位置付けられる。472は口縁端部を強く下方へ挽き出し，大師堂池１号窯跡期前後に遡る。473～477は，須恵器平底形態の坏である。473～475は，底径７cm前後と小さく，すべっと１号窯跡期に下る可能性がある。476・477は，前者に比して底径は広く，体下半部に丸みを有していることから，十

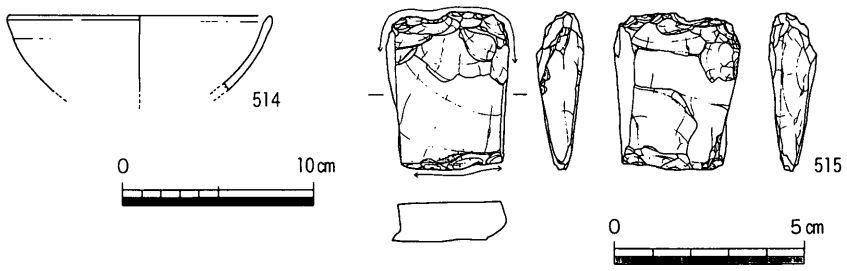
瓶山西２号窯跡期前後に位置付けられる。478～480は須恵器高台付坏である。478・480は高台径が広く，体下半部が丸みを帯びて立ち上がり，口縁部付近で小さく外反する形態から，十瓶山西２号窯跡期前後に位置付けられる。一方，479は高台径が狭く，口縁部は底部より直線的に斜上方へ開いており，すべっと１号窯跡期を中心とした時期に下る。なお，高台内外底には，「×」字のヘラ記号を有する。481は，ＴＫ217型式期前後に位置付けられる須恵器台付碗である。体部中央外面に２条の沈線文を施す。482は須恵器高坏脚部片で，おそらく481とほぼ同時期の短脚化した無蓋高坏となろう。483・484は，十瓶山窯系須恵質土器碗である。484は内底面に放射状のハケ調整が施されるが，483ではそれが板ナデ状の調整に省略化されており，484よりやや後出すると考える。概ね13世紀後半代から末頃に位置付けられよう。485～487は，黒色土器碗である。486は，器壁が薄く，高台もシャープに仕上げられており，３点の中では最も先行し11世紀後半代に遡り，他の２点は高台形状から12世紀代に下る。488・489は輸入磁器である。488は白磁碗Ⅳ類，489は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗であろう。490は須恵器短頸壺である。肩部の稜や口縁端部などは極めてシャープに成形される。単体での位置付けは難しいが，概ね９世紀前半代を中心とした時期を与えておきたい。なお，高台内底部は長径2.5cm程の孔が焼成後に穿孔されている。491～493は，須恵器壺底部である。491・492は，外方へ踏ん張る高台が付されており，長頸壺などの底部となろう。493は，平底形態の底部で，体部は直線的に立ち上がる。494は十瓶山窯系須恵器甕底部である。外面には粗い平行タタキ痕が施され，また外底面には籾や藁の圧痕が認められる。495は，瓦質焼成の丸瓦片である。凹面は布目圧痕が明瞭に残され，凸面は横方向のナデ調整が施される。496～498は，土師器甕である。496は小形甕，497・498は大形甕となろう。口縁部形状や内外面の調整手法等は，下層出土のものと大差はなく，近接した時期が想定されるが，496の口縁部は外反度が強く，内面のハケ調整がナデ消されるなど，やや後出する可能性がある。499～504は，土師器竈である。本遺構及びＳＸ20からは，焚口部の形状から判断して，十数個体程度の竈が出土している。499は焚口部の側壁の小片である。外面は粗いハケ調整の後，端部付近に庇を貼付していたようで，その剥離痕を認める。500～503は，焚口部天井の庇の破片である。庇の長さや端部の形状に若干のヴァリエーションを認める。細かな時期差を反映する可能性があるが，全形を窺える資料はなく，編年上の位置付けを明確にすることは困難であろう。504は，焚口基底部の小片である。口縁部の形状より，焚口部は緩やかに湾曲して開けられていたようである。499と同一個体の可能性があり，端部外面には499同様庇の剥離痕を認める。505～507は製



第67図　ＳＤ135上層出土遺物実測図２（１/４）



第68図　ＳＤ135上層出土遺物実測図３（１/２・１/４）



第69図　ＳＤ135最上層出土遺物実測図（1/4・1/2）

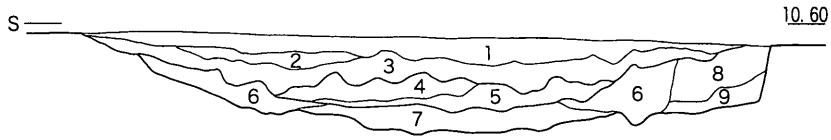
塩土器である。505は，口径6.8cm程度に復元される裁頭卵形を呈する小形の製塩土器で，Ｖｂ式（大久保1992）に遡る可能性がある。506・507は大形の一群で，鈍く屈曲して直立気味に立ち上がる口縁部を有する。Ⅵ式に下り，口縁部外面には格子状のタタキ痕を認める。

508は，曲線状の刃部を有するスクレイパーである。背部は自然面を残す。509は，欠損部分が大きいが，曲線状の刃部を有するスクレイパーと考える。510は，両側縁に裁断面を残す楔形石器である。511は，自然面を多く残す石材で，周縁に顕著な潰れがみられ，ｂ面中央に弱い擦痕がみられることから，火打石として報告する。剥離面は，明らかに弥生時代以前に遡るものとは異なり，風化は進展していない。512は，砂岩製の砥石である。背面はほぼ平坦で，主研面はよく使い込まれて鈍く湾曲する。側面の一部にも使用による石目の潰れを認めるが，あまり顕著ではない。513は，拳大程度の砂岩円礫を使用した叩石である。表面は被熱によるとみられる剥離が進行しており，一部に辛うじてあばた状の敲打痕を認める。

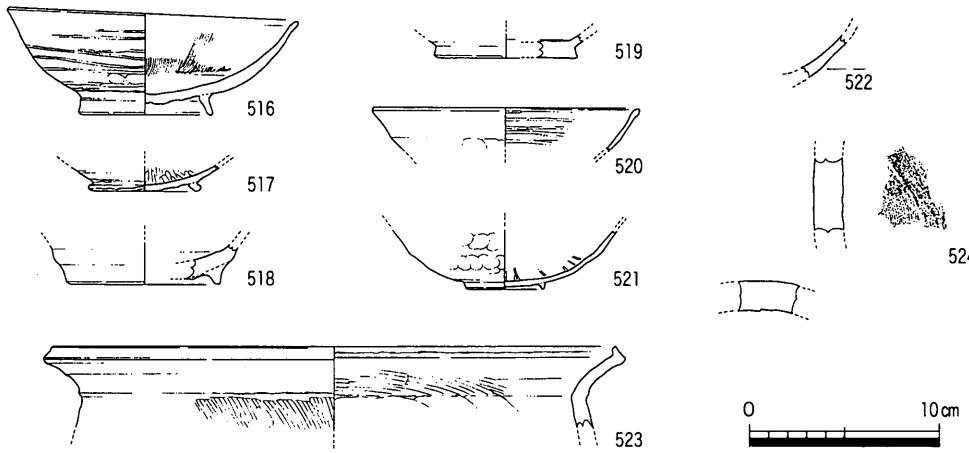
514・515は，最上層より出土した遺物である。514は，黒色土器Ｂ類碗である。全体に摩滅が顕著なため，調整等は認められない。515は，楔形石器である。上下に顕著な潰れがみられる。また下縁部に摩滅痕と線条痕がみられ，打製石斧の転用品とみられる。

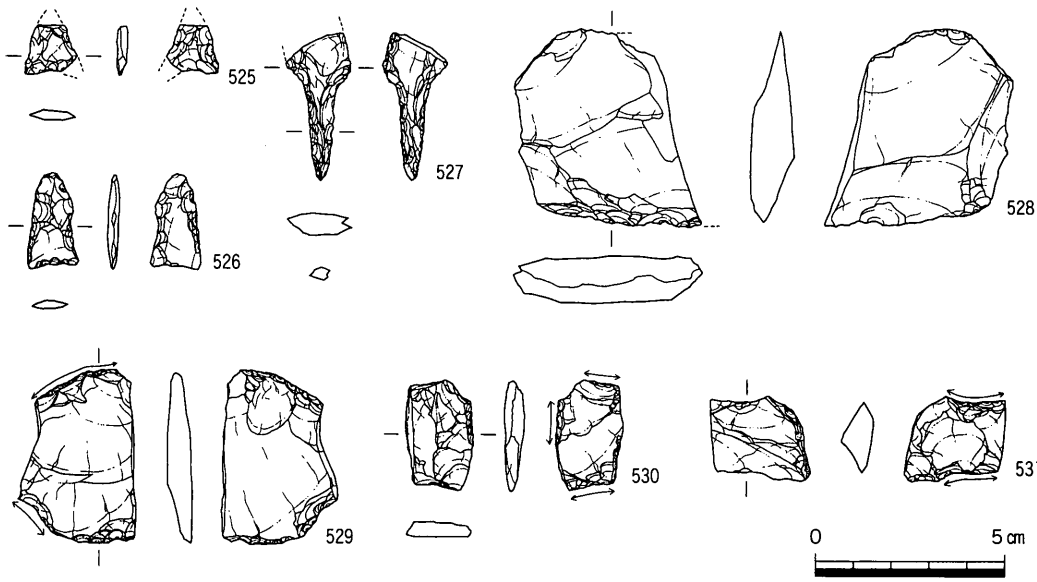
ＳＤ136（第70・71図）

Ⅱ区東部を東西に配されたＳＤ135の支流と考える溝状遺構である。東端はＳＤ135に合流し，西端はＳＸ20上層に連続する。延長約19.0ｍを検出した。流路方向は概ねＮ76.0°Ｅで，ＳＤ135とは内角44.5°前後で斜交する。溝は，幅3.5～4.2ｍ，残存深0.5ｍ前後，断面形は概ね逆台形ないしは箱状を呈する。底面の標高は，ＳＤ135との合流部付近で10.0ｍ前後，ＳＸ20との分岐点付近で10.3ｍ前後を測り，緩やかに東へ傾斜するが，ＳＤ135との関係を考慮すれば，ＳＤ135より取水しＳＸ20へ流下していた可能性が高く，ＳＸ20



1．橙灰色粘質土（Mn・Fe含）
2．灰橙色粘質土（Mn含）
3．濃橙灰色粘質土（Mn・Fe・小礫含）
4．灰色粘土・明灰色細砂ラミナ（Fe・植物遺体少含）
5．濃灰色粘土（植物遺体多含）
6．灰色砂混粘土（Fe含）
7．明灰色細砂（灰色粘土ラミナ状に少・植物遺体多・小礫含）
8．濁灰黄褐色粘土（Mn多・Fe含）
9．濃灰黄色粘土（Fe含）



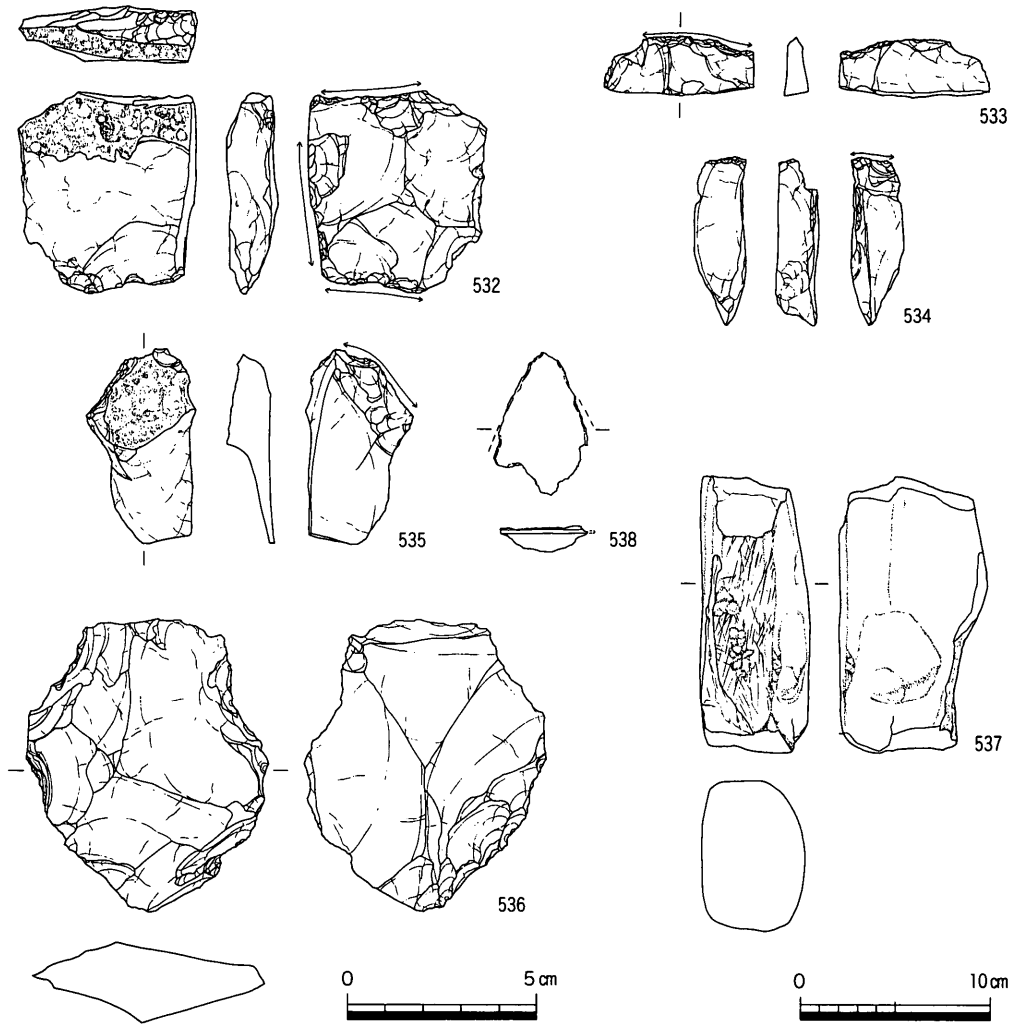


第70図　ＳＤ136断面図（1/40），出土遺物実測図1（1/4・1/2）

に想定される耕作地への給水路としての性格が考えられる。

埋土は，９層に細分された。堆積状況から少なくとも３層に大別され，概ねＳＤ135と近似した堆積状況を示す。最上層（１～３層）は，溝上面を広く覆って堆積する灰色系粘質土である。明確な水流による堆積の痕跡は乏しく，溝の機能衰退後の窪地を埋める自然堆積層と考えられる。ＳＤ135最上層に概ね相当する。上層（４・５層）は，後述する下層上面を大きく掘り込んで堆積し，改修後の堆積層であろう。灰色系粘土と細砂の互層が堆積しており，ＳＤ135上層の堆積土と共通する。下層（６～９層）は，流路南側に灰色系粘土及び細砂層の堆積がみられ，ＳＤ135下層の堆積と近似しており，相当する改修痕跡も認められる。なお，流路北側にはベース層の流入土とみられる黄褐色系粘土が堆積する。以上の埋土の堆積状況より，本溝は基幹水路ＳＤ135開削と同時期に開削され，以後数度の改修を経ながら，幹線水路廃絶に至るまで継続して使用されたと考えられよう。

遺物は，コンテナ２箱相当の土器・石器類が出土した。上記したように，３層に大別して遺物の取り上げを行ったが，一部の遺物については，若干層位の混乱がみられる。大半の遺物は，下層より出土している。516～521・524・525・527～531・533・534・536・537が下層，523・526・532が上層，522・535・538が最上層よりそれぞれ出土した遺物である。516は，土師質土器碗である。胎土は，乳白色を呈する緻密で特徴的な素地粘土が選択され，焼成も堅緻である。内面は，口縁部近くにまで達する放射状のハケ調整の後，ミガキ調整及びナデ調整される。体部外面は，指オサエ・ナデ調整の後，ロクロ回転を利用した横方向のミガキ調整が施される。ＳＤ135出土の468同様，大東川下流域の諸遺跡で多出する特徴的な碗である。517は，黒色土器Ａ類碗である。外底面には外方へ強く踏ん張る高台が貼付され，内面には単一方向のミガキ調整が施される。体部外面のミガキ調整は，細かく高台付近にまで施され，12世紀前半ないしは中葉前後に位置付けられる。518は，直立した高台を付す土師器碗である。二次的被熱を蒙り，内面には煤が付着する。12世紀中葉前後に位置付けられよう。519は，須恵器平高台碗である。外底面は，ヘラ切り後ナデ調整される。おそらく十瓶山窯周辺で焼成されたと考えられる。520・521は，和泉産瓦器碗である。口縁部内面には横方向の，底部内面には直線状のミガキ調整が施される。外面にはミガキ調整は認められず，尾上編年（尾上1983）のⅢ－３期に位置付けられる。522は，中国産白磁碗体部小片である。二次的被熱によるためか，内面の釉調は悪くやや濁った灰白色を呈する。523は土師器甕。おそらく中形の甕となろう。口縁端部は上方へ強く摘み上げられ，下方へも鈍く突出する。524は，須恵質の平瓦小片である。凹面には布目痕が認め



第71図　ＳＤ136出土遺物実測図２（１/２・１/４）

られるが，凸面は摩滅により調整不明。

525・526は，凹基式の石鏃。526は，周縁の調整加工が粗く未製品の可能性がある。527は石錐である。528は，直線状の刃部を有するスクレイパーである。529もスクレイパーである。背部には顕著な潰れがみられ，打製石庖丁の未製品の可能性もある。530～532は，上下縁に敲打による潰れがみられる楔形石器である。大形のものと小形のものがある。531・532は裁断面をとどめる。533～535は，上縁のみに敲打による潰れがみられることから楔形石器削片とした。536は，石核残核である。表裏面数枚程度の剥片が剥離されているが，安定した大きさの素材は得られていない。537は，砂岩製の方柱状を呈する砥石である。自然礫を使用しており，短側面一面のみに使用痕が認められる。538は，現存長3.6cm，最

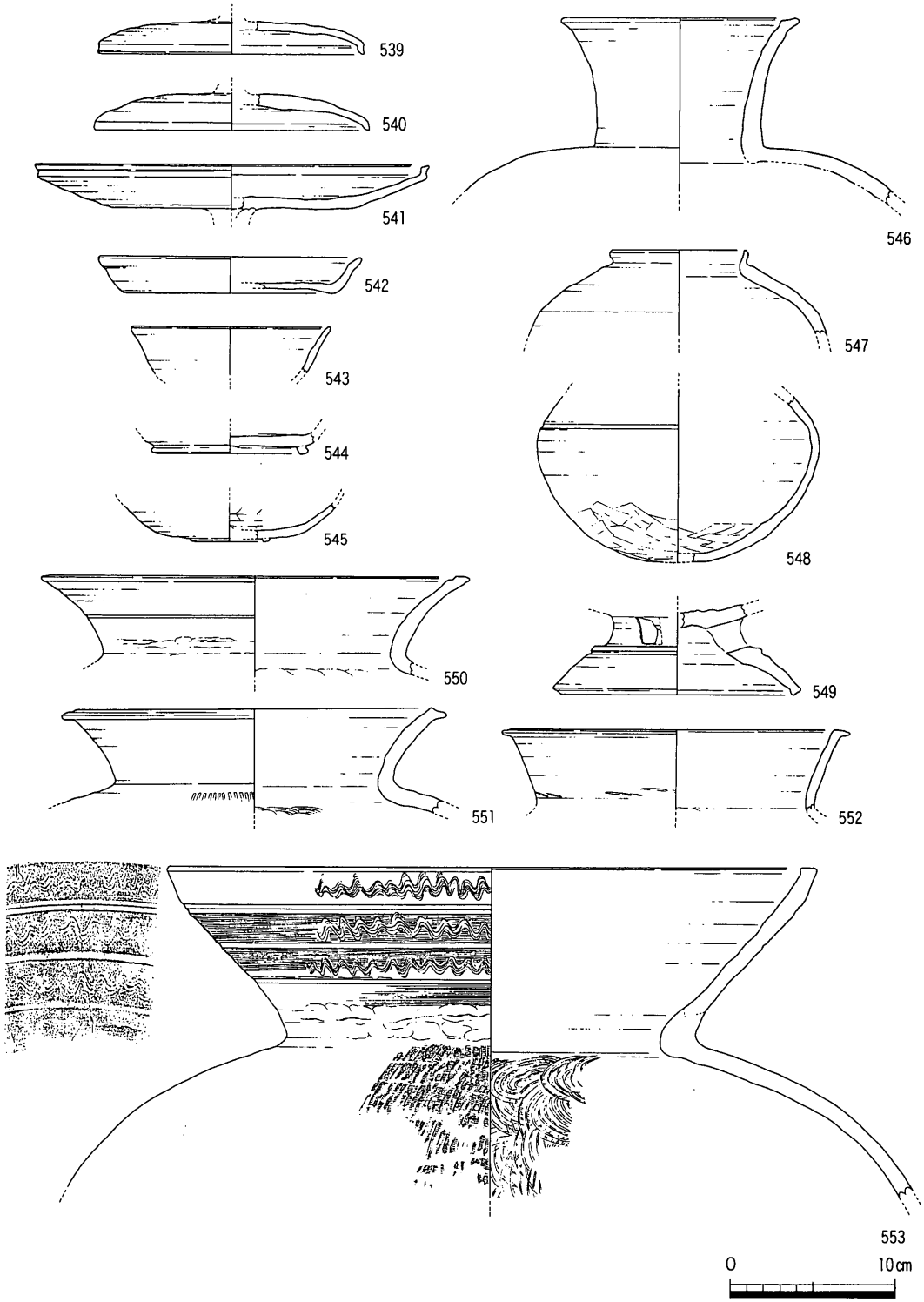
大幅2.3cm，厚さ0.1cmの三角形状を呈する薄い鉄板である。形状より鉄鏃の可能性が考えられたが，周縁に刃部はみられず，用途は不明である。

包含層（第72～76図）

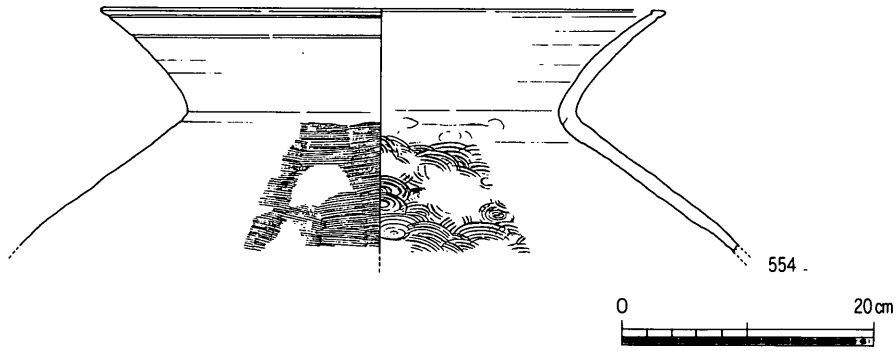
本章第１節で詳述したように，Ⅰ～Ⅲ区においては当該時期の遺構面（第２遺構面）の上位において，数層に細分される遺物包含層（包含層Ⅱ・Ⅲ）を確認している。各包含層からは，各々コンテナ数箱程度の遺物が出土した。Ⅰ区では，後述する包含層Ⅰｂ層と区分しないまま一部遺物を取り上げてしまったため，より後出する時期の遺物を少量混在する。また，Ⅲ区では遺構面のベースとなる突帯文期の包含層Ⅳから遊離したと考えられる石器類を多量に混在する。したがって，必ずしも良好な状況で出土した遺物ばかりではないが，代表的なものをいくつか取り上げて，参考資料として提示する。

539～554はⅠ区，555～580はⅢ区より出土した遺物である。図示した資料の他，土師器皿・甕・竈等がある。土師器資料はいずれも小片化が顕著なことと，遺構出土の資料と内容的には大きくは変わらないため，以下では須恵器資料を中心に報告する。545を除いて，全て須恵器である。

539・540は坏蓋である。天井部より内湾気味に緩やかに下り，口縁端部は小さく下方へ垂下させる。541は，大形の坏蓋を坏部とした高坏である。口縁部は強く屈曲して立ち上がり，端部は鋭く外方へ挽き出す。539・540と比して，胎土・焼成共に精緻で，成形もシャープである。542は皿。口縁部は内湾気味に立ち上がった後，端部付近で小さく外反して開く。胎土はやや粗く，石英粒を多量に含む。543は坏。口縁部は内湾しつつ開き，端部付近で小さく屈曲する。端部内面には，浅い沈線状の段を認める。544も坏底部であろう。外底面には，外方へ踏ん張る矩形の高台を貼付する。545は，十瓶山窯系の須恵質土器碗である。外底面には，断面逆台形状の低い高台を貼付し，内底面は放射状のナデ調整が施される。13世紀代に下り，包含層Ⅰｂ層に帰属する遺物と考える。546はいわゆる瓶子形壺である。口縁部は直立気味に立ち上がり，緩やかに外反して開き，端部は外方へ強く摘み出しつつ，内方へも小さく突出する。体部はやや歪みが大きいが，概ね肩の張りの強い形態を呈する。547は短頸壺。口縁部はやや外傾して開き，端部は小さく肥厚しつつ丸く納める。肩部は鈍く屈曲するのみで，装飾は認められない。548は壺体･底部である。長頸壺もしくは広口壺の底部となろう。外底面は不整方向にケズリ調整され，肩部には１条の沈線が施される。549は，台付長頸壺の脚台部であろう。中位で強く屈曲し，裾部は内湾して開く。端部は小



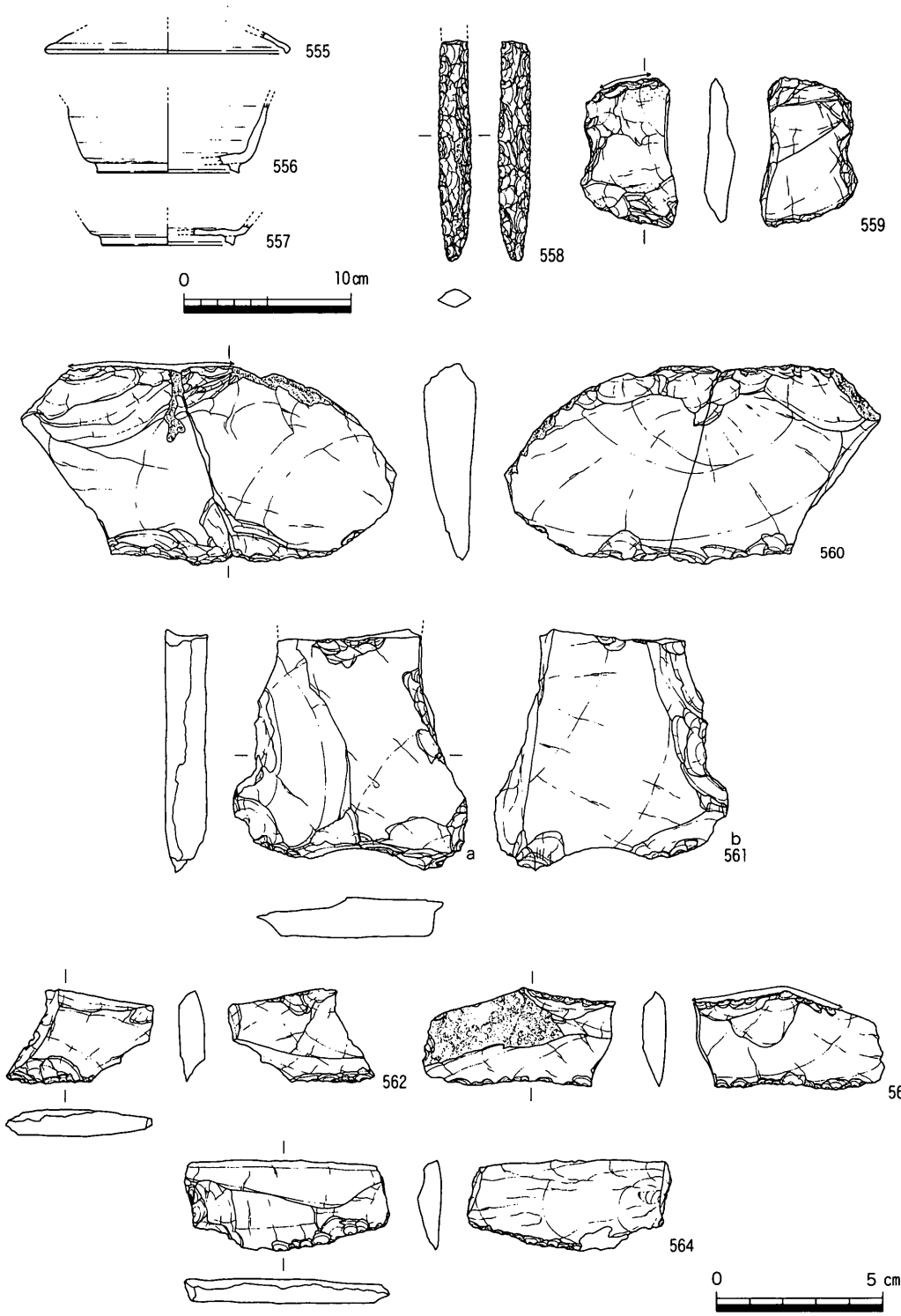
第72図　Ⅰ区包含層Ⅱ出土遺物実測図１（１/４）



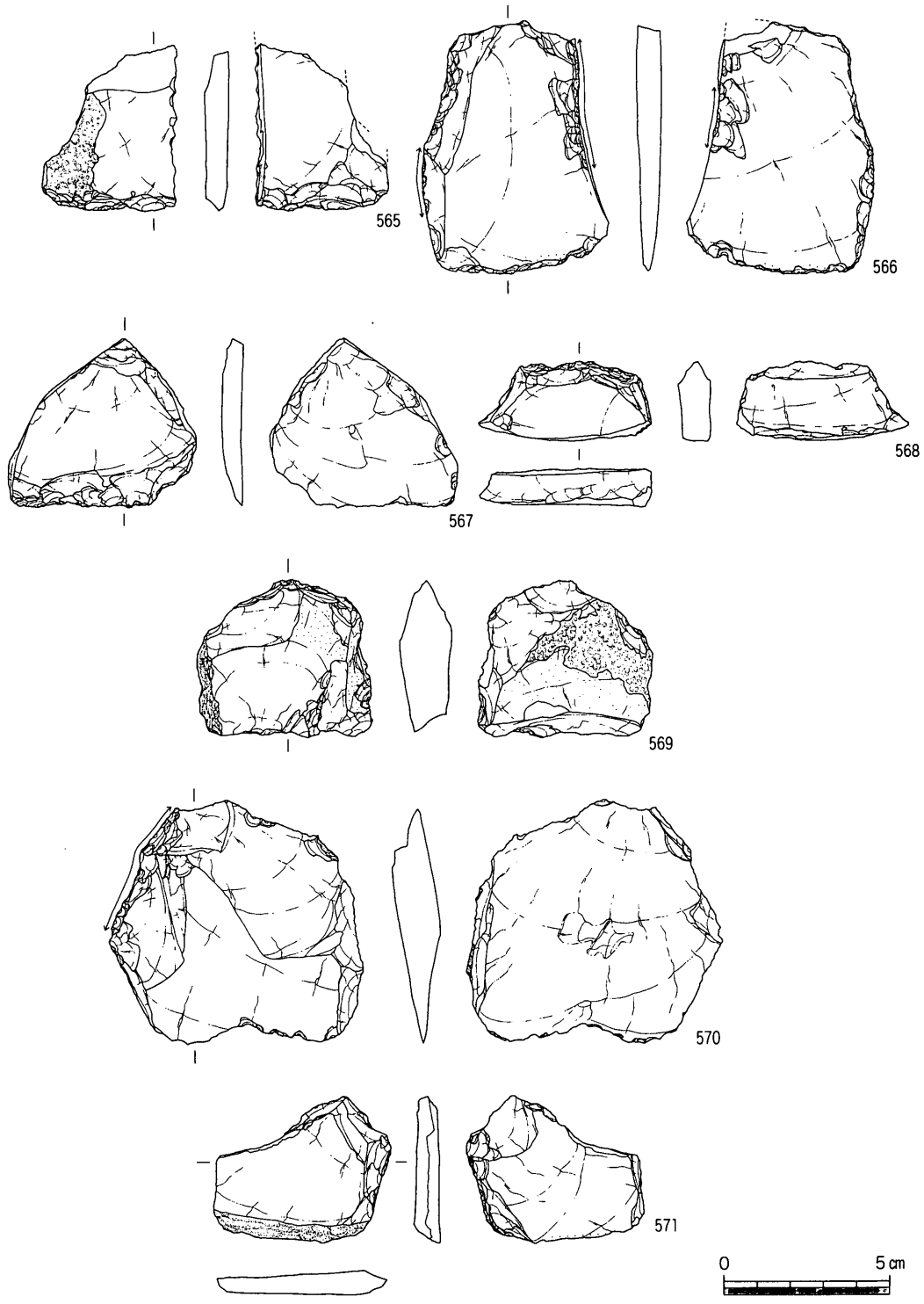
第73図　Ⅰ区包含層Ⅱ出土遺物実測図２（1/6）

さく内側へ肥厚する。屈曲部外面には，１条の沈線が施され，軸部は長方形の透し孔が３方向から穿たれる。550～554は甕である。550・554の口縁部は，強く外反して開き，端部は外方へ摘み出しつつ内方へ肥厚する。外面中位には，１条の沈線が施される。551・552は，口縁端部の内側への肥厚が乏しく，主に外方へ強く摘み出すタイプ。552では口縁部は直線的に斜め外方へ開き，新しい傾向を認める。553は，内湾して開く口縁部を有する大形甕で，口縁部への加飾が著しい。カキメを施した後に，３条の沈線で区画し，沈線上位にそれぞれ波状文を施す。

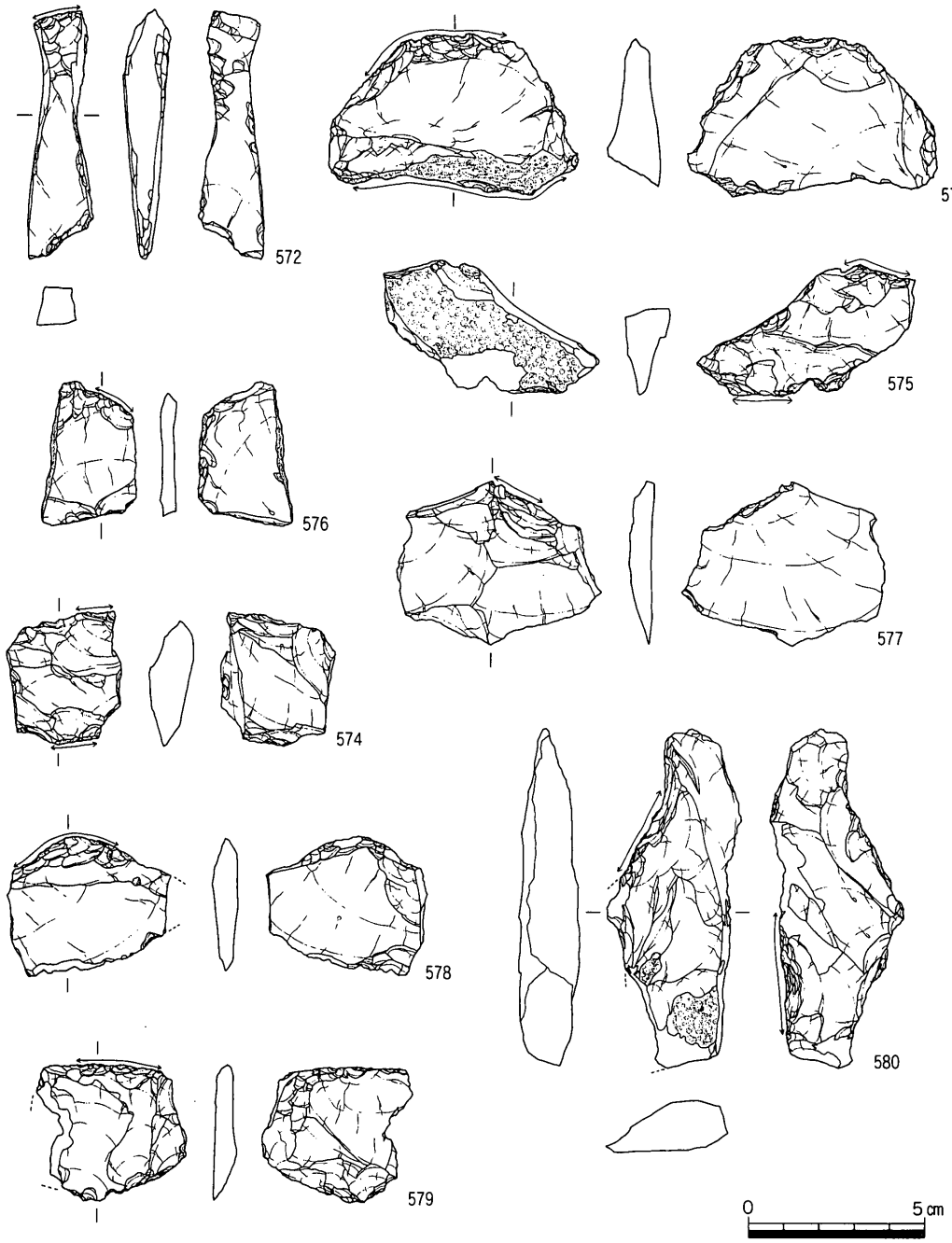
555は坏蓋。端部は断面三角形状に下方へ小さく垂下させる。556・557は坏。底部外周は丸味を有し，外底面には直立する高台を貼付する。高台端面は内傾し，鈍く匙面状に窪む。558以下は，いずれもサヌカイト製の石器である。558は長さ6.5cm以上の石錐。周縁は丁寧に調整加工され，断面形は菱形を呈する。突帯文期にこのような軸部の長い資料は乏しく，縄文後期に遡る可能性がある。559は打製石庖丁。刃部は緩い弧状を呈する可能性があり，背部を敲打で潰し，側縁には抉りがみられる。刃部表裏面は弱い摩滅痕を認める。560も側縁の一部に自然面を残し，形態は不整形ながら打製石庖丁とした。刃部は直線的で，右面に一部弱い摩滅痕を認める。刃部加工は摩滅面を切っており，再加工されている。561は打製石斧。刃部及び側縁の一部を欠損するが，表裏面の一部に弱い摩滅痕を認め，ｂ面に線条痕が観察されたことから，打製石斧とした。562～567はスクレイパー。562～565には，いずれも直線的な両面刃部加工がなされる。566の刃部は，曲線状を呈する。また，刃縁部表裏面には弱い摩滅痕がみられ，摩滅痕を切って刃部再加工がなされている。568～570は，側縁等の一部に調整がみられ，いわゆる二次加工のある剥片である。571は，自然面を残す下縁の一部に使用による摩滅痕がみられる剥片である。572～575は，楔形石器である。大形と小形品があり，いずれも上下縁に顕著な潰れを認める。576～579は，楔形石



第74図　Ⅲ区包含層Ⅱ出土遺物実測図１（１/４・１/２）



第75図　III区包含層II出土遺物実測図２（１/２）



第76図　III区包含層II出土遺物実測図3（1/2）

器削片である。577の下縁には，微細な剥離痕を認める。580は石核素材である。両側縁に潰し加工がみられ，数枚程度の剥片が剥がされている。

本文註

（1） 本書で用いる古代の須恵器の編年観は，佐藤1993に準拠し，佐藤の掲げた窯跡名を代表させて期として標記する。

（2） 坪井遺跡例では，概報に示された図より判断する限り，同一原体による刻印とみられる。しかし，坪井遺跡例でも文字は不明である。詳細については，正式報告書の刊行を待って判断したい。

第５節　中世の遺構・遺物

概要

当該時期の遺構は，Ⅰ・Ⅲ区において検出した掘立柱建物22棟等で構成される屋敷地と，Ⅰ区屋敷地の下位で検出した畑地と想定される耕作痕がある。屋敷地の遺構は，第１節で詳述したように，いずれも近世以降に推定される旧耕土直下及び，部分的に削平を免れて残存した当該期の包含層下面で遺構面が確認された。また，Ⅰ区耕作痕は，屋敷地のベースとなる包含層下位において検出された。

Ⅰ区南半部は，遺構面上面の削平が著しく，前記縄文時代晩期包含層が旧耕土直下において検出され，屋敷地に伴う遺構は極めて散在的である。当該時期の遺構の分布は，主に調査区北半部に偏在する。遺構面の標高差は，調査区南端部と北端部で僅かに0.1m程と浅く，屋敷地南半部に明確な段差を伴う区画を認めない限りは，上記した遺構分布の様相は，そのまま屋敷地の範囲や内容を反映するものと考えて誤りないだろう。調査区南半部で検出された溝ＳＤ26を，屋敷地の南端を区切る区画溝と捉えておきたい。屋敷地の北端は，調査区外へ延長し，平成８年度の調査においても，当該時期の遺構の拡がりが確認されている。屋敷地東限については，調査区東端の段丘崖をＳＤ01が現氾濫原に向けて流下しており，段丘崖の形成が中世以前に遡ること，段丘崖によって屋敷地東限が画されることが判明した。また同様に西限については，Ⅱ区において当該時期の遺構分布が認められなかったことから，国道438号線付近に求められるものと考える。

耕作痕も遺構面の削平により，調査区北半部を中心に検出された。

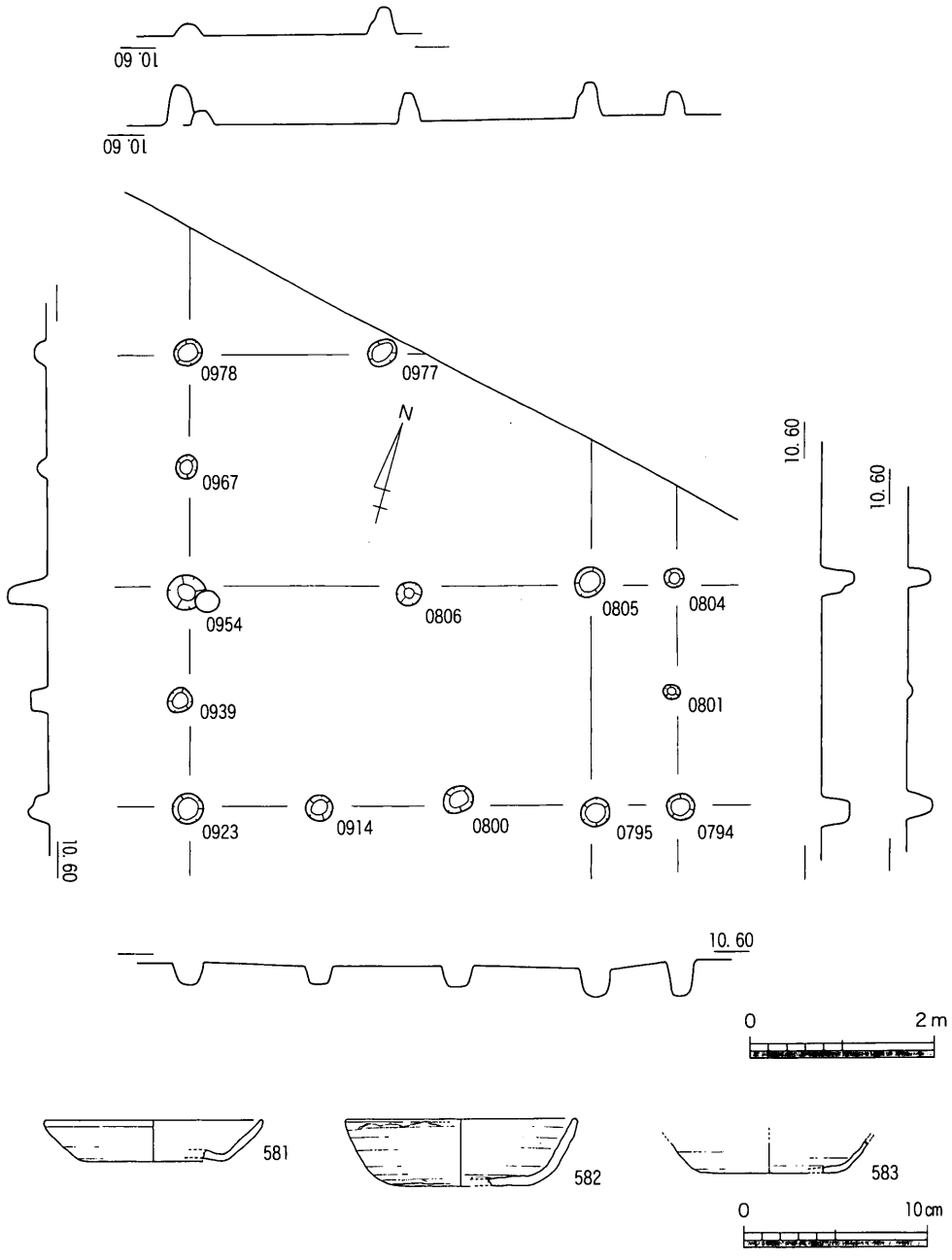
Ⅱ区では，前記したように当該時期の遺構は確認されず，後世の削平を考慮しても集落が立地する環境にはなかったと想像される。一方，古代に開削された幹線水路ＳＤ135が，ほぼ12世紀代には水利施設としての機能が衰退し埋没過程にある点は，当該時期の地形環境の変化に起因する可能性が想定され，つまり段丘Ⅰ面の段丘崖形成時期を考察する上で貴重な資料となろう。

Ⅲ区においては，掘立柱建物２棟等で構成される集落域の一端を検出したが，調査区の関係から集落の内容を把握するまでには至らない。しかし，集落の経営期間の一部はⅠ区集落域と重複する可能性があり興味深い。

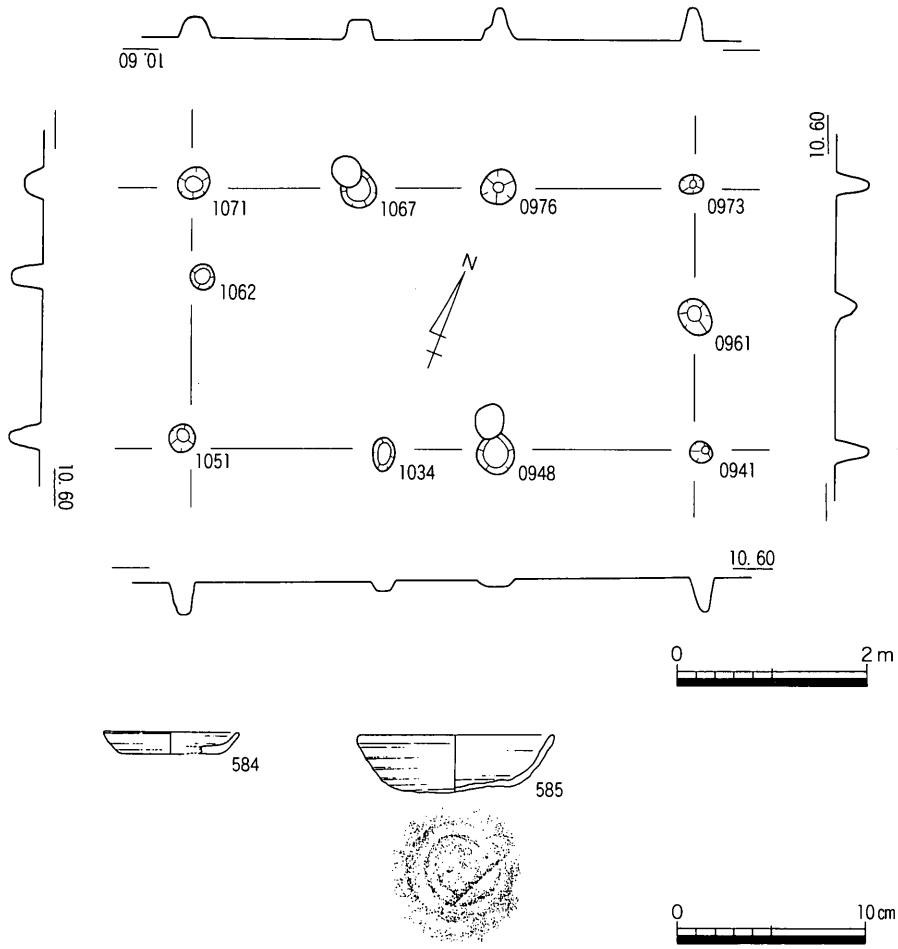
掘立柱建物

ＳＢ01（第77図）

Ｉ区北東隅Ｅ６グリットで検出した，東面に庇を伴う南北棟の建物である。梁方向の柱穴は，北列と南列で各々配置が異なるが，整った位置関係にあることから建物遺構として



第77図　ＳＢ01平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４）

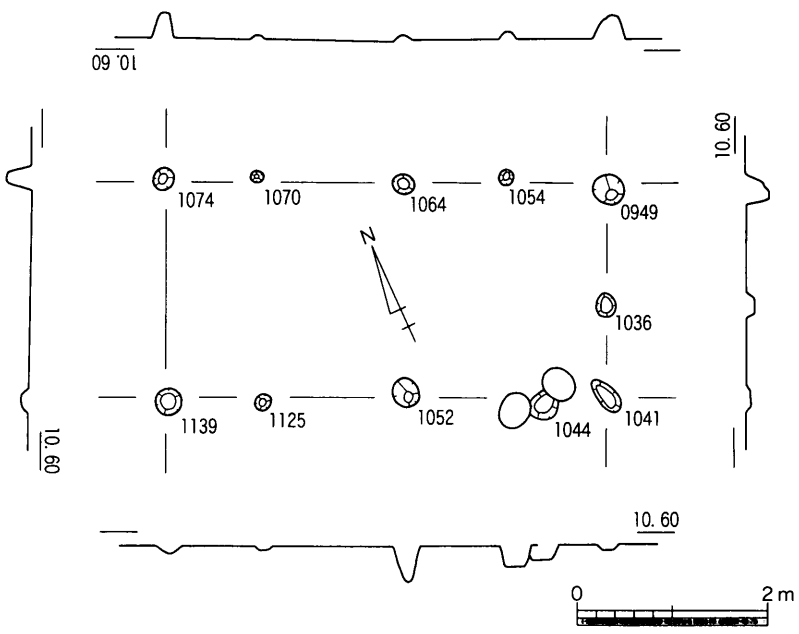


第78図　ＳＢ02平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４）

提示する。また，ＳＢ04と重複しＳＰ0939を共有するが，先後関係は捉えることができなかった。桁行４間（4.8m），梁間３間（4.4m），主軸方向N74.1° E(1)，床面積21.1m²の側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.4mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.1～0.4mである。掘り方底面の標高は，10.06～10.39mと一定しない。桁方向の柱間間隔は，中央の柱間が1.2～1.3mと概ね揃っており，柱通りも良好である。

遺物は，土師質土器皿・坏・足釜・鍋，十瓶山窯系須恵質土器碗等の小片が若干量出土している。他の建物と比して，遺物量はやや豊富である。３点を選んで図示した。581はＳＰ0914，582はＳＰ0794，583はＳＰ0923よりそれぞれ出土した。581は，橙色系の土師質土器皿である。器表面は剥離が顕著。口縁端部は不明瞭ながら，直立気味の端面をなす。582は灰黄色系の土師質土器坏。焼成は堅緻。外底面はヘラ切り調整後ナデ調整される。

583は坏底部としたが，器壁が薄く皿となる可能性もある。上記出土遺物より，概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられると考える。



第79図　ＳＢ03平・断面図（１/80）

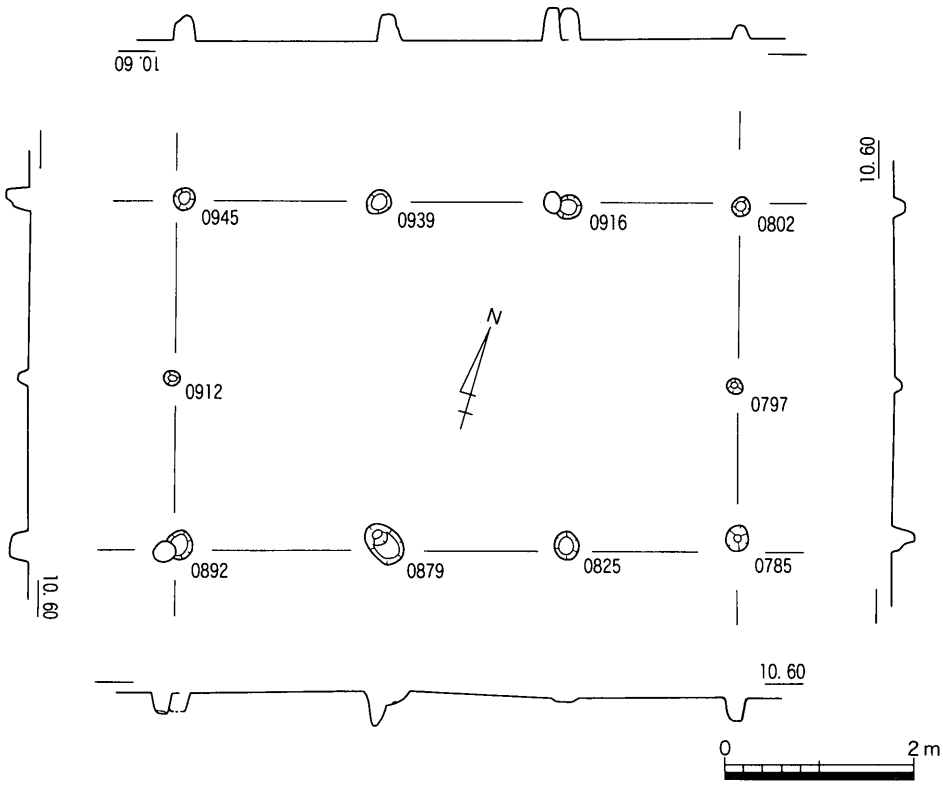
ＳＢ02（第78図）

Ｉ区北東部Ｅ６グリット周辺で検出した東西棟の建物である。桁行３間（5.3m），梁間２間（2.7m），主軸方向N69.4°Ｅ，床面積14.3m²の小規模な側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.1～0.3m前後と一部を除いて安定して掘り込まれる。掘り方底面の標高は，10.14～10.40mと一定しない。桁方向の柱間間隔は，中央の柱間が1.2～1.5mとやや狭く，両端は1.8～2.2mとやや広く設定されている。柱通りはよく揃っている。

遺物は，土師質土器皿等の小片が少量出土したに過ぎない。２点を選んで図示した。584はＳＰ0973，585はＳＰ0961よりそれぞれ出土した。584は，橙色系の土師質土器小皿ａ類[2]である。口縁部は歪みが大きく，復元された口径にはやや難がある。外底面は回転ヘラ切り調整後，丁寧なナデ調整が施される。胎土中には，多量の火山ガラスを含有する点で極めて特徴的である。585は橙色系の土師質土器坏である。ほぼ完形で出土しており，建物廃絶後意図的に埋められた可能性が高い。口縁端部は，やや内傾する丸みを帯びた端面をなす。外底面はヘラ切り調整後，板状の圧痕を認める。内底面はいわゆるロクロ目が顕著に認められ，口縁部外面には回転ナデによる段状の起伏が顕著である。上記出土遺物より，概ね14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＢ03（第79図）

Ｉ区中央北半Ｅ６グリット周辺で検出した東西棟の建物である。ＳＢ02・06・07の３棟の建物と重複し，切り合い関係よりＳＢ07より先行し，ＳＢ02より後出する。桁行４間



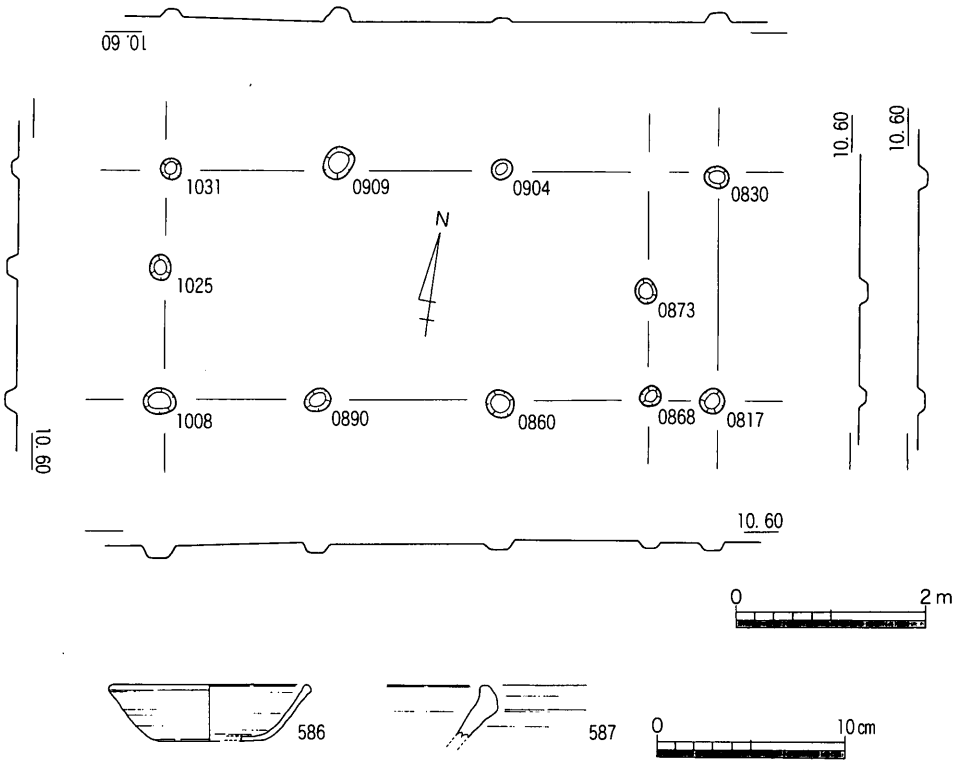
第80図　ＳＢ04平・断面図（１/80）

（4.6m），梁間２間（2.2m），主軸方向N64.8° W，床面積10.1㎡の小規模な側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.3m以下と浅いものが多数を占める。底面の標高は10.09～10.45m，桁方向の柱間間隔は0.7～1.5mといずれも規則性に乏しいが，柱通りはよく整っている。

遺物は，ＳＰ1139より土師質土器小片２点が出土したのみで，細かな時期を特定することは困難である。上記した他遺構との重複関係や層位的な位置関係から，14世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＢ04（第80図）

Ｉ区北東部Ｅ６グリット周辺で検出した東西棟の建物である。ＳＢ01・02・05等と重複し，ＳＢ05より後出することが確認された。桁行３間（6.0m），梁間２間（3.6m），主軸方向N73.0° E，床面積21.6㎡の側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.05～0.34mである。掘り方底面の標高は10.14～10.41mとやや幅があるが，梁方向の中央穴を除けば概ね一定する。桁方向の柱間間隔は



第81図　ＳＢ05平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

1.8～2.1mとやや揃わないが，柱通りは良い。

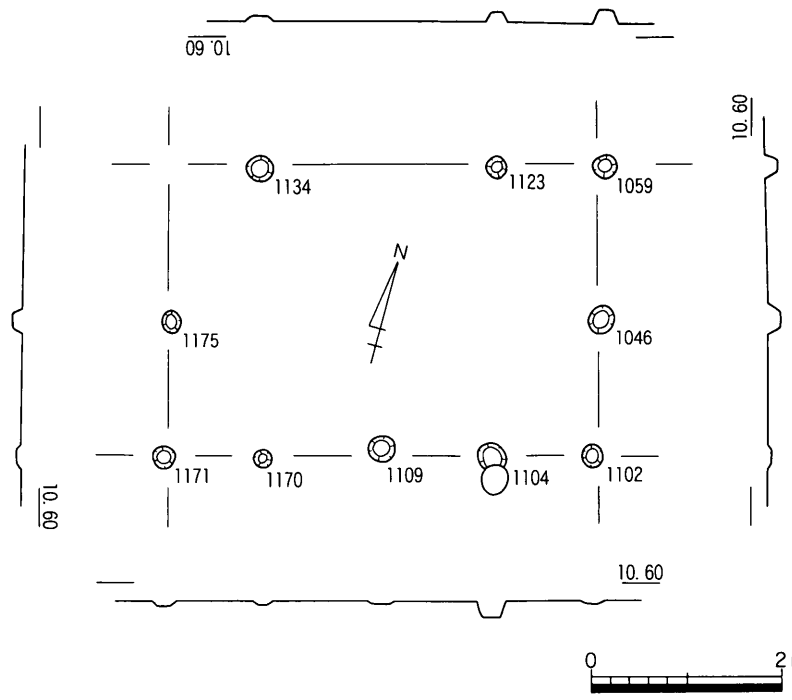
遺物は，土師質土器皿や瓦質土器等の土器片が少量出土したのみである。いずれも図示できないまでに小片化しており，細かな時期を特定することは困難である。他遺構との重複関係や層位的な位置関係から，概ね14世紀後半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＢ05（第81図）

Ｉ区北東部Ｄ６グリットで検出した東西棟の建物である。調査終了後に図上で復元したため，細かな観察は行えておらず，北東隅の柱穴は確認できていない。東面に庇を想定するが柱穴にやや違和感があり，参考までにとどめる。桁行３間（5.1m），梁間２間（2.4m），主軸方向Ｎ82.1°Ｅ，床面積12.2m²程度の小規模な側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.05～0.14mとかなり浅いものが目立つ。掘り方底面の標高は，10.32～10.45mと概ね一定する。桁方向の柱間間隔は1.6～1.9mとやや揃わないが，柱通りは良い。

遺物は，土師質土器皿・鍋，東播系須恵器捏鉢，白磁皿等の小片が少量出土している。

2点を選んで図示した。586はSP0873,587はSP1008よりそれぞれ出土した。586は,灰黄色系の土師質土器坏である。口縁端部は僅かに肥厚しつつ，丸く収める。外底面は回転ヘラ切り調整後ナデ調整を加える。細かな砂粒が微量含まれる程度で，胎土は水簸された素地粘土が使用されている。587は東播系須恵器捏鉢の口縁部小片である。口縁端部は上方へ強く挽き出され，玉縁状に肥厚する。上記出土遺物より，概ね14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

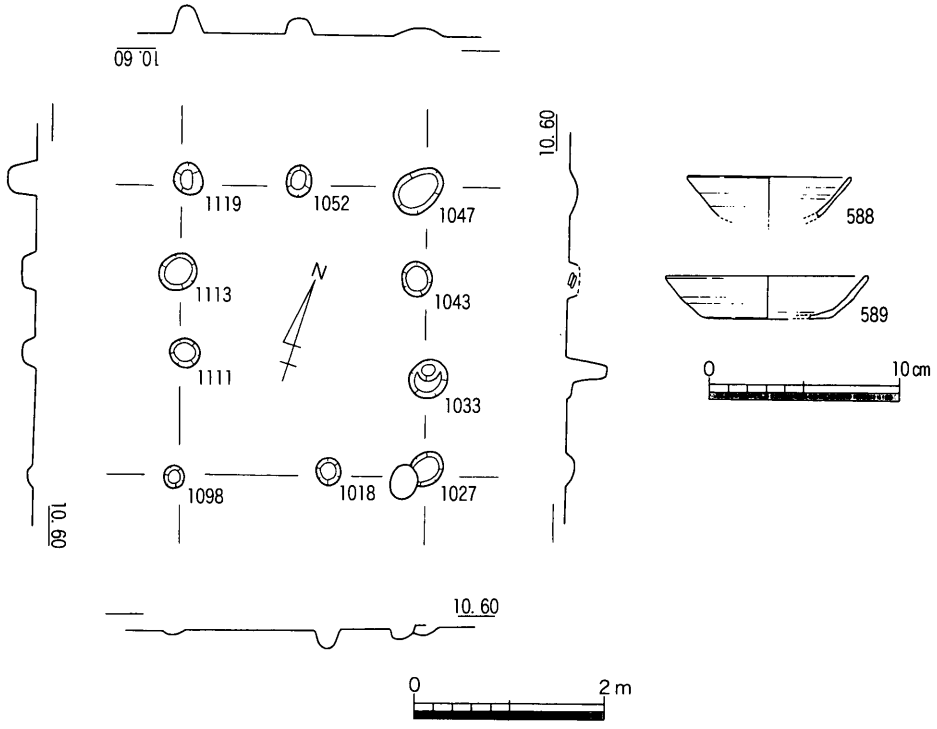


第82図　SB06平・断面図（1/80）

SB06（第82図）

Ⅰ区中央北半部D6グリット周辺で検出した東西棟の建物である。SB02・03・07，SD53等と重複するが，明確な先後関係は捉えられていない。また，調査時には確認できず，後に図上で復元したため，柱穴の組み合わせを含めて細かな観察は行えていない。桁行4間（4.5m），梁間2間（3.0m），主軸方向N74.2°E，床面積13.5㎡程度の小規模な側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は,径0.2～0.4mの円ないしは楕円形を呈し,残存深は0.02～0.16mと痕跡程度の浅いものが多く，遺構上面の削平を顕著に蒙っているようである。掘り方底面の標高は，10.24～10.39mと概ね一定する。桁方向の柱間間隔は1.0～1.2mと比較的整っており，また柱通りも良好である。

遺物は，遺構上面の削平が顕著なためか，土師質土器皿の小片が数点出土したのみで，時期を特定できる資料を欠落する。検出した位置や層位的な関係から，概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられるに過ぎない。



第83図　ＳＢ07平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４）

ＳＢ07（第83図）

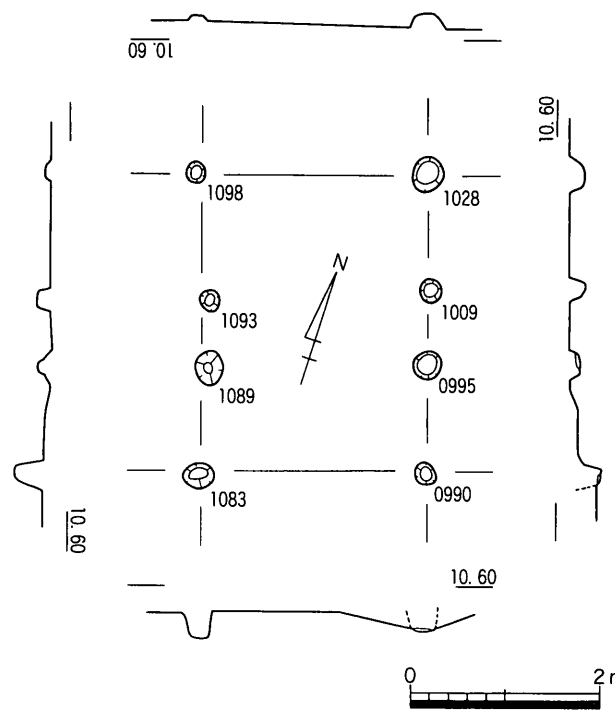
Ｉ区中央北半Ｄ６グリットで検出した南北棟の建物である。ＳＢ02・06と重複するが，先後関係は不明である。また，南西隅の柱穴はＳＢ08と共有し，南東隅の柱穴の切合い関係より，ＳＢ08より先行するものと考える。本建物は調査時に復元を行ったものであるが，後述するように，柱穴底面の標高や柱間間隔に規格性が乏しく，参考資料としての提示にとどめておきたい。桁行３間（3.0m），梁間２間（2.6m），主軸方向Ｎ17.6° Ｗ，床面積7.8㎡の小規模な側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.2～0.5mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.1～0.4m前後と浅いものが多い。掘り方底面の標高は，10.04～10.37mと一定せず，明確な規格性に欠ける。桁方向の柱間間隔は0.8～1.3mとやや揃わないが，柱通りは比較的整っている。

遺物は，土師質土器皿を中心とした土器片が極少量出土している。２点を選んで図示した。588はＳＰ1119，589はＳＰ1111よりそれぞれ出土した。いずれも橙色系の土師質土器皿である。588は，小片のため復元された口径にはやや難がある。口縁端部は，僅かに肥厚しつつ丸く収める。口縁部の一端に煤の付着が認められ，灯明皿として使用された可能性が想定される。589も，小片のため正確な口径を復元することは難しい。破断面を含めて

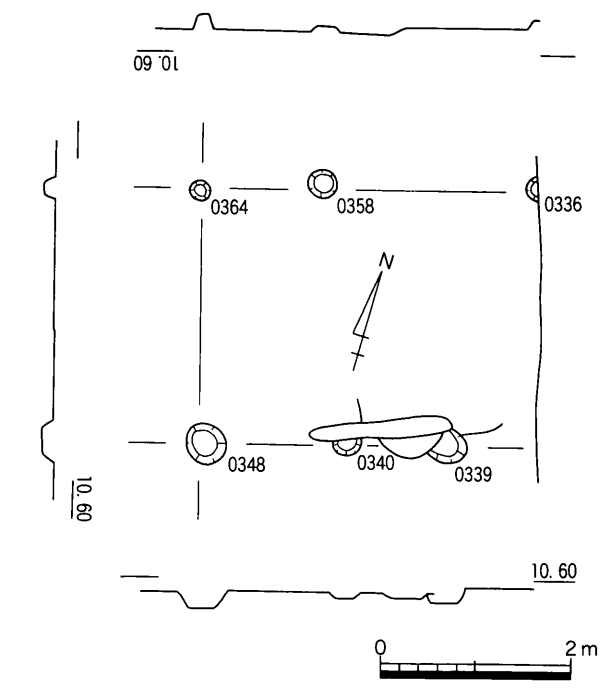
一部に黒化部分を認めるが，焼成時のものか二次的被熱によるものかは判然としない。出土遺物より細かな時期を特定することは困難であり，概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられるに過ぎない。

ＳＢ08（第84図）

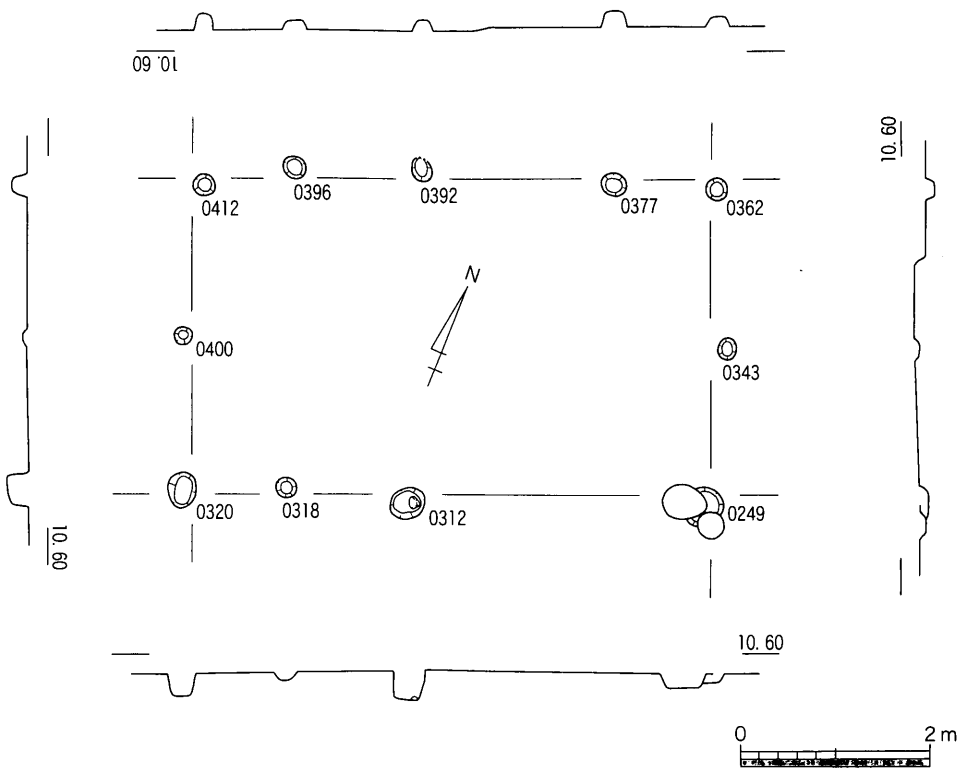
Ｉ区中央北半Ｄ６グリットで検出した南北棟の建物である。ＳＤ18と重複し溝底面で柱穴を確認したが，埋土は極めて近似しており先後関係を明確に捉えることはできなかった。また，切り合い関係よりＳＢ07より後出する。桁行３間（3.1m），梁間１間（2.4m），主軸方向N17.1° W，床面積7.4㎡の小規模な側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの円ないしは楕円形を呈する。掘り方底面の標高は10.02～10.35mと一定せず，桁方向の柱間間隔も0.7～1.3mと，中央の柱間が相対的に近接して配される。柱通りは概ね良好である。建物規模が小規模で，柱の並びも一定せず，建物遺構として報告すべきかやや躊躇を伴うが，各柱穴の埋土が近似していたこともあって，参考資料として掲載しておく。



第84図　ＳＢ08平・断面図（1/80）



第85図　ＳＢ09平・断面図（1/80）



第86図　ＳＢ10平・断面図（１/80）

遺物は，ＳＰ1083等より土師質土器皿・鍋，須恵器等の土器片が少量出土しているに過ぎない。いずれも図示できないまでに小片化しており，細かな時期を特定する資料とはなりえない。上記した位置関係等の点から，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるに過ぎない。

ＳＢ09（第85図）

Ｉ区中央東端Ｄ７グリットで検出した東西棟の建物である。ＳＸ03・09，ＳＤ22等と重複し，そのいずれよりも後出する可能性が高い。東端は調査区外へ延長するため，全容を窺うことはできない。また本建物も，調査終了後に図上で復元したため，細かな観察は行えていない。桁行３間（3.6m）以上，梁間２間（2.7m），主軸方向Ｎ73.1°Ｅ，床面積9.7m²以上の側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.4mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.07～0.19mと浅いものが目立つ。掘り方底面の標高は10.21～10.39m，桁方向の柱間間隔は1.1～1.5mと規則性に欠けるが，柱通りは良好である。

本建物に伴う遺物は出土しておらず，明確な時期を特定することは困難である。したがって他遺構との重複関係や層位的位置関係等から，14世紀代を中心とした時期に位置付けら

れるに過ぎない。

ＳＢ10（第86図）

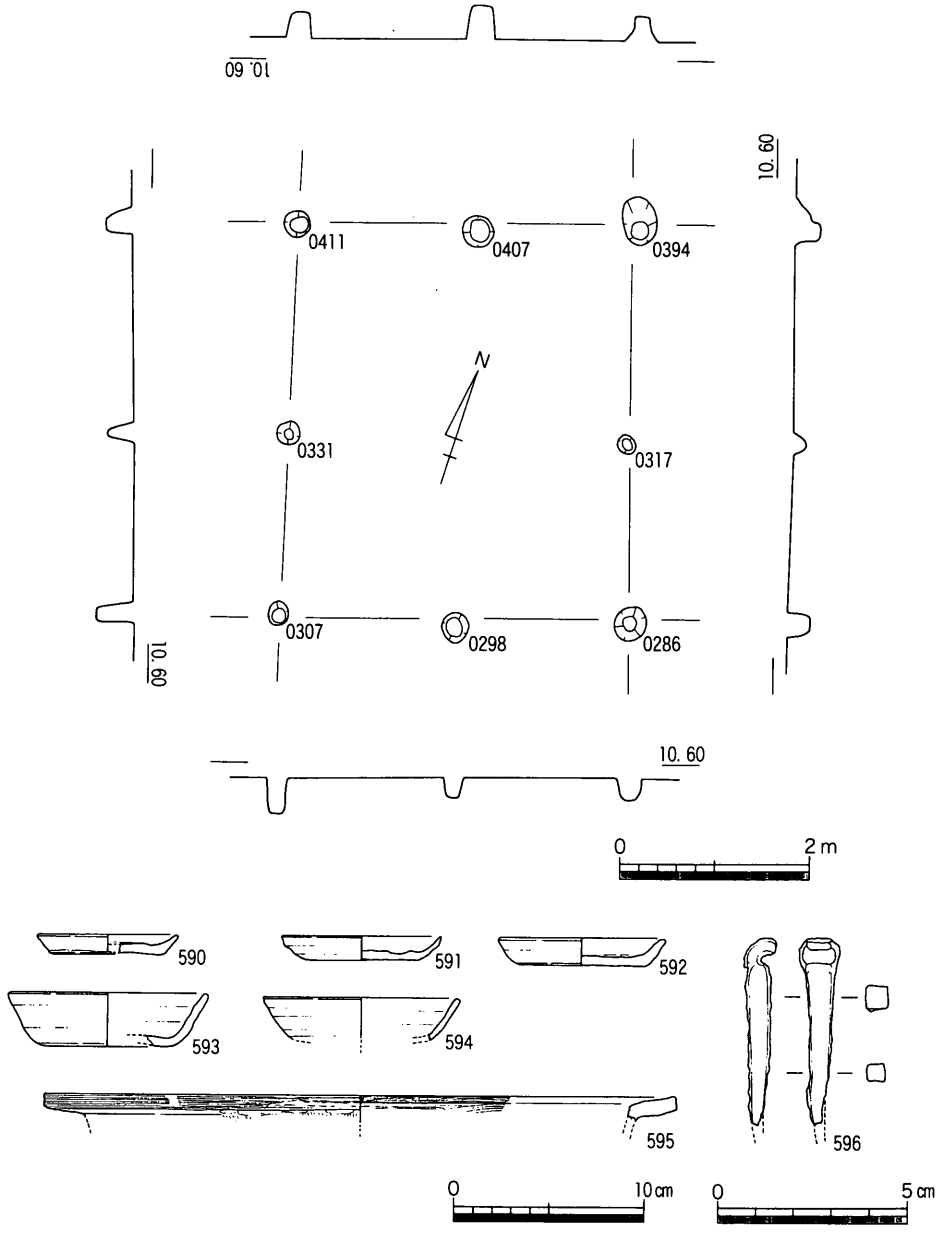
Ｉ区中央東端Ｄ７グリットで検出した東西棟の建物である。ＳＢ09・11，ＳＤ22等と重複し，柱穴の切り合い関係よりＳＤ22より後出する可能性は確認できた。また，建物南東隅に小溝ＳＤ21が配され，位置関係より本建物に付随する雨落ち溝となる可能性も考えられたが，断定するまでには至らなかった。なお，本建物については調査終了後の検討の結果，東半部の柱穴の並びを一部変更しており，この部分の柱穴については細かな観察を行えていない。桁行４間（5.5m），梁間２間（3.2m），主軸方向Ｎ69.3°Ｅ，床面積17.6㎡の小規模な側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.4mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.3m以下とやや浅いものが多い。底面の標高は10.14～10.34m，桁方向の柱間間隔は0.9～1.3mとそれぞれ規格性に欠け，柱通りもやや安定しない。上記数値は概ね妥当性のある誤差の範囲内として考え，掘立柱建物として評価する。

遺物は，ＳＰ0320等より土師質土器皿等の小片が極少量出土したのみである。図示し得る遺物には恵まれず，細かな時期を特定することは困難だが，上記遺構の重複関係や層位的な位置関係から，14世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＢ11（第87図）

Ｉ区中央東半Ｄ６・７グリットで検出した南北棟の建物である。ＳＢ10等と重複するが，明確な先後関係は捉えられていない。桁行２間（4.1m），梁間２間（3.7m），主軸方向Ｎ17.0°Ｗ，床面積15.2㎡の小規模な側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.4m以下とやや深いものが多い。掘り方底面の標高は，10.05～10.27mと一定せず西列がやや深くなる。桁方向の柱間間隔は1.8～2.2mとやや揃わないが，柱通りは良好である。

遺物は，土師質土器皿や鍋を中心とした土器片が少量出土している。７点を選んで図示した。590～593はＳＰ0394，594・595はＳＰ0307，596はＳＰ0407よりそれぞれ出土した。590～592は，土師質土器皿である。591の口縁部は中位に鈍い段を有して，端部はやや直立気味に立ち上がる。当遺跡では類例に乏しい。592は，口縁部の一端に煤の付着が認められ，灯明皿として使用された可能性が高い。593・594は，土師質土器坏。口縁端部付近で小さく外反して開く593と，やや内湾気味に開く594の２者がある。595は，土師質土器鍋。口縁部は強く折り返して水平に近く開き，端部を矩形に納める。内外面共，ハケ調整が卓越する。596は，頭部を折り返したのみの鉄釘。軸部幅６㎜程の角釘である。上記出土

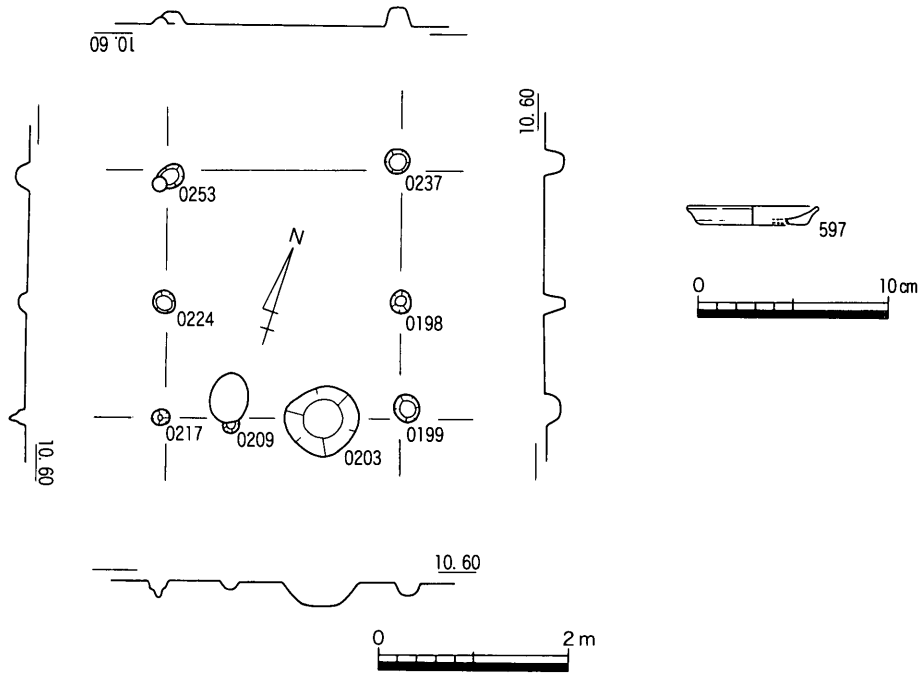


第87図　ＳＢ11平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4・1/2）

遺物より，概ね14世紀初頭を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＢ12（第88図）

Ｉ区中央東半Ｄ７グリットで検出した南北棟の建物である。南西に近接して主軸方向を等しくする小溝ＳＤ24が配されており，本建物に伴う雨落ち溝となる可能性が高い。また，ＳＤ21・22等と重複し，溝上面で柱穴が確認されなかったことからすれば，本建物が溝群



第88図　ＳＢ12平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４）

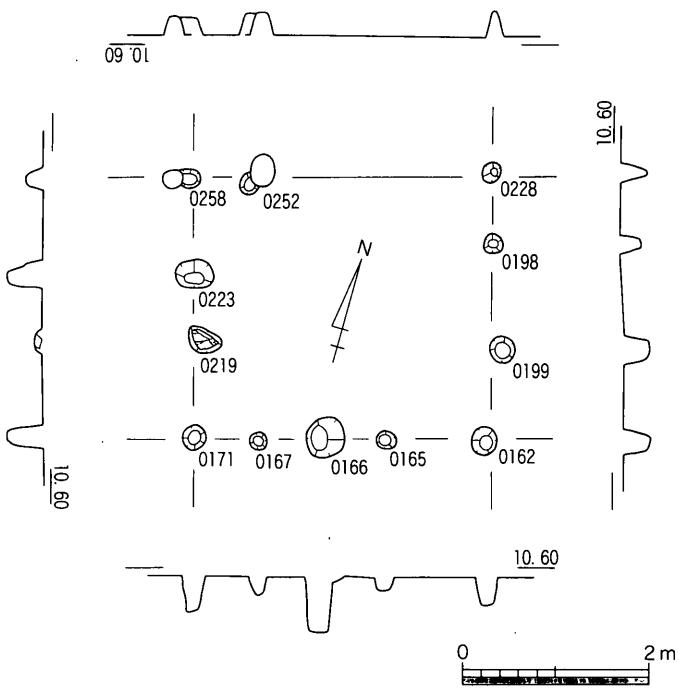
より先行するものと考えられる。ＳＢ13とはＳＰ0198を，ＳＢ14とはＳＰ0209をそれぞれ共有する。桁行２間（2.6m），梁間３間（2.5m），主軸方向N17.6° W，床面積6.5㎡の小規模な側柱建物を復元する。桁方向と梁方向で柱穴の間隔が大きく異なり，本来的には梁間は２間であった可能性が高いが，ここでは上記復元案に従っておく。柱穴の掘り方は，径0.3m前後の円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.2m程度と浅い。掘り方底面の標高は，10.32～10.41mと概ね一定する。桁方向の柱間間隔は1.1～1.4mとやや北側が広く配されるが，柱通りは良好である。

遺物は，土師質土器皿を中心とした土器片が少量出土している。１点のみ図示した。597は，ＳＰ0203より出土した橙色系の土師質土器小皿ａ類である。口縁部はやや歪みがみられ，復元された口径にはやや難がある。全体にやや摩滅が進行している。出土した遺物より細かな時期を特定することは困難であり，概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられるに過ぎない。

ＳＢ13（第89図）

Ｉ区中央東半Ｄ７グリットで検出した東西棟の建物である。ＳＢ12同様，建物南西に近接して主軸方向を等しくする小溝ＳＤ25が配されており，本建物に伴う雨落ち溝となる可

能性が高い。ＳＢ12，ＳＤ24等と重複し，切り合い関係よりＳＤ24より後出する。桁行３間(3.2m)，梁間３間(2.8m)，主軸方向N74.6°Ｅ，床面積9.0㎡の小規模な側柱建物を復元する。桁方向の柱間間隔は0.6～1.1m，梁方向の柱間間隔は同様に0.6～1.1mであり，建物規模に比して柱穴は密に配される。こうした復元案が妥当なものかどうかやや疑問だが，ＳＤ25との整合性などから，参考までに提示しておく。柱穴の掘り方は，径0.2～0.4m前後の円ないしは楕円形を呈する。掘り方底面の標高は，9.90～10.42mと一定せず，最も浅いＳＰ0219の底面には根石が据えられるなど，当初より柱長が一定していなかった可能性が高い。想定される柱通りは良好である。

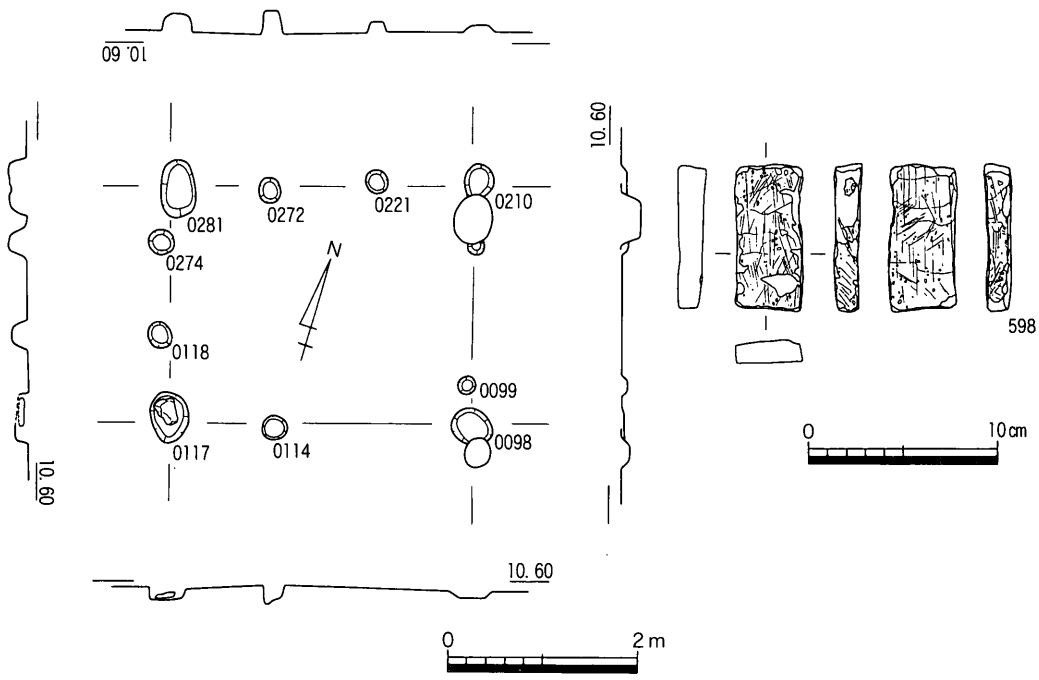


第89図　ＳＢ13平・断面図（1/80）

遺物は，ＳＰ0166等より土師質土器皿を中心とした土器片が極少量出土しているに過ぎない。いずれも図示できないまでに小片化しており，出土遺物より細かな時期を特定することは困難であろう。上記した他遺構との重複関係などから，概ね14世紀中葉を中心とした時期に位置付けられるものと考える。

ＳＢ14（第90図）

Ｉ区中央東半Ｄ７グリットで検出した東西棟の建物である。ＳＢ12・13，ＳＤ24・25等と重複するが，先後関係は不明である。桁方向南列東より２穴目の柱穴を欠く。桁方向の柱穴は比較的整った位置関係に配されるが，梁方向の柱穴は規格性に欠ける。つまり，東列では梁間２間として復元することが可能だが，西列では３間としてのみ復元される。それが建物本来の性格に起因するものか，本来的に建物として復元することに難があるためかは不明であり，ここでは一例として復元案を提示しておきたい。桁行３間（3.2m），梁間３間（2.5m），主軸方向N73.5°Ｅ，床面積8.0㎡の小規模な側柱建物を復元する。柱



第90図　ＳＢ14平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

穴の掘り方は，径0.3～0.5mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.06～0.21m前後と浅い。ＳＰ0117は，底面に板状の根石を有する。掘り方底面の標高は，10.27～10.43mとやや一定せず，西半部の柱穴がやや深くなる。桁方向の柱間間隔は1.0～1.1mとよく揃っており，柱通りも良好である。

遺物は，土師質土器皿，須恵質土器甕体部，須恵器壺等の土器片が少量出土しているに過ぎない。1点のみ図示した。598はＳＰ0117より出土した流紋岩製の砥石である。長軸7.6cm，短軸3.5cm，厚さ1.5cmの薄い板状を呈し，上下端面を除く4面に使用痕を認める。なお，下端面は意図的に切断・分割した可能性がある。主研面は表裏面で，よく使い込まれて縦断面は波状を呈する。出土遺物より細かな時期を特定することは困難であり，検出された位置関係などから概ね14世紀代を中心とした時期が想定されるに過ぎない。

ＳＢ15（第91図）

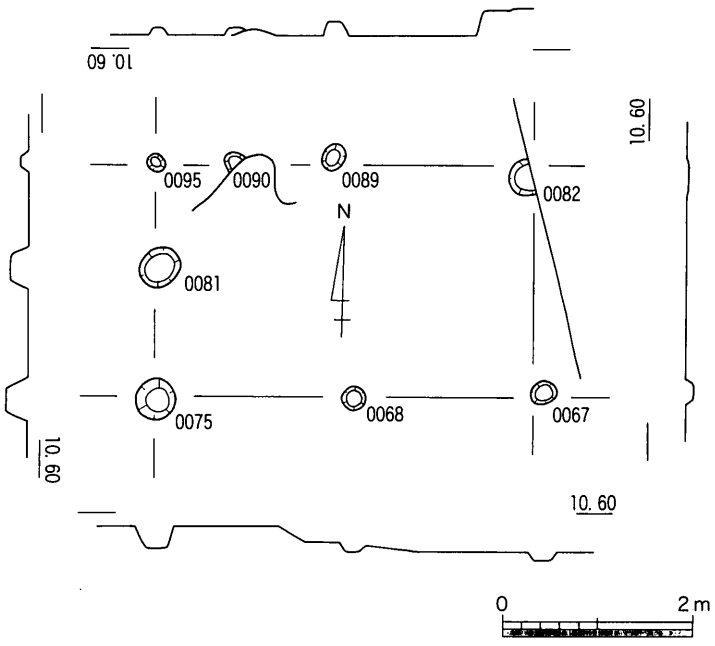
Ｉ区中央東端Ｄ7グリット周辺で検出した東西棟の建物である。ＳＸ04等と重複し，切り合い関係よりＳＸ04より先行する可能性が高い。また，東端は調査区端に接しており，より以東に延長する可能性も考えられる。本建物も調査終了後に図上で復元したため，一部の柱穴を欠落しており，参考資料としての提示にとどめる。桁行4間（4.0m），梁間2

間（2.4m），主軸方向N89.1° E，床面積9.6㎡の小規模な側柱建物を想定する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.4mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.08～0.23m前後と比較的浅い。掘り方底面の標高は，10.11～10.38mと一定せず南列がやや深くなる。桁方向の柱間間隔は1.0m程度である。

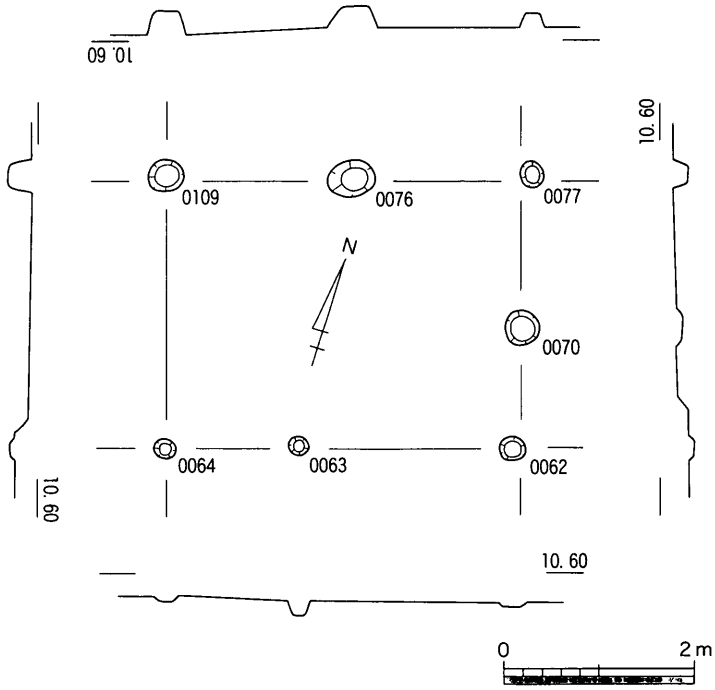
遺物は，土師質土器皿や須恵器坏などの土器片が少量出土しているに過ぎない。図示可能な遺物の出土に恵まれず，時期を特定することは困難である。辛うじて上記遺構との重複関係より，14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SB16（第92図）

Ⅰ区中央東端C7グリット周辺で検出した東西棟の建物である。上記SB15と重複するが，先後関係は不明である。南列の柱穴上面は，旧地割

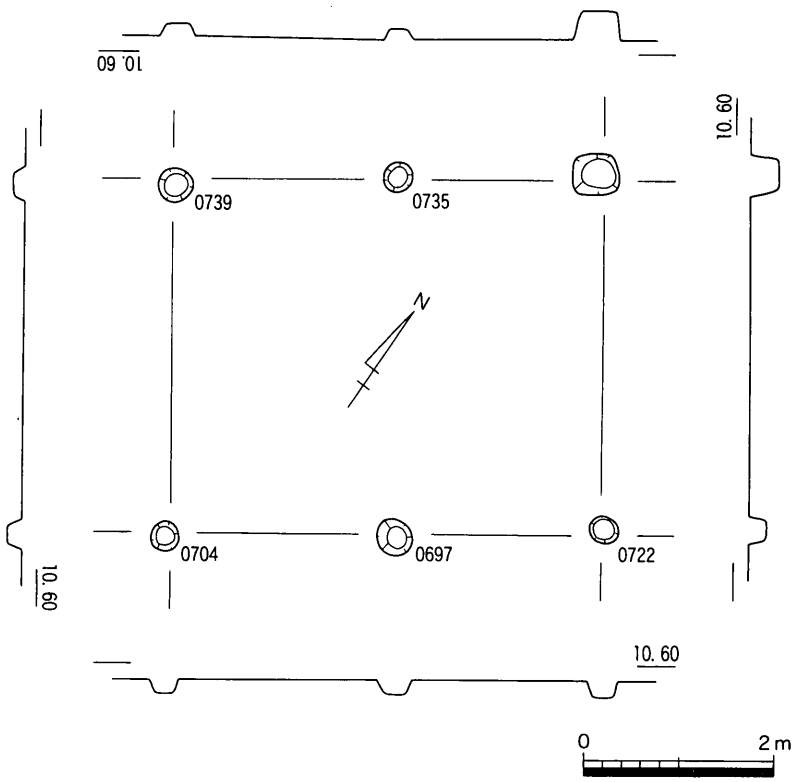


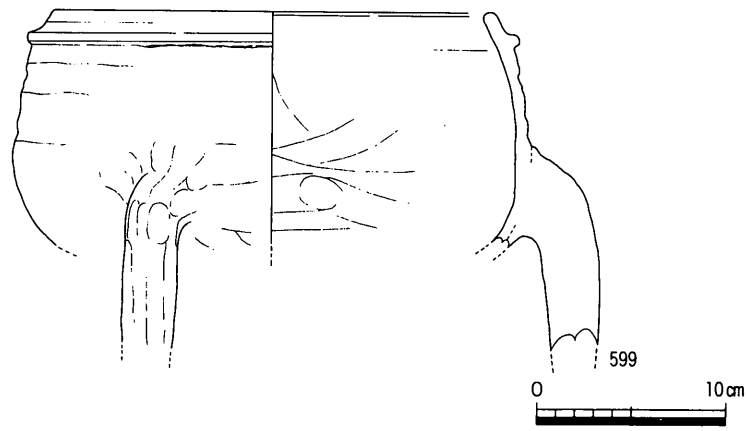
第91図　SB15平・断面図（1/80）



第92図　SB16平・断面図（1/80）

りの改変により0.2m程の削平を蒙る。本建物も調査終了後図上で復元したものであり，西列中央穴を欠落する。桁行２間(3.8m)，梁間２間(2.8m)，主軸方向N72.7° E，床面積10.6m²の小規模な側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.5mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.03～0.23m前後と浅い。掘り方底面の標高は，10.16～10.38mとやや一定しないが，柱通りは整っている。

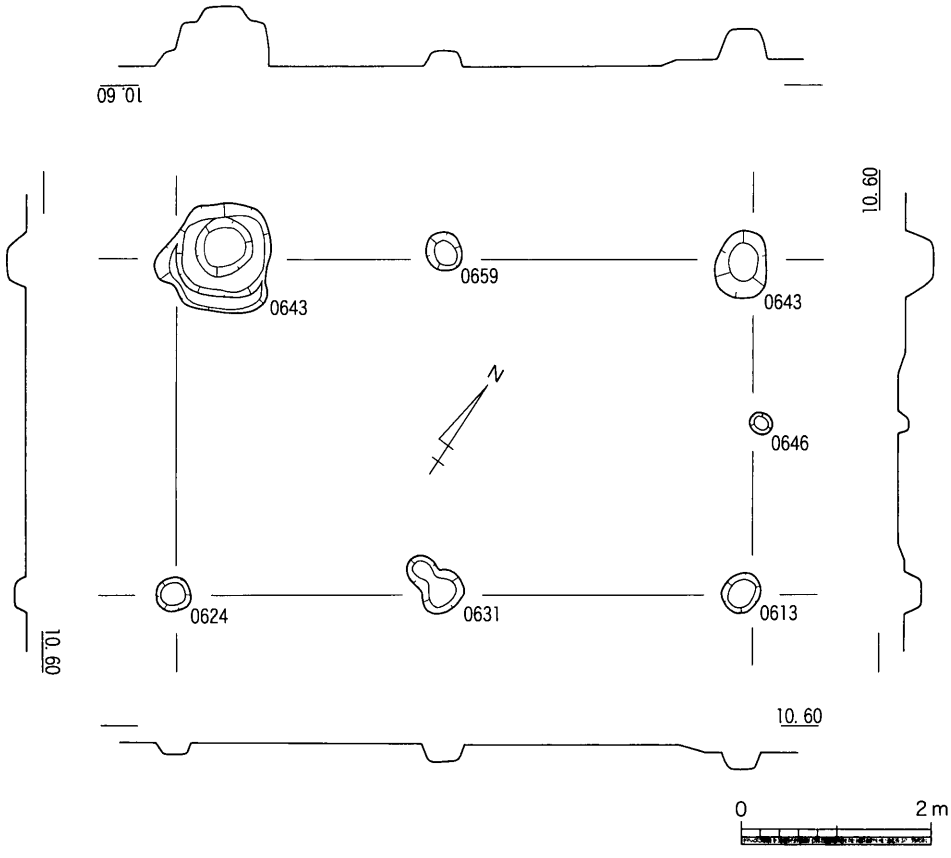




第93図　ＳＢ17平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

遺物は，器種が特定できないまでに小片化した瓦質土器と須恵器片が各１点出土したのみである。したがって細かな時期を特定することは困難であり，検出した位置や層位的関係から概ね14世紀代を中心とした時期が想定されるに過ぎない。

ＳＢ17（第93図）



第94図　ＳＢ18平・断面図（１/80）

Ｉ区中央西端Ｄ５グリットで検出した東西棟の建物である。東に接してＳＤ36が主軸方向を揃えて配されており，本建物に伴う雨落ち溝となる可能性もある。また，梁間の柱間距離は他の建物と比して著しく広く，本来は２間となる可能性が高いが，ここでは調査時の所見に従って梁間１間として報告する。桁行２間（4.6m），梁間１間（3.7m），主軸方向Ｎ53.7°Ｅ，床面積17.0㎡の小規模な側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.3～0.4mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.13～0.33m前後と比較的浅いものが多い。掘り方底面の標高は，10.15～10.35mで北東隅の柱穴を除けば概ね一定する。桁方向の柱間間隔は2.2～2.4mとやや西側が広く配され，柱通りは整っている。

遺物は，土師質土器皿や足釜，須恵器を中心とした土器片が少量出土している。１点のみ図示した。599は，ＳＰ0735より出土した土師質土器足釜ｃ類である。口縁部は内傾して立ち上がり，端部は丸く収める。鍔部は退化が著しく，もはや断面蒲鉾状を呈する突帯に過ぎない。体・底部内・外面は，ナデ調整が卓越してハケ調整は著しく後退し，外底部

は辛うじて格子状のタタキ調整を認める。脚部は比較的細身で，垂直に近く垂下する。形状から，ｃ類の中でも後出する可能性が高い。上記した出土遺物より，概ね14世紀後半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＢ18（第94図）

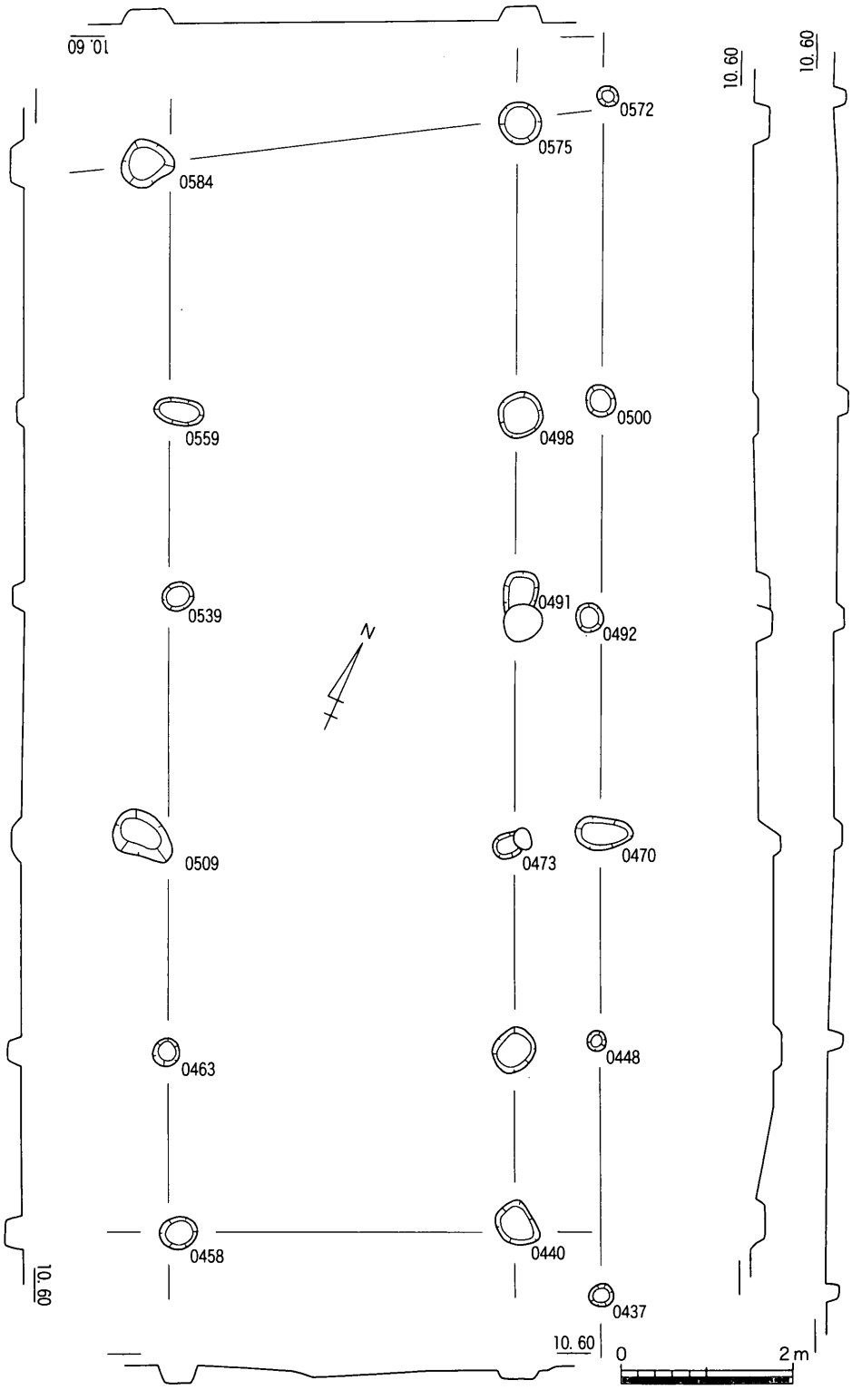
Ｉ区中央西端Ｄ５グリットで検出した東西棟の建物である。梁間西列中央穴を欠く。また，ＳＫ12，ＳＸ01，ＳＤ08と重複し，そのいずれよりも先行する可能性が高い。桁行２間（6.1m），梁間２間（3.5m），主軸方向Ｎ56.0°Ｅ，床面積21.4㎡の小規模な側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.2～0.6mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.3m以下とやや浅いものが多い。底面の標高は，北東隅のＳＰ0643を除いて10.16～10.31mと概ね一定する。ＳＰ0643は他の柱穴と比してやや規模が大きく，他遺構の重複の可能性もある。桁方向の柱間間隔は，2.9～3.3mとやや揃わないが，柱通りは整っている。

遺物は，ＳＰ0643より土師質土器足釜等の小片が数点出土したのみである。出土遺物より細かな時期を特定することは困難であり，上記した重複関係や層位的な位置関係から14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

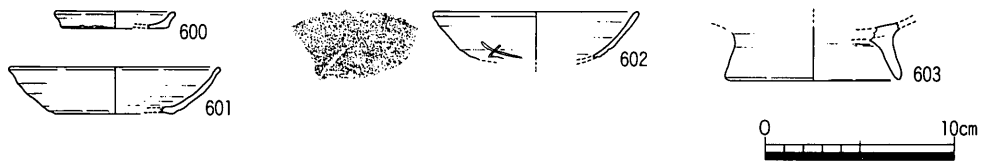
ＳＢ19・ＳＡ01（第95・96図）

Ｉ区中央Ｃ・Ｄ６グリットで検出した南北棟の建物である。東に接して柵列ＳＡ01が，建物と主軸方向をほぼ揃えて配される。当初は建物に伴う庇の可能性を考えたが，南北両端の柱穴が建物梁方向の柱穴列よりそれぞれ外側に配されることから，ここでは柵列として報告する。いずれにしろ，両遺構の柱穴の並びはほぼ揃えられており，併存の可能性は疑いないだろう。また，ＳＢ20，ＳＸ06，ＳＤ03等と重複し，切り合い関係よりＳＢ20より先行し，ＳＸ06，ＳＤ03より後出する可能性が考えられる。

ＳＢ19は，桁行５間（12.3～12.7m），梁間１間（4.0m），主軸方向Ｎ24.4°Ｗ，床面積50.0㎡程度の南北に長い大型の側柱建物を復元する。桁方向の長さは，東列と西列で約0.4m程の誤差があり，また両北隅の柱間距離は，他のそれよりやや長く配されており，１間分短く建物を復元することも可能だが，柵列との整合性を重視して，上記復元案を提示する。また梁間の柱間距離は，他の建物と比して相対的に長く，本来は２間であった可能性が高い。柱穴の掘り方は，径0.4～0.6mの円ないしは楕円形を呈する。建物規模に比例して，柱穴規模も他の建物より相対的に大きく掘り込まれているが，残存深は0.2m程と上面の削平が著しい。掘り方底面の標高は10.10～10.38m，桁方向の柱間間隔は2.0～3.2mとやや規格性に欠けるが，柱通りはよく整っている。なお，本建物については上記した



第95図　ＳＢ19・ＳＡ01平・断面図（１/80）



第96図　ＳＢ19出土遺物実測図（1/4）

規模・形態から通有の掘立柱建物とは異質であり，厩の可能性を想定しておきたい。

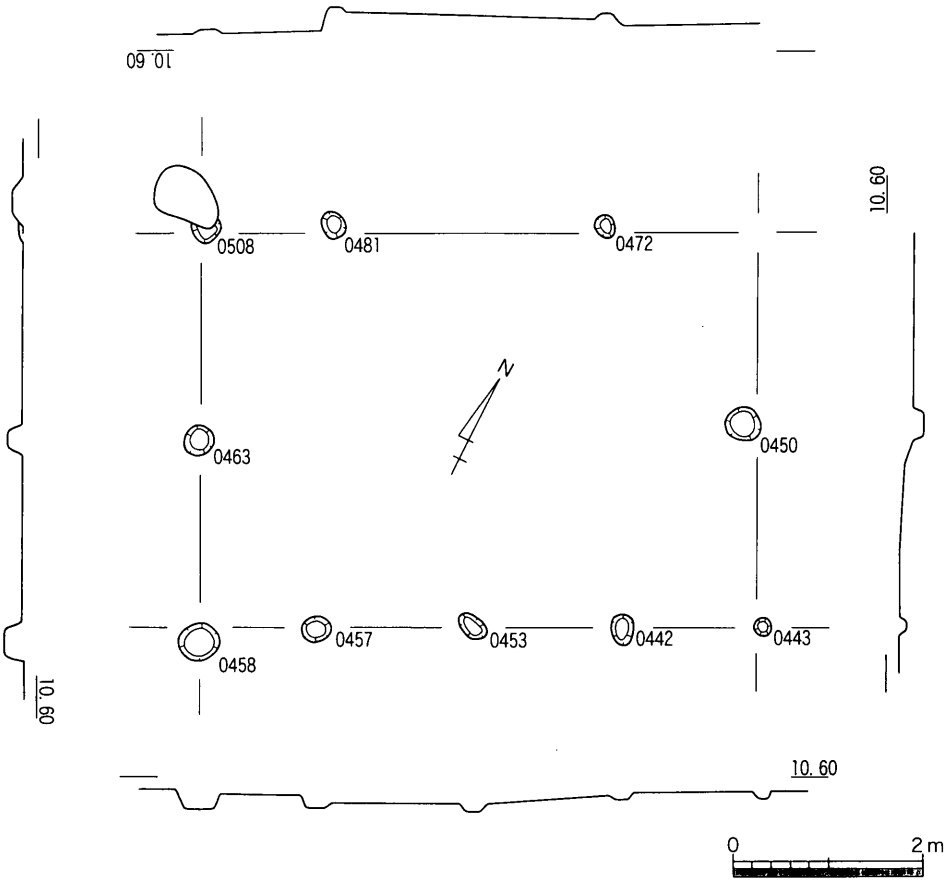
ＳＡ01は，ＳＢ19より東に1.0m離れてほぼ平行して配される。柱穴は５間（13.7m）分検出し，主軸方向Ｎ23.5°Ｗに配される。より以南・北に，整った位置関係にある柱穴は確認されず，上記した復元案が本来的なものである可能性が高い。ただ，ＳＢ19との位置関係から，南北両端より西に屈曲して，建物をコ字形に囲む可能性も考えられたが，調査時に充分な検討を行わなかったため，ここでは直線状の柵列として報告するにとどめる。柱穴は，径0.3～0.4mの円ないしは楕円形を呈し，建物柱穴より相対的にやや小型である。残存深は0.2m以下で，建物同様上面の削平が著しい。掘り方底面の標高は10.22～10.35mとやや一定せず，柱間間隔も2.4～3.4mと南北両端の柱穴が大きく離れて配され，やや規格性に欠けるが，柱通りは整っている。

遺物は，ＳＰ0539等より土師質土器皿や鍋等の土器片が少量出土したのみである。いずれも図示できないまでに細片化しており，細かな時期を特定することは困難である。上記した他遺構との重複関係などから，概ね14世紀後半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＢ20（第97図）

Ｉ区中央Ｃ６グリット周辺で検出した東西棟の建物である。ＳＢ19，ＳＤ02，ＳＸ06と重複し，そのいずれよりも後出する可能性が高い。また，ＳＢ19とはＳＰ0458・0463の２穴を共有する。北列中央穴と北東隅穴の２穴を欠く。桁行４間（5.9m），梁間２間（4.1m），主軸方向Ｎ61.9°Ｅ，床面積24.2㎡の側柱建物を復元する。柱穴の掘り方は，径0.2～0.4mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.25m以下とやや浅いものが多い。底面の標高は10.17～10.38m，桁方向の柱間間隔は1.2～1.7mといずれもやや規則性に乏しいが，柱通りはよく整っている。

遺物は，ＳＰ0442・0443等より土師質土器皿・片口鉢等の小片が少量出土したに過ぎない。出土遺物より細かな時期を特定することは困難であり，上記した他遺構との重複関係

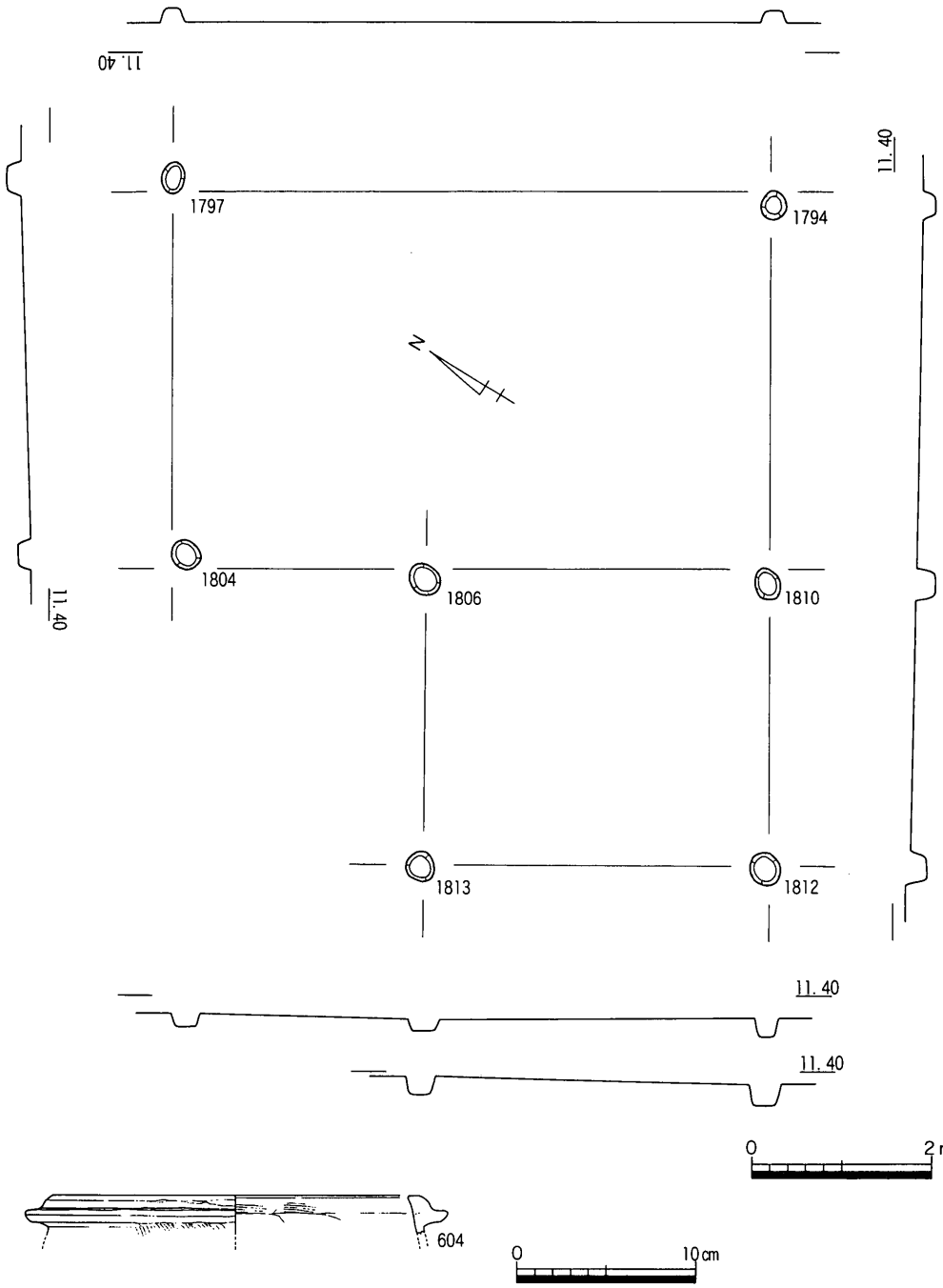


第97図　ＳＢ20平・断面図（１/80）

や層位的な位置関係から14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＢ22（第98図）

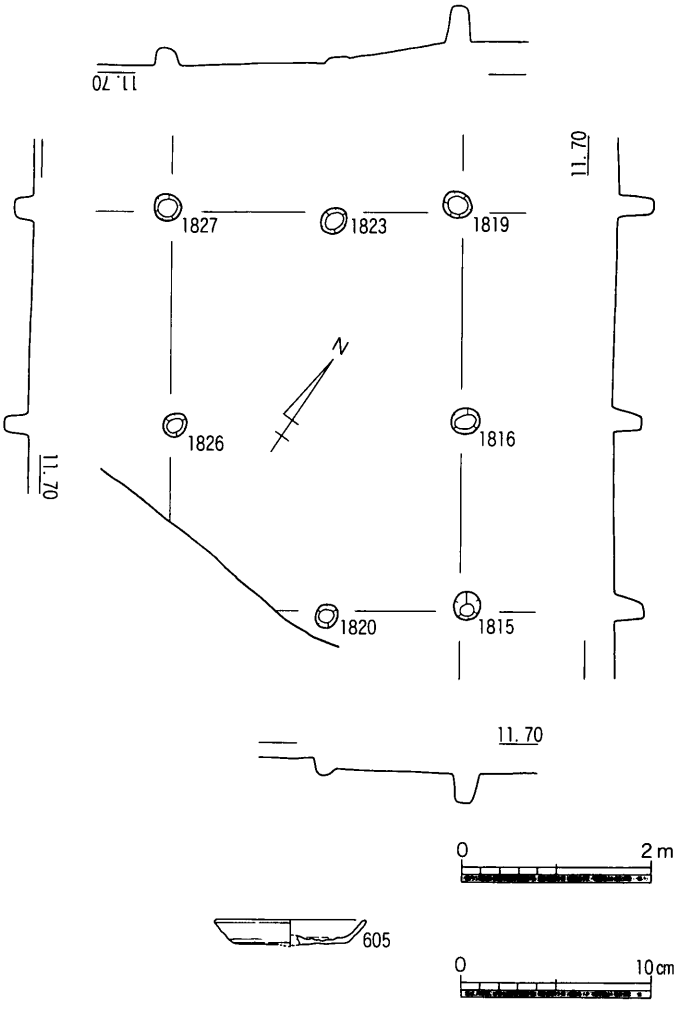
Ⅲ区東半部Ｂ１グリット周辺で検出した建物遺構である。桁行東列中央穴を欠く。桁行２間（6.6m），梁間１間（4.1m），主軸方向Ｎ28.5°Ｗ，床面積27.1㎡の側柱建物の西側に，１間四方の床面積11.8㎡程の小建物が付設される構造を復元する。一部柱穴が欠落し，また柱間間隔が他の建物と比してやや広いことから，参考資料として提示するにとどめる。柱穴の掘り方は，径0.3m前後の楕円形を呈し，残存深は0.1～0.2mと，上面の削平に起因するためか後述するＳＢ23と比してやや浅い。底面の標高は，東列の柱穴で10.95m前後，中央列の柱穴で10.94～11.05m，西列の柱穴で11.03～11.15mをそれぞれ測り，東側の柱穴程より深く掘り込まれている。これは，緩斜面の下方に位置する東列の柱穴をより深く掘り込み固定することで，建物の安定性を高めることを意図したものと考えられる。桁方向の柱間間隔は，2.6～3.8mと南側が広く配される。



第98図　ＳＢ22平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４）

遺物は，ＳＰ1794・1804・1806・1810・1812の各柱穴より，器種不詳にまで小片化した土師質土器や須恵器等の小片が，少量出土したに過ぎない。１点のみ図示した。604は，ＳＰ1813より出土した土師質土器足釜ｂ類である。口縁部の立ち上がりは短いが，口縁端

部及び鍔端部は辛うじて矩形を呈し，鍔部は水平に開き，鍔部及び体部外面にハケ調整が施される等，やや古い様相を呈する。出土遺物より細かな時期を特定することは困難だが，概ね14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考えておく。



第99図　ＳＢ23平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

ＳＢ23（第99図）

Ⅲ区西半部Ｂ０グリットで検出した南北棟の建物である。南西隅の柱穴は調査区外に位置する。桁行２間（4.2m），梁間２間（3.0m），主軸方向Ｎ36.1°Ｗ，床面積12.6㎡の小規模な側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.3m前後の楕円ないしは略円形を呈し，残存深は0.1～0.4mを測る。底面の標高は，東列の柱穴は11.0～11.1mを，西列の柱穴は11.3～11.4mをそれぞれ測り，前記ＳＢ22同様緩斜面の下方に位置する東列の柱穴がより深く掘り込まれる点で共通する。なお，梁間の中央穴は11.3～11.5mと他の柱穴と比して著しく浅い。桁方向の柱間間隔は，1.9～2.2mとやや北側が広く配され，また柱通りはよく整っている。

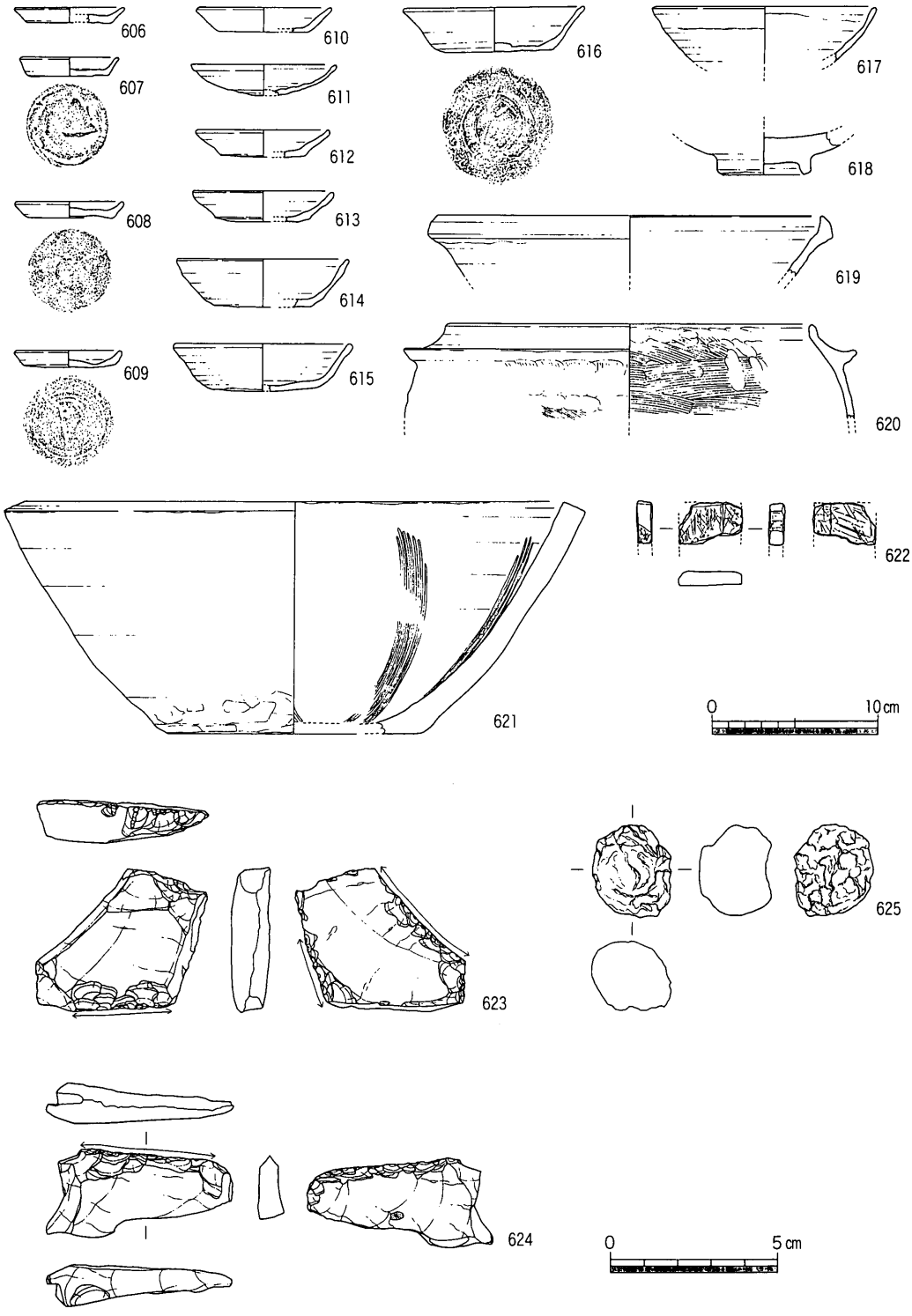
遺物は，ＳＰ1815・1816・1819・1820・1823・1826より土師質土器皿・坏，須恵器等の小片が少量出土したに過ぎない。１点のみ図示した。605は，ＳＰ1826より出土した土師質土器皿である。橙色系の小皿ｂ類に属し，外底面は回転ヘラ切り調整後弱いナデ調整が施される。出土遺物より細かな時期を特定することは困難だが，概ね14世紀代には位置付けられると考える。

柱穴（第100・101図）

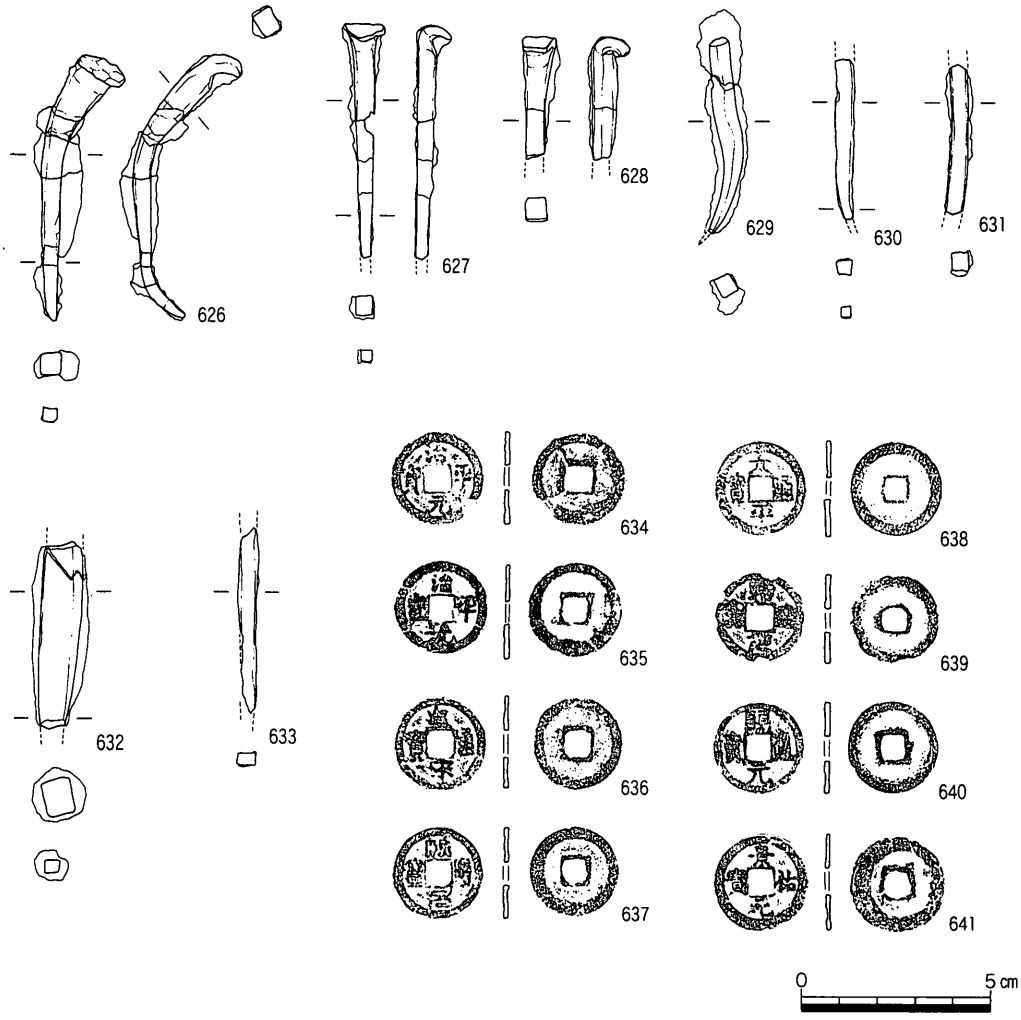
形状や埋土の特徴及び出土遺物の点から，当該時期の柱穴と考えられる遺構は，Ⅰ区及びⅢ区において約1,500基程度検出している。そのうち建物遺構として復元されたのは上述した22棟であり，大半はその性格を特定するまでには至っていない。以下ではこれら柱穴より出土した遺物について，特徴的な資料を選んで，当該時期の様相を理解する参考資料として掲載する。

606～609は，橙色系の土師質土器小皿ａ類である。底部の器壁が薄く，外底面がヘラ切り調整されるのみのもの（607）と，器壁が相対的に厚く，外底面にヘラ切り調整の後板状圧痕と弱いナデ調整が加えられるもの（608・609）の２者がある。610は土師質土器小皿ｂ類。612・613は同ｃ類である。611は，外底面を回転ヘラ切り調整により丸底状に仕上げられる。本遺跡では他に例が乏しい。614～616は，土師質土器皿である。614は，やや小形の皿で，口縁部を小さく外反させる。615・616は，灰黄色系を呈する焼成の堅緻な製品。底部外周に鈍い稜を有し，外底面はヘラ切り調整後板状圧痕を認める。617は，十瓶山窯系の須恵質土器碗。口縁部内外面に，特徴的な重ね焼きによる炭素の吸着を認める。618は，龍泉窯系青磁碗Ⅳ類の底部片。胎土は粗く灰色系を呈し，高台内から端部を除いて厚く施釉される。619は，東播系須恵器の捏鉢口縁部片。端部は上方へ大きく挽き出されつつ肥厚する。620は，土師質土器足釜ｃ類。外面は被熱による器表面の剥離が顕著。辛うじて体部にハケ調整を認める。口縁部は内傾して立ち上がり，端部は鈍く折り返して直立する。621は，間壁編年Ⅱ期に位置付けられる備前焼擂鉢。内面には僅かに二次的被熱による煤の付着を認める。内面は，１単位８条程度の卸目がやや間隔を開けて施され，内底面はよく使い込まれて摩滅する。

622は，流紋岩製の砥石。扁平な板状を呈し，４面に使用が確認される。623は，サヌカイト製の火打石とした。周縁に顕著な潰れを認める。624は，楔形石器の削片である。器表面は白色風化が進んでいる。625は，球状を呈する鉄滓である。分析結果については，第２章に後掲する。626～633は，角釘である。いずれも先端部や頭部を欠損する。幅1.0cm程の大型のもの（626）と，幅0.5cm程の小型のもの（627～631・633）の２者がある。頭部が確認できるものでは，いずれも一方へ折り曲げたのみの単純な形態を呈する。634～641は，北宋銭である。634～637は，ＳＰ1427底面に接して一括して出土した。いずれも表を上にして，概ね東西南北方向に十字に並べられており，地鎮めに伴う祭祀行為とみてよい。配置は，北に熙寧元寶（637），東に皇宋通寶（636），西と南に治平元寶（634・635）



第100図　柱穴出土遺物実測図1（1/4・1/2）



第101図　柱穴出土遺物実測図２（１/２）

が配される。638～640は，ＳＰ0143より出土した。ＳＰ1427とは異なり，３枚が重ねられて埋土中より出土しており，地鎮に伴うものかどうかは不詳。上２枚は，熙寧元寶と太平通寶が表を上に，一番下に開元通寶が裏を上にして重ねられていた。なお，同柱穴からは他に土師質土器皿等の小片が数点出土している。641は，ＳＰ0931より出土した景祐元寶である。

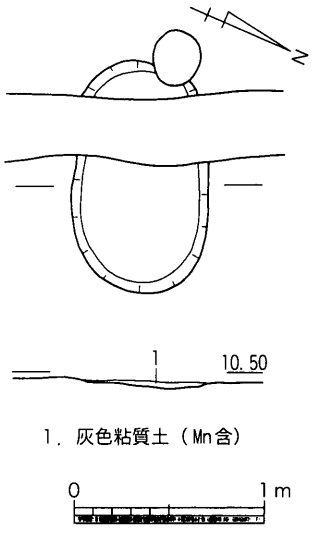
土坑

ＳＫ01（第102図）

Ｉ区中央南半Ｃ６グリットで検出した土坑である。重複関係より，ＳＤ04より先行する。

長軸1.2m，短軸0.7mの平面形は整った長円形を呈する。残存深は，上面の削平を顕著に蒙っているためか僅かに数cm程度しかなく，断面形は周壁が緩やかに掘り込まれた浅い皿状となる。底面の標高は10.4mを測る。埋土は，灰色粘質土の単層であった。主軸方向はN67.5°Eで，概ねSD04等の方向と直交して配されており，本遺構の時期を推定する上で大きな指標となる。

遺物は，土師質土器とみられる土器細片が1点出土したのみであり，細かな時期の特定は困難である。上記した埋土の特徴や遺構の重複関係から，概ね13世紀末から14世紀前半代に位置付けられるものと考える。



第102図　SK01平・断面図（1/40）

SK02・SD27（第103図）

Ⅰ区西部南半C6グリットで検出した土坑と，それより派生して東へ伸びる小溝である。両遺構の埋土に切り合い関係は認められず，掘り方の北縁ラインが一致していたこと，SD27底面がSK02に向けて緩やかに下降することなどから，同時併存の可能性を考え調査を行った。以下では，土坑部をSK02，溝状部をSD27として報告する。

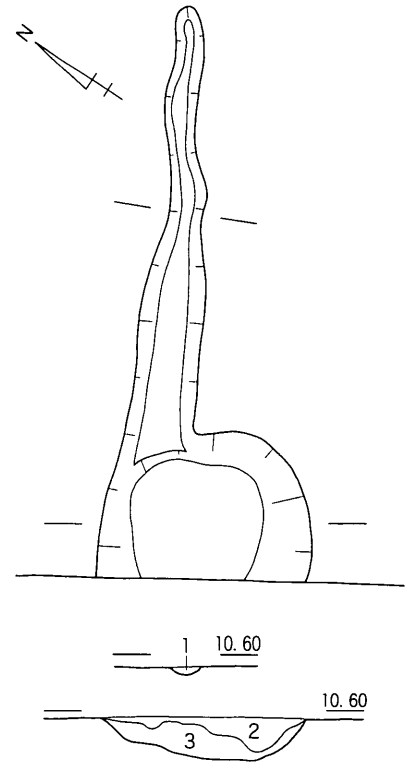
SK02は，径1.1m程の平面円形ないしは楕円形を呈する土坑である。西縁部を後世の地下げにより削平を蒙り，全形を窺うことはできない。深さは最深部で0.2mあり，底面の標高は10.35mを測る。断面形は，概ね逆台形状を呈する。埋土は2層に細分された。いずれも大差のない灰色系の粘質土が堆積する。埋土中には，下位層を中心にベース層等のブロック土を顕著に混入し，また下位層と上位層の境が明確な不整合面をなしていることからも，人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

SD27は，SK02の北東隅部より東に延びる小溝である。延長約2.2mを検出した。流路方向N61.9°Eと，概ねSD04と直交して配される。幅0.2～0.4mで，深さは最深部で0.1m程と浅い。底面の標高は10.5mを測り，SK02の底面とは若干の段差を伴う。埋土は，灰黄色粘質土の単層で，SK02と異なりブロック土の混入は顕著ではない。

遺物は，SD27より土師質土器坏小片が1点出土しているのみである。図示していないが，外底面は回転ヘラ切り調整されており，14世紀代に位置付けられると考えるが，細かな時期と特定する資料にはならない。

ＳＫ03（第104図）

Ｉ区中央南半Ｄ６グリットで検出した土坑である。平面形は，長軸1.4m，短軸0.65mの南北に長い隅丸長方形を呈する。北半部は浅く平坦なテラス状をなし，南半部はテラス部より約0.2m程深く掘り込まれて底面となり，断面形は概ね逆台形状を呈する。こうした不整形な断面形状より，複数の遺構の重複の可能性も考えられたが，埋土の堆積状況からは断定するまでには至らなかった。南半部底面は概ね平坦で，底面の標高は10.15mを測る。主軸方向は，Ｎ22.0°Ｗであった。



第103図　ＳＫ02・ＳＤ27平・断面図（1/40）

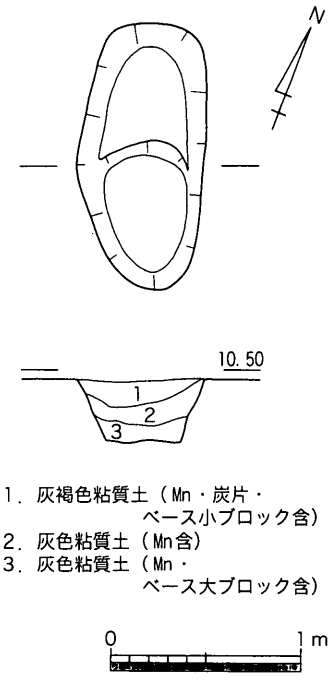
埋土は，南半部で３層に細分され，概ね水平に堆積する。いずれも灰色系の粘質土であり，下位２層は南半部のみに，最上位層はテラス部をも覆って広く堆積する。下位２層は，主にベース層のブロック土の混入の有無によって細分したが，土質や色調等には大差を認めず，近接した時間内で堆積した可能性が高い。最下位層中のみにブロック土の混入が顕著にみられることから，こうしたブロック土の混入が人為的な埋め戻しに起因するものではなく，壁面の崩落により堆積した可能性も考えられる。最上位層は，中央部が窪んだ断面レンズ状を呈して堆積し，またやや濁りのある色調を呈して炭片等の混在がみられることから，自然堆積の可能性が高い。

遺物は，土師質土器皿・足釜や須恵器等の土器片が少量出土したのみである。いずれも小片化しており，細かな時期を特定することは困難であろう。概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられるに過ぎない。

ＳＫ04（第105図）

Ｉ区中央西端Ｃ６グリットで検出した土坑である。平面形は，長軸0.7m，短軸0.55mの南北にやや長い楕円形を呈する。深さは数cm程と浅く，断面形は顕著な皿状を呈する。底面の標高は，10.45mであった。埋土は，暗灰色粘質土の単層である。

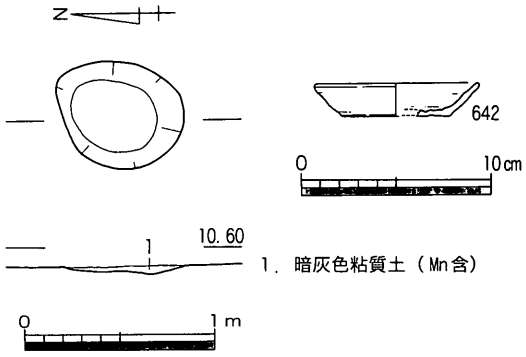
遺物は，土師質土器皿等の小片が３点出土したのみである。内１点を図示した。642は橙色系の土師質土器皿である。小皿ｃ類に分類され，口縁部はやや内湾気味に開き，端部は丸く収める。外底面は粗く回転ヘラ切り調整される。遺物等の特徴から，概ね14世紀代に位置付けられると考える。



第104図　ＳＫ03平・断面図（１/40）

ＳＫ05（第106図）

Ｉ区中央西端Ｃ６グリット，上記ＳＫ04の西に接して検出した土坑である。平面形は，長軸0.56m，短軸0.44mの南北に長い楕円形を呈する。残存深は0.15mを測り，断面形は概ね逆台形状を呈する。底面は平坦ではなく，やや中央部が高く起伏がみられる。最深部底面の標高は10.34mであった。埋土は２層に細分された。下位層中には，ベース層下位の暗褐色粘土のブロック土を混入し，人為的に埋め戻された可能性が考えられる。



第105図　ＳＫ04平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

遺物は，土師質土器の小片数点のほか，第２遺構面に帰属するであろう須恵器坏小片などが出土している。出土遺物より時期を特定することは困難だが，埋土の特徴や層位的な位置関係などから，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと考える。

ＳＫ06（第107図）

Ｉ区中央西半Ｃ６グリットで検出した土坑である。ＳＤ29上面より掘り込まれており，同溝より後出する。平面形は，長径0.68m，短径0.6mのやや南北に長い楕円形を呈する。遺構上面が顕著な削平を蒙っているためか，残存深は僅かに数cm程度を測るのみで，断面

形は浅い皿状となる。埋土は灰褐色粘質土の単層であった。

遺物は，土師質土器皿等の小片が数点出土したのみである。図示し得る遺物の出土に恵まれず，細かな時期を特定することは困難であり，埋土の特徴や層位的な位置関係などから，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるに過ぎない。

ＳＫ07（第108図）

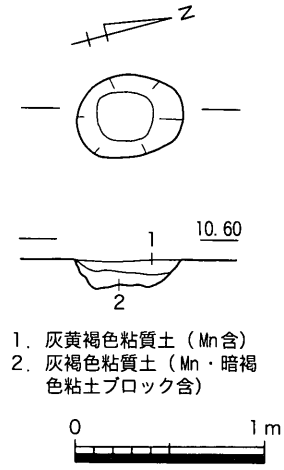
Ｉ区中央南半Ｃ６グリットで検出した土坑である。平面形は，長軸0.72m，短軸0.52mの東西にやや長いいびつな楕円形を呈する。最大深は0.1mを測り，断面形は底面が平坦な逆台形状ないしは皿状を呈する。最深部底面の標高は，10.45mであった。埋土は，灰褐色粘質土の単層で，埋土中にはベース層のブロック土が混入しており，人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は，土師質土器皿等の小片が数点出土したのみである。なお，確認された皿外底面の調整は，いずれも回転ヘラ切り調整であった。出土した遺物量は乏しいが，埋土の特徴などからも14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと考える。

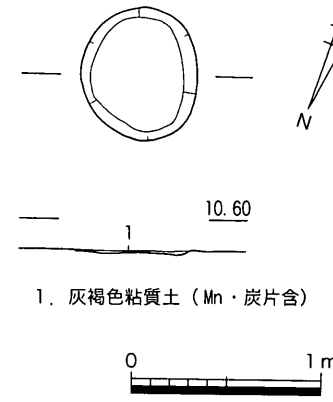
ＳＫ10（第109図）

Ｉ区中央Ｄ６グリットで検出した土坑である。ＳＤ03上面より掘り込まれており，同溝より後出する。平面形は，径0.7m程の略円形を呈する。残存深は僅かに0.06mと極めて浅く，断面形は顕著な皿状を呈する。底面は東に僅かに傾斜して深く，最深部の標高は10.41mを測る。埋土は，灰褐色粘質土の単層であった。

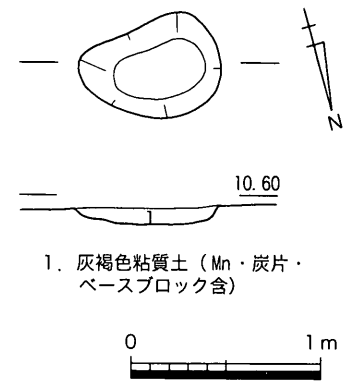
遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難である。しかし，埋土の特徴や他遺構との重複，検出



第106図　ＳＫ05平・断面図（1/40）



第107図　ＳＫ06平・断面図（1/40）

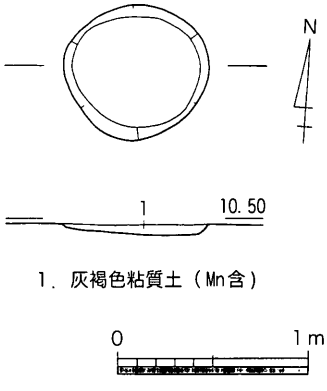


第108図　ＳＫ07平・断面図（1/40）

面での層位的な位置関係などから，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＫ11（第110図）

Ｉ区中央西端Ｄ５グリットで検出した土坑である。上面より柱穴１基が穿たれる。平面形は，長軸0.60m，短軸0.55mのやや南北に長い楕円形を呈する。残存深は僅かに0.15mと浅く，断面形は皿状を呈する。埋土は，灰褐色粘質土の単層で，埋土中にベース層のブロック土を含み，人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

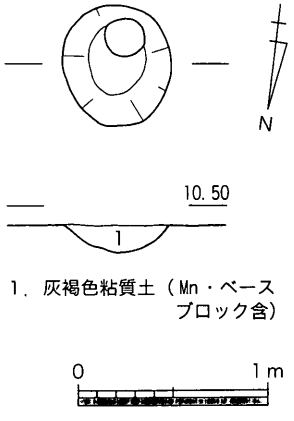


第109図　ＳＫ10平・断面図（１/40）

遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難である。しかし，埋土の特徴や他遺構との重複，検出面での層位的な位置関係などから，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

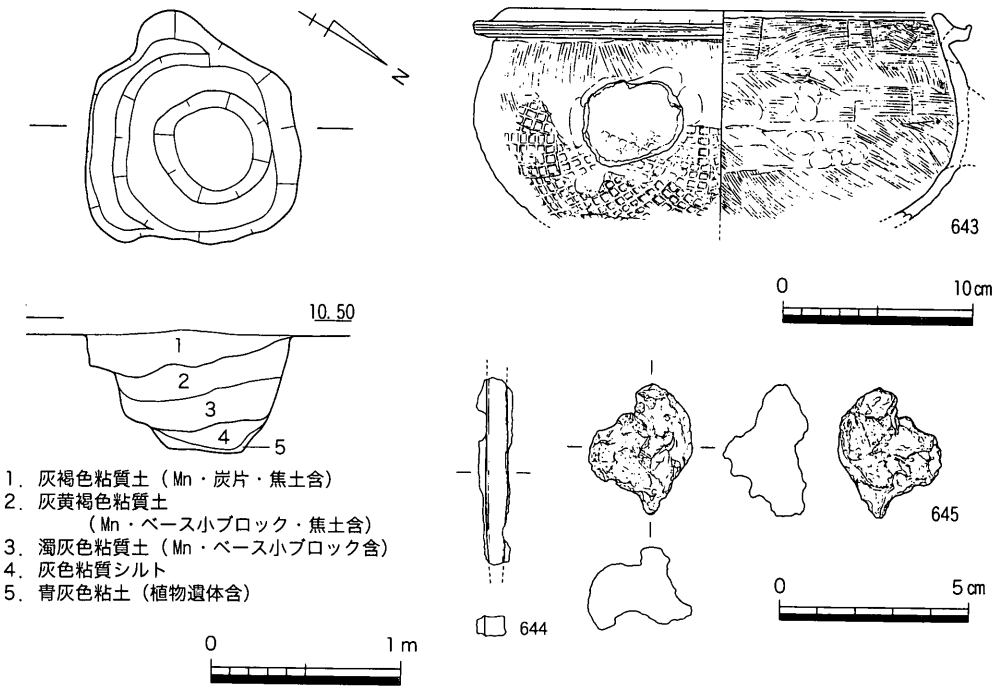
ＳＫ12（第111図）

Ｉ区中央西端Ｄ５グリットで検出した土坑である。平面形は，西に小突起状の張出部が付設する長軸1.2m，短軸1.1mのいびつな長方形を呈する。張出し部は浅く，本来的には南北に長い整った平面長方形状を呈していたものと考えられる。残存深は0.65mと，後述するＳＫ13同様周囲の各遺構と比してやや深く掘り込まれており，底面の標高は9.8mに達する。断面形は，概ね逆台形状を呈するが，西及び南壁は，幅0.1m程の浅いテラスを付して階段状に掘り込まれる。また底面には，径0.6m，深さ0.15m程のいびつな楕円形状の掘り込みを認める。



第110図　ＳＫ11平・断面図（１/40）

埋土は，５層に細分された。各層の堆積状況は，上記断面形状に概ね合致し，上層（１層）は上位テラス部より上位に，中層（２・３層）は下位テラス部より上位に，下層（４・５層）は底面の楕円形掘り込み部にそれぞれ堆積する。上・中層は，ほぼ均等な層厚で南へ傾斜して堆積し，埋土中に焦土やベースブロック土を含むことから，人為的な埋め戻し土と考えられる。下層は，植物遺体を含むグライ化した灰色系粘土層がレンズ状に堆積しており，滞水下での堆積が考えられる。土層の堆積状況から推して，素掘りの井戸もしくは水溜め状の性格が考えられ，上記した底面形状を最大限評価すれば，曲物等が据えられ



第111図　ＳＫ12平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/２・１/４）

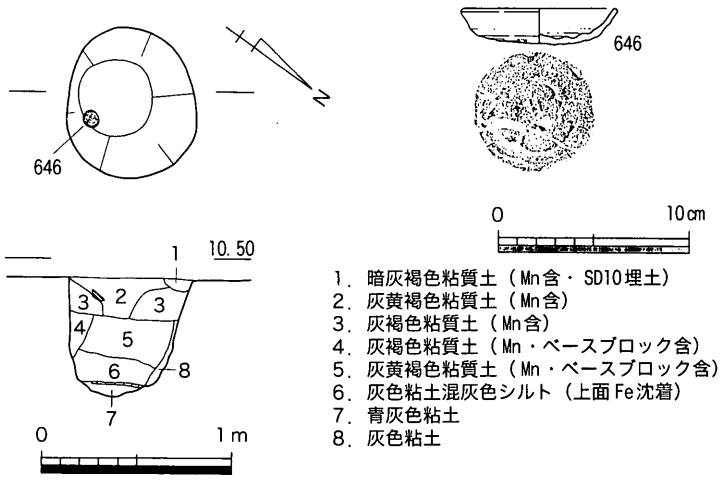
ていた可能性も考えられる。

遺物は，土師質土器皿・足釜，亀山焼甕，常滑焼？等の小片が，上層より若干量出土している。したがって出土した遺物は，いずれも遺構廃棄時の最終段階で混入したものである。３点を選んで図示した。643は，土師質土器足釜ａ類である。内傾して立ち上がる口縁部は萎縮し短く，口縁部直下には水平に開く鍔を付す。鍔端面は，板状工具の強い横方向のナデにより２条の沈線が施され，鍔上縁は上方へ跳ね上がる。体部内外面はハケ調整が卓越し，底部外面には格子状のタタキ調整の後，３脚を貼付する。体部外面には顕著な煤の付着を認めるが，脚剥離面や体部破断面の一部にも煤が付着しており，使用中に破損したか，破損後転用された可能性がある。萎縮した口縁部形状や球形化の進展した体部形状から，ａ類の中でもやや後出する可能性が高い。644は，現存長4.8cmの鉄釘である。頭部と先端部を欠損する。５㎜角の角釘とみられ，軸部の太さから本遺跡より出土した鉄釘の中では通有の大きさに復元されよう。645は，ガラス質滓の小片である。上記した出土遺物より，概ね14世紀前半代に位置付けられると考える。

ＳＫ13（第112図）

Ｉ区中央西端Ｄ５グリットで検出した土坑である。北端部上面よりＳＤ10が切り込まれ

る。平面形は，径0.65m前後の略円形を呈する。周壁は直に近く掘り込まれ，底面は緩やかに中央部が窪む。残存深0.6m，底面の標高は9.8m前後と，ＳＫ12同様隣接する他遺構と比較してやや深く掘り込まれている。



第112図　ＳＫ13平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

埋土は８層に細分された。最下位層（８層）は，土坑北壁際にへばりつくように堆積した灰色粘土層で，これを切り込んで７層以下の上位の層が堆積している。こうした堆積状況から，最下位層は改修前の堆積層と考えられ，一定程度埋没が進行した段階で，再度掘り直された可能性が高い。底面に堆積した７層は，グライ化した青灰色粘土で滞水下での堆積が考えられ，上面には水平に据えられた板状の木質部が遺存する。６層もグライ化した灰色シルト層であり，滞水下での堆積が想定され，本遺構機能時の堆積層であろう。上面には鉄分の沈着をみる。中位４・５層は，ベース層のブロック土を含んだ粘質土であり，本遺構廃絶時に人為的に埋め戻された可能性が高い。上位２・３層も下面が平坦に均されていることからすれば，ブロック土の混入は認めないが人為的な埋め戻し土と考えてよいだろう。なお，２層は中央部が径0.15m程柱状に窪んで堆積しており，その南側下面よりほぼ完形の土師質土器皿（646）が，口縁部を上に中央部にやや傾斜して出土した。おそらくは，本遺構廃絶の最終段階で意図的に据えられた可能性が高く，詳細は知り得なかったが，祭祀的な意味合いが強いものと考える。上記した埋土の特徴や遺物の出土状況から判断して，本遺構も素掘りの井戸もしくは水溜め状の性格が考えられ，ＳＫ12と位置関係や内容が近似していることから，近接した時期に位置付けられると考える。

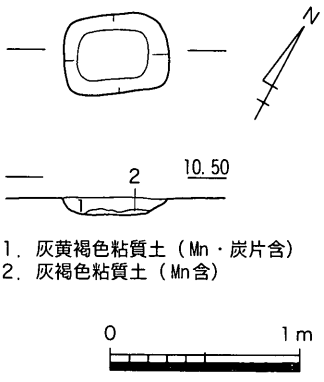
遺物は，上記した皿の他，埋土上位層より土師質土器の小片が数点と，サヌカイト小剥片１点が出土したに過ぎない。中・下位層からの遺物の出土はなく，したがって出土した遺物はすべて本遺構廃絶段階で混入したものである。上記した皿１点のみ図示した。646は橙色系の小皿ｃ類で，外底面は回転ヘラ切り後ナデ調整が加えられ，内底面には顕著な

ロクロ目が認められる。出土遺物より細かな時期を特定することは困難であり，ＳＫ12との関係から概ね14世紀前半代を中心とした時期に位置付けておきたい。

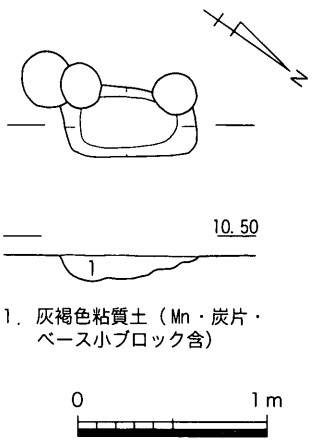
ＳＫ14（第113図）

Ⅰ区中央西端Ｄ５グリットで検出した浅い小土坑である。平面形は，長軸0.56m，短軸0.4mの東西に長い整った隅丸長方形を呈する。主軸の方向はＮ58.0°Ｅで，北側に位置する区画溝ＳＤ10とほぼ平行して配される。深さは0.1mと浅く，断面形は底面が平坦な皿状を呈する。埋土は２層に細分された。上位層は，ベース層と近似した灰黄褐色粘質土で，人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。

遺物は，器種不詳の土師質土器小片が数点出土したのみであり，図示可能な遺物は出土していない。出土遺物より細かな時期を特定することは困難であり，埋土の特徴や位置関係などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるに過ぎない。



第113図　ＳＫ14平・断面図（1/40）

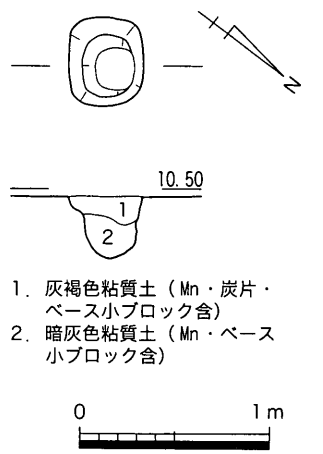


ＳＫ15（第114図）

Ⅰ区中央西端Ｄ５グリット周辺で検出した土坑である。上面より柱穴数基が掘り込まれる。平面形は，長軸0.7m，短軸0.4mの比較的整った隅丸長方形を呈する。主軸の方向はＮ34.0°Ｗで，周辺の区画溝の方向と概ね合致する。最大深は0.12mで，縦断面形は南端部が深く掘り込まれた概ね皿状を呈しており，底面は緩やかに南へ傾斜する。最深部底面の標高は10.28mであった。埋土は，灰褐色粘質土の単層で，ベース層のブロック土を少量混在する。

遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難である。したがって，埋土の特徴や他遺構との重複，検出面での層位的な位置関係などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

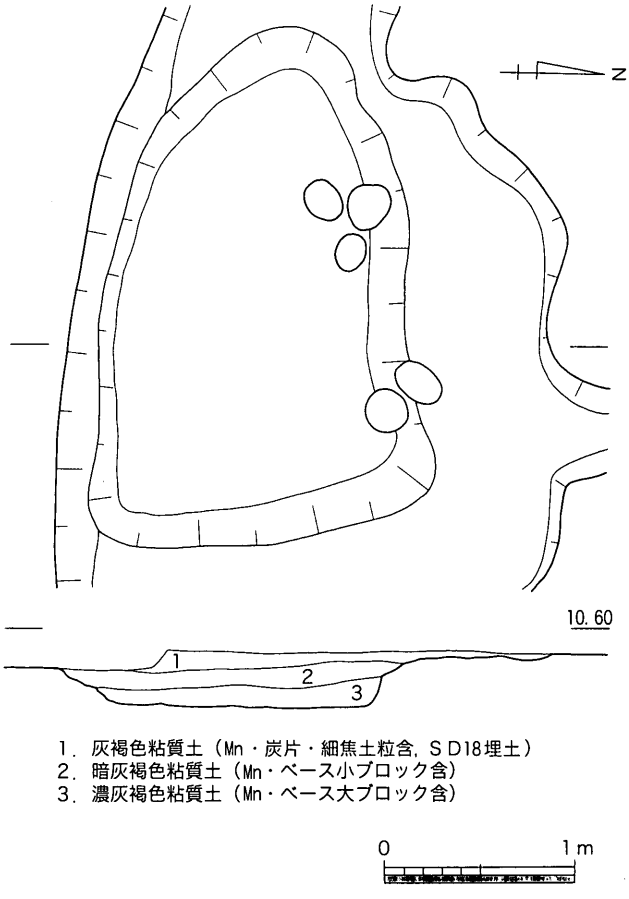
第114図　ＳＫ15平・断面図（1/40）



第115図　ＳＫ16平・断面図（1/40）

ＳＫ16（第115図）

Ｉ区北西部Ｄ５グリットで検出した土坑である。ＳＤ36に西接し，両遺構の主軸の方向は概ね一致し整った位置関係にある。平面形は，長軸0.46m，短軸0.40mの僅かに南北に長い隅丸方形を呈する。残存深は0.32mを，底面の標高は10.14mをそれぞれ測る。周壁の北半部は直に近く掘り込まれ，南半部は上面付近に僅かなテラスを認め２段に掘り込まれる。底面は皿状を呈し，明確な平坦面をなさない。埋土は２層に細分され，いずれも灰色系粘質土が堆積する。また，埋土中にはベース層のブロック土が混入しており，人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。



第116図　ＳＫ17平・断面図（１/40）

遺物は，器種が特定できないまでに細片化した土師質土器片が数点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり，埋土の特徴及び他遺構や検出面での層位的な位置関係などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

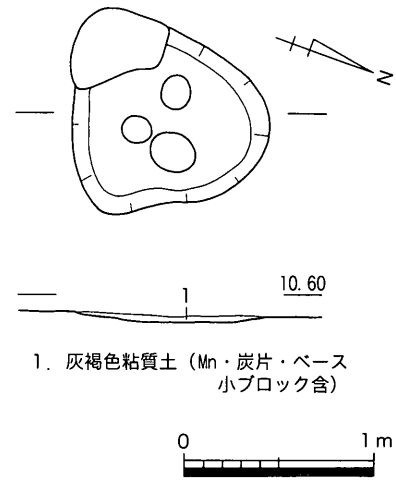
ＳＫ17（第116図）

Ｉ区中央北半Ｄ６グリットＳＤ18下面で検出した土坑である。南端部の一部を予備調査時のトレンチによって攪乱を蒙る。平面形は，長軸2.68m，短軸1.76mのいびつな隅丸長方形ないしは台形状を呈する。ＳＤ18底面からの残存深は0.25mを，また周囲の遺構面からの深さは0.3mをそれぞれ測る。底面の標高は，10.18mであった。断面形は，南壁がやや緩やかに掘り込まれた逆台形状を呈する。底面は概ね平坦で，起伏は乏しい。埋土は２層に細分された。灰褐色系粘質土が水平堆積する。埋土中には，ベース層のブロック土が含まれることから，人為的に埋め戻された可能性がある。

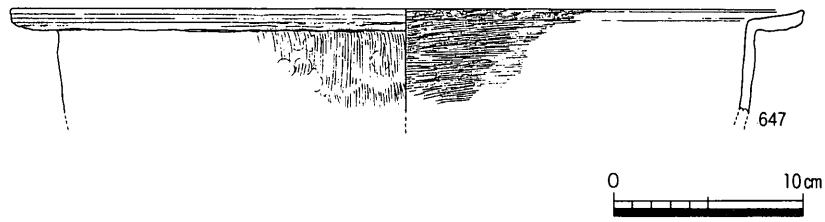
遺物は，器種が特定できないまでに細片化した土師質土器片が2点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり，ＳＤ18より先行する可能性が高いことから，14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられるものと考える。

ＳＫ18（第117・118図）

Ｉ区北東部Ｄ６グリットで検出した土坑である。屋敷地居住域の東半部に位置することから，上面より柱穴数基が掘り込まれ重複が著しい。平面形は，南北1.1m，東西1.0mのいびつな三角形状を呈する。残存深は数cmと極めて浅く，上面は顕著な削平を蒙っているようである。



第117図　ＳＫ18平・断面図（1/40）



第118図　ＳＫ18出土遺物実測図（1/4）

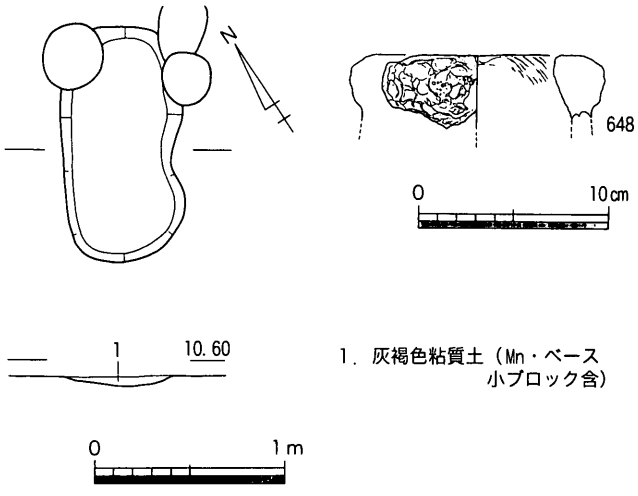
断面形は皿状を呈する。埋土中には，ブロック土の混入を認めるが，遺構の残存状況が悪く，人為的な埋め戻しの可能性については不詳である。

遺物は，土師質土器皿・鍋の小片が数点出土したのみである。1点を図示した。647は，土師質土器鍋ｃ類である。口縁部は強く折り返して水平に近く開き，端部は四角く収める。端面への横方向の粗いハケ状工具による調整により，端部上端はやや上方へ摘み上げ気味となる。内外面共，ハケ調整が卓越する。本遺跡出土の鍋ｃ類の中では最も先行する形態で，14世紀初頭を前後する時期に位置付けられる。

ＳＫ19（第119図）

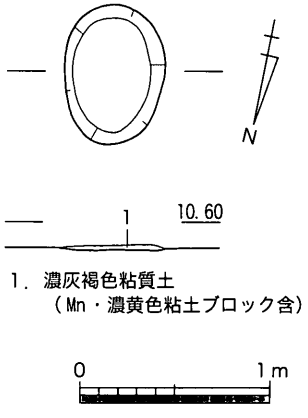
Ｉ区北東部Ｅ６グリットで検出した土坑である。周辺部では多数の建物遺構が復元され屋敷内の居住空間に位置することから，柱穴の重複が著しい。土坑の平面形は，長軸1.2m，短軸0.64mの南北に長いややいびつな隅丸長方形を呈する。残存深は数cmと極めて浅く，断面形は皿状を呈する。最深部底面の標高は10.46mであった。比較的整った平面形を呈していたことから，人為的な掘り込みを伴う土坑として調査を進めたが，不安定な断

面形状などからすれば，重複する柱穴掘り形の一部と考えることもできよう。ここでは調査時の所見から土坑として報告する。埋土は単層で，ブロック土の混入を認めるが，遺構の残存状況が悪く人為的な埋め戻しの可能性については不詳である。



第119図　ＳＫ19平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

遺物は，図示した以外に，土師質土器皿や十瓶山窯系須恵質土器坏とみられる土器小片等が数点出土している。648は，土師質の鞴羽口先端部小片である。外径11.0cmに復元されるが，小片のため数値にはやや難がある。器壁厚1.6cm程度と薄く，内孔は剥離して残存していないものと判断される。器壁の外面側１cm程が強い被熱により還元され，暗灰色に変色する。外面には鉄滓及び炉壁土が付着する。本遺跡からの鞴の出土は，本例１点のみだが，鍛冶滓は一定量出土しており，遺跡内で鉄鍛冶が行われていたことは間違いない。出土遺物のみから，時期を特定することは困難であり，埋土の特徴及び他遺構との重複関係や検出面での層位的な位置関係などを踏まえ，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと考える。



第120図　ＳＫ20平・断面図（１/40）

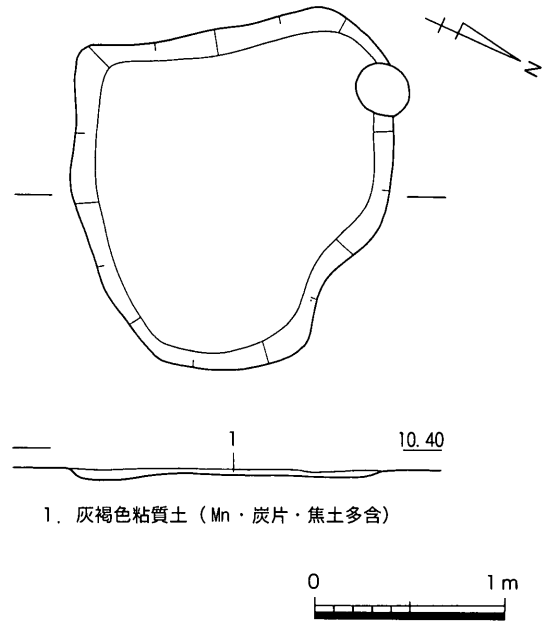
ＳＫ20（第120図）

Ｉ区北部Ｅ６グリットで検出した土坑である。ＳＤ53上面より穿たれる。平面形は，長軸0.7m，短軸0.52mの南北に長い長円形を呈する。残存深は数cmと極めて浅く，上面の削平が著しい。底面は平坦で，断面形は皿状ないしは浅い逆台形状を呈する。底面の標高は10.46mであった。埋土は，濃灰褐色粘質土の単層である。

遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難である。したがって，埋土の特徴や他遺構との重複，検出面での層位的な位置関係などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＫ21（第121図）

Ｉ区北部Ｅ５グリットで検出した土坑である。平面形は，長軸1.76m，短軸1.70mのやや東西に長いいびつな台形状を呈する。上面より柱穴数基が掘り込まれる。残存深は僅かに数cmと浅く，底面の標高は10.26mであった。周壁の掘り込みは緩やかで，底面は概ね平坦に近く，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質土の単層。埋土中に炭化物や焦土をやや多量に含む点が注意される。

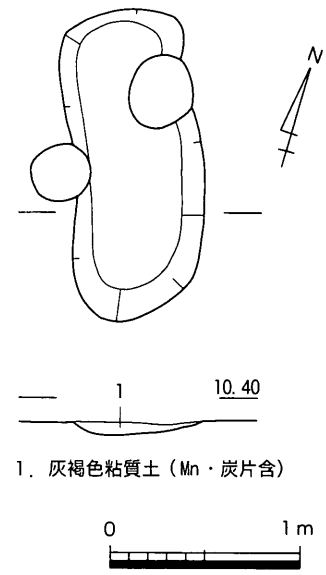


第121図　ＳＫ21平・断面図（１/40）

遺物は，器種が特定できないまでに小片化した土師質土器片数点が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり，埋土の特徴や他遺構との重複，検出面での層位的な位置関係などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＫ22（第122図）

Ｉ区北部Ｅ５グリットで検出した土坑である。平面形は，長軸1.62m，短軸0.66m，主軸方向Ｎ19.4°Ｗの南北に長い比較的整った隅丸長方形を呈する。上面より柱穴数基が穿たれる。残存深は僅かに数cmと浅い。周壁は緩やかに掘り込まれ，底平坦面は不明瞭で，断面形は浅い皿状を呈する。最深部はやや西に偏っており，底面の標高は10.20mを測る。埋土は灰褐色粘質土の単層であった。

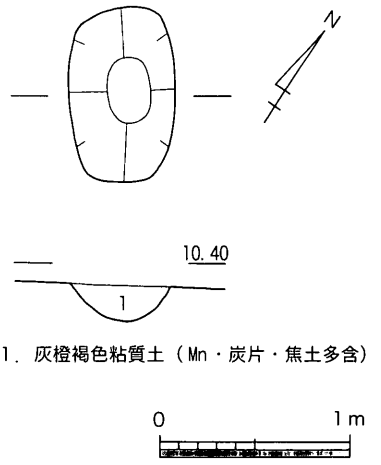


第122図　ＳＫ22平・断面図（１/40）

遺物は，土師質土器皿等の小片が数点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり，埋土の特徴や他遺構との重複，検出面での層位的な位置関係などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＫ23（第123図）

Ｉ区北西隅Ｅ５グリットで検出した土坑である。北半部底面で柱穴１基を検出した。平面形は，長軸0.92m，短軸0.54m，主軸の方向Ｎ35.6°Ｗの南北に長い整った隅丸長方形を呈する。残存深は0.2mを，底面の標高10.10mをそれぞれ測る。断面形は，周壁が緩やかに掘り込まれ，明瞭な底平坦面をなさず，Ｕ字形ないしは皿状を呈する。埋土は，灰橙褐色粘質土の単層で，埋土中に炭化物や焦土粒を多量に含む点は注意される。

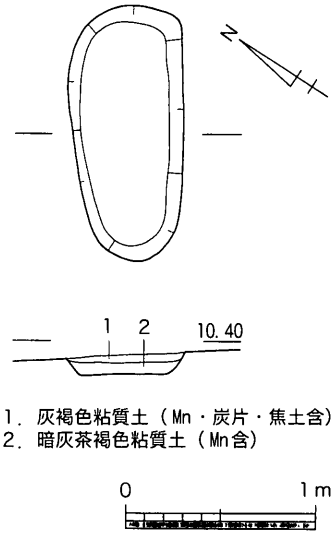


第123図　ＳＫ23平・断面図（１/40）

遺物は，器種が特定できないまでに小片化した土師質土器片が２点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり，埋土の特徴や他遺構との重複，検出面での層位的な位置関係などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＫ24（第124図）

Ｉ区北西隅Ｅ５グリットで検出した土坑である。平面形は，長軸1.34m，短軸0.59m，主軸方向Ｎ55.7°Ｅの東西に長い比較的整った隅丸長方形を呈する。残存深は僅かに数cmと浅い。周壁はやや強く掘り込まれ，底面は平坦で，断面形は整った逆台形状を呈する。底面の標高は10.24m前後であった。埋土は灰褐色系粘質土が水平に堆積する。炭化物粒や焦土塊の有無により２層に細分したが大差は認めない。



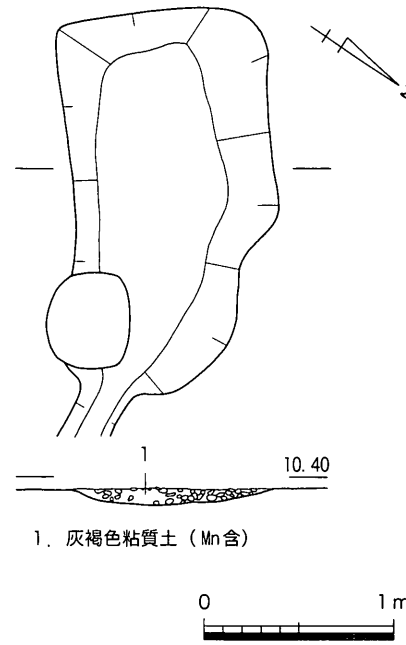
第124図　ＳＫ24平・断面図（１/40）

遺物は焦土粒以外出土していない。出土遺物より時期を特定することは困難であり，埋土の特徴や他遺構との重複，検出面での層位的な位置関係などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断し得たに過ぎない。

ＳＫ25（第125図）

Ｉ区北西隅Ｅ５グリットで検出した土坑である。ＳＤ48の西端部に位置する。平面形は，長軸2.02m，短軸1.04m，主軸方向Ｎ60.2°Ｅの東西に長いいびつな隅丸長方形を呈する。

南東隅で柱穴１基が上面より掘り込まれているほか，底面で柱穴数基を検出した。残存深は0.1ｍとやや浅い。周壁は緩やかに掘り込まれ，底面は明瞭な平坦面をなさず，断面形は皿状を呈する。埋土は，多量の拳大程度の小礫を含む灰褐色粘質土の単層であった。礫は遺構やや北半部に集中して出土しており，北側より投棄された可能性がある。なお，ＳＤ48は本遺構と埋土は近似するが，埋土中にこうした小礫の集積は認められず，埋没時期が異なる可能性もある。しかし，調査時には明確な切り合い関係が捉えられなかったことから，一連の遺構として報告する。



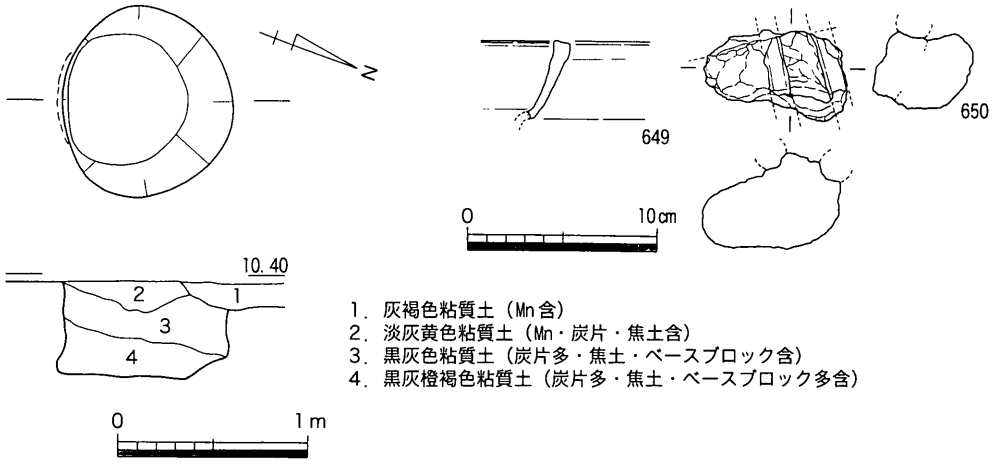
第125図　ＳＫ25平・断面図（1/40）

遺物は，土師質土器足釜の小片２点が出土したのみである。出土遺物より概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられるが，細かな時期を特定することは困難である。

ＳＫ31（第126図）

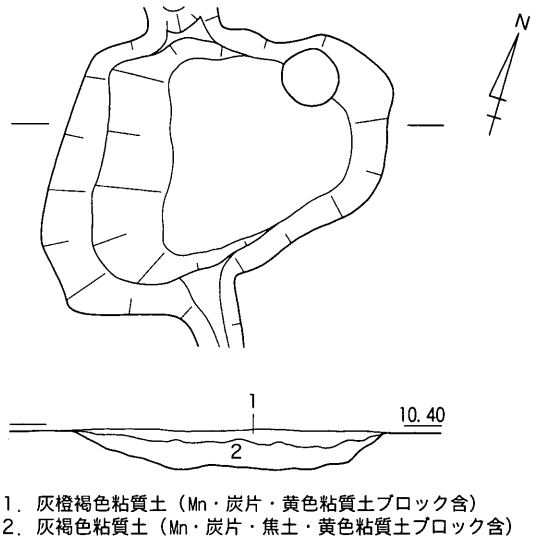
Ｉａ区中央Ｆ４・５グリットＳＤ64底面で検出した土坑である。平面形は，長径0.96m，短径0.88mのやや東西に長い楕円形を呈する。周壁は直に近く掘り込まれ，南壁底面近くでは一部壁面が抉れて袋状を呈する。底面は概ね平坦で，断面形は箱形ないしは逆台形状となる。残存深は0.5m程で，底面の標高は9.87mであった。埋土は３層に細分された。下位２層中には，炭化物片や比較的大きな壁土塊をやや多量に含み，埋土の色調も黒味を帯びる。また，ベース層のブロック土を顕著に含むことからも，人為的な埋め戻し土と考えられる。後述するように遺物量は乏しいが，火災等による廃棄土坑の可能性も考えられる。

遺物は，土師質土器皿・足釜・擂鉢，瓦質土器鍋等の小片が少量出土したのみである。２点のみ図化を行った。649は，瓦質土器鍋の口縁部小片である。器表面の剥落が著しく，調整等は不明。鍋ｂ類に分類され，14世紀中葉から後半代に位置付けられる。650は，建物遺構の壁土である。二次的な被熱を蒙っており，一部煉瓦色に変色部分が認められる。素材は，長径５㎜程度の石英粒をやや多量に含む目の粗い粘土で，切藁を苆として混入し



第126図　ＳＫ31平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

ているようである。壁土は他遺構から総量コンテナ２箱分程度出土しているが，いずれも素材や木舞などの特徴は類似しており，本例１点のみ報告するにとどめる。壁土下地の痕跡から，直径1.8cm程の笹類の２本の丸竹を束にして木舞とし，それに直交するように直径３～４cmの半裁した竹類を交差させて間渡としている。壁面は残存していない。



第127図　ＳＫ32平・断面図（１/40）

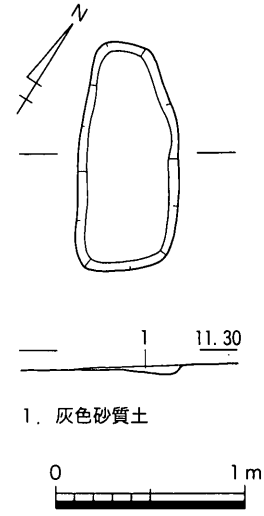
ＳＫ32（第127図）

Ｉａ区中央Ｆ４グリットで検出した土坑である。上面より柱穴１基が掘り込まれ，また南北には小溝ＳＤ63が派生する。ＳＤ63の南溝は，ＳＫ32の中軸付近より緩やかに湾曲して概ねＮ52.0°Ｗの方向へ延長し，ＳＫ32の主軸方向とは斜交する。埋土の特徴に際だった相違が認められなかったが，位置関係や底面の比高差を考慮すれば，必ずしも同時併存の可能性を想定する必要はない。

ＳＫ32の平面形は，長軸1.78m，短軸1.42mのやや東西に長いいびつな隅丸方形状を呈

する。周壁は西壁を中心に比較的緩やかに掘り込まれ，底面も概ね平坦で，断面形は概ね整った逆台形状を呈している。残存深は0.2mとやや浅く，底面の標高は10.17mを測る。埋土は2層に細分された。いずれも炭化物や焦土塊を含み，また第2面包含層である黄色系粘質土のブロック土を混在することから，人為的に埋め戻されたものと考えられ，上記ＳＫ31と共通した内容を有する。

遺物は，土師質土器皿・足釜，須恵器，黒色土器碗等の小片が少量出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり，上記ＳＫ31とほぼ近似した内容を有することから，近接した時期に位置付けられる可能性を想定する。



第128図　ＳＫ41平・断面図（1/40）

ＳＫ41（第128図）

Ⅲ区中央東半Ｂ1グリットで検出した土坑である。前記ＳＢ22と重複するが，先後関係は不明である。主軸方向が一致することから，例えば床下貯蔵穴といった有機的な関連を想定することも可能だが，貯蔵穴とするには平面形態や規模の点でやや難があり，ここでは関連性を考慮せずに土坑単体として報告する。長軸1.2m，短軸0.5mを測り，やや北半部がすぼまるが，平面形は比較的整った隅丸長方形を呈する。主軸方向はN31.6°Wを測り，上記したように建物遺構の方向と概ね合致する。残存深は数cmと浅く，断面形はやや東半部が深く掘り込まれた皿状を呈する。底面の標高は，11.2m前後である。埋土は，やや粘性のある灰色砂質土の単層であった。

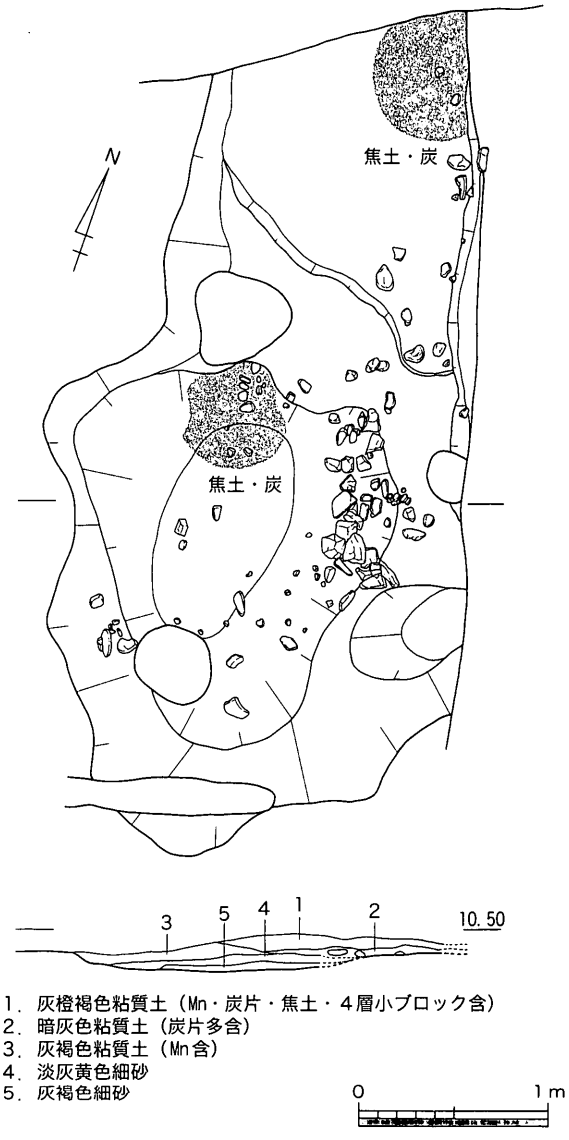
遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難である。上記した位置関係や主軸の方向性，埋土の特徴などを参考に，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと考えるに過ぎない。

不明遺構

ＳＸ03（第129・130図）

Ⅰ区中央東端Ｄ7グリットで検出した，浅い土坑状の落ち込みである。北端はＳＤ01に切られ，東端は調査区外へ延長し，全形を窺うことはできない。東部への拡張トレンチ部分でも掘り方の東肩は確認されず，同様にＳＤ01北側でも延長部分が確認されなかった。したがって平面形は，おおよそ長軸4.6m以上（推定6.0m），短軸2.4m以上（同2.8m）

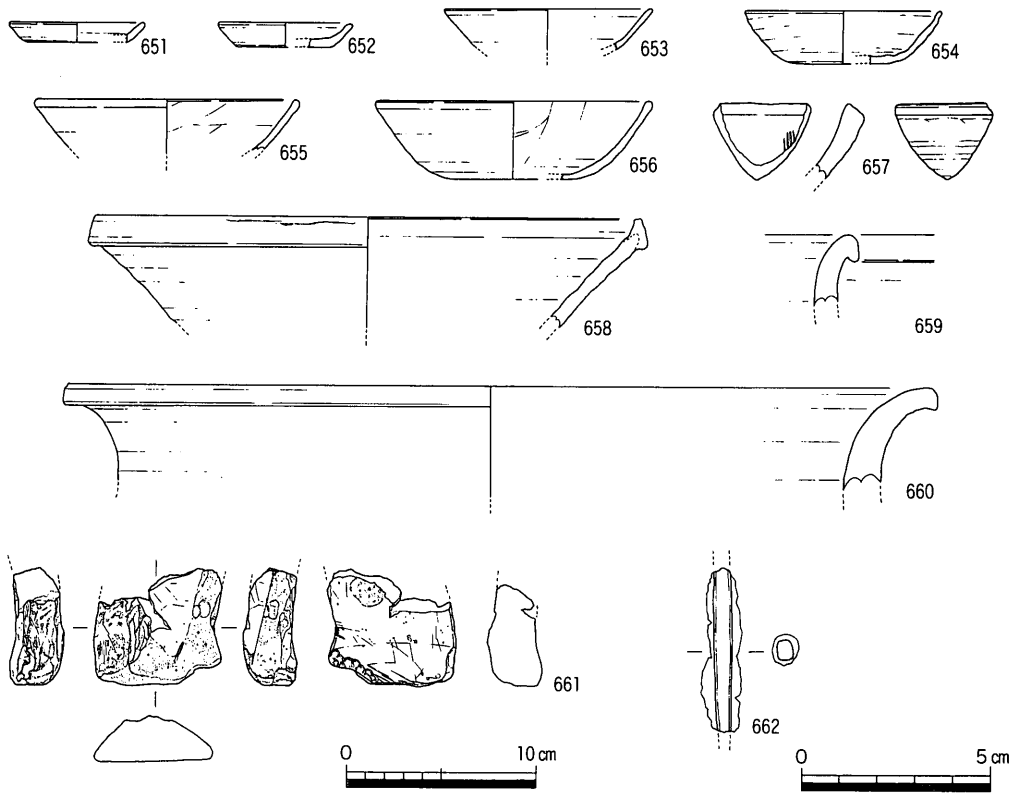
程のいびつな長円形状に復元される。残存深は0.2m前後で，横断面形は概ね皿状ないしは浅い箱状を呈するが，縦断面は中央部が馬の背状を呈して，若干の起伏を認める。北半部と南半部で２基の遺構の重複の可能性が考えられたが，後述する土層の堆積状況から積極的にそれを証することは困難であった。底面の標高は，最深部で10.30m前後である。



第129図　ＳＸ03平・断面図（1/40）

埋土は，土層観察部分で５層に細分された。灰色系粘質土の上層（１～３層）と，灰色系細砂の下層（４・５層）に大別され，下層は底面を中心に浅く堆積する。また，上層下位層中において，多量の炭化物や焦土の集積を，落ち込み北半部と南半部でそれぞれ検出した。集積層下面には，二次的火熱を蒙った痕跡は認められなかったことから，本遺構内へ投棄されたものと考える。遺物の大半は上層より出土しており，下層堆積後に一括投棄されたものと考えられる。なお，下層は微弱な水流により堆積した可能性があり，本来的には本遺構は，段丘崖下へ流下する溝状遺構の一部であった可能性も考えられる。

遺物は，多量の幼児頭大程度の石礫と共に，土師質土器皿・足釜・鍋，十瓶山窯系須恵質土器碗，備前焼擂鉢・甕，亀山焼甕，東播系須恵器捏鉢，須恵器等の小片の他，サヌカイト剥片類が若干量出土している。上記したように，すべて上層より出土しており，下層からは遺物の出土はみられなかった。また，特に南半部より集中して出土した自然礫の中には，二次的な被熱痕を認めるものもあり，集落内でなんらかの用途に使用されたものも



第130図　ＳＸ03出土遺物実測図（1/4・1/2）

含まれるようである。12点を選んで図示した。651・652は，土師質土器小皿である。いずれも灰黄色系の焼成の堅緻な土器で，小皿ａ類に属する。653は，土師質土器皿である。口縁部は直線的に斜上方へ開く。654は，口縁部がやや内湾傾向を示すことから土師質土器坏とした。外底面は回転ヘラ切り後丁寧にナデ調整され，口縁部内外面は螺旋状に回転ナデ調整される。655・656は，十瓶山窯系の須恵質土器坏である。同一個体の可能性が高いが，接合関係にはなく，別個体として報告する。やや焼成があまく，一部土師質に近い橙色を発する。口縁端部は，肥厚しつつ丸く収める。口縁部内面は，回転ナデ調整の後斜め方向のナデ調整を加える。657は，備前焼擂鉢である。口縁端部は矩形に収め，内面に辛うじて卸目を認める。外面は褐色系の自然釉が掛かる。658は，東播系の須恵器捏鉢である。口縁端部は玉縁状に上下に肥厚し，端面はやや内傾する。659・660は，備前焼甕である。いずれも口縁部は外反して開き，端部は矩形に収めつつ下端を下方へ挽き出す。端部が丸味を帯び，下方への挽き出しの強い659に，やや後出する要素を認める。上記備前焼製品はいずれも，間壁編年Ⅱ期に位置付けられよう。661は，アプライト製とみられる砥石である。二

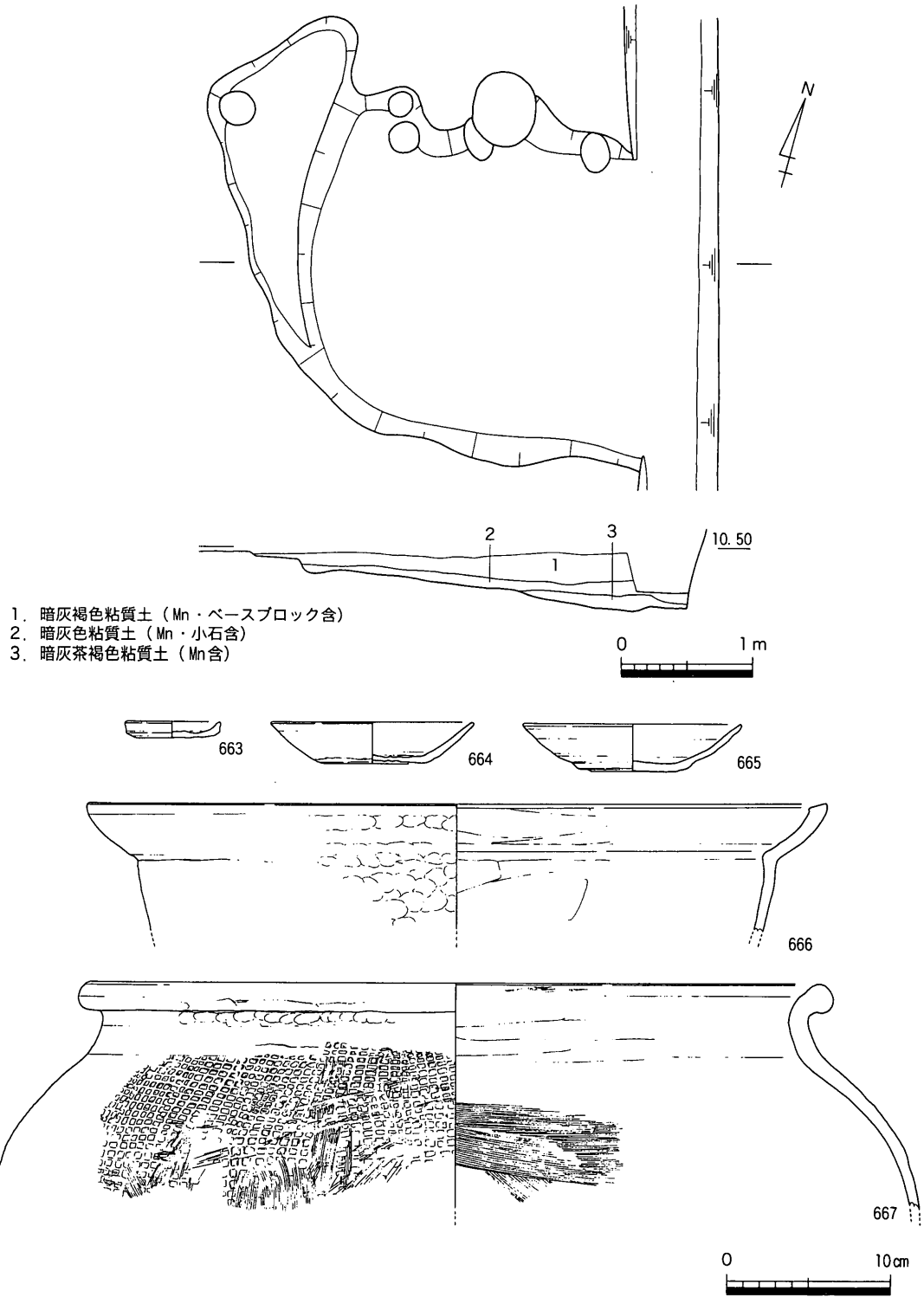
次的な被熱を蒙っている可能性があり，また風化が著しい。横断面三角形状の自然礫を素材としており，上面主研面は，よく使い込まれて鈍く湾曲する。また，両側縁の稜線部も使用され，小端面をなす。662は，５㎜角の棒状の鉄製品で，形状より鉄釘と考えられる。頭部及び先端部を欠損する。上記出土遺物より，本遺構は14世紀前半代に位置付けられるものと考える。

ＳＸ04（第131図）

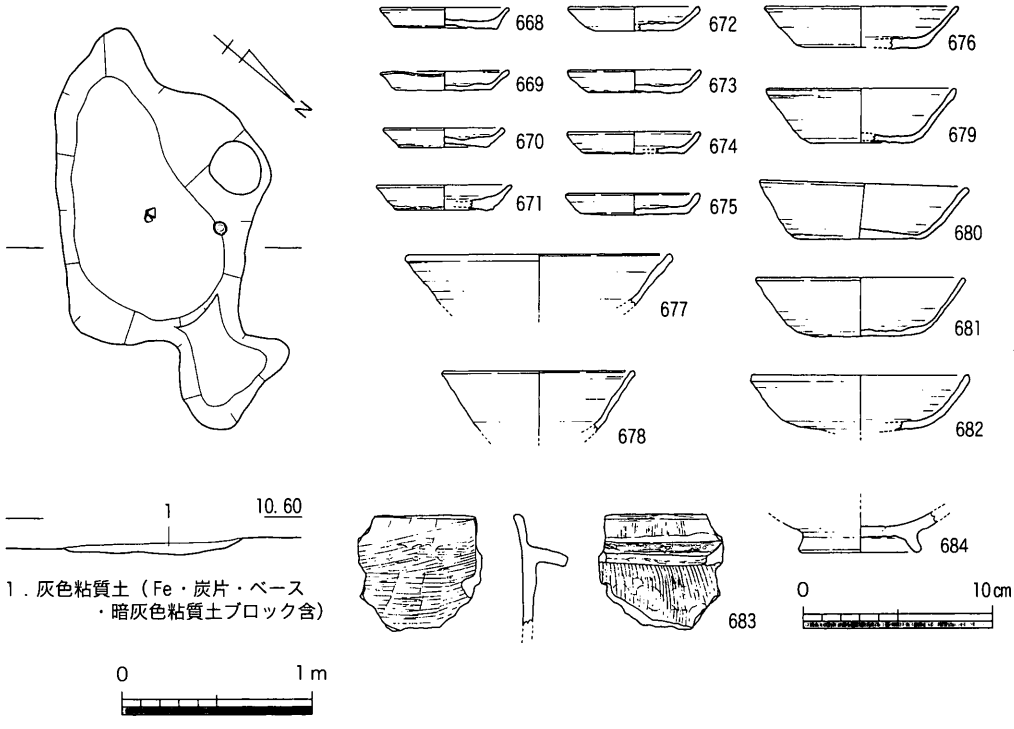
Ｉ区東端部Ｃ・Ｄ７グリットで検出した，浅い土坑状の落ち込みである。東端は調査区外へ延長する。数基の柱穴と重複するが，埋土に顕著な差異はなく，先後関係は明確には捉えられなかった。長軸3.7m以上，短軸2.5～2.8mで，平面形は東西に長い不定形を呈する。確認した平面形は，遺構の重複を明確に捉えられなかったことによるものと考えられ，本来的には整った隅丸長方形状を呈していたものと想定している。残存深0.4mで，断面形は緩やかに掘り込まれた皿状を呈し，西縁部には検出面下数㎝で幅0.4m程のテラス部が認められた。底面最深部の標高は10.05mを測る。埋土は３層に細分された。いずれも灰色系の粘質土で，遺構深部へ向けて緩やかに傾斜して堆積しており，自然堆積層と考えられる。上位層中にはベース層のブロック土が混在するが顕著ではなく，人為的な埋め戻し土かどうかは判断できなかった。

遺物は，土師質土器皿・坏・足釜・鍋・擂鉢・甕，東播系須恵器捏鉢，須恵器等の小片が埋土中より若干量出土している。５点を選んで図示した。663は，土師質土器小皿ａ類。色調は灰黄色を呈し焼成の堅緻な製品で，口縁部は垂直に摘み上げられ，外面は鈍く凹線状に窪む。外底面は回転ヘラ切り後，簀の子状の圧痕を明瞭に認める。664は，土師質土器皿である。口縁部はやや内湾しつつ大きく開き，端部は丸く収める。外底面は回転ヘラ切り後，ナデ調整を加える。665は，土師質土器坏。底部は突出気味の平高台状を呈し，口縁部はやや内湾して開く。外底面は回転ヘラ切り後，やや丁寧なナデ調整を加える。666は，瓦質土器鍋。口縁部は内湾して開き，端部は僅かに内傾する端面をなし矩形に収める。内面口縁部下端の稜は丸くナデ付けられ，外面も明確な稜をなさない。体部外面には，煤が付着する。667は，土師質土器甕。頸部はやや内傾して立ち上がり，口縁部はやや強く折れて玉縁状に肥厚する。体部外面は，格子状タタキを正面向かって左より右方向へ施し，下半は縦方向のナデ調整でタタキ痕をナデ消す。内面は横方向のハケ調整の後，ナデを加える。上記資料は概ね14世紀中葉を前後する時期に位置付けられる。

ＳＸ05（第132図）



第131図　ＳＸ04平・断面図（１/50），出土遺物実測図（１/４）



第132図　ＳＸ05平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

Ｉ区中央Ｄ６グリットで検出した浅い土坑状の落ち込みである。長軸2.15m，短軸1.35mを測り，平面形は南北に長い不整形を呈し，北に長円形状の突出部が付す。北側突出部の床面には，浅い段差を伴うことから本来的には別遺構の重複の可能性も考えられるが，確証は得られていない。深さは0.07mと極めて浅く，断面形は皿状を呈する。埋土は灰色粘質土の単層で，炭片を多量に含み，またベース層等のブロック土もやや混在することから，人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

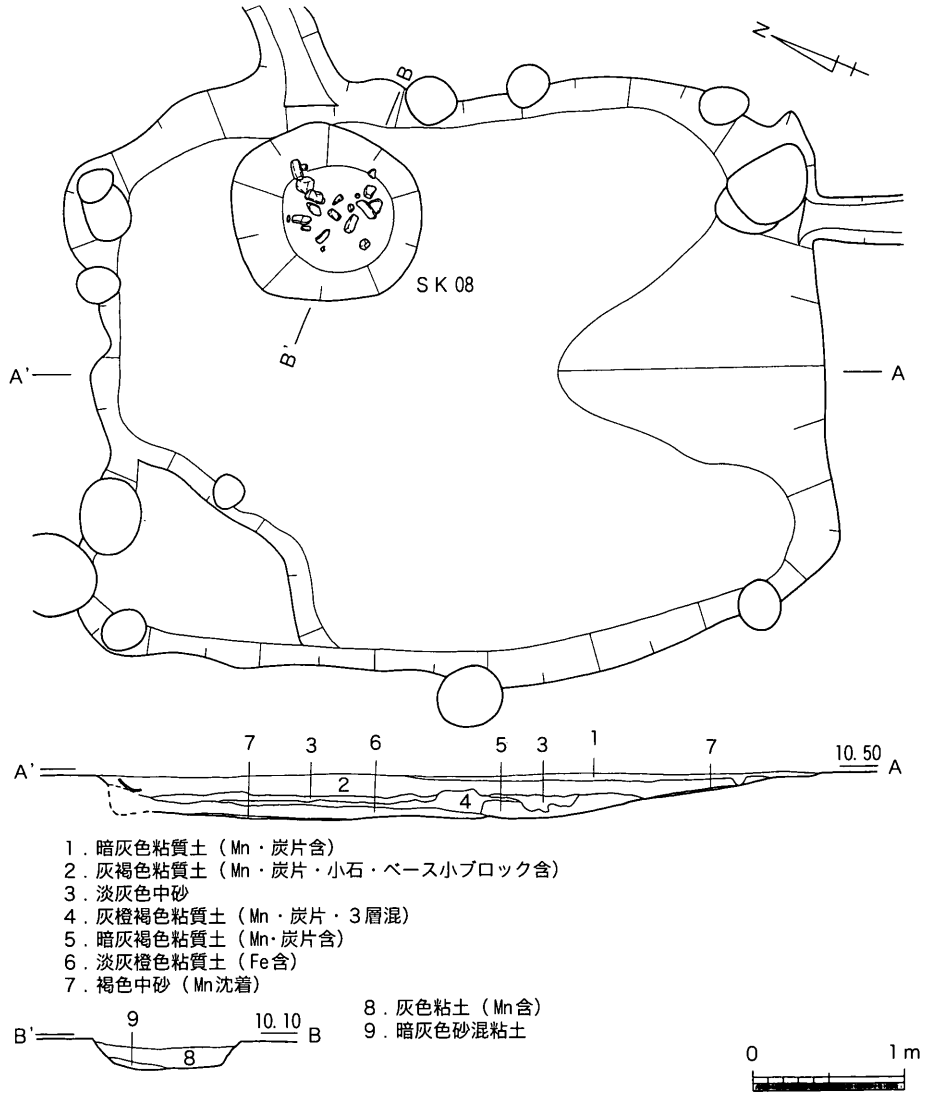
遺物は，遺構西壁際の底面より数cmほど浮いて，ほぼ完形の土師質土器皿１点（668）が内面を上に出土した他，土師質土器皿・碗・足釜・鍋，十瓶山窯系須恵器甕等の小片が若干量出土している。その内，17点を図示した。668～675は土師質土器小皿。基本的な成形手法等は共通するが，色調や細かな調整手法等で２つの群に分かれる。668・669は，色調が灰白色を呈し，口縁部が外反して開く形態。670～675は，色調が灰黄ないしは橙色を呈し，口縁部が内湾しつつ開く形態である。後者は，外底面の調整手法や口縁部の形状等により，670と675，671と674，672と673の３群に細分される。なお，672と673は後述するＳＸ10出土の703等と焼成や色調が酷似する。676は，口径の点で後述する坏と相違ないが，器高がやや浅いことから皿として報告する。口縁部はやや内湾して開き，端部は肥厚しつ

つ外面に平坦面をなす。677～682は土師質土器坏。677・679・680・682は灰白から灰黄色系，678・681は橙色系の色調を呈する。坏も，細部調整によって，口縁端部が肥厚しつつ丸く収める678～680と，顕著な肥厚のみられない左記以外の２種に大別される。外底面の調整が確認できる個体は乏しいが，680～682ではいずれも回転ヘラ切り調整後板状の圧痕を認める。683は土師質土器足釜の口縁部小片であろう。口縁部はやや内傾して立ち上がり，鍔部はやや下向きに付される。端部は矩形を呈する。内外面ハケ調整が卓越するが，鍔端面への調整は省略される。684は黒色土器Ａ類碗。高台はやや外方へ踏ん張って開き，端部は丸く収める。10世紀中葉前後に位置付けられ，おそらく下位層からの混入であろう。上記出土遺物より，14世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＸ06（第133・134図）

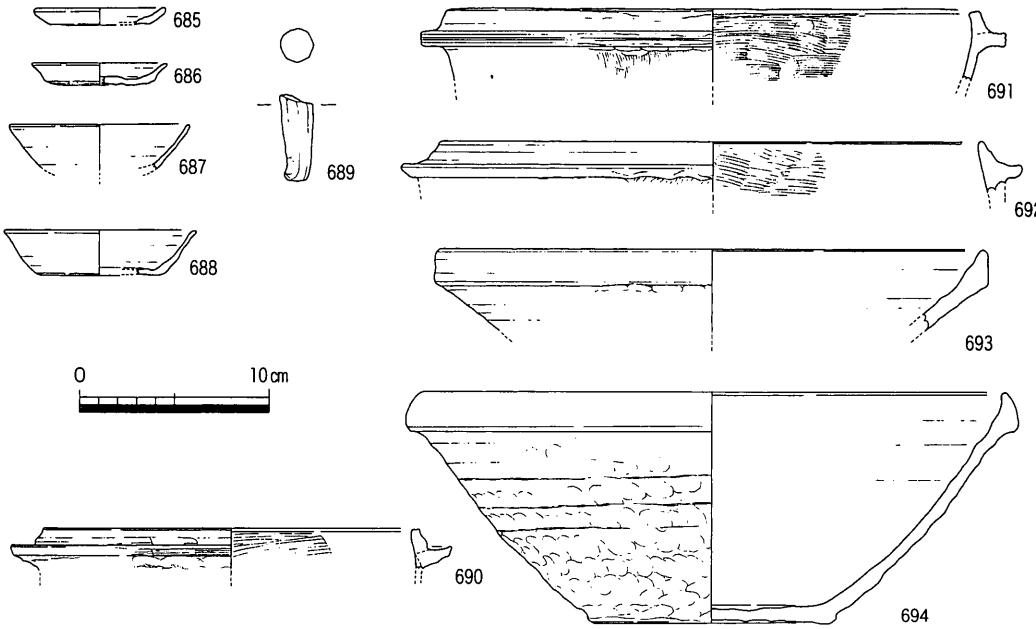
Ｉ区中央Ｃ６グリット周辺で検出した，方形大型土坑である。掘立柱建物２棟（ＳＢ19・20）と重複する。埋土が近似しており先後関係の確認は困難であったが，辛うじて土坑北辺部での切り合い関係から，建物遺構が後出する可能性が高いものと判断された。東肩部より北東方向に派生する小溝によってＳＤ02と連絡し，南東隅部よりＳＤ04が南へ延びる。長軸9.65m，短軸7.55m，主軸方向Ｎ23.2° Ｗを測る。平面形は，やや中央部に膨らみを有した比較的整った南北に長い隅丸長方形を呈する。残存深は0.3mと平面規模に比すと意外に浅く，底面の標高は10.14mを測る。北・東壁は直に近く掘り込まれるが，南・西壁の掘り込みは緩やかで，底面は概ね平坦である。埋土は７層に細分された。上位２層（１・２層）は，概ね水平に堆積する灰色系粘質土で，ブロック土の混入は乏しく，遺構廃絶後の自然堆積層と考えられる。下位５層は，層厚0.2m程の灰褐色系粘質土を中位に挟み，その上下に灰色系中砂の薄層が北に僅かに傾斜して堆積しており，一次的な水流の存在は想定できるが，比較的穏やかな滞水下での堆積が想定される。

遺物は，埋土上層を中心に出土している。下層からの遺物の出土は乏しく，こうした遺物の出土傾向は，遺構の性格をある程度反映している可能性がある。出土した遺物は，捏鉢１点を除いてほとんどが接合困難な土器小片であり，遺構廃絶後は生活残滓の廃棄場所として利用されたと考える。遺物には，土師質土器皿・碗・足釜，黒色土器碗，十瓶山窯系須恵質土器碗，亀山焼甕，備前焼甕，東播系須恵器捏鉢等がある。遺物量はそれほど多くはない。10点を選んで図示した。693のみ下層出土の遺物である。685・686は土師質土器皿。いずれも焼成がやや堅緻な黄色系の皿で，口縁部は内湾しつつ開く685と，強く外反して開く686の２者がある。なお，本遺構出土の皿に共通するが，外底面はいずれも回転ヘラ



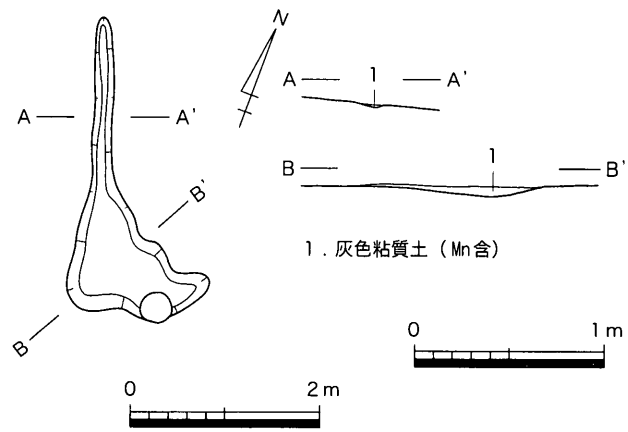
第133図　ＳＸ06・ＳＫ08平・断面図（1/50）

切り後ナデ調整される。687・688は，土師質土器坏。687は，焼成が堅緻な黄色系の坏で，焼成や胎土の特徴は後述するＳＸ10の土師質土器皿（703等）に近似する。688は，橙色系の坏である。橙色系のものにしては器壁が薄く，作りがシャープである。689は土師質土器の脚端部の小片。直径1.7cm程の細身の形態であり，器種は特定できない。690～692は，土師質土器足釜。口縁端部及び鍔端部を横方向の板ナデ調整により，断面矩形を呈する平坦な端面を形成する（690・691）と，丸くナデつけられる（692）の２者がある。いずれも体部内外面には，ハケ調整が施される。口縁部の形状より，後者がやや後出する可能性が



第134図　ＳＸ06出土遺物実測図（１/４）

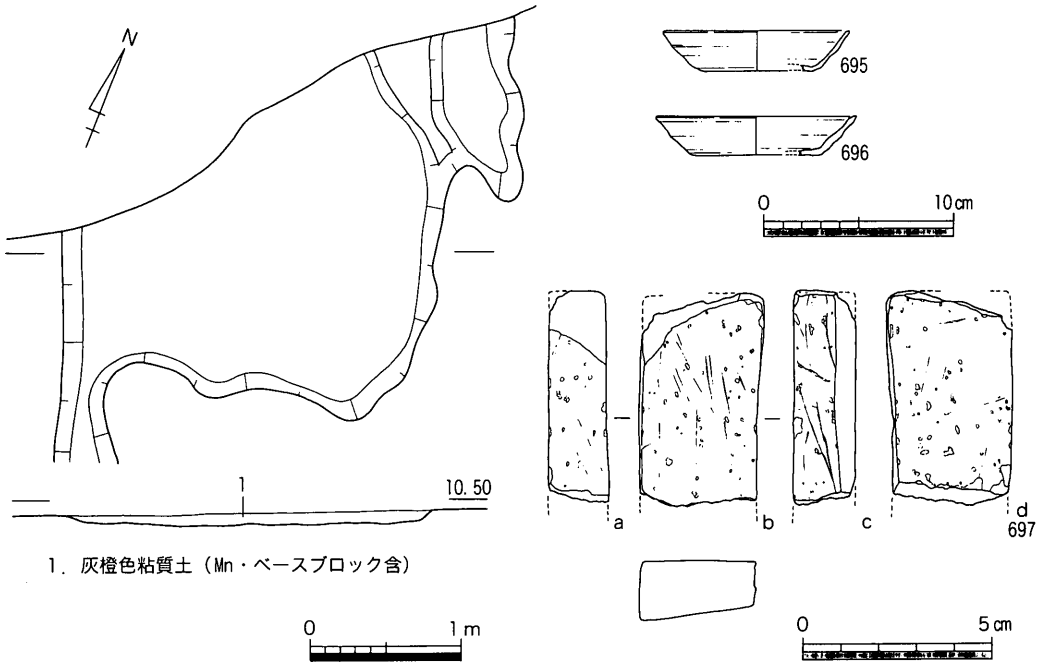
ある。693・694は東播系須恵器捏鉢。口縁部の形状は，やや肥厚しつつ断面三角形状に上方へ摘み上げる693と，上方へ大きく摘み上げ玉縁状に肥厚する694の２者がある。694の内底面は使用による摩滅や敲打痕が顕著にみられる。出土した遺物より，下層は14世紀初頭を前後する時期に，上層は14世紀前半代に位置付けられ，比較的短期間で廃絶した可能性が想定できる。なお，上記した土層の堆積状況や遺物の出土状況から，井戸もしくは水溜状の性格が付与される。



第135図　ＳＸ07平面図（１/80），断面図（１/40）

ＳＸ07（第135図）

Ｉ区中央Ｄ６グリットで検出した，平面Ｌ字状を呈する浅い落ち込みである。北に細長く溝状に突出し，その主軸の方向（Ｎ20.7° Ｗ）が概ね屋敷地の区画の方向と一致することから，平面形状が不整形なものの，建物に付随するいわゆる雨落ち溝といった性格が想



第136図　ＳＸ08平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/4・1/2）

定されよう。しかし，本溝に伴う建物遺構は検出していない。南北長3.1m，東西長1.5mを検出した。北の溝状部で幅0.15m，残存深0.02m，南端部付近で幅0.96m，残存深0.05mを測る。底面の標高は，概ね10.45mでほぼ一定しており，流下方向を特定するまでには至らない。埋土は，灰色粘質土の単層であった。

遺物は，器種不詳の須恵器小片１点が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが，埋土の特徴や上記した位置関係等の点から，14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

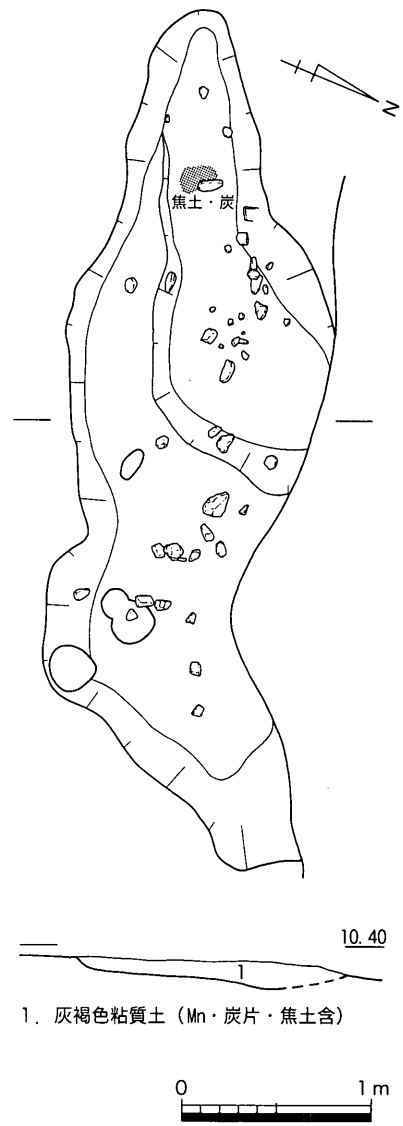
ＳＸ08（第136図）

Ｉ区中央東半Ｄ６グリットで検出した浅い落ち込みである。北端部上面よりＳＤ08が掘り込まれ，全形を窺うことはできない。現状で，東西3.1m，南北2.9mのいびつな隅丸方形状を呈し，南西隅部より小溝ＳＤ31が南に延びる。また北東部には，南東方向へ延びる溝状の突出部がみられる。検出面では確認できなかったが，この部分と西側の方形の掘り込み部との間には，畦状の高まりが検出されたので，本来的には別遺構であった可能性が高い。比較的整った平面プランを呈していることから，人為的な遺構として捉えることができようが，検出部位が限られることもあって性格を特定するまでには至らなかった。なお，埋土は灰橙色粘質土の単層で，ベース層のブロック土を若干含む。

遺物は，土師質土器皿・足釜ｃ類，須恵器の小片等が若干量出土したのみである。３点を選んで図示した。695・696は，橙色系の土師質土器皿である。外底面は，695では回転ヘラ切り後ナデ調整が加えられ，696では回転ヘラ切り後板状の圧痕が残される。また695は，二次的被熱を蒙ったためか，色調が全体に褐色味を帯びる。697は安山岩製の砥石である。下半を欠損し，上端の一部を欠く。本砥石も，破断面を中心に弱い被熱痕が認められる。幅3.2cm，厚さ1.5cm程の板状を呈する携帯用の小形の砥石であろう。上端面を除く４面がよく使用されており，特にｃ面には鑿状の工具の研砥に使用したのか，浅い段状の研磨痕がみられる。上記出土遺物より，概ね14世紀中葉から後半代を中心とした時期に位置付けられよう。

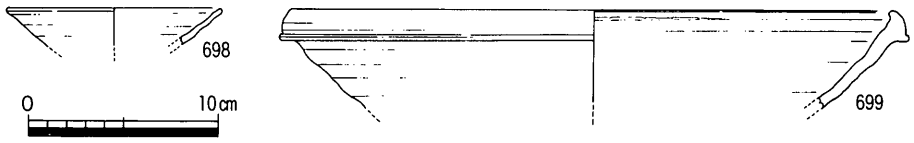
ＳＸ09（第137・138図）

Ｉ区中央東端Ｄ７グリットで検出した溝状を呈する落ち込みである。上面を予備調査時のトレンチによって削平を蒙り，また北端上面よりＳＤ01が掘り込まれ，全形を窺うことはできない。平面形は現状で，長軸4.5m，短軸1.4m以上の東西に長い不整形な溝状を呈する。残存深は0.17mと浅く，断面形は概ね皿状を呈する。周辺の遺構面より，予備調査時のトレンチによって0.1m程上面を削平されており，さらに後世の地下げ等による削平を考慮すれば，遺構本来の底面が辛うじて検出されたと考えられる。埋土は灰褐色粘質土の単層で，炭片や焦土粒が顕著に含まれる。また西端付近底面には，長径0.2m程の炭化物の集中がみられた。後述する遺物の出土状況からも，火災等に伴う廃棄土坑の可能性が考えられる。



第137図　ＳＸ09平・断面図（1/40）

遺物は，遺構中央部を中心に被熱痕のある幼児頭大の自然礫などと共に，散在して出土している。土師質土器皿・足釜，十瓶山窯系須恵質土器碗，備前焼甕，須恵器等の小片が



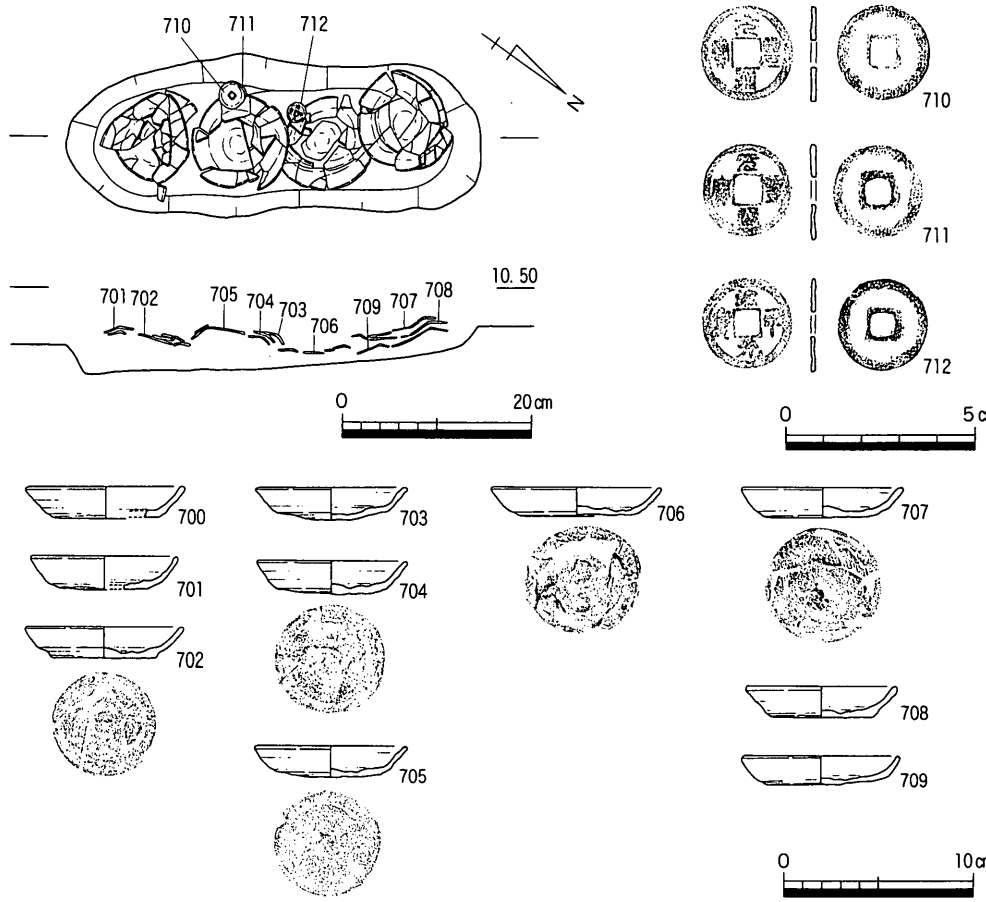
第138図　ＳＸ09出土遺物実測図（1/4）

あり，完形に復元可能なものはない。２点を図示した。698は，土師質土器皿。口縁部は直線的に開き，端部は内傾する小端面をなして矩形に収める。699は，東播系須恵器捏鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚する。概ね14世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＸ10（第139図）

Ｉ区中央東端Ｄ５グリットで検出した，土器埋納坑である。ＳＰ655上面より掘り込まれている。以下報告する３例を含めて，類似した遺構は，一般に建物に伴う地鎮遺構とされる例が多い（辻1992）が，本遺構については対応する明確な建物遺構は不詳である。掘り形は，長軸0.44m，短軸0.17m，主軸方向Ｎ34.8°Ｗの南北に長い溝状を呈する。残存深は３cm程で，底面は僅かに南に傾斜する。上面幅は土器の口径よりやや広めに掘り込まれるが，底面幅はそれにほぼ等しく，また長さも後述する土器４組の延長と大きくは違わないことから，あらかじめ土器埋納方法が定められた後に，遺構掘り形の平面プランや規模がそれに沿って決定されたと考える。つまり，本遺構は当初より土器埋納をのみ目的として掘り込まれたものと考える。掘り形内部には，後述するように土師質土器皿数枚を積み重ねたものを１組として，計４組が列状に並べられていた。上面は顕著な削平を蒙っており，検出面で破砕した土器上端が露出する。したがって，後述する土器の数量は，本来的なものではない可能性が高い。なお，埋土は灰褐色系粘質土の単層であった。

遺物は，掘り形の長軸に沿って南北一列に，土師質土器皿が４組並べられて出土した。各組１～数枚の皿がいずれも底面を上にして積み重ねられて出土したが，皿の枚数は一定ではない。上述した上面の削平を考慮しても，当初より各組の枚数に差異があったことは確実である。南端の組では，検出時には２枚が確認されたが，より枚数は増える可能性がある。南より２組目では，３枚の皿とその上面で銅銭２枚（710・711）がいずれも裏面を上にして重ねて出土した。銅銭より上に皿を重ねた痕跡は認められず，ほぼ旧状をとどめているものと考えられる。南より３組目では，１枚しか皿は出土しておらず，皿上面には銅銭（712）が表面を上に置かれていた。さらに，皿の両端には２組目と北端の組の皿が被



第139図　ＳＸ10平・断面図（1/8），出土遺物実測図（1/2・1/4）

さっており，３組目は皿１枚のみが置かれていたと考えられる。北端の組では３枚の皿が重ねられていた。より上に皿が重ねられていた可能性もある。以上より，中央２組はほぼ旧状をとどめて検出されていると考えられるが，南北両端の組はさらに上面に皿が重ねられていた可能性が残る。なお，銅銭は計３枚が出土しているが，これは皿を置き終えた後に置かれたものと考えられる。また，皿を置く順序については，その重なりから，南端と南より３組目の最下段の皿より置き始めたことは確実だが，重ねた皿の置く順序までは，判断しえなかった。

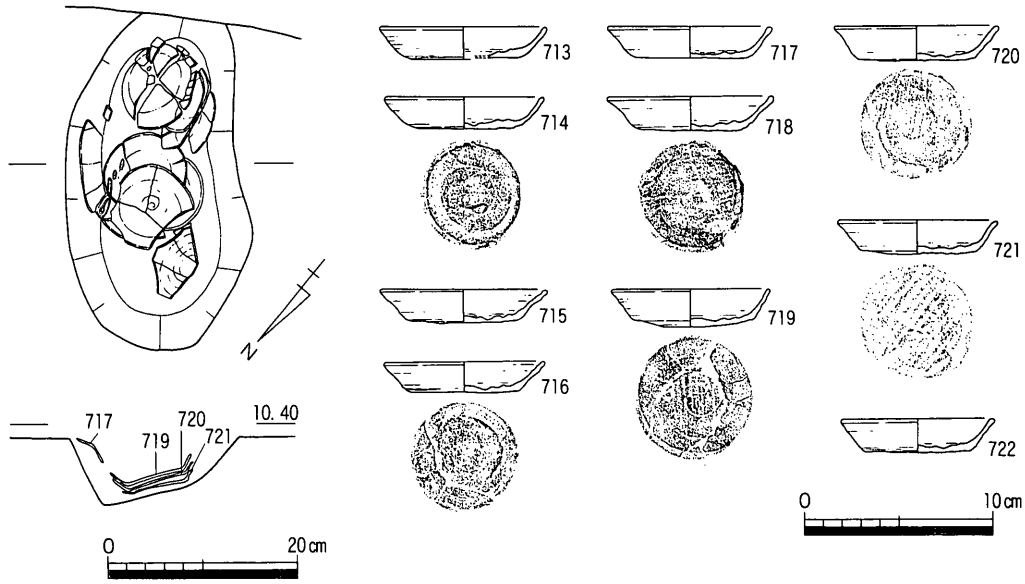
遺物は，上記した土師質土器皿９点（701～709）と，遺構検出途上で出土し，正確な出土位置が不詳な皿１点（700），銅銭３枚（710～712）を図示した。この他にも，接合不能な皿の口縁部や底部の小片が若干あるが，図示したものと別個体になるのかどうかの判断が付かなかったため，図示していない。また皿は，出土位置の不詳な700を除いて，各組毎

に重なりの上から順にレイアウトを行い図示している。出土した皿は，焼成や色調，微細な成形手法等によって，大きく２群に分けられる。焼成がややあまく色調は橙色を呈し，底部外周に回転ナデによる鈍い凹線状の段を有するもの（700～702・706～709）と，焼成が堅緻で色調が黄色味を帯び，口縁端部付近で僅かに外反して開くもの（703～705）である。なお，法量の面では，前者の口径が後者のそれをやや凌ぐ傾向があるが，必ずしも明確ではない。しかしながら，上記した相違点から，おそらく両者はその製作地を異にする可能性が高い。こうした視点が妥当だとすれば，上記10枚の皿は，埋納目的のために新たに取り揃えたのではなく，既に一箇所において複数揃えられていたものの中から，つまりは日常生活で使用していたものの中から不作為に10枚を選択し埋納したと考えた方が合理的であろう。こうした様相は，日常生活の中での儀礼的行為の在り方を考える上で非常に興味深い。さらにこうした皿の相違は，土器埋納時にも意識されていたらしく，後者の皿は南より２組目のみに３枚重ねて置かれていた。こうした同質のものをまとまりと捉える考え方は銅銭の配置にも共通し，銭種の同じものが重ねて置かれている。銅銭はいずれも北宋銭である。710・711は初鋳1078年の「元豊通寶」で，712は初鋳1064年の「治平元寶」である。出土した遺物より細かな時期を特定することは困難であり，概ね14世紀中葉を中心とした時期を想定しておく。

ＳＸ11（第140図）

Ｉ区中央東端，ＳＸ10の北東約1.3mの位置で検出した，ＳＸ10と近似した性格を有すると考えられる土器埋納坑である。南端部をＳＤ09に削られるが，おおよその形状は捉えられる。平面形は，長軸0.35m，短軸0.20m，主軸の方向Ｎ38.0°Ｗの南北にやや長い溝状を呈する。平面形態からすれば，ＳＸ10の２／３程度の規模になろうか。残存深は３cmと浅く，検出面で土器上端が既に露出し，また土器の欠損率も高く，遺構上面の削平により一部の土器が失われていることは確実であろう。

遺物は，３組の土師質土器皿が掘り形長軸に沿って，列状に並べられて出土した。本遺構でも，皿の枚数は各組により異なり一定しない。北端の組では，皿１枚が口縁部を上にやや南に傾斜して置かれていた。上面の削平により土器は大きく破損しており，口縁部は辛うじて一部を残すのみである。本来的に１枚のみが埋納されたのかどうかについては，検出状況からは判断できなかった。中央の組では，４枚の皿が口縁部を上に整置されていたが，上端の皿は削平により口縁部の一部が失われている。この皿の東端からは，皿上面より転落したような状況で，鉄製品１点が出土した。ループ状に大きく湾曲した角釘と考



第140図　ＳＸ11平・断面図（1/8），出土遺物実測図（1/4）

えられたが，残念ながら調査中に紛失したため詳細は不明である。また，中央の組の東側には，半分に打ち割られた皿１枚を，底部を上に掘り形壁面に立て掛けるように据えられていた。打ち割られた残り半分は，遺構内からは出土していない。皿を立てて埋納した例は，当遺跡では本例のみである。皿上面より鉄製品が出土したことを考慮すれば，本組ではより上には皿は積み重ねられていなかった可能性が高い。南端の組では，土圧と削平により土器の損壊が著しい。皿３枚を口縁部を上に重ねて正置させた後，底部を上に向けた皿１枚を重ねて，いわゆる合せ口にして４枚の皿が据えられていた。こうした埋納方法も，本遺構に限られる。より上位に皿が重ねられていた可能性もあるが，断定するまでには至らなかった。

遺物は，上記したように皿10点を図示した。713～716が南端の組の皿，717が中央東壁部分で立位で出土した皿，718～721が中央の組の皿，722が南端の組の皿である。いずれも口径8.0～8.6cm，器高1.6～2.0cmの小皿ｃ類である。胎土や焼成はいずれも酷似するが，形態と調整手法に若干の相違を認める。口縁部形態では，外反して開く715～722と，やや内湾気味に立ち上がる713・714の２者がある。外底面の調整手法には，回転ヘラ切り後弱いナデ調整を加える714・716～718・722と，同様にヘラ切り後板状の圧痕が僅かに残る713・715・719・720，同様にヘラ切り後粗い簀の子状の圧痕が明瞭に残される721に３分類される。こうした差異が，異なる複数の製作地を背景としているのかどうかまでは不詳だが，

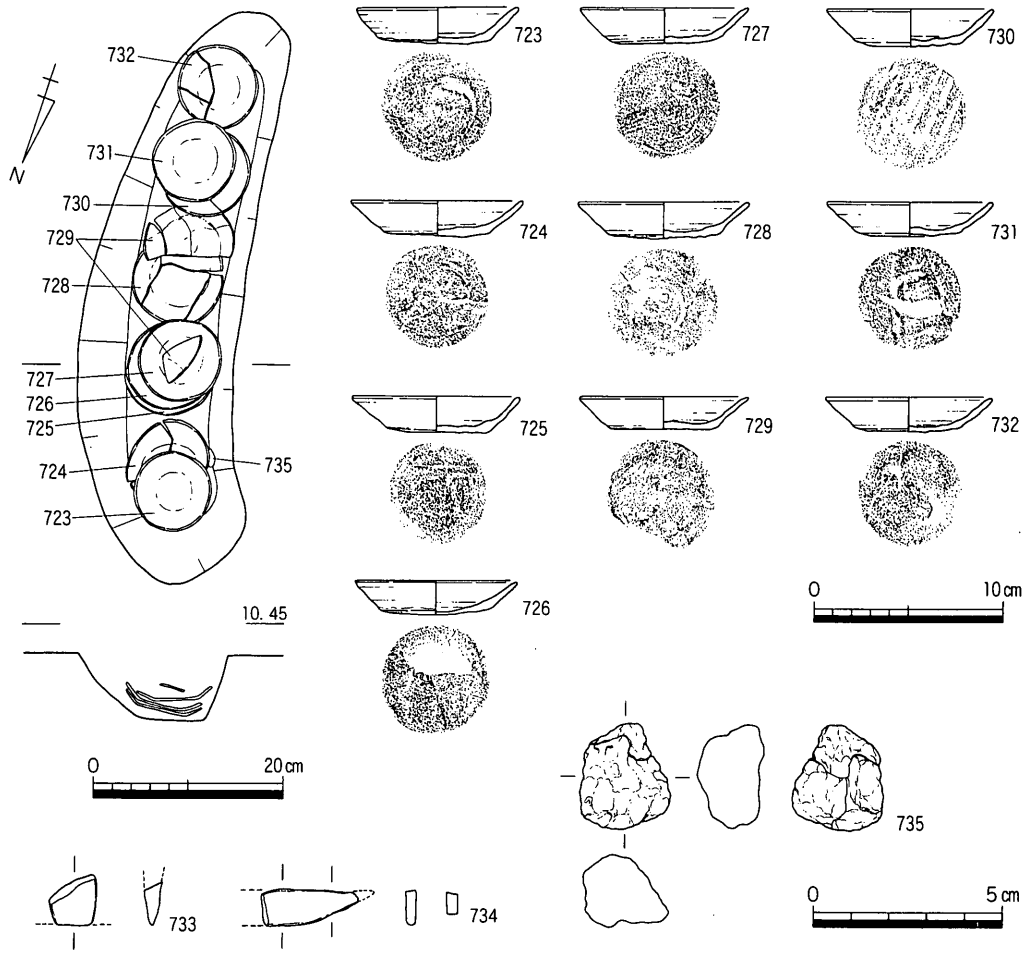
少なくとも同一工人によるものではない可能性は想定できる。本遺構の時期を出土遺物より特定することは困難である。ＳＸ10に近接した時期を想定するにとどめる。

ＳＸ12（第141図）

本遺構もＳＸ10に近接し，ＳＸ10の北西約3.8mに位置する土器埋納坑である。掘り形の平面形は，長軸0.6m，幅0.14m程で，上記ＳＸ10と同様な南北に長くやや湾曲した溝状を呈する。主軸の方向は概ねＮ12.4°Ｗを測る。本遺構もＳＸ10と同様に，その平面プランや規模は，あらかじめ決定された土器埋納方法に従って掘り込まれたとみられる。掘り形内部には，計５組の土師質土器皿が列状に並べられていた。掘り形の残存深は７cmと浅いが，土器上面は遺構埋土に覆われており，ＳＸ10等と異なり埋納時の状況がそのまま残されたとみられる良好な資料である。皿の枚数は，後述するように11枚が確認された。他の遺構についても，上面の削平を蒙っているとはいえ，これを大きく上回る例は確認していない。したがって，10～15枚といった枚数が本来土器埋納坑に納める一般的な皿の枚数であったと考えられる。

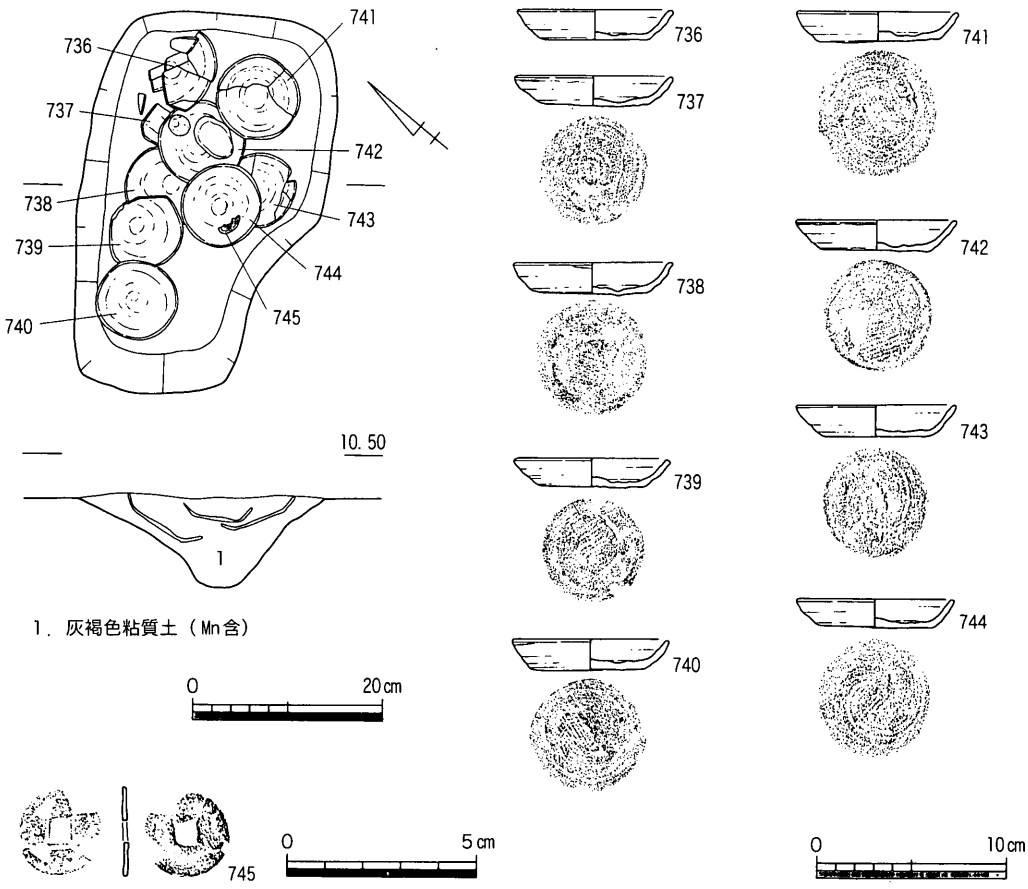
さて，本遺構での土器の枚数や出土状況は，各組で異なり一様ではない。北端の組では，皿２枚をやや中心をずらして重ね置き，土器の下からは小鉄塊１点（735）が出土している。北より２組目では，皿３枚を積み重ね，最上段の皿の中には，別の皿の口縁部の小片が置かれていた。中央のものは，口縁部を上に据え置いた皿の上に，さらに概ね半分に打ち欠いた別の皿を底部を上にして重ねられていた。この皿と前記２組目の口縁部片とは接合した。北より４組目のものは，北端のものと同様に皿２枚を重ね，下に不明小鉄器片２点（733・734）を置く。南端のものは，皿１枚のみが口縁部を上に置かれていた。11枚の皿は明らかに意図的に据え置いたものだが，同時に出土した小鉄塊や鉄器片については，本来的に埋納されたものかどうかの判断は付かなかった。こうした埋納遺構にはしばしば銅銭を伴うが，本遺構からは銅銭の出土は認められない。また，土器の配置や枚数等の埋納方法にどの程度の法則性があったかについても不詳である。なお，埋土は灰褐色粘質土の単層であり，明確なブロック土の混入がみられなかったこと，皿の出土状況にいわゆるズレの生じた可能性がみられることからすれば，掘り形内に皿を据えた後は埋め戻されずに，一定期間オープンな状態であった可能性も考えられる。

出土した遺物は，上記した橙色系の土師質土器皿10枚と小鉄塊１点，不明鉄器片２点である。皿は，口径8.4～8.8cm，器高1.6～1.9cmの小皿ｃ類で，ＳＸ10同様に外底面の成形手法の点から２種類のものが埋納されている。回転ヘラ切り後ナデ調整を加え，ヘラ切り



第141図　ＳＸ12平・断面図（1/8），出土遺物実測図（1/4・1/2）

痕等を消し去るもの（723～729・731・732）と，外底面にヘラ切り後の粗い簀の子状の圧痕が明瞭に残り，ナデ調整が不徹底なもの（730）である。しかし，両者の胎土や色調及び法量に大きな差異は認められず，ＳＸ10例のように製作地の異なる製品を埋納したものかどうかは不詳である。なお，730は，前記ＳＸ11出土の721と形態や調整技法が酷似し，同一工人もしくは同一製作地において製作された可能性が極めて高い。735は，724の下より出土した小鉄塊と考える。長径2.7cm程度の偏球状を呈し，錆化が進展しており器種は不詳。733・734は，730の下より出土した小鉄器片である。733の下縁には直線状の刃部を認めることから，刀子等の小形工具である可能性が高い。734は，幅約１cm，厚さ２㎜の板状の鉄片の一側縁を斜めに削り，三角形状に尖らせる。断面形は矩形を呈し，明確な刃部はない。形状や733と共に出土していることから，733と同一個体の刀子の茎と考えられる。



第142図　ＳＸ13平・断面図（1/8），出土遺物実測図（1/2・1/4）

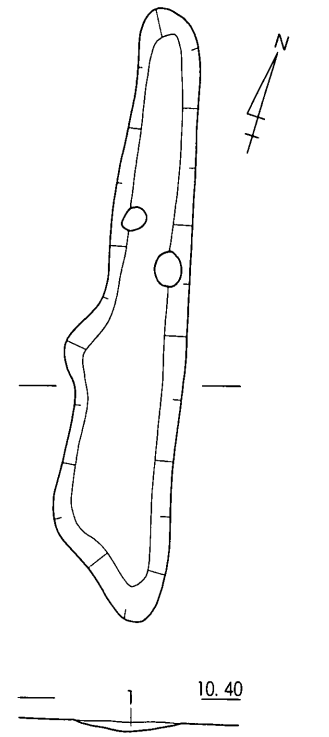
意図的に破砕して埋納した可能性が高いが，出土状況から混入の可能性を全く否定することも困難である。上記した遺物より，ＳＸ10と近接した時期が想定される。

ＳＸ13（第142図）

Ｉ区中央東部Ｄ５グリットで検出した土器埋納坑である。ＳＢ17の東側の梁間のラインが本遺構と重複しており，ＳＢ17に伴う地鎮遺構の可能性もあるが，建物主軸に対してやや南偏しており断定するには至らない。土坑掘り形の平面形は，長軸0.40m，短軸は東半部で0.25m，西半部で0.18mを測り，やや東半部が幅広となった隅丸長方形ないしは台形状を呈する。主軸の方向は，N58.2°Ｅである。この平面プランに合致して，東半部で２～３列，西半部で１列に，土師質土器皿を重なりをもたせつつ，いずれも口縁部が上になるように据え並べていた。皿の下及び上面には，銅銭と小石が出土している。土坑平面プランと土器の配置が合致する点は，本遺跡のいずれの埋納坑でも共通するが，掘り形の形状と土器配置のプランは，上記ＳＸ10等とは大きく異なる。深さは数cmと浅く，断面形は

概ね皿状を呈する。しかし，東半部中央床面には径10cm，深さ８cm程の小ピットが掘り込まれており，この部分に向けて後述する土器が落ち込むように出土した。柱の抜き取り穴としては規模がやや小さく，性格は不明。埋土は，小ピット部分を含めて単層とみられる。

皿は９枚が確認された。北東隅の１枚や南より２枚目の皿は，遺構上面の削平によって削られ一部欠損しており，９枚以外にもさらに皿が重ねられていた可能性もあるが確認はできない。一部先後関係の不明な部分もあるが，皿の重なりからおおよその配置の順序が復元できる。まず，土坑中央南半部底面に半截した銅銭(745)を置き，上に737・738・743の３枚の皿を三角形状に並べて据える。銅銭は意図的に半截されているようだが，裁断面は残されていない。銅銭の上には，743が置かれる。そして，３枚の中央上面つまり三角形の中心に742を置き，さらに738の西に少し重なるように739を置く。最後に，742の北・東・南の３方向に，742に少し重ねて736・741・744をそれぞれ置き，また739の西に同様に少し重ねて740を置く。742の上には，長径４cmと２cm程度の小石が，また744の上には半截した銅銭の残り半分が載せられているが，これは皿の配置が終わってから載せられたと考えられる。小石は，特に加工痕のみられない自然石だが，埋土中に同様の小石が認められず，また皿底面に接して出土していることから，意図的に置かれたものと判断した。



第143図　ＳＸ14平・断面図（１/40）

遺物は，上述した土師質土器皿９点（736～744）と銅銭１点（745）を図示した。皿は，口径8.0～8.3cm，器高1.4～1.6cmの橙色系の小皿ｂ類に分類される。外底面の調整は，回転ヘラ切り後僅かに板状の圧痕を残す。法量に若干の差異がみられる以外，胎土や焼成，形態，調整手法等は近似しており，同一工人もしくは同一製作地で作られた皿とみなしてよい。この点で先のＳＸ10とは異なる。銅銭は北宋銭で，初鋳1039年の「皇宋通寶」である。「皇寶」の部分が743の下より，「宋通」の部分が744の上に載せられて出土した。本遺構も出土遺物より細かな時期を特定するまでには至らない。ＳＸ10と近接した時期を想定するにとどめる。

ＳＸ14（第143図）

Ｉ区北部Ｅ５グリットで検出した不整形な溝状を呈する落ち込みである。ＳＤ47の延長方向で検出されたことから，ＳＤ47の一部となる可能性も考えたが，主軸方向が異なるため別遺構として報告する。上面より柱穴数基が掘り込まれる。平面形は，長軸3.2m，短軸0.42～0.62m，主軸方向Ｎ10.5°Ｗの南北に長い溝状を呈する。東に位置するＳＤ43とほぼ併走する。残存深は数cmと極めて浅い。断面形は，明確な底平坦面をなさず浅い皿状となる。最深部底面の標高は，10.20m前後であった。埋土は，灰褐色粘質土の単層である。

遺物は，土師質土器皿・坏・足釜等の土器片が少量出土したのみである。いずれも小片のため，図化は行っていない。出土した遺物より概ね14世紀代に位置付けられると考えるが，細かな時期を特定するまでには至らなかった。

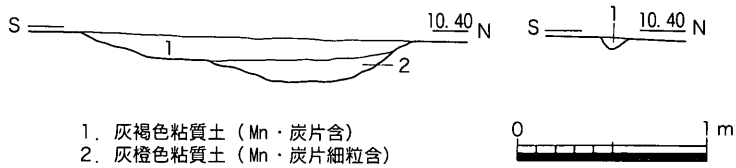
溝状遺構

ＳＤ01・06・ＳＸ01（第144～150図）

Ｉ区中央Ｄ６・７グリット周辺で検出した，中世屋敷地を南北に二分する区画溝と，その西端で検出した不整形な落ち込みである。溝及び落ち込み上面には，東西に予備調査時のトレンチがほぼ重複して穿たれていたため，両遺構は大きく損壊を蒙り，遺構の重複関係について明確なことは不詳である。東側溝状部をＳＤ01，西側落ち込み部をＳＸ01と呼称して両遺構を区分するが，本来的には一連の遺構であり，ＳＤ01の北に配された小溝ＳＤ06を合わせて，以下に一括して報告する。

ＳＤ01は，調査区東半部を北に緩やかに円弧を描いて，東西に配された区画溝である。後述するＳＸ01より，Ｎ82.0Ｗ前後の流路方向を有して約10m程東流した後，緩やかに湾曲してＮ65.0°Ｅ前後に流路方向を変更し段丘崖前面まで至り，クランク状に小さく屈曲しつつ段丘崖を下り落ちる。崖面下の氾濫原部分では，後世の削平により延長は捉えられなかった。しかし，段丘崖を削り込んで流下していたことが判明した点は，崖形成時期を捉える上で大きな成果であった。ＳＸ01部分を合わせて，総延長約36mを検出した。西半部は前記した予備調査時のトレンチによって大きく乱され，僅かに北縁ラインが捉えられたに過ぎない。内容が判明したのは，東半部約14m程の区間である。溝は，西半部で幅1.7m前後，東部ＳＤ06・07合流部以東で同2.3～2.6mとやや幅を広げつつ，東へ流下する。残存深は，西半部で0.2～0.3m前後を測り，遺構上面の削平を考慮しても溝幅に比べてや

や浅い。底面の標高は，ＳＸ01との合流部付近で10.10m，段丘崖前面で10.00m前後と，僅かに東に傾斜する。溝の規模や底面の標高差から，農業用水等の恒常的な通水を意図した灌漑水路ではなく，生活雑排水や雨水等を屋敷地から排水することを目的とした排水路と推測する。埋土は２層に細分された。両層に大きな差異は認められないが，下層はやや北に偏して堆積するのに対して，上層はやや南に重心がある。下層は溝機能時の堆積層と考えられ，上層は廃絶後の自然堆積層であろう。



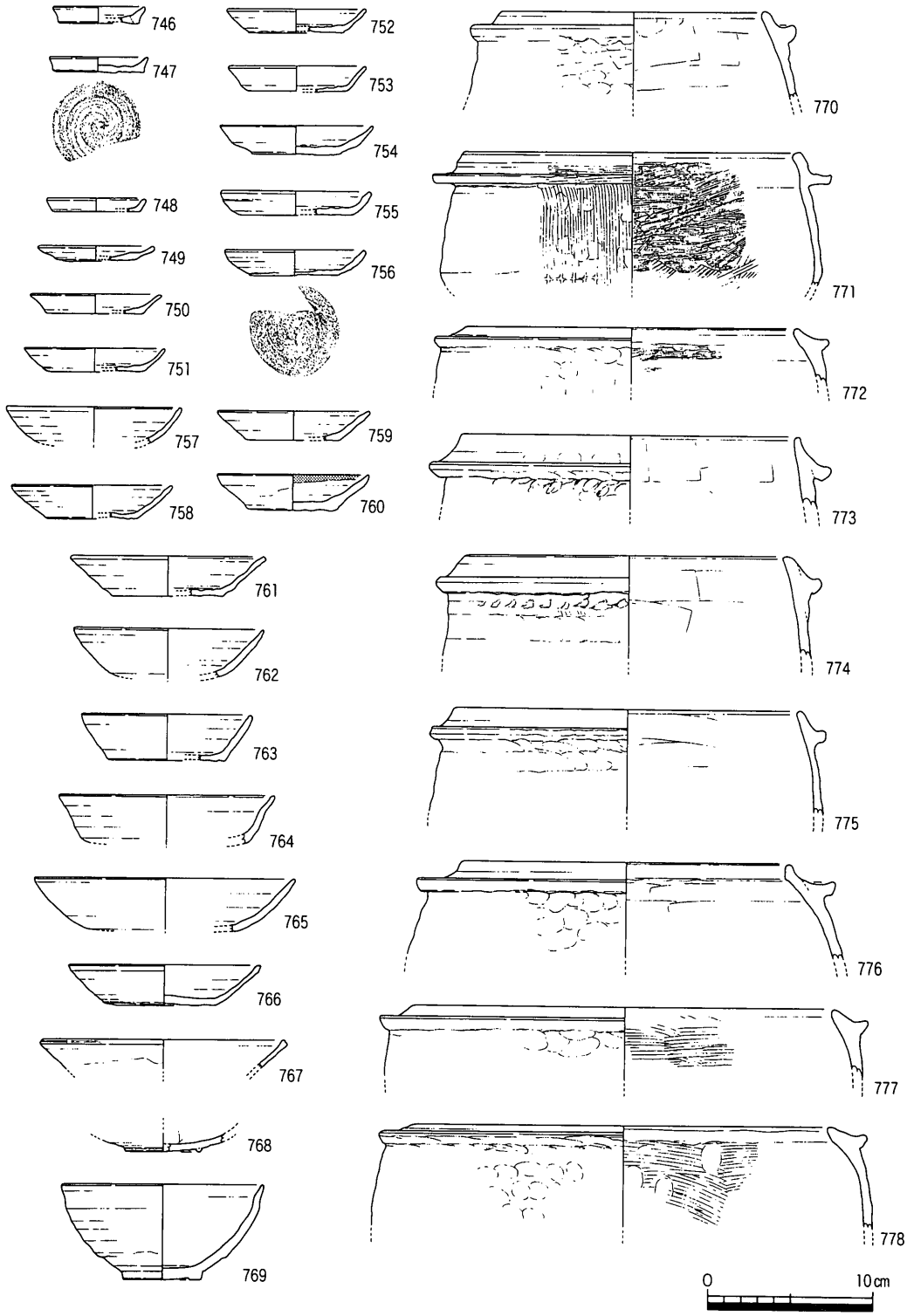
第144図　ＳＤ01・06断面図（１/40）

ＳＤ06は，ＳＤ01北側で検出したＳＤ01の小分流である。検出長約7.3mで，東西両端はＳＤ01より分岐・合流する。ＳＤ01の北0.5mの位置を，ＳＤ01とほぼ平行して緩やかな弧状を呈して検出された。溝は，幅0.15m前後，残存深0.07m程の浅いＵ字溝を呈する。底面の標高は10.30m前後でほぼ一定する。埋土は，灰褐色粘質土の単層で，ＳＤ01上層と近似しており，ＳＤ01上層とほぼ同時期に埋没したものと判断される。

ＳＸ01は，ＳＤ01の西端に位置する不整形な落ち込みである。本遺構からはＳＤ08等多数の溝が分岐・合流しており，本来的にはＳＤ01に合流するこれら溝群によって，遺構面が浸食され形成された自然地形状の窪地と考えられる。東西約11m，南北約７mの規模を有する。残存深は，約0.3m前後で，やや南に偏してＳＤ01の延長部と考えられる溝状の窪地がＳＤ08へ連続し，その北側及び西側はテラス状の緩斜面を呈する。埋土は，ＳＤ01とほぼ同様の堆積状況を示し，上層は溝状部上位より緩斜面部を覆って広く堆積する。

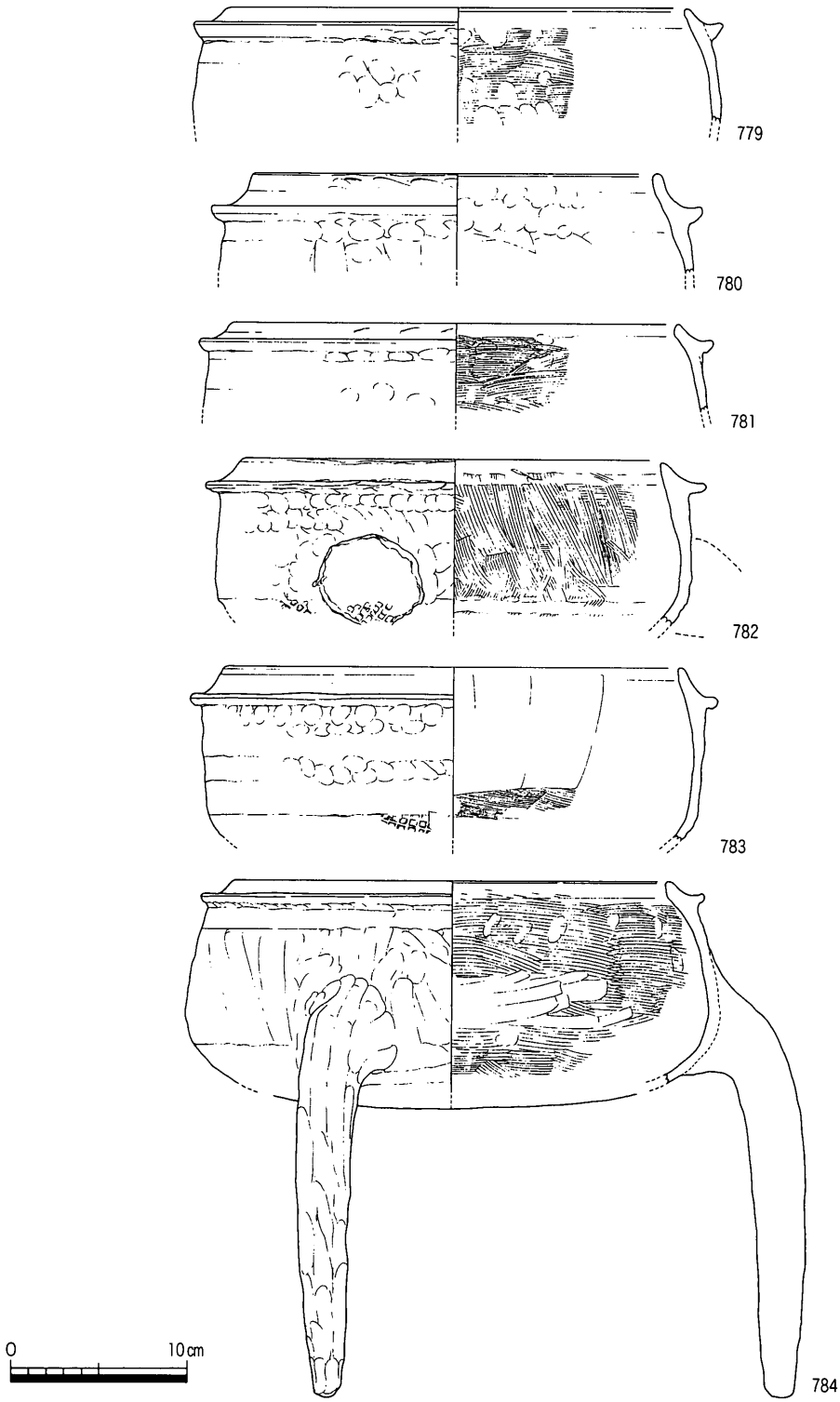
遺物は，ＳＤ01・ＳＸ01を中心にコンテナ４箱程度出土している。なお，ＳＤ06からは，器種不詳の土師質土器小片が数点出土したのみである。埋土は，上記したように各々２層に細分したが，ＳＸ01では一括して遺物の取り上げを行ったため，層位への帰属は不詳である。ＳＤ01では，大半の遺物は上層から出土しており，溝機能時の堆積が想定される下層からの遺物の出土は極少数に限られる。溝機能時には遺物の投棄が行われなかったことを示しており，ＳＸ01にも同様な傾向を認めてもよいだろう。75点の遺物を図示した。769・784・792がＳＤ01下層，746～755・757・762・765・766・768・771～779・785～788・790・800～802・807～810・812～815・819がＳＤ01上層，756・758～761・763・764・767・770・780～783・789・791・793～799・803～805・816～818がＳＸ01出土の遺物である。

746～756は，土師質土器小皿である。法量により，口径6.0cm前後，器高1.0cm前後のａ類（746～749）と，口径8.0cm前後，器高1.3cm前後のｂ類（750～753），口径8.5cm前後，器高1.5cm前後のｃ類（754～756）に３分類する。ａ類は，さらに口縁部がやや内湾気味に直立して開く形態746～748と，外反して開く形態749に細分される。前者では，外底面は回転ヘラ切り後未調整のものが多いが，後者はヘラ切り後ナデ調整される。ｂ類も同様に，色調が灰黄色系を呈し口縁部が外反する750・753と，橙色系を呈して内湾気味に開く751・752に細分される。外底面は，こうした差異に関わらず，ヘラ切り後ナデ調整される点で共通する。ｃ類は，底部付近に明瞭な凹線状の段を認める754と，底部より内湾しつつ開く755・756に細分される。757～761は，土師質土器皿である。口径10.0cm以上，器高2.0～2.8cm程度のものを一括し，前記小皿とは法量差により明瞭に分類される。口縁部が内湾して開く757と，外反気味に開く758～761の２形態がある。前者はやや器高が深くなる可能性があり，坏として分類すべきかもしれない。なお，760の口縁部の一部は煤けており，灯明皿として使用された可能性がある。762～765は，土師質土器坏である。口径10.0cm以上，器高3.0cm前後のものを坏として分類する。口縁部は内湾して開く形態が主体だが，端部付近で小さく外反する764のような形態もみられる。766は，十瓶山窯系の須恵質土器皿。基本的な成・整形手法は，土師質土器皿と共通する。外底面には，ヘラ切り後板状の圧痕を認める。767・768は，十瓶山窯系の須恵質土器碗。767の外面には，特徴的な重ね焼の痕跡を認める。768の外底面には，退化の著しい断面蒲鉾状の小さな高台を有し，内底面は放射状のナデ調整に省略される。13世紀末から14世紀初頭を前後する時期に位置付けられる。769は，瀬戸美濃系陶器の天目碗である。口縁部より体下半部にかけて厚く施釉され，高台付近は無釉である。高台は浅く，輪高台状に削り出される。藤澤良祐氏の分類の天目茶碗Ⅰ類に分類され，後Ⅰ期に位置付けられる（藤澤1991）。770～784は，土師質土器足釜である。確実に三足が付されるのは，782・784の２点に限られるが，口縁部形態や内外面の調整手法から，いずれも足釜として分類しておく。なお，三足は，782に示されるように，体部の成形及び調整が終了した後に体部下端に貼付される。足釜は，主に口縁・鍔部の形状から，次のａ～ｄの４類に分類する。ａ類（771）は，量的に多数を占めるものではなく１点のみ図示した。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり，鍔部は水平に近く開き，口縁及び鍔端部は矩形に面取りされる。体部内外面は，ハケ調整が卓越する。13世紀末から14世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。ｂ類（775・780）も，量的に少ない。口縁部は内傾気味に立ち上がり，鍔部は水平に近く引き出されるが短い。口縁端部は丸くナデ付け

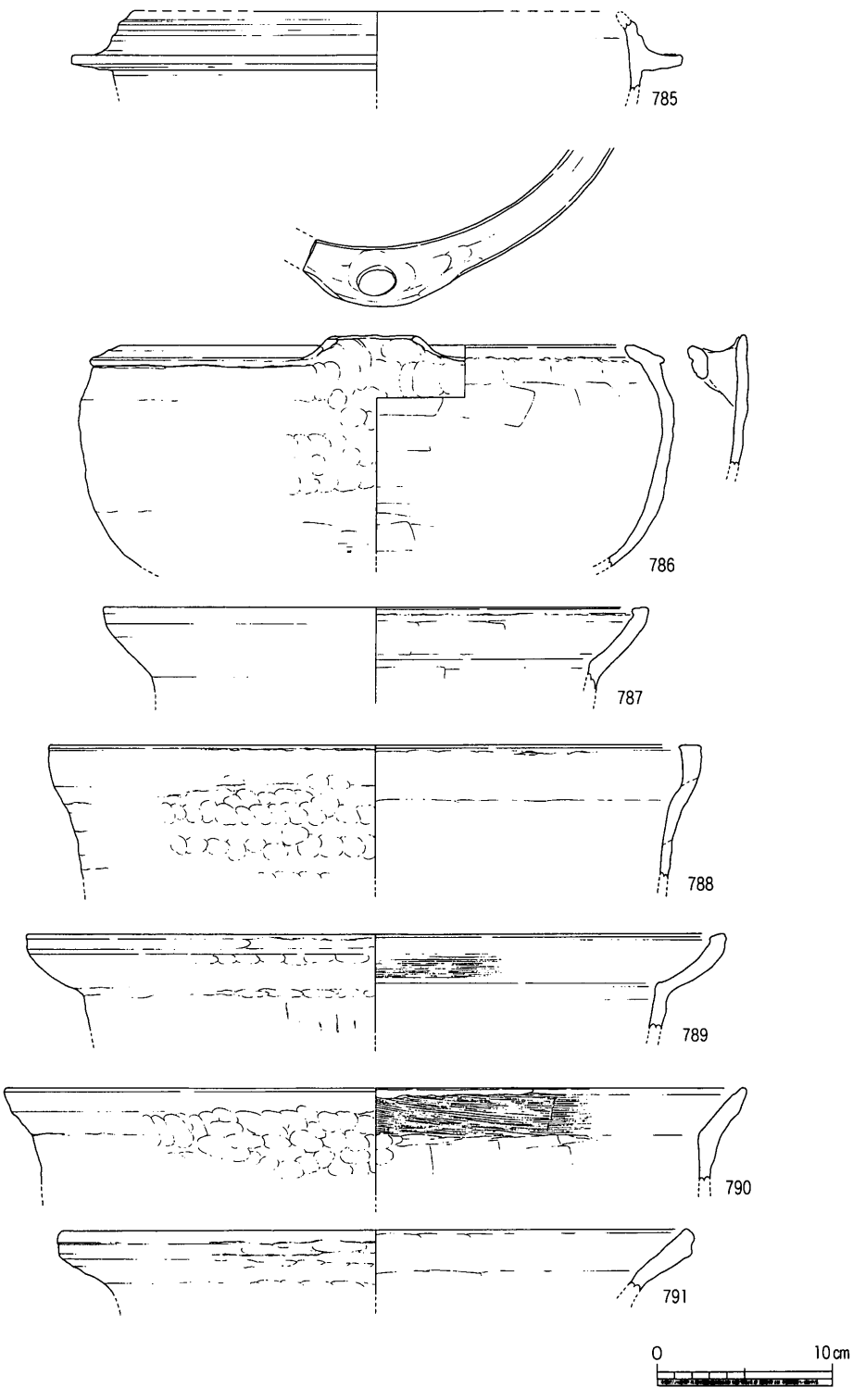


第145図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図１（１/４）

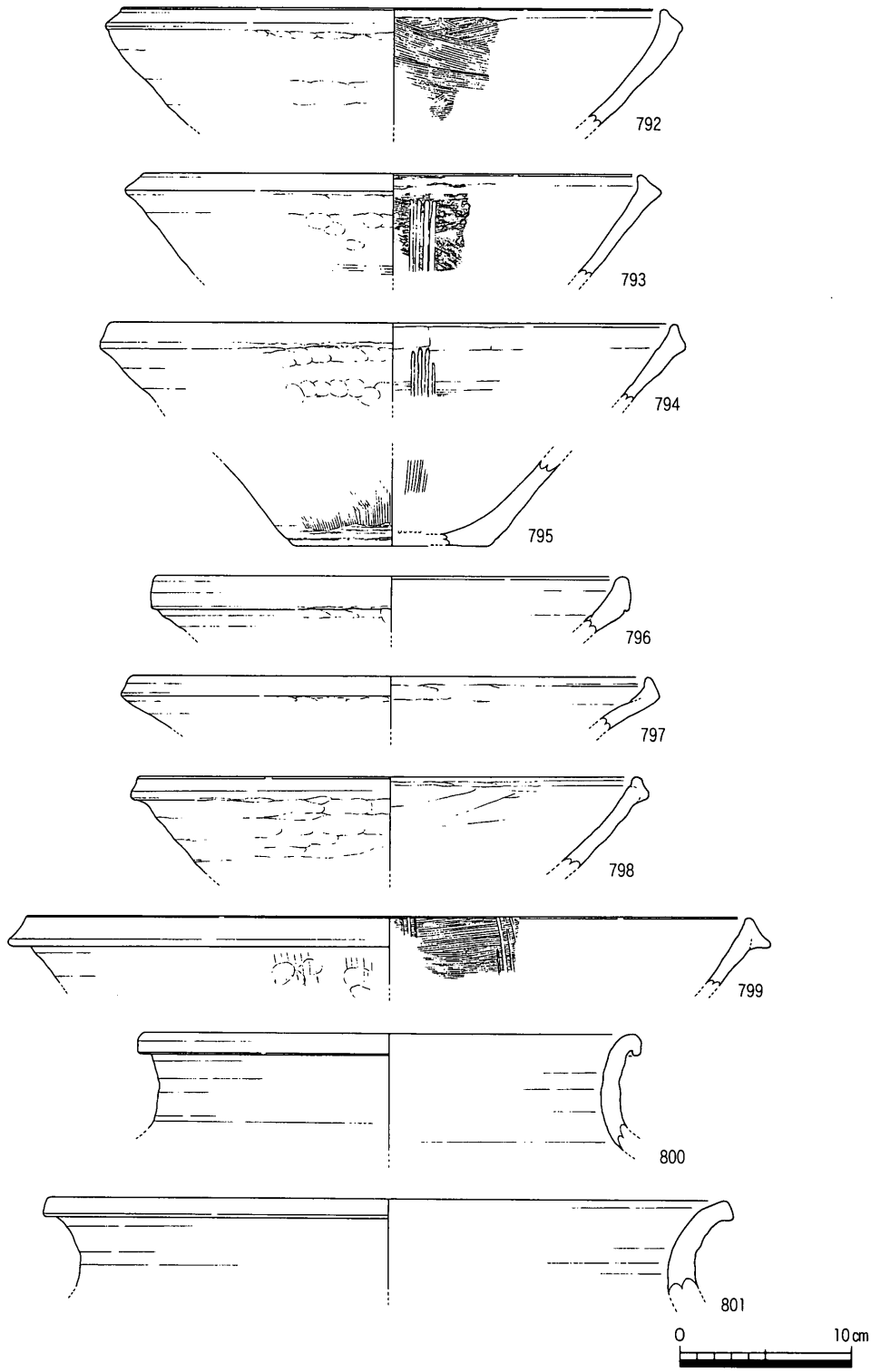
られ，鍔端部は辛うじて横方向の板ナデ調整等により端面を残す。内外面へのハケ調整は大きく後退する。c類（770・773・774・776・779・781～784）も基本的な形態はb類に近いが，鍔端部は丸くナデ付けられ，後述するd類に比して口縁部の立ち上がりがやや長いものを分類する。本溝出土の足釜の中で，量的に最も多数を占める。b類とは共通する部分が多く，明確な時期差は乏しい可能性が高い。概ね14世紀中葉から後半代を中心とした時期に位置付けておく。なお，770は焼成は堅緻で，体部外面には横方向のケズリ調整に似た強いナデ調整が加えられ，他の一群とはやや異質である。d類（772・777・778）も，量的には少ない。口縁部は強く内傾して短く，鍔部は上向きの断面三角形状に挽き出されて，もはや本来の機能の退化が著しい。体部は球状を呈して，張りの強いのが特徴である。14世紀末から15世紀初頭前後に位置付けられよう。785は，畿内系の瓦質土器羽釜口縁部片である。器表面は摩滅が顕著で，調整等は不明瞭な部分が多い。口縁部は内傾して立ち上がり，外面には2条程度の段を付す。鍔部はやや上彎気味に開き，端部は上方へやや摘み上げ気味にナデ調整が施される。鍔部下面には，横方向のケズリ調整がみられ，中位に稜を生じる。鋤柄俊夫氏の羽釜B群Ⅲ類に分類され，14世紀末から15世紀初頭に位置付けられる（鋤柄1995）。786～791は，土師質土器鍋である。全形を窺える資料に乏しいが，口縁部形態から3類に分類される。a類（786）は，口縁部外面に一対の外耳を有する形態で，口縁部形態から先の土師質土器足釜の系譜上に位置付けられ，三足の欠落により鍋に取り込まれたものである。口縁部に，瘤状に退化してはいるものの，未だそれと判断可能な鍔部を有していることから，高松市中間西井坪遺跡ＳＸⅡ02出土例（蔵本1999）よりは先行し，15世紀前葉を中心とした時期に位置付けておきたい。b類（787～789）は，内湾して開く口縁部を有する形態である。口縁端部は矩形を呈し，ヨコナデ調整により鈍く内外に肥厚する。口縁部形状は，内湾度が弱く直立気味に立ち上がる788と，強く内湾して外傾して開く787・789に細分される。後者は14世紀中葉から後半代に，前者は15世紀代にそれぞれ位置付けられよう。なお，後者は内外面に炭素を吸着させるが，瓦質焼成を呈するまでには至らない。c類（790・791）は，外反して直線状に開く口縁部を有する形態である。口縁形状には，直立気味の端面を有し，上端より外面側に粘土紐を折り返して肥厚する791と，端面下端が鈍い稜線状を呈して，端面と口縁部が一体化しつつある790があり，若干のヴァリエーションを認める。前者は14世紀中葉を前後する時期に位置付けられ，後者はより後出する可能性を想定する。792～795は，土師質土器擂鉢である。792の内面には卸目を認めないが，形態から擂鉢として分類しておく。口縁部形状にはヴァリエーションを認め，



第146図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図２（１/４）



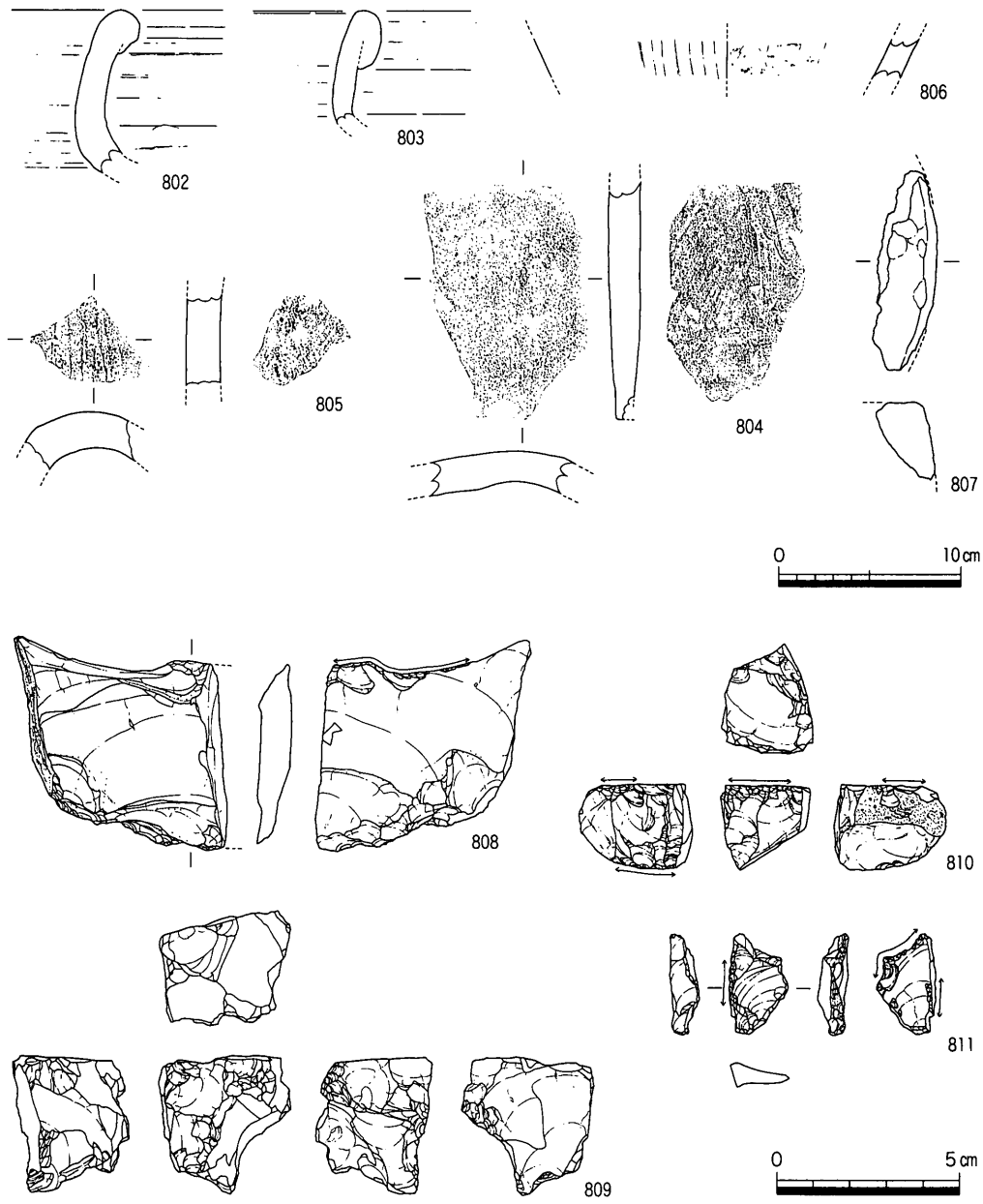
第147図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図３（１/４）



第148図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図４（１/４）

内傾する端面を横ナデにより上下に肥厚し,内面には細かな横ハケ調整が施される792・793と，主に上方にのみ摘み上げ，内面は横方向の板ナデ調整となる794に分かれる。前者は14世紀前葉を中心とする時期に，後者はやや後出し14世紀後半代に位置付けられる。795は底部片であるが，内面に僅かに４条程の卸目が施されることから，擂鉢と判断される。外面にはハケ調整が施されるが，内面はよく使い込まれており調整は不明瞭である。796は，東播系須恵器捏鉢である。口縁端部は上方へ摘み上げられ大きく拡張し，端面は直立する。13世紀末から14世紀初頭に位置付けられる。797・798は，瓦質土器擂鉢。いずれも小片のため内面に卸目を認めないが，類似した口縁部形態を有する擂鉢の類例から，本例も擂鉢として報告する。797は，口縁端部を強く上方へ摘み上げて，内傾する端面を形成する。798は，口縁端部は上下に摘み出されて肥厚し，内傾する端面は強いヨコナデにより凹線状を呈し，口縁端部内面には鈍い沈線状の窪みを有する。797は14世紀初頭を中心とした時期に，798はやや後出し14世紀中葉を中心とした時期に位置付けられる。799は，亀山焼擂鉢である。口縁端部は主に下方へ強く摘み出されて肥厚し，内傾する端面は鈍く窪む。内面は細かな横ハケ調整の後，４条以上の卸目を比較的密に施される。外面は粗い縦ハケ調整の後，横ナデ調整によりハケを消される。出土遺物中最も後出する可能性が高く，15世紀後半代に位置付けられると考える。800は，備前焼の壺。頸部は直立して立ち上がり，緩やかに外反して開く。口縁端部は外側に折り返して肥厚し，下方へ垂下させる。小片のため，復元された口径にはやや難がある。岡山県御滝窯に類似形態があり，間壁編年備前焼Ⅲ期に位置付けられる（間壁1991)。801～803は備前焼甕である。口縁部形状より，801から803への型式変化が推定される。801は，口縁部は緩やかに外反して開き，端部は矩形に収めつつ下端を外下方へ摘み出す。800よりは先行し,間壁編年備前焼Ⅱ期に位置付けられる。802は，口縁端部を外面側へ折り返して肥厚させるが，折り返しは短く，断面形は丸味を帯びた矩形状を呈する。803は，いわゆる玉縁状の口縁部を有する。802は間壁編年Ⅲ期に位置付けられるが，Ⅲ期の中でも古い様相を呈し，803は同Ⅳ期でも古い様相を呈する。804は須恵質焼成の，805は瓦質焼成の丸瓦片である。

806は，滑石製品であること，外面に厚く煤が付着すること，復元すれば半球状を呈することから，石鍋体部小片と考える。外面の調整は不明瞭ながら，辛うじて縦方向のケズリ痕が認められる。807は，粗粒砂岩製の石臼である。径31cm程に復元される。二次的被熱を蒙っているためか，器表面の剥落が著しい。周縁が円弧状を呈することから石臼と判断したが，小片のため上臼となるか下臼かは判断できなかった。808は，下縁に粗い刃部調整



第149図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図５（1/2・1/4）

を行い，上縁に潰れがみられることから，打製石庖丁とした。中央で半截する。器表面は顕著に磨耗しているが，これは埋没後の二次的なものと考えられる。809は，流紋岩製の石核残核とした。器表面の風化が進展していない点からすれば，後述する火打ち石剥片の可能性も残る。810・812は，周縁に不規則な潰し加工をみることと，剥離面の風化が進んで

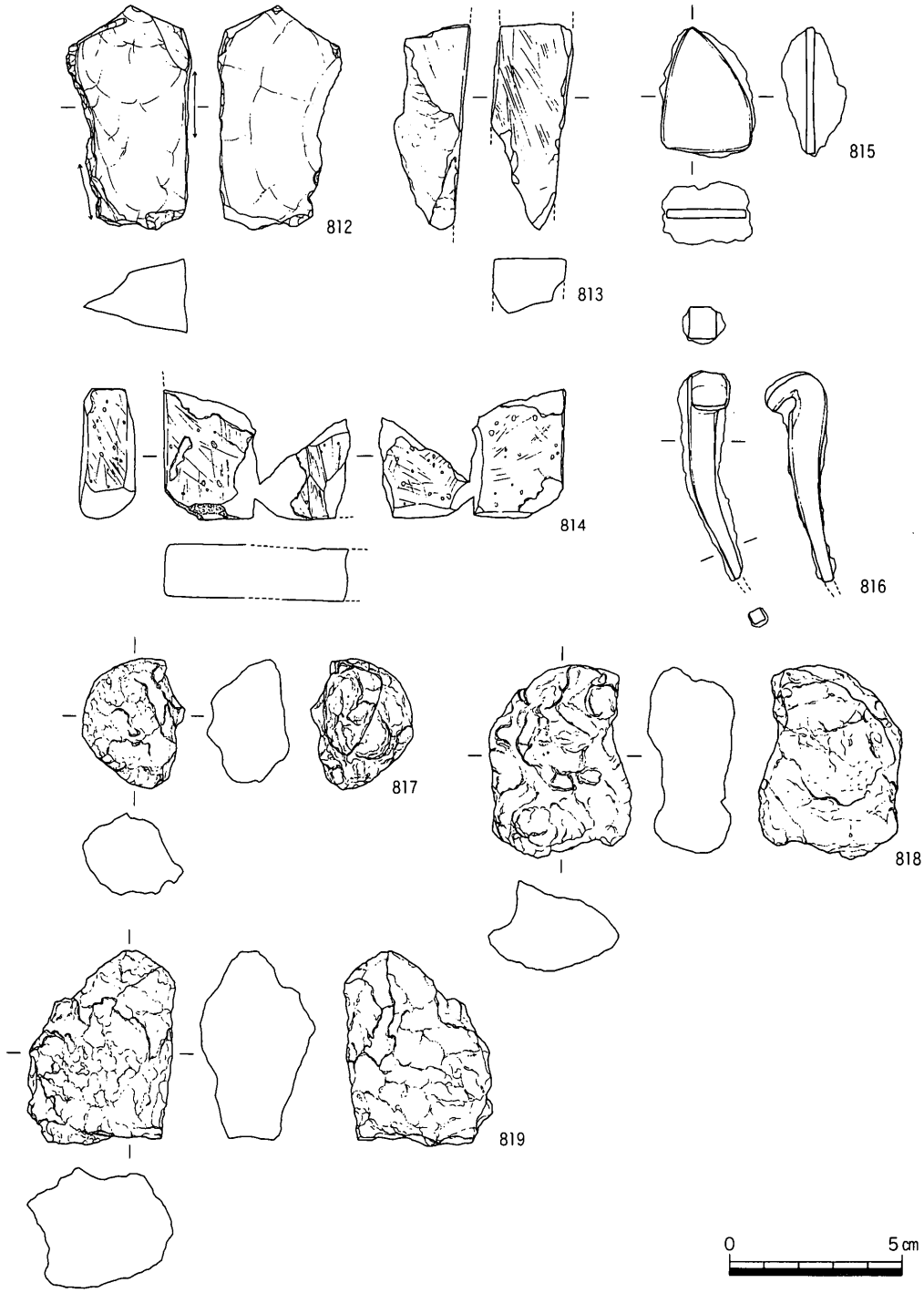
いないことから，火打石と考えた。810はハリ質安山岩を，812はサヌカイトを素材とする。811も，同様に潰し加工が施されることから，火打石の剥片となろう。石材はチャートである。813は，方柱状を呈する安山岩製の砥石である。残存する３面の内，図上面の主研面のみに使用痕が認められる。814は，流紋岩製の砥石である。表裏面はよく研ぎ込まれて磨耗した結果，薄い板状を呈するまでになったのであろう。また，上面には小さな鑿状の工具の研磨に使用したのか，幅６㎜程の溝状の彫り込みを認める。815は，平面三角形状を呈する厚さ２㎜程の鉄板である。断面形は矩形を呈し，明瞭な刃部を認めない。また，錆化が進行しており，本来的にこのような形状を呈していたのかは不詳である。816は，頭部を折り曲げたのみの鉄釘である。全長6.0cm以上，軸部幅９㎜前後で，本遺跡より出土した当該期の鉄釘の中では，大型の部類に属する。817は，長径3.8cm程の小鉄塊である。全面錆に覆われており，鉄製品となる可能性もあるが不詳。818・819は，椀形鍛冶滓である。

上記した遺物は，かなりの時期幅を有しており，本遺構の継続期間の長さを反映している可能性はあるが，その開削時期を直接示す遺物を特定することは困難である。ＳＸ09・ＳＤ57より後出することからすれば，その開削時期が14世紀中葉を大きく遡る可能性は低い。また，下層の埋没が出土した遺物より14世紀中葉から後半代に求められることから，ＳＸ09等の廃絶直後にＳＤ01が開削され，頻繁な改修は行われず下層の堆積が進行したものと推測される。そして，最終的に上層の埋没が完了したのは，15世紀後半代に下る可能性がある。

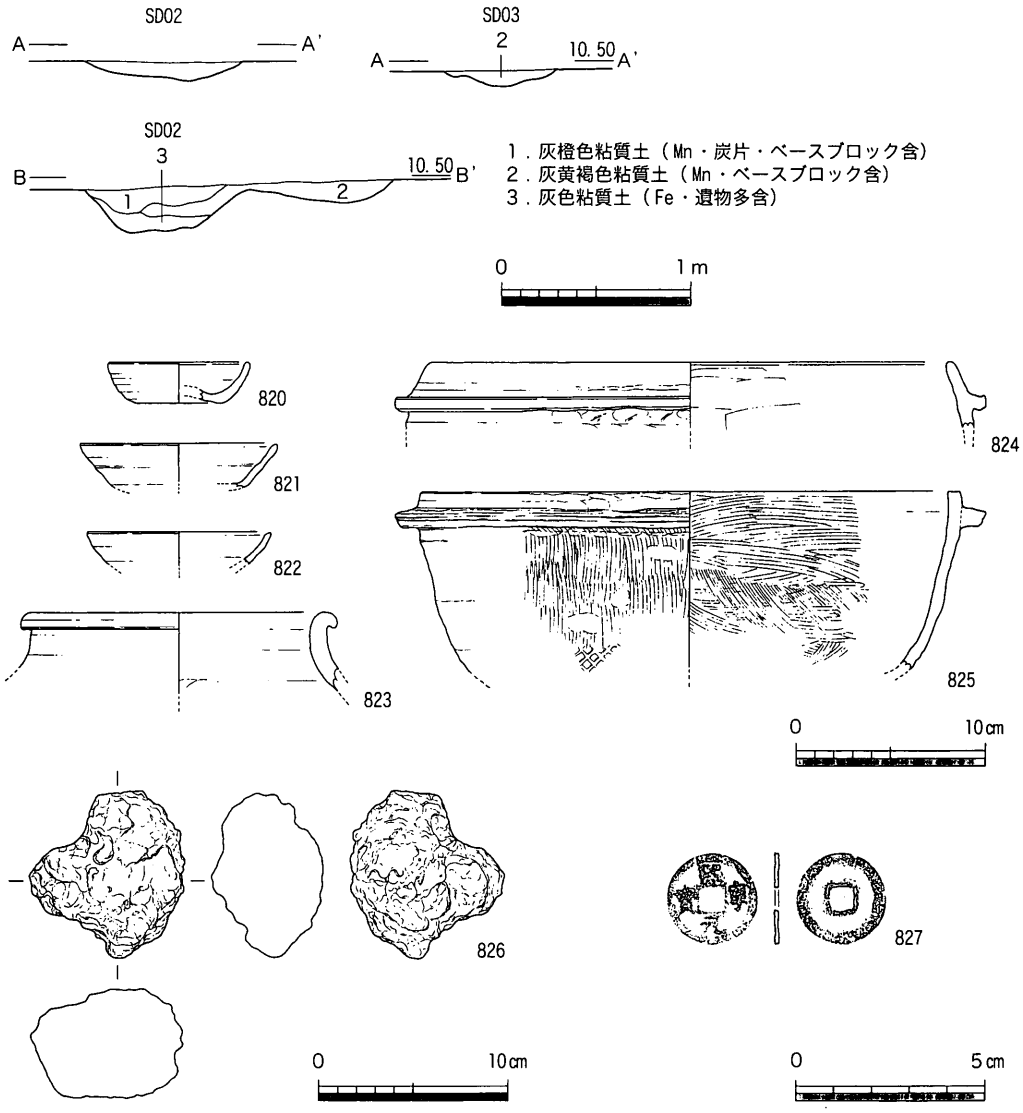
ＳＤ02・03（第151図）

Ｉ区中央Ｄ６グリットで検出した直線溝である。ＳＤ01より分岐して南へ延長するが，屈曲部を大きく予備調査時のトレンチが切り込み，埋土の充分な観察が行えなかったため，ＳＤ01との関係については不明瞭な部分が多い。底面の標高は，ＳＤ02南半部で10.30m，同北半部で10.20mを測り，底面の比高差からすれば北へ流下する。ＳＤ02南半部には，水溜状遺構ＳＸ06へ連接する小溝が取り付いており，ＳＸ06の溢出水をＳＤ01へ通水する排水溝としての性格が想定される。また同時に，屋敷地南半部を東西に分割する小区画溝としての役割も担っていたのであろう。ＳＤ02は，幅0.8～0.9m，残存深0.25m，流路方向Ｎ23.0°Ｗを，ＳＤ03は，幅0.6～0.7m，残存深0.1m，流路方向Ｎ16.5°Ｗをそれぞれ測る。断面形は，ＳＤ02は底面に平坦面を有し概ね逆台形状を呈し，ＳＤ03は皿状となる。

ＳＤ02とＳＤ03の埋土は，検出面上面での相違は不明瞭であったが，断面観察によって，



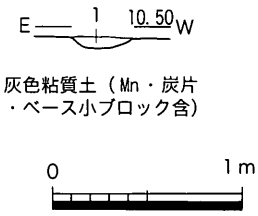
第150図　ＳＤ01・ＳＸ01出土遺物実測図６（１/２）



第151図　ＳＤ02・03断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/3・1/2）

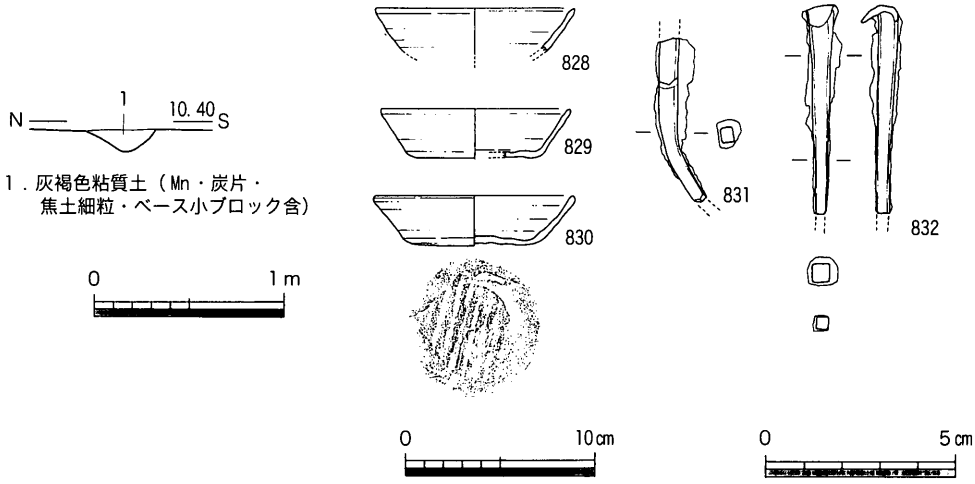
数度の改修の可能性を想定する。第151図Ｂ－Ｂ′断面を例にすれば，ＳＤ02下層（３層）は，溝北半部にのみ認められ，上位層と比較してやや多量の遺物を包含する（図版11）。おそらくＳＤ02開削後間もない頃の埋土と考えられ，溝上面付近まで堆積していることから，短期間で埋没が進行したことが想定される。西半部を中心に堆積する中層（２層）は，ＳＤ03よりＳＤ02下層上面を掘り込んで堆積する。こうした堆積状況より，ＳＤ03開削時にＳＤ02も一部改修が加えられ，一定期間両溝が併存していた可能性が想定される。なお本層埋土中には，ベース層のブロック土が混在しており，また遺物量も乏しく，ＳＤ03底

面に溝機能時の自然堆積層が認められないことからすれば，比較的短期間で人為的に埋め戻された可能性が高い。最後に中層上面より切り込んで，ＳＤ02の最終堆積層である上層（１層）が堆積する。この段階では，ＳＤ02は規模をやや縮小し，底面の高低差は大きく是正され平坦な小溝に改修されており，もはや明確な排水溝としての機能は想定しえない。おそらく当該時期本溝西側に，柵列もしくは庇を伴う大型建物ＳＢ19が設けられていた可能性を想定すれば，本溝はＳＢ19に伴う雨落溝的な性格の溝として再改修されたと考えられる。



第152図　ＳＤ04断面図（1/40）

遺物は，上記したようにＳＤ02北半部底面を中心として出土している。ＳＤ02からは，土師質土器皿・足釜・鍋，瓦質土器皿，亀山焼？甕，須恵器等の小片が若干量出土している。一方，ＳＤ03の遺物は乏しく，図示したものの他，土師質土器皿等の小片が少量出土したのみである。８点を選択して図示した。820～826はＳＤ02出土の遺物で，いずれも溝底面に堆積した灰色粘土層からの遺物である。820は，瓦質焼成の小皿。821・822は土師質焼成の皿で，いずれも焼成のやや堅緻な黄色系の小皿である。823は，備前焼の壺口縁部。口縁端部は強く外方へ折り曲げて，さらに下方へ摘み出される。端面はやや丸味を帯びるが，玉縁状を呈するまでには至らない。備前焼Ⅱ期後半代に位置付けられ，本溝に直接伴う遺物ではなかろう。824・825は土師質土器足釜。824は，内傾するやや長めの口縁部を有する形態で，口縁部直下外面には突出度の低い鍔を付す。鍔端部は，横方向の板ナデ調整により矩形に整えられており，同形態のものでは後出するものではない。825は，口縁部が直立しやや短い形態。口縁端部及び鍔端部は，横方向の板ナデもしくはハケ調整により，明確な平坦面を作る。体部内外面にはハケ調整が多用され，外底面には格子状のタタキ痕を認める。826は，椀形鍛冶滓である。上記遺物は概ね14世紀初頭を中心とした時期に位置付けられ，本溝の開削時期を当該時期に求めたい。なお，上位層からの遺物は乏しく明確な時期を特定することは困難だが，ＳＸ06の最終埋没時期が14世紀前半代で，この時期にはＳＤ02中層の改修が行われていたと考えられる。また，中層の埋め戻し後短期間で上層が再掘削され，さらにＳＸ06の上面よりＳＢ19が穿たれており，ＳＢ19と上層との有機的関係を想定するなら，上層の堆積時期は14中葉から後半代を中心とした時期に位置付けられると考える。827は，ＳＤ03より出土した北宋銭で，1068年初鋳の「熙寧元寶」である。



第153図　ＳＤ07断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４・１/２）

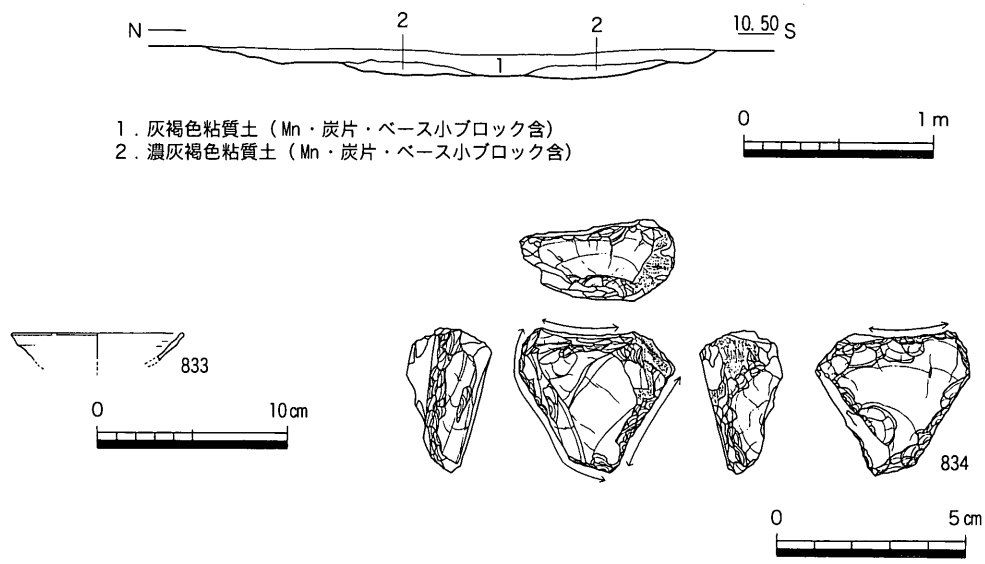
ＳＤ04（第152図）

Ｉ区中央Ｃ６グリットで検出した直線溝である。ＳＸ06南東隅より派生して直線状に南へ延び，徐々に浅くなり延長約3.6ｍを検出して途切れる。遺構上面でＳＸ06との埋土の相違はみられず，主軸の方向も合致し，ＳＸ06北側でＳＤ04の延長と考えられる溝も認められなかったことから，ＳＸ06へ雨水等を流す排水溝と考えられる。溝は，幅0.3m，残存深0.06m，流路方向Ｎ23.5°Ｗで，断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は北端部付近で10.40ｍを測る。埋土は灰色粘質土の単層であった。

遺物は，土師質土器皿，十瓶山窯系須恵質土器碗等の小片が数点出土したのみである。出土遺物より細かな時期を特定することは困難だが，ＳＸ06との併存の可能性を考慮すれば，14世紀前半代に位置付けることができよう。

ＳＤ07（第153図）

Ｉ区中央東半Ｄ６・７グリットで検出した溝状遺構である。ＳＤ01より北に分岐して，ＳＤ01の約1.5m北側をほぼ平行に緩やかな円弧を描いて東西流し，西端はクランク状に屈曲して，ＳＫ17に東接して途切れる。延長約12ｍを検出した。なお，切り合い関係より，ＳＤ18より先行し，ＳＤ57より後出する。溝は，幅0.3～0.4m，残存深0.1m前後で，断面形は皿状ないしは逆台形状を呈する。緩やかな円弧を描いて配されるため，明確な流路方向は不詳だが，東半部の直線状部分で概ねＮ70°Ｅを測る。底面の標高は，西端付近で10.25m前後，東端のＳＤ01への合流部で10.20ｍを測り，僅かに東へ傾斜する。位置関係からもＳＤ01へ流下していた可能性が高い。埋土は，灰褐色粘質土の単層で，ＳＤ01上層



第154図　ＳＤ08断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/2）

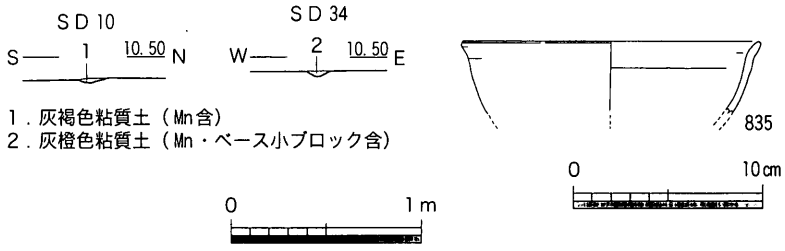
に近似する。埋土中には，ベース層のブロック土が混在するが，人為的な埋め戻しの可能性は低い。

遺物は，図示した５点の他，土師質土器皿・坏・足釜等の小片が少量出土したのみである。828～830は，土師質土器坏。828は灰黄色を呈するやや焼成の堅緻な坏で，口縁端部外面は直立する小端面をなす。830は，二次的被熱を蒙り，内外面には煤の付着をみる。外底面は，回転ヘラ切り後粗い簀の子状の圧痕を明瞭に認める。831は，幅５㎜程の角釘。頭部と先端を欠損する。832は，頭部を折り曲げたのみの角釘である。断面形状より831とほぼ同程度の大きさの釘となろう。上記した遺物及び他遺構との重複関係等より，概ね14世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＤ08（第154図）

Ｉ区中央西半部Ｄ５・６グリットで検出した区画溝である。ＳＸ01より西へ派生する溝の中では最も規模が大きく，上述したＳＤ01に連続する一連の区画溝となる。ＳＸ01よりＮ38.4°Ｅ前後の流路方向をとって約7.5m程南西流した後，鈍く屈曲してＮ59.9°Ｅ前後に流路方向を変更して調査区外へ抜ける。総延長約13.0mを検出した。なお，西端部は南北長2.5mと大きく幅を増すが，それが他遺構との重複によるものか，流路方向がクランク状に屈曲するためか等，その要因については検出部位が乏しく断定はできなかった。溝幅は，ＳＸ01との合流部付近で2.8m，西端付近で0.5mと，西に向かい徐々に減少する。これは，ＳＸ01との合流部付近で溝上半部が雨水や他遺構との重複等により擂鉢状に浸食

され，幅が大きく拡大したことに起因しており，底部で確認された溝本来の形状から，溝最大幅は1.3m前後に復元される。



第155図　ＳＤ10・34断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

残存深は0.1～0.2m程であり，上面の削平を考慮しても，溝幅に比して著しく浅い点はＳＤ01と共通する。断面形は，浅い逆台形状ないしは皿状を呈する。溝底面の標高は，ＳＸ01との合流部付近で10.25m前後，西端部付近で10.34m前後と緩やかに北東方向に傾斜しており，ＳＸ01を介してＳＤ01に流入していたものと考えられる。

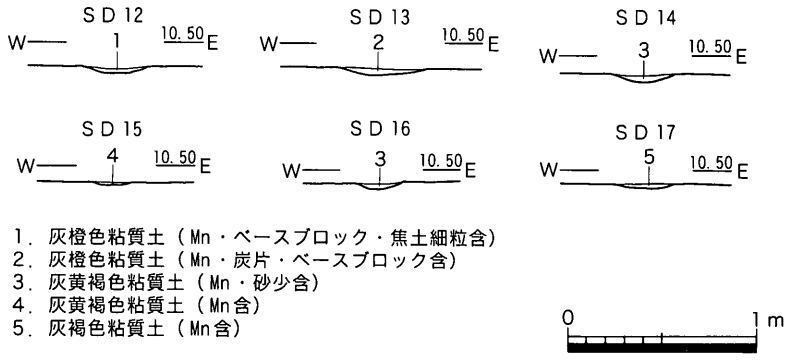
埋土は２層に細分された。下層は，溝底面に堆積した濃灰褐色粘質土である。ベース層のブロック土を混入するが，少量でもあり人為的な埋め戻しに伴うものではないと判断された。上層は，灰褐色粘質土で，一部下層を掘り込んで溝底面に達していることから，溝改修後の堆積層と考えられ，また溝上面を広く覆って堆積しており，溝機能廃絶後の自然堆積層をも含むとみられる。土色はやや異なるが，堆積状況から概ね前記ＳＤ01上・下層にそれぞれ対応するものと考えられる。

遺物は，土師質土器小皿ａ類・坏・足釜・鍋ｃ類・擂鉢，瓦質土器甕，須恵器片等が若干量出土している。内２点を選んで図示した。833は，橙色系の土師質土器皿の口縁部小片である。やや焼成の堅緻な皿で，口縁部はやや内湾気味に開き，端部は丸く収める。法量より小皿ｃ類になろう。834は，やや質の劣るサヌカイト製の火打石である。正面三角形状を呈し，周縁には顕著な敲打痕を認める。長軸４cm程とよく使い込まれている。上記出土遺物は，いずれも小片化が進展しており，細かな時期を特定することは困難である。ＳＤ01との併存から，14世紀後半代を中心とした時期に位置付けておきたい。

ＳＤ10・34（第155図）

Ｉ区中央西端Ｄ５グリットで検出された鍵の手状を呈する小溝である。ＳＸ01より西に派生し，直角に南へ折れて途切れる。ＳＸ01とは埋土が近似しており，また遺構の性格からも明確な切り合い関係は捉えられず，したがって区画溝ＳＤ01等との関係も不詳である。形状や位置関係より，前記ＳＢ18に伴う雨落ち溝もしくは区画溝となる可能性が高いが，断定するまでには至らなかった。東西溝部分をＳＤ10，南北溝部分をＳＤ34として以下報

告する。なお，両溝の合流部は北西側に幅0.9m程広がり，平面矩形の土坑状を呈するが，この性格については確認できていない。



第156図　SD12～17断面図（1/40）

SD10は，幅0.15m前後，残存深0.03m，流路方向N54.3°E，断面形は浅い皿状を呈する小溝である。延長約5.5mを検出した。底面の標高は，10.36m前後で概ね一定する。埋土は灰褐色粘質土の単層であった。

SD34は，SD10西端より直に南へ折れて延長する。幅0.13m前後，残存深0.03m，流路方向N32.2°W，断面形は浅い皿状を呈する小溝である。SD10とは内角87°前後で，概ね直交する。延長約5.2mを検出した。底面の標高は，10.40m前後で概ね一定し，SD10とは数cm程度の高低差を認めることから，本溝よりSD10へ流下していた可能性を想定する。埋土は，灰橙色粘質土の単層。色調がややSD10とは異なるが，明確な切り合い関係は認められず同時併存していたものとみてよい。

遺物は，図示した以外にSD34より土師質土器等の小片が数点出土したのみである。835は，SD10より出土した龍泉窯系青磁碗である。口縁部は小さく外反して開き，端部は丸く収める。内面体部上端に細い1条の圏線を認める以外，無文である。焼成はやや粗悪で，一部磁胎が明橙色を呈する。碗Ⅳ類に属し，14世紀以降多出するタイプである。上記した遺物から細かな時期を特定することは困難だが，概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと考える。

SD12・13・14・15・16・17（第156図）

Ⅰ区北部D6グリット周辺で検出した，SX01及びSD18より北に派生する小溝群を一括する。溝は，幅0.22～0.48m，残存深0.05m前後と規模が近似しており，類似した性格を有すると考える。しかし，流路方向は大きく3群に大別され，SD17がN17.5°Wに，SD12・14～16がN32.0°W前後に，SD13がN50.7°Wにそれぞれ配され，おそらく時期差を反映しているものと考える。底面の標高は10.34～10.40mを測り，僅かに南に傾斜

することから，ＳＸ01等に向けて流下・排水していたものと考える。埋土は，灰色系粘質土の単層で，色調により各溝は細分されるが大差は認めない。遺構上面では，ＳＸ01等の埋土と識別不能で切り合い関係は認められなかった。なお，ＳＤ12・13にはベース層のブロック土の混入を認めることから，人為的な埋め戻しの可能性が想定される。規模・形状により，建物に付随する雨落溝としての性格が想定できるが，本溝群に付随する建物遺構については復元できていない。

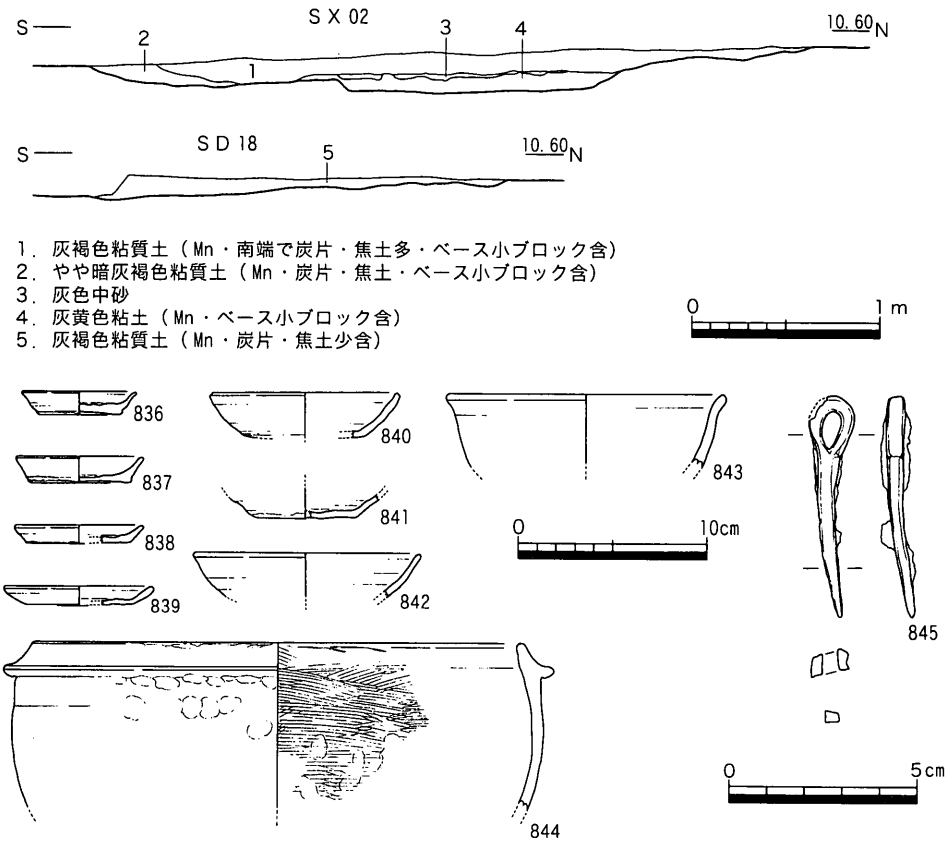
遺物は，ＳＤ12より土師質土器皿・足釜・鍋，十瓶山窯系須恵質土器碗等の小片が，ＳＤ15より備前焼甕体部小片が，ＳＤ16・17より器種不詳の土師質土器細片が，それぞれ極少量出土したに過ぎない。出土遺物より時期を特定することは困難だが，概ね14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＤ18・ＳＸ02（第157図）

Ｉ区中央北半Ｄ６・７グリットで検出した溝状を呈する落ち込みである。ＳＸ01北東隅部より，緩やかに弧状を呈して東に延び，東端部はやや不整形に幅を広げて調査区内で途切れる。溝状部をＳＤ18，ＳＤ18東端の落ち込み部をＳＸ02とそれぞれ呼称する。重複関係より，ＳＫ17，ＳＤ07・57より後出する。

ＳＤ18は，幅1.0～2.3m，残存深は0.1～0.15mで，北壁部に幅0.4～1.0m程の浅いテラスを部分的に付して，断面形は概ね皿状に落ち込む。底面の標高は，西端部で10.35m前後，東端部で10.30m前後と僅かに東に傾斜し，ＳＸ01に向けて幅・深さを増す。流路方向は，緩やかな弧状を呈して，概ねＳＤ01と平行に配される。埋土は，灰褐色系粘質土が堆積し，部分的に２層に細分された。焦土やベース層のブロック土を含み，人為的に埋め戻された可能性が高い。本遺構に属する遺物の大半は，本層中より出土したものである。

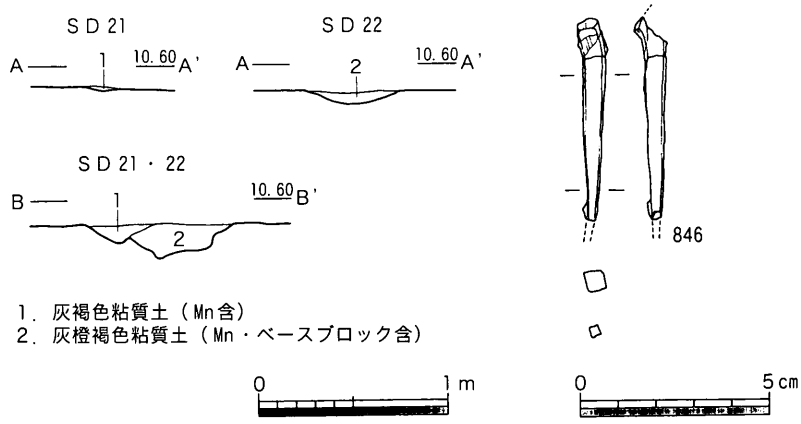
ＳＸ02は，南北3.85m前後，東西3.0m前後の規模を有する落ち込みである。底面は，ＳＤ18より徐々に深く掘り込まれ，最深部の標高は10.25m前後に達する。断面形は南北にそれぞれ幅0.9～1.3m程のテラス部を付して２段に掘り込まれ，底面は概ね平坦である。埋土は，４層に細分され，掘り方断面形に概ね合致して，テラス部より上位にはＳＤ18に連続する上層埋土（１～３層）が，下段の掘り込み部には下層（４層）が各々堆積する。上層最下位の灰色中砂の薄層は，微弱な水流により堆積したことが推測され，より東には流下せず，本遺構部分で溜まり状を呈していたのであろう。下層には，粘性の強い粘土層が堆積し，水溜まり状を呈していた可能性が考えられる。なお，ＳＤ18部分では，滞水状況を呈した土層の堆積は認められない。



第157図　ＳＤ18・ＳＸ02断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/2）

遺物は，上記したように上層を中心に出土している。図示したものの他，土師質土器鍋，備前焼甕，十瓶山窯系須恵器甕等の小片が若干量出土している。10点を選んで図示した。837・843がＳＤ18，それ以外はＳＸ02よりそれぞれ出土した。836～839は，土師質土器小皿である。836・839は橙色系，837・838は灰色ないしは灰黄色系の色調を呈する。836～838は小皿ａ類，839は小皿ｂ類にそれぞれ分類される。836の外底面は，回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整を加える。839のみ底部外周に明瞭な稜線を有さず，鈍く屈曲して口縁部が内湾気味に開く。840・842は土師質土器皿，841は同底部になると思われるが，口縁部を欠損しており不明。840の口縁端部は外傾する小端面をなし，矩形に収める。843は，龍泉窯系青磁碗。口縁部は外反して開き，端部を丸く収める。内外面無文で，大きな貫入が顕著である。碗Ⅳ類に属し，14世紀代以降多出する形態である。844は，土師質土器足釜ｃ類。内面には粗い横ハケ調整が多用されるが，外面はハケ調整をナデにより入念に消される。845は，長さ5.9cm，幅５㎜程の角釘状の頭部を，径1.2cm程の環状に丸めた，止め金具と

考えられる鉄製品である。遺物量が僅少ではあるが，本遺構は上記遺物より14世紀中葉から後半代に位置付けられると考える。



SD21・22（第158図）

Ⅰ区中央東端D　　**第158図　SD21・22断面図（1/40），出土遺物実測図（1/2）**

7グリットで検出した小溝である。南半部は重複し，切り合い関係よりSD21が後出する。

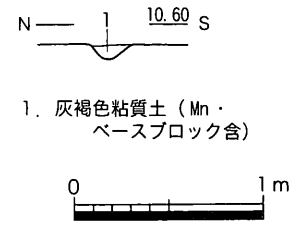
SD21は，SD22の東側に位置する小溝である。クランク状に屈曲して南北に検出され，明確な流下方向を示さない。南北両端は調査区内で途切れ，延長約3.5mを検出した。溝は，幅0.2～0.3m，残存深0.1mで，断面形は浅い皿状を呈する。位置関係から，建物SB10に付随する雨落溝の性格が考えられるが，断定するまでには至らない。底面の標高は，北半部で10.45m，南半部で10.37mとなり，底面の比高差からすれば南へ流下していた可能性がある。

遺物は，土師質土器皿等の小片が3点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが，後述するようにSD22からの改修の可能性が妥当であるなら，SD22と近接した時期に位置付けられよう。

SD22は，やや幅広の南北溝である。本溝も南半部はやや西に振るが，北半部は概ね直線状に配される。北端は試掘調査時のトレンチによって切られ，延長方向は不詳だが，SD01南岸の形状より，ほぼSD01に取り付くとみてよい。延長約4.0mを検出した。溝は，幅0.5～0.6m，残存深は0.2m程で，断面形は皿状ないしは逆台形状を呈する。底面の標高は，北半部で10.40m，南半部で10.30mとなり，本溝も南流していた可能性があるが明確ではない。SD01への接続を考慮すれば，SD01へ向けて北流していた妥当性がより高い。埋土は灰橙褐色粘質土の単層だが，ベース層のブロック土が含まれることから，人為的に埋め戻された可能性がある。その場合，ほぼ近接して検出され流路方向を等しくするSD21への付け替えの可能性も想定できる。

遺物は，土師質土器皿，東播系須恵器捏鉢，器種不詳の須恵器等の小片や鉄釘が少量出

土している。１点のみ図示した。846は，頭部を折り曲げたのみの鉄釘であろう。頭部の一部と先端部を欠く。一辺５㎜角の断面矩形を呈する角釘である。出土遺物より，概ね14世紀代に位置付けられると考えるが，細かな時期を特定することは困難である。



第159図　ＳＤ24断面図（１/40）

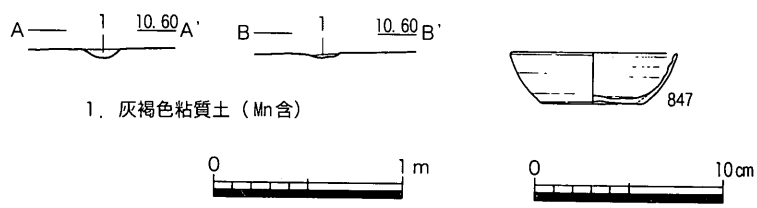
ＳＤ24（第159図）

Ｉ区中央東端Ｄ７グリットに位置する。後述するＳＤ25の北東側で，ＳＤ25とほぼ同方向に平面Ｌ字状に検出された小溝である。平面プランより建物遺構の南西隅部に伴う，いわゆる雨落溝となる可能性が高いが，溝北東部で明確な建物遺構は復元できず，性格を特定するまでには至らなかった。溝は，幅0.2m，残存深は0.08mと極めて浅く，断面形は皿状を呈する。底面の標高は10.42mであったが，明確な流下方向は不明である。埋土は灰褐色粘質土の単層。埋土中にベース層のブロック土が含まれることから，人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。その場合，近接してほぼ同位置に検出されたＳＤ25への付け替えの可能性も想定できるが確証は得られていない。

遺物は，土師質土器皿・坏等の小片が数点出土したに過ぎない。出土遺物より概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられるが，細かな時期を特定することは困難である。

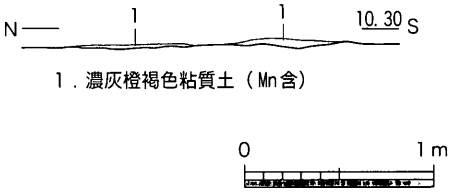
ＳＤ25（第160図）

上記ＳＤ24に南西方向に近接して検出した。平面Ｌ字状を呈する小溝で，本溝も雨落溝となる可能性が考えられたが，明確な建物遺構との関係は不詳である。また，ほぼ同位置で検出されたＳＤ24との関係も不明である。上面より柱穴数基が掘り込まれる。溝は，幅0.15～0.2m，残存深は0.05mと極めて浅く，断面形は皿状を呈する。南北溝は，直線状に配され流路方向Ｎ16.5°Ｗで延長約3.0mを検出した。東西溝は，東端付近でややクランク状に屈曲し，総延長約5.2mを検出した。西半の直線部分で流路方向Ｎ76.5°Ｅを測り，南北溝とは内角93.0°でほぼ直交する。底面の標高は10.45mを前後し，数cmの差で東西溝が僅かに低く，おそらくは段丘崖方向に流下，排水していたものと考えられる。埋土は，灰茶褐色粘質土の単層であった。



第160図　ＳＤ25断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

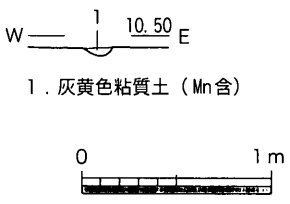
遺物は，土師質土器皿等の小片が数点出土したのみである。１点のみ図化した。847は，東西溝西半部で出土した橙色系の土師質土器皿である。器壁は薄くシャープに仕上げられており，口縁部内面には強い回転ナデによるロクロ目が顕著にみられる。外底面は，回転ヘラ切り後ナデ調整を加える。



第161図　ＳＤ26断面図（１/40）

ＳＤ26（第161図）

Ｉ区南東部Ｃ７グリットで検出した東西溝である。東端は調査区外へ延長し，西端は延長約7.5mを確認して途切れる。溝は，幅1.3～1.9mと，屋敷地内の溝の中では幅広の部類に属する。しかし，残存深は僅かに数cmを残すのみで，上面は顕著な削平を蒙っている可能性が高い。流路方向Ｎ69.6°Ｅ，底面の標高10.20m前後で，僅かに東に傾斜し，ＳＤ01同様段丘崖下に排水する目的で開削されたのであろう。なお，本遺構周辺には屋敷地に伴う他の遺構の分布が疎らで，遺構面上面の削平を考慮しても，なお南へ屋敷地が延長していたとは想定し難い。従って，溝の規模や位置関係より，本溝に屋敷地の南限を画する区画溝の性格を想定したい。



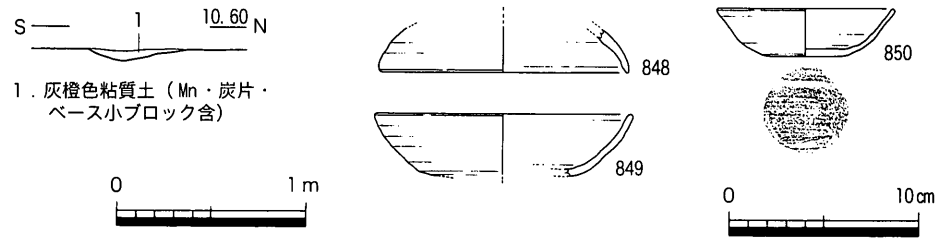
第162図　ＳＤ28断面図（１/40）

遺物は，遺構の残存状況を反映して，僅かに器種不詳の土師器と須恵器の小片が少量出土したに限られる。出土遺物より，本溝の細かな時期を特定することは困難だが，上記した性格から，屋敷の経営期間を溝の時期として考えておく。

ＳＤ28（第162図）

Ｉ区中央西端Ｃ６グリットで検出した南北溝である。南北両端は調査区内で途切れ，延長僅かに約3.7mを検出したにとどまる。幅0.15m前後，残存深0.05m前後で，断面形は浅い皿状を呈する小溝である。中位でやや屈曲するが，概ね流路方向Ｎ19.5°Ｗに配される。底面の標高は，10.40m前後で一定する。平・断面形状や位置関係より，建物遺構に付随する雨落ち溝の可能性が高い。

遺物は，土師質土器皿と器種不詳の須恵器片等が数点出土したのみである。出土遺物より細かな時期を特定することは困難であり，上記遺構の形状や層位的な位置関係より，概ね14世紀代に位置付けられると考えられるに過ぎない。



第163図　ＳＤ29断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

ＳＤ29（第163図）

Ｉ区南西部Ｃ６グリットで検出した東西溝である。東端は，土坑状にやや膨らんで幅広となり途切れる。東端の一部上面より，ＳＫ06が穿たれる。西端は，緩やかにくの字状に屈曲して約1.7m程東に延長し途切れる。東西直線溝部分で延長約6.0mを検出した。西端屈曲部以南は，東西溝部分と内角36.5°で斜交しており，区画溝としてはやや不自然な配置をとる。前記ＳＤ28と本溝東西溝部分とは，ほぼ直交して配されており，この２溝でＬ字状の区画溝ないしは雨落ち溝を想定すべきかもしれない。東西溝部分で，幅0.2～0.6m，残存深は0.06m前後と浅く，断面形は皿状を呈する。流路方向は，Ｎ70.5°Ｅに配される。底面の標高は，10.42m前後で一定し，明確な流下方向は不明である。埋土は単層で，ベース層のブロック土を混在するが，人為的な埋め戻しの有無については不詳であった。

遺物は，土師質土器皿・鍋・擂鉢等の小片が少量出土したに過ぎない。３点を選んで図示した。848は，須恵器の小片であり，坏蓋として図化したが坏身となる可能性も残る。ＴＫ217型式期前後に位置付けられ，下位層からの混入とみられる。849は，十瓶山窯系須恵質土器坏である。小片のため，復元した口径にはやや難がある。内底面には，回転ナデ調整の後放射状のナデ調整が施される。850は，土師質土器皿。外底面は，回転ヘラ切り調整後方向の異なる２方向の板状の圧痕が認められる。以上の出土遺物より，先行する時期のものを含むが，概ね14世紀代に位置付けられると考える。

ＳＤ30（第164図）

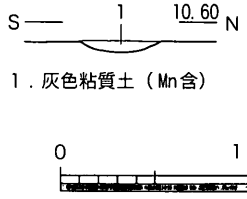
Ｉ区中央西端Ｃ５・６グリットで検出した東西溝である。西端は調査区外に延長し，東端は延長約6.1mを検出して途切れる。重複関係より，ＳＤ31より先行する。幅0.4m前後，残存深0.05mで，断面形は浅い皿状を呈する。概ね直線状に配され，流路方向Ｎ55.5°Ｅを測る。底面の標高は，10.45m前後で一定し，明確な流下方向は不詳である。埋土は，灰色粘質土の単層であった。

遺物は，土師質土器皿・足釜，十瓶山窯系須恵質土器坏？等の小片が少量出土したのみ

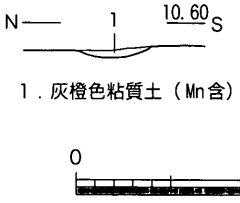
である。出土遺物より時期を特定することは困難だが，上記遺構の形状や層位的な位置関係より，概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＤ31（第165図）

Ｉ区南半西端Ｃ～Ｄ６グリット周辺において検出された溝状遺構である。重複関係より，上記ＳＤ30より後出する。ＳＸ08南西隅より派生し，約1.7m程南延した後概ね直角に折れて，西に約7.4m延長して途切れる。ＳＤ10･34と共に，Ｄ５グリット周辺を矩形に囲む区画溝となる可能性を指摘しておきたい。東西溝は，幅0.2～0.4m，残存深は0.05m前後と浅く，断面形は皿状を呈する。流路方向は，やや北に湾曲するが概ねＮ59.0°Ｅに配される。底面の標高は，10.41m前後で僅かに西に傾斜するが，明確な流下方向を示すまでには至らない。埋土は単層である。



第164図　ＳＤ30断面図
(1/40)



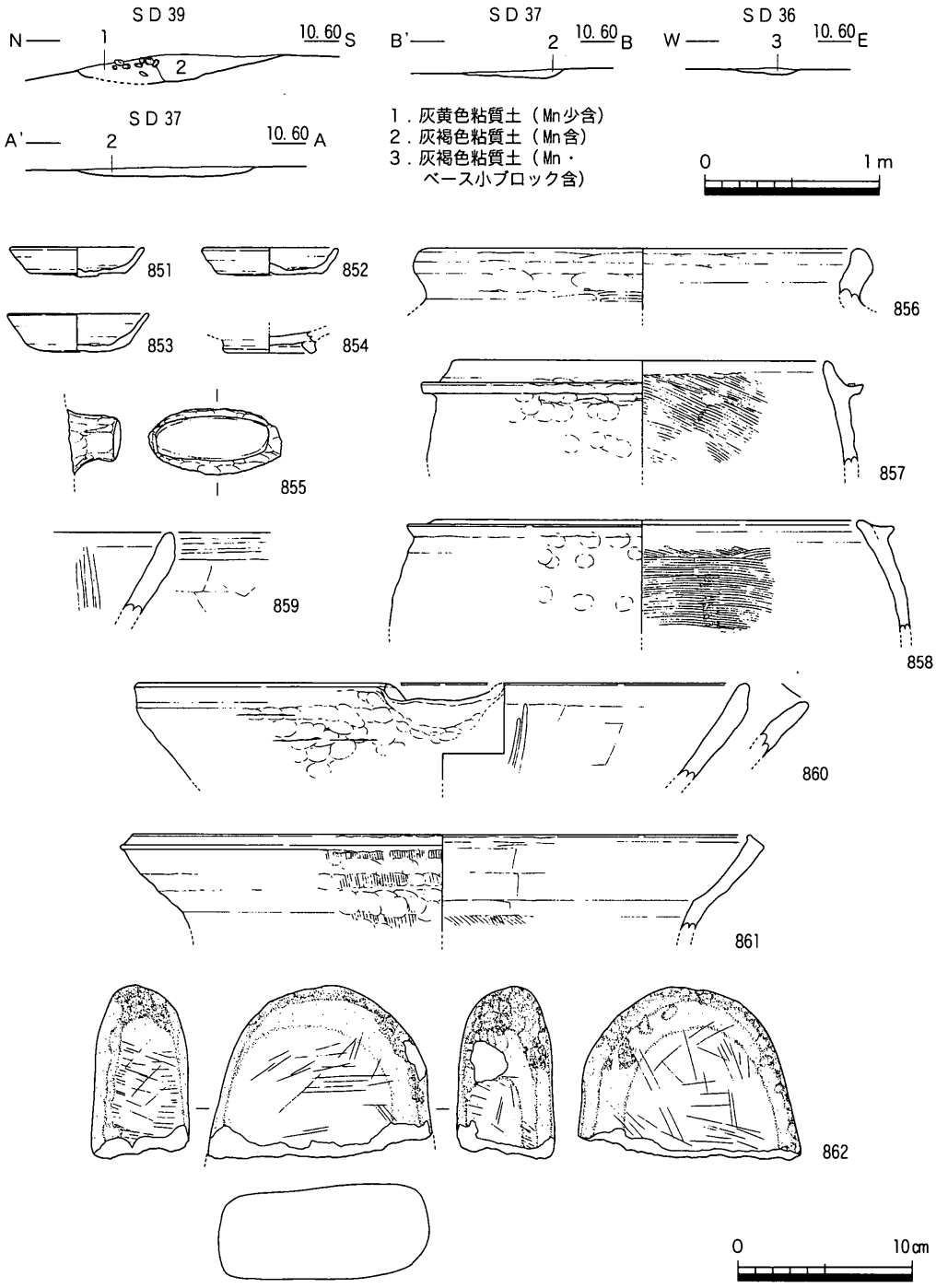
第165図　ＳＤ31断面図
(1/40)

遺物は，土師質土器皿等の小片が数点出土したのみである。出土遺物より，細かな時期を特定することは困難だが，上記遺構の重複関係より14世紀中葉から後半を前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＤ36・37・39（第166・167図）

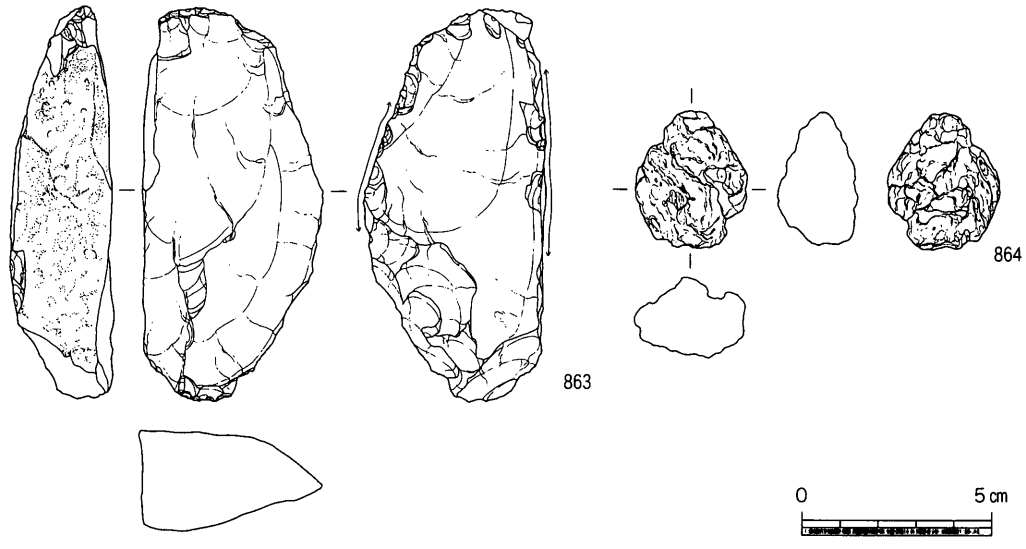
Ｉ区北東部Ｄ５グリットで検出した，平面逆Ｌ字状を呈する溝状遺構群である。北側東西溝部分をＳＤ39，南北溝部分をＳＤ37，ＳＤ37より南西方向に派生した小溝をＳＤ36，ＳＤ39の北側で爪状に西に突出する小溝をＳＤ40とそれぞれ呼称する。

ＳＤ39は，幅1.2m，残存深は0.18mと浅く，断面形は皿状を呈する。南肩はテラス状を呈して緩やかに掘り込まれるが，これは溝機能時の肩部の崩落・流出に伴うものと考えられる。本来的な溝幅は0.4m程度と推測され，後述するＳＤ36・37と大きな格差を認めない。流路方向Ｎ69.0°Ｅで，西端は調査区外へ延び，延長約8.0mを検出した。底面の標高は，10.34～10.40mでやや西に傾斜し，僅かな底面の高低差を評価すれば西へ流下する。埋土は，２層に分層された。下層は，灰黄色粘土で多量の拳大から幼児頭大の石礫や遺物を含む。石礫は，溝底よりやや浮いて，ＳＤ39のほぼ全域より出土しており，一定程度溝の埋没が進行した段階で，一気に投棄され埋め戻された可能性が高い。上層は，灰褐色粘質土で下層から遊離した僅かな石礫を含み，本溝よりＳＤ37にかけて連続して検出さ



第166図　ＳＤ36・37・39断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

れた。調査時にＳＤ36の埋土との比較が十分に行えていないが，当初ＳＤ39下層からＳＤ36のＬ字溝として開削された後，一旦人為的な埋め戻しを経て，ほぼ同位置にＳＤ39上層



第167図　ＳＤ39・40出土遺物実測図（1/2）

からＳＤ37のＬ字溝へと改修された可能性を考えている。

ＳＤ36は，幅0.3～0.4m，残存深0.05m程度の小溝である。ＳＤ37からの分岐部以南で，延長約3.5mを検出した。底面の標高は10.40m前後で，僅かに南へ傾斜する。南への延長部にＳＤ12が配され，本来的にはＳＸ01へ流下していたものと考えられるが，充分な確証を得られていないため，可能性を指摘するにとどめる。流路方向N33.4°Wで，ＳＤ39とは内角102.4°で概ね直交する。埋土は灰褐色粘質土の単層で，ベース層のブロック土を含む。人為的に埋め戻された可能性については上記した。

ＳＤ37は，北半部と南半部でやや流路方向と規模が異なり，ＳＤ36との分岐部でやや南東方向に屈曲して途切れる。屈曲部以北では，改修前後の溝の重複や，肩部の崩落により溝幅を増しているものと推測される。屈曲部以南で幅0.5m前後，残存深は0.05m程度と浅く，断面形は皿状を呈する。溝底の標高は10.40m前後で，僅かに南に傾斜する。南延長部にＳＤ13が配され，ＳＤ36同様ＳＸ01へ流下していた可能性が高い。流路方向は，N50.7°Wで，他の遺構の軸方向と大きく相違する。

ＳＤ40は，ＳＤ39東端北縁部より西に派生する小溝である。主軸方向は，ほぼ東西方向に配される。延長約2.0m程を検出したにとどまり，性格は不詳である。

遺物は，ＳＤ39下層の石礫中より出土したものが大半を占める。ＳＤ36からは，土師質土器皿等の小片が数点と，ＳＤ37からは，土師質土器皿・足釜等の小片が数点それぞれ出

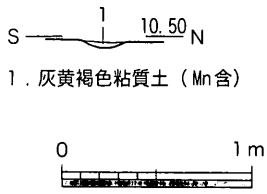
土したのみである。図示した13点の遺物は，863を除いてすべてＳＤ39下層出土のものである。ＳＤ39下層からは図示した以外に，十瓶山窯系もしくは亀山焼の甕体部小片，備前焼甕体部片，古代に遡る土師器甕，須恵器小片等が，コンテナ半箱程度出土している。851～853は，土師質土器皿である。いずれも橙色系の小皿で，外底面は回転ヘラ切り後板状の圧痕を認める。853は，前２者よりやや器高が深くなる。854は，十瓶山窯系の須恵質土器碗底部片である。外底面には，直立気味の断面三角形状の高台を付す。内面には，辛うじて不整方向のミガキ調整を認める。13世紀後半代に位置付けられ，本遺構に直接伴うものではない。855は，土師質土器の把手である。正面長円形を呈し，断面形は図示した下面がやや内湾し，正面から下面にかけて煤が付着することから，器体側面に水平に貼付されていたものと考えられる。器種は不詳。本例１点のみの出土であることから，使用頻度の高い器種に伴うものではなく，また何らかの煮沸具に取り付けられていたものと考える。856は，土師質土器甕。口縁部はやや内湾気味に開き，外面側に粘土紐を貼付して玉縁状に肥厚する。857・858は，土師質土器足釜。857は足釜ｂ類，858は足釜ｄ類に分類される。859・860は，土師質土器擂鉢である。いずれも器表面に炭素を吸着させるが，焼成は軟質で瓦質を呈するまでには至らない。口縁部はやや外傾気味に上方へ摘み上げられ，端面下端の稜は鈍い。内面には１単位２～３条の卸目が，やや疎らに施される。なお，860は口縁部の一端に片口を有する。861は，土師質土器鍋である。鍋ｂ類に属し，口縁端部は内上方への摘み上げが顕著。862は，砂岩円礫を使用した砥石である。中央で半截しているが，表裏面と側面の４面に使用がみられる。破断面を中心に，二次的被熱を蒙り黒色化している。863は，質の劣るサヌカイト製の火打石である。側面に自然面を残し，片手に持てる程度の粗割材を素材とする。稜線は使用による潰れが著しい。864は，ＳＤ40より出土した鉄滓である。長軸3.5cm，重量22.28ｇ程の小形の鍛冶滓であろう。上記した遺物より，ＳＤ39下層は14世紀中葉を前後する時期に埋め戻されたと考えられる。また，上層への改修は，遺物が乏しいため不詳ながら，前記ＳＤ01との関連などから，15世紀代にかけて行われた可能性が想定される。

ＳＤ38（第168図）

Ｉ区北東部Ｄ５グリットで検出した，東西方向の直線溝である。西端は調査区外へ延び，検出長約5.8mを測る。前記ＳＤ39の南約1.5mの位置をほぼ平行に配され，ＳＤ37の西0.5mを残して途切れることから，両溝と有機的な関連が窺える。溝の規模からすれば，建物遺構に伴う雨落溝としての性格が求められるが，関連する建物遺構は検出されていない。

溝は，幅0.25m，残存深は数cmと浅く，断面形は皿状を呈する。底面の標高は，10.45m前後で，数cm程度西へ傾斜する。流路方向はN67.0° E，埋土は灰黄褐色粘質土の単層であった。

遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難である。上記したＳＤ39等との関係から，同溝機能時の時期幅の中には位置付けられると考える。



第168図　ＳＤ38断面図
（1/40）

ＳＤ41・42・43・44・45・46（第169・170図）

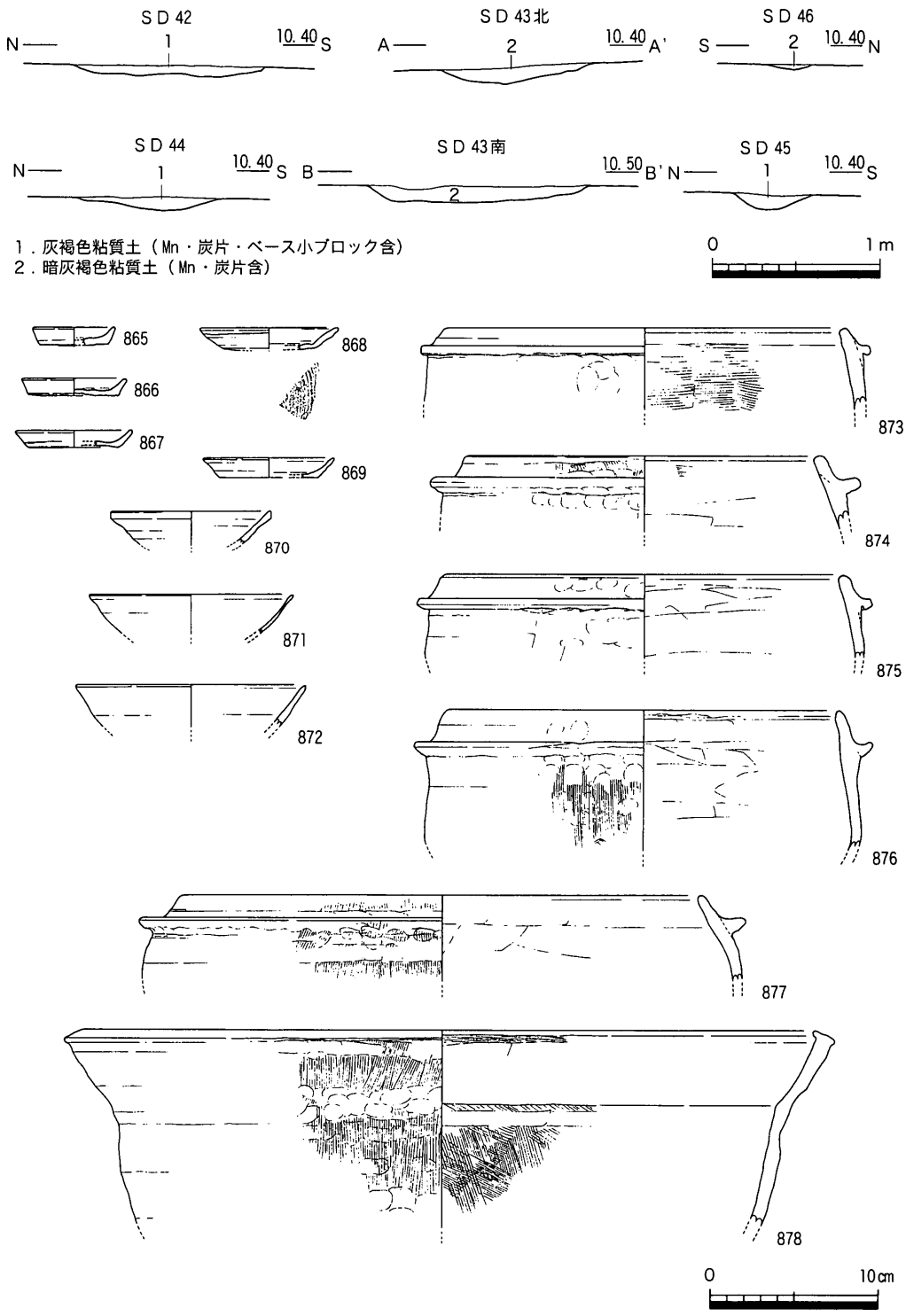
Ⅰ区北端部Ｅ５グリットで検出した溝状遺構群である。やや蛇行して南北方向に配されたＳＤ43と，ＳＤ43に概ね直交して東西に配されたＳＤ41他の溝群を一括する。調査時での遺構上面の観察では，これら溝群に明確な切り合い関係は認められず，同時併存していたものと判断し調査を行った。屋敷地内部を区分する区画溝としての機能を想定するが，調査区隅に偏在して検出されたため，性格を特定するまでには至らなかった。

ＳＤ43は，幅0.9～1.3m，残存深0.13m前後の浅い溝で，断面形は皿状を呈する。やや蛇行して配されるため，明確な流路方向を示さないが，概ねN12° Wに主軸をとる。南端は調査区内で途切れ，北端部は東に折れてＳＤ46に接続する。延長約12.9mを検出した。底面の標高は，北端部で10.17m，南端部で10.38mをそれぞれ測り，高低差から北に流下する。埋土は，暗灰褐色粘質土の単層であった。

ＳＤ41は，ＳＤ43南半部より西に分岐する溝で，西端は調査区内で途切れる。延長約7.3mを検出した。溝は，幅0.5～1.3m，残存深は僅かに0.05mと浅く，断面形は皿状を呈する。底面の標高は，西端で10.26m，東端ＳＤ43との合流部で10.15mを測り，高低差よりＳＤ43に流下していたものと考えられる。流路方向は，N75.5° Eである。埋土は単層で，ＳＤ43に近似する。

ＳＤ42は，ＳＤ43中央部より西に分岐する直線溝で，ＳＤ41北側を概ね平行して西進する。西端は調査区外へ延び，延長約9.5mを検出した。溝は，幅0.6～1.5m，残存深は僅かに0.05mと浅く，断面形は皿状を呈する。底面の標高は，ＳＤ41同様に東端ＳＤ43との合流部で10.15m，西端部で10.27mを測り，ＳＤ43に流下していたものと考えられる。流路方向は，N70.5° Eである。埋土は，灰褐色粘質土の単層で，埋土中にベース層のブロック土を含む。

ＳＤ44は，ＳＤ43北部を東へ分岐する小溝である。ＳＤ43よりN65.2° Eの方向へ約2.4m程延び，N30.8° Eの方向へ流路方向を変更する。延長約3.8mを検出したに過ぎない。



第169図　ＳＤ42～46断面図（１/40），ＳＤ41～44出土遺物実測図（１/４）

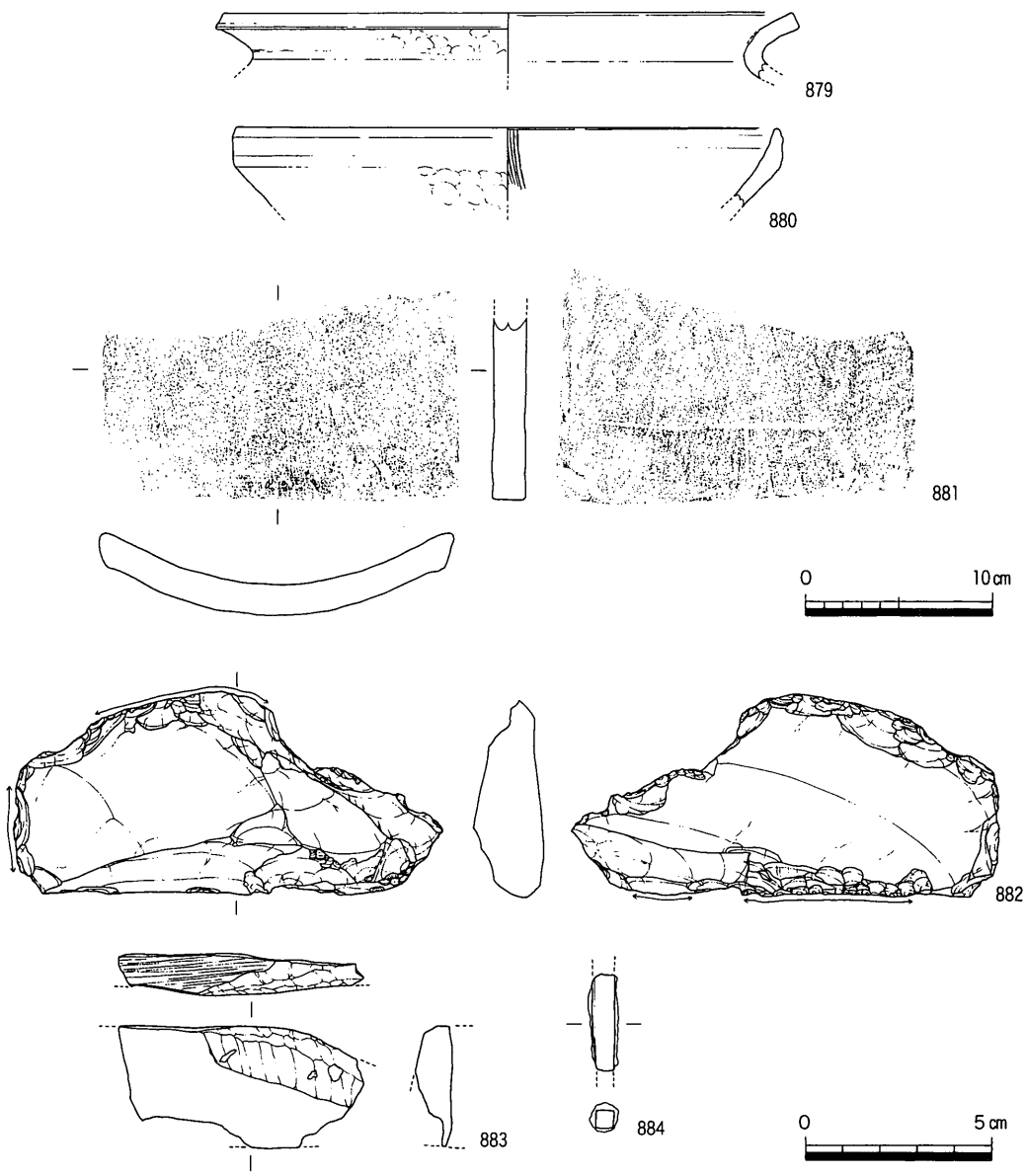
溝は，幅0.6～0.8m，残存深は0.07mと浅く，断面形は皿状を呈する。流路方向はN65.2°E。埋土は単層で，ＳＤ42に近似する。

ＳＤ45は，ＳＤ43より東に分岐する小溝である。流路方向や平面形状はＳＤ44に近似する。東端は調査区外へ延び，延長約3.0m程を検出しえたに過ぎない。溝は，幅0.5～0.6m，残存深は0.1m程で，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で，ＳＤ42に近似する。

ＳＤ46は，ＳＤ43北端部より屈曲して東へ延びる小溝である。東端は調査区外へ延長し，僅かに約2.3mを検出したに過ぎない。溝は，幅0.3m前後，残存深数cmと浅く，断面形は皿状を呈する。流路方向はN69.2°Ｅで，ＳＤ44・45に概ね平行に配される。埋土は単層で，ＳＤ43に近似する。

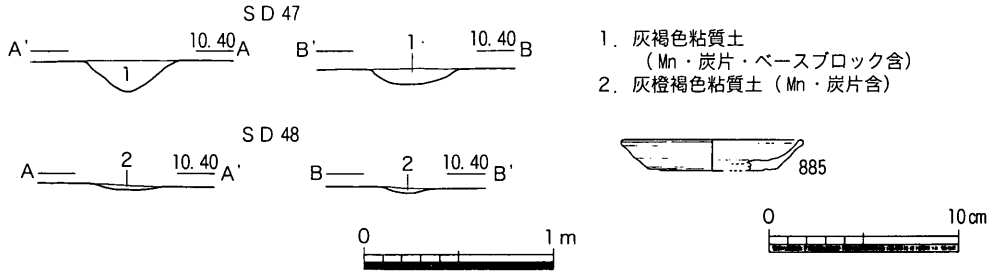
遺物は，ＳＤ41・43を中心に，各溝合わせてコンテナ１箱程度の土器・陶磁器片が出土している。いずれも小片であり，完形に復元可能なものはない。図示した遺物以外には，土師質土器碗・擂鉢，十瓶山窯系須恵質土器碗・坏，備前焼甕等の小片がある。20点を図示した。865～867・871・872・876・878～880・882がＳＤ43，868・870・883がＳＤ42，869がＳＤ44，873～875・877がＳＤ41，884がＳＤ45よりそれぞれ出土した遺物である。また，881はＳＤ43とＳＤ45より出土した破片が接合した。

865～869は，土師質土器小皿である。小皿ａ類（865～867），同ｂ類（868･869）が出土している。865は，色調が灰黄色系を呈する焼成の堅緻な製品で，866以下の橙色系のものとは異なる。870は，土師質土器皿である。色調は灰色を呈し，焼成は良好で堅緻。口縁部は肥厚しつつ小さく摘み上げ，端面は直立する。868の外底面には，静止糸切り調整痕を認める。当遺跡では，当該期の皿類の外底面はヘラ切り調整が優位を占め，糸切り調整のものは本例が唯一の確認例である。他地域からの搬入品の可能性が高い。871・872は，やや器高が深くなる点から土師質土器坏とした。873～877は，土師質土器足釜。大半がＳＤ41より出土しており，一括して廃棄された可能性が高い。口縁・鍔部形状は，若干のヴァリエーションを有するが，概ね足釜ｃ類に分類してよいだろう。体部の球形化が進展した877や，口縁部がやや萎縮した873は，ｄ類への過渡的様相を示すものであろう。878は，土師質土器鍋ｂ類である。内・外面ハケ調整が卓越し，口縁部内面下端の屈曲部は未だ強い稜線を残しており，口縁端部は内外への肥厚が顕著で，やや古い様相を認める。879は，瓦質土器甕である。口縁部は強く折り返されて外反して開き，端部は小さく肥厚しつつ矩形に収める。内外面共，剥離・摩滅が進行している。口縁部形状より亀山焼の可能性が高く，14世紀前半代に位置付けられる。880は，土師質土器擂鉢。内面には，２条１単位の卸目



第170図　ＳＤ41～46出土遺物実測図（1/4・1/2）

が，口縁端部付近まで施される。881は，瓦質焼成の平瓦である。凸面は縄目タタキの後弱いナデ調整が施され，端・側面は丁寧な削り調整が加えられる。弧深が2.8cmとやや深いことから，桶巻き作りの可能性も残る。882は，上下端に潰れがみられることから楔形石器とした。883は，流紋岩製の砥石である。表面には平タガネ状工具痕を顕著に残しており，また側面には平ノコ状工具による整形痕がみられ，使用面は破損して残されていない(3)。884は，鉄釘の軸部小片であろう。５㎜角の角釘である。上記出土遺物より，本溝群は14



第171図　ＳＤ47・48断面図（１/40），ＳＤ47出土遺物実測図（１/４）

世紀中葉を前後する時期には埋没段階にあったと考えられる。

ＳＤ47・48（第171図）

Ｉ区北端部Ｅ５グリットで検出した，×字に交差する溝状遺構である。南北溝をＳＤ47，東西溝をＳＤ48と呼称する。ＳＤ48西端にはＳＫ25が接続する。遺構上面では，両溝の埋土は近似していたため，明確な切り合い関係は認められなかった。しかし，後述する埋土中のブロック土の混入の有無や溝底面の高低差から，先後関係を想定するのが妥当であろう。ＳＤ47は，その規模等から建物遺構に付随する雨落ち溝の可能性が高く，ＳＤ48は，ＳＫ25の排水路と想定されるが，いずれも断定するまでには至らない。

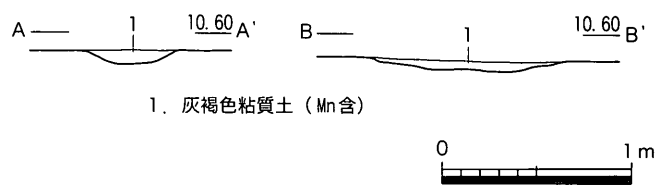
ＳＤ47は，北端は調査区外に延び，南端は延長約4.0ｍを確認して途切れる。流路方向Ｎ32.6°Ｗで，後述するＳＤ48とは内角71.5°で斜交する。幅0.45ｍ前後，残存深0.1～0.15ｍの小溝である。底面の標高は，北端で10.19ｍ，南端で10.26ｍ前後となり，高低差より北に流下する可能性がある。埋土は単層で，ベース層のブロック土を混入することから，人為的に埋め戻された可能性が高い。遺物は，土師質土器皿・鍋ｃ類等の小片が少量出土したのみである。土師質土器小皿１点（885）を図示した。口縁部は外反して開き，外底面はヘラ切り調整される。出土遺物より，細かな時期を特定することは困難だが，概ね14世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＤ48は，ＳＫ25より東へ約6.0ｍ延長して途切れる小溝である。ＳＫ25とは上記したように，同時併存の可能性を想定しておく。幅0.25～0.35ｍ，残存深は僅かに数㎝で，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で，ブロック土の混入を認めない。流路方向はＮ76.0°Ｅ，底面の標高は10.30ｍ前後でほぼ一定し，明確な流下方向を示さない。遺物は，土師質土器皿等の小片が数点出土したのみである。

ＳＤ53（第172図）

Ｉ区中央北端Ｅ６グリットで検出した溝状遺構である。ＳＫ20より後出する。中位で鈍

く屈曲して，平面逆Ｌ字状に配される。東端は調査区外へ延長し，南端は延長約4.3mを検出して途切れる。東西溝部分をＳＤ53ａ溝，南北溝部分を同ｂ溝として以下報告する。溝の平・断面形状及び位置関係より，建物遺構に付随する雨落ち溝の性格が想定されるが，本溝に伴う明確な建物遺構は復元されていない。



第172図　ＳＤ53断面図（1/40）

ａ溝は，幅0.5～0.7m，残存深は0.07m前後と浅く，断面形は皿状を呈する。流路方向はN55.0°Ｅで，概ね直線状に配され，後述するｂ溝とは内角112.2°で斜交する。底面の標高は10.4m前後で一定し，明確な流下方向を示さない。埋土は，灰褐色粘質土の単層である。

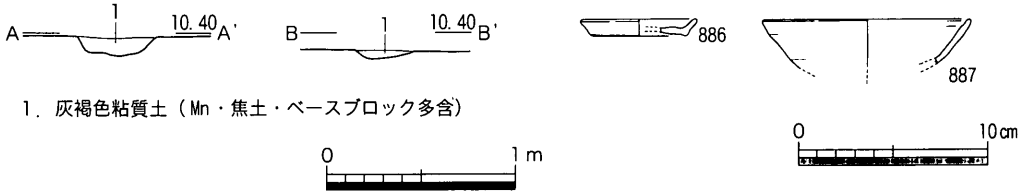
ｂ溝上面幅は，幅0.2～1.0mと安定して検出されず不整形状を呈する。他遺構との重複の可能性も考えられたが，埋土は単層で分層できず，底面の標高もａ溝と同様に10.4m前後で一定しており，ｂ溝本来の形状と判断された。残存深はａ溝同様0.07m前後と浅く，断面形は皿状を呈する。

遺物は，土師質土器皿・碗等の小片が少量出土したのみである。出土遺物より概ね14世紀代に位置付けられると考えるが，細かな時期を特定することは困難である。

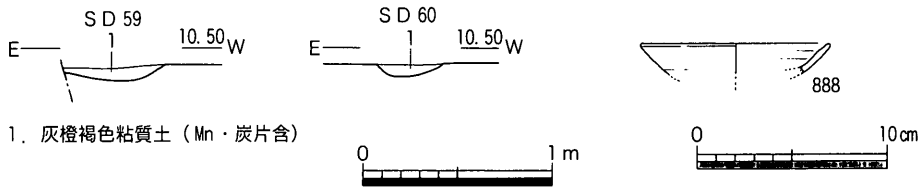
ＳＤ57（第173図）

Ｉ区中央東部Ｄ６・７グリットで検出した，緩やかに屈曲して平面Ｌ字状を呈する溝状遺構である。ＳＤ01・07・18と重複し，そのいずれよりも先行する。また，中央から東端部を予備調査時のトレンチによって大きく削平を蒙っているため，断定するまでには至らないが，東延長部にＳＸ09が配されており，本来は一連の遺構であった可能性が高い。南北溝部分をＳＤ57ａ溝，東西溝部分を同ｂ溝と呼称して以下報告する。なお，溝の平・断面形状より，建物遺構に付随する雨落ち溝の可能性が高いが，本溝に伴う建物遺構は復元されていない。

ａ溝は，幅0.3～0.5m，残存深0.1m程で，断面形は浅い逆台形状を呈する小溝である。流路方向N8.9°Ｗを測り，概ね真北に配された直線溝である。後述するｂ溝とは，内角77.9°で概ね直交する。ｂ溝との屈曲部より，延長約6.5mを検出して途切れる。底面の標高は，10.25m前後で僅かに北に傾斜して深くなるが，北端部は途切れるため明確な流下方向は不詳である。埋土は，灰褐色粘質土の単層で，ベース層ブロック土の混入が比較



第173図　ＳＤ57断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）



第174図　ＳＤ59・60断面図（１/40），ＳＤ59出土遺物実測図（１/４）

的広い範囲に認められたことから，人為的に埋め戻された可能性が高い。おそらく，ＳＤ01開削時に埋め戻されたものと推測する。

ｂ溝は，幅0.5m前後，残存深数cm程度と浅く，断面形は皿状を呈する。底面の標高は，10.25m前後で一定する。ＳＸ09の底面が僅かに深く掘り込まれていることから，東へ流下する可能性もある。流路方向は，Ｎ69.0°Ｅである。

遺物は，土師質土器皿・足釜等の小片が少量出土したに限られる。２点を選んで図示した。886は，土師質土器小皿である。色調は灰黄色を呈する焼成の堅緻な製品で，小皿ａ類に属する。887は，土師質土器皿。口縁端部内面は，強い回転ナデにより鈍く凹線状に窪む。出土遺物より時期を特定することは困難だが，上記した他遺構との重複関係からすれば，14世紀前半から中葉前後に位置付けられると考える。

ＳＤ59・60（第174図）

Ｉａ区南東隅Ｆ５グリットで検出した溝状遺構である。２条の南北溝がほぼ平行して検出され，北端部は東西溝によって連結し，南端部はそれぞれ調査区外へ延長する。延長2.3m程を検出し得たのみのため，遺構の性格については不詳である。２条の溝は，規模や埋土が近似しており，同一方向に配され，北端部で連結していることから，同時併存していたとみて間違いない。溝間の距離は，0.2m程である。東側の溝をＳＤ59，西側の溝をＳＤ60とそれぞれ呼称する。溝は，幅0.35～0.6m，残存深は0.06mと浅く，断面形は皿状を呈する。流路方向は，Ｎ19.0°Ｗである。底面の標高は，10.35m前後で高低差に乏し

く，流下方向は不明。僅かにＳＤ59が幅広で，深く掘り込まれる。埋土は単層で，両溝に大きな差異は乏しい。

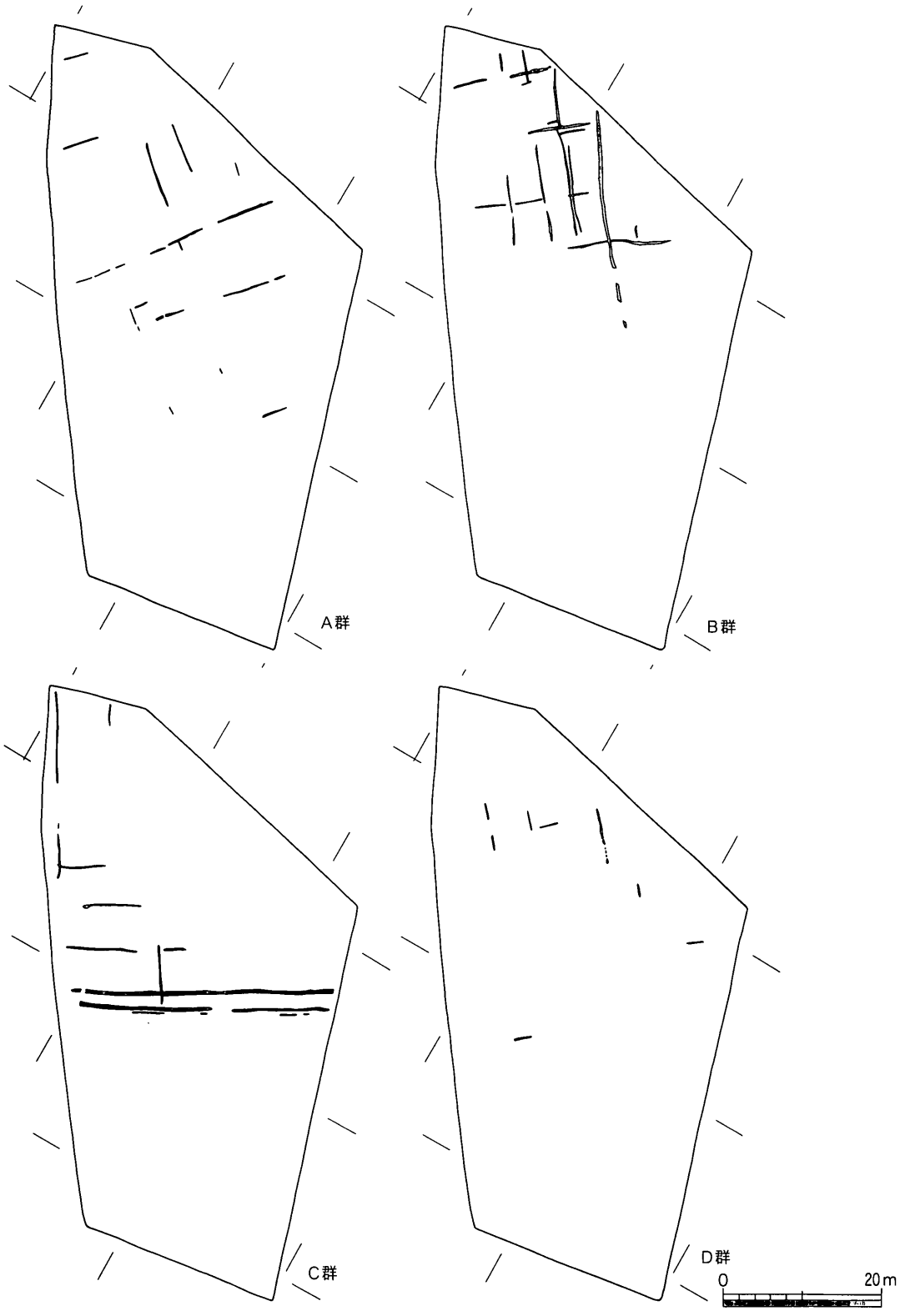
遺物は，ＳＤ59より土師質土器皿と，瓦質土器擂鉢等の小片が数点出土したのみである。ＳＤ60からは遺物は出土していない。１点のみ図示した。888は，土師質土器皿である。口縁部はやや内湾気味に開き，端部は矩形に近い橙色系の皿である。出土遺物より細かな時期を特定することは困難であり，概ね14世紀代に位置付けられると考えておく。

耕作痕（第175～177図）

Ｉ区第１ｂ面で検出した，水田状区画と小溝群を耕作痕として以下報告する。

小溝群は，Ｉ区北半部において前記中世屋敷地のベース層となる灰黄色粘質土等を除去して検出した。暗橙色粘質土等をベースとして掘り込まれる。検出面の標高は，溝群南端部付近で10.25m前後，調査区北端部付近で10.20m前後を測り，数cm程の高低差で僅かに北に傾斜する。調査区南半ＳＤ65以南では，辛うじて数条の小溝（ＳＤ69・123等）を確認しえたのみで，ＳＤ65を境に遺構分布に明瞭な格差を認める。ＳＤ65以南の遺構面上面には，近世以降の旧耕土層が堆積しており，遺構面が削平されていることは確実だが，検出面の標高は10.30m前後と，ＳＤ65以北の遺構面よりも数cm程高く，単に遺構面が後世の削平により消失していると捉えるには矛盾が生じる。したがって，おそらくＳＤ65を境に，より以南の耕作地は本来棚田（段）状を呈していた可能性が高いと判断された。ＳＤ65・66がほぼ平行して調査区を横断し，耕作地の区画溝としての性格が強く認められる点も，上記した可能性と矛盾しない。

小溝は，いずれも幅0.15～0.5m，残存深0.05～0.13m，断面形は浅い皿状ないしは逆台形状を呈する。底面の標高は，調査区北端部のものが概ね10.10m前後，中央部のものが10.20m前後と，遺構面の高低差に合致して北に傾斜する。例えば南北溝ＳＤ75では，北端部で10.05m，南端部で10.17mを測り，北に流下していた可能性が高い。東西方向では，例えばＳＤ76では，東端部で10.21m，西端部で10.28mを測り，区画溝ＳＤ66では，同様に10.11mと，10.18mを測り，いずれも東に流下する。こうした溝底面の高低差から，小溝群を流下する用水はすべて段丘崖下へ排水されていたものと推測する。なお，小溝群の埋土は，遺構上面包含層に近似した灰黄色シルトの単層で，小石等が混在しない均質な堆積土である。微妙な色調や土質の相違から，調査時には一部の溝群についてその切り合い関係を確認し得たが，基本的には大差を認めず，比較的短期間の内に堆積・埋没したも



第175図　耕作痕変遷想定図（1/800）

のと判断された。

さて，小溝群は，その流路方向からＡ～Ｄ群の大きく４群に大別する（第175図)。Ａ群は，流路方向Ｎ35°Ｅ前後とそれに直交する溝を想定する。同様にＢ群はＮ40.0°Ｅ前後を，Ｃ群はＮ60.0°Ｅ前後を，最後にＤ群はＮ50.0°Ｅ前後の溝をそれぞれ想定する。Ａ・Ｂ両群の溝の方向は近似しているが，その他の群は概ね10°前後のずれを生じており明瞭に区分される。各群の先後関係については，埋土の切り合い関係からＡ群→Ｃ群への推移が確認されたのみで，明確ではない。仮に，一定方向への推移を想定するなら，Ａ群→Ｂ群→Ｄ群→Ｃ群となろう。

Ａ群は，南北溝ＳＤ72・85・92・122と，東西溝ＳＤ76・78・82・99で構成される。南北溝は4.2～5.5mの間隔で穿たれており，東西溝は9.0～10.0m程とやや間隔が広い。おそらく上記したように残存深が0.1m程と非常に浅いため，確認できなかった溝も相当数存在したと推測され，上記した溝間の間隔から，概ね一辺４～５ｍの格子状に溝が配されていたものと考えられる。

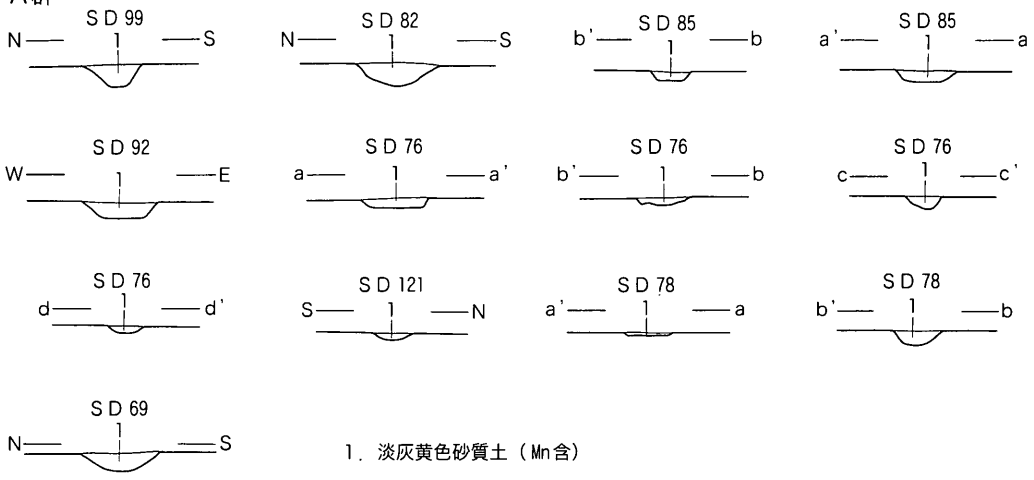
Ｂ群は，南北溝ＳＤ73・75・80・86・88・91・98・113，東西溝ＳＤ77・83・84・87・89で構成される。南北溝は3.5～4.2mの間隔で，東西溝は6.5～7.5mの間隔でそれぞれ穿たれている。他群の溝と比して最も検出状況が良好であり，旧状をよくとどめているものと考えられ，上記した東西長４ｍ前後，南北長７ｍ前後の長方形状に本来区画されていたものと考えられる。この点でＡ群の溝の配置とはやや相違する。

Ｃ群は，南北溝ＳＤ96・97・105，東西溝ＳＤ77・79・117で構成される。区画溝ＳＤ65～67もその流路方向は本群と共通するが，上面よりＳＤ96が穿たれており，本群の耕作地よりはやや先行する可能性が高い。南北溝は6.4m前後，東西溝は4.8～5.5m間隔でそれぞれ穿たれており，東西長6.5m前後，南北長5.0m前後の長方形状に区画されていたものと考える。

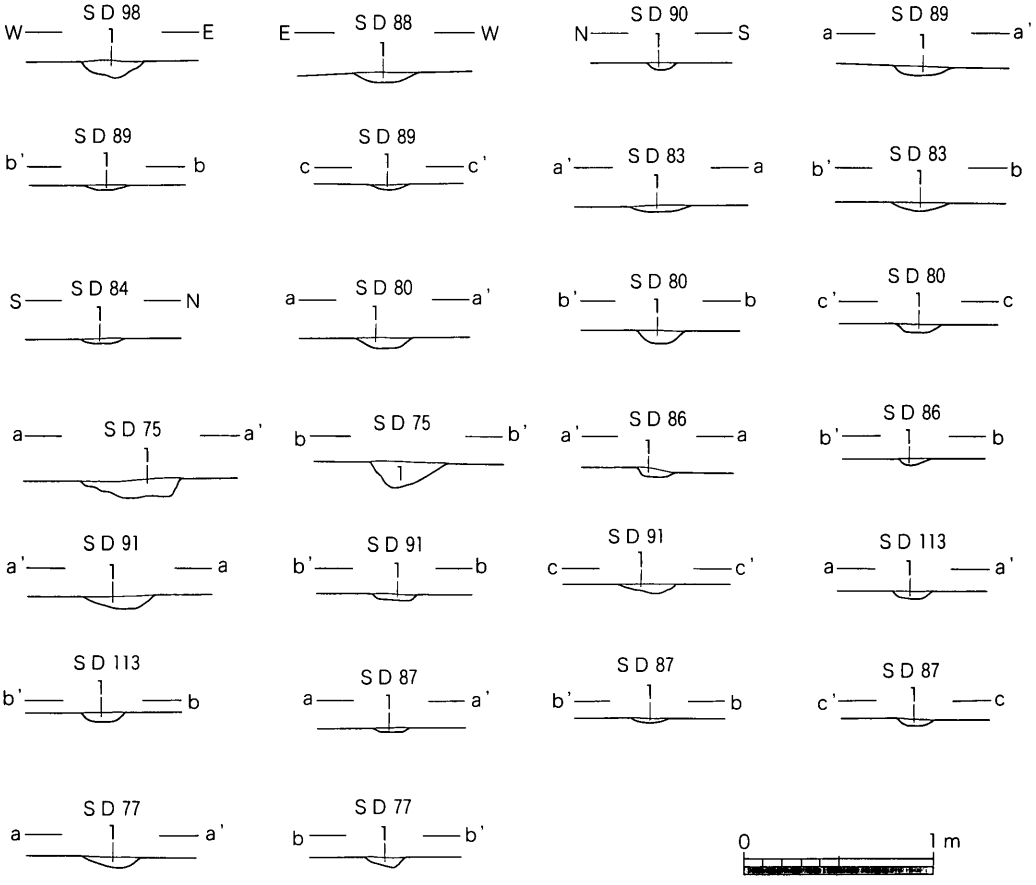
Ｄ群は，小溝群中最も検出状況が悪く，数条の溝が検出されたのみである。南北溝ＳＤ72・74・94・111，東西溝ＳＤ71・93・123で構成される。南北溝は3.1～8.3m，東西溝は7.2m程の間隔で穿たれているが，条数が少なく旧状を窺うことはできない。なお，ＳＤ74の南半部は，小穴が列状に連続して検出され溝状を呈さない。おそらくは，溝底の鍬痕のみが検出されたものと考える。

上記した調査成果から小溝群は，僅かな傾斜を有する平坦地に穿たれ，概ね地形の傾斜方向と合致する一定の流下方向を有し，溝の規模や底面の標高は群を違えても近似するこ

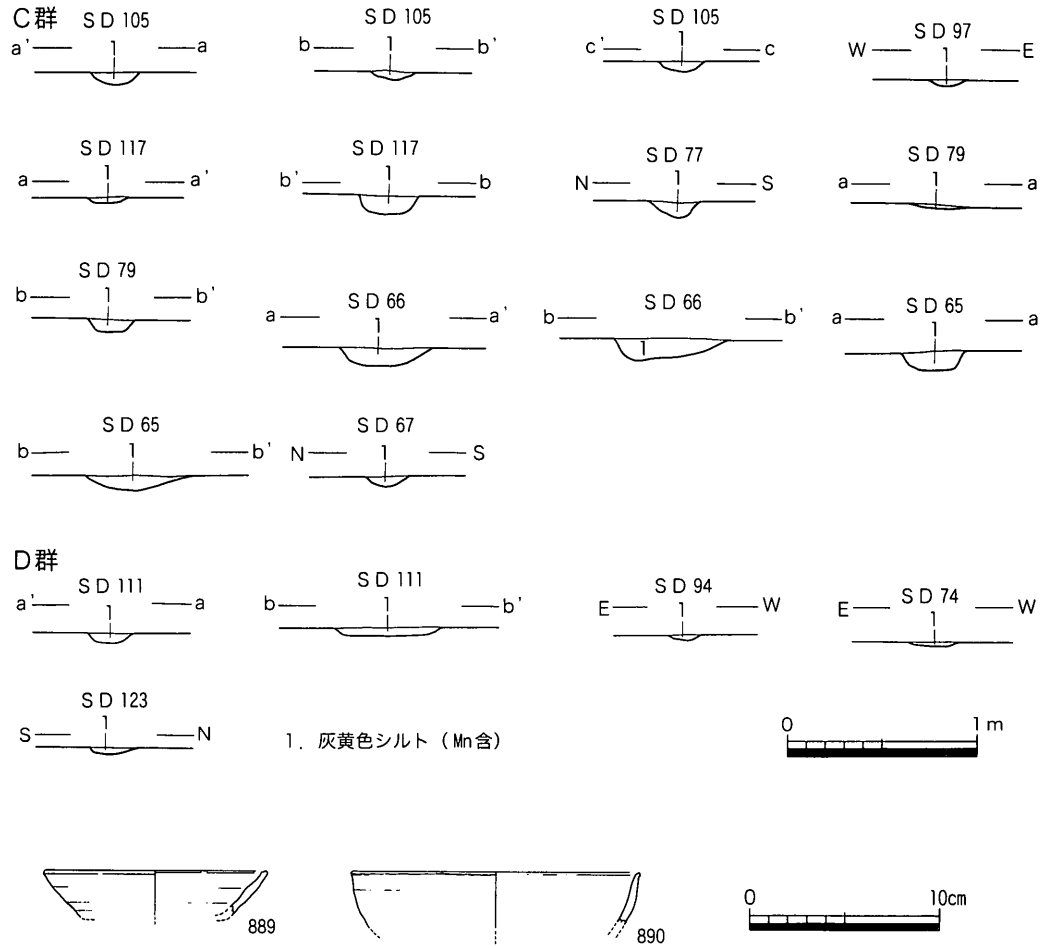
A群



B群



第176図　耕作痕断面図1（1/40）



第177図　耕作痕断面図２（１/40），出土遺物実測図（１/４）

と，各群の溝が共通して方格状を呈しており，その東西溝と南北溝に明確な切り合い関係は認められないこと，各溝で区画された小区画の面積が各群20～30㎡程度で一定するといった諸点に整理される。つまり，本来的に一定面積の耕地の内部を方格状に排水溝が張り巡らされた様相が復元され，頻繁に耕地区画を更新しつつ，なお同一地点において一定期間継続して維持されたことが想定される。区画内部がどのように利用されていたか，区画の意図・目的が次に問題となるが，この点については調査成果から明確に捉えることはできなかった。区画溝が排水溝としての機能を備えていることからすれば，区画溝内部が畑作に使用されていた可能性は高いが，耕土等が確認されず詳細は不明である。なお類例として，坂出市川津中塚遺跡鍬溝跡（山下他1994）がある。

第177図は，小溝群より出土した遺物である。小溝群からは，少量の土器等が出土した

のみであり，時期を特定可能な資料は乏しい。また，出土遺物は顕著な時期差が認められ，下位層からの混入遺物や上位の中世集落とほぼ同時期の遺物も存在し，後者についてはおそらく調査時の不手際により，上位面から切り込まれた遺構に帰属する遺物が混入してしまったものと思われる。２点を選んで図示した。889は，ＳＤ80より出土した土師質土器皿である。小片のため，復元した口径にはやや難がある。器壁はやや厚く，焼成は堅緻で，内面には回転ナデによる鈍い段を認める。890は，土師器坏として図示したが，口縁部の小片であり，別器種となる可能性も残る。ＳＤ66より出土した。内・外面とも剥離・摩滅が進展しており，調整等は不詳である。形態より古代に位置付けられると考え，下位層からの混入品とみられる。上記出土遺物より，概ね13世紀代に位置付けられると考えるが，より遡る可能性も残る。

水田とみられる遺構は，Ｉ区北東隅Ｅ６・７グリット周辺で検出した。諸般の都合により，細かな調査を行えなかったため，概略のみの報告にとどめておく。

水田面は南北に長く，辛うじて４筆分が検出されたのみで，調査区の大半では不明瞭で，遺構面の削平により消失したものと判断された。おそらく北東方向に緩やかに傾斜する棚田状を呈していたものと考える。北東区画をＳＺ01，南東区画をＳＺ02，北西区画をＳＺ03，南西区画をＳＺ04とそれぞれ称する。検出された水田面の標高は，ＳＺ01が10.11m前後，ＳＺ02が10.13m前後，ＳＺ03が10.20m前後，ＳＺ04が10.22m前後と，地形の傾斜方向に対応して緩やかに北東方向へ下る。各水田面の規模は一様ではなく，ＳＺ01が最大で南北6.7m以上，東西4.5m，面積30.2m²以上を，ＳＺ04が最小で南北約9.0m，東西2.8m，面積約25m²をそれぞれ測り，水田面の面積には微妙な地形の起伏の影響が認められる。東西方向の畦畔がクランク状を呈する点も，同様に地形条件の規制を受けたものであろう。しかし，畦畔は一定方向に直交して配され，大局的には旧地形への依存度は低いとみてよい。この点で，本地域の現地表面にみられる条里型地割に合致した方向性は希薄だが，耕地を一定の方向に統一して区画しようとした意図は窺える。なお，各水田面への用水の供給は，検出された畦畔に水口が認められないことから，いわゆる「タワタシ」によって行われていたものと考える。

畦畔は，基底部で幅0.7～1.4m，高さ0.03～0.07mを測り，やや不整形である。畦畔の構築は，断面の観察からベース層に近似した盛土によるものとみられる。中央部を南北に縦断する畦畔の方向は，概ねＮ24.5°Ｗの方向に配されており，上記小溝群Ｃ群の方向に概ね合致する。この点で，小溝群と近接した時期が想定されるが，切り合い関係より小溝

群よりは明確に先行する。

遺物は，水田面覆土から土器片が少量出土したに限られる。ＳＺ01より古代に遡るとみられる土師器甕体部小片１点が，ＳＺ03より土器細片１点が出土したのみであり，出土遺物より細かな時期を特定することは困難である。出土遺物及び層位的な位置関係から，古代から中世の時期幅の中で本遺構を捉えておきたい。

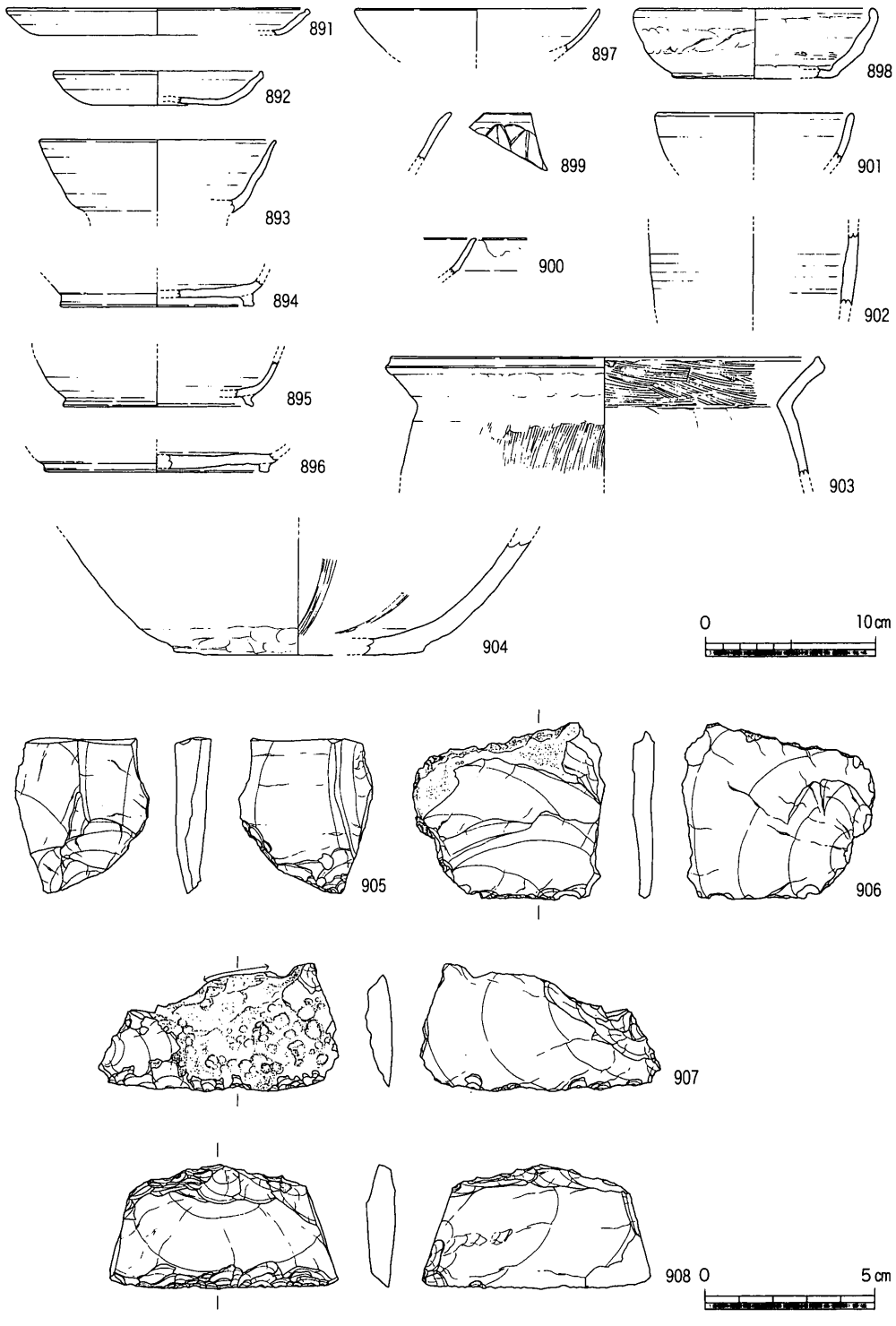
包含層（第178～183図）

中世の包含層の堆積状況については，本章第１節で詳述した。これら包含層より出土した遺物，及び上位の近世以降の旧耕土層や遺構検出途中で出土した遺物について，前項までの報告内容の参考となるものを特に選択して，以下記述する。

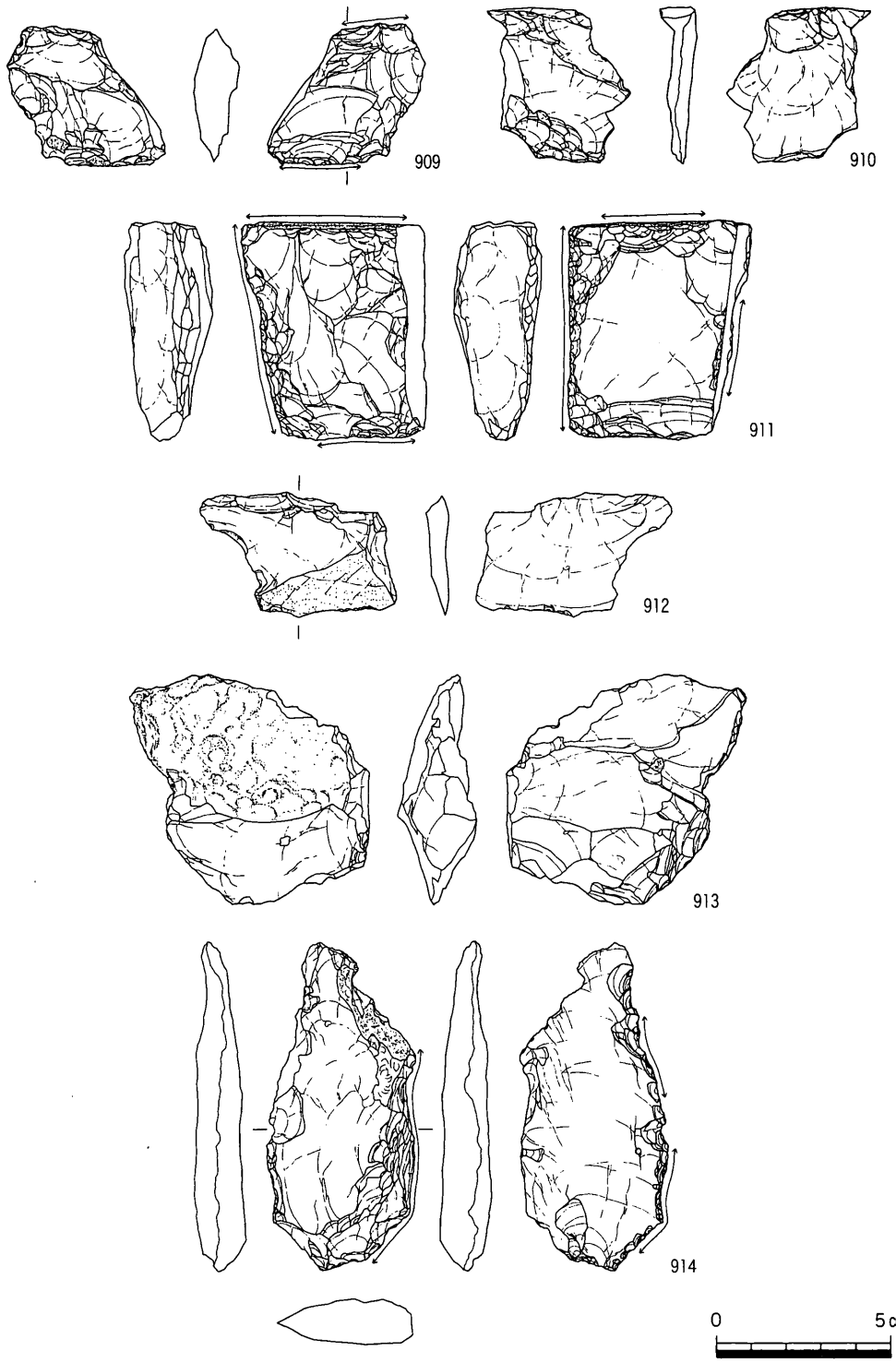
891・892・903・904・913・916・917はＩ区第１面遺構検出途中，893～902・905・908・910～912・914・915・918・919はＩ区第１面の包含層，906・907・909はＩ区出土層位不詳，920はＩａ区第１面包含層，921～924・927～931・933・941・943・946～949・952はⅢ区２面包含層，925・937～939・942・945はⅡ区出土層位不詳，926・940・944はⅡ区旧耕土層，932・934～936・950・951はⅢ区１面包含層より，それぞれ出土した遺物である。

891・892は，古代に遡る土師器皿。いずれも小片のため，復元した口径にはやや難がある。口縁部は小さく外反して開き，端部内面には鈍い沈線状の段を認める。胎土は水簸された，細かな素地粘土が使用される。893は須恵器坏。口縁部は直線状に斜上方へ開き，端部を丸く収める。胎土はやや粗く，石英中粒をやや多量に含む。894～896は須恵器底部片である。外底面には，いずれも直立ないしは外方へ踏ん張る高台が付される。調整手法や法量から，いずれも坏もしくは皿の底部となろう。903は，土師器甕。口縁部は強く折り返して外反して開き，端部は上下に鈍く肥厚し，端面はヨコナデにより凹線状に窪む。上記資料に大きな時期差は認められず，概ね８世紀後半から９世紀前半代に位置付けられる。

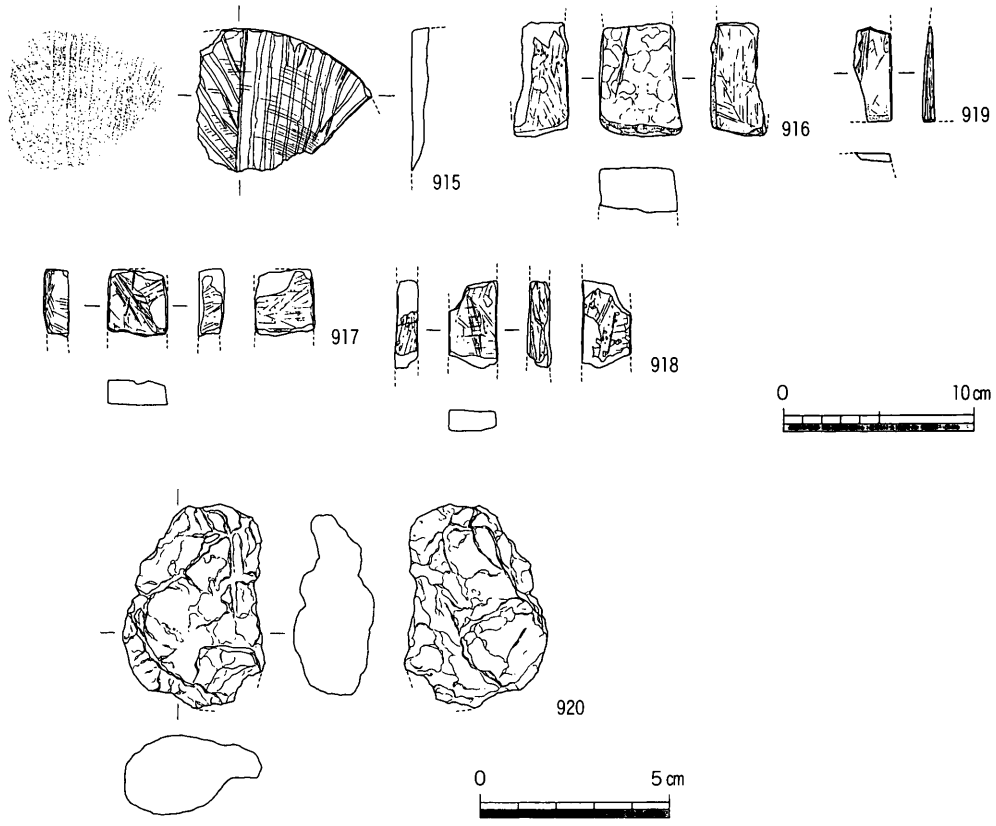
897は，土師質土器坏もしくは皿口縁部片である。内湾しつつ開き，端部は丸く収める。胎土は細かく，水簸された素地粘土が使用される。898は，土師質土器坏である。粗製の坏で，胎土は粗く，外表面には一次調整の指圧痕が強く残される。外底面はヘラ切り調整とみられるが，小片のため不明。なお，外面から口縁端部内面にかけて二次的被熱により，煤が付着する。899･901は，龍泉窯系青磁碗である。899は碗Ｉ５ｂ類に分類され，口縁端部は小さく外反し，外面には鎬蓮弁文が描かれる。901も碗Ｉ類に分類されるが，外面を中心に二次的被熱を蒙り，気泡や変色を生じており詳細は不明。900は白磁皿もしくは碗の口



第178図　Ⅰ区包含層Ⅰ出土遺物実測図1（1/4・1/2）



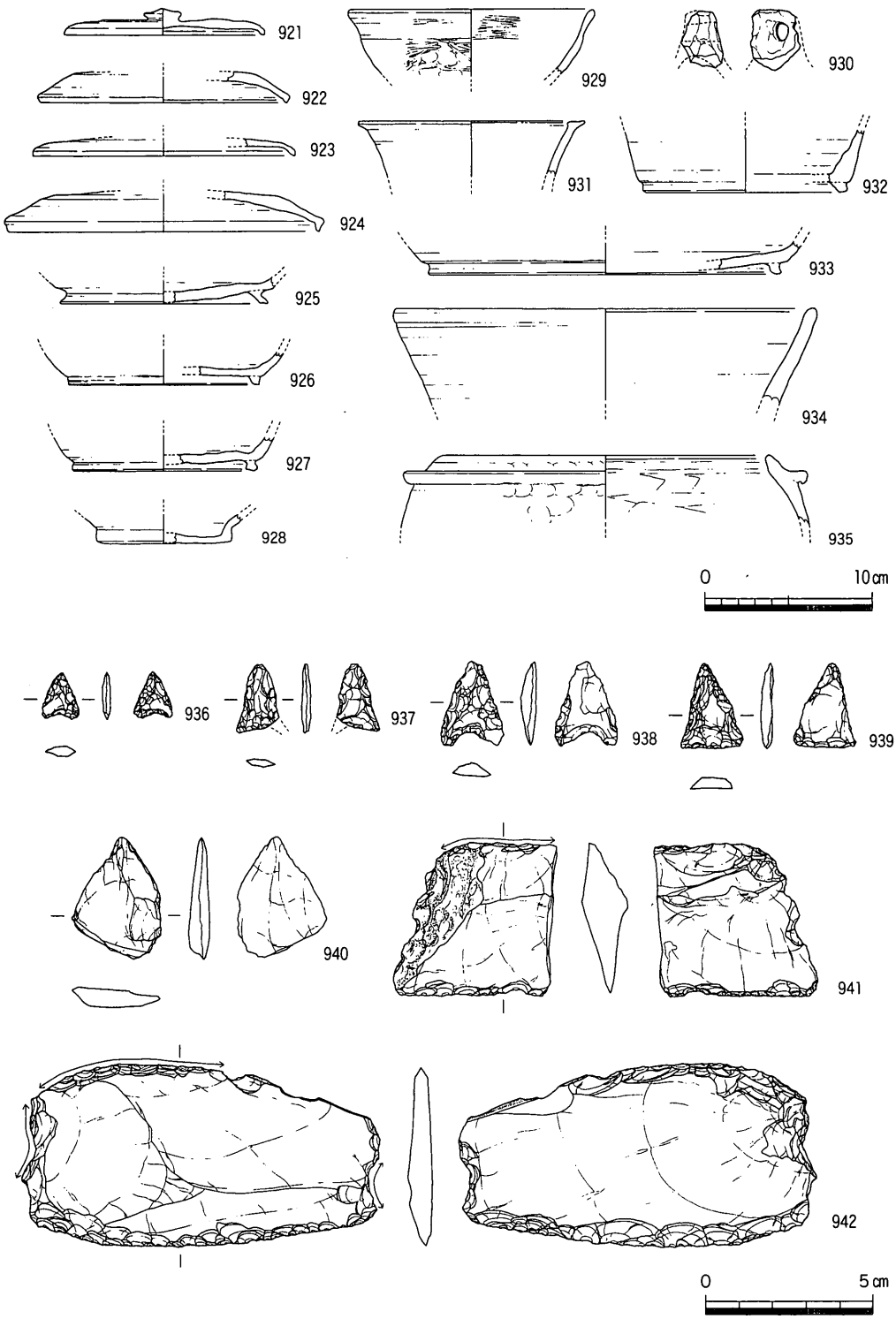
第179図　Ⅰ区包含層Ⅰ出土遺物実測図２（１/２）



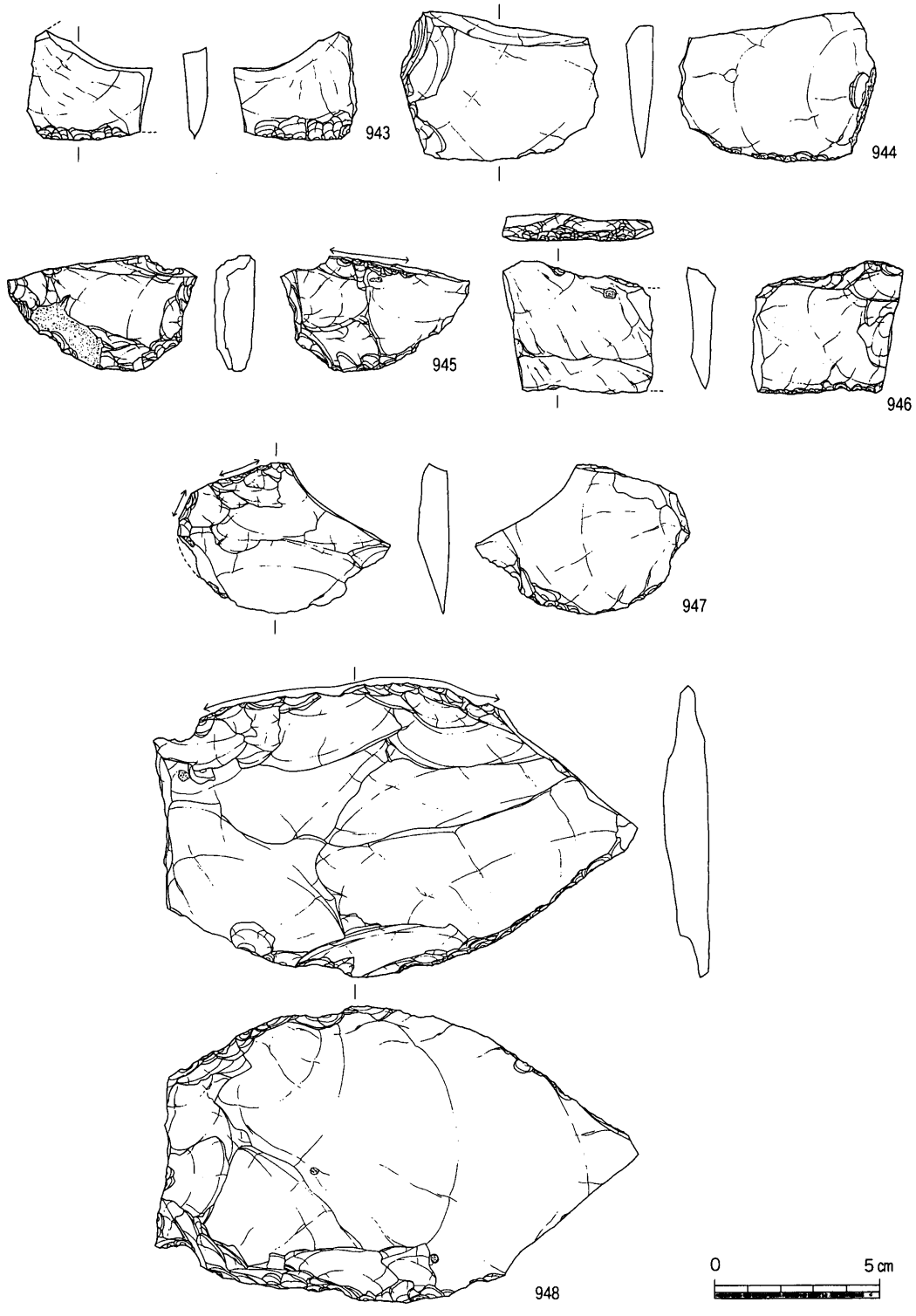
第180図　Ⅰ区包含層Ⅰ出土遺物実測図３（1/4・1/2）

縁部小片。口縁端部は外方へ小さく挽き出され，外面には鈍い稜を認める。いずれも14世紀代に多出する輸入陶磁器である。902は瀬戸美濃系と考えられる壺体部小片である。外面には灰緑色を呈する灰釉が施される。904は瓦質土器擂鉢。内面には，３条１単位の卸目がやや間隔を開けて施され，使用により顕著に摩滅する。上記897以下が，第１面中世集落の各遺構より遊離した遺物と考えられ，概ね14世紀代を中心とした時期に位置付けられる。

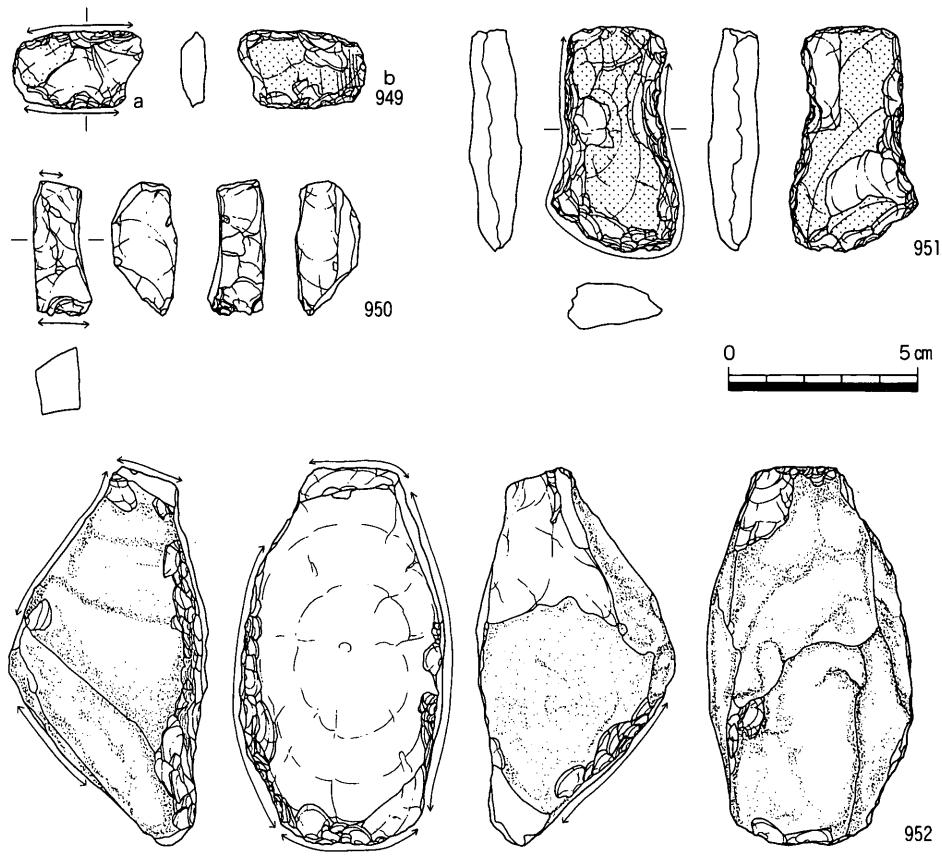
905～913は，弥生時代以前に遡るサヌカイト製の石器類である。本来的には，包含層Ⅳに帰属するものであろう。905～908は，スクレイパーである。907の背部には一部摩滅痕が認められ，打製石斧の転用品とみられる。909は，上下端に顕著な潰れを認めることから楔形石器とした。910はその削片であろう。911も周縁に顕著な潰し加工を認めることから楔形石器としたが，本来的にはそこから素材となる剥片を得ようとしたか，そのもの自体を加工して石器を製作しようとした可能性があり，その点で石核とすべきかもしれない。912は，下縁に弱い微細剥離痕を認める剥片である。913は明確な剥片は得られていないが，形



第181図　II・III区包含層I出土遺物実測図1（1/4・1/2）



第182図　II・III区包含層 I 出土遺物実測図 2 （1/2）



第183図　II・III区包含層 I 出土遺物実測図３（1/2）

状より石核として報告する。

914～919は，少なくとも古代以降に下る石器･石製品である。914は形状が不整形で，周縁に顕著な潰し加工が認められ，器表面の風化が上記したもの程進展していないことから，火打石とした。サヌカイト製である。915は，花崗斑岩製の石臼である。径17.4cm程に復元される，下臼すり面の小片であろう。すり面は９分割され，１単位９～10条の溝が反時計回りに彫られている。また，すり面は使用により顕著に摩滅し，同心円状の擦痕が認められ，二次的被熱を蒙ったためかやや黒色気味に変色する。916～918は，いずれも流紋岩製の砥石である。916は方柱状を呈する砥石で，狭側面２面に顕著な使用痕が認められる。広側面の裏面は剥離により不明，表面は分割したままの自然面状を呈し明確な使用痕を認めない。また下端面を中心に,二次的被熱を蒙り浅く煤が付着する。917は小ぶりな札形を呈する砥石で，４面が使用される。主研面は鈍く凸面状を呈し，裏面中央には鑿等を研いだとみられる溝状の研磨痕を認める。918も小ぶりな札形を呈する砥石で，４面が使用され

る。また，二次的被熱を顕著に蒙っており，煉瓦色を呈する。919も同様に札形を呈する。裏面は大きく欠損する。下端面と側面は，平ノコ状工具により丁寧に整形されている。鉄器･鉄滓は，Ⅰ区を中心に30点程度出土しており，分析を依頼した１点のみ図示する。920は，薄い板状を呈する用途不詳の鉄器である。

921～924は，須恵器坏蓋である。口縁部形態を中心に若干のヴァリエーションを認めるが，顕著な時期差を呈するものではないだろう。925～927は須恵器底部である。外底面には直立もしくは外方へ強く踏ん張る高台を付す。形状より坏底部となろう。928は，土師器平高台碗底部である。器表面は剥離･摩滅が進展しており，調整等は不詳。929は，和泉産の瓦器碗。930は，釣鐘形を呈する土師器蛸壺である。931は須恵器壺。口縁部は大きく外反して開き，端部は外方へ強く挽き出しつつ，内方へも鈍く突出する。932は須恵器壺底部片であろう。933は高台を付す須恵器底部片で，皿底部となろう。934は，須恵器鉢口縁部であろうか。口縁部は内湾気味に開き，端部は丸く収める。935は，中世に下る土師質土器足釜ｃ類である。

936～950･952は，弥生時代以前に遡るサヌカイト製の石器である。936～939は石鏃である。936は小形の凹基式石鏃。938は凹基式の石鏃だが，調整加工が甘く未製品の可能性がある。940は頂部が三角形状に調整加工が加えられており，石鏃未製品とした。941･942は，打製石庖丁である。いずれも背部には潰し加工が，側縁には抉りが施される。943～948はスクレイパーである。949・950は，上下端に顕著な潰れがみられることから楔形石器とした。949は，表裏面に摩滅痕とｂ面に線条痕を認め，打製石斧刃部の転用品とみられる。952は，周縁の稜線部に両極打撃による顕著な潰し加工がみられる。明確な剥片は得られておらず，その点で石核とするにはやや難があるが，ここでは石核素材として報告する。951は，上記914と同様な理由から，火打石として報告する。石材はサヌカイトを使用する。

本文註

(1)　当該時期の建物の主軸方向は，桁方向の両側柱穴列の方向の平均値を記す。
(2)　土師質土器の細分類案については，ＳＤ01の報告遺物の項で説明を加える。
(3)　砥石の整形工具については，西股1990に従った。

参考・引用文献

植田　広　1992「北條池１号窯跡採集のヘラ記号のある須恵器」『研究輯録Ⅱ』（財）広島県埋蔵文化財調査センター

大久保徹也　1992「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究　下』山陽新聞社

小野秀幸他　1999『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』香川県教育委員会

尾上　実　1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』

片桐孝浩　1992『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』香川県教育委員会他

蔵本晋司　1999『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第33冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』香川県教育委員会他

佐藤竜馬　1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念　考古学論叢』

佐藤竜馬　1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊　国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会他

鋤柄俊夫　1995「大阪府南部の瓦質土器生産（１）」『日置荘遺跡　－近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書』大阪府教育委員会他

辻　佳伸　1992「皿と銭貨　－中世地鎮め遺構の一様相－」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要　真朱　創刊号』

西股総生　1990「第５節　石製品」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４　山上会館・御殿下記念館地点　第２分冊』

藤澤良祐　1991「瀬戸古窯址群Ⅱ　－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』

間壁忠彦　1991『考古学ライブラリー40　備前焼』ニューサイエンス社

山下平重他　1994『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第14冊　川津中塚遺跡』香川県教育委員会他

和田素子　1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12冊　郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会他

第３章　自然科学的調査の成果

第１節　川津川西遺跡の花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡は，丸亀平野の東部を流れる土器川の氾濫原上に位置する。本遺跡の周辺では，これまでにも縄文時代以降，特に弥生時代を中心として多数の遺跡が確認されている。今回，河道埋積物などを対象として花粉分析を行い，遺跡周辺の古植生について検討することにした。

１．試料

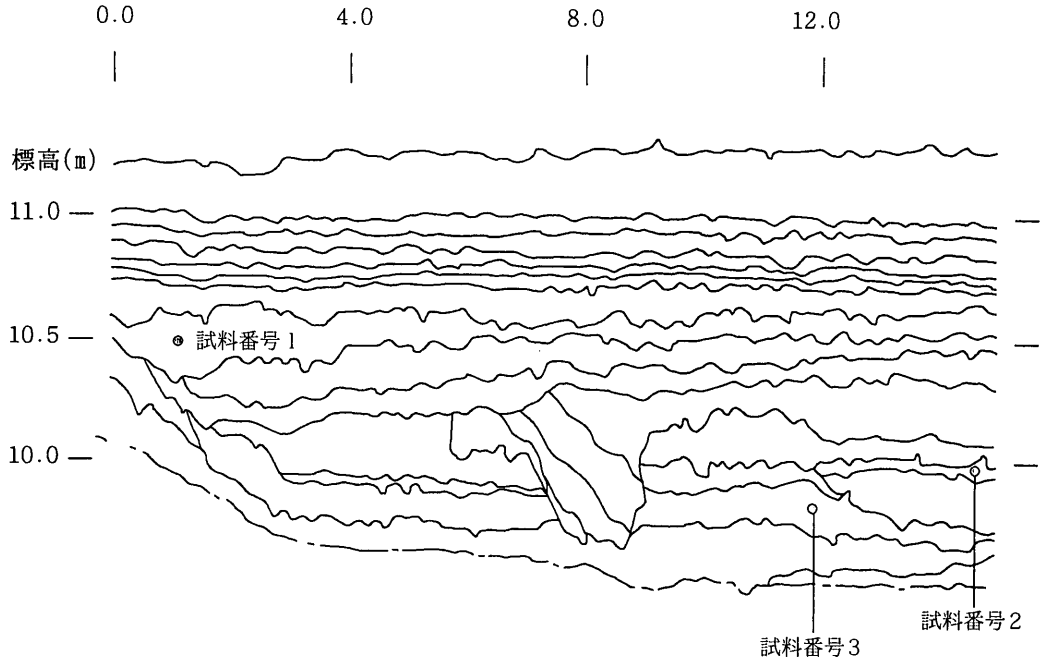
試料として，Ⅱ区東壁ＳＸ19埋積物３点，Ⅱ区ＳＤ135埋積物１点，Ⅲ区北壁遺構面下位の流路（包含層Ⅳ下位層）埋積物１点の，合計５点が採取された（第５表，第184～186図）。これらの試料は，暗灰黄～黒褐色を呈するシルトないし粘土からなる。

第５表　分析試料の一覧

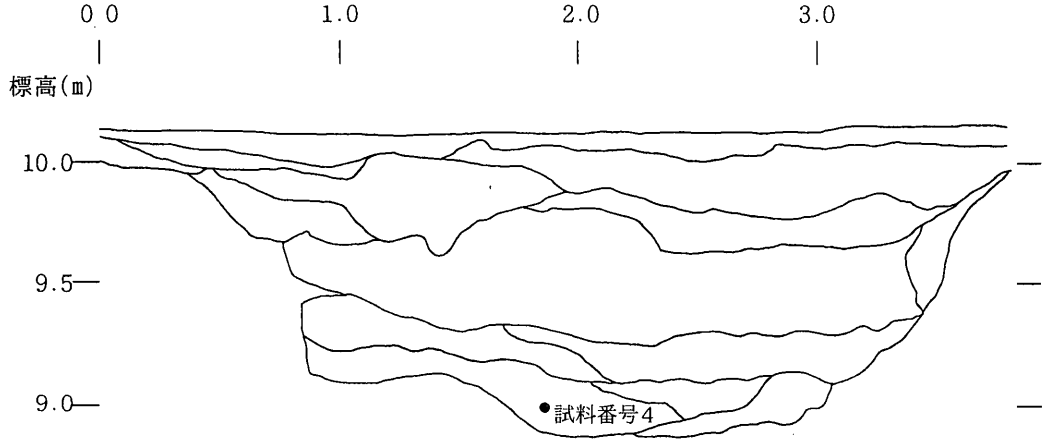
番号	地点および層位	土性	時代性
1	Ⅱ区東壁ＳＸ19最上層	暗灰黄褐色粘質土	６世紀末～７世紀前半以降
2	Ⅱ区東壁ＳＸ19下層	暗灰色粘土	
3	Ⅱ区東壁ＳＸ19下層	黒褐色粘土	
4	Ⅱ区ＳＤ135下層	黒褐色シルト	９世紀後半代
5	Ⅲ区北壁　遺構面下位流路埋土（包含層Ⅳ下位層）	暗灰色粘土	縄文時代晩期以前

２．花粉分析方法

試料を湿重で約10ｇ秤量し，水酸化カリウム処理，篩別（250μm），重液分離（臭化亜鉛，



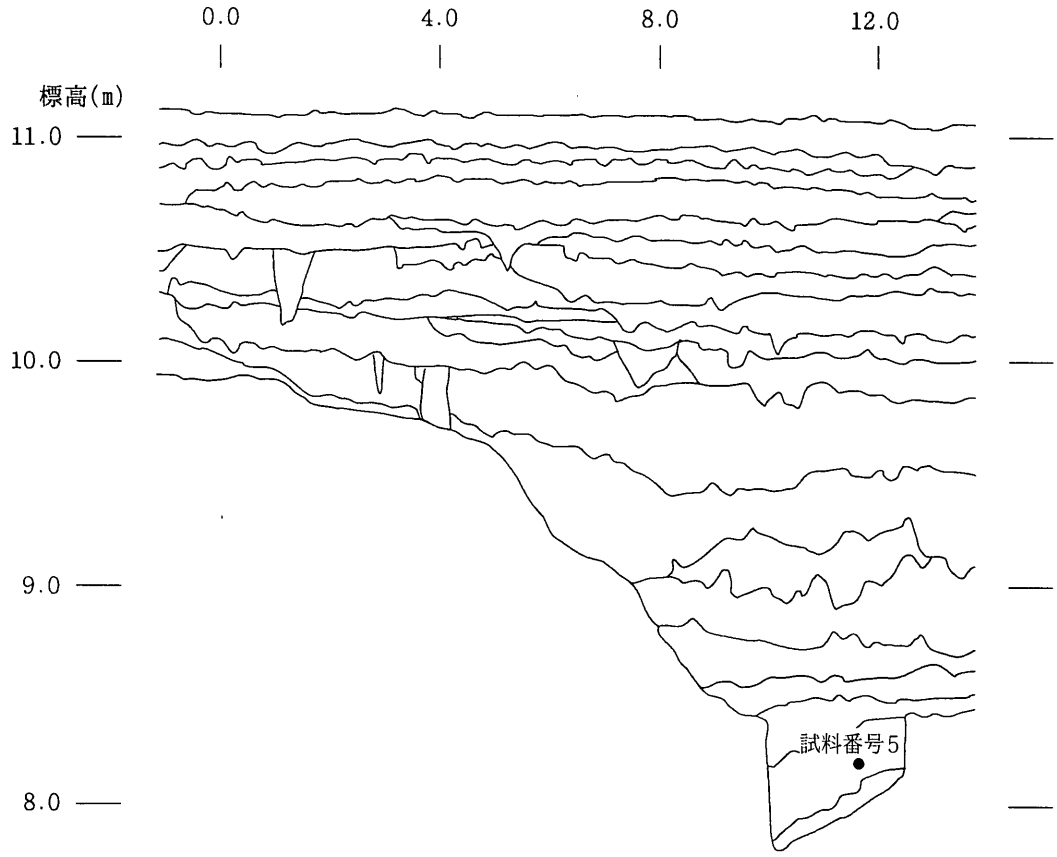
第184図　II区東壁ＳＸ19の土層断面および試料採取層位



第185図　II区ＳＤ135の土層断面および試料採取層位

比重2.3)，フッ化水素酸処理，アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的な処理を施して，花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し，出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は，同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。



第186図　III区北壁の土層断面および試料採取層位

図中の各種類の出現率は，木本花粉が木本花粉総数を，草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした，百分率で算出する。なお，図表中で複数の種類をハイフォン（-）で結んだものは，種類間の区別が困難なものを示す。

3. 結果

結果を表2，図4に示す。以下，地点ごとに結果を示す。

＜II区東壁S X19＞

試料番号1～3では，3試料とも花粉化石がほとんど検出されない。わずかに検出される花粉化石も保存状態が悪い。

＜II区S D135＞

試料番号4では，マツ属（複維管束亜属を含む）が多産し，次いでコナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ウコギ科が検出される。この他，ツガ属，スギ属，シイノキ属な

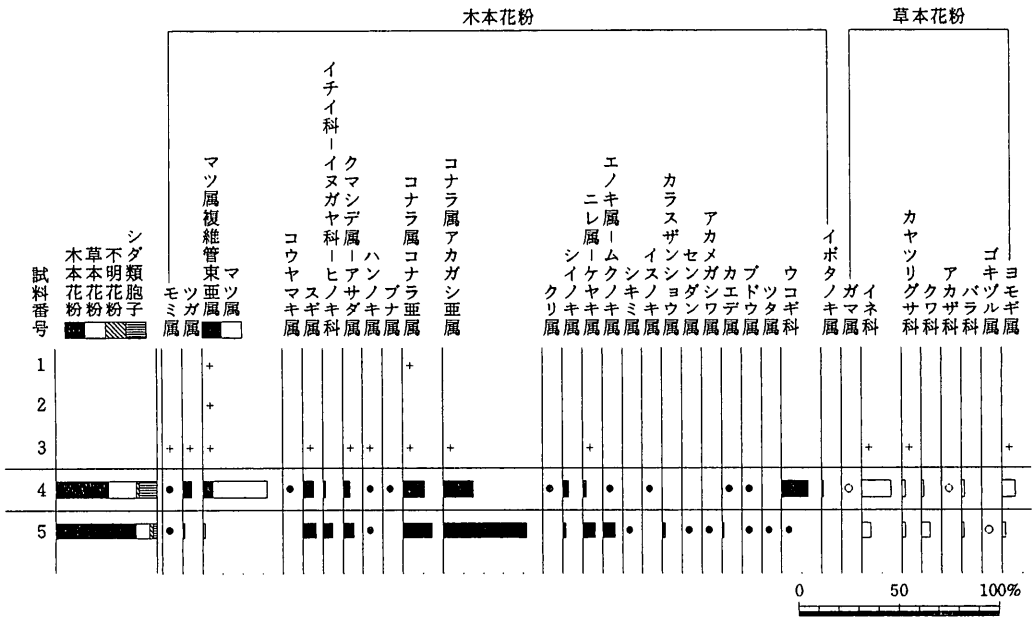
第6表　花粉分析結果

種類 ＼ 試料番号	1	2	3	4	5
木本花粉					
モミ属	-	-	1	1	2
ツガ属	-	-	7	12	3
マツ属複維管束亜属	-	-	13	1	
マツ属	1	1	7	67	2
コウヤマキ属	-	-	-	1	-
スギ属	-	-	3	14	16
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	-	-	4	12
ヤナギ属	-	-	-	1	-
クマシデ属－アサダ属	-	-	1	9	13
ハンノキ属	-	-	2	1	1
ブナ属	-	-	-	2	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	3	27	34
コナラ属アカガシ亜属	-	-	8	38	98
クリ属	-	-	-	2	-
シイノキ属	-	-	-	8	4
ニレ属－ケヤキ属	-	-	1	5	15
エノキ属－ムクノキ属	-	-	-	2	15
ヤドリギ属	-	-	1	-	-
シキミ属	-	-	-	-	1
イスノキ属	-	-	1	-	-
カラスザンショウ属	-	-	-	4	1
センダン属	-	-	-	-	1
アカメガシワ属	-	-	-	-	1
カエデ属	-	-	-	1	3
ブドウ属	-	-	-	2	2
ツタ属	-	-	-	-	1
ツバキ属	-	-	-	-	2
ウコギ科	-	-	-	33	2
イボタノキ属	-	-	-	3	-
スイカズラ属	-	-	-	1	-
草本花粉	-	-	-	3	-
ガマ属	-	-	-	1	-
イネ科	-	-	14	67	13
カヤツリグサ科	-	-	1	8	5
クワ科	-	-	-	5	12
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	2	-	-
アカザ科	-	-	-	3	-
ナデシコ科	-	-	-	1	-
アブラナ科	-	-	-	1	-
バラ科	-	-	-	6	3
セリ科	-	-	-	1	-
ゴキヅル属	-	-	-	-	1
ヨモギ属	-	-	4	30	5
キク亜科	-	-	-	1	-
タンポポ亜科	-	-	1	1	-
不明花粉	-	-	-	14	9
シダ類胞子	-	-	1	1	-
ミズワラビ属	-	-	1	-	-
他のシダ類胞子	1	1	24	85	12
合　計					
木本花粉	2	1	34	248	233
草本花粉	0	0	22	125	39
不明花粉	0	0	0	14	9
シダ類胞子	1	1	25	85	12
総計（不明を除く）	3	2	81	458	284

どが検出される。草本花粉では，ガマ属，イネ科，カヤツリグサ科，クワ科，ヨモギ属などが検出されるが，全体的に出現率が低率である。

＜Ⅲ区北壁＞

試料番号５では，アカガシ亜属が最も高率に出現し，次いでコナラ亜属が検出される。草本花粉では，イネ科，カヤツリグサ科，クワ科，ヨモギ属などが検出されるが，総花粉・胞子数に対して草本花粉の占める割合が低率である。



第187図　主要花粉化石群集の層位分布

出現率は，木本花粉は木本花粉化石総数，草本花粉は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお，○●は１％未満，+は木本花粉100・体未満の試料について・出した種類を示す。

4. 考察

Ⅱ区東壁ＳＸ19から採取された３点の試料からは，花粉化石がほとんど検出されない。僅かに検出される花粉化石も保存状態が悪く，外膜が溶けて薄くなっていたり，壊れている。これらの花粉化石は，何らかの要因により分解・消失したと考えられる。よって，今回の調査では，花粉化石が比較的良好に検出されたⅡ区ＳＤ135とⅢ区北壁包含層Ⅳ下位層から得られた花粉化石群集を用いて，周辺植生について検討を加える。

Ⅲ区北壁包含層Ⅳ下位層の試料番号５では，アカガシ亜属が最も高率に出現し，次いでコナラ亜属が検出される。この内，アカガシ亜属は暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素で

ある。よって，縄文時代晩期以前，周辺は暖温帯に属していたとみられ，常緑広葉樹のアカガシ亜属を中心とする暖温帯常緑広葉樹林が成立していたと推定される。この他にもスギ属，コナラ亜属，シイノキ属，ニレ属－ケヤキ属，エノキ属－ムクノキ属，カラスザンショウ属，カエデ属なども生育していたと思われ，種類構成の豊富な植生であったと推定される。

ところで，高松平野に位置する林・坊城遺跡，丸亀平野東端に位置する下川津遺跡でも花粉分析や樹種同定が行われており（パリノ・サーヴェイ株式会社，1990,1993），推定される古植生は今回の調査結果と類似している。このことから，丸亀平野・坂出平野・高松平野においては，当時類似した暖温帯性の森林植生が存在していたと思われる。なお，流路の周辺には，イネ科，カヤツリグサ科，クワ科，ヨモギ属などの草本類が生育していたと思われる。

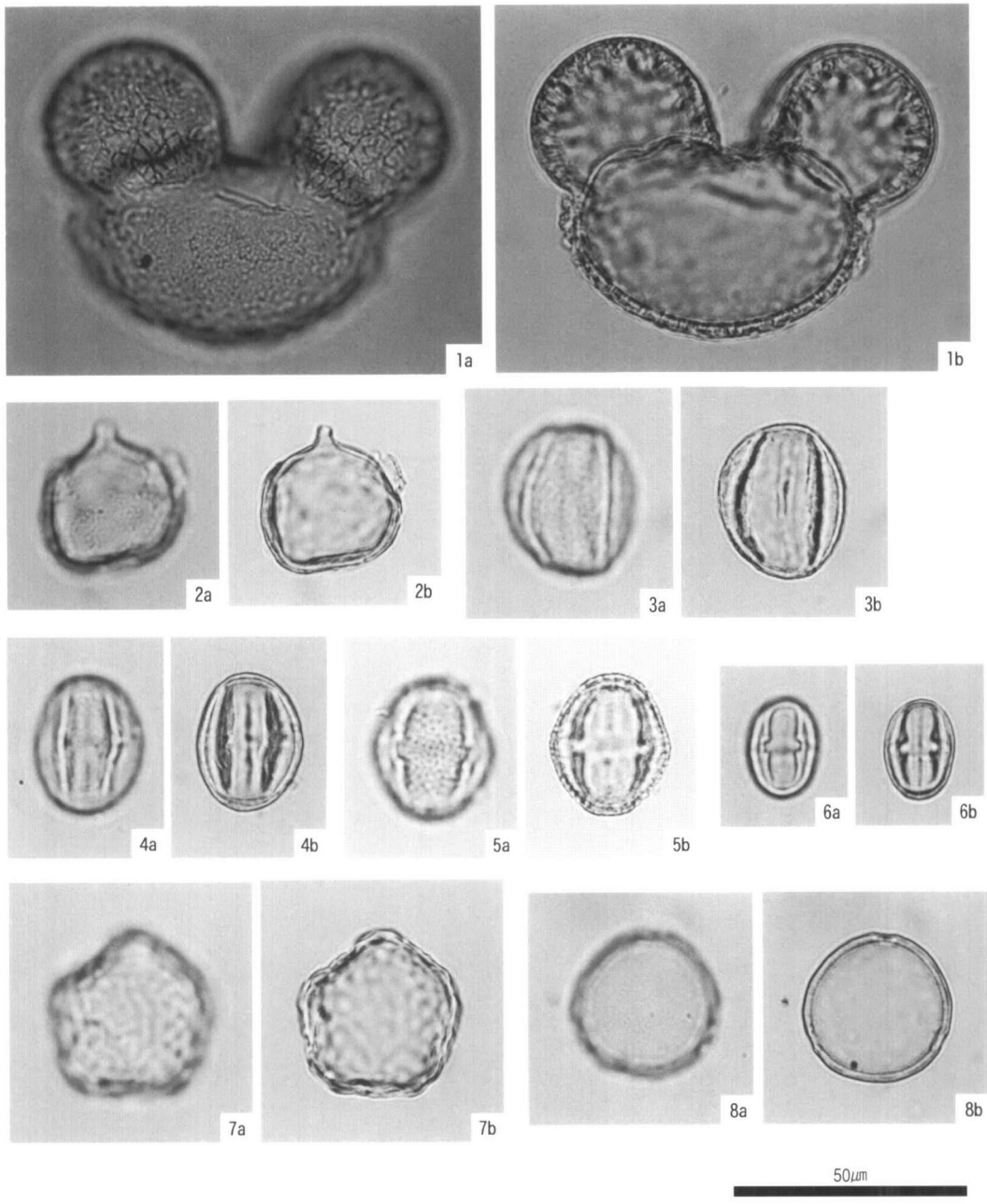
一方，Ⅱ区ＳＤ135の試料番号４では，複維管束亜属を含むマツ属が多産する。マツ属花粉は，完新世後半以降になると増加・多産することが日本各地の調査で明らかにされているが，本地域でも例外でなく，先述の林・坊城遺跡が弥生時代以降に，また下川津遺跡が平安時代以降に同様な変化が認められている。これは，人間の活動が活発となり，周辺の森林植生が破壊されて二次林としてマツ林が分布拡大したことを示すと考えられている。おそらく，ここでのマツ属の多産も同様なことが考えられる。すなわち，９世紀後半以降，遺跡付近にある飯野山などの山地も同様な景観を示しており，マツ二次林が存在していたと思われる。また，ＳＤ135の周辺には，イネ科，カヤツリグサ科，クワ科，ヨモギ属などの草本類が生育していたと思われる。

引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社（1990）下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告．瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ「下川津遺跡－第２分冊－」，p.479-518，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）花粉分析とプラント・オパール分析．高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告「林・坊城遺跡」，p.239-263，香川県教育委員会他．

写真１　花粉化石



１．マツ属（試料番号；４）
２．スギ属（試料番号；４）
３．コナラ属コナラ亜属（試料番号；４）
４．コナラ属アカガシ亜属（試料番号；４）
５．ウコギ科（試料番号；４）
６．シイノキ属（試料番号；４）
７．ニレ属ーケヤキ属（試料番号；４）
８．エノキ属ームクノキ属（試料番号；４）

第2節　C14　放射性炭素年代測定

（株）地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について，別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

(1) 報告内容の説明

14C age(y　BP)：　14C年代測定値

試料の14C／12C比から，単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した年代。半減期として5568年を用いた。

補正14C age(y　BP)：補正14C年代値

試料の炭素安定同位体比（13C／12C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り14C／12Cの測定値に補正値を加えた上で，算出した年代。

δ13C(permil)：　試料の測定14C／12C比を補正するための13C／12C比。

この安定同位体比は，下式のように標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表現する。

$$\delta 13C\ (‰) = \frac{(13C/12C)[試料]-(13C/12C)[標準]}{(13C/12C)[標準]} \times 1000$$

ここで，13C／12C[標準]＝0.0112372である。

暦年代：　過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により，暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値により，補正曲線を作成し，暦年代を算出する。(Stuiver et al.,1993;Vogel et al.,1993,;Talma and Vogel, 1993) ただし，この補正は約10,000 y BPより古い試料には適用できない。

(2) 測定方法などに関するデータ

測定方法　AMS：加速器質量分析

Radiometric：液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他：試料の前処理，調製などの情報

前処理　acid-alkali-acid：酸－アルカリ－酸洗浄

acid washes：酸洗浄

acid etch：酸によるエッチング

調整，その他

Bulk-Low Carbon Material：低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction：骨，歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction：木材のセルローズ抽出

Extended Counting：Radiometricによる測定の際，測定時間を延長する

graphite：ＡＭＳ測定の際，最終的に試料を石墨に調製する

benzene：Radiometricによる測定の際，最終的に試料をベンゼンに調製する

分析機関：BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, Fl.33155, U.S.A

Report of Radiocarbon Dating Analyses

測定番号	試料名	試料種	14C age (y BP)	δ13C (permil)	補正14C age (y BP)	暦年代		
Beta- 124547	OWK-2	wood	2320 ± 50	-30.8	2230 ± 50	交点	BC 355,290,230	
						2SIGMA (95%probability)	BC 390 TO 165	
						1SIGMA (68%probability)	BC 375 TO 195	
整理番号 9831	測定方法	Radiometric	処理・調製・その他		acid-alkali-acid benzene			
Beta- 124548	OWK43-1	charred material	2470 ± 70	-27.5	2430 ± 70	交点	BC 485,465,425	
						2SIGMA (95%probability)	BC 790 TO 380	
						1SIGMA (68%probability)	BC 760 TO 635	BC 560 TO 400
整理番号 9832	測定方法	Radiometric	処理・調製・その他		acid-alkali-acid benzene			

＊14Cの半減期は5568年を用いた。誤差は±1sigma

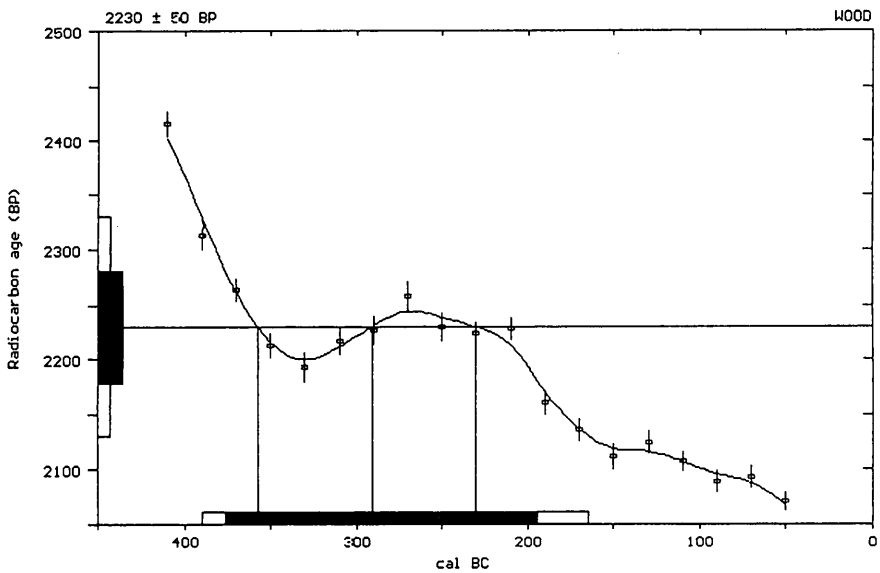
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables:C13/C12=-30.8:lab mult.=1)

Laboratory Number:	Beta-124547
Conventional radiocarbon age:	**2230 ± 50 BP**
Calibrated results: (2 sigma, 95% probability)	**cal BC 390 to 165**

Intercept data:

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve:	cal BC 355 and cal BC 290 and cal BC 230
1 sigma calibrated results: (68% probability)	cal BC 375 to 195



References:

Pretoria Calibration Curve for Short Lived Samples
Vogel, J. C., Fuls, A., Visser, E. and Becker, B., 1993, Radiocarbon 35(1), p73-86

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S. and Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Calibration - 1993
Stuiver, M., Long, A., Kra, R. S. and Devine, J. M., 1993, Radiocarbon 35(1)

第188図　放射性炭素年代測定結果図1

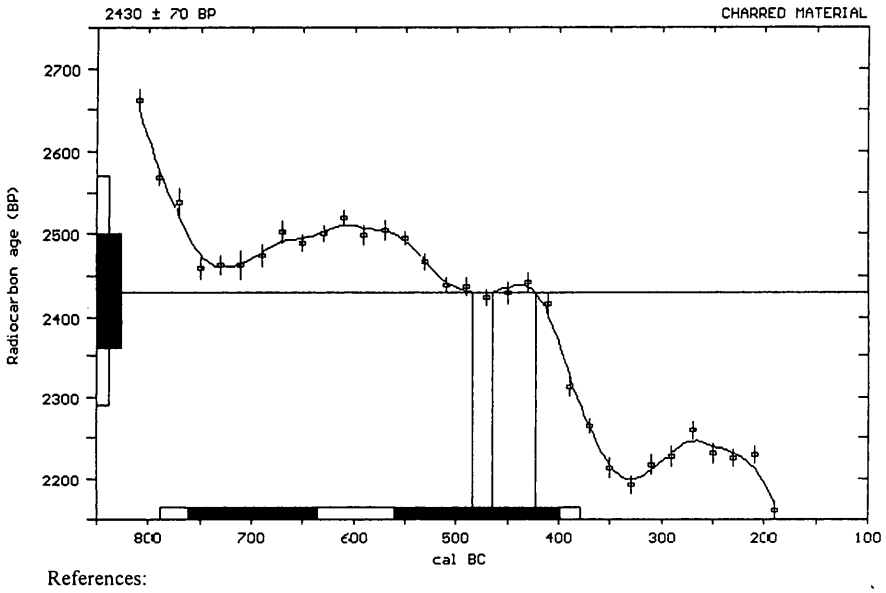
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables:C13/C12=-27.5:lab mult.=1)

Laboratory Number:	Beta-124548
Conventional radiocarbon age:	**2430 ± 70 BP**
Calibrated results: (2 sigma, 95% probability)	**cal BC 790 to 380**

Intercept data:

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve:	cal BC 485 and cal BC 465 and cal BC 425
1 sigma calibrated results: (68% probability)	cal BC 760 to 635 and cal BC 560 to 400



References:

Pretoria Calibration Curve for Short Lived Samples
Vogel, J. C., Fuls, A., Visser, E. and Becker, B., 1993, Radiocarbon 35(1), p73-86

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S. and Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Calibration - 1993
Stuiver, M., Long, A., Kra, R. S. and Devine, J. M., 1993, Radiocarbon 35(1)

第189図　放射性炭素年代測定結果図 2

第３節　川津川西遺跡から出土した木製品および種実の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

川津川西遺跡では，古代の流路などが検出されており，曲物や杭などの木製品，種実等の植物遺体が出土している。木製品の中には，漆を塗布した曲物や板なども認められる。

本報告では，古代の木製品について樹種同定を行い，用材に関する資料を得る。また，種実の同定を行い，周辺植生および植物食糧等に関する資料を得る。

1．木製品の樹種

(1) 試料

試料は，出土した木製品25点（試料番号1～25）である。各試料の詳細は，樹種同定結果とともに表１に記した。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。作製したプレパラートは，生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表１に示す。25点の試料は，針葉樹６種類（マツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ属・カヤ），広葉樹６種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属・クリ・サクラ属・ニガキ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を，以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は比較的広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり，放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列，１～15細胞高。

・スギ（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

第8表　樹種同定結果

番号	遺物番号	出土遺構	時期	器種	樹種
1	439	Ⅱ区SD135下層	古代	円形曲物蓋？	ヒノキ
2	440	Ⅱ区SD135下層	古代	円形曲物底板	ヒノキ属
3	442	Ⅱ区SD135下層	古代	円形曲物蓋？	ヒノキ
4	447	Ⅱ区SD135下層	古代	板材	ヒノキ
5	448	Ⅱ区SD135下層	古代	板材	ヒノキ
6	449	Ⅱ区SD135下層	古代	棒状材	ヒノキ
7	443	Ⅱ区SD135下層	古代	円形曲物底板？	ヒノキ
8	459	Ⅱ区SD135下層	古代	杭	マツ属複維管束亜属
9	457	Ⅱ区SD135下層	古代	杭	クリ
10	460	Ⅱ区SD135下層	古代	杭	ヤナギ属
11	441	Ⅱ区SD135下層	古代	円形曲物底板？	サワラ
12	455	Ⅱ区SD135下層	古代	棒状材	ニガキ
13	446	Ⅱ区SD135下層	古代	板材	ヒノキ
14	454	Ⅱ区SD135下層	古代	部材(柱？)	カヤ
15	453	Ⅱ区SD135下層	古代	板材	サクラ属
16	462	Ⅱ区SD135下層	古代	杭	マツ属複維管束亜属
17	458	Ⅱ区SD135下層	古代	杭	コナラ属コナラ亜属
18	461	Ⅱ区SD135下層	古代	杭	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
19	452	Ⅱ区SD135下層	古代	板材	サワラ
20	444	Ⅱ区SD135下層	古代	円形曲物底板？	スギ
21	451	Ⅱ区SD135下層	古代	板材	スギ
22	456	Ⅱ区SD135下層	古代	棒状材	サワラ
23	463	Ⅱ区SD135下層	古代	杭	マツ属複維管束亜属
24	450	Ⅱ区SD135下層	古代	部材	コナラ属アカガシ亜属
25	445	Ⅱ区SD135下層	古代	板材	スギ

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で，1分野に2～4個。放射組織は単列，1～15細胞高。

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で，1分野に1～3個。放射組織は単列，1～15細胞高。

・サワラ（Chamaecyparis pisifera（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で，1分野に1～3個。放射組織は単列，1～15細胞高。

・ヒノキ属（Chamaecyparis）　ヒノキ科

上記ヒノキまたはサワラであるが，保存状態が悪く，分野壁孔の観察ができなかった試料をヒノキ属とした。

・カヤ（Torreya nucifera Sieb. et Zucc.）　イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で，1分野に1～4個。放射組織は単列，1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・ヤナギ属（Salix）　ヤナギ科

散孔材で，道管は単独または2～3個が年輪全体にほぼ一様に高い密度で分布するが，年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，単列，1～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）ブナ科

環孔材で孔圏部は1～6列，孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち，漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属（Quercus subgen. Lepidobalanus）　ブナ科

環孔材で，孔圏部は1～2列である。孔圏外小道管は，保存が悪く観察できない。道管は単穿孔を有している。放射組織は単列組織と複合放射組織とがある。

以上の特徴から，コナラ亜属クヌギ節またはコナラ節であるが，小道管が観察できたかなったために同定には至らなかった。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科

放射孔材で，管壁厚は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列，孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～15細胞高。

・サクラ属（Prunus）　バラ科

環孔性散孔材で，道管は単独または2～8個が複合して散在し，晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，内壁にはらせん肥厚が認めら

れる。放射組織は異性Ⅲ型，１～５細胞幅，１～40細胞高。

・ニガキ（Picrasma quassioides（D. Don）Benn.）　ニガキ科

環孔材で孔圏部は４～６列，孔圏外で緩やか管径を減じたのち漸減する。小道管は単独または２～４個が放射方向あるいは塊状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性，１～５細胞幅，１～40細胞高。

（4）考察

木製品には，広葉樹と針葉樹が各６種類認められた。用途別に種類構成を見ると，曲物と板材は，スギとヒノキ属（ヒノキ・サワラ）が利用されている。一方，杭には複維管束亜属，クリ，ヤナギ属，ニガキ，クヌギ節が認められ，スギやヒノキ属は１点も認められなかった。このことから，曲物や板材と杭材とでは用材が異なっていたことがうかがえる。

スギとヒノキ属を曲物に利用する例は，多くの遺跡で確認されている（島地･伊東，1988；伊東，1991）。香川県内でも，下川津遺跡や居石遺跡等で確認されており（島地・林，1990；能城・鈴木，1990；鈴木・能城，1995），古くから利用されていた様子がうかがえる。曲物は，檜物とも呼ばれ，現在でもヒノキが最も適した材とされる（成田，1996）。また，地域によっては，スギを使用する地域もある。この背景には，ヒノキやスギが木理が通直であり，曲物の加工に重要な割裂性が大きいこと，耐水性が比較的高いこと等が挙げられる。今回の結果は，古代にはすでに曲物の適材として，スギやヒノキを選択的に利用していたことを示している。

一方，杭は，これまで香川県内で行われた調査例を見ても，多くの種類が確認されており，特定の種類が多く利用される傾向は認められない。このことから，周辺で入手可能な木材を利用したり，加工時の余材や廃材の転用が行われたことが推定される。本遺跡で行った花粉分析の結果では，コナラ亜属，アカガシ亜属，マツ属は比較的多く確認されている。これは，杭材の種類構成とも基本的には調和的であり，周辺に生育していた樹木を杭材として利用したことがうかがえる。

2．種実の種類

（1）試料

試料は，ＳＤ135下層から出土した種実２点（試料番号26,27）である。

（2）方法

肉眼および双眼実体顕微鏡を用いて，試料の形態的特徴を観察し，周類を同定する。

(3) 結果

試料番号27がマツ属，試料番号26がモモに同定された。以下に形態的特徴を記す。

・マツ属（Pinus sp.）　マツ科

球果が検出された。円錐状卵型で，2cm程度。上半部は破損する。柄はほとんどない。種鱗は長楕円状の矩形を呈し，先端部は肥厚する。先端部の肥厚は，不規則な４～５角形である。

・モモ（Prunus parsica Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは3cm程度。核の形は楕円形でやや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり，先端部はやや尖る。一方の側面にのみ，縫合線が顕著に見られる。表面は，不規則な線状のくぼみがあり，全体としてあらいしわ状に見える。

(4) 考察

種実は，モモとマツ属に同定された。このうち，マツ属は花粉分析や杭材の樹種同定結果でも認められており，周辺に生育していたことが推定される。今回の球果についても，周辺に生育していたものに由来すると考えられる。

一方モモは，栽培植物として大陸より渡来した植物であり，その渡来時期は縄文時代前期まで遡ることができる（粉川，1988）。果実が可食であるが，長期間の保存には耐えない。そのため，本遺跡周辺でモモが栽培されていたと推定される。

引用文献

伊東隆夫（1991）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料，26，p.91-189.

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．金関　恕・佐原　眞編「弥生文化の研究２　生業」，p.112-115，雄山閣.

成田壽一郎（1996）木工諸職双書　曲物・箍物．205p.，理工学社.

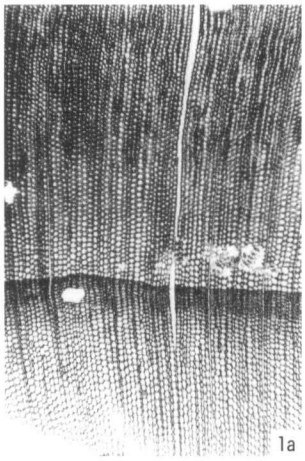
能城修一・鈴木三男（1990）昭和63年度調査の分析委託結果．「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵　文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡　－第２分冊－」，p.533-567，香川県教育委員会　・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団.

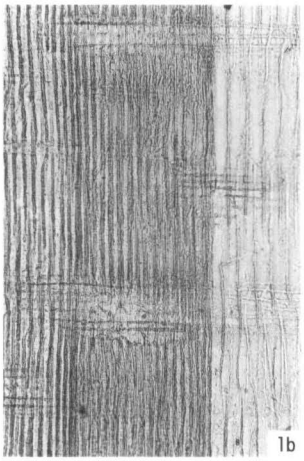
島地　謙・林　昭三（1990）昭和61年度調査の分析委託結果．「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵　文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡　－第２分冊－」，p.520-532，香川県教育委員会　・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団.

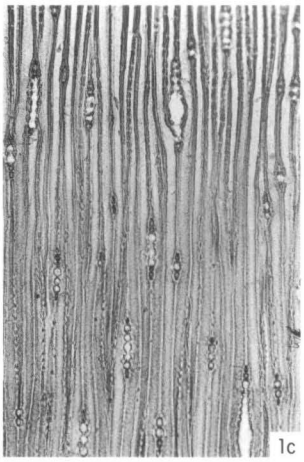
島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣.

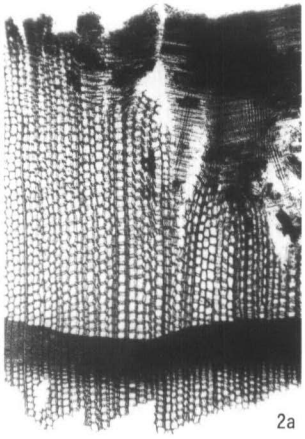
鈴木三男・能城修一（1995）高松市居石遺跡出土木材の樹種．「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第７冊」，p.165-171，高松市教育委員会・建設省四国地方建設局.

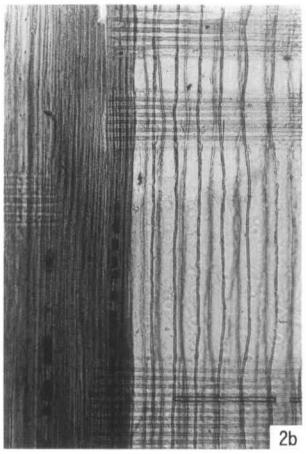
写真２　木材（１）

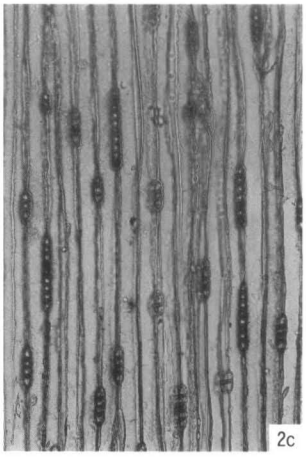

1a

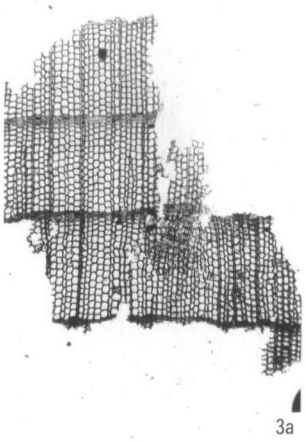

1b

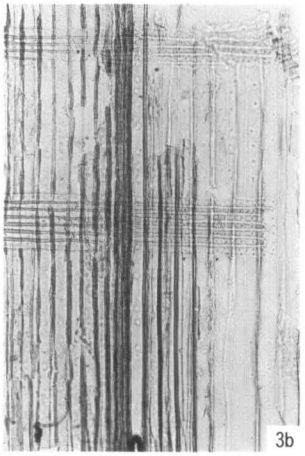

1c

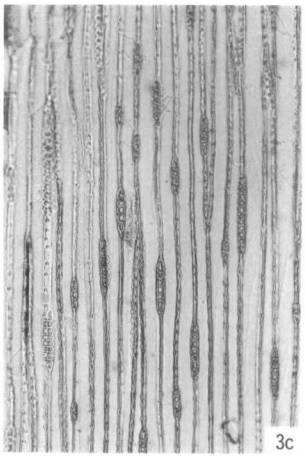

2a


2b


2c


3a

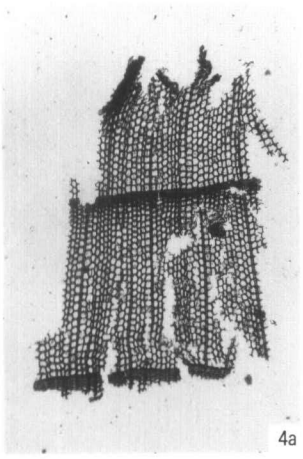

3b

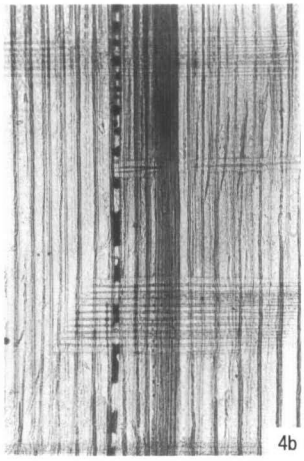

3c

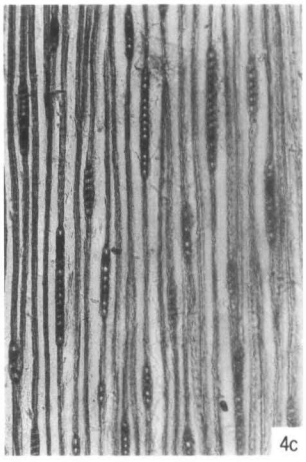
1．マツ属複維管束亜属（試料番号16）
2．スギ（試料番号25）
3．ヒノキ（試料番号１）
　a：木口，b：柾目，c：板目

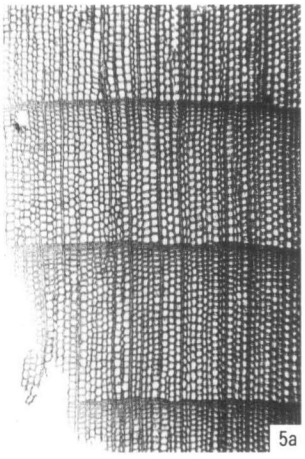
200μm：a
200μm：b，c

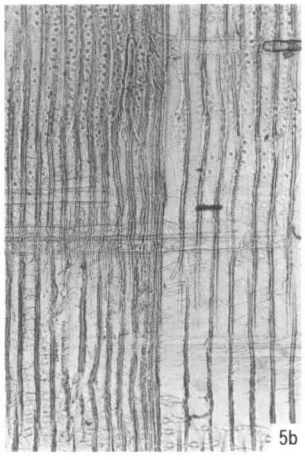
写真３　木材（２）

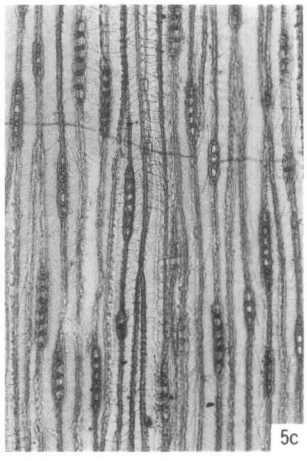


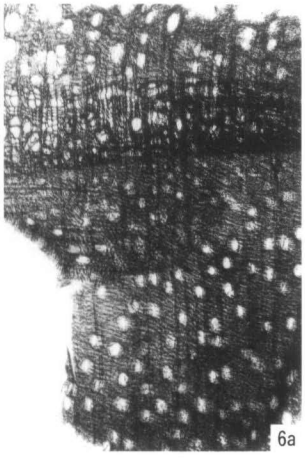


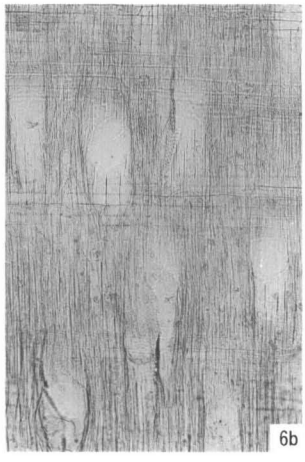


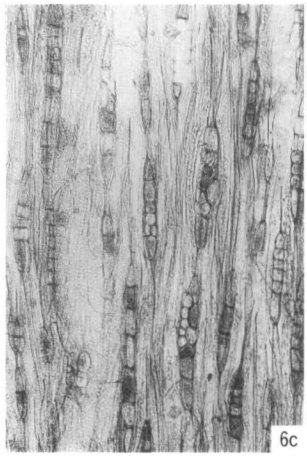








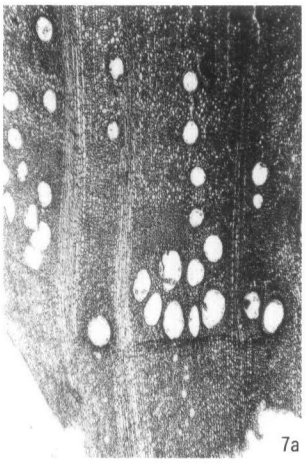


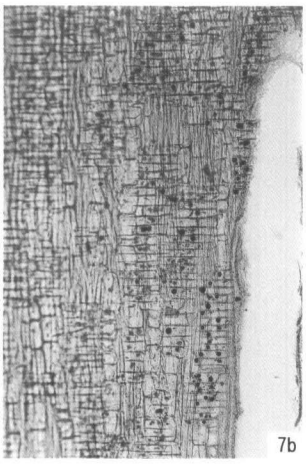


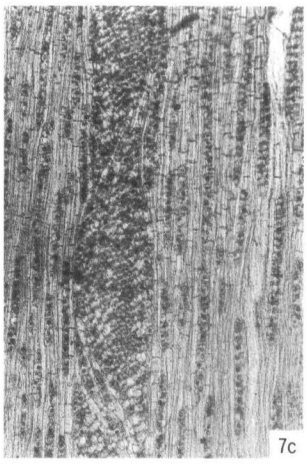
4．サワラ（試料番号11）
5．カヤ（試料番号14）
6．ヤナギ属（試料番号10）
　a：木口，b：柾目，c：板目

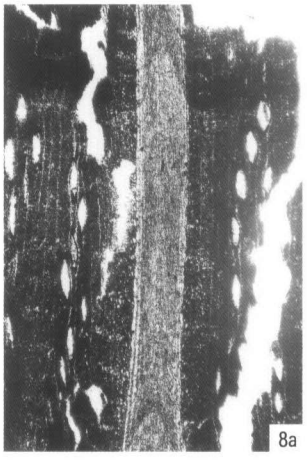
200μm：a
200μm：b、c

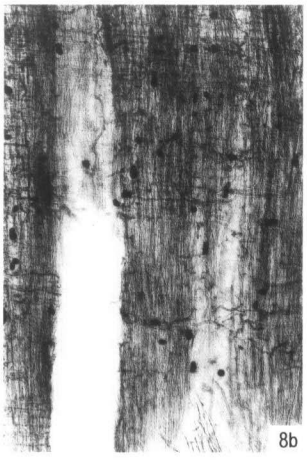
写真４　木材（３）

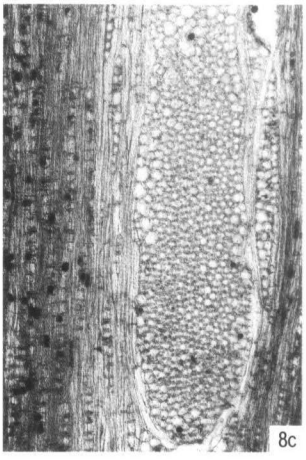

7a

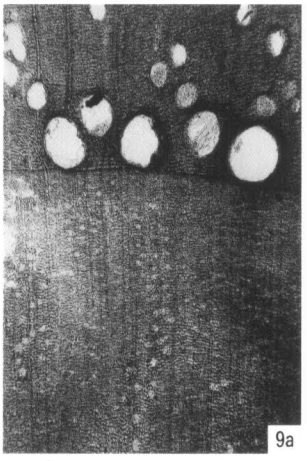

7b

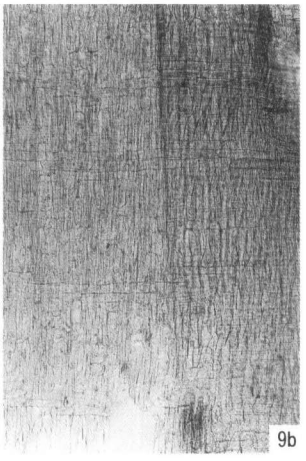

7c

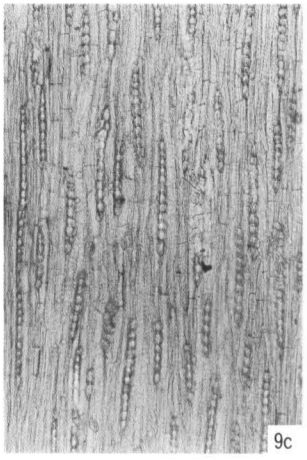

8a


8b


8c


9a

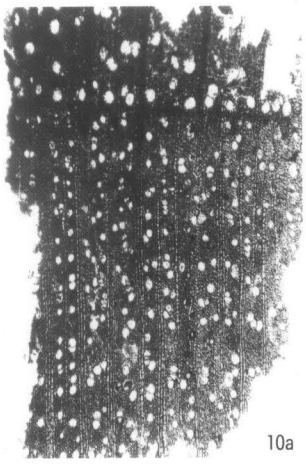

9b

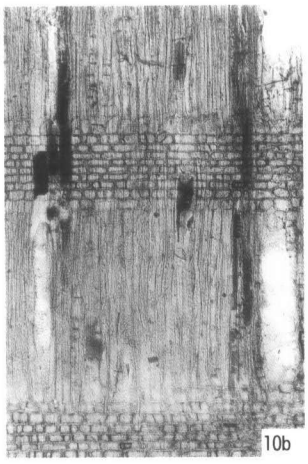

9c

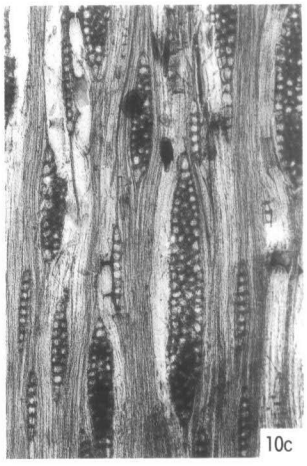
７．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号18）
８．コナラ属アカガシ亜属（試料番号24）
９．クリ（試料番号９）
　ａ：木口，ｂ：柾目，ｃ：板目

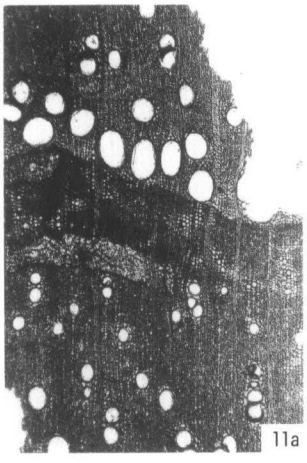
200μm：ａ
200μm：ｂ，ｃ

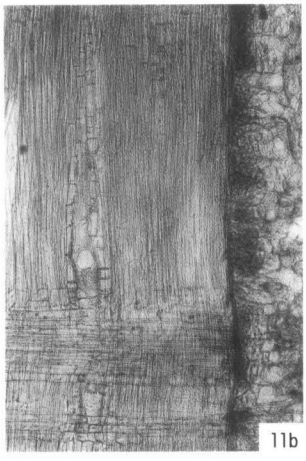
写真５　木材（４）・種実

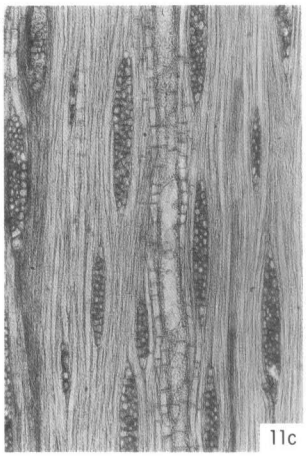

10a


10b


10c


11a


11b


11c

11

12

200μm：10 a , 11 a
200μm：10 b - c , 11 b - c
5.0mm：27
1.0cm：26

10．サクラ属（試料番号15）　a：木口、b：柾目、c：板目
11．ニガキ（試料番号12）　a：木口、b：柾目、c：板目
12．マツ属（試料番号27）
13．モモ（試料番号26）

第4節　川津川西遺跡から出土した漆片の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

川津川西遺跡では，古代の流路などから木製品や種実等が出土している。木製品の中には，漆が塗布されているものもある。

本報告では，出土した漆とみられる塗膜片について，漆か否かを判定するための分析を行う。また，木製品に塗布されていた漆2点について，漆塗りの構造を知るために，薄片作成・観察を行う。なお，漆の判定については，あらかじめ有機物の素材が予想できる場合，物質の多重結合や官能基の構造が比較でき，物質の同定・確認に有効な，赤外分光分析（山田,1986）を選択した。

1．漆？の赤外分光分析

(1) 試料

試料は，出土した漆？とされる膜状の黒色物質1点である。

(2) 分析方法

a）分析試料の調製

試料をメノウ乳鉢で微粉砕（200メッシュ以下）し，分析試料とした。また，漆の標準物質は，風乾処理後に得られる膜状固形物を分析に供した。

b）赤外線吸収スペクトルの測定

調製した微粉砕試料を，以下の条件で測定した（山田,1986）。

装　置：島津製作所製ＦＴＩＲ－８１００Ａ

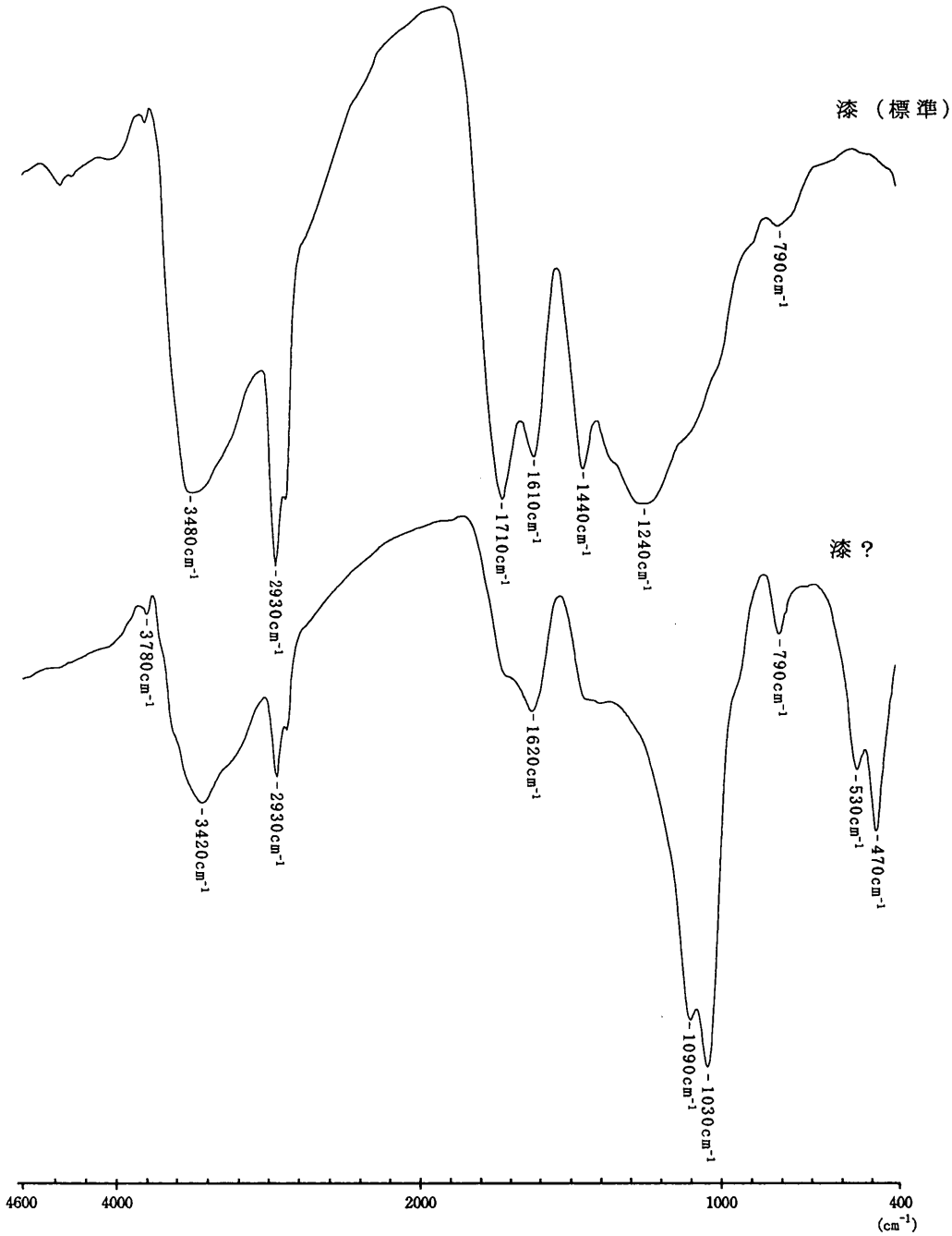
測光値（Measuring mode）：%T

分解能（Resolution）：4.0cm^{-1}

積算回数（No.of Scan）：40回

ゲイン（Gain）：自動

ミラー速度（Detector）：2.8mm/sec



第190図　漆？のＩＲスペクトル

アポダイズ関数（Apodization）：Happ-genzel

測定範囲：4600～400cm^{-1}

測定方法：ＫＢｒミクロ錠剤法

(3) 結果

試料および漆の標準物質の赤外線吸収スペクトルを，図１に示す。試料の吸収スペクトルは，3420cm^{-1}の幅広く強い吸収帯，2930cm^{-1}，1620cm^{-1}，1090cm^{-1}，1030cm^{-1}付近の強い吸収帯，3780cm^{-1}，790cm^{-1}，530cm^{-1}，470cm^{-1}の吸収帯が特徴的である。

このうち，3420cm^{-1}の吸収帯がＯ－Ｈ基，またはＮ－Ｈ基の伸縮振動に関する吸収と判断される。また2930cm^{-1}の吸収帯はＣ－Ｈ基，1620cm^{-1}はＣ＝Ｃ基，Ｃ＝Ｏ基，1090cm^{-1}以下の吸収帯はＳｉ－Ｏ基またはＡｌ－Ｏ基の伸縮振動に関する吸収と判断される。

これに対し，漆の標準物質の吸収スペクトルは，3480cm^{-1}，1240cm^{-1}，785cm^{-1}付近に幅広く強い吸収帯，2930cm^{-1}，1710cm^{-1}，1610cm^{-1}，1440cm^{-1}付近の吸収帯が特徴的である。このうち3480cm^{-1}の吸収帯はＯ－Ｈ基，またはＮ－Ｈ基の伸縮振動に関する吸収と判断される。また，2930cm^{-1}の吸収帯はＣ－Ｈ基の伸縮振動，1710cm^{-1}の吸収帯はＣ＝Ｏ基またはＮ－Ｈ基の伸縮振動，1610cm^{-1}の吸収帯はＣ＝Ｃ基またはＣ＝Ｏ基の伸縮振動，1440cm^{-1}はＣＨ2基またはＣＨ3基の対称変角振動，1240cm^{-1}の吸収帯はＣ－Ｏ基の伸縮振動またはＣＨ2基の面外変角振動，790cm^{-1}の吸収帯はＣＨ基の面外変角振動と判断される。

また，これらの強い吸収帯以外のところに弱い吸収帯が認められるが，これらは強い吸収帯に付随する吸収帯であると考えられる。

この中で，Ｓｉ－Ｏ基あるいはＡｌ－Ｏ基の吸収は，混在する土壌中の鉱物に由来するものと思われる。

(4) 考察

試料の赤外吸収スペクトルのパターンは，漆の標準試料として示した漆のパターンと類似しているが，試料の低波長側のスペクトルパターンに違いが認められる。そのため，漆の可能性があるものの，断定には至らない。漆は本来無色透明であり，いわゆる黒漆は油煙や炭粉等を混和してつくる（岡田，1995)。そのため，試料が漆とすれば，黒色の顔料などを混ぜて黒くしたと考えられる。パターンの違いは，このような混入物等に由来する可能性がある。

2. 漆塗りの構造

(1) 試料

試料は，ＳＤ135下層から出土した円形曲物蓋？（試料番号１）と，板材（試料番号５）の２点で，肉眼で黒色の塗布面が見られる。いずれも古代の木製品であり，別に報告した

樹種同定により，２点ともヒノキに同定されている。

(2) 方法

漆が付着した部分を木地ごと樹脂で抱埋し，固化させる。固化した樹脂とともに，木地を岩石切断用のカッターで切断し，約0.03㎜程度の薄さまで研磨してプレパラートとする。プレパラートを，偏光顕微鏡で観察する。

(3) 結果

試料番号１では，僅かに黒色の層が１層不連続で認められるが，不透明で，構造などは観察できない。一方，試料番号５では，薄い黒色の層が連続して認められる。しかし，構造などについては，観察できなかった。

(4) 考察

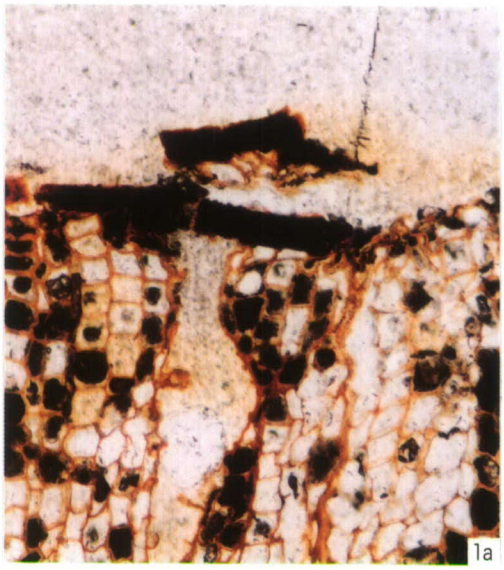
試料の黒色部分の薄片観察では，試料番号１で不透明な黒色の層が不連続で１層認められた。構造が観察できないため断定はできないが，漆に油煙や炭粉等を混和した下地（岡田，1995）の一部の可能性がある。一方，試料番号５では，作成した薄片の表面に連続で黒色の薄い層が認められ，一部では木地の中にも黒色物が見られる。そのため，炭粉等の下地の一部と考えられるが，状態が悪いために，詳細は不明である。

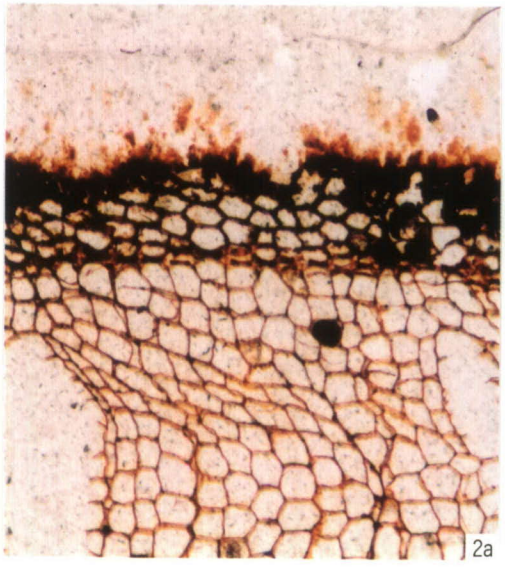
これらの製品について，漆が良好な状態で残存している場所があれば，その場所で再度薄片作成を行い，詳細を観察したい。

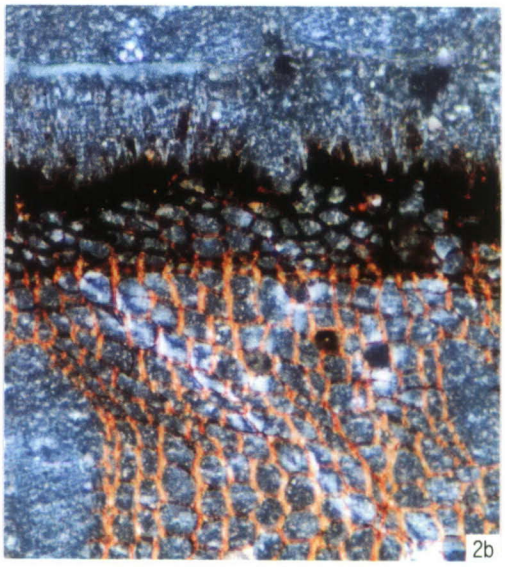
引用文献

岡田文男（1995）古代出土漆器の研究　顕微鏡で探る材質と技法．190p.，京都書院．
山田富貴子（1986）赤外線吸収スペクトル法．「機器分析のてびき第１集」，p.1-18，化学同人．

写真６　漆薄片の断面







100μm

1．試料番号１
2．試料番号５
　a：下方ポーラー，b：直交ポーラー

第５節　川津川西遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤　正己・鈴木瑞穂

概　要

９世紀後半から14世紀代に比定される川津川西遺跡から出土した鉄滓や鉄器破片及び鉄塊系遺物など４点を調査して，次の点が明らかになった。

＜１＞　出土遺物の２点は，鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓である。砂鉄系高炭素鋼（共析鋼クラス：0.77％Ｃ前後）を鍛冶原料として，折返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

＜２＞　出土椀形鍛冶滓の鉱物組成はヴスタイト（Wustite：FeO）と少量のファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO2）を晶出し，鉄分が64％台と高めで脈石成分（Ti，Ｖ，Mn，塩基性成分）は低め傾向である。

＜３＞　鉄器破片と鉄塊系遺物は，錆化されているが銑鉄と判明した。鍛冶原料鉄の可能性をもち，下げ（脱炭：酸素の酸化作用によって銑鉄中の炭素を除き錬鉄とする）られて錬鉄とするのであろう。

＜４＞　以上の結果からみて，当遺跡内では，直接鍛冶遺構の検出はなかったが，出土遺物からみて，鍛冶作業のあった事が間接的に証明されたことになる。

1．いきさつ

川津川西遺跡は，香川県坂出市川津町に所在する縄文時代から室町時代までの複合遺跡である。この遺跡内の９世紀後半から14世紀代の層位から鍛冶関連遺物が出土したので，当時の鉄器製作の実態を把握する目的から，金属学的調査の運びとなった。

2．調査方法

２－１．供試材

第９表に調査試料の履歴と調査項目を示す。

２－２．調査項目

(1)　肉眼観察

遺物の外観特徴を肉眼を通して捉える。

(2) マクロ組織

顕微鏡埋込み試料の断面全体像を，投影機の10倍で撮影している。

(3) 顕微鏡組織

供試材をベークライト樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の＃150，＃240，＃320，＃600，＃1,000と順を追って研磨し，最後に被研磨面をダイヤモンドの3 μmと1 μmで仕上げて，光学顕微鏡観察を行った。なお，金属鉄の炭化物は，ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）で，フェライト結晶粒はナイタル（5％硝酸アルコール液）で腐食（Etching）している。

(4) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と金属鉄の組織同定を目的として，ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み，その時に生じた窪みの面積をもって，その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

(5) ＣＭＡ（Computer Aided X-Ray Micro Analyzer）調査

ＥＰＭＡ（Electron Probe Micro Analyzer）にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は，別名Ｘ線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は，真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し，発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し，定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第1鉄（FeO）：容量法。

炭素（Ｃ），硫黄（Ｓ），燃焼容量法，燃焼赤外線吸収法

二酸化珪素（SiO2），酸化アルミニウム（Al203），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K20），酸化ナトリウム（Na2O），酸化マンガン（Mn0），二酸化チタン（TiO2），酸化クロム（Cr2O3），五酸化燐（P2O5），バナジウム（Ｖ），銅（Cu）：ＩＣＰ（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

(1) ＫＴＫ－1：含鉄椀形鍛冶滓

① 肉眼観察:平面が勾玉状を呈した小型椀形鍛冶滓の約1/3程度の破片である。側縁部の中央部付近に亀裂を走らせ，錆化と酸化土砂の付着があって，金属鉄の遺存が予想された。滓部は，淡灰色で比較的に軽い質感をもつ。表裏面共に小さな木炭痕が散在している。

② マクロ組織:写真９に示す。組織の上半分が金属鉄で，パーライト（Pearlite:フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）基地に，針状セメンタイト（Cementite:鉄と炭素との化合物Fe3C　C:6.69%）が析出する。また，下半分に錆化鉄のゲーサイト（Goethite:α-FeO・OH）と，鉄滓の白色粒状結晶のヴスタイトが認められる。

③ 顕微鏡組織：写真７の①～⑨に示す。①は錆化鉄に囲まれた鉄滓の鉱物相である。鉱物組成は，白色粒状のヴスタイト，淡茶褐色多角形結晶のヘーシナイト（Hercynite:FeO・Al2O3），淡灰色針状結晶の鉄・かんらん石のファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO2），基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉄器製作に際しての鉄素材の折り返し曲げ鍛接で高温作業となった鍛錬鍛冶滓に分類される。

次に②～⑦は，金属鉄組織である。まず②③は，フェライト（α鉄または純鉄の金相学状の呼称）とセメンタイトが層状をなし，セメンタイトが多少白く浮き上ってみえる層状組織で，全面パーライトとなった共析鋼（C:0.77%）組成である。このパーライトの占める面積は，鉄中の炭素含有量の推定値とつながり，炭素を含有しない純鉄ではパーライトの析出はなく，0.4%前後の炭素量で約半分，0.77%で全面パーライトとなる。このようにパーライトが多くなるに従い，鉄の硬さ，引張強さは増加し，逆に伸び，衝撃値などは減少する。0.77%以下の鋼は，亜共析鋼と呼ばれる。

④～⑦は，パーライト基地に白い網状セメンタイト（結晶粒界）と，針状セメンタイトを析出する。炭素含有量が0.77%以上の鋼を過共析鋼といい，焼なましの冷却過程でセメンタイトは，オーステナイトの粒界に網状に析出する。こういった領域のものも一部に認められた。鍛冶炉内で,900℃以上の温度で加熱された熱履歴が想定される含鉄部分であった。また，組織の一部はパーライトの周囲にフェライトが発達し，その中をセメンタイトが走る異常組織も認められた。

④ ビッカース断面硬度：写真７の⑧は全面パーライトの析出個所の硬度測定圧痕，⑨は針状セメンタイトとフェライト，基地パーライトの異常組織の硬度測定の圧痕である。硬度値は，前者が293Hv，後者が245Hvであった。組織に見合った値である。

⑤　ＣＭＡ調査：写真10のSE（２次電子像）に示した４種類の鉱物相についての高速定性分析結果がFig. 1である。A-Rankで検出される元素は，鉄（Fe）とガラス質成分（Si＋Al＋Ca＋Mg＋Ｋ＋Na），燐（Ｐ），酸素（Ｏ）などである。また，B-Rankで砂鉄特有成分のチタン（Ti）が認められた。

この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性Ｘ線像と定量分析結果が写真10である。SEに１の番号をつけた淡灰色盤状結晶は，鉄（Fe）と珪素（Si）に白色輝点が集中し，その元素の存在を表明し，定量分析値が71.4%FeO－31.7%SiO2組成で，鉄かんらん石のファイヤライト（２FeO・SiO2）が同定された。次にSEの２の番号は，暗黒色ガラス質スラグと淡灰色針状結晶である。これは，10mmのエリア中を分析対象としている。定量分析値は，ガラス質スラグ主体で，43.3% SiO2－17.5% Al2O3－4.8% CaO－8.8% K2O－1.1% Na2O組成に，28.5%FeOが加わる。淡灰色針状結晶はファイヤライト（２FeO・SiO2）である。なお，このガラス質成分中には，0.8% TiO2の含有量があり，鍛冶の鉄素材は砂鉄系の可能性が考えられる。

SEの３の番号は，鉄（Fe）にのみ白色輝点が集中し，142% FeOの定量値が得られているのは金属鉄（Fe）を表わす。最後のSEの４の番号は，鉄（Fe）と珪素（Si）に白色輝点が集中し，１の番号と同じファイヤライトで，71.4%FeO－31.7%SiO2組成が得られた。

(2)　ＫＴＫ－2：椀形鍛冶滓

①　肉眼観察：本来は楕円形状の椀形鍛冶滓であるが，現在は平面が扇形の破片である。表裏共に全体が淡褐色の酸化土砂に覆われているが，地は暗灰色である。裏面は細かい木炭痕を部分的に残す。緻密で重量感をもつ滓である。

②　顕微鏡組織：写真８の①～③に示す。鉱物組成は，大きく成長した白色粒状結晶のヴスタイトと，その粒間の極く少量の淡灰色不定形結晶のファイヤライト，基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鍛錬鍛冶滓に分類される。

③　ビッカース断面硬度：写真８の①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は，405Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は，450～500Hvであり(1)，その下限値を若干割っているが，圧痕に亀裂が走り誤差を生じているので，この値でもヴスタイトに同定される。

④　化学組成分析：第10表に示す。鉄分が多く，ガラス質分の少ない成分系である。すなわち，全鉄分（Total Fe）は，63.62%に対して，金属鉄（Metallic Fe）が0.10%，酸化

第１鉄（FeO）27.38%，錆化鉄含みで酸化第２鉄（Fe2O3）主体の60.39%の割合である。ガラス質成分（SiO2＋Al2O3＋CaO＋MgO＋K2O＋Na2O）は少なくて11.38%で，このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）を0.51%と低値を含む。また，砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO2）は0.33%，バナジウム（V）0.01%が検出されて，鉄素材は砂鉄系が想定される。これを裏付けるのが，銅（Cu）の0.007%の値である。脈石成分の少ない成分系で，酸化マンガン（MnO）が0.04%を加えると，この鉄滓は，鍛錬鍛冶滓に分類される。

(3) ＫＴＫ－3：鉄器錆化物（塊）

① 肉眼観察：錆膨れして不整楕円形をした長軸5.2cm大の鉄塊である。全体が赤褐色酸化土砂に覆われて亀裂を走らせ，一部は剥落するが，厚みをもつ板状鉄片らしい外観が窺えた。詳しい形状は不明瞭で，金属探知器からの反応もなかった。

② 顕微鏡組織：写真８の④に示す。組織は，既に金属鉄は遺存せず錆化鉄のゲーサイト（Goethite：α-FeO・OH）となるが，辛じて過共晶組成の白鋳鉄の痕跡を留めていた。④組織写真の左側半分に板状結晶のパーライト（正確にはオーステナイト）とセメンタイトとの共晶のレデプライト（Ledebulite）が読みとれる。自然腐食で残された組織の痕跡である。鍛冶原料鉄の可能性をもつ。

(4) ＫＴＫ－4：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：桃の種子状に丸味を帯びた小鉄塊である。表裏全体が淡褐色の酸化土砂に覆われて放射状の亀裂を発する。これも錆化が進んで金属鉄の残存はなく，金属探知器の反応はなかった。

② 顕微鏡組織：写真８の⑤～⑦に示す。金属鉄の残留はなく，錆化鉄のゲーサイトに白鋳鉄組織のレデプライト（向かって左側の組織）と右半分に黒い片状の黒鉛（Graphite）の析出が認められる。通常，鋳鉄（銑鉄）は，凝固冷却速度が速くなればセメンタイトを晶出し白鋳鉄，おそくなれば黒鉛が析出してねずみ鋳鉄（Gray cast iron）となる。この組織写真も，この凝固冷却速度の差が現れた結果となった。いずれにしろ，4.3%前後の炭素含有量をもつ鉄塊系遺物である。

注
（１） 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』 1968

第９表　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
					大きさ(㎜)	重量(ｇ)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカーズ断面硬度	X線回折	CMA	化学分析	耐火度	カロリー	
ＫＴＫ－１	川津川西遺構	ＳＤ135上層	含鉄椀形鍛冶滓	９ｃ後半～13ｃ	53×35×17	31.81	Ｌ（◉）	○	○	○	－	○	－	－	－	
ＫＴＫ－２	川津川西遺跡	ＳＤ01上層	椀形鍛冶滓	14ｃ代	54×42×32	108.54	なし	－	○	○	－	－	○	－	－	
ＫＴＫ－３	川津川西遺跡	包含層Ⅰ	鉄器錆化物	14ｃ代	52×36×21	41.89	△	－	○	－	－	－	－	－	－	
ＫＴＫ－４	川津川西遺跡	ＳＰ0783	鉄塊系遺物	14ｃ代	28×24×21	15.10	△	－	○	－	－	－	－	－	－	

第10表　供試材の化学組成

試料番号	遺跡名	種別	全鉄分(Total Fe)	金属鉄(Metallic Fe)	酸化第１鉄(FeO)	酸化第２鉄(Fe_2O_3)	＊二酸化珪素(SiO_2)	＊酸化ｱﾙﾐﾆｳﾑ(Al_2O_3)	＊酸化ｶﾙｼｳﾑ(CaO)	＊酸化ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ(MgO)	＊酸化ｶﾘｳﾑ(K_2O)	＊酸化ﾅﾄﾘｳﾑ(Na_2O)	＊酸化ﾏﾝｶﾞﾝ(MnO)	二酸化ﾁﾀﾝ(TiO_2)	酸化ｸﾛﾑ(Cr_2O_3)	硫黄(S)	五酸化燐(P_2O_5)	炭素(C)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ(V)	銅(Cu)	Σ＊造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
ＫＴＫ－２	川津川西遺跡	椀形鍛冶滓	63.62	0.10	27.38	60.39	8.22	1.77	0.20	0.31	0.67	0.21	0.04	0.33	0.06	0.04	0.25	0.19	0.01	0.007	11.38	0.179	0.005	

第11表　出土遺物の調査結果のまとめ

No	遺構名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
ＫＴＫ－１	川津川西遺構	ＳＤ135上層	含鉄椀形鍛冶滓	９ｃ後半～13ｃ	W＋H＋F、含鉄は共析鋼(Ｃ：0.77%)クラス	－	－	－	－	－	－	－	－	砂鉄系原料鉄の鍛錬鍛冶滓
ＫＴＫ－２	川津川西遺跡	ＳＤ01上層	椀形鍛冶滓	14ｃ代	W＋F	63.62	60.39	0.51	0.33	0.01	0.04	11.38	0.007	砂鉄系原料鉄の鍛錬鍛冶滓
ＫＴＫ－３	川津川西遺跡	包含層Ⅰ	鉄器錆化物	14ｃ代	過共晶組成白鋳鉄痕跡	－	－	－	－	－	－	－	－	下ｇ(脱炭)用原料鉄の可能性
ＫＴＫ－４	川津川西遺跡	ＳＰ0783	鉄塊系遺物	14ｃ代	レデブライトと片状黒鉛析出鋳鉄	－	－	－	－	－	－	－	－	下ｇ(脱炭)用原料鉄の可能性

W：Wustite(Fe)，H：Hercynite($FeO \cdot Al_2O_3$)，F：Fayalite($2FeO \cdot SiO_2$)，レデブライド（鉄－炭素合金におけるオーステナイトとセメンタイトとの共晶）

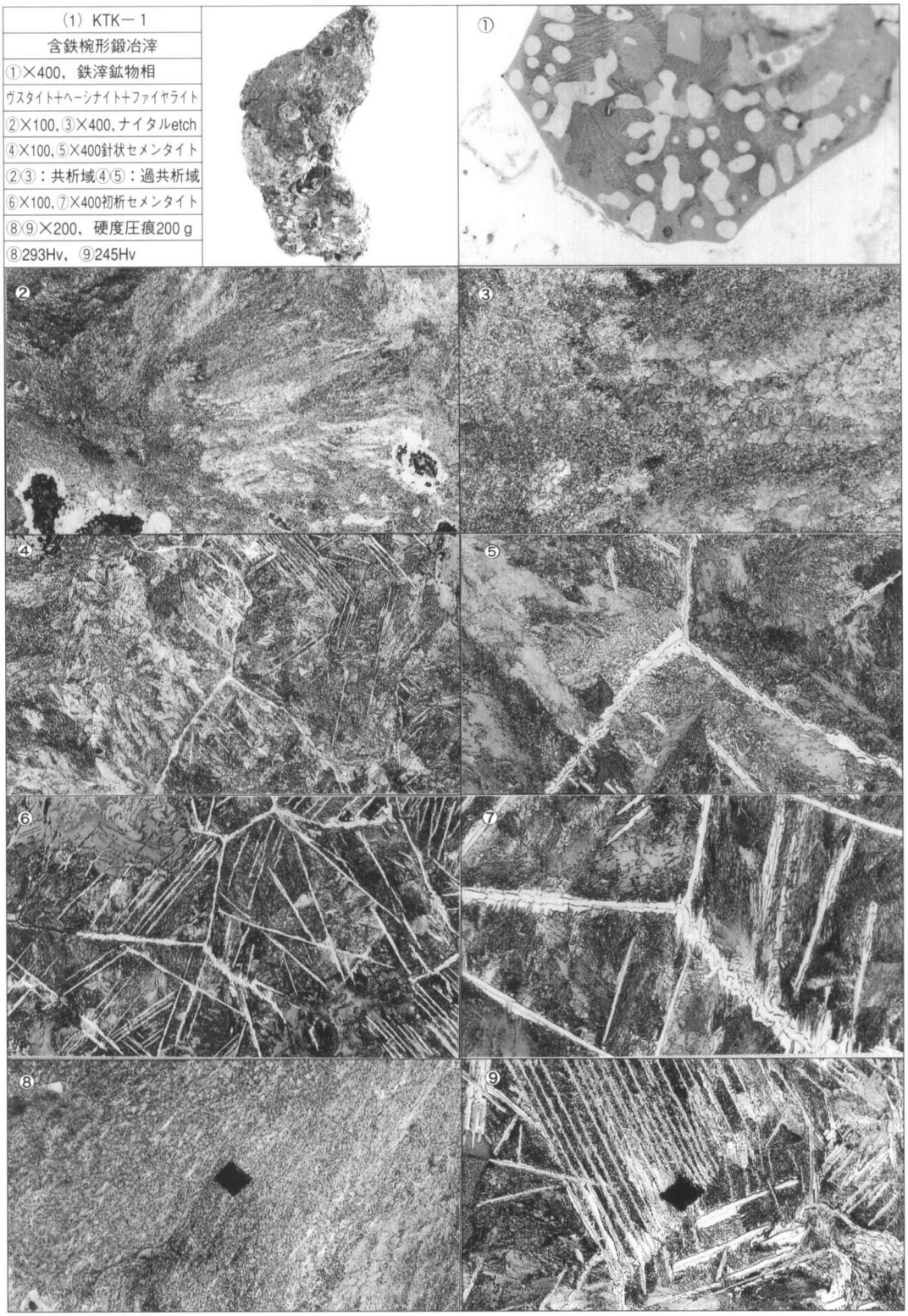


写真７　含鉄椀形滓の顕微鏡組織

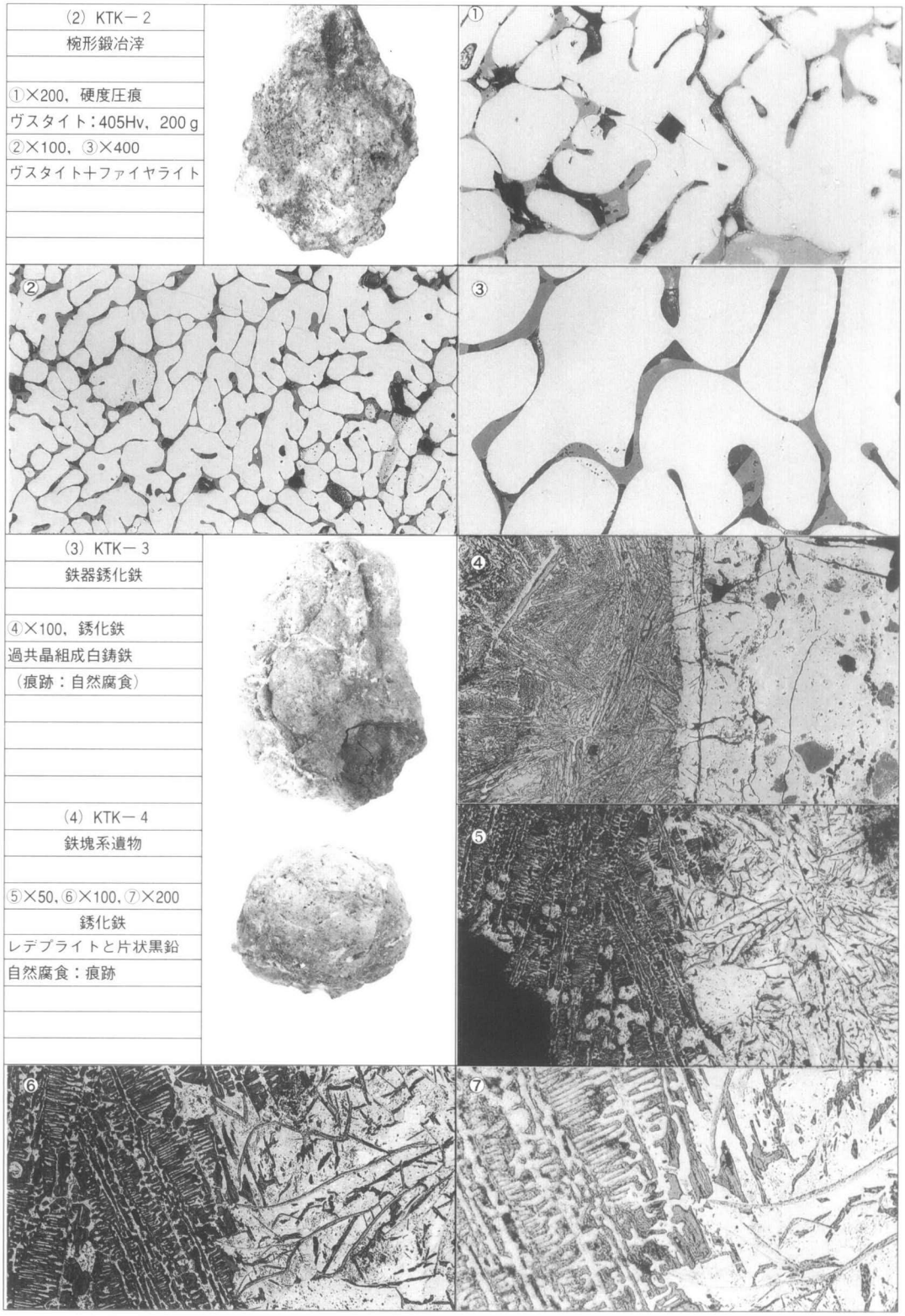


写真 8　鉄滓と鉄塊の顕微鏡組織

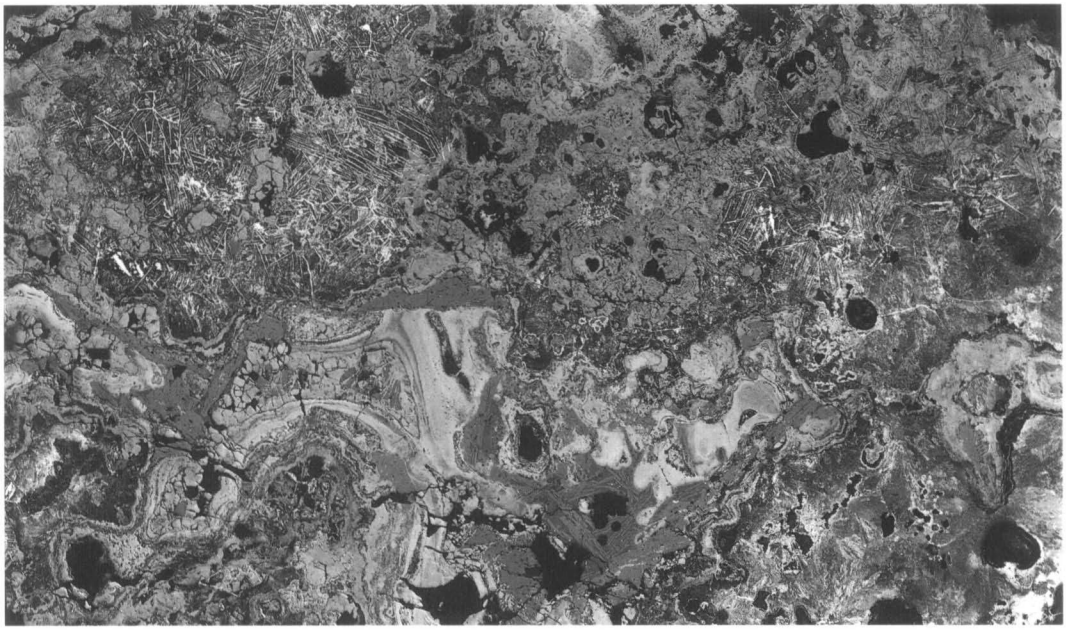
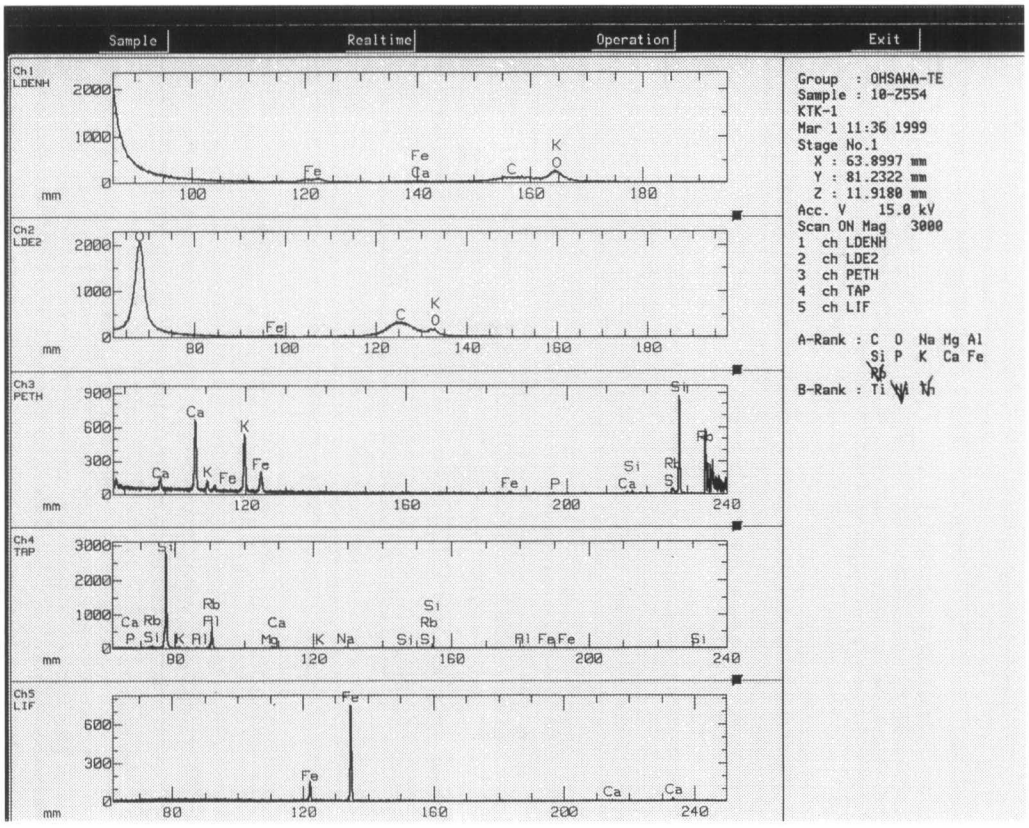
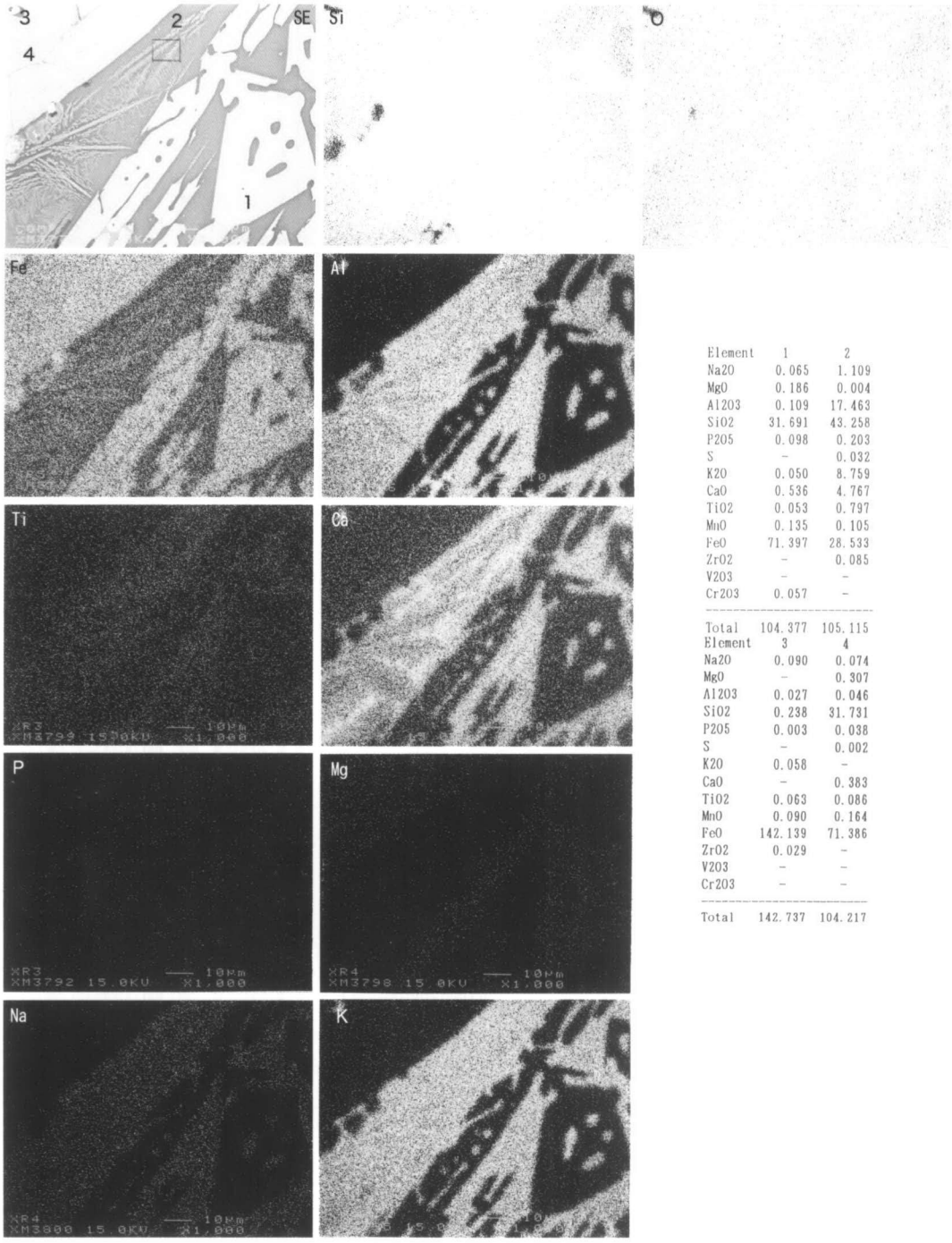


写真９　含鉄椀形鍛冶滓（含鉄部分）（ＫＴＫ－１）のマクロ組織（×20）



第191図　含鉄椀形鍛冶滓（ＫＴＫ－１）鉱物相のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果
（Photo.10に対応）



Element	1	2
Na2O	0.065	1.109
MgO	0.186	0.004
Al2O3	0.109	17.463
SiO2	31.691	43.258
P2O5	0.098	0.203
S	–	0.032
K2O	0.050	8.759
CaO	0.536	4.767
TiO2	0.053	0.797
MnO	0.135	0.105
FeO	71.397	28.533
ZrO2	–	0.085
V2O3	–	–
Cr2O3	0.057	–
Total	104.377	105.115

Element	3	4
Na2O	0.090	0.074
MgO	–	0.307
Al2O3	0.027	0.046
SiO2	0.238	31.731
P2O5	0.003	0.038
S	–	0.002
K2O	0.058	–
CaO	–	0.383
TiO2	0.063	0.086
MnO	0.090	0.164
FeO	142.139	71.386
ZrO2	0.029	–
V2O3	–	–
Cr2O3	–	–
Total	142.737	104.217

写真10　含鉄椀形鍛冶滓（ＫＴＫ－１）鉱物相の特性Ｘ線像と定量分析値

第６節　分析結果の検討と今後の課題

１．花粉分析

本分析では，調査地周辺の通時的な環境変化を，植生の変化から推測することを目的として，５点の試料の分析を行った。

試料番号５は，報文中に記した縄文晩期包含層（包含層Ⅳ）の下位に相当するとみられる，完新世以前に旧大束川が網状流路を形成していた時期の一流路の埋積土で，第13図②Ⅲ区北壁土層図の47層より採集した試料である。現地表下約2.8m前後に堆積した，植物遺体を多量に包含した暗灰色粘土層で，無遺物層であるため堆積時期は明確ではないが，縄文晩期以前のそう隔絶しない時期に堆積したものと想定している。分析の結果，試料からは，アカガシ亜属が最も高率に出現し，その他スギ属，コナラ属，シイノキ属，ニレ属ーケヤキ属，エノキ属ームクノキ属，カラスザンショウ属，カエデ属などがみられ，遺跡周辺に種類の豊富な暖温帯常緑広葉樹林が展開していたことが想定された。

こうした様相は，これまで善通寺市永井遺跡や坂出市下川津遺跡などの分析結果とも合致し，矛盾しない内容である。しかし，下川津遺跡での分析では，コナラ亜属を中心に落葉広葉樹が主体を占めるようであり，同一水系に属する本遺跡の分析結果と若干の相違をみせる。僅かな遺跡立地の相違により，植生にも相違がみられる要因は今後の課題としたいが，こうしたミクロな植生の相違が，当該時期の木製品製作にどの程度反映されるのか興味深い。

試料番号１～３は，旧大束川背後の後背低地と推定されるⅡ区ＳＸ19下層及び最上層から採集した試料で，同層に包含されていた遺物より６世紀後半から７世紀前半代を中心とした時期に堆積したものと考えられる。採集試料は，灰～黒褐色系粘土層で，顕著な水流堆積を呈しておらず，花粉化石の良好な遺存が想定されたが，分析の結果は残念ながら保存状態が悪く，花粉化石はほどんど検出されなかった。このような花粉化石の産状は，堆積後の土壌中の微生物の活動などによる風化作用の影響と考えられており，また風化に対する抵抗性は種類によって異なり，広葉樹花粉より針葉樹花粉が強いとされる（パリノ・サーヴェイ1999）ことから，一概に確認された花粉化石の多寡を植生の変化に結び付けて考察することは控えねばならないだろう。分析によって得られたデータからは，当時の植

生は縄文時代晩期以前とそう大きくは変化していなかった可能性がある点を指摘するにとどめておきたい。おそらくは当該時期の開発行為が，主に水稲耕作可能な低地部を主舞台として行われたことを反映しているのであろうが，詳細は今後の分析試料の増加に期待したい。

試料番号４は，Ⅱ区で検出した８世紀後半代ないしは９世紀前半代に開削された大型灌漑水路ＳＤ135の下層（第57図18層に相当する）に堆積した土壌より採集した。ＳＤ135は開削後頻繁な改修を受けているため，個別土層の堆積時期を想定することは困難だが，試料採取層位は流路底面に堆積した後出する時期の改修を蒙っていない土層と考えられ，開削時期に近接した時期を想定する。分析の結果，本試料からは複維管束亜属を含むマツ属が多産し，その他コナラ属コナラ亜属，同アカガシ亜属，ウコギ科などが検出されている。こうした分析結果から，自生の森林植生が破壊され，二次林としてマツ林が拡大したことが想定されている。下川津遺跡でも同様な変化が指摘されており，今回の分析は下川津遺跡でのデータをより広い範囲において追認できた点で評価できる。また，こうした二次林の拡大は，広域灌漑網の整備によって低地部の開発が飛躍的に向上し，それに伴う木材需要の増加から，周辺丘陵部の森林資源の開発も大きく進展したことが想像される。なお，古代末期とされる完新世段丘崖の形成は，こうした森林資源の開発によって河川への土砂供給量が著しく増加したため，河口への土砂堆積が進展し，河口の移動によって河川長が伸長し，結果として河床の低下に帰結したとする想定も，あながち無意味なことではなかろう。

今回の分析によって，以上の点が明らかとなりまた追認された。今後，同様の分析試料を増やすことで，よりミクロな環境の変化が検証され，人間の環境への働きかけがどのような時期にどのような環境へどのレベルで行われたかを明らかにする点で，貴重な資料となるものと考える。

２．Ｃ14　放射性炭素分析

分析試料OWK－２（以下，試料１と略す）は，第12図④Ⅱｂ区南壁第40層の灰色粗砂・青灰色粘土のラミナ層より出土した直径20cm程度の流木の試料であり，同様に分析試料OWK43-1（以下，試料２と略す）は，第11図③Ⅱａ区南壁37層の縄文晩期包含層（包含層Ⅳ）より出土した指先大程度の炭化材片である。いずれも第１章第１節で検討を行った旧大束川の旧流路堆積層上部，つまりは段丘Ｉ面の基盤を形成する土層より出土した試料で

ある。試料１は現地表下約2.6mより，同様に試料２は現地表下約1.1mより出土した。試料２が出土した堆積層上面より，弥生時代後期以降の遺構が検出される。

分析結果より，試料１は2230±50ｙＢＰの，試料２は2430±70ｙＢＰの年代を示した。両試料の分析結果には，やや無視できない年代の開きがあり，また分析結果の年代と出土層位が整合せず逆転現象を生じている。こうした考古学的所見と分析結果の乖離が，分析の誤差によるものか，両試料がいずれも二次堆積である可能性が高く，そうした堆積状況に起因するものか，あるいは別の要因によるものかは今回明らかにできなかった。しかし，より安定した試料である試料１の年代が，堆積層の時期を直接的に示す可能性が高いと判断される。

ここに示された実年代は，従来指摘されてきた縄文時代晩期の実年代幅とはあまり矛盾しない。したがって，本層の堆積時期の一点が2430±70ｙＢＰ頃に求められるだろうし，また縄文時代晩期の実年代想定の一資料が追加されたと評価される。

さて，今回の分析によって，考古学的成果と自然科学的分析から，土層堆積時期が特定された訳であるが，本試料の出土した層位は，繰り返し記述したように活発な河川堆積を呈し，本堆積によって形成された自然堤防（微高地）上には弥生時代後期以降の遺構が分布する。

この点は，大東川のより下流部に位置する諸遺跡にも共通する。下川津遺跡では，弥生前期初頭の遺構が検出された微高地の下部の砂礫層より自然木が出土しており，そのＣ14年代は縄文時代前半期に遡ることが明らかにされている。また，川津一ノ又遺跡では，弥生時代中期以降の遺構埋土より，縄文時代晩期以前の遺物が出土している。これらの遺物は，弥生時代中期以降の遺構が掘り込まれる基盤層中に本来包含されていた可能性が想定されており，川津川西遺跡同様，当該時期の遺構面下に縄文時代晩期に遡る旧流路の存在が想定される。

つまり，大東川下流域の諸遺跡では，縄文時代を通じて断続的に活発な河川堆積が生じ，それによって微高地が形成され，弥生前期以降の遺跡がその微高地上に展開することが明らかにされており，弥生前期における急激な地形環境の変化が想定されている。こうした弥生前期段階における河川堆積営力の低下と微高地の環境変化の要因については，未だに明らかになってはいない（森下1998)。今後，各遺跡で放射性炭素年代測定などの自然科学的分析を多用するなどして，遺跡形成以前の古環境復元をも視野に入れた調査成果の蓄積が待たれる。

3．木製品および種実の同定

今回は，周辺の植生環境の復原と木器生産の具体的様相の検討を目的として，古代の幹線水路ＳＤ135より出土した木器・木製品25点と，種実２点の試料の分析を行った。いずれもＳＤ135下層より出土した試料で，出土遺物より８世紀後半から９世紀後半代に位置付けられる。分析試料には，曲物蓋板などの木製品12点と，用途不明品を含めた建築材や木製品の素材となる部材６点，木杭７点がある。

分析結果から，木製品にはスギ・ヒノキ・サワラといった針葉樹が多用されている。特に，曲物の蓋・底板には，すべて針葉樹が使用され，内７点がヒノキによって占められる。また，部材としたものの中で，曲物蓋・底板に加工可能な板材はスギとサワラであった。報文中にもあるように，曲物については樹種が厳密に選択されていた可能性が高い。その他棒状の用途不明の木製品２点（449・456）については，ヒノキ・サワラといった針葉樹が使用されている。部材については，アカガシ亜属やカヤ，サワラといった材が使用されており，特に材の選択はなされていないようである。同様に，木杭についても，マツ属・クリ・ヤナギ属・コナラ亜属といった材が使用され，材の選択は不明瞭で，おそらくは周辺で容易に入手可能な材や，余材・廃材が転用されたものと考えられる。また，こうした材の選択は，報文中にもあるように，花粉分析の結果からする周辺域の植生とも矛盾しない内容である。

今回の分析によって，曲物を中心とした木製品にはそれの加工に適した材の選択が徹底されていることが判明した。また一方で，部材や木杭といった性格の材には，規格さえ合致していれば樹種には無関心で，入手可能な材が無選択に使用されていることも判明した。こうした傾向は，香川県下の他遺跡での状況と矛盾しない内容であり，今回の分析によって資料が追加されたといえる。しかしなお，曲物以外での材の選択の可能性については不明瞭な部分も多い。また，例えば生産遺跡と消費遺跡といった，遺跡間での様相に細かな相違の生じる可能性もあり，あるいは材の供給関係についてもこれまで言及されたことは乏しい。分析試料の蓄積と共に，よりミクロな視点での分析結果の検討が今後必要であろう。

4．鍛冶関連遺物の金属学的分析

今回は，本遺跡における鉄器製作の具体的様相を考察するため，出土した鉄滓等４点の試料について金属学的分析を行った。分析試料は，８世紀後半から12世紀代にかけて埋没

した旧大束川支流に起因する低地帯ＳＸ20の上位層より出土した椀形鍛冶滓１点（KTK－１）と，Ｉ区で検出された14～15世紀代を中心とした集落域より出土した椀形鍛冶滓及び鉄器等３点（KTK－２～３）である。

分析の結果，KTK－１とKTK－２は砂鉄系の鉄素材を原料とした鍛錬鍛冶滓であることが判明し，またKTK－３とKTK－４は下げ（脱炭）用の鍛冶原料鉄の可能性が示唆された。

報文中に記した鞴羽口の出土と，KTK－２～４の分析結果から，少なくとも14世紀の本遺跡の中世集落内で，鉄製品製作段階の鉄鍛冶が行われていたことが明らかとなった。本県の中世集落からは，普遍的に鉄滓や鞴羽口といった鍛冶関連遺物の出土が報告され，各集落単位で小規模な鉄鍛冶が行われていたことは確実であり，一方で鉱石や砂鉄を直接搬入した精錬操業の可能性も示唆されている。しかしながら，こうした鉄滓は各遺跡より普遍的に出土するためか，その金属学的分析調査は本県においては低調である。今後，分析試料の蓄積により，精錬遺跡の検出と，原料鉄の産出地及びその搬入経路の追跡が課題となろう。

第4章　まとめ

第1節　遺構の変遷と個別遺構の検討

本節では，これまで記述してきた各時期の遺構・遺物を簡単に整理し，個別時期について本遺跡の評価・検討を行い，今後の課題を提起してまとめとしたい。

1．縄文時代晩期

当該期の明確な遺構は検出されていない。弥生時代後期以降の遺構面を形成する基盤層中には，縄文時代後期から当該期の遺物を一定量包含する。これら堆積層は，遺跡東側を北流する大束川の流下方向に傾斜して堆積しており，その営力によって形成されたと考えられる。おそらく本層群は，完新世段丘形成前における旧大束川の網状流路の一支流による堆積土であり，縄文時代晩期を中心とする比較的短期間に堆積したものと想定される。また，本層群は，検出面下最大3m程度の深さを確認しており，流路底は確認できていないものの，当該時期以前は本遺跡周辺はかなり起伏に富んだ地形を呈していたものと考えられる。西に隣接する段丘Ⅱ面からの比高は，10m以上に達する可能性があり，本層群の堆積によって地形面は一定程度平準化されたとみられる。

遺物は，石器を中心として一定量の土器資料が出土している。いずれも顕著なローリングを蒙っておらず，また近接した位置ではあるが接合資料もみられることから，比較的近い位置から投棄・埋没した可能性が想定され，近接した位置に当該期の遺跡が存在した可能性を考える。遺物の出土量は，各調査区の調査精度にも拠るが，Ⅱa区SX19南側を中心として東側のⅠ区にかけて主に出土している。Ⅲ区では，後世の削平によるためか当該時期の包含層は確認できず，後世の遺構埋土中等より極微量の当該時期の遺物が出土しているに過ぎない。また，Ⅰ区においてもⅡ区に比すと相対的に遺物量は微量であり，包含層の堆積時期に若干の時期差が生じた可能性もある。しかし，両地区を通じた土層堆積状況の観察は，必ずしも充分に行えていないため詳しく言及することはできない。

報文中には，本層出土遺物として151点の資料を掲載した。実測に堪えうる資料につい

ては，そのほとんどを掲載したものと考えている。土器資料では，１点の後期に遡る深鉢を除けば，いずれも晩期突帯文期に位置付けられるものである。その晩期の中でも，中葉に位置する一群と終末期に位置付けられるものがあり，時期差がみられる点は周辺遺跡の展開を絡めて興味深い。石器資料は，やはりサヌカイト製のスクレイパーといった不定刃器類が主体を占める。包含層資料であるため，器種組成については制約が大きいが，一定程度実態を反映している可能性はあろう。その点で，打製石斧類が転用品を除けば欠落する点は興味深い。なお，打製石庖丁（48），打製石斧（49）等については，本層群上面を精査中に出土したものであり，やや出土状況に問題があるため，参考程度にとどめておきたい。なお，石材は金山産とみられるサヌカイトが主体を占めるが，理化学的な分析を経たものではなく今後に課題を残した。

自然遺物として，本層群中より自然木や炭化材等の植物遺体を採集している。いずれも人為的な加工の痕跡は見出されない自然木である。これらのうち，２点の試料について放射性炭素年代測定を試みた。分析の結果，2230±50ｙ ＢＰと，2430±70ｙ ＢＰの年代が得られ，従来の縄文晩期の実年代観と大きな齟齬のない内容が報告された。今後とも，分析試料の増加により，より詳細な実年代の追求が望まれる。

一方，当該時期以前の遺跡周辺の様相については不明な点が多い。上記したように縄文晩期以前は深い谷状地形を呈していたと考えられ，遺跡が立地する環境にはなかったようだ。当該期以前の遺跡は，段丘Ⅱ面かもしくは段丘Ⅰ面の微高地上に所在した可能性が高い。なお，上記包含層中には，旧石器時代に遡る可能性のある白色風化の進行したサヌカイト剥片が少量ながら混入するが，明確な石器は確認されていない。

２．弥生時代

当該時期に比定される遺構は，Ⅰ区南端で自然流路状の浅い落ち込み（ＳＸ16）と，Ⅱａ区南端で不整形な土坑２基（ＳＫ37・38）が検出されたに過ぎない。出土遺物からいずれも弥生時代後期後半から終末期に位置付けられ，大きな時期差を認めない遺構群である。周辺で当該時期の包含層は確認できず，後の古墳時代以降の遺構と同一遺構面上で確認されたこと，また検出された遺構の残存深度がいずれも浅いことから，遺構面上面は顕著な削平を蒙っていると考えられる。しかし，上面の削平を考慮してもなお確認された遺構数や遺物量は乏しく，本調査区が集落域の縁辺に位置することは否めない。ＳＸ16から一定量の遺物が出土していることを評価すれば，おそらくは調査区南側の小微高地上を中心に，

当該時期の集落等が存在した可能性を想定する。

ＳＸ16は，調査区南縁部に沿って概ね東西に長く確認され，一部が検出されたに過ぎないが，その形状より自然流路の落ち込み肩部と推定している。おそらくは旧大束川の一支流であろうか。検出部位が乏しくまた埋没時期も大きく隔たるが，Ⅱ区で検出された流路状の落ち込みＳＸ19と，一連の地形である可能性を想定する。ＳＸ16は弥生時代後期には埋没が一定程度完了して浅い窪地地形を呈しており，以後緩やかに埋没が進行したものと推定される。本地域のような平地部に乏しい地形面にも，当該時期の集落が経営されているのは，高橋が想定する弥生時代中期前半代の完新世段丘の形成によって，安定した微高地が増加したことに一定の要因を求めることもできよう（高橋1995)。

なお，ＳＫ37からは当該地域の土器胎土とは明らかに異なる，多量の角閃石を含有した土器片が少量ながら出土している。これらはおそらく高松平野中枢部から搬入された可能性が高く，物資流通の拠点としての本地域の特徴を反映したものと考える。

３．古墳時代

当該時期の遺構として，Ⅰ区において６世紀末から７世紀前半代に位置付けられる２棟の竪穴住居で構成される小集落と数条の水路を，またⅡ区においては流路状の落ち込みであるＳＸ19・20を検出した。当該時期に至って漸く居住痕跡が出現する。なお，弥生後期から当該時期までの様相については不詳である。第１章で，周辺諸地域を含めた古墳時代前期から後期の集落遺跡の欠落を指摘したが，こうした傾向はより大きな地域的枠組の中で語られるべき問題であろう。

さて，Ⅱ区では，前記したように流路状の低地面が未だ埋積されずに後背低地状を呈して存在しており，Ⅰ区はその前面の見かけ上の小微高地を呈していたものと考えられる。本遺跡周辺では，前記した完新世段丘Ⅰ面の形成以降，こうした旧大束川の網状流が当該時期に至っても未だ埋積されずに低地帯を呈して存在し，その間隙にパッチ状の小微高地が点在していたものと推測される。そしてそうした微高地のいくつかに，集落が営まれると考える。

こうした小微高地上に展開する集落は，いずれも小規模である。本調査区では，床面積30㎡以下の通有のクラスの竪穴住居２棟が検出されたのみであり，また平成８年度の調査区でも，北に約100ｍ離れた微高地縁辺においてほぼ同規模と考えられる竪穴住居１棟を確認している。こうした集落では，掘立柱建物は主体とはならず，まして食糧や種籾保管

のための倉庫は皆無に近い。生産物のかなりの部分や鉄製農耕具といった生産手段は，集落内へ備蓄されずに後述する拠点的な集落へ収奪されたと考えられる。その具体的様相は今後の課題だが，こうした集落景観からすれば，竪穴住居数棟で構成される集落が，同時に農業生産の完結した一経営単位であったと考えられる。

一方，安定した微高地が展開する下川津遺跡や川津一ノ又遺跡では，やや状況は異なる。こうした集落では，床面積40㎡以上の大型建物を内部に含み，やや後出する時期の遺構からは圭頭把頭や耳環・玉類といった威信財や，畿内系土師器が一定量出土しており，周辺古墳への被葬者を含む在地首長層の居宅の可能性が想定され，前記した川津川西遺跡等との集落間において，明確な階層構造が顕在化する。しかし，居宅と目される大型建物群は，通有住居群とやや位置を違えながらも同一微高地上に併存しており，こうした集落の様相は首長層の階層的位置関係に一定の示唆を与えるものであろう。本地域においては，上記した衛星的な小集落群がこうした拠点集落周辺に点在する景観が一般的であったと考えられるが，拠点集落との具体的関係や，また周辺に分布する古墳群と拠点集落との対応関係についても，今後の課題として残される。

なお，Ⅱ区で検出した低地帯（ＳＸ19・20）からは，土馬と銀環がそれぞれ１点出土している。出土位置は数m程度離れているが，同一層序から出土していることもあり，遺物内容からも同時に廃棄された可能性が高い。明確な畦畔遺構は確認できず，花粉分析からも明確な証左は得られなかったが，低地帯に顕著な水流の痕跡は乏しく，遺物出土量も限られることから，ＳＸ19・20が当該時期耕作域として利用されていた可能性は高い。とすれば，上記した遺物は農耕祭祀に使用され遺棄された可能性が想定される。出土状況から具体的な用途を推定することはできなかったが，機会を改めて類例の検討を通してその可能性について論じたい。

４．古代

当該時期の遺構には，Ⅱａ区で検出された掘立柱建物１棟（ＳＢ21）と隣接する大型幹線水路ＳＤ135等がある。また，上記したⅡ区低地帯ＳＸ19は当該期までにはほぼ埋没が完了しているが，ＳＸ20は一定程度埋没しながらもなお窪地として残される。埋土の堆積状況や，ＳＤ135より分岐してＳＸ20へ流下する支流ＳＤ136の存在などの点から，ＳＸ20が耕作域として利用された可能性は高い。

ＳＤ135は，幅４ｍ前後，残存深1.4m程の大型水路である。流路方向はＳＤ136分流付

近でやや屈曲するものの，概ねN60°Wに配された規格性の高い幹線水路と考えられる。しかし，地形的要因によるためか，大束川下流域で認められる条里型地割の方向とは斜交し合致しない。流路方向からＳＸ20に示されるように飯野山東麓の耕作域へ給水し，直線的に流下して大束川へ直接排水していた可能性が想定されるが，下流部で西へ屈曲して一ノ又遺跡周辺の耕作域へ流下していた可能性もあり，灌漑域については今後の調査の進展を待ちたい。また，本溝の水源については，特定する材料は得られていない。飯野山を下る落ち水や，大束川旧流路もしくはその支流より直接取水していた可能性が想定されるが，断定するまでには至らず今後の課題である。

さて，本溝は出土遺物より，８世紀後半ないしは９世紀前半代に開削され，13世紀代には埋没がほぼ完了し，もはや水路としての機能は大きく後退したものと考えられる。また，本溝はベースの砂～シルト層を開削しているためか土砂の堆積が著しく，頻繁に改修を行った痕跡が土層断面の観察により判明している。頻繁な改修を経ながら，比較的長期に亘って維持された基幹水路と考える。

しかし，本溝の詳細な変遷については，遺構の性格や調査時の不手際も重なり明瞭ではない。この点で上層の堆積時期が問題となるが，その下限が13世紀である以上に細かな点は不詳である。遺物の出土傾向や本溝より分流するＳＤ136での様相から，少なくとも12世紀代頃までは，頻繁に改修を経ながら通水されていた可能性がある。

第１章にも記したように，本地域では古代末から中世初頭頃に大束川河床が低下し，流域に段丘崖が形成されたことが想定されている（木下1995）。ＳＤ135の12世紀ないしは13世紀代における灌漑機能の衰微は，直接的にこうした地形変化に起因する可能性が高い。この点を調査によって細かく詰められなかったのは残念ながら，今後の調査に期待したい。なお，後述する中世屋敷内部を区画する14世紀中葉に開削された溝ＳＤ01は，本段丘崖を穿ち氾濫原へ流下して検出された。これによって，段丘崖の形成が少なくとも14世紀中葉以前に遡ることが実証された点で重要である。

なお，本水路からは，曲物等の木製品やその削り屑，素材としての板材などが多量に出土している。製品はほぼその大半を報文中に図示したが，多量の板材や削り屑については全てを報告することはかなわなかった。周辺に木工集団が居住していた可能性が高い。同時に出土した遺物より，その時期は概ね９世紀代に限定されるようだ。また，当該期の遺物には４点の墨書土器と１点の刻印須恵器があり，墨書土器の１点には黒色タール状の付着物が認められた。分析結果から漆の可能性が示唆され，おそらくは黒漆調合のための漆

皿として使用されたことが想定される。出土した木製品の中に，黒漆を塗布したものが含まれるのも本遺跡周辺での漆工を傍証する。木製品の器種は，針葉樹を使用した曲物及びそれに関連した製品が多数を占め，限定された器種のみを生産した専業集団の可能性も推測できる。また，出土遺物に墨書土器が含まれていることは，その統括者について一定の示唆を与えるものとなろう。この点については，細かく掘り下げて考察することはできなかった。今後の課題としたい。

なお，墨書土器は，「井南」・「下」・「久」・「人」の4文字がある。「井南」は，「井」が古代において灌漑水路やその取水口のことを意味していたことを想定すれば，本水路との関連からも地名である蓋然性が高い。あるいは文献資料にみえる鵜足郡井上郷とも関連するのであろうか。「下」・「久」は不明。「久」については，本遺跡の南にやや離れて，近世の小字名として「久保」という地名がみられることを積極的に評価して，地名とみることも可能だが，それが古代に遡る確証はない。「人」は人名の可能性があるが，1文字のため断定できない。また，刻印須恵器は大内町坪井遺跡より酷似した須恵器の出土が報告されている。原体が同一である可能性が高く，須恵器の流通を考察する上で貴重な資料となろう。

5．中世

当該時期の遺構は，Ⅰ区とⅢ区においてそれぞれ屋敷地を検出している。Ⅱ区の前記した低地帯の埋没はほぼ完了しているが，なお土地条件が悪く低湿地状を呈していたためか，居住域からは疎外されていたようだ。明確な遺構は確認できなかったが，継続して耕作域として利用された可能性は高い。

Ⅰ区では，掘立柱建物20棟以上と多数の土坑・水路によって構成される屋敷地を確認した。屋敷地は，本文中にも記したように，東限は段丘崖に，南限はＳＤ26に，西限はⅠ区とⅡ区の間に，北限は平成8年度の調査成果より，概ね東西約50m，南北約75mの範囲が想定され，通有の敷地面積を有していたものと考えられる。

出土遺物より，少なくとも14世紀初頭には建物遺構が建てられており，屋敷地の形成はさらに13世紀後半代にまで遡る可能性もある。古代の灌漑水路ＳＤ135が埋没した後，極めて短期間に屋敷地の形成がなされた可能性があり，あるいは新たな灌漑水路の開削が屋敷地成立の要因となった可能性もある。以後，15世紀代まで屋敷地は経営されるが，その当初より整然とした屋敷地が形成されていたわけではなかったようだ。屋敷地中央を南北

に分割する区画溝ＳＤ01・ＳＸ01の開削は14世紀中葉に，また既の可能性もある大型建物ＳＢ19も14世紀後半代に下る。ここでは細かな検討をなしうる用意はできなかったが，屋敷地としての体裁は徐々に整備されていったことを指摘しておく。

検出された建物はその主軸方向から，Ｎ５°Ｗ前後（ＳＢ05・15），N17°Ｗ前後（ＳＢ01・02・04・06～14・16），N26°Ｗ前後（ＳＢ19・20・22），N35°Ｗ前後（ＳＢ17・18・23），N65°Ｗ前後（ＳＢ03）の大きく５群に大別される。相互に一定の時期差を反映していた可能性もあるが，出土遺物が乏しくその変遷については確認できていない。

また，屋敷地内で４基の土器埋納坑と１基の銭貨埋納穴を確認した。従来，こうした遺構は建物に伴う地鎮遺構とされているが，本遺跡では付随する明確な建物遺構は復元できていない。また，従来の研究でも建物遺構との関連や屋敷地内部での位置関係については十分な検討がなされていないようである。今後の課題としておきたい。なお，本文中に記したように，同一遺跡内においても銭貨あるいは土器皿の有無によって，遺構の内容に一定のヴァリエーションが認められ，時期差もしくは地鎮行為の内容の差異に起因する可能性がある。いずれ機会を改めて，周辺遺跡の様相を含めて再度検討を行いたい。

Ⅲ区においても建物遺構２棟を確認し，当該時期の集落の存在が確認された。飯野山裾緩斜面部においても当該期の遺物の散布が確認され，一定の拡がりをもった屋敷地が展開した可能性が高い。ここで注意されるのは，Ⅲ区屋敷地が前記したⅠ区屋敷地と約80m程しか離れておらず極めて近接した位置にあり，また屋敷地の経営期間が14世紀前半代とⅠ区屋敷地と重複し，両屋敷地間に有機的な関係性が想定される点である。調査結果からⅠ区屋敷地よりやや遅れて形成が始まり，比較的短期間で廃絶したことが確認され，Ⅲ区屋敷地がⅠ区屋敷地を母村として分かれて成立した可能性も想定される。しかし，Ⅲ区屋敷地の調査範囲は極めて限られるため，具体的様相については明らかにしがたい。

さて，本遺跡より出土した土師質土器には，皿・坏・足釜・土鍋・擂鉢などの器種が認められる。それらの中には，例えば皿のように，大半が外底面ヘラ切り調整の中で，１点のみ糸切り調整のものが出土し，明らかに地域圏外からの搬入の可能性が想定されるものも出土している。こうした在地産土器の移動の問題を考察する上で，その土器が本来的に有する素地粘土の分析は一定の有効性を有するであろう。ここでは細かな分析を行う余裕はないため，今後の検討に備えた問題点の整理のみ行っておきたい。

本遺跡より出土した土師質土器の胎土の岩石鉱物組成には，石英・長石・火山ガラス粒を一定量含み，しばしば極微量の角閃石ないしは黒雲母粒が認められる。火山ガラスを除

いていずれも深成岩に起因する鉱物で，本遺跡周辺のみならず県下の基盤層中の堆積物に普遍的に認められ，素地粘土採取地を特定できる性格のものではない。また，角閃石と黒雲母粒が認められる土器は少数派であるが，その含有量はいずれも極微量であり，小片での観察からはその有無は偶然性に大きく左右されるものと考えられ，細分の基準とはならないだろう。

胎土による分類を試みる上で，基準としたいのは火山ガラスの含有量である。火山ガラスの含有量は，資料によって大きな格差を認める(1)。しかし，素地粘土中へ可塑剤として意図的に火山灰の混入を試みた可能性があり，その多寡が直接的に粘土採取地の相違を反映しているとするには早急である。一方でそうした土器製作上での混和剤の選択といった要素も，工人あるいは土器製作地の相違を反映する可能性はある。こうした2種類の胎土を有する土器群が，周辺諸遺跡にも認められるのかどうか，またその比率はどうかという点も複数の土器製作地を想定する根拠となろう。さらに，土器製作上の成・整形手法のクセといったテクニックの相違を観察することで，考古学的な面からも土器の製作地に関する細かな議論が可能となろう。

今回，その具体的内容については考察することができなかった。本遺跡出土の土器胎土に火山ガラスの多寡によって分類される2種の土器群が存在する点を指摘するにとどめ，その詳細については他遺跡での様相や時間軸上での変化を整理しつつ今後の課題としたい。

なお，ＳＤ135に後出する当該時期の幹線水路については明確ではない。現在遺跡中央を，西又用水が南北に貫流しており，それにほぼ重複して当該時期の灌漑水路が開削された可能性がある。残念ながら調査では水路際までトレンチを拡張したが，その証左は得られなかった。当該時期での灌漑系統については，今後の課題である。

6．近世

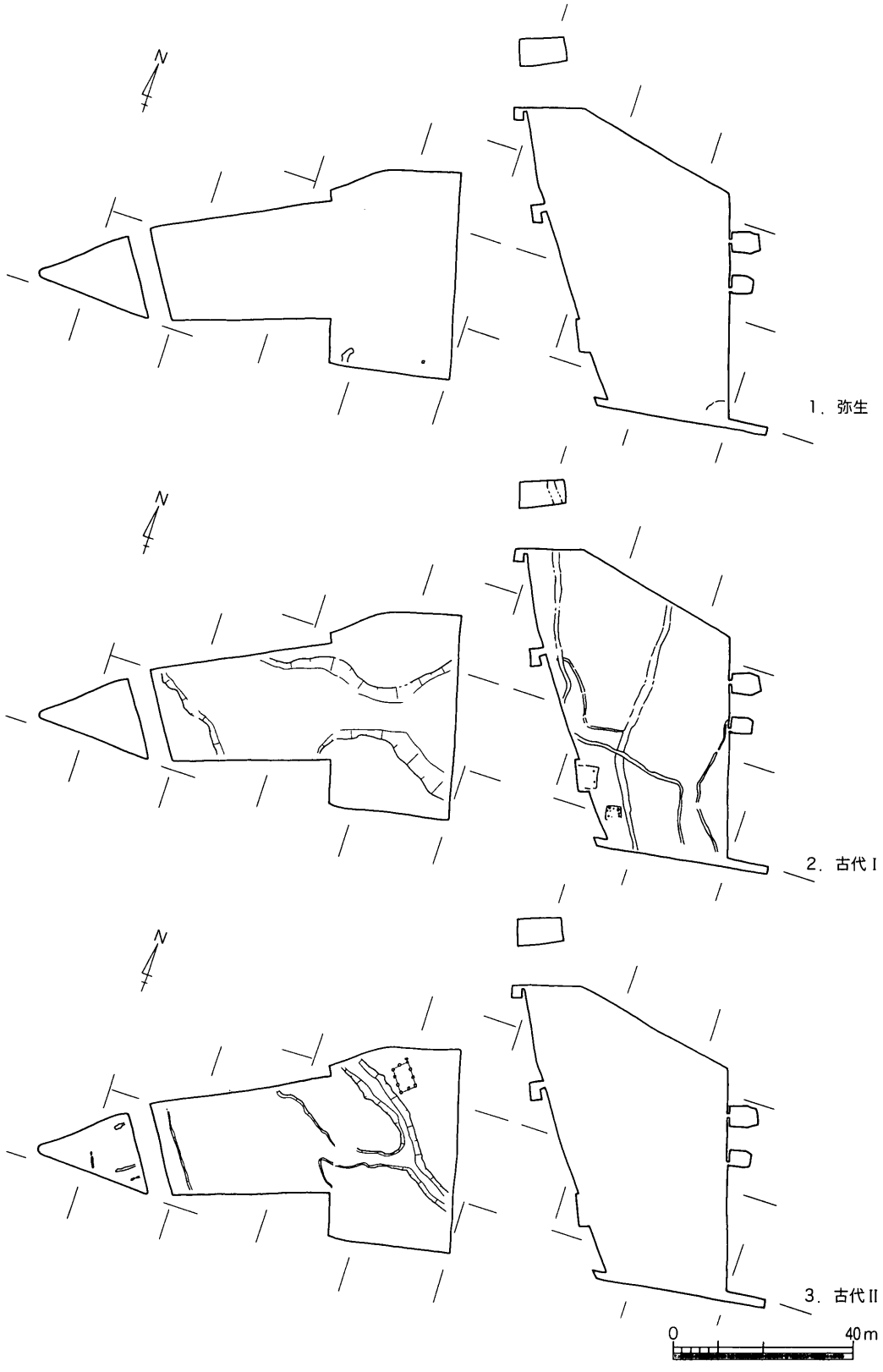
当該期の遺構は，本調査区においては確認されていない。旧耕作土下で確認した数層に細分される耕土中より，当該時期の遺物が出土していることから，調査区周辺は耕作域として利用されていたと考えられる。また，地割についても現状でみられる地割より，より細分されていた可能性が推測されるのみで具体的様相は不明である。

本文註

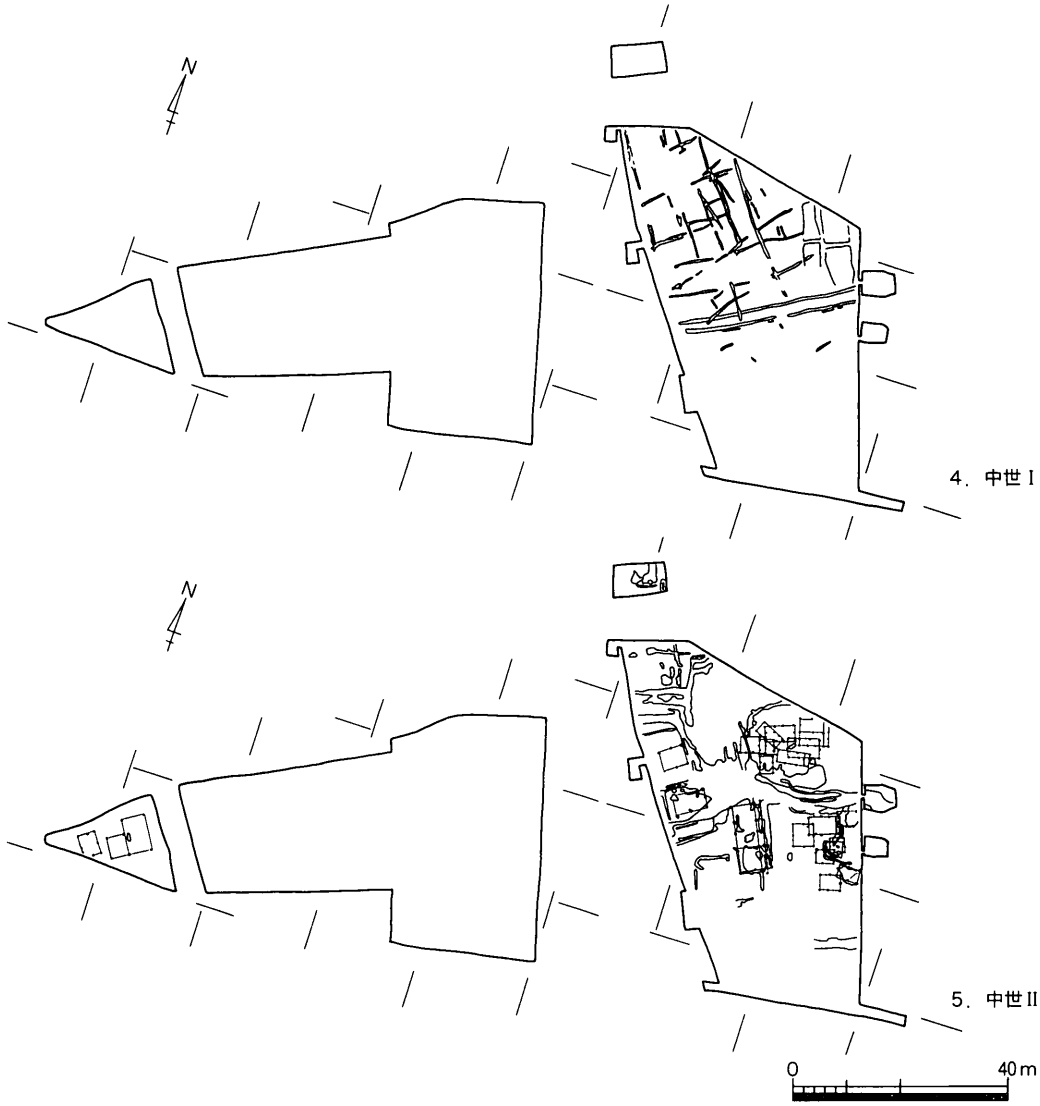
(1) 実体顕微鏡での観察で，約0.3㎠にガラス20粒以上を多として，観察表に表記した。

文献註

木下晴一　1995「大束川流域の段丘崖」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊　川津二代取遺跡』　香川県教育委員会他
高橋学　1995「臨海平野における地形環境の変貌と土地開発」『古代の環境と考古学』古今書院



第192図　遺構変遷図１



第193図　遺構変遷図２

第３部　飯山一本松遺跡の調査

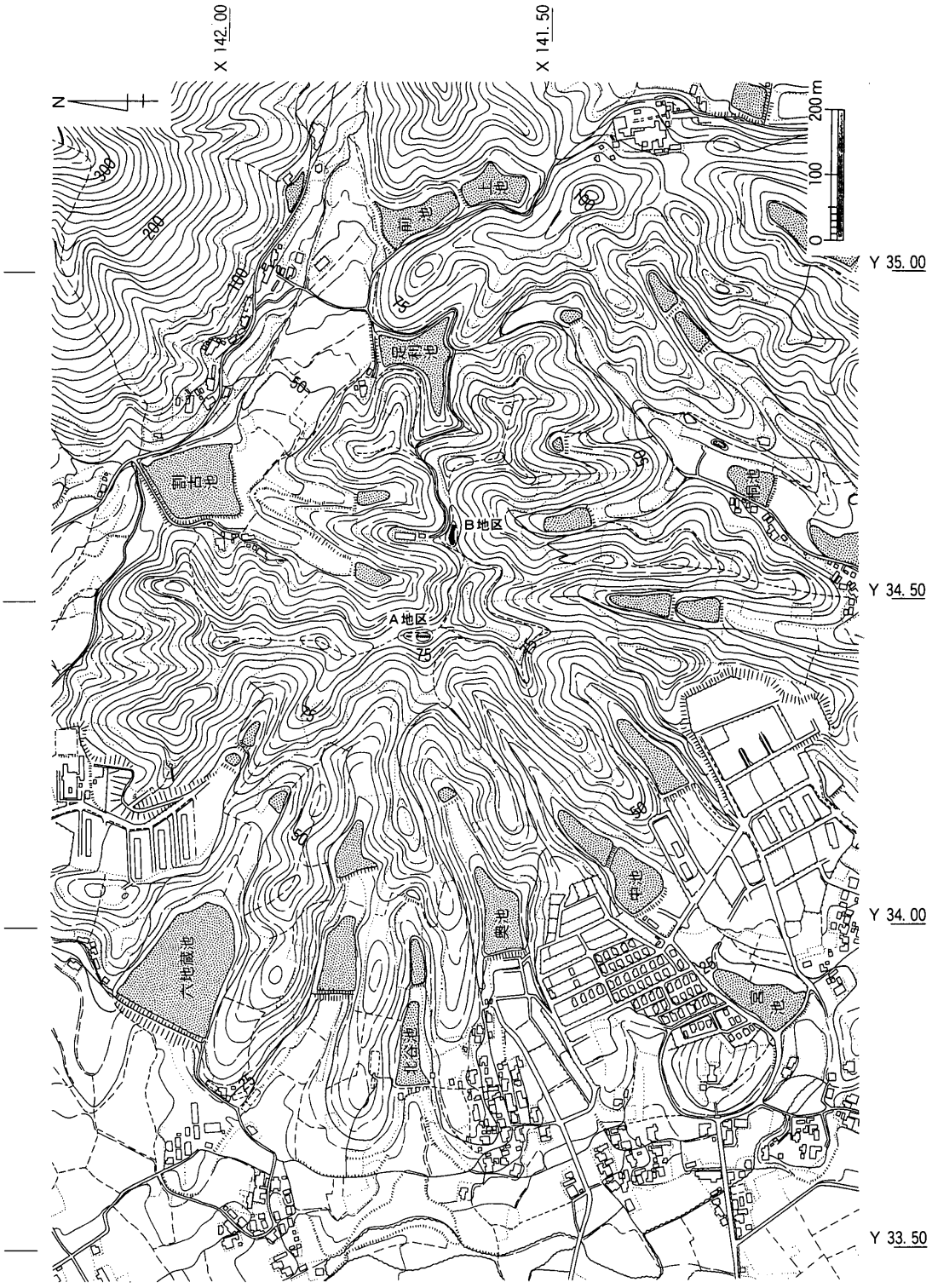
第１章　調査成果

第１節　遺跡の位置

１．調査地の地形

丸亀平野の東を限る標高約460ｍの城山の南麓には，標高90～150ｍ程度の低丘陵が展開している。これら低丘陵部は，基盤を花崗岩によって構成され，表層部はその風化が進展しており，山腹を下る僅かな天水等により容易に開析され，無数の樹枝状に延びる舌状丘陵を発達させている。この丘陵末端は，平野部に取り付くが，部分的に旧大束川あるいは土器川の河床低下による段丘面が平野部との間に介在する。また，開析谷の出口付近には，旧大束川が形成した沖積平野との間に小規模な扇状地形が見られる。

丘陵部は，市街地に近接し，また南面した視界の開けた場所であり，近代化以前では里山として利用されていた。しかし近年の開発行為の進展に伴い，住宅地や果樹園等として大きく開発され，また様々な開発に伴う花崗土の採土地としても利用され，本来の地形は大きく改変を蒙っている。調査地は，横断道用地内の丘陵頂部２ケ所を選んで調査を実施した。東側の調査地をＡ地区，西側のそれをＢ地区をそれぞれ呼称する。



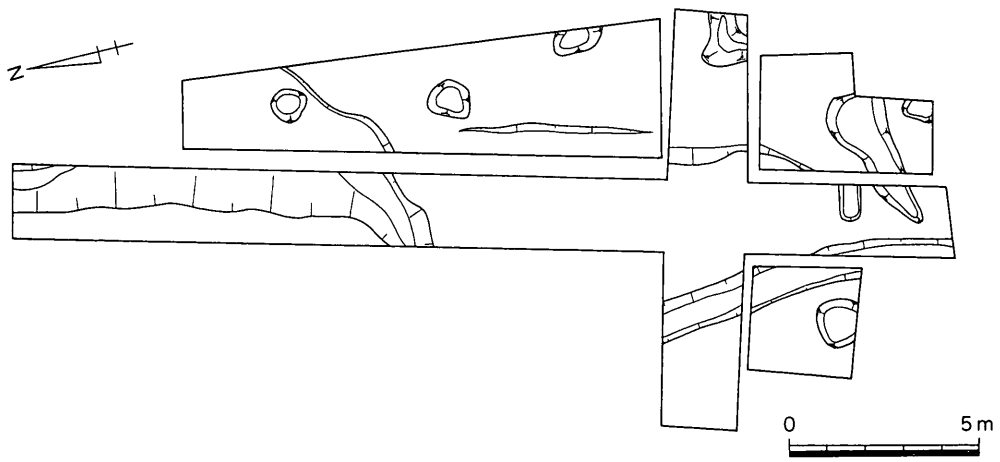
第194図　調査区位置図（1/10,000）

第２節　各地区の概要

１．Ａ地区の調査

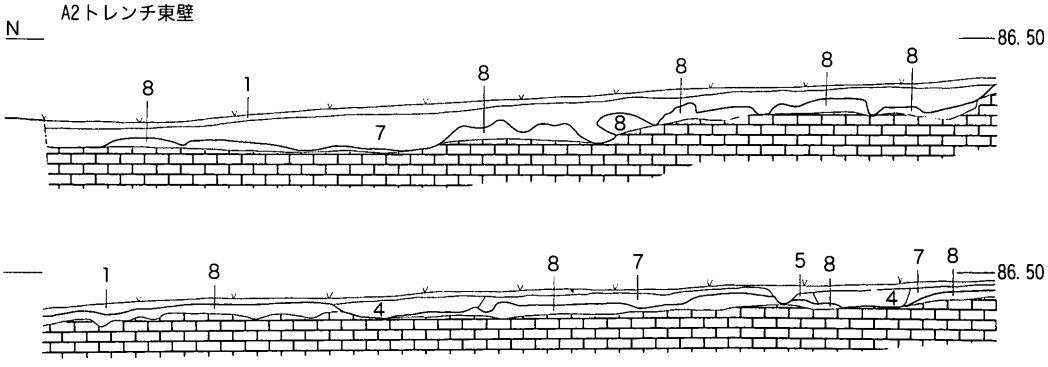
調査地は，後述するＢ地区より連続する尾根頂稜線の西端部に位置し，本地点より稜線は北に直角に折れて約250m程北進する。また，西には大東川流域の平野部へ向けて舌状丘陵が長く延びる。大東川流域の平野部に面しているため，調査地からの視界は開け，正面にビュート状山塊の飯野山を望み，大東川下流域の平野部から遠く瀬戸内海も眺望される。調査地は，上面幅10m程の狭長な尾根頂部に位置し，標高は85.5m程で，大東川流域の平野部からの比高は約70mを測る。調査着手前は荒廃した雑木林であったが，樹木を伐採したところ，頂部南縁は10×５m程の範囲が削平されて備後薬師堂の小さな祠が建立されており，また頂部稜線南縁に沿って溝状の掘り込みが認められ，少なからず人為的な改変を蒙っていることが判明した。調査は，これら改変部分を避けて幅２mのトレンチを尾根稜線部に長く設定し実施した。

各トレンチの土層の堆積状況は一定しないが，基本的には表土（腐植土）層直下には，地山の花崗岩風化バイラン土が薄く堆積し，風化の進展した花崗岩岩盤へと漸移的に移行することが判明した。したがって，包含層等は一切残存しておらず，既に流出しているものと判断された。また斜面部を中心に，表土層と地山層の間に，数層に細分される地山層



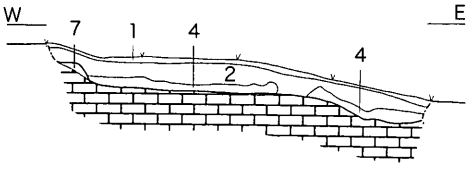
第195図　Ａ地区遺構平面図（１/200）

A2トレンチ東壁

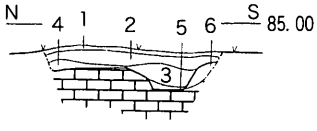


1．表土（腐植土）
2．明橙褐色土（1層ブロック混，撹乱）
3．黄茶褐色土（樹木根撹乱）
4．明橙黄褐色土（撹乱）
5．明黄褐色土（撹乱）
6．黄茶褐色土（撹乱）
7．明橙褐色土（花崗岩風化バイラン土，斜面2次堆積土）
8．明橙褐色土（花崗岩風化バイラン土，地山）

A3トレンチ北壁

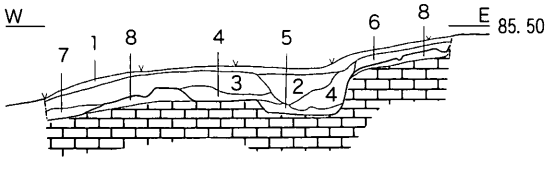


A3トレンチ東壁



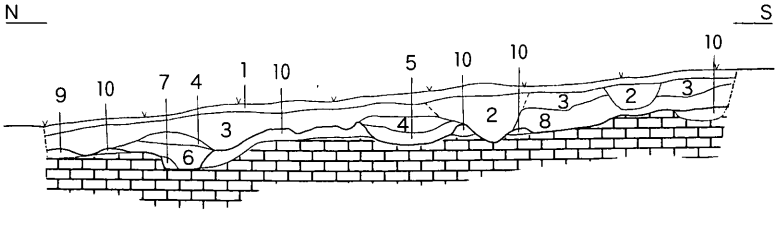
1．表土（腐植土）
2．明黄茶褐色土（風化細礫含，斜面2次堆積土）
3．明橙黄褐色土（風化細礫含，撹乱？）
4．明黄褐色土（風化礫含，斜面2次堆積土）
5．黄茶褐色土（風化礫含，斜面2次堆積土）
6．明黄褐色土（花崗岩風化バイラン土，地山？）
7．明橙褐色土（花崗岩風化バイラン土，地山）

A4トレンチ北壁



1．表土（腐植土）
2．明黄茶色土（風化礫含，流入土）
3．黄茶褐色土（風化礫含，溝掘削土）
4．暗黄茶褐色土（風化礫含，流入土）
5．黄茶褐色土（風化礫含，流入土）
6．濃茶褐色土（風化礫含，斜面2次堆積土）
7．黄茶褐色土（斜面2次堆積土）
8．明橙褐色土（花崗岩風化バイラン土，地山）

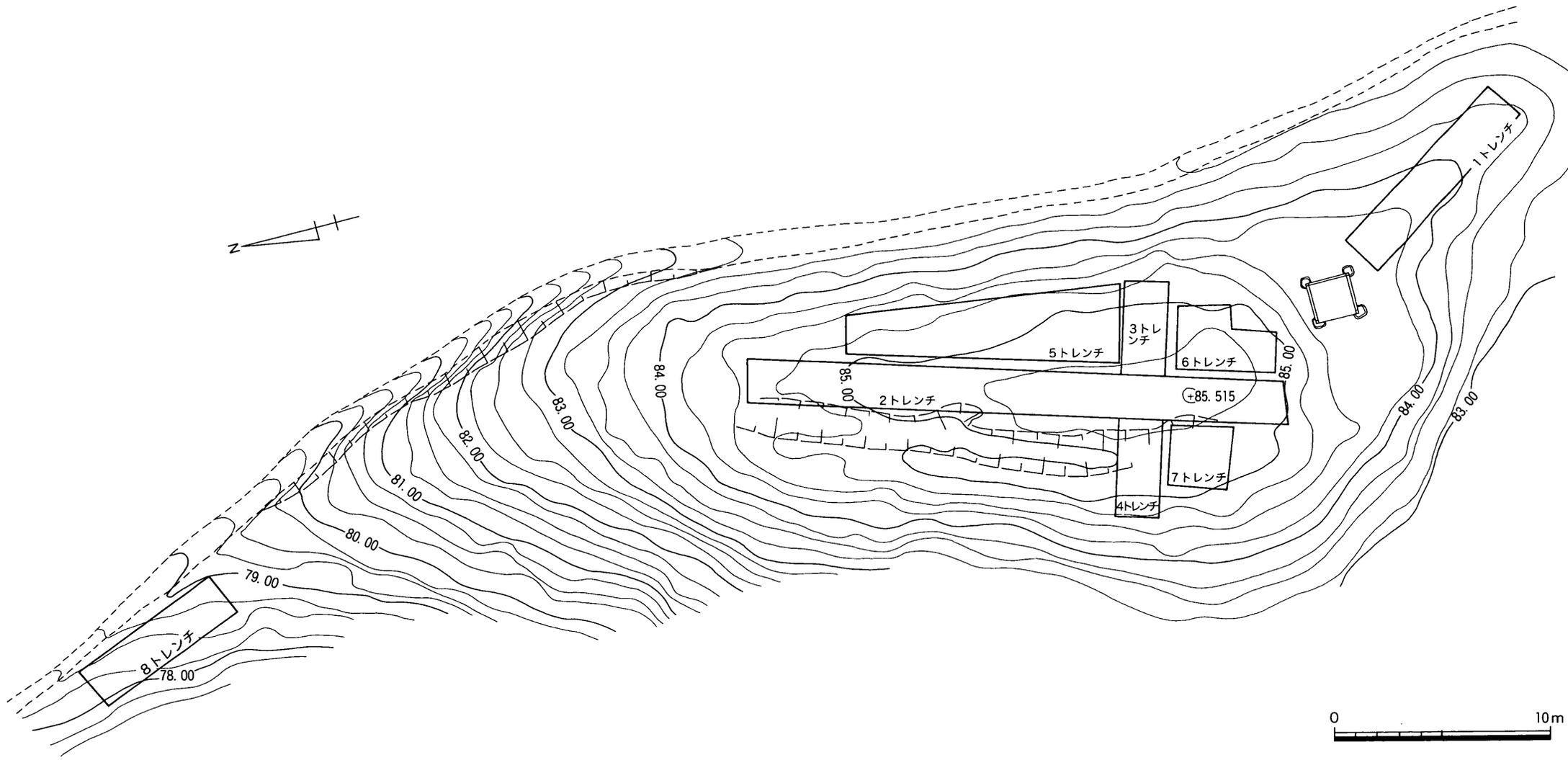
A5トレンチ東壁



1．表土（腐植土）
2．暗黄褐色土（樹木根撹乱）
3．暗黄茶褐色土（斜面2次堆積土）
4．明黄褐色土（撹乱）
5．暗茶褐色土（樹木根撹乱？）
6．黄茶褐色土（樹木根撹乱）
7．明黄茶褐色粘質土（樹木根撹乱）
8．黄橙褐色土（斜面2次堆積土）
9．明黄褐色土（花崗岩風化バイラン土混，地山？）
10．明橙褐色土（花崗岩風化バイラン土，地山）

岩盤

第196図　A地区土層断面図（1/80）



第197図　A地区トレンチ配置図（1/250）

に近似した黄茶褐色土等の斜面堆積層が確認された。これら土層は，地山層の二次堆積土か人為的な改変に伴う掘削土の再堆積と考えられ，土層に締まりはなく，上下面より樹木根の攪乱坑が検出される。遺物の出土状況からも，明確な包含層とは認識できず，極めて新しい時期に堆積した可能性が想定された。上記した溝状の掘り込みも，この二次堆積土上面より掘り込まれており，埋土に締まりはない。

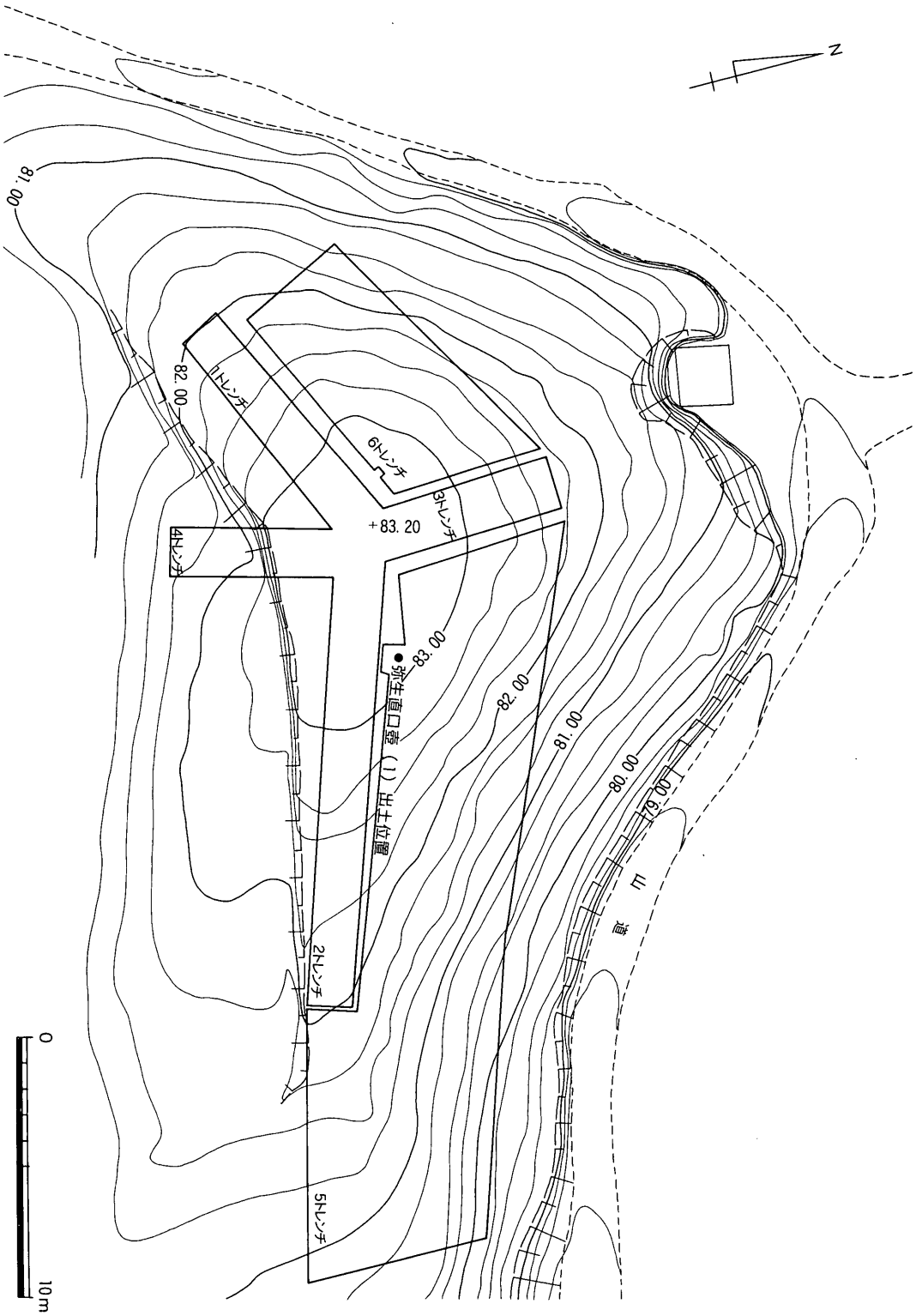
溝は，尾根頂部西縁を緩やかに弧状に取り巻くように配されており，その掘削土は溝東側（尾根頂部側）に盛り上げられていた可能性が，尾根頂部より緩やかに傾斜して堆積した溝内埋土より想定された。幅1.0m，深さ0.5m程で，断面形は整った逆台形状を呈し，底面は概ね平坦であった。底面の傾斜は，尾根の傾斜方向に合致して，頂部より北及び南方向へ傾斜しており，埋土の特徴からも一定方向へ通水する機能は想定しがたい。調査地周辺は，第二次大戦中塹壕が掘られていたことが，地元民から伝えられており，本調査地で検出された溝状遺構が，こうした塹壕に類するものである可能性は高い。なお，溝埋土中からは遺物の出土はみられなかった。

その他遺構としては，２・５トレンチから浅い溝状の落ち込みを検出した。平面形態は一定せず，また断面形状も不安定で，人為的な掘り込みに伴うものではなく，雨水等により地表面が浸食された結果形成された可能性を想定している。本調査区では，こうした自然地形による落ち込みや樹木根の攪乱を除いて，明確な遺構は検出されていない。また備後薬師堂については，周辺部の調査で近代以前に遡る明確な遺物が出土しなかったことから，遺構としては認識せず，したがって詳細な調査も実施していない。

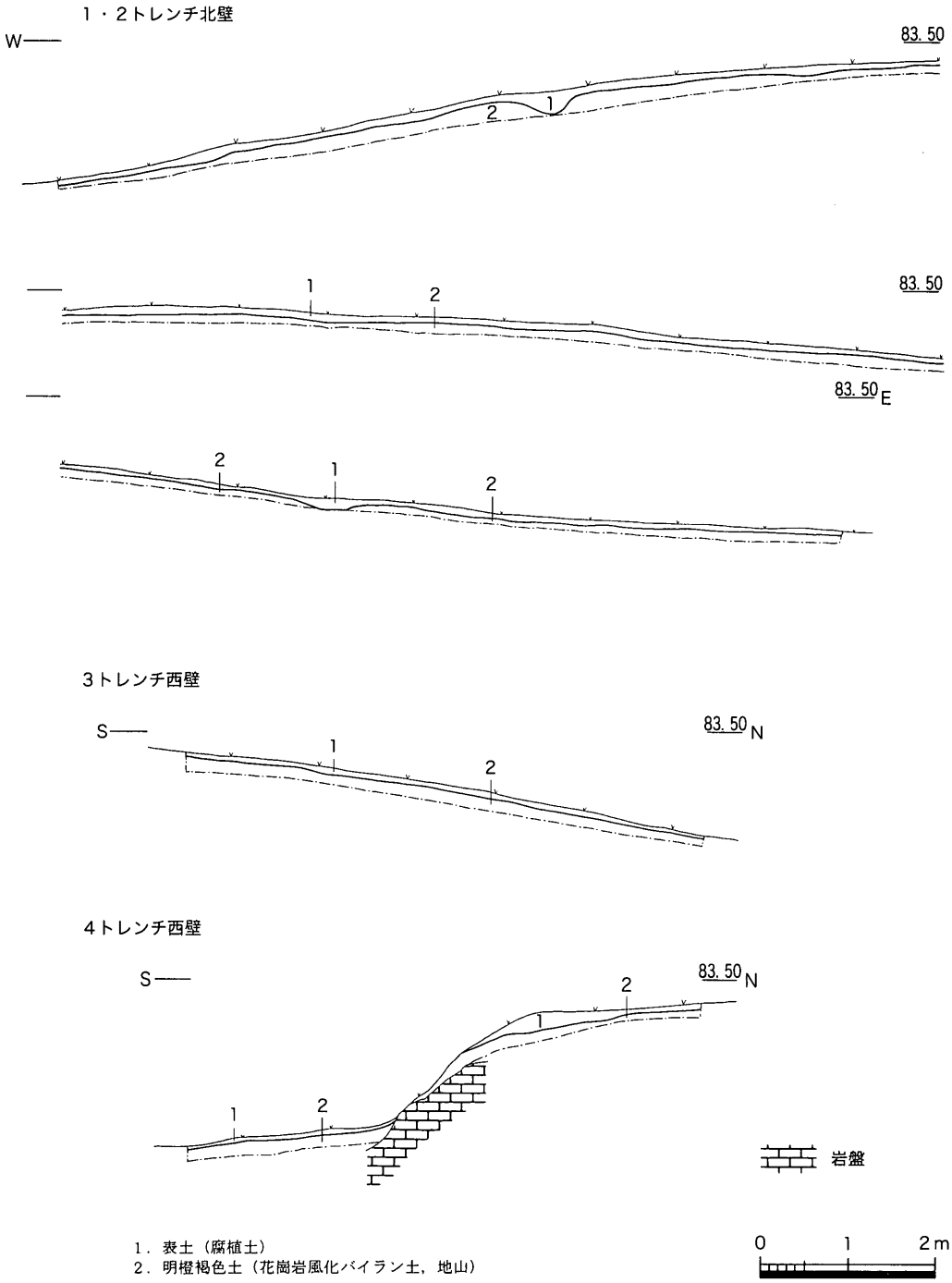
遺物は，表土層及び上記二次堆積層より，若干量の弥生土器・須恵器の破片が出土しているに過ぎない。少量ながらも遺物の出土が認められたことから，周辺域において何らかの遺構が存在した可能性は想定されるが，具体的な遺跡の性格やその広がりについては，調査結果からは何も判明していない。

２．Ｂ地区の調査

調査地は，尾根上面幅12～13m程の狭長な丘陵頂部に位置する。調査地の標高は83.2m程で，北側谷部からの比高は約40m程を測る。大束川流域の平野部よりやや奥まった位置にあるため，尾根頂部からの視界は限られ，僅かに北及び南側に小開析谷の平地部が眺望されるに過ぎない。尾根頂部稜線は東西に走り，調査地南側には深く小開析谷が貫入し，北には狭小な舌状丘陵が北の割古谷に向けて突出する。丘陵尾根南斜面は，調査着手前に



第198図　B地区トレンチ配置図（1/250）



1．表土（腐植土）
2．明橙褐色土（花崗岩風化バイラン土，地山）

第199図　B地区土層断面図（1/80）

は果樹園として造成・開墾されており，頂部稜線南縁に沿って比高約１ｍ程の崖面が連続し，下位の斜面には一部岩盤が露出する。また調査区北側には，給水タンクや調査時には廃墟となった家畜小屋が建てられており，旧地形が比較的残存すると考える調査区尾根頂部から北側斜面についても，何らかの人為的な開発行為が行われた可能性が高い。調査は，幅２ｍのトレンチを主に頂部から北側斜面部において設定し実施した。

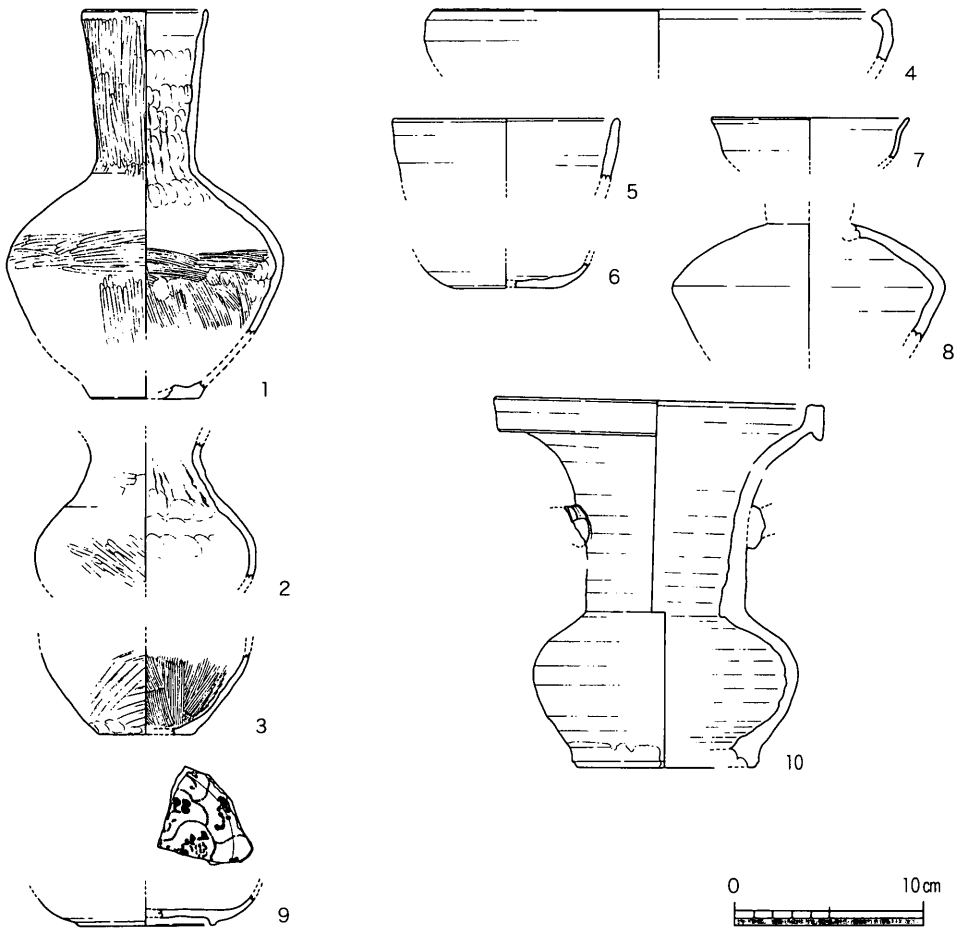
いずれのトレンチにおいても，表土（腐食土）層直下において地山の花崗岩風化バイラン土が検出され，Ａ地区同様包含層他堆積層は既に流出しているものと判断された。本地区ではＡ地区でみられた二次堆積層も存在せず，表層の浸食が予想以上に進展していたことが判明した。したがって，本地区においても樹木根による攪乱を除いて明確な遺構は検出されていない。ただし，尾根頂部より僅かに東に下った尾根頂周縁部で，径20cm程の地山層の窪みに，ほぼ完形に復元される弥生土器直口壺１点（１）が，横転して出土した。明確な掘り方を有しておらず，周辺に本遺物に関係する明確な出土遺物はなく，また表土層直下で検出したことから，本来遺構底面に残されていた土器のみが辛うじて削平・流出を免れ，出土したものと理解される。なお，本地区では遺物は他に，表土層中より弥生土器底部や須恵器・サヌカイト剥片等が少量出土しているに過ぎない。

明確な遺構が検出されておらず，僅かな遺物のみから遺跡の評価を行うことは困難であろう。しかし，上記した土器の出土状況から，何らかの遺構が営まれていたことは充分想定され，ここでは集落等が展開した可能性を指摘しておきたい。

第３節　出土遺物

遺物の出土状況については前記したので，以下では図化しえた遺物について説明を加えることとする。

１は，前記したＢ地区５トレンチより出土した弥生土器直口壺である。器表面はやや剥離・摩滅しており，一部に辛うじて調整を認める。体下半部を中心に破片が欠落するため，完形に復元することはできない。口縁部は直線的に僅かに斜上方へ開き，端部は丸く収める。外面は入念な縦方向のミガキ調整が施され，内面は指圧痕が数段に渡って残される。体部は扁球形を呈し，底部は安定した平底である。外面中位は横方向の，下半部は縦方向のミガキ調整がそれぞれ施され，内面も同様に細かなハケ調整される。胎土中には，多量の黒雲母粒が含まれ，特徴的な素地粘土が選択される。２は，Ａ地区３トレンチ第２・４層より出土した弥生土器壺体部片である。形状より，１に近似した直口壺となるものと考える。器表面は，辛うじてミガキ調整を認めるが，やや不明瞭で細かな観察はできない。３は，Ａ地区３トレンチより出土した弥生土器底部片である。底部は安定した平底を呈し，体部はやや内湾気味に立ち上がる。体部外面は，粗いタタキ調整の後ナデもしくはミガキ調整され，内面は細かなハケ調整が施される。４は，Ｂ地区６トレンチ地山層上面より出土した弥生土器高坏口縁部片である。口縁部は強く内湾して開き，端部は矩形に収めつつ内側へ鈍く肥厚する。口縁部外面には，大きく退化して鈍い段状を呈する２条の凹線文を認める。５は，Ｂ地区５トレンチ地山層上面より出土した須恵器坏とみられる口縁部片である。小片のため，復元した口径にはやや難があり，壺口縁部等の別器種となる可能性も残る。６は，Ａ地区３トレンチ第２・４層より出土した須恵器坏もしくは皿の底部片である。外底面は回転ヘラ切り後弱いナデ調整が施され，体部は緩やかに内湾して立ち上がる。７は，Ａ地区３トレンチ第２・４層より出土した須恵器口縁部片である。口縁部中位で鈍く屈曲して外反して開き，端部は丸く収める。形状より，甕の口縁部片となるものと考えるが，小片のため断定するまでには至らない。８は，Ａ地区３トレンチ第２・４層より出土した須恵器壺体部片である。体部中位で強い稜を有する長頸壺の体部となろう。体上半部外面には，濃緑色の自然釉が厚くかかる。９は，Ａ地区備後薬師堂周辺より出土した染付磁器皿である。外底面には，小さな断面逆台形状の高台が付される。10も，Ａ地区備後



第200図　出土遺物実測図（1/4）

薬師堂周辺より出土した焼締陶器壺である。口頸部は緩やかに外反して大きく開き，端部は粘土帯を貼付して縁帯状に肥厚する。頸部外面には体部は，口頸部に比すと幾分小さく張りのある算盤玉状を呈し，底部は平底である。外面には，底部を除いて褐色の鉄釉が厚く施釉され，内面にも広く流し掛けされる。産地は不詳。

次に，上記した出土遺物の時期について記す。A・B両地区より出土した弥生土器については，4の高坏を除いて概ね後期前葉を中心とした時期にまとまるものと考える。高坏については，退化してはいるものの凹線文を残すことから，後期初頭にまで遡るものと考えるが，それほど大きな時期差を有するものではないだろう。また，須恵器については，いずれも小片のため明確な時期を捉えることは困難だが，7の甕を除いて概ね9世紀を前後する時期に位置付けられるものと考える。さらに，備後薬師堂周辺より出土した2点の陶磁器については，近代以降に下る。

第4節　まとめ

飯山一本松遺跡の調査成果については，上述したとおりである。本遺跡の調査では，丘陵上に立地し，包含層等の流出や果樹園等による後世の地形改変のため，明確な遺構は確認できなかった。辛うじて，弥生時代以降の遺物が少量出土したのみである。

弥生土器は，概ね後期初頭から前葉を中心とした時期に位置付けられるものであり，数量的には乏しいながら，その出土状況から集落等の何らかの遺構が存在した可能性は充分に想定される。時期的には，瀬戸内海周辺での高地性集落の経営期間に含まれ，低丘陵上に位置し隣接して生産基盤を有しない本遺跡の場合も，厳密には高地性集落の定義には合致しない部分もあるだろうが，それに類した集落が営まれていた可能性は指摘できるだろう。遺跡周辺には，飯野山山頂部や城山南麓から弥生土器の出土が知られ，高地性集落の存在が示唆されているが，発掘調査は行われておらず，実態は不明瞭である。今後，周辺地域の調査が進展した段階で，本遺跡の位置付けも明らかになるものと考える。

次に，古代に位置付けられる須恵器片は，出土量も乏しく，明確な位置付けを与えることはできない。ただ時期的にはある程度まとまるようであり，上述した弥生時代と同様に何らかの集落が存在した可能性は想定されるだろう。

川津川西遺跡出土遺物観察表

凡例

1．遺物観察表は，土器（土製品・陶磁器含）・石器（石製品含）・木製品・金属器・瓦類に分けて作成した。各表ごとに挿図番号順に編集している。

2．土器観察表中の器種は，縄文土器は「縄」，弥生土器は「弥」，須恵器・須恵質土器は「須」，土師器・土師質土器は「土」，瓦器・瓦質土器は「瓦」，黒色土器は「黒」，磁器は「磁」，陶器は「陶」とそれぞれ略して記載した。

3．土器観察表中の法量について，復元される口径等に焼成時等に生じた歪みなどがあり，確度が落ちるものについては，（　）を付して記載した。

4．土器観察表中の胎土は，主に80～100倍程度の実体顕微鏡を用いて，石英（長石含）・黒雲母・角閃石・赤色粒・火山ガラス等について，その粒径や多寡を観察し記録した。また，含まれる最大の石粒の大きさが0.5㎜以下を「微」，同0.6～1.0㎜を「細」，同1.1～3.9㎜を「中」，同4.0㎜以上を「粗」と表記した。さらにその多寡については，多量に包含される順に「多」・「普」・「少」の３段階に区分したが，それは観察者の主観にもとづいており，明確な基準は特に定めていない。

5．土器観察表中の色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年度版』を参照した。しかし，一部陶磁器釉薬の色調についてはこの限りではない。

6．土器観察表中の残存率は，遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており，完形品に対するそれではない。

7．各観察表中の単位については，大きさはcmで，重さはｇでそれぞれ統一した。

土器・陶磁器・土製品観察表

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
1	26	包含層Ⅳ	縄・深鉢		中；石英多・角閃石少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄(内)浅黄橙	(口縁)沈線＋渦巻文？＋重弧文後縄文(体部)横条痕？	横ミガキ？	細片	
2	26	包含層Ⅳ	縄・深鉢		粗；石英多・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)浅黄橙	横ミガキ後縦4列刺突文	マメツ・ハクリ	細片	
3	26	包含層Ⅳ	縄・深鉢		粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)浅黄橙	(口縁)横条痕文？爪形文　(体部)横ケズリ	マメツ・ハクリ	3/8	
4		包含層Ⅳ	縄・深鉢		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい褐(内)浅黄	斜交沈線文後爪形文	ナデ？	細片	
5	26	包含層Ⅳ	縄・深鉢		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄(内)灰黄	縦・斜板ナデ後ナデ，刻み目突帯貼付	横ナデ？	細片	焼成後穿孔
6		包含層Ⅳ	縄・深鉢		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい褐(内)灰黄褐	横ナデ？　刻み目突帯	横板ナデ？マメツ	細片	
7		包含層Ⅳ	縄・深鉢		中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰黄	刻み目突帯貼付・ハクリ	ナデ？	細片	
8		包含層Ⅳ	縄・深鉢		中；石英多・黒雲母普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰黄	ナデ？刻み目突帯，マメツ	横板ナデ？マメツ	細片	
9	26	包含層Ⅳ	縄・深鉢	口径27.9	中；石英多・火山ガラス多	(外)灰黄褐(内)浅黄	横ナデ・指オサエ，刻み目突帯2条	横板ナデ・ナデ？，マメツ	1/8	外面煤付着
10		包含層Ⅳ	縄・深鉢		粗；石英多・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	横ナデ？刻み目突帯	横ナデ？	細片	
11	26	包含層Ⅳ	縄・深鉢		粗；石英多・黒雲母普・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰黄	横ナデ？刻み目突帯	横ナデ？マメツ	1/8	
12		包含層Ⅳ	縄・深鉢		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)灰黄	刻み目突帯貼付，ハクリ	ハクリ	細片	
13	26	包含層Ⅳ	縄・底部	底径2.8	粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)灰	ナデ？マメツ・ハクリ	ナデ？マメツ・ハクリ	5/8	
14		包含層Ⅳ	縄・浅鉢		中；石英多・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	ハクリ・マメツ	ハクリ・マメツ	細片	
15		包含層Ⅳ	縄・浅鉢		中；石英多・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)褐灰	ハクリ・マメツ	ハクリ・マメツ	細片	
16	26	包含層Ⅳ	縄・浅鉢		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)黒褐(内)浅黄	(口縁)横ナデ後横ミガキ　(体部)横ケズリ後横ミガキ	マメツ・ハクリ	細片	
154		ＳＸ16	弥・甕	口径24.5	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)マメツ・ハクリ　(体部)斜ハケ・マメツ	(口縁)ヨコナデ？マメツ　(体部)斜ハケ	2/8	
155		ＳＸ16	弥・底部	底径4.4	中；石英普・角閃石？少・黒雲母普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	縦板ナデ？マメツ	斜板ナデ？後指オサエ	4/8	
156		ＳＸ16	弥・底部	底径4.5	粗；石英多・黒雲母普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(体部)縦ケズリ　(底面)マメツ	縦・斜板ナデ？マメツ	6/8	
157	27	ＳＸ16	弥・器台？	軸部孔径0.7	粗；石英多・黒雲母普・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)橙	(脚部)縦ハケ後穿孔	(受部)ナデ？マメツ　(脚部)指オサエ・ナデ？マメツ	8/8	
158		ＳＸ16	弥・製塩土器	底径(2.8)	粗；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄	指オサエ・マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	細片	
160		ＳＨ01	須・坏		中；石英普・黒雲母少・火山ガラス多	(外)灰(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	細片	
161		ＳＨ01	土・蓋	口径14.6	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)橙	(天井)分割ミガキ？　(口縁)ヨコナデ	マメツ・ハクリ	1/8	
162		ＳＨ01	土・蛸壺	口径4.4	中；石英多・角閃石？普・赤色粒普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	指オサエ・ナデ，マメツ	指オサエ・ヨコナデ	2/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
163		SH01	土・甕		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)にぶい黄褐	(口縁)横ナデ・ナデ (体部)縦・斜ハケ	(口縁)横板ナデ (体部)指オサエ後板ナデ・ナデ	細片	
164		SH01	土・甕	口径27.3	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)灰黄橙	(口縁)ハケ後ヨコナデ (体部)斜ハケ	(口縁)斜ハケ (体部)ハケ？後ナデ	1/8	
165		SH01	土・甕		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	(体部)斜・横ハケ (把手)指ナデ	横・斜板ナデ	1/8	
166		SH02	土・坏	口径(15.8)	細；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)明赤褐(内)橙	ミガキ？マメツ	ヨコナデ？マメツ	細片	
167	27	SH02	土・甕	口径18.6 器高(16.3)	粗；石英多・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)灰黄	(口縁)ヨコナデ (体部)縦ハケ (底部)横・斜ハケ	(口縁)横ハケ (体部)指オサエ後縦板ナデ	2/8	体部内面上半炭化物付着
168		SH02	土・甕	口径(31.4)	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)橙(内)明赤褐	(口縁)ヨコナデ，マメツ (体部)縦ハケ	(口縁)横ハケ後ヨコナデ (体部)指オサエ後横板ナデ・ナデ	細片	
170		SB21	土・坏？		細；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	ヨコナデ	ヨコナデ	細片	
171	27	SX19下層	縄・深鉢	口径(25.8)	中；石英多・黒雲母？少・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄	(口縁)ナデ，刻み目突帯1条，マメツ	ナデ？マメツ	細片	
172		SX19下層	弥・底部	底径(5.2)	粗；石英普・角閃石？少・黒雲母多	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(体部)縦ミガキ (底面)ナデ	縦ケズリの後指オサエ	4/8	
173		SX19下層	弥・底部	底径5.9	粗；石英普・角閃石？少・黒雲母多・火山ガラス少	(外)黒(内)浅黄	(体部)タタキ後縦板ナデ (底面)マメツ	縦板ナデ・指オサエ	6/8	外面煤付着
174		SX19最下層	土・壺	口径13.2	中；石英普・角閃石少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)にぶい黄橙	(口縁)斜・縦ハケ後ヨコナデ？ (体部)ハケ後ヨコナデ	(口縁)横ハケ (体部)指オサエ・ナデ	1/8	
175		SX19中層	須・坏蓋	口径12.6	中；石英少・角閃石？少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(天井)回転ナデ・マメツ (口縁)回転ナデ	回転ナデ・マメツ	1/8	
176		SX19最上層	須・坏	口径9.6 器高3.1 底径6.2	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	3/8	
177		SX19最上層	須・坏	底径8.6	中；石英少・黒色粒少	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
178		SX19最上層	須・坏	口径(16.0) 器高4.4 底径(13.4)	中；石英多・火山ガラス普	(外)青灰(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底部)ケズリ後回転ナデ	回転ナデ	細片	
179		SX19最上層	須・碗	底径7.0	中；石英少・火山ガラス普	(外)灰(内)灰白	(体部)回転ナデ (底部)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
180		SX19最上層	土・碗	底径7.8	中；石英少・黒雲母少・赤色粒普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	マメツ・ハクリ	回転ナデ・マメツ	1/8	
181		SX19最上層	土・碗	底径6.0	中；石英少・黒雲母少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(体部)回転ナデ (底部)回転ヘラ切り後ナデ	分割ミガキ？マメツ	2/8	
182		SX19最上層	黒・碗	底径8.0	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)オリーブ黒	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
183		SX19最上層	黒・碗	底径(8.4)	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)褐灰	回転ナデ・マメツ	マメツ	細片	
184	27	SX19最上層	須・甕		中；石英多・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(頸部)回転ナデ後沈線1条 (体部)回転ナデ後沈線？ (底部)回転ケズリ(底面)マメツ	回転ナデ	6/8	
185	27	SX19最上層	須・甕		中；石英多	(外)浅青灰(内)浅青灰	(頸部)回転ナデ後沈線1条 (体部)回転ナデ後沈線1条 (底部)回転ケズリ後ナデ？	(頸部)シボリ後回転ナデ (体部)回転ナデ	8/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
186	27	ＳＸ19中層	須・鉢	底径8.1	粗；石英多・火山ガラス少	(外)暗青灰(内)暗青灰	(体部)回転ナデ (底部)回転ナデ・沈線1条 (底面)ケズリ後ナデ	回転ナデ	6/8	
187		ＳＸ19最上層	土・甕	口径14.4	中；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)ヨコナデ・マメツ (体部)縦・斜ハケ	(口縁)マメツ (体部)指オサエ・マメツ	1/8	
188		ＳＸ19最上層	土・甕	口径27.4	粗；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)灰黄褐	(口縁)ヨコナデ (体部)縦・斜ハケ	(口縁)横ハケ後ヨコナデ (体部)横板ナデ後ナデ	1/8	
189		ＳＸ19中層	須・短頸壺？	口径(14.7)	中；石英普・火山ガラス少・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ，マメツ	回転ナデ，マメツ	細片	
190		ＳＸ19最上層	土・竈		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)にぶい褐	(庇部)横ハケ・ヨコナデ (体部)ナデ	ナデ	細片	内外面一部煤付着
191		ＳＸ19最上層	土・竈		粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)にぶい褐	縦ハケ後ヨコナデ	横ハケ後ナデ	細片	内面煤付着
193	34	ＳＸ19最上層	須・甕	口径23.2	中；石英普・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)横カキメ・回転ナデ (体部)平行タタキ後カキメ	(口縁)回転ナデ (体部)同心円タタキ	6/8	
194	28	ＳＸ19中層	土馬	現存長15.9 現存高10.7 最大幅7.9	粗；石英多・角閃石少・赤色粒普	橙	ナデ後竹管文・刺突文，胸部正面穿孔			
221		ＳＸ20下層	弥・広口壺	口径(18.0)	中:石英多・火山ガラス少	(外)浅黄(内)灰黄	ヨコナデ・ハクリ	ヨコナデ・ハクリ	1/8	
222		ＳＸ20下層	弥・脚部		中；石英少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	マメツ，凹線3条，鋸歯文	マメツ，横ケズリ	1/8	
232		ＳＸ20上層	土・坏	口径(18.9)	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄(内)浅黄	回転ナデ	回転ナデ後放射状ミガキ	細片	
233		ＳＸ20上層	土・碗	底径6.5	細；石英普・赤色粒多・火山ガラス少	(外)灰白(内)黄灰	(底面)回転ヘラ切り	(底部)回転ナデ？マメツ	4/8	内面煤？付着
234		ＳＸ20上層	土・碗	底径6.8	細；石英普・黒雲母普・火山ガラス少	(外)明赤褐(内)灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	マメツ	1/8	
235		ＳＸ20上層	土・碗	底径7.6	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)暗灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)マメツ・ハクリ	回転ナデ・マメツ	1/8	内面一部煤？付着
236		ＳＸ20上層	土・皿	底径8.1	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)浅黄(内)浅黄橙	ヨコナデ	マメツ	1/8	高台部外面赤彩？
237		ＳＸ20上層	土・皿？	底径(5.4)	細；石英少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄(内)灰黄	回転ナデ	回転ナデ	細片	内・外面赤彩
238		ＳＸ20上層	須・坏蓋		中；石英多・火山ガラス少	(外)灰(内)灰白	(天井)回転ケズリ？後回転ナデ	回転ナデ後ナデ	6/8	火襷無
239		ＳＸ20上層	須・蓋		中；石英普	(外)明青灰(内)青灰	(天井)回転ケズリ？後回転ナデ	回転ナデ	8/8	火襷無
240		ＳＸ20上層	須・蓋		中；石英普・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	(天井)回転ケズリ？後回転ナデ	回転ナデ後ナデ	7/8	火襷無
241	27	ＳＸ20上層	須・坏蓋		細；石英少	(外)灰(内)灰白	(天井)回転ケズリ後回転ナデ，自然釉	回転ナデ後ナデ	2/8	火襷無
242		ＳＸ20上層	須・坏蓋		細；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)明オリーブ	(天井)回転ケズリ後回転ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
243		ＳＸ20上層	須・坏蓋	口径14.8	中；石英普・火山ガラス？少	(外)暗青灰(内)赤灰	(天井)回転ケズリ後回転ナデ (口縁)回転ナデ	(天井)回転ナデ後ナデ	1/8	天井部内面ヘラ記号？，火襷無
244		ＳＸ20上層	須・坏蓋	口径15.1	細；石英普・火山ガラス？少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	火襷無
245		ＳＸ20上層	須・坏蓋	口径(17.0)	中；石英普・火山ガラス少	(外)青灰(内)明緑灰	(天井)回転ケズリ？後回転ナデ (口縁)回転ナデ	回転ナデ後ナデ	細片	火襷無
246		ＳＸ20上層	須・坏蓋	口径(20.0)	中；石英少	(外)青灰(内)灰白	回転ナデ・自然釉	回転ナデ	細片	火襷無
247		ＳＸ20上層	須・坏蓋	口径18.3 器高1.5	細；石英少・黒色粒少	(外)明青灰(内)青灰	(天井)回転ケズリ？後回転ナデ (口縁)回転ナデ？自然釉	回転ナデ	1/8	転用硯，火襷無

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
248		ＳＸ20上層	須・坏？	口径12.7	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
249		ＳＸ20上層	須・坏	口径13.2	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	火襷無
250		ＳＸ20上層	須・坏	底径7.4	細；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	火襷有
251		ＳＸ20上層	須・坏	底径6.8	細；石英多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	火襷有
252		ＳＸ20上層	須・坏	底径9.2	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰白	(底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
253		ＳＸ20上層	須・坏	底径7.8	細；石英多・黒色粒少・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
254		ＳＸ20上層	須・坏	底径8.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細片	火襷有
255		ＳＸ20上層	須・坏	口径(12.5) 底径(8.8)	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	火襷無
256		ＳＸ20上層	須・坏	口径(11.5) 器高3.3 底径(8.2)	細；石英普・火山ガラス少	(外)灰黒(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	細片	火襷無
257		ＳＸ20上層	須・坏	口径12.3 器高2.9 底径8.4	細；石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
258		ＳＸ20上層	須・坏	底径12.8	中；石英普	(外)暗青灰(内)青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後回転ナデ？	回転ナデ	1/8	外底面ヘラ記号？「＋」，火襷無
259		ＳＸ20上層	須・坏	口径10.4	細；石英少・黒色粒少	(外)オリーブ灰(内)灰白	回転ナデ・自然釉	回転ナデ	1/8	火襷無
260		ＳＸ20上層	須・坏	底径8.2	中；石英普・黒雲母少	(外)灰白(内)灰白	(底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ後ナデ	4/8	火襷無
261		ＳＸ20上層	須・坏	底径9.4	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
262		ＳＸ20上層	須・坏	底径9.2	中；石英普	(外)灰白(内)灰白	(底面)回転ヘラ切り後一部回転ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
263		ＳＸ20上層	須・坏	底径9.4	細；石英普・火山ガラス少	(外)暗灰(内)暗青灰	(口縁)回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
264		ＳＸ20上層	須・坏	底径8.1	中；石英普	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
265		ＳＸ20上層	須・坏	底径9.5	中；石英普	(外)暗青灰(内)暗青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
266		ＳＸ20上層	須・坏	底径9.4	中；石英普	(外)暗青灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
267		ＳＸ20上層	須・坏	口径(16.9) 器高5.4 底径(11.4)	中；石英普	(外)オリーブ灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
268		ＳＸ20上層	須・坏	口径12.3 器高4.3 底径9.8	細；石英普	(外)暗青灰(内)青灰	(口縁)回転ナデ (底面)ナデ	(口縁)回転ナデ (底面)回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
269		ＳＸ20上層	須・坏	口径13.2 器高4.4 底径10.1	中；石英普・火山ガラス少	(外)暗青灰(内)青灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	火襷無
270		ＳＸ20上層	須・鉢	口径(12.8)	中；石英少・黒色粒普	(外)灰白(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	
271		ＳＸ20上層	須・壺	口径7.8	細；石英少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ・自然釉	2/8	
272		ＳＸ20上層	須・壺	口径9.6	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
273		ＳＸ20上層	須・壺？	口径12.6	中；石英普・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
274		ＳＸ20上層	須・壺	口径9.2	中；石英普	(外)暗青灰(内)青灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
275		S X20上層	須・壺		中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)暗青灰	(頸部)回転ナデ (体部)平行タタキ	(頸部)回転ナデ (体部)同心円当て具	1/8	十瓶山窯系
276		S X20上層	須・短頸壺	口径(11.1)	中；石英多	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (体部)回転ナデ，自然釉	回転ナデ	細片	
277		S X20上層	須・底部	底径6.8	中；石英普	(外)暗灰(内)灰白	(体部)回転ケズリ？後回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ？自然釉	2/8	
278		S X20上層	須・坏？	底径7.6	中；石英普・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	(体部)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
279		S X20上層	須・底部	底径9.0	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(体部)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ？マメツ	1/8	火襷無
280		S X20上層	須・底部	底径12.0	細；石英普・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(体部)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
281		S X20上層	須・甕	口径16.4	中；石英普・火山ガラス少	(外)明オリーブ灰(内)灰	回転ナデ・沈線1条	回転ナデ	細片	
282		S X20上層	須・甕	口径(20.0)	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	
283		S X20上層	須・底部	底径15.0	中；石英普	(外)灰黒(内)明青灰	(体部)回転ナデ (底面)ナデ？	ケズリ？後回転ナデ，自然釉	1/8	
284	29	S X20上層	須・脚？	厚1.6	中；石英普	(外)灰(内)灰	ケズリ後ナデ？自然釉	指オサエ後ケズリ(メントリ)後ナデ	8/8	
285		S X20上層	土・甕	口径(30.8)	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)灰白(内)淡黄	(口縁)ヨコナデ (体部)縦ハケ後指オサエ・ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ？後ヨコナデ	細片	
286		S X20上層	土・羽釜	口径17.5	粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄(内)浅黄	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後ナデ	斜板ナデ後ヨコナデ	1/8	体部外面煤付着
287		S X20上層	土・羽釜	口径(17.6)	粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス多	(外)にぶい黄(内)黄褐	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	斜板ナデ後ヨコナデ	細片	外面煤付着
288		S X20上層	土・羽釜	口径(22.8)	中；石英多・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)褐灰(内)にぶい黄橙	(口縁)ヨコナデ？ (鍔部)ヨコナデ (体部)縦・斜ハケ	横板ナデ？マメツ・ハクリ	細片	鍔・体部外面煤？付着
289		S X20上層	土・羽釜	口径(28.0)	粗；石英多・火山ガラス普	(外)淡黄(内)淡黄	(口縁)ヨコナデ，マメツ (鍔部)ヨコナデ・指オサエ，マメツ (体部)マメツ	(口縁)横板ナデ後ヨコナデ (体部)横板ナデ	1/8	鍔・体部外面煤付着
290	29	S X20上層	土・蛸壺	孔径1.0	中；石英多・角閃石少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	指オサエ・ナデ	ナデ		
291		S X20上層	土・蛸壺	孔径0.9	中；石英多・火山ガラス普	(外)浅黄(内)浅黄	指オサエ・ナデ・ハクリ	ナデ？ハクリ		
292		S X20上層	土・把手	把手幅5.4	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)浅黄(内)浅黄	指オサエ・ナデ	ハクリ・マメツ		
293	29	S X20上層	土・竈		粗；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)にぶい黄橙	指オサエ・ナデ	横ハケ後指オサエ・ナデ	8/8	
294		S X20上層	土・竈		粗；石英多・黒雲母普・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)橙	縦ハケ・ナデ	ナデ・マメツ	細片	
295		S X20上層	土・竈		粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰褐(内)褐灰	横ナデ・縦ハケ	横ナデ	細片	内面煤付着
296		S X20上層	土・竈	底径26.9	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)灰黄褐	縦ハケ・ナデ	横ナデ・板ナデ	1/8	内面煤付着
297		S X20上層	土・竈	底径(35.6)	粗；石英普・黒雲母普・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)灰黄褐	指オサエ後縦ハケ・ナデ	指オサエ後ナデ	細片	内面煤付着
329		S D127	須・無蓋高坏		中；石英普	(外)灰(内)灰	(坏部)回転ケズリ後回転ナデ (脚部)回転ナデ	回転ナデ	6/8	
330		S D127	須・短頸壺	口径7.9	中；石英少・黒色粒少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	2/8	
332		S D128	須・坏	口径(11.4)	中；石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
334		S D129	須・坏		中；石英少	(外)褐灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
335		SD129	須・蓋	口径9.2 器高2.7	中；石英普・火山ガラス少	(外)青灰(内)灰白	(天井)ケズリ？後ナデ (口縁)回転ナデ	回転ナデ	1/8	
336		SD129	須・高坏		中；石英少	(外)灰(内)灰白	回転ナデ・沈線2条，裾部3方向台形状透し孔	シボリメ	7/8	
337	27	SD129	土・甕	口径16.0 器高17.7	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)にぶい黄橙	(口縁)指オサエ・ナデ，マメツ (体・底部)指オサエ・指ナデ，マメツ	(口縁)指オサエ・ナデ (体部)横・斜板ナデ・ナデ (底部)指オサエ後板ナデ	6/8	口縁部内外面煤等付着
338	27	SD129	土・甕	口径(16.4) 器高16.2	中；石英多	(外)赤褐(内)にぶい赤褐	(口縁)指オサエ後ナデ (体部)指ナデ・ナデ (底部)ナデ	(口縁)指オサエ後ナデ (体部)指オサエ後斜板ナデ・ナデ (底部)指オサエ後ナデ	8/8	体部外面煤付着
340	29	SD135下層	土・皿	口径14.2 器高1.8 底径10.0	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)橙(内)にぶい橙	(口縁)ヨコナデ (底面)ケズリ後ナデ	ヨコナデ	1/8	
341		SD135下層	土・皿	口径14.2 器高1.8 底径10.2	細；石英少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)ケズリ？後ナデ	回転ナデ・マメツ？	1/8	
342	29	SD135下層	土・皿	口径15.0 器高2.2 底径10.2	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄(内)灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)ケズリ後ナデ	回転ナデ	5/8	
343		SD135下層	土・皿	口径14.4 器高2.1 底径10.0	細；石英少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄(内)灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)ケズリ後ナデ	(口縁)回転ナデ (底面)ナデ	2/8	
344		SD135下層	土・坏	口径(14.2)	細；石英少・黒雲母少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)ヨコナデ (体部)ヨコナデ後横ミガキ	(口縁)ヨコナデ後鈍い沈線 (体部)横ハケ後斜ミガキ	細片	
345		SD135下層	土・坏	底径7.4	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)淡黄	(体部)回転ナデ (底面)マメツ	回転ナデ？ナデ	2/8	
346	29	SD135下層	須・蓋	口径10.6 器高3.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(天井)回転ナデ後ケズリ (口縁)回転ナデ	回転ナデ	7/8	
347		SD135下層	須・坏蓋	口径15.5	細；石英多・火山ガラス普	(外)青灰(内)青灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
348	30	SD135下層	須・坏蓋	口径17.4	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(天井)回転ケズリ後一部回転ナデ (口縁)回転ナデ	(天井)回転ナデ後ナデ (口縁)回転ナデ	3/8	火襷無
349	30	SD135下層	須・坏蓋	口径(18.2) 器高3.2	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(天井)回転ケズリ後一部回転ナデ・ナデ (口縁)回転ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
350	30	SD135下層	須・皿	底径7.1	細；石英少・赤色粒少	(外)灰白(内)灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	外底面墨書「井南」，火襷無？
351	30	SD135下層	須・皿	口径13.3 器高2.0 底径9.3	中；石英少・黒色粒少	(外)灰(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	6/8	外底面墨書「下」，火襷有
352	30	SD135下層	須・皿	口径(14.4) 器高2.1 底径(10.4)	細；石英普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細片	外底面墨書「久」，火襷有
353	31	SD135下層	須・坏	口径13.7 器高3.4 底径9.4	細；石英少	(外)灰白(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	4/8	内外面黒漆付着，外底面墨書「人」
354	30	SD135下層	須・皿	口径12.8 器高2.2 底径9.6	細；石英普・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	火襷有
355		SD135下層	須・皿	口径12.7 器高1.7 底径9.0	細；石英少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
356		ＳＤ135下層	須・皿	口径16.8 器高1.9 底径13.6	細；石英普・赤色粒普	(外)明緑灰(内)明オリーブ灰	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
357		ＳＤ135下層	須・皿	口径15.0 器高1.8 底径10.6	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
358		ＳＤ135下層	須・皿？	底径(9.0)	細；石英多	(外)青灰(内)青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	細片	火襷有
359		ＳＤ135下層	須・坏	口径11.9	細；石英普	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
360		ＳＤ135下層	須・坏	口径11.9	細；石英少・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	2/8	火襷有
361		ＳＤ135下層	須・坏	底径7.4	細；石英普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
362		ＳＤ135下層	須・坏	底径7.7	細；石英多	(外)灰(内)灰オリーブ	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
363		ＳＤ135下層	須・坏	底径7.2	細；石英多	(外)青灰(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り	回転ナデ	1/8	火襷有？
364		ＳＤ135下層	須・坏	底径7.4	細；石英多	(外)青灰(内)青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	火襷有
365		ＳＤ135下層	須・坏	底径7.4	中；石英普	(外)黄灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細片	火襷有
366		ＳＤ135下層	須・坏	底径7.0	細；石英多・黒色粒少	(外)灰白(内)オリーブ灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	外面煤付着，火襷有
367	31	ＳＤ135下層	須・坏	口径12:4 器高3.1 底径8.2	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ・マメツ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	内底面中央に刻印。口縁部外面煤？付着。火襷有
368		ＳＤ135下層	須・坏	底径8.2	細；石英多・火山ガラス？少	(外)明オリーブ灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)ナデ	回転ナデ	2/8	火襷有
369		ＳＤ135下層	須・坏	口径13.1 器高3.5 底径8.6	中；石英多	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
370	31	ＳＤ135下層	須・坏	口径12.8 器高3.4 底径7.8	細；石英普・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	火襷有
371		ＳＤ135下層	須・坏	口径12.3 器高3.1 底径8.0	細；石英多・黒色粒少・火山ガラス多	(外)灰オリーブ(内)灰オリーブ	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
372		ＳＤ135下層	須・坏	口径12.0 器高4.0 底径7.3	細；石英少	(外)灰白(内)緑灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
373		ＳＤ135下層	須・坏	口径12.8 器高3.6 底径7.4	細；石英少	(外)灰白(内)青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	火襷有
374		ＳＤ135下層	須・坏	口径13.0 器高3.2 底径8.6	中；石英多・黒色粒少・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
375		ＳＤ135下層	須・坏	口径12.7 器高3.6 底径7.6	細；石英少	(外)灰(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	火襷有
376		ＳＤ135下層	須・坏	口径12.9 器高3.6 底径7.9	中；石英多	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	火襷有
377		ＳＤ135下層	須・坏	口径12.1 器高3.5 底径7.6	細；石英多・赤色粒少	(外)灰(内)黄褐	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	火襷有

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
378	31	S D135下層	須・坏	口径13.7 器高3.2 底径9.0	中；石英多	(外)灰白(内)黒	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	3/8	内面煤？付着，火襷無
379		S D135下層	須・坏	口径15.0 器高3.3 底径10.9	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
380	31	S D135下層	須・坏	口径10.8 器高4.8 底径6.6	中；石英普	(外)青灰(内)青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後一部ナデ	回転ナデ	6/8	火襷無
381		S D135下層	須・坏	口径14.4	細；石英普・黒色粒少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷有
382		S D135下層	須・坏	底径10.2	細；石英多	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)ヨコナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
383		S D135下層	須・坏	底径9.4	中；石英多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後一部ヨコナデ	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	3/8	火襷無
384	32	S D135下層	須・坏	口径16.8 器高4.9 底径12.6	中；石英普・黒色粒少	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ケズリ後一部ヨコナデ	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	4/8	火襷無
385	32	S D135下層	須・坏	口径17.4 器高6.2 底径9.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ・ハクリ (底面)ヘラ切り後ナデ	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	4/8	火襷無
386		S D135下層	須・高坏	口径20.8	中；石英多	(外)青灰(内)緑灰	(口縁)回転ナデ，回転ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ後一部ナデ	1/8	
387		S D135下層	須・高坏		粗；石英普・火山ガラス少	(外)青灰(内)青灰	回転ナデ	(坏部)回転ナデ後ナデ (脚部)回転ナデ	6/8	
388	31	S D135下層	須・脚部	底径(9.1)	細；石英少・火山ガラス少	(外)灰(内)青灰	回転ナデ，自然釉	回転ナデ	7/8	
389		S D135下層	土・皿	口径8.1 器高1.2 底径5.9	細；石英少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後マメツ	回転ナデ	1/8	
390	32	S D135下層	土・皿	口径10.0 器高2.1 底径4.9	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ？ハクリ (底面)回転ヘラ切り？ハクリ	回転ナデ？ハクリ	4/8	
391		S D135下層	土・坏	底径(5.3)	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)にぶい橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細片	内・外面煤付着
392	32	S D135下層	土・坏	口径13.0 器高3.4 底径7.2	細；石英多・赤色粒少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕・ナデ	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	6/8	
393		S D135下層	土・坏	底径(7.3)	細；石英少・黒色粒少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
394		S D135下層	土・碗	口径15.4	中；石英少・火山ガラス多	(外)灰黄(内)灰黄	回転ナデ後横ミガキ	横ミガキ	2/8	
395		S D135下層	須・碗	口径13.9	細；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	十瓶山窯系
396		S D135下層	黒・碗	口径14.3	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい橙(内)灰黄褐	(口縁)回転ナデ (体部)回転ナデ後回転ミガキ	(口縁)回転ナデ？ (体部)ナデ後分割ミガキ	2/8	
397		S D135下層	黒・碗	底径7.0	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄(内)黒	回転ナデ	マメツ	1/8	
398		S D135下層	黒・碗	底径(7.4)	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)黒	(体部)横ケズリ？	ミガキ	細片	
399		S D135下層	黒・碗	底径5.5	細；石英少・火山ガラス？少	(外)オリーブ黒(内)オリーブ黒	(体部)ナデ？マメツ (底部)ヨコナデ	分割ミガキ	1/8	
400		S D135下層	黒・碗	底径6.1	中；石英普・火山ガラス多	(外)灰白(内)暗灰	回転ナデ・ナデ	ミガキ・マメツ	1/8	
401		S D135下層	黒・碗	底径6.2	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス多	(外)にぶい黄橙(内)暗灰	(底部)回転ナデ後回転ミガキ (高台)回転ナデ	ナデ後分割ミガキ	3/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
402		SD135下層	瓦・碗？	口径14.6	細；石英普・角閃石？少・火山ガラス少	(外)暗灰(内)暗灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	
403	32	SD135下層	黒・碗	口径14.4 器高5.7 底径6.6	中；石英少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)灰白(内)黒	(口縁～体部)回転ナデ後横ミガキ (高台)回転ナデ (高台内)回転ヘラ切り後ナデ	(口縁～体部)回転ナデ後横ミガキ (底部)縦ミガキ	4/8	
404	32	SD135下層	土・甕	口径16.8 器高12.6	中；石英多・火山ガラス普	(外)橙(内)褐灰	(口縁)ヨコナデ (体部)縦・斜ハケ (底部)ハケ	(口縁)斜ハケ後ナデ (体部)指オサエ・ナデ後下半板ナデ	4/8	体部内外面煤等付着
405		SD135下層	土・甕	口径17.8	粗；石英普・角閃石？少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄(内)浅黄	(口縁)ハケ後ヨコナデ (体部)縦ハケ後一部ナデ	(口縁)斜ハケ後一部ナデ (体部)横板ナデ後一部ナデ	1/8	
406		SD135下層	土・甕	口径19.7	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)灰黄	(口縁)ハケ後ヨコナデ (体部)縦ハケ	(口縁)横ハケ (体部)指オサエ後斜板ナデ・ナデ	2/8	内・外面煤等付着
407		SD135下層	土・甕	口径25.4	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄(内)にぶい黄	(口縁)ヨコナデ，凹線1条 (体部)縦ハケ後ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ？マメツ (体部)指オサエ後斜板ナデ？マメツ	1/8	
408		SD135下層	土・甕	口径28.6	粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)灰黄褐	(口縁)ヨコナデ (体部)縦・斜ハケ	(口縁)斜・横ハケ (体部)指オサエ後横板ナデ・ナデ	1/8	内・外面煤等付着
409		SD135下層	土・甕	口径(35.0)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄(内)にぶい黄	(口縁)ヨコナデ (体部)斜ハケ	(口縁)横ハケ後一部ヨコナデ (体部)横板ナデ後ヨコナデ？	細片	口縁部外面煤付着
410		SD135下層	土・羽釜	口径19.0	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄(内)灰黄	(口縁)横板ナデ後ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後縦ハケ	(口縁)ヨコナデ (体部)横・斜板ナデ	細片	体部内面煤付着
411		SD135下層	土・羽釜	口径26.4	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰黄(内)灰オリーブ	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横・斜板ナデ	1/8	内面炭化物？付着
412	32	SD135下層	土・竈		中；石英普・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)褐灰	(口縁)ヨコナデ (体部)斜ハケ後上端ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)斜ハケ後上半ナデ	細片	内面煤付着
413		SD135下層	須・甕	口径15.9	中；石英普・火山ガラス？少	(外)灰(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
414		SD135下層	須・甕	口径(25.5)	粗；石英普	(外)灰オリーブ(内)灰白	回転ナデ，自然釉	回転ナデ，自然釉	細片	十瓶山窯系
415		SD135下層	須・壺	口径9.2	細；石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ，自然釉	回転ナデ・自然釉	1/8	
416		SD135下層	須・短頸壺	口径(10.4)	中:石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ・自然釉	回転ナデ	1/8	
417		SD135下層	須・脚部	底径(12.4)	粗；石英多・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	5/8	
418		SD135下層	須・壺？	底径13.2	中；石英普	(外)灰(内)灰白	(高台)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ後ナデ	3/8	火襷無
419		SD135下層	須・底部	底径9.0	中；石英普	(外)青灰(内)青灰	(体部)回転ケズリ後回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	(体部)回転ナデ (底部)ナデ？自然釉	2/8	
420		SD135下層	須・底部	底径10.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)青灰(内)青灰	(体部)回転ケズリ後回転ナデ (底面)ナデ	回転ナデ・ナデ	2/8	
421		SD135下層	須・底部	底径7.1	中；石英多	(外)青灰(内)青灰	(体部)回転ケズリ？後回転ナデ (底部)ナデ？	回転ナデ	1/8	
422		SD135下層	須・底部	底径6.6	中；石英多	(外)青灰(内)青灰	(体部)回転ナデ (底部)回転ケズリ後回転ナデ (底面)ヨコナデ	回転ナデ	6/8	内面煤？付着，外底面ヘラ記号「－」
423	32	SD135下層	須・体部	現存長11.5 最大幅7.8	中；石英少	(外)灰(内)灰	板ナデ後ナデ	同心円当て具後ナデ	破片	転用硯・内面墨付着
424	32	SD135下層	須・体部	現存長13.3 最大幅13.3	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	平行タタキ後カキメ	同心円当て具後板ナデ・ナデ	破片	転用硯，内面墨付着

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
425	34	SD135下層	須・甕	口径19.8 器高46.4	粗；石英普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (体部)格子タタキ後カキメ	(口縁)回転ナデ (体部)同心円当て具痕	7/8	頸部外面ヘラ記号
464		SD135上層	土・皿	口径(12.7) 器高1.9 底径(9.6)	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄(内)灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)ケズリ？後ナデ	回転ナデ	1/8	
465		SD135上層	土・碗	口径(13.0) 器高3.4 底径(5.6)	細；石英普・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい橙	(口縁)回転ナデ (底部)横ケズリ後ナデ？ (底面)ケズリ後ナデ	回転ナデ	2/8	
466		SD135上層	土・碗	底径6.5	細；石英少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)浅黄橙	(底部)回転ナデ・マメツ	マメツ・ハクリ	1/8	
467		SD135上層	土・碗	底径7.2	細；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	回転ナデ？マメツ	マメツ・ハクリ	細片	
468		SD135上層	土・碗	底径6.4	微；石英少	(外)灰白(内)灰白	マメツ・ハクリ	横板ナデ？マメツ	2/8	白色系
469		SD135上層	須・坏蓋		中；石英普・黒色粒少	(外)灰(内)灰	(天井)回転ケズリ後一部回転ナデ	回転ナデ後ナデ	5/8	火襷無
470		SD135上層	須・坏蓋	口径7.5	中；石英普	(外)青灰(内)青灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
471		SD135上層	須・坏蓋	口径11.7	中；石英普	(外)明青灰(内)青灰	(天井)回転ヘラ切り後回転ナデ (口縁)回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
472		SD135上層	須・坏蓋	口径13.4	細；石英多	(外)暗灰(内)青灰	(天井)回転ケズリ後回転ナデ (口縁)回転ナデ	回転ナデ後一部ナデ	1/8	
473		SD135上層	須・坏	底径8.0	細；石英少・黒色粒少	(外)青灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	
474		SD135上層	須・坏	底径6.7	中；石英普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	5/8	火襷有
475		SD135上層	須・坏	底径7.4	細；石英少・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
476		SD135上層	須・坏	底径(9.1)	細；石英普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細片	火襷有
477	33	SD135上層	須・坏	口径13.8 器高3.7 底径9.4	中；石英少・黒色粒少	(外)青灰(内)青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	
478		SD135上層	須・坏	底径10.0	中；石英多・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	火襷無
479	33	SD135上層	須・坏	口径13.6 器高6.7 底径7.6	中；石英普	(外)青灰・オリーブ黒(内)オリーブ黒	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	7/8	外底面ヘラ記号「×」，火襷有
480	33	SD135上層	須・坏	口径16.8 器高6.4 底径10.7	中；石英普	(外)暗青灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	5/8	火襷無
481		SD135上層	須・台付碗	口径(8.6)	中；石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ，沈線2条	回転ナデ	1/8	
482		SD135上層	須・高坏		中；石英少	(外)青灰(内)明青灰	回転ナデ	回転ナデ	6/8	
483	33	SD135上層	須・碗	底径5.7	中；石英普・火山ガラス？少	(外)灰白(内)灰白	(体部)回転ナデ (底面)回転ナデ	板ナデ・ナデ	4/8	十瓶山窯系
484		SD135上層	須・碗	口径15.0 器高4.5 底径4.2	細；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ・マメツ (高台)ヨコナデ・マメツ	(口縁)ハケ後回転ナデ (底部)放射状ハケ	2/8	十瓶山窯系
485		SD135上層	黒・碗	底径5.8	中；石英少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)オリーブ黒	ヨコナデ・マメツ	マメツ	3/8	
486		SD135上層	黒・碗	底径7.6	細；石英少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)黒	(体部)ヨコナデ後横ミガキ (底面)ヘラ切り後ナデ	格子状ミガキ	4/8	
487		SD135上層	黒・碗	底径5.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰黄(内)暗灰	(高台)回転ナデ	ミガキ	8/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
488	33	ＳＤ135上層	磁・碗	口径16.2	精緻	(釉)灰白(胎)灰白	施釉	施釉	1/8	中国産白磁
489	33	ＳＤ135上層	磁・碗		精緻	(釉)灰白(胎)灰白	施釉	施釉・蓮華文？	細片	龍泉窯系青磁
490	33	ＳＤ135上層	須・短頸壺	口径7.1 器高7.9 底径5.8	中；石英普	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (体部)回転ケズリ後回転ナデ (底面)回転ナデ？	回転ナデ，自然釉	8/8	底部焼成後穿孔
491		ＳＤ135上層	須・壺	底径11.2	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白(内)浅青灰	回転ヘラ切り？後回転ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
492		ＳＤ135上層	須・壺	底径8.3	細；石英少・火山ガラス少	(外)灰(内)灰白	(体部)回転ケズリ？後回転ナデ (高台)回転ナデ	(体部)回転ナデ (底部)ナデ	2/8	
493		ＳＤ135上層	須・壺	底径12.6	中；石英少	(外)灰(内)灰	(体部)回転ケズリ後回転ナデ (底面)無調整	回転ナデ	1/8	
494		ＳＤ135上層	須・甕	底径(16.7)	中；石英少	(外)灰(内)灰白	(体部)平行タタキ後ナデ (底面)無調整，刻・櫛圧痕	(体部)縦・斜板ナデ・ナデ	1/8	十瓶山窯系
496		ＳＤ135上層	土・甕	口径19.0	中；石英普・火山ガラス普	(外)灰褐(内)黒褐	(口縁)ヨコナデ (体部)斜ハケ	(口縁)ヨコナデ (体部)斜ケズリ？後指オサエ・ナデ	1/8	
497		ＳＤ135上層	土・甕	口径27.4	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)明黄褐	(口縁)ヨコナデ (体部)斜ハケ	(口縁)横ハケ後ヨコナデ (体部)指オサエ後横板ナデ・ナデ	1/8	外面煤付着
498		ＳＤ135上層	土・甕	口径30.2	粗；石英多・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (体部)斜ハケ後一部ナデ	(口縁)横・斜ハケ後ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	2/8	
499		ＳＤ135上層	土・竈		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい黄褐(内)橙	(口縁)ヨコナデ (体部)斜ハケ	ヨコナデ・ナデ	細片	一部２次的被熱
500		ＳＤ135上層	土・竈		中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄褐(内)にぶい橙	(口縁)ヨコナデ (庇部)横ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	細片	庇部煤付着
501	34	ＳＤ135上層	土・竈		粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)黒褐(内)にぶい黄橙	(庇部)横・斜ハケ，ヨコナデ		細片	庇部煤付着
502		ＳＤ135上層	土・竈		粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)橙	(庇部)横ハケ・ナデ，ヨコナデ	(体部)横板ナデ・ナデ	細片	庇部一部煤付着
503	34	ＳＤ135上層	土・竈		粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)灰黄褐	(庇部)横・斜ハケ・ナデ，ヨコナデ (体部)ナデ	横ナデ，板ナデ	細片	内外面煤付着
504	34	ＳＤ135上層	土・竈		粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)灰黄褐(内)にぶい黄橙	縦ハケ	指オサエ・ナデ	細片	庇部剥離，一部煤付着
505	34	ＳＤ135上層	土・製塩土器	口径(6.8)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	ナデ？マメツ・ハクリ	指オサエ，マメツ・ハクリ	細片	
506		ＳＤ135上層	土・製塩土器	口径(11.0)	細；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)浅黄橙	格子タタキ・マメツ	ナデ	細片	
507		ＳＤ135上層	土・製塩土器		細；石英多・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	格子タタキ？	指オサエ・ナデ	細片	
514		ＳＤ135最上層	黒・碗	口径13.6	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)黄灰	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
516	34	ＳＤ136下層	土・碗	口径(15.0) 器高(5.3) 底径6.8	細；石英普・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)指オサエ後回転ナデ・マメツ (底部)回転ヘラ切り後一部ヨコナデ	縦ハケ後ナデ？マメツ	3/8	白色系
517		ＳＤ136下層	黒・碗	底径(5.5)	中；石英少・火山ガラス多	(外)灰白(内)黒	(底面)回転ヘラ切り後ナデ	ミガキ，マメツ	2/8	
518		ＳＤ136下層	土・碗	底径7.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰黄(内)暗灰黄	回転ナデ？マメツ	マメツ	1/8	
519		ＳＤ136下層	須・碗	底径7.2	中；石英普	(外)灰(内)灰	(体部)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	十瓶山窯系

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
520		ＳＤ136下層	瓦・碗	口径(15.9)	細；石英普・火山ガラス？少	(外)灰白(内)黒	(口縁)ヨコナデ　(体部)指オサエ？	ヨコナデ後横ミガキ	細片	和泉型
521		ＳＤ136下層	瓦・碗	底径4.0	細；石英少・黒色粒少	(外)暗灰(内)暗灰	(体部)指オサエ・ナデ　(底面)ナデ	ナデ後平行暗文	1/8	和泉型
522		ＳＤ136最上層	磁・碗		精緻	(釉)灰(胎)灰白	回転ケズリ	施釉	細片	中国産白磁
523		ＳＤ136上層	土・甕	口径29.4	中；石英多・黒雲母普・火山ガラス少	(外)暗灰黄(内)灰黄	(口縁)ヨコナデ？ハクリ　(体部)斜ハケ	(口縁)横ハケ後ヨコナデ　(体部)板ナデ？ハクリ	細片	口縁端部赤彩？
539		包含層Ⅱ	須・坏蓋	口径15.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(天井)回転ケズリ？後回転ナデ　(口縁)回転ナデ	回転ナデ後一部ナデ	1/8	火襷無
540		包含層Ⅱ	須・坏蓋	口径(16.4)	細；石英少	(外)灰褐(内)灰	(天井)カキメ後一部回転ナデ？　(口縁)回転ナデ	回転ナデ	細片	火襷無
541	34	包含層Ⅱ	須・高坏	口径23.6	細；石英少・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰	(坏部)回転ケズリ？後回転ナデ，自然釉　(口縁)回転ナデ	(坏部)回転ナデ後ナデ	2/8	火襷無
542		包含層Ⅱ	須・皿	口径15.7 器高2.2 底径12.8	中；石英普	(外)灰白(内)灰	(口縁)回転ナデ　(底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	火襷無
543		包含層Ⅱ	須・坏	口径9.8	中；石英普	(外)灰(内)青灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
544		包含層Ⅱ	須・坏	底径9.4	細；石英普・黒色粒少	(外)灰(内)灰	(底面)回転ヘラ切り後一部回転ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
545		包含層Ⅱ	須・碗	底径(4.7)	細；石英普・火山ガラス？少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ後斜板ナデ	細片	十瓶山窯系
546	35	包含層Ⅱ	須・壺	口径13.9	中；石英普・黒色粒少	(外)灰オリーブ(内)灰オリーブ	(口頸部)回転ナデ，自然釉　(体部)自然釉	(口頸部)回転ナデ，自然釉　(体部)回転ナデ，ハクリ	2/8	
547		包含層Ⅱ	須・短頸壺	口径(8.2)	細；石英普・火山ガラス多	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	
548		包含層Ⅱ	須・壺		中；石英普	(外)灰(内)灰白	(体部)回転ナデ・沈線1条　(底部)ケズリ	(体部)回転ナデ　(底部)ナデ	1/8	
549		包含層Ⅱ	須・壺	底径14.0	中；石英少	(外)灰(内)灰白	回転ナデ・脚部３方向長方形透し孔	(体部)ナデ　(脚部)回転ナデ	3/8	
550		包含層Ⅱ	須・甕	口径25.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	回転ナデ・沈線1条	回転ナデ	3/8	
551		包含層Ⅱ	須・甕	口径21.2	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰白	(口縁)回転ナデ　(体部)平行タタキ，自然釉	(口縁)回転ナデ，自然釉　(体部)同心円当て具後ナデ	細片	
552		包含層Ⅱ	須・甕	口径19.2	中；石英少・火山ガラス普	(外)暗緑灰(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	2/8	
553	35	包含層Ⅱ	須・甕	口径38.8	中；石英普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ・カキメ後沈線３段・櫛描波状文３条　(体部)平行タタキ	(口縁)回転ナデ　(体部)同心円当て具	1/8	
554	35	包含層Ⅱ	須・甕	口径44.4	中；石英普	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ・沈線２条　(体部)平行タタキ後一部回転ナデ	(口縁)回転ナデ，自然釉　(体部)同心円当て具後ナデ	1/8	
555		包含層Ⅱ	須・坏蓋	口径14.0	中；石英多・黒色粒普	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
556		包含層Ⅱ	須・坏	底径8.5	細；石英普	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
557		包含層Ⅱ	須・坏	底径7.8	中；石英普	(外)青灰(内)青灰	(口縁)回転ナデ　(底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
581		ＳＢ01	土・皿	口径11.6 器高2.3 底径7.6	中；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ　(底面)ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
582		ＳＢ01	土・坏	口径12.2 器高3.6 底径8.0	中；石英普・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ　(底面)回転ヘラ切り後ナデ	(口縁)回転ナデ　(底部)回転ナデ後ナデ	3/8	
583		ＳＢ01	土・坏？	底径(7.4)	中；石英普・赤色粒少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ　(底面)ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ	1/8	
584		ＳＢ02	土・皿	口径7.0 器高1.1 底径5.2	中；石英少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ　(底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
585		S B02	土・坏	口径10.2 器高3.1 底径6.0	細；石英少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ・マメツ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕？	回転ナデ・マメツ	8/8	
586		S B05	土・坏	口径10.1 器高2.9 底径5.4	細；石英少・赤色粒少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	1/8	
587		S B05	須・捏鉢		中；石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	東播系
588		S B07	土・皿	口径(8.4)	細；石英普・赤色粒少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
589		S B07	土・皿	口径(10.7) 器高2.2 底径(6.9)	中；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	細片	底部内外面煤付着
590		S B11	土・皿	口径7.4 器高1.0 底径6.0	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	
591		S B11	土・皿	口径8.3 器高1.3 底径5.7	中；石英普・赤色粒普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ，マメツ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ，マメツ	3/8	
592		S B11	土・皿	口径8.6 器高1.4 底径6.4	中；石英普・赤色粒多・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)回転ナデ？ハクリ (底面)回転ヘラ切り，ハクリ	回転ナデ？ハクリ	6/8	
593		S B11	土・坏	口径10.5 器高2.8 底径6.7	中；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ？マメツ (底面)回転ヘラ切り？マメツ	回転ナデ？マメツ	1/8	
594		S B11	土・坏	口径10.2	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	細片	
595		S B11	土・鍋	口径33.1	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰黄褐(内)黄灰	(口縁)横ハケ後一部ナデ，指オサエ・ナデ (体部)縦ハケ？	横ハケ	1/8	内・外面煤付着
597		S B12	土・皿	口径6.9 器高1.0 底径5.7	細；石英普・赤色粒少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？	回転ナデ	2/8	
599		S B17	土・足釜	口径22.8	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい黄褐(内)にぶい黄橙	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ・ナデ (底部)格子タタキ後ナデ (脚部)ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ・ナデ	1/8	底部外面煤付着
600		S B19	土・皿	口径6.2 器高(0.9) 底径5.6	細；石英普・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
601		S B19	土・皿	口径11.0 器高(2.4) 底径6.1	中；石英普・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
602	35	S B19	土・皿	口径10.8	中；石英普・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ？マメツ	回転ナデ	2/8	底部外面「×」字ヘラ記号
603		S B19	土・台付皿？	底径9.2	中；石英多・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい赤褐(内)にぶい赤褐	ヨコナデ？	ヨコナデ？	1/8	
604		S B22	土・足釜	口径(20.2)	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)横板ナデ後ナデ (鍔部)横板ナデ後ナデ (体部)縦ハケ	(口縁)横ハケ後ナデ (体部)横板ナデ？	細片	鍔・体部外面煤付着
605		S B23	土・皿	口径7.8 器高(1.3) 底径6.0	細；石英少・火山ガラス普	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	
606		S P0504	土・皿	口径6.4 器高0.9 底径5.0	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)灰白	(口縁)マメツ・ハクリ (底面)回転ヘラ切り	マメツ・ハクリ	1/8	
607		S P1055	土・皿	口径5.7 器高1.1 底径4.8	中；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	8/8	
608		S P0969	土・皿	口径6.3 器高1.0 底径5.0	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	7/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
609		SP0781	土・皿	口径6.1 器高1.0 底径5.4	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	8/8	
610		SP1824	土・皿	口径(7.8) 器高(1.4) 底径(5.4)	細；石英少・火山ガラス多	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	回転ナデ，マメツ	回転ナデ，マメツ	1/8	
611		W3区2面 SP01	土・皿	口径8.5 器高(1.8)	細；石英少・赤色粒多	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	
612		SP1404	土・皿	口径7.9 器高1.6 底径5.0	中；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	
613		SP1328	土・皿	口径8.3 器高1.8 底径5.5	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい橙(内)にぶい橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	
614		SP0931	土・皿	口径10.1 器高(1.9) 底径5.8	細；石英少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
615		SP0769	土・皿	口径10.4 器高2.8 底径6.4	中；石英少・黒雲母少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	3/8	
616	35	SP0495	土・皿	口径10.6 器高2.6 底径6.6	中；石英少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	7/8	
617		SP0931	須・碗	口径13.2	細；石英少・火山ガラス少	(外)灰白～灰(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	2/8	十瓶山窯系
618		SP0145	磁・碗	底径4.8	精緻	(胎)灰白(釉)オリーブ灰	施釉，高台端から高台内無釉・ケズリ	施釉・圏線1条	5/8	龍泉窯系青磁
619		SP0930	須・捏鉢	口径(22.7)	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	細片	東播系
620		SP1802	土・足釜	口径21.6	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス多	(外)にぶい黄(内)にぶい橙	(口縁)ハクリ (鍔部)ヨコナデ (体部)ハケ後指オサエ・ナデ，ハクリ	(口縁)ナデ (体部)指オサエ後横・斜ハケ	1/8	鍔・体部外面煤付着
621	35	SP0966	陶・擂鉢	口径32.1 器高13.3 底径15.1	中；石英普・火山ガラス？少	(外)褐灰(内)にぶい赤褐	(口縁)回転ナデ (体部)回転ナデ (底部)横板ナデ・ナデ (底面)マメツ	回転ナデ後卸目7条	1/8	備前焼・内面上半煤付着
642		SK04	土・皿	口径8.6 器高(1.7) 底径5.8	細；石英少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
643	35	SK12上層	土・足釜	口径22.4	中；石英多・角閃石少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)褐灰(内)にぶい黄橙	(口縁)ヨコナデ (鍔部)横ハケ・板ナデ後ヨコナデ (体部)斜ハケ後ナデ (底部)格子タタキ	(口縁)横ハケ (体部)指オサエ後横・斜ハケ	2/8	外面煤付着
646		SK13上層	土・皿	口径8.0 器高1.8 底径6.2	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	8/8	
647		SK18	土・鍋	口径41.4	中；石英多・角閃石？少・火山ガラス少	(外)灰黄褐(内)にぶい橙	(口縁)ヨコナデ・ナデ，沈線1条 (体部)指オサエ後縦ハケ	(口縁)横ハケ (体部)指オサエ後横ハケ	細片	口縁部外面煤付着
648	35	SK19	鞴羽口	径(11.0) 最大厚1.6	粗；石英普	(外)暗灰(内)にぶい橙			細片	土師質，外面鉄滓・炉壁土付着
649		SK31	瓦・鍋		中；石英多・黒雲母？少・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	ハクリ	ハクリ	細片	
650		SK31	壁土	現存長4.3 最大幅7.5 最大厚5.0	粗；石英多					
651		SX03上層	土・皿	口径7.0 器高(1.0) 底径5.4	細；石英少・黒雲母少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？	回転ナデ	2/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
652		ＳＸ03上層	土・皿	口径(7.0) 器高1.2 底径(5.1)	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	細片	
653		ＳＸ03上層	土・皿	口径10.9	細；石英少	(外)淡黄(内)淡黄	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
654		ＳＸ03上層	土・坏	口径10.2 器高2.7 底径5.8	細；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ	1/8	
655		ＳＸ03上層	須・坏	口径13.6	細；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	斜・横板ナデ	1/8	十瓶山窯系
656		ＳＸ03上層	須・坏	口径(14.4) 器高(4.0) 底径(6.2)	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)マメツ・ハクリ	縦・斜板ナデ？	細片	十瓶山窯系？
657		ＳＸ03上層	陶・擂鉢		中；石英普	(外)灰黄褐(内)灰白	回転ナデ，自然釉	回転ナデ後卸目	細片	備前焼
658		ＳＸ03上層	須・捏鉢	口径28.6	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	細片	東播系
659		ＳＸ03上層	陶・甕		中；石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ，自然釉	回転ナデ	細片	備前焼
660		ＳＸ03上層	陶・甕	口径(46.2)	中；石英普・火山ガラス？普	(外)灰褐(内)黄灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	備前焼
663		ＳＸ04	土・皿	口径5.7 器高1.0 底径5.6	細；石英少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	4/8	
664		ＳＸ04	土・皿	口径12.3 器高2.6 底径6.1	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	
665		ＳＸ04	土・坏	口径13.2 器高2.9 底径6.4	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
666		ＳＸ04	瓦・鍋	口径(44.8)	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)褐灰(内)灰白	(口縁)指オサエ・ナデ後一部ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	(口縁)横板ナデ後ヨコナデ (体部)横板ナデ後ナデ？	細片	外面煤付着
667		ＳＸ04	土・甕	口径(44.0)	粗；石英普・角閃石？少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)にぶい橙	(口縁)横ナデ (頸部)指オサエ後横ナデ (体部)格子タタキ後ナデ	(口頸)横板ナデ・ナデ (体部)横ハケ後ナデ	1/8	
668	36	ＳＸ05	土・皿	口径6.7 器高1.1 底径5.4	細；石英少・火山ガラス多	(外)灰黄(内)灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	8/8	
669		ＳＸ05	土・皿	口径6.8 器高1.0 底径4.9	細；石英少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	8/8	
670		ＳＸ05	土・皿	口径6.2 器高1.0 底径4.7	細；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	4/8	
671		ＳＸ05	土・皿	口径7.0 器高1.3 底径5.1	細；石英普・赤色粒普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	
672		ＳＸ05	土・皿	口径6.9 器高1.2 底径4.0	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)灰白(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	1/8	
673		ＳＸ05	土・皿	口径6.9 器高1.2 底径4.8	細；石英多・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	4/8	
674		ＳＸ05	土・皿	口径6.9 器高1.1 底径5.1	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	
675	36	ＳＸ05	土・皿	口径6.9 器高1.1 底径5.6	細；石英少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	7/8	
676		ＳＸ05	土・皿	口径10.0 器高2.1 底径6.0	細；石英少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
677		ＳＸ05	土・坏	口径13.6	細；石英普・火山ガラス多	(外)褐灰(内)黄灰	回転ナデ	回転ナデ	2/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
678		S X05	土・坏	口径10.0	細；石英多・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)灰白	回転ナデ・マメツ	回転ナデ・マメツ	1/8	
679		S X05	土・坏	口径(9.8) 器高2.8 底径(5.4)	細；石英少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ？	1/8	
680		S X05	土・坏	口径10.8 器高3.1 底径6.5	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰黄	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	(口縁)回転ナデ (底部)回転ナデ後ナデ	4/8	
681		S X05	土・坏	口径(10.9) 器高3.0 底径(6.8)	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ・マメツ	1/8	
682		S X05	土・坏	口径11.2 底径(6.4)	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ？マメツ	回転ナデ	2/8	
683		S X05	土・足釜		中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)縦ハケ後ヨコナデ (鍔部)横ハケ，ヨコナデ (体部)指オサエ後斜ハケ	指オサエ後横ハケ	細片	
684		S X05	黒・碗	底径6.0	細；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)灰白(内)暗灰	回転ナデ・マメツ	マメツ	8/8	
685		S X06上層	土・皿	口径(6.6) 器高(0.9) 底径(5.2)	細；石英少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
686		S X06上層	土・皿	口径7.0 器高1.2 底径5.7	細；石英少・黒雲母少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・マメツ	2/8	
687		S X06上層	土・坏	口径9.4	中；石英少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
688		S X06上層	土・坏	口径(9.9) 器高2.4 底径(6.6)	細；石英少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・マメツ	細片	
689		S X06上層	土・脚	最大径1.7	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	ナデ		8/8	
690		S X06上層	土・足釜	口径(19.6)	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰橙(内)オリーブ黒	(口縁)横板ナデ後ヨコナデ (鍔部)横ハケ	横ハケ後ナデ	1/8	
691		S X06上層	土・足釜	口径(27.6)	中;石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)淡黄	(口縁)ヨコナデ (鍔部)横ハケ・2条沈線 (体部)縦ハケ	横ハケ	1/8	鍔・体部外面煤付着
692		S X06上層	土・足釜	口径(28.2)	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後ハケ	ヨコナデ後横ハケ	細片	鍔部外面煤付着
693		S X06下層	須・捏鉢	口径(28.4)	中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (体部)一部指オサエ後回転ナデ	回転ナデ	細片	東播系
694	36	S X06上層	須・捏鉢	口径30.6 器高12.1 底径13.0	粗;石英普・火山ガラス少・チャート？少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (体部)指オサエ後回転ナデ (底面)回転糸切り	回転ナデ	4/8	東播系
695		S X08	土・皿	口径(9.6) 器高2.1 底径(5.8)	細；石英少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ？	回転ナデ	1/8	外面煤？付着
696		S X08	土・皿	口径10.3 器高(2.0) 底径6.6	中；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
698		S X09	土・皿	口径11.2	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	2/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
699		S X09	須・捏鉢	口径(31.2)	中；石英多	(外)にぶい橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (体部)一部指オサエ後回転ナデ	回転ナデ	細片	東播系
700		S X10	土・皿	口径8.1 器高1.6 底径5.4	細；石英少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	2/8	
701		S X10	土・皿	口径7.7 器高1.7 底径4.6	細；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り，マメツ	回転ナデ	2/8	
702		S X10	土・皿	口径8.3 器高1.7 底径5.5	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り，マメツ	回転ナデ	7/8	
703		S X10	土・皿	口径7.8 器高1.7 底径5.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	3/8	
704		S X10	土・皿	口径7.8 器高1.8 底径5.8	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	8/8	
705		S X10	土・皿	口径8.0 器高1.6 底径5.5	細；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	8/8	
706		S X10	土・皿	口径8.7 器高1.5 底径6.2	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	7/8	
707		S X10	土・皿	口径8.4 器高1.6 底径6.1	細；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	7/8	
708		S X10	土・皿	口径7.8 器高1.7 底径5.4	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	5/8	
709		S X10	土・皿	口径8.2 器高1.6 底径5.8	細；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	7/8	
713		S X11	土・皿	口径8.6 器高1.6 底径5.7	細；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	5/8	
714		S X11	土・皿	口径8.3 器高1.6 底径5.1	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス普？	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	6/8	
715		S X11	土・皿	口径8.5 器高1.8 底径5.6	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	4/8	
716		S X11	土・皿	口径8.4 器高1.6 底径5.8	細；石英少・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	8/8	
717		S X11	土・皿	口径8.4 器高1.6 底径5.9	細；石英普・火山ガラス普	(外)灰白(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	4/8	
718		S X11	土・皿	口径8.4 器高1.8 底径5.5	細；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	5/8	
719		S X11	土・皿	口径8.2 器高2.0 底径6.2	中；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	7/8	
720		S X11	土・皿	口径8.3 器高1.7 底径6.0	細；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	8/8	
721		S X11	土・皿	口径8.3 器高1.8 底径6.1	細；石英普・火山ガラス普	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	6/8	
722		S X11	土・皿	口径8.0 器高1.8 底径5.5	細；石英普・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)浅黄	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	4/8	
723		S X12	土・皿	口径8.4 器高1.9 底径5.8	細；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	8/8	
724		S X12	土・皿	口径8.8 器高1.9 底径5.4	細；石英多・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後一部ナデ	回転ナデ	7/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
725		S X12	土・皿	口径8.5 器高1.9 底径5.2	中；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕・ナデ	回転ナデ・マメツ	7/8	
726		S X12	土・皿	口径8.4 器高1.8 底径5.6	細；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	6/8	
727	36	S X12	土・皿	口径8.7 器高1.8 底径5.8	細；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	8/8	
728		S X12	土・皿	口径(8.8) 器高1.9 底径(5.8)	細；石英多・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ・マメツ (底面)回転ヘラ切り後一部ナデ	回転ナデ・マメツ	8/8	
729		S X12	土・皿	口径(8.6) 器高1.6 底径(5.8)	中；石英多・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ・マメツ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ・マメツ	5/8	
730	36	S X12	土・皿	口径8.6 器高1.9 底径5.5	細；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ？	8/8	
731		S X12	土・皿	口径8.7 器高1.8 底径5.4	中；石英多・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ，マメツ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ，マメツ	7/8	
732		S X12	土・皿	口径8.6 器高1.8 底径5.5	中；石英多・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ，マメツ	8/8	
736		S X13	土・皿	口径8.0 器高1.5 底径5.6	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	3/8	
737	36	S X13	土・皿	口径8.0 器高1.6 底径5.7	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ・マメツ	6/8	
738		S X13	土・皿	口径8.1 器高1.6 底径6.0	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	7/8	
739		S X13	土・皿	口径8.0 器高1.4 底径5.4	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	5/8	
740	37	S X13	土・皿	口径8.1 器高1.6 底径5.6	細；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	8/8	
741		S X13	土・皿	口径8.3 器高1.5 底径6.3	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	8/8	
742		S X13	土・皿	口径8.2 器高1.5 底径5.5	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	7/8	
743		S X13	土・皿	口径8.2 器高1.6 底径5.5	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ・マメツ	7/8	
744		S X13	土・皿	口径8.0 器高1.5 底径5.8	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ，マメツ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	8/8	
746		S D001上層	土・皿	口径5.2 器高1.0 底径4.8	細；石英少・火山ガラス多	(外)灰黄(内)黄灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ？マメツ	1/8	
747		S D001上層	土・皿	口径5.9 器高1.0 底径5.3	中；石英普・黒雲母少・赤色粒普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	6/8	
748		S D001上層	土・皿	口径5.8 器高(0.8) 底径5.1	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
749		S D001上層	土・皿	口径6.8 器高1.9 底径4.7	中；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	
750		S D001上層	土・皿	口径7.7 器高1.2 底径5.6	細；石英少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ・マメツ (底面)回転ヘラ切り・マメツ	回転ナデ	1/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
751		SD001上層	土・皿	口径8.4 器高(1.4) 底径5.4	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
752		SD001上層	土・皿	口径8.3 器高1.4 底径5.6	細；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？マメツ	回転ナデ	2/8	
753		SD001上層	土・皿	口径8.2 器高1.6 底径6.0	細；石英多・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
754		SD001上層	土・皿	口径(9.1) 器高1.7 底径(5.2)	細；石英多・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ・ナデ	2/8	
755		SD001上層	土・皿	口径8.8 器高1.5 底径6.8	細；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
756		SX01	土・皿	口径8.3 器高1.5 底径5.3	細；石英少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	7/8	
757		SD001上層	土・皿	口径10.5	細；石英少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
758		SX01	土・皿	口径9.6 器高(2.0) 底径5.2	中；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
759		SX01	土・皿	口径9.0 器高2.8 底径5.6	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	
760		SX01	土・皿	口径9.0 器高2.2 底径5.3	中；石英少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ？	回転ナデ	3/8	口縁端部内面煤付着
761		SX01	土・皿	口径11.4 器高2.3 底径6.6	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	1/8	
762		SD001上層	土・坏	口径11.3	中；石英少・角閃石少・赤色粒少・火山ガラス少？	(外)橙(内)橙	回転ナデ・マメツ	回転ナデ・マメツ	1/8	
763		SX01	土・坏	口径(10.0) 器高2.8 底径(6.8)	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	外底面煤付着
764		SX01	土・坏	口径13.0 底径(9.0)	細；石英少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
765		SD001上層	土・坏	口径(15.6)	細；石英少・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	細片	
766		SD001上層	須・皿	口径11.4 器高2.4 底径6.7	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ後ナデ	3/8	十瓶山窯系
767		SX01	須・碗	口径14.4	細；石英少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	十瓶山窯系
768		SD001上層	須・碗	底径(2.4)	細；石英少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(体部)回転ナデ (高台内)ヨコナデ	縦板ナデ	2/8	十瓶山窯系
769	37	SD001下層	陶・碗	口径(12.0) 器高(5.7) 底径4.7	精緻	(胎)灰白(釉)黒褐	(口縁)施釉 (高台)削り出し	施釉	1/8	瀬戸・美濃系天目茶碗
770		SX01	土・足釜	口径(16.2)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)横ケズリ後指オサエ・ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ	1/8	体部外面煤付着
771		SD001上層	土・足釜	口径(20.2)	中；石英多・角閃石？少・火山ガラス少	(外)淡黄(内)灰白	(口縁)ヨコナデ (鍔部)横ハケ・ナデ (体部)指オサエ後縦ハケ (底部)格子タタキ	(口縁)ヨコナデ (体部)横・斜ハケ (底部)ハケ	1/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
772		SD001上層	土・足釜	口径(20.0)	中；石英普・角閃石少・火山ガラス普？	(外)灰黄(内)浅黄	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後ヨコナデ	横ハケ後ヨコナデ	細片	鍔・体部外面煤付着
773		SD001上層	土・足釜	口径20.2	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ，ナデ (体部)指オサエ・ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ	1/8	鍔部外面煤付着
774		SD001上層	土・足釜	口径19.2	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後ヨコナデ・ナデ	横板ナデ後ナデ	1/8	鍔・体部外面煤付着
775		SD001上層	土・足釜	口径20.6	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)灰黄褐	(口縁)ヨコナデ・マメツ (鍔部)ヨコナデ・マメツ (体部)指オサエ・ナデ，マメツ	横板ナデ，マメツ	1/8	
776		SD001上層	土・足釜	口径(19.5)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ・ナデ (体部)指オサエ・ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ？	細片	鍔・体部外面煤付着
777		SD001上層	土・足釜	口径25.1	中；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄(内)淡黄	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ・ナデ (体部)指オサエ・ナデ	(口縁)ハケ後ヨコナデ (体部)横ハケ	1/8	体部外面煤付着
778		SD001上層	土・足釜	口径24.8	粗；石英少・赤色粒少・火山ガラス多	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ・ナデ (体部)指オサエ後ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横ハケ後一部指オサエ	1/8	破損後被熱
779		SD001上層	土・足釜	口径(25.8)	中；石英少・赤色粒少・火山ガラス多	(外)浅黄(内)浅黄	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後ヨコナデ・ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横ハケ後指オサエ	細片	
780		SX01	土・足釜	口径22.6	中；石英多・角閃石少・黒雲母少・火山ガラス普	(外)灰黄(内)にぶい黄橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (底部)縦板ナデ後一部指オサエ	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (体部)横・斜板ナデ	1/8	
781		SX01	土・足釜	口径(25.0)	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)橙(内)にぶい黄橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横・斜ハケ	細片	鍔・体部外面煤付着
782		SX01	土・足釜	口径(23.5)	中；石英多・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)灰黄褐	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)ヨコナデ・ナデ (底部)格子タタキ	(口縁)ハケ後ヨコナデ (体部)横ハケ後縦ハケ (底部)ハケ後ヨコナデ	1/8	破損後被熱
783		SX01	土・足釜	口径25.4	粗；石英多・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)にぶい橙	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ・ナデ (体部)指オサエ・ナデ (底部)格子タタキ後一部ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ，マメツ (底部)横ハケ	2/8	鍔・体部外面煤付着
784	37	SD001下層	土・足釜	口径24.3 器高29.1	中；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄(内)浅黄	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ後斜板ナデ (底部)板ナデ・ナデ (脚部)ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横ハケ後一部横ヘラナデ (底部)横ハケ	3/8	体・底部外面煤付着
785	37	SD01上層	瓦・羽釜	口径(27.4)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)黒(内)黒	回転ナデ，マメツ	回転ナデ，マメツ	細片	畿内系
786		SD01上層	土・鍋	口径28.4	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)ヨコナデ・マメツ (体部)指オサエ後ナデ？マメツ (底部)横板ナデ？マメツ	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ (底部)横板ナデ	2/8	底部外面煤付着
787		SD01上層	土・鍋	口径(30.8)	中；石英普・角閃石少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)黒(内)黒褐	ヨコナデ，横板ナデ	横板ナデ後ヨコナデ	細片	
788		SD01上層	土・鍋	口径34.4	細；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)明褐(内)橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横板ナデ後ヨコナデ	細片	外面煤付着
789		SX01	土・鍋	口径(39.6)	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)黒褐(内)灰黄褐	(口縁)指オサエ・ナデ，ヨコナデ (体部)縦板ナデ？後ナデ	(口縁)横ハケ後ヨコナデ (体部)横板ナデ？マメツ	細片	外面煤付着
790		SD001上層	土・鍋	口径(41.4)	粗；石英普・火山ガラス普	(外)にぶい黄褐(内)灰黄褐	(口縁)ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	(口縁)横ハケ (体部)横板ナデ	細片	外面煤付着
791		SX01	土・鍋	口径(35.4)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)浅黄橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ	横板ナデ？後ヨコナデ	細片	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
792		S D001下層	土・擂鉢	口径(31.2)	中；石英普・角閃石少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)灰黄(内)浅黄	(口縁)ヨコナデ (体部)指オサエ後ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横・斜ハケ	細片	
793		S X01	土・擂鉢	口径(28.6)	中；石英普・火山ガラス多	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄褐	(口縁)ヨコナデ？ハクリ (体部)指オサエ後横板ナデ？ハクリ	(口縁)ハケ後ヨコナデ (体部)横ハケ後卸目４条	細片	口縁部内外面煤付着
794		S X01	土・擂鉢	口径(32.4)	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	横板ナデ後卸目4条	細片	
795		S X01	土・擂鉢	底径11.0	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)灰白	(体部)縦ハケ (底部)ハケ後横板ナデ (底面)マメツ	マメツ，卸目	1/8	
796		S X01	須・捏鉢	口径(27.0)	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ・自然釉 (体部)回転ナデ	回転ナデ	細片	東播系
797		S X01	瓦・擂鉢	口径(29.7)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)灰(内)灰	回転ナデ？マメツ	マメツ	細片	
798		S X01	瓦・擂鉢	口径 (28.6)	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)暗灰茶(内)灰	(口縁)ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	斜板ナデ・ナデ？	細片	外面煤付着
799	37	S X01	瓦・擂鉢	口径(41.6)	細；石英普・火山ガラス普	(外)灰(内)灰	(口縁)回転ナデ (体部)縦ハケ後ヨコナデ？	横ハケ後卸目	細片	亀山焼
800		S D001上層	陶・壺	口径(28.6)	中；石英普	(外)赤灰(内)赤灰	(口縁)回転ナデ，自然釉	(口縁)回転ナデ，自然釉	細片	備前焼
801		S D001上層	陶・甕	口径(39.4)	中；石英普	(外)灰黄褐(内)黄灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	備前焼
802		S D001上層	陶・甕		中；石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ・自然釉	回転ナデ	細片	備前焼
803		S X01	陶・甕		中；石英普・火山ガラス？少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	備前焼
820		S D002下層	瓦・皿	口径7.2 器高2.1 底径4.4	中；石英普・火山ガラス多	(外)灰(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)ナデ？	回転ナデ	2/8	
821		S D002下層	土・皿	口径10.4	中；石英少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)淡黄	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
822		S D002下層	土・皿	口径(9.6)	細；石英少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ・マメツ	回転ナデ・マメツ	1/8	
823		S D002下層	陶・壺	口径(15.8)	中；石英普	(外)灰(内)灰	回転ナデ，自然釉	回転ナデ，自然釉	細片	備前焼
824		S D002下層	土・足釜	口径(27.0)	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)黄橙	(口縁)横板ナデ後ヨコナデ (鍔部)横板ナデ後ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ，マメツ (体部)横板ナデ，マメツ	細片	
825		S D002下層	土・足釜	口径27.2	細；石英多・火山ガラス少	(外)灰黄褐(内)灰白	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (鍔部)横板ナデ後ナデ (体部)指オサエ後縦ハケ (底部)格子タタキ	(口縁)横板ナデ (体部)横ミガキ？後斜ハケ	3/8	鍔・体部外面煤付着
828		S D007	土・坏	口径10.4	細；石英少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)淡黄(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
829		S D007	土・坏	口径9.8 器高2.5 底径6.4	細；石英少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？マメツ	回転ナデ	1/8	
830	37	S D007	土・坏	口径10.2 器高2.6 底径6.5	中；石英普・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ・マメツ	6/8	
833		S D008	土・皿	口径8.8	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
835	37	S D010	磁・碗	口径15.4	精緻	(胎)灰白(釉)オリーブ灰	施釉	施釉	1/8	龍泉窯系青磁
836		S X02	土・皿	口径5.9 器高1.2 底径4.2	細；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	
837		S D018	土・皿	口径6.6 器高1.4 底径5.2	細；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ・マメツ	7/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
838		S X02	土・皿	口径6.6 器高0.9 底径5.4	中；石英少・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
839		S X02	土・皿	口径7.6 器高1.0 底径5.6	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	
840		S X02	土・皿	口径9.7	細；石英少・角閃石？少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
841		S X02	土・皿	底径5.2	細；石英少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕・ナデ	(口縁)回転ナデ (底部)ナデ	2/8	
842		S X02	土・坏	口径11.8	中；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
843		S D018	磁・碗	口径(14.4)	精緻	(胎)灰白(釉)明オリーブ	施釉	施釉	細片	龍泉窯系青磁
844		S X02	土・足釜	口径25.6	中；石英普・赤色粒少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ・ナデ (体部)指オサエ後縦ナデ	(口縁)横ハケ後ヨコナデ (体部)横・斜ハケ後一部ナデ	細片	鍔・体部外面煤付着
847	38	S D025	土・皿	口径8.5 器高2.6 底径5.4	中；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	4/8	
848		S D029	須・蓋？	口径13.0	細；石英少	(外)灰白(内)灰黄	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
849		S D029	須・坏	口径(13.3) 底径(8.8)	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	細片	十瓶山窯系
850		S D029	土・皿	口径9.3 器高2.4 底径4.5	中；石英少・火山ガラス多	(外)褐灰(内)にぶい黄橙	(口縁)回転ナデ？ハクリ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ？ハクリ	2/8	
851		S D039下層	土・皿	口径7.6 器高1.7 底径5.5	細；石英普・角閃石少？・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ・マメツ (底面)回転ヘラ切り・マメツ	回転ナデ・マメツ	7/8	
852		S D039下層	土・皿	口径7.7 器高1.6 底径6.0	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後板圧痕	回転ナデ	7/8	
853		S D039下層	土・皿	口径7.9 器高2.2 底径5.8	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？	回転ナデ	3/8	
854		S D039下層	須・碗	底径4.8	細；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(高台)回転ナデ (底面)ナデ	板ナデ後ミガキ	7/8	十瓶山窯系
855	38	S D039下層	土・把手	最大幅6.5 厚2.5	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰褐(内)にぶい黄褐	指オサエ・ナデ		8/8	外面下半部煤付着
856		S D039下層	土・甕	口径(25.2)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)橙	(口縁)横ナデ？マメツ (体部)平行タタキ？	ナデ？マメツ	細片	
857		S D039下層	土・足釜	口径21.0	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス多	(外)浅黄(内)灰白	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	(口縁)ヨコナデ，マメツ (体部)斜ハケ	細片	体部外面煤付着
858		S D039下層	土・足釜	口径(24.0)	中；石英多・火山ガラス普	(外)にぶい黄橙(内)灰黄褐	(口縁)ヨコナデ，マメツ (鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後横板ナデ？	(口縁)ヨコナデ (体部)横・斜ハケ	細片	体部外面煤付着
859		S D039下層	土・擂鉢		中；石英多・火山ガラス少	(外)黒褐(内)黒褐	(口縁)ヨコナデ？凹線2条 (体部)板ナデ？マメツ	マメツ，卸目3条	細片	
860		S D039下層	土・擂鉢	口径(34.6)	粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰(内)オリーブ黒	(口縁)ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	横板ナデ後ナデ？後卸目2条	1/8	
861		S D039下層	土・鍋	口径(25.4)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス多	(外)にぶい黄橙(内)橙	縦ハケの後指オサエ・ナデ	(口縁)横板ナデ後ヨコナデ (体部)斜ハケ	細片	
865		S D043	土・皿	口径4.7 器高(1.1) 底径4.1	細；石英少・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	
866		S D043	土・皿	口径6.1 器高1.0 底径5.2	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)橙	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	5/8	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
867		S D043	土・皿	口径6.7 器高1.0 底径5.2	細；石英少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ，マメツ （底面)回転ヘラ切り，マメツ	回転ナデ？	2/8	
868		S D042	土・皿	口径8.0	中；石英普・角閃石少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ （底面)静止糸切り	回転ナデ	1/8	
869		S D044	土・皿	口径7.6 器高1.2 底径6.0	細；石英普・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ （底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	
870		S D042	土・皿	口径9.4	細；石英普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
871		S D043	土・坏	口径(12.0)	細；石英少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ？マメツ	回転ナデ？マメツ	細片	
872		S D043	土・坏	口径13.6	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス普	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
873		S D041	土・足釜	口径23.6	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄(内)にぶい黄	(口縁)ヨコナデ （鍔部)ヨコナデ (体部)指オサエ後横板ナデ・ナデ	(口縁)ヨコナデ （体部)横ハケ後ナデ	1/8	体部外面煤付着
874		S D041	土・足釜	口径(20.8)	中；石英多・黒雲母普・火山ガラス少	(外)灰白(内)灰白	(口縁)縦ハケ後ヨコナデ （鍔・体部)指オサエ後ヨコナデ	横板ナデ・ハケ後ヨコナデ？	1/8	鍔・体部外面煤付着
875		S D041	土・足釜	口径23.4	中；石英普・角閃石少・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)にぶい黄橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ （鍔部)ヨコナデ （体部)縦板ナデ・指オサエ後ヨコナデ	横板ナデ後ナデ	1/8	鍔部外面煤付着
876		S D043	土・足釜	口径(23.2)	中；石英多・火山ガラス少	(外)にぶい黄橙(内)浅黄橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ （鍔部)ヨコナデ・ナデ （体部)指オサエ後ヨコナデ後縦ハケ	(口縁)横板ナデ後ヨコナデ （体部)横・斜板ナデ・ナデ	細片	鍔・体部外面煤付着
877		S D041	土・足釜	口径(30.6)	中；石英普・黒雲母少・赤色粒少・火山ガラス多	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)縦ハケの後ヨコナデ （鍔部)ヨコナデ （体部)指オサエ・縦ハケ後一部ヨコナデ	(口縁)横板ナデ後ヨコナデ （体部)横板ナデ後ナデ？	1/8	鍔・体部外面煤付着
878		S D043	土・鍋	口径(44.0)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい橙(内)淡黄橙	(口縁)縦・斜ハケ後一部指オサエ・ヨコナデ （体部)縦ハケ後一部指オサエ	(口縁)横ハケ後横板ナデ後ヨコナデ (体部)斜ハケ後一部横板ナデ	細片	体部外面煤付着
879		S D043	瓦・甕	口径30.2	中；石英普・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)指オサエ後回転ナデ？マメツ	マメツ	1/8	亀山焼
880		S D043	土・擂鉢	口径(29.0)	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	(口縁)ヨコナデ （体部)指オサエ・ナデ	ヨコナデ？後卸目	細片	
885		S D047	土・皿	口径9.4 器高(1.6) 底径6.6	中；石英普・赤色粒少・火山ガラス普	(外)橙(内)橙	(口縁)回転ナデ （底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	
886		S D057	土・皿	口径6.0 器高0.9 底径4.8	細；石英普・赤色粒少・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	(口縁)回転ナデ （底面)回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	
887		S D057	土・皿	口径10.9	細；石英少・赤色粒少・火山ガラス多	(外)淡黄(内)浅黄	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
888		S D059	土・皿	口径9.8	細；石英普・火山ガラス少	(外)橙(内)橙	回転ナデ・マメツ	回転ナデ・マメツ	1/8	
889		S D066	土・皿	口径(15.2)	中；石英普・火山ガラス普	(外)橙(内)浅黄橙	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	細片	
890		S D080	土・坏	口径(11.8)	細；石英普・火山ガラス少	(外)浅黄橙(内)浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	細片	
891		包含層Ⅰ	土・皿	口径17.4 器高(1.5) 底径14.0	細；石英普・火山ガラス少	(外)明赤褐(内)明赤褐	ヨコナデ	ヨコナデ	細片	
892		包含層Ⅰ	土・皿	口径12.2 器高3.0 底径7.8	細；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい橙(内)にぶい黄橙	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	1/8	
893		包含層Ⅰ	須・坏	口径(13.6)	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)青灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	火襷無
894		包含層Ⅰ	須・坏？	底径11.2	中；石英普・火山ガラス少	(外)灰(内)灰白	(底面)回転ヘラ切り？後回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
895		包含層Ⅰ	須・坏？	底径11.0	中；石英普・火山ガラス少	(外)青灰(内)明青灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
896		包含層Ⅰ	須・皿？	底径13.0	中；石英普	(外)灰(内)灰	(底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
897		包含層Ⅰ	土・坏？	口径14.2	細；石英少・火山ガラス多	(外)灰白(内)灰白	回転ナデ・マメツ	マメツ	1/8	
898		包含層Ⅰ	土・坏	口径13.8 器高4.0 底径9.4	中；石英多・赤色粒少・火山ガラス普	(外)暗灰黄(内)にぶい黄橙	(口縁)指オサエ後回転ナデ・ナデ (底面)回転ヘラ切り？	横板ナデ後ヨコナデ	2/8	外面・口縁端部内面煤付着
899	38	包含層Ⅰ	磁・碗		精緻	(胎)灰白(釉)オリーブ灰	施釉，縞蓮弁文	施釉	細片	龍泉窯系青磁
900		包含層Ⅰ	磁・皿		精緻	(胎)灰白(釉)灰白	施釉	施釉	細片	中国産白磁
901		包含層Ⅰ	磁・碗	口径11.4	精緻	(胎)灰白(釉)ライトグリーン	施釉	施釉	1/8	龍泉窯系青磁，2次的被熱
902		包含層Ⅰ	陶・壺		精緻	(釉)灰オリーブ(内)灰	施釉	回転ナデ	細片	瀬戸・美濃系？
903		包含層Ⅰ	土・甕	口径15.0	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)明赤褐(内)橙	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (体部)斜ハケ	(口縁)横ハケ (体部)横板ナデ後ナデ	1/8	
904	38	包含層Ⅰ	瓦・擂鉢	底径(14.6)	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(体部)縦板ナデ？後回転ナデ (底部)指オサエ・ナデ後縦板ナデ？ (底面)マメツ	回転ナデ後3条/単位卸目	1/8	
921		包含層Ⅰ	須・坏蓋	口径11.9 器高(1.5)	中；石英少	(外)オリーブ灰(内)暗青灰	自然釉	(天井)回転ナデ後ナデ (口縁)回転ナデ	2/8	火襷無
922		包含層Ⅰ	須・坏蓋	口径14.5	中；石英普	(外)灰(内)灰	(天井)回転ヘラ切り？後回転ナデ (口縁)回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
923		包含層Ⅰ	須・坏蓋	口径15.5	中；石英普	(外)青灰(内)青灰	(天井)回転ケズリ後回転ナデ (口縁)回転ナデ	回転ナデ	細片	火襷無
924		包含層Ⅰ	須・坏蓋	口径18.3	細；石英多・火山ガラス少	(外)灰(内)灰	(天井)回転ケズリ？後回転ナデ (口縁)回転ナデ	回転ナデ	細片	火襷無
925		包含層Ⅰ	須・坏？	底径12.2	粗；石英普	(外)灰(内)灰白	回転ケズリ後回転ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	火襷無
926		包含層Ⅰ	須・坏？	底径11.2	中；石英多・黒色粒少	(外)暗青灰(内)青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り？後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
927		包含層Ⅰ	須・坏？	底径10.8	細；石英普	(外)青灰(内)明青灰	(口縁)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ	1/8	火襷無
928		包含層Ⅰ	土・碗	底径8.0	細；石英普・火山ガラス少	(外)明赤褐(内)にぶい褐	マメツ・ハクリ	マメツ	1/8	
929		包含層Ⅰ	瓦・碗	口径(14.5)	細；石英普・火山ガラス少	(外)黒灰(内)黒灰	(口縁)回転ナデ後一部横ミガキ (体部)指オサエ後横ミガキ	(口縁)横ナデ後横ミガキ (体部)横ナデ	細片	
930		包含層Ⅰ	土・蛸壺	孔径0.7～0.9	中；石英多・赤色粒少・火山ガラス少	(外)橙	(外)指オサエ・ナデ		8/8	
931		包含層Ⅰ	須・壺	口径13.4	中；石英普	(外)灰オリーブ(内)灰オリーブ	回転ナデ，自然釉	回転ナデ，自然釉	1/8	
932		包含層Ⅰ	須・壺？	底径11.6	細；石英多・黒色粒少	(外)灰白(内)灰白	(体部)回転ケズリ？後回転ナデ	回転ナデ	2/8	火襷無
933		包含層Ⅰ	須・皿？	底径20.8	中；石英普・黒色粒少	(外)灰(内)灰	(体部)回転ナデ (底面)回転ケズリ？後回転ナデ	回転ナデ後一部ナデ	細片	火襷無
934		包含層Ⅰ	須・鉢	口径(24.8)	中；石英普・火山ガラス？少	(外)灰(内)灰	回転ナデ	回転ナデ，自然釉	細片	
935		包含層Ⅰ	土・足釜	口径19.4	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)灰白(内)灰白	(口縁)指オサエ後ヨコナデ (鍔部)指オサエ後ヨコナデ (体部)指オサエ・ナデ	(口縁)ヨコナデ (体部)横・斜板ナデ	1/8	鍔・体部外面煤付着

石器・石製品観察表

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
17	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長1.5　幅1.4　厚0.2　重0.47	凹基式	サヌカイト	完存	
18	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長1.4　幅1.3　厚0.2　重0.34	凹基式	サヌカイト	先端欠損	
19	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長1.9　幅1.3　厚0.3　重0.50	凹基式	サヌカイト	完存	
20	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.2　幅1.9　厚0.3　重1.09	凹基式	サヌカイト	完存	
21	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.1　幅1.4　厚0.3　重0.60	凹基式	サヌカイト	基部欠損	
22	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.1　幅1.3　厚0.3　重0.59	凹基式	サヌカイト	一部欠損	
23	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.1　幅1.3　厚0.3　重0.82	凹基式，未製品？	サヌカイト	完存	
24	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.4　幅1.4　厚0.3　重0.86	凹基式	サヌカイト	完存	
25	40	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.6　幅1.6　厚0.3　重1.08	凹基式	サヌカイト	完存	
26	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長1.6　幅1.1　厚0.2　重0.30	平基式	サヌカイト	完存	
27	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長1.9　幅1.5　厚0.3　重0.71	平基式，未製品？	サヌカイト	完存	
28	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.1　幅1.3　厚0.3　重0.85	平基式	サヌカイト	一部欠損	
29	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長1.9　幅1.6　厚0.3　重0.78	平基式，未製品？	サヌカイト	一部欠損	
30	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長1.6　幅1.2　厚0.2　重0.46	平基式	サヌカイト	先端欠損	
31	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.2　幅1.4　厚0.4　重0.93	平基式	サヌカイト	基部欠損	
32	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.2　幅1.6　厚0.3　重1.09	平基式	サヌカイト	先端欠損	
33	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.6　幅1.5　厚0.4　重0.97	平基式	サヌカイト	完存	
34	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.4　幅1.3　厚0.3　重1.02	平基式，未製品？	サヌカイト	完存	
35		包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.8　幅1.7　厚0.4　重1.45	未製品?	サヌカイト	基部欠損	
36	39	包含層Ⅳ	石鏃	現存長2.9　幅1.6　厚0.4　重1.55	平基式	サヌカイト	ほぼ完存	
37	39	包含層Ⅳ	石鏃未製品	現存長2.0　幅2.1　厚0.4　重1.52	未製品	サヌカイト	ほぼ完存	
38	39	包含層Ⅳ	石鏃未製品	現存長1.6　幅1.6　厚0.5　重1.10	未製品	サヌカイト	一部欠損	
39		包含層Ⅳ	石鏃未製品	現存長2.1　幅2.4　厚0.2　重0.82	未製品	サヌカイト	ほぼ完存	
40	39	包含層Ⅳ	石鏃未製品	現存長2.5　幅1.5　厚0.4　重1.23	平基式	サヌカイト	ほぼ完存	
41	39	包含層Ⅳ	石鏃未製品	現存長4.9　幅2.0　厚0.6　重5.52	未製品	サヌカイト	完存	
42	39	包含層Ⅳ	石鏃未製品	現存長3.6　幅2.9　厚0.6　重6.08	未製品	サヌカイト	先端欠損	
43	39	包含層Ⅳ	石鏃未製品	現存長2.0　幅2.1　厚0.3　重1.23	未製品	サヌカイト	一部欠損	
44	40	包含層Ⅳ	石錐	現存長2.2　幅1.0　厚0.5　重0.88		サヌカイト	先端欠損	
45	40	包含層Ⅳ	石錐	現存長3.9　幅0.8　厚0.3　重0.89	表裏面細かな調整加工	サヌカイト	ほぼ完存	
46	40	包含層Ⅳ	石錐未製品	現存長2.3　幅1.7　厚0.4　重1.09	両側縁に細かな調整剥離	サヌカイト	欠損	
47	40	包含層Ⅳ	石錐未製品	現存長5.0　幅3.0　厚0.5　重8.74	両側縁に抉り	サヌカイト	ほぼ完存	
48	40	包含層Ⅳ	打製石庖丁	現存長10.5　幅5.6　厚0.9　重51.36	表裏面刃縁部に弱い摩滅痕？	サヌカイト	欠損	
49	41	包含層Ⅳ	打製石斧	現存長4.2　幅6.3　厚0.6　重18.21	表裏面刃部に強い摩滅痕・線条痕２方向	サヌカイト	欠損	
50		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長4.3　幅2.9　厚0.8　重7.85	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
51		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長4.1　幅2.9　厚0.9　重10.49	下縁に直線状の片面刃部加工，ｂ面刃部に弱い摩滅痕	サヌカイト	一部欠損	
52		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長5.0　幅3.5　厚0.6　重11.13	下縁に直線状の片面刃部加工，打製石斧転用，ａ面に摩滅痕・線条痕	サヌカイト	欠損	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
53		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長4.5 幅4.4 厚0.8 重15.89	下縁に直線状の片面交互刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
54		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長6.2 幅4.3 厚0.9 重16.20	下縁に直線状の片面刃部加工，b面刃縁部に弱い摩滅痕	サヌカイト	一部欠損	
55		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長5.6 幅3.4 厚0.9 重16.67	上下縁に曲線的な片面刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
56		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長3.2 幅2.6 厚0.7 重4.70	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト	欠損	
57		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長8.0 幅4.7 厚1.8 重50.27	下縁に直線状の片面交互刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
58		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長7.7 幅4.3 厚1.0 重34.84	下縁に直線状の片面交互の刃部加工	サヌカイト	完存	
59		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長6.7 幅5.3 厚1.2 重53.51	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
60		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長6.8 幅5.7 厚1.5 重52.11	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
61		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長4.5 幅5.7 厚1.4 重46.65	下縁に直線状の片面刃部加工，背面に自然面	サヌカイト	ほぼ完存	
62		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長8.9 幅7.3 厚2.0 重105.10	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト	完存	
63		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長6.6 幅4.5 厚1.2 重29.40	下縁に直線状の片面刃部加工，全体に磨耗	サヌカイト	完存	
64		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長6.2 幅3.7 厚1.7 重40.19	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	完存	
65		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長6.1 幅4.3 厚0.7 重16.17	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	完存	
66		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長2.9 幅1.7 厚0.5 重2.30	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	欠損	
67		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長3.1 幅2.8 厚1.1 重7.91	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
68		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長4.7 幅4.5 厚1.1 重13.95	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	完存	
69		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長7.0 幅4.2 厚0.9 重30.16	背部潰れ，下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	欠損	
70		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長10.9 幅6.3 厚0.8 重47.91	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
71		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長12.5 幅5.7 厚1.2 重85.90	下縁に直線状の両面刃部加工，打製石斧転用，表裏面に一部摩滅痕，b面に線条痕	サヌカイト	一部欠損	
72		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長7.4 幅4.1 厚1.2 重34.32	下縁に直線状の両面刃部加工，上縁に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
73		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長7.8 幅5.7 厚0.8 重45.93	下縁に直線状の両面刃部加工，表裏面刃縁部に摩滅痕	サヌカイト	完存	
74		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長6.1 幅3.9 厚0.8 重15.03	下縁に曲線状の両面刃部加工	サヌカイト	完存	
75		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長7.2 幅4.0 厚1.0 重21.13	下縁に曲線状の両面刃部加工	サヌカイト	完存	
76		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長7.8 幅4.0 厚0.9 重24.78	下縁に曲線状の両面刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
77		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長12.0 幅6.0 厚1.7 重67.99	下縁に内湾状の両面刃部加工・潰れ	サヌカイト	完存	
78		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長7.1 幅6.2 厚1.4 重32.95	下縁に不整形な粗い両面刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
79		包含層Ⅳ	スクレイパー	現存長8.9 幅4.7 厚1.2 重28.25	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
80		包含層Ⅳ	摩滅痕のある剥片	現存長4.9 幅7.3 厚2.1 重68.83	表裏面に弱い摩滅痕，周縁に潰れ	サヌカイト		
81		包含層Ⅳ	2次加工のある剥片	現存長5.3 幅2.2 厚0.6 重5.58	下縁に微細剥離痕	サヌカイト	完存	
82		包含層Ⅳ	2次加工のある剥片	現存長5.1 幅5.9 厚1.6 重46.55	上端に潰れ，下縁に素材面からの粗い加工痕	サヌカイト	ほぼ完存	
83		包含層Ⅳ	2次加工のある剥片	現存長7.5 幅7.3 厚1.3 重40.71	下縁に僅かな調整痕	サヌカイト	ほぼ完存	
84		包含層Ⅳ	2次加工のある剥片	現存長8.5 幅6.3 厚0.7 重37.11	下縁にやや粗い加工痕，a面左側縁に微細剥離痕	サヌカイト	ほぼ完存	
85		包含層Ⅳ	2次加工のある剥片	現存長7.7 幅5.4 厚1.4 重58.55	側縁に粗い加工痕	サヌカイト	完存	
86		包含層Ⅳ	2次加工のある剥片	現存長5.6 幅7.3 厚1.7 重36.60	下縁の一部に細かな片面加工	サヌカイト	一部欠損	
87		包含層Ⅳ	使用痕のある剥片	現存長4.0 幅3.8 厚0.6 重8.59	下縁に微細剥離痕	サヌカイト	ほぼ完存	
88		包含層Ⅳ	使用痕のある剥片	現存長6.4 幅3.8 厚0.5 重10.87	下縁に微細剥離痕	サヌカイト	ほぼ完存	
89		包含層Ⅳ	使用痕のある剥片	現存長4.9 幅4.6 厚1.3 重23.85	下縁に微細剥離痕	サヌカイト	ほぼ完存	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
90		包含層Ⅳ	使用痕のある剥片？	現存長7.1 幅4.3 厚0.7 重17.74	下縁に微細剥離痕	サヌカイト	ほぼ完存	
91		包含層Ⅳ	使用痕のある剥片	現存長7.8 幅4.1 厚1.0 重21.74	下縁に微細剥離痕	サヌカイト	一部欠損	
92		包含層Ⅳ	使用痕のある剥片	現存長7.3 幅5.0 厚0.8 重27.40	下縁に微細剥離痕	サヌカイト	完存	
93		包含層Ⅳ	使用痕のある剥片	現存長15.2 幅5.2 厚1.0 重57.06	下縁の一部に微細剥離	サヌカイト	完存	
94		包含層Ⅳ	使用痕のある剥片	現存長9.3 幅5.0 厚1.3 重43.17	下縁に微細剥離痕，摩滅痕	サヌカイト	完存	
95		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.1 幅2.0 厚0.4 重2.50	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
96		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.4 幅2.5 厚1.0 重6.48	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
97		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.7 幅2.7 厚0.7 重3.57	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
98		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長1.9 幅3.0 厚0.4 重2.98	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
99		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.3 幅3.0 厚0.5 重4.22	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
100		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.0 幅3.3 厚0.5 重5.49	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
101		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.2 幅1.5 厚0.6 重1.65	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
102		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.0 幅1.6 厚0.4 重1.65	上下端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
103		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.4 幅1.7 厚0.8 重2.60	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
104		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.7 幅1.3 厚0.5 重1.57	上下端及び側縁に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
105		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.4 幅2.0 厚0.6 重3.27	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
106		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.2 幅1.9 厚0.5 重1.86	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
107		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.2 幅2.2 厚0.7 重3.34	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
108		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.0 幅1.4 厚0.6 重4.46	上下端及び側縁に潰れ	サヌカイト	完存	
109		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.9 幅2.2 厚0.6 重4.04	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
110		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.5 幅1.9 厚0.6 重4.56	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
111		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.0 幅3.4 厚0.9 重9.65	上下端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
112		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.4 幅3.1 厚0.6 重5.21	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
113		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.9 幅2.8 厚0.6 重4.49	上下端に潰れ	サヌカイト	欠損	
114		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.3 幅3.3 厚0.6 重4.32	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
115		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.5 幅4.4 厚0.5 重6.97	上下端及び側縁に潰れ	サヌカイト	完存	
116		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.7 幅3.7 厚0.9 重14.03	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
117		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長2.9 幅3.8 厚0.6 重7.60	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
118		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.2 幅4.2 厚0.7 重7.85	上下端に潰れ，打製石斧刃部転用，b面に強い摩滅痕・線条痕	サヌカイト	完存	
119		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.1 幅3.3 厚1.4 重12.33	上下端及び左側縁に潰れ	サヌカイト	完存	
120		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.0 幅5.0 厚0.8 重14.31	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
121		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.6 幅5.2 厚1.1 重20.17	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
122		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長5.4 幅4.5 厚1.5 重34.35	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
123		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長4.5 幅5.9 厚1.5 重51.11	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
124		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長4.2 幅2.0 厚1.2 重8.51	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
125		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長6.3 幅3.9 厚1.5 重30.49	打製石斧転用，上下端に潰れ，表裏面に摩滅痕，b面に線条痕	サヌカイト	ほぼ完存	
126		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長5.0 幅7.8 厚1.7 重58.39	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
127		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長6.0 幅7.4 厚1.4 重64.36	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
128		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長6.8 幅7.5 厚2.3 重135.64	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
129		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長7.0 幅5.9 厚2.5 重99.85	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
130		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長2.6 幅1.9 厚0.4 重2.21	石鏃未製品の可能性もある	サヌカイト	完存	
131		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長2.7 幅3.1 厚0.9 重6.44	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
132		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長2.2 幅2.5 厚0.9 重5.34	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
133		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長4.5 幅2.4 厚1.0 重12.27	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
134		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長6.1 幅2.5 厚1.1 重13.67	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
135		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長5.8 幅7.4 厚1.0 重41.13	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
136		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長2.8 幅6.1 厚0.9 重15.74	上端及び側縁に潰れ	サヌカイト	完存	
137		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長2.8 幅6.0 厚0.6 重8.76	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
138		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長5.0 幅5.5 厚0.7 重24.84	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
139		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長2.9 幅4.1 厚1.1 重10.16	上端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
140		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長2.4 幅3.7 厚0.5 重5.73	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
141		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長3.0 幅3.9 厚0.4 重4.02	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
142		包含層Ⅳ	楔形石器	現存長3.7 幅8.7 厚2.2 重49.46	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
143		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長4.8 幅10.1 厚1.9 重68.07	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
144		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長8.5 幅7.6 厚1.4 重58.13	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
145		包含層Ⅳ	楔形石器削片	現存長3.6 幅3.7 厚0.9 重6.87	上端に潰れ，全体に磨耗	サヌカイト	完存	
146		包含層Ⅳ	剥片	現存長6.8 幅5.2 厚0.7 重35.64	打製石庖丁未製品か？	結晶片岩	完存	
147		包含層Ⅳ	磨製石斧	現存長5.2 幅4.6 厚3.1 重84.66	基部破片	砂岩？	欠損	
148		包含層Ⅳ	石核	現存長12.6 幅6.7 厚2.5 重246.62	a面に複数の剥離面	サヌカイト	完存	
149		包含層Ⅳ	剥片	現存長1.9 幅2.8 厚0.4 重2.22	打製石斧刃部再調整剥片，表裏面に摩滅・線条痕	サヌカイト	完存	
150		包含層Ⅳ	剥片	現存長1.5 幅1.5 厚0.4 重0.59	打製石斧刃部再調整剥片，表裏面に強い摩滅痕，a面に線条痕	サヌカイト	完存	
151	43	包含層Ⅳ	叩石	現存長8.8 幅8.6 厚7.9 重743.94	全面にあばた状敲打痕	アプライト	完存	
152		SK37	楔形石器	現存長1.9 幅1.6 厚0.4 重1.31	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
153		SK38	スクレイパー	現存長8.3 幅6.3 厚1.7 重75.82	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト	完存	
159		SX16	石核素材	現存長9.1 幅4.5 厚1.8 重76.99		サヌカイト	一部欠損	
169	39	SH02	石鏃未製品	現存長3.4 幅2.1 厚0.5 重2.68	基部未調整	サヌカイト		
195	40	SX19下層	石鏃	現存長1.7 幅1.5 厚0.2 重0.38	凹基式	サヌカイト	一部欠損	
196	39	SX19中層	石鏃未製品	現存長2.9 幅2.1 厚0.6 重2.78	凸基式？	サヌカイト	一部欠損	
197		SX19中層	打製石庖丁	現存長4.2 幅5.6 厚1.1 重25.46	側縁に抉り？，打製石斧転用，b面に摩滅痕・線条痕	サヌカイト	半截	
198		SX19下層	打製石庖丁	現存長5.7 幅4.1 厚0.9 重18.91	表裏面刃縁部に弱い摩滅痕	サヌカイト	半截	
199		SX19下層	打製石庖丁	現存長7.4 幅4.4 厚0.6 重20.86	表裏面に摩滅痕	サヌカイト	欠損	
200		SX19最下層	打製石庖丁	現存長8.6 幅4.5 厚1.1 重51.20	表裏面に摩滅痕，自然面	サヌカイト	一部欠損	
201		SX19下層	スクレイパー	現存長3.8 幅2.5 厚0.5 重4.92	下縁に曲線状の両面刃部加工，a面に弱い摩滅痕	サヌカイト	欠損	
202		SX19中層	スクレイパー	現存長5.7 幅4.6 厚0.9 重20.23	下縁に直線状の片面交互刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
203		ＳＸ19最上層	スクレイパー	現存長9.6　幅6.3　厚1.1　重63.18	下縁に直線状の片面交互刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
204	43	ＳＸ19最上層	太型蛤刃石斧	現存長13.4　幅6.8　厚3.9　重610.20	刃部再加工・刃こぼれ痕	玄武岩	ほぼ完存	
205		ＳＸ19下層	楔形石器	現存長2.4　幅2.0　厚0.8　重3.82	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
206		ＳＸ19下層	楔形石器	現存長5.1　幅2.7　厚1.1　重17.19	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
207		ＳＸ19下層	楔形石器	現存長4.6　幅4.6　厚1.1　重23.40	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
208		ＳＸ19下層	楔形石器	現存長5.0　幅7.8　厚2.2　重86.28	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
209		ＳＸ19最上層	楔形石器削片	現存長2.6　幅1.7　厚0.5　重3.07	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
210		ＳＸ19下層	２次加工のある剥片	現存長6.4　幅3.6　厚0.9　重16.47	上端に粗い加工痕，側縁に微細剥離痕	サヌカイト	完存	
211		ＳＸ19最上層	２次加工のある剥片	現存長5.8　幅4.5　厚1.4　重26.16	上端に粗い加工痕	サヌカイト	ほぼ完存	
212		ＳＸ19下層	２次加工のある剥片	現存長7.3　幅4.4　厚1.0　重25.36	上端に粗い加工痕	サヌカイト	欠損	
213		ＳＸ19最上層	２次加工のある加工	現存長11.2　幅8.3　厚1.1　重114.75	下縁に不規則な加工痕	サヌカイト	一部欠損	
214		ＳＸ19下層	石核	現存長7.3　幅6.9　厚2.2　重127.09		サヌカイト	ほぼ完存	
215		ＳＸ19最上層	石核	現存長10.8　幅6.8　厚2.6　重167.01	ａ面に複数面の剥離痕	サヌカイト	一部欠損	
216		ＳＸ19下層	剥片	現存長4.8　幅4.0　厚0.7　重11.90	上端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
217	43	ＳＸ19最上層	叩石	現存長14.7　幅7.6　厚6.7　重109.131	２面に線状及びあばた上敲打痕	砂岩	ほぼ完存	
223	40	ＳＸ20下層	打製石庖丁	現存長8.9　幅4.6　厚1.1　重56.52	表裏面に摩滅痕	サヌカイト	完存	
224		ＳＸ20下層	石槍	現存長5.7　幅2.8　厚1.1　重25.76	周縁に潰れ，基部片	サヌカイト	欠損	
225		ＳＸ20下層	スクレイパー	現存長5.7　幅3.8　厚0.9　重26.30	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	欠損	
226		ＳＸ20下層	スクレイパー	現存長10.8　幅5.6　厚0.8　重48.16	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
227		ＳＸ20下層	スクレイパー	現存長11.0　幅7.0　厚1.9　重126.01	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
228		ＳＸ20下層	楔形石器	現存長5.1　幅6.3　厚1.4　重46.99	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
229		ＳＸ20下層	楔形石器	現存長4.0　幅6.3　厚1.4　重33.90	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
230		ＳＸ20下層	楔形石器	現存長3.4　幅4.5　厚0.7　重10.97	上下端に潰れ	サヌカイト	欠損	
231		ＳＸ20下層	剥片	現存長5.6　幅6.9　厚1.0　重39.46	下縁に粗い調整加工	サヌカイト	一部欠損	
299		ＳＸ20上層	スクレイパー	現存長9.0　幅3.8　厚1.4　重39.36	下縁に内湾する両面刃部加工，主剥離面に弱い	サヌカイト	一部欠損	
300		ＳＸ20上層	スクレイパー	現存長6.3　幅5.8　厚1.4　重38.91	下縁に直線状の片面刃部加工，表裏面の一部に弱い摩滅痕	サヌカイト	ほぼ完存	
301	41	ＳＸ20上層	打製石斧	現存長10.6　幅4.8　厚1.6　重94.20	刃部表裏面に顕著な摩滅痕・線状痕，側縁に潰れ	サヌカイト	欠損	
302		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長4.3　幅3.3　厚1.4　重24.41	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
303		ＳＸ20上層	楔形石器?	現存長4.5　幅2.7　厚2.2　重33.66	上下端に潰れ	サヌカイト	欠損	
304		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長4.9　幅5.2　厚1.1　重29.00	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
305		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長8.9　幅5.1　厚1.9　重105.61	上下端に潰れ，表裏面の摩滅顕著	サヌカイト	一部欠損	
306		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長3.5　幅5.4　厚0.8　重16.36	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
307		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長3.9　幅5.4　厚1.6　重37.74	上下端に潰れ，打製石斧転用，表裏面に摩滅痕，ｂ面に線状痕	サヌカイト	ほぼ完存	
308		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長6.7　幅6.1　厚1.8　重86.40	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
309		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長4.8　幅8.2　厚2.1　重93.97	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
310		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長5.8　幅9.7　厚1.5　重107.69	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
311		ＳＸ20上層	楔形石器	現存長7.0　幅5.6　厚2.4　重78.20	上下端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
312		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長2.8　幅3.2　厚0.6　重4.89	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
313		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長2.0　幅2.4　厚0.6　重2.25	上端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
314		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長3.5　幅4.0　厚0.7　重8.17	上端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
315		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長5.1　幅4.3　厚0.8　重27.63	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
316		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長6.4　幅5.0　厚2.0　重95.32	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
317		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長6.1　幅4.0　厚1.7　重34.22	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
318		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長8.1　幅4.7　厚1.2　重35.23	上端に潰れ，打製石斧転用，表裏面に弱い摩滅痕	サヌカイト	完存	
319		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長4.4　幅6.9　厚1.9　重60.89	上端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
320		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長７.0　幅7.6　厚1.5　重56.22	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
321		ＳＸ20上層	楔形石器削片	現存長6.5　幅7.3　厚1.9　重86.41	下端に潰れ	サヌカイト	完存	
322		ＳＸ20上層	使用痕のある剥片	現存長6.0　幅3.0　厚1.6　重12.57	下縁に微細剥離痕	サヌカイト	一部欠損	
323		ＳＸ20上層	剥片	現存長4.5　幅3.5　厚0.8　重14.76	下縁に調整加工	サヌカイト	欠損	
324		ＳＸ20上層	剥片	現存長6.0　幅4.7　厚1.5　重48.72	上縁に調整加工	サヌカイト	一部欠損	
325		ＳＸ20上層	石核	現存長10.9　幅9.8　厚3.8　重506.03	周縁に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
326	43	ＳＸ20上層	石皿	現存長11.1　幅10.8　厚4.6　重587.71	上面に擦痕・あばた状敲打痕	砂岩	欠損	
327	43	ＳＸ20上層	磨石	現存長7.8　幅4.1　厚3.7　重167.06	表面に擦痕	アプライト	完存	
331	40	ＳＤ127	石鏃	現存長2.1　幅1.1　厚0.3　重0.32	凹基式	サヌカイト	基部欠損	
333		ＳＤ128	楔形石器	現存長3.7　幅2.9　厚0.6　重7.77	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
339		ＳＤ129	楔形石器削片	現存長3.7　幅4.6　厚1.3　重27.86	上端に潰れ	サヌカイト	完存	
426		ＳＤ135下層	石鏃	現存長2.4　幅1.7　厚0.3　重0.91		サヌカイト	基部欠損	
427	40	ＳＤ135下層	石錐？	現存長2.3　幅1.8　厚0.3　重1.22	石鏃未製品の可能性もあり	サヌカイト	先端欠損	
428		ＳＤ135下層	スクレイパー	現存長6.6　幅4.7　厚1.4　重33.04	下縁に曲線状の両面刃部加工	サヌカイト	完存	
429	41	ＳＤ135下層	打製石斧	現存長5.7　幅6.0　厚1.6　重64.24	刃部表裏に摩滅痕・線状痕，側縁に潰れ	サヌカイト	上半欠損	
430		ＳＤ135下層	使用痕のある剥片？	現存長5.0　幅4.5　厚0.5　重13.29	下縁に弱い微細剥離痕	サヌカイト	一部欠損	
431		ＳＤ135下層	楔形石器	現存長4.1　幅5.7　厚1.7　重42.64	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
432		ＳＤ135下層	楔形石器	現存長3.6　幅8.3　厚1.3　重53.19	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
433	43	ＳＤ135下層	叩石	現存長13.1　幅11.1　厚9.0　重1604.29	全面に線状敲打痕	砂岩	欠損	
434	43	ＳＤ135下層	叩石	現存長9.2　幅12.1　厚2.6　重416.05	ａ～ｃ面にあばた状敲打痕	砂岩	一部欠損	
435	43	ＳＤ135下層	叩石	現存長10.6　幅7.0　厚4.2　重411.91	ａ・ｂ面に線状敲打痕	砂岩	ほぼ完存	
436	42	ＳＤ135下層	砥石	現存長12.0　幅4.1　厚4.2　重376.36	方柱状４面使用，主研面湾曲	砂岩	欠損	
437	42	ＳＤ135下層	砥石	現存長5.9　幅4.0　厚3.5　重153.45	方柱状２面使用	安山岩	欠損	２次的被
438		ＳＤ135下層	砥石	現存長3.5　幅3.3　厚1.2　重14.47	剥離面一部使用	流紋岩	欠損	
508		ＳＤ135上層	スクレイパー	現存長4.7　幅5.7　厚1.3　重38.03	下縁に曲線的な片面交互の刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
509		ＳＤ135上層	スクレイパー	現存長4.0　幅3.9　厚0.7　重10.91	下縁に曲線状？の片面刃部加工	サヌカイト	欠損	
510		ＳＤ135上層	楔形石器	現存長3.1　幅2.1　厚0.8　重6.31	上下端及び側縁に潰れ	サヌカイト	完存	
511	41	ＳＤ135上層	火打石?	現存長5.3　幅4.5　厚4.4　重127.61	周縁に潰れ，ｂ面中央に弱い擦痕	サヌカイト	完存	
512	42	ＳＤ135上層	砥石	現存長24.3　幅11.9　厚8.1　重2628.48	２面使用，主研面湾曲	砂岩	一部欠損	
513		ＳＤ135上層	叩石	現存長10.0　幅7.9　厚7.5　重704.47	残存面にあばた状敲打痕，剥離顕著	砂岩	欠損	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
515		ＳＤ135最上層	楔形石器	現存長4.1　幅3.2　厚1.2　重22.32	上下端に潰れ，打製石斧刃部転用，表裏面に摩滅痕・線状痕	サヌカイト	完存	
525	40	ＳＤ136下層	石鏃	現存長1.3　幅1.4　厚0.3　重0.50	凹基式	サヌカイト	先端・基部欠損	
526	40	ＳＤ136上層	石鏃未製品	現存長2.5　幅1.3　厚0.3　重0.88	凹基式，未製品	サヌカイト	ほぼ完存	
527	40	ＳＤ136下層	石錐	現存長3.9　幅1.7　厚0.6　重3.60	軸部断面菱形	サヌカイト	ほぼ完存	
528		ＳＤ136下層	スクレイパー	現存長5.0　幅5.3　厚1.3　重31.47	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト	半截	
529		ＳＤ136下層	スクレイパー	現存長3.1　幅4.6　厚0.6　重12.81	下縁に直線状の両面刃部加工，背部顕著な潰れ	サヌカイト	半截	打製石庖丁未製品？
530		ＳＤ136下層	楔形石器	現存長2.9　幅1.7　厚0.5　重3.38	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
531		ＳＤ136下層	楔形石器	現存長2.2　幅2.7　厚0.8　重6.68	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
532		ＳＤ136上層	楔形石器	現存長5.3　幅4.7　厚1.4　重40.97	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
533		ＳＤ136下層	楔形石器削片	現存長1.5　幅4.0　厚0.8　重5.00	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
534		ＳＤ136下層	楔形石器削片	現存長4.4　幅1.4　厚1.2　重6.94	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
535		ＳＤ136最上層	楔形石器削片	現存長5.1　幅2.9　厚1.3　重13.43	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
536		ＳＤ136下層	石核残核	現存長7.7　幅6.4　厚2.1　重86.09		サヌカイト	完存	
537		ＳＤ136下層	砥石	現存長14.9　幅7.8　厚5.6　重996.43	方柱状一面のみ使用	砂岩	欠損	
558	40	包含層Ⅱ	石錐	現存長6.5　幅1.0　厚0.6　重4.18	表裏面細かな調整加工	サヌカイト	完存	
559	40	包含層Ⅱ	打製石庖丁	現存長2.9　幅4.4　厚0.9　重12.39	表裏面刃縁部に弱い摩滅痕	サヌカイト	半截	
560	40	包含層Ⅱ	打製石庖丁	現存長11.2　幅5.9　厚1.5　重91.27	背部に潰れ，刃縁部の一部に弱い摩滅痕，刃部は階段状剥離目立つ	サヌカイト	欠損	
561	41	包含層Ⅱ	打製石斧	現存長7.2 幅7.0　厚1.2　重81.73	下縁に弱い摩滅痕，ｂ面に線状痕	サヌカイト	欠損	
562		包含層Ⅱ	スクレイパー	現存長4.4　幅2.8　厚0.8　重9.63	上縁潰れ，下縁微細剥離痕	サヌカイト	欠損	
563		包含層Ⅱ	スクレイパー	現存長5.8　幅2.9　厚0.7　重12.85	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	ほぼ完存	
564		包含層Ⅱ	スクレイパー	現存長6.2　幅2.7　厚0.8　重14.65	下縁に直線状の両面刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
565		包含層Ⅱ	スクレイパー	現存長4.0　幅4.9　厚0.7　重21.22	下縁に粗い刃部加工	サヌカイト	欠損	
566		包含層Ⅱ	スクレイパー	現存長5.5　幅7.4　厚0.7　重38.70	下縁に曲線状の両面刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
567		包含層Ⅱ	スクレイパー	現存長5.6　幅5.0　厚0.7　重25.03	下縁に直線的刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
568		包含層Ⅱ	２次加工のある剥片	現存長5.2　幅2.3　厚1.1　重18.80	上端粗い加工痕	サヌカイト	一部欠損	
569		包含層Ⅱ	２次加工のある剥片	現存長4.7　幅5.2　厚1.9　重49.69	上端及び右側縁に粗い加工痕	サヌカイト	ほぼ完存	
570		包含層Ⅱ	２次加工のある剥片	現存長7.2　幅7.5　厚1.5　重63.15		サヌカイト	ほぼ完存	
571		包含層Ⅱ	使用痕のある剥片	現存長5.3　幅4.4　厚0.8　重19.61	刃部に摩滅痕	サヌカイト	欠損	
572		包含層Ⅱ	楔形石器	現存長6.9　幅1.8　厚1.4　重15.69	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
573		包含層Ⅱ	楔形石器	現存長4.4　幅7.0　厚1.5　重45.33	上下端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
574		包含層Ⅱ	楔形石器	現存長3.8　幅3.3　厚1.3　重17.83	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
575		包含層Ⅱ	楔形石器	現存長3.8　幅6.2　厚1.4　重25.54	上下端に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
576		包含層Ⅱ	楔形石器削片	現存長4.1　幅2.7　厚0.5　重7.46	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
577		包含層Ⅱ	楔形石器削片	現存長4.7　幅5.8　厚0.7　重17.94	上縁に潰れ	サヌカイト	完存	
578		包含層Ⅱ	楔形石器削片	現存長3.9　幅4.6　厚0.7　重13.95	上縁に潰れ	サヌカイト	一部欠損	
579		包含層Ⅱ	楔形石器削片	現存長3.8　幅4.2　厚0.7　重13.47	上縁に潰れ	サヌカイト	欠損	
580		包含層Ⅱ	石核	現存長9.6　幅3.8　厚1.5　重50.03	両側縁に潰れ	サヌカイト	欠損	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
598	42	ＳＢ14	砥石	現存長7.6　幅3.5　厚1.5　重61.55	板状，表裏側面の４面使用	流紋岩	ほぼ完存	
622	42	ＳＰ0129	砥石	現存長2.5　幅3.8　厚0.9　重12.88	板状，表裏側面の４面使用	流紋岩	欠損	
623	41	ＳＰ0775	火打石	現存長4.3　幅5.1　厚1.1　重29.66	周縁に不規則な潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
624		ＳＰ0169	楔形石器削片	現存長2.6　幅5.6　厚1.2　重15.16	上端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
661	42	ＳＸ03上層	砥石	現存長6.2　幅6.8　厚2.9　重118.12	自然礫，表裏側面の４面使用	アプライト？	欠損	２次的被熱
697	42	ＳＸ08	砥石	現存長5.5　最大幅3.3　最大厚1.5	板状，表裏側面の４面使用，ａ面に段状研磨痕	安山岩	欠損	下端部煤付着
806	37	ＳＸ01	石鍋	厚1.3	外面縦方向ケズリ？	滑石	細片	外面煤付着
807		ＳＤ001上層	石臼	上面径(31.0)　残存高4.2	マメツ・ハクリ	砂岩	細片	
808	40	ＳＤ001上層	打製石庖丁	現存長5.8　幅5.7　厚0.9　重39.24	下縁に粗雑な両面刃部加工，表裏面に強い摩滅痕	サヌカイト	半截	
809		ＳＤ001上層	石核	現存長3.7　幅3.6　厚3.1　重35.76		流紋岩		
810	41	ＳＤ001上層	火打石	現存長2.3　幅3.1　厚2.5　重18.67	周縁に不規則な潰れ	ハリ質安山岩		
811	41	ＳＸ01	火打石	現存長2.8　幅1.6　厚0.9　重3.31	周縁に不規則な潰れ	チャート		
812	41	ＳＤ001上層	火打石	現存長6.4　幅3.6　厚2.1　重49.04	側縁に不規則な潰れ	サヌカイト		
813		ＳＤ001上層	砥石	現存長5.9　幅2.3　厚2.0　重25.19	上面のみ使用	安山岩	欠損	
814	42	ＳＤ001上層	砥石	現存長3.7　幅(5.4)　厚1.5　重33.56	表裏側面の３面使用，上面に溝状の研磨痕	流紋岩	欠損	
834	41	ＳＤ008	火打石	現存長3.8　幅4.1　厚2.3　重31.54	周縁に不規則な潰れ	サヌカイト	完存	
862		ＳＤ039下層	砥石	現存長9.8　幅12.9　厚5.6　重1066.18	表裏側面の４面使用	砂岩	上半欠損	２次的被熱
863	41	ＳＤ039下層	火打石	現存長10.2　幅4.8　厚2.7　重144.78	周縁に不規則な潰れ	サヌカイト	完存	
882		ＳＤ043	楔形石器	現存長5.4　幅11.5　厚2.1　重121.62	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
883	42	ＳＤ042	砥石	現存長6.6　幅3.2　厚1.2　重25.50	表面平タガネ状工具痕，側面平ノコ状工具による整形痕	流紋岩	欠損	
905		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長4.0　幅4.5　厚1.1　重19.21	下縁に曲線状の片面刃部加工	サヌカイト	完存	
906		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長5.6　幅5.2　厚0.7　重28.66	下縁に直線的な片面刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
907		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長7.1　幅3.7　厚0.8　重20.78	下縁に直線的な両面刃部加工，背部に一部摩滅痕，打製石斧転用か？	サヌカイト	完存	
908		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長6.7　幅3.6　厚0.9　重26.27	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト	一部欠損	
909		包含層Ⅰ	楔形石器	現存長4.0　幅4.5　厚1.4　重21.51	上下端に潰れ	サヌカイト	完存	
910		包含層Ⅰ	楔形石器削片	現存長4.4　幅4.1　厚1.1　重11.76	上縁に顕著な潰れ	サヌカイト	完存	
911		包含層Ⅰ	楔形石器	現存長6.2　幅5.3　厚2.5　重106.58	周縁に顕著な潰れ	サヌカイト	完存	
912		包含層Ⅰ	使用痕のある剥片	現存長5.6　幅3.6　厚0.6　重10.29	下縁に弱い微細剥離痕	サヌカイト	完存	
913		包含層Ⅰ	石核	現存長6.7　幅6.6　厚2.3　重84.60		サヌカイト	一部欠損	
914	41	包含層Ⅰ	火打石	現存長9.4　幅4.3　厚1.5　重58.64	周縁に不規則な潰れ	サヌカイト	完存	
915		包含層Ⅰ	石臼	上面径(17.4)　重89.08	上面に反時計回り9分割の条溝	花崗斑岩	欠損	２次的被熱
916	42	包含層Ⅰ	砥石	現存長5.9　幅4.3　厚3.0　重100.41	両側面の２面使用	流紋岩	欠損	２次的被熱
917	42	包含層Ⅰ	砥石	現存長3.3　幅3.1　厚1.3　重21.97	表裏側面の４面使用，表面に溝状の研磨痕	流紋岩	欠損	
918	42	包含層Ⅰ	砥石	現存長4.5　幅2.7　厚1.3　重20.52	表裏側面の４面使用	流紋岩	欠損	２次的被熱
919	42	包含層Ⅰ	砥石	現存長4.9　幅2.0　厚0.7　重7.10	上面に使用痕，側面は平ノコ状工具による整形痕	流紋岩	欠損	
936	40	包含層Ⅰ	石鏃	現存長1.4　幅1.1　厚0.3　重0.42	凹基式	サヌカイト	完存	
937	40	包含層Ⅰ	石鏃	現存長2.1　幅1.3　厚0.3　重0.59	凹基式	サヌカイト	基部欠損	

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態	石材	残存	備考
938	40	包含層Ⅰ	石鏃	現存長2.5　幅1.9　厚0.5　重1.53	凹基式，未製品？	サヌカイト	完存	
939	39	包含層Ⅰ	石鏃	現存長2.6　幅1.9　厚0.4　重1.48	平基式	サヌカイト	完存	
940		包含層Ⅰ	石鏃未製品？	現存長3.6　幅2.6　厚0.6　重4.98		サヌカイト	完存	
941	40	包含層Ⅰ	打製石庖丁	現存長4.8　幅4.6　厚1.4　重30.27	表裏面に摩滅痕	サヌカイト	半截	
942	40	包含層Ⅰ	打製石庖丁	現存長10.6　幅5.4　厚1.1　重57.07	表裏面刃縁部に摩滅痕	サヌカイト	ほぼ完存	
943		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長3.4　幅3.3　厚0.7　重9.76	直線的な両面刃部加工	サヌカイト		
944		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長5.9　幅4.5　厚0.8　重22.26	下縁に曲線状の片面刃部加工	サヌカイト		
945		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長5.7　幅3.4　厚1.2　重23.93	下縁に曲線状の両面刃部加工	サヌカイト		
946		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長4.6　幅3.9　厚0.8　重15.68	下縁に直線状の片面刃部加工	サヌカイト		
947		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長6.4　幅4.5　厚1.0　重30.88	下縁に曲線状の片面刃部加工及び微細剥離痕	サヌカイト		
948		包含層Ⅰ	スクレイパー	現存長14.7　幅8.8　厚1.5　重177.79	下縁に曲線状の片面刃部加工	サヌカイト		
949		包含層Ⅰ	楔形石器	現存長2.0　幅3.4　厚0.7　重6.30	上下端に潰れ，打製石斧転用，表裏面に摩滅痕，b面に線状痕	サヌカイト	ほぼ完存	
950		包含層Ⅰ	楔形石器	現存長3.5　幅1.5　厚1.7　重10.85	上下端に潰れ	サヌカイト	ほぼ完存	
951	41	包含層Ⅰ	火打石	現存長5.9　幅3.3　厚1.3　重30.80	周縁に潰れ，表裏面摩滅痕顕著	サヌカイト	完存	
952		包含層Ⅰ	石核素材	現存長10.0　幅5.4　厚5.2　重312.03	周縁に潰れ	サヌカイト	完存	

木製品観察表

挿図	図版	遺構名	器種	法量	樹種	木取り	形態等	残存	備考
439	44	ＳＤ135下層	円形曲物蓋板？	現存長12.0　最大幅6.1　最大厚0.5	ヒノキ	板目	表裏面黒漆?塗布，中央円孔穿孔，側面に木釘	半截	
440	44	ＳＤ135下層	円形曲物蓋板	現存長11.6　最大幅4.4　最大厚0.5	ヒノキ属	柾目	内面周縁に段，樺皮綴	ほぼ半截	作業台転用？
441	44	ＳＤ135下層	曲物底板？	現存長9.5　最大幅3.4　最大厚0.6	サワラ	板目	短冊形	欠損?	作業台転用？
442	44	ＳＤ135下層	円形曲物蓋板？	現存長10.3　最大幅3.4　最大厚0.3	ヒノキ	柾目	摩耗	半截	
443	44	ＳＤ135下層	楕円形曲物底板	現存長30.8　最大幅4.3　最大厚0.8	ヒノキ	板目	補修孔穿孔，内面縁辺に溝状彫込，樺皮綴孔	欠損	作業台転用？
444	44	ＳＤ135下層	円形曲物底板	現存長40.8　最大幅6.5　最大厚1.0	スギ	板目	補修孔穿孔，樺皮綴孔	欠損	作業台転用
445	45	ＳＤ135下層	曲物底板？	現存長9.4　最大幅1.9　最大厚0.5	スギ	板目	補修孔?穿孔	欠損	
446	45	ＳＤ135下層	曲物底板？	現存長13.3　最大幅2.3　最大厚0.5	ヒノキ	柾目	補修孔?穿孔	欠損	
447	45	ＳＤ135下層	曲物底板？	現存長15.7　最大幅2.3　最大厚0.5	ヒノキ	板目	補修孔?穿孔	欠損	
448	45	ＳＤ135下層	曲物蓋板？	現存長18.8　最大幅4.0　最大厚0.8	ヒノキ	板目	黒漆?塗布，補修孔?穿孔	欠損	
449	45	ＳＤ135下層	用途不明	現存長18.0　最大幅1.9　最大厚1.3	ヒノキ	柾目	側面に浅い刳り込み	欠損	
450	45	ＳＤ135下層	部材	現存長10.3　最大幅4.9　最大厚3.3	アカガシ	柾目	下端に臍孔	欠損	一部炭化
451	46	ＳＤ135下層	板材	現存長40.7　最大幅4.0　最大厚0.9	スギ	板目	薄板状	欠損	
452	46	ＳＤ135下層	板材	現存長47.6　最大幅6.9　最大厚0.6	サワラ	板目	薄板状	欠損	
453	46	ＳＤ135下層	板材	現存長41.2　最大幅11.0　最大厚2.5	サクラ属	板目	摩耗顕著	欠損	
454	46	ＳＤ135下層	部材	現存長46.7　最大幅7.7　最大厚2.2	カヤ	板目	摩耗顕著	欠損	
455	46	ＳＤ135下層	用途不明	現存長12.3　最大幅1.9　最大厚1.2	ニガキ	板目	先端尖る	欠損	
456	47	ＳＤ135下層	用途不明	現存長40.6　最大幅2.1　最大厚1.1	サワラ	板目	先端尖る，円孔穿孔，上端部浅い刳り込み	ほぼ完存	
457	46	ＳＤ135下層	杭	現存長10.7　最大幅3.3　最大厚4.5	クリ	芯持	加工度乏しい	欠損	
458	46	ＳＤ135下層	杭	現存長16.9　最大幅3.3　最大厚3.3	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	芯持	加工度乏しい	欠損	
459	46	ＳＤ135下層	杭	現存長15.2　最大幅2.6　最大厚2.6	マツ属複維管亜属	芯持	加工度乏しい	欠損	
460	47	ＳＤ135下層	杭	現存長10.5　最大幅4.5　最大厚4.5	ヤナギ属	芯持	加工度乏しい	欠損	
461	47	ＳＤ135下層	杭	現存長19.8　最大幅4.0　最大厚3.1		芯持	加工度乏しい	欠損	
462	47	ＳＤ135下層	杭	現存長39.1　最大幅3.8　最大厚3.8	コナラ属コナラ亜属	芯持	加工度乏しい	欠損	
463	47	ＳＤ135下層	杭	現存長29.9　最大幅9.2　最大厚6.5		芯持	加工度乏しい	欠損	

金属器観察表

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態等	残存	備考
218	49	ＳＸ19最上層	刀子	現存長3.3　幅1.0　厚0.4	峰部破片か	欠損	
219		ＳＸ19最上層	不明鉄器	現存長5.2　幅1.3　厚0.5	上端環状	欠損	
220		ＳＸ19中層	耳環	外径2.5　内径1.6　断面径0.5	銅芯銀張り	ほぼ完存	
328	49	ＳＸ20上層	鉄滓	最大長5.3　最大幅3.5　最大厚1.7　重31.81	椀形鍛冶滓	欠損	分析試料KTK-1
538		ＳＤ136最上層	不明鉄器	現存長3.6　幅2.3　厚0.1	三角形状	欠損	刃部不明瞭
596		ＳＢ11	鉄釘	現存長5.0　幅1.1　厚0.6	角釘，頭部折り曲げ	先端欠損	
625	49	ＳＰ0783	小鉄塊	最大長2.8　最大幅2.4　最大厚2.1　重15.10	小球状，表面亀裂	ほぼ完存	分析試料KTK-4
626	49	ＳＰ0058	鉄釘	現存長7.4　幅1.3　厚0.5	角釘，頭部折り曲げ	先端欠損	
627	49	ＳＰ0385	鉄釘	現存長6.1　幅1.2　厚0.5	角釘，頭部折り曲げ	先端欠損	
628	49	ＳＰ0432	鉄釘	現存長3.2　幅0.9　厚0.6	角釘，頭部折り曲げ	先端欠損	
629		ＳＰ0512	鉄釘	現存長5.8　幅0.5　厚0.5	角釘	頭部・先端欠損	
630	49	ＳＰ0994	鉄釘	現存長4.2　幅0.5　厚0.4	角釘	頭部・先端欠損	
631	49	ＳＰ0936	鉄釘	現存長3.9　幅0.5　厚0.5	角釘	頭部・先端欠損	
632		ＳＰ0383	鉄釘？	現存長4.9　幅0.7　厚0.9	角釘?	頭部・先端欠損	
633	49	ＳＰ0899	鉄釘	現存長4.9　幅0.5　厚0.4	角釘	頭部・先端欠損	
634	48	ＳＰ1427	銅銭	径2.4	治平元寶	一部欠損	
635	48	ＳＰ1427	銅銭	径2.5	治平元寶	ほぼ完存	
636	48	ＳＰ1427	銅銭	径2.4	皇宋通寶	ほぼ完存	
637	48	ＳＰ1427	銅銭	径2.3	熙寧元寶	ほぼ完存	
638	48	ＳＰ0143	銅銭	径2.4	太平通寶	完存	
639	48	ＳＰ0143	銅銭	径2.4	熙寧元寶?	ほぼ完存	
640	48	ＳＰ0143	銅銭	径2.4	開元通寶	完存	
641	48	ＳＰ0931	銅銭	径2.4	景祐元寶	完存	
644		ＳＫ12上層	鉄釘	現存長4.8　最大幅0.6　最大厚0.6	角釘	頭部・先端欠損	
645	49	ＳＫ12上層	鉄滓	現存長3.4　最大幅2.7　最大厚1.9　重6.83	ガラス質滓	一部欠損	
662		ＳＸ03上層	鉄釘	現存長4.4　幅0.6　厚0.5	角釘	頭部・先端欠損	
710	48	ＳＸ10	銅銭	径2.4	元豊通寶	完存	
711	48	ＳＸ10	銅銭	径2.4	元豊通寶	完存	
712	48	ＳＸ10	銅銭	径2.4	治平元寶	完存	
733		ＳＸ12	刀子？	現存長1.3　幅1.3　厚0.4	断面三角形，刀子刃部の小片か？	細片	
734		ＳＸ12	刀子？	現存長2.6　幅1.0　厚0.3	断面矩形，刀子茎部か？	細片	
735		ＳＸ12	小鉄塊？	現存長2.7　幅2.4　厚1.8　重13.50	表面亀裂	ほぼ完存	
745		ＳＸ13	銅銭	径2.3	皇宋通寶	一部欠損	
815	49	ＳＤ001上層	不明鉄器	現存長3.6　幅2.7　厚0.2	板状	欠損	
816	49	ＳＸ01	鉄釘	現存長6.1　幅1.2　厚0.9	角釘，頭部折り曲げ	先端欠損	
817	49	ＳＸ01	小鉄塊？	現存長3.8　幅2.9　厚2.3	錆化顕著		
818	49	ＳＸ01	鉄滓	現存長5.3　幅4.0　厚2.4　重72.82	椀形滓		

挿図	図版	遺構名	器種	法量	形態等	残存	備考
819	50	ＳＤ001上層	鉄滓	最大長5.4　最大幅4.2　最大厚3.2　重108.54	椀形鍛冶滓		分析試料KTK-2
826		ＳＤ002下層	鉄滓	現存長6.4　最大幅5.9　最大厚4.4　重量165.07	椀形滓		
827	48	ＳＤ003	銅銭	径2.4	熙寧元寶	完存	
831		ＳＤ007	鉄釘	現存長4.2　幅0.5　厚0.3	角釘	頭部・先端欠損	
832		ＳＤ007	鉄釘	現存長5.4　幅0.8　厚0.5	角釘，頭部折り曲げ	先端欠損	
845	49	ＳＸ02	止め金具	現存長5.9　頭部幅1.2　頭部内径0.5　厚0.5	頭部環状，断面矩形	一部欠損	
846	49	ＳＤ022	鉄釘	現存長5.3　幅0.5　厚0.5	角釘	頭部・先端欠損	
864	49	ＳＤ040	鉄滓	現存長3.5　幅2.9　厚2.1　重22.28	表面亀裂		
884		ＳＤ045	鉄釘	現存長2.6　幅0.5　厚0.5	角釘	頭部・先端欠損	
920	50	包含層Ⅰ	鉄器錆化物	最大長5.2　最大幅3.6　最大厚2.1　重41.89	表面亀裂	下端一部	分析試料KTK-3

瓦類観察表

挿図	図版	遺構名	器種	法量	胎土	色調	凸面調整	凹面調整	端面調整	備考
192		ＳＸ19最上層	丸瓦	厚(1.9)	中；石英少・黒色粒少	灰	横ナデ	布目圧痕	縦ナデ	須恵質
298		ＳＸ20上層	平瓦	厚2.1	粗；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	灰白	平行タタキ	布目圧痕	マメツ	須恵質
495		ＳＤ135上層	丸瓦	厚1.7	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	灰白～灰黄	横板ナデ・ナデ	布目圧痕		土師質
524		ＳＤ136下層	平瓦	厚1.6	中；石英普	緑灰	マメツ	布目圧痕		須恵質
804		ＳＸ01	丸瓦	現存長12.8　最大厚1.8	粗；石英多・火山ガラス少	灰白	縄目タタキ後横ナデ	布目圧痕後一部縦板ナデ	ナデ	須恵質
805		ＳＸ01	丸瓦	厚1.9	中；石英普・火山ガラス少	灰白～灰	縦板ナデ	布目圧痕		瓦質
881		ＳＤ045	平瓦	広端幅18.7　厚1.6　弧深2.8	中；石英普・黒雲母少・火山ガラス少	暗灰～オリーブ黒	縄目タタキ後ナデ	横ナデ・マメツ	ケズリ	瓦質

飯山一本松遺跡出土遺物観察表

土器・陶磁器観察表

挿図	図版	出土位置	器種	法量	胎土	色調	外面調整	内面調整	残存率	備考
1	54	B3トレンチ表土層	弥・直口壺	口径6.4 器高(20.0) 底径5.6	中；石英少・黒雲母普・火山ガラス少	(外)浅黄・(内)浅黄橙	(口縁)縦ミガキ後端部ヨコナデ (体部)中央横ミガキ，下半縦ミガキ (底部)マメツ	(口縁)指オサエ後端部ヨコナデ (体部)上半指オサエ・ナデ，中央横ハケ，下半縦ハケ (底部) マメツ	5/8	
2		A3トレンチ表土層	弥・直口壺		粗；石英多・火山ガラス普	(外)にぶい褐・(内)にぶい黄橙	(体部)ナデ・マメツ	(体部)指オサエ・ナデ？	2/8	
3	54	A3トレンチ表土層	弥・底部	底径5.0	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)にぶい褐・(内)浅黄	タタキ後ナデ	縦ハケ	4/8	外面煤付着
4		B6トレンチ表土層	弥・高坏	口径23.6	粗；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい褐・(内)にぶい褐	ヨコナデ	ヨコナデ	細片	
5		B5トレンチ表土層	須・坏	口径11.8	細；石英多・黒雲母少・火山ガラス少	(外)灰・(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	
6		A3トレンチ表土層	須・底部	底径5.4	中；石英多・黒雲母少・火山ガラス普	(外)にぶい褐・(内)灰黄褐	(底部)回転ナデ (底面)回転ヘラ切り後不整方向ナデ	回転ナデ	細片	
7	54	A3トレンチ表土層	須・甕	口径10.4	中；石英多・黒雲母普・火山ガラス少	(外)灰・(内)灰	回転ナデ	回転ナデ	細片	
8	54	A3トレンチ表土層	須・壺		中；石英多・火山ガラス少	(外)灰白・(内)灰黄	回転ナデ	回転ナデ	細片	
9		A地区備後薬師堂周辺	磁・皿	底径7.1	精緻	(胎)灰白・(釉)薄藍	施釉・高台端無釉	施釉・花繋文？	2/8	
10	54	A地区備後薬師堂周辺	陶・壺	口径17.0 器高19.3 底径9.4	精緻	(胎)灰黄・(釉)暗褐	回転ナデ・施釉	回転ナデ・施釉	4/8	

川津川西遺跡図版

遺跡周辺航空写真（上が北，国土地理院1962年撮影）